

茨城県教育財団文化財調査報告第268集

栗 島 遺 跡

一般国道50号下館バイパス改築事業地内
埋 蔵 文 化 財 調 査 報 告 書 Ⅲ

平 成 19 年 3 月

国土交通省 常陸河川国道事務所
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第268集

くり しま
栗 島 遺 跡

一般国道50号下館バイパス改築事業地内
埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

平成19年3月

国土交通省 常陸河川国道事務所
財団法人茨城県教育財団



第1号水場遺構



第1号流路跡遺物出土状況（鋤柄）

序

一般国道50号は、群馬県前橋市を起点として、茨城県水戸市にいたる総延長150kmに及ぶ広域的な幹線道路であり、産業・経済活動を支える動脈として極めて重要な路線であります。

しかしながら、近年、筑西市（旧下館市）中心部は慢性的な交通渋滞が発生しております。下館バイパスは、この交通渋滞を解消し、周辺の住環境の向上等を目的として、筑西市玉戸地区から横塚地区にいたる四車線道路として計画されたもので、その事業予定地内には、埋蔵文化財包蔵地である栗島遺跡が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は、国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所から埋蔵文化財発掘調査についての委託を受け、平成16年10月から平成17年8月にかけて栗島遺跡の発掘調査を実施してまいりました。

本書は、栗島遺跡の調査成果を収録したもので、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から本書の刊行に至るまで、委託者である国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、筑西市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し感謝申し上げます。

平成19年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 人見 實 徳

例 言

1 本書は、国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成16年10月から平成17年8月まで発掘調査を実施した、茨城県筑西市栗島字栗島494番地の2ほかに所在する栗島遺跡くりしまの発掘調査報告書である。

2 発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。

調 査 平成16年10月1日～平成17年3月31日

平成17年4月1日～平成17年8月31日

整 理 平成18年4月1日～平成19年3月31日

3 発掘調査は、調査課長川井正一のもと、以下の者が担当した。

平成16年度

首席調査員兼班長 江 幡 良 夫

主任調査員 近 藤 恒 重

主任調査員 奥 沢 哲 也

調 査 員 越 田 真太郎 平成16年11月1日～平成17年3月31日

平成17年度

首席調査員兼班長 川 又 清 明

主任調査員 柴 山 正 広

主任調査員 高 野 裕 璽 平成17年8月1日～平成17年8月31日

主任調査員 近 藤 恒 重

主任調査員 奥 沢 哲 也 平成17年4月1日～平成17年7月31日

4 整理及び本書の執筆・編集は、整理第二課長大森雅之のもと、主任調査員奥沢哲也が担当した。

5 本書の作成にあたり、木簡、墨書土器の文字の判読・釈文及び赤外線写真撮影については、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館館長平川南氏に御指導・御協力をいただいた。木器・木製品については、首都大学東京考古学研究室准教授山田昌久氏に御指導いただいた。

6 出土した木器・木製品の保存処理及び樹種同定については、株式会社吉田生物研究所、株式会社京都科学に委託し、考察は付章として巻末に掲載した。同じく、出土した木器・木製品の樹種同定については、独立行政法人森林総合研究所木材特性研究領域識別データベース化担当チーム長能城修一氏に分析を依頼し、考察は付章として巻末に掲載した。遺構の覆土中に含まれるテフラ及びプラント・オパールopalの自然化学分析は株式会社古環境研究所に委託し、考察はそれぞれ付章として巻末に掲載した。

凡 例

- 1 地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標を原点とし、 $X = +35,840\text{m}$ 、 $Y = +10,960\text{m}$ の交点を基準(A 1 a1)とした。

この基準点を基に、東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A 1区」、「B 2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1区」、「B 2 b2区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 S I - 住居跡 S B - 掘立柱建物跡 S K - 土坑 S D - 溝跡 S X - 不明遺構 P - 柱穴

遺物 P - 土器・陶器 T P - 拓本記録土器 D P - 土製品 Q - 石器・石製品 M - 金属製品

W - 木器・木製品 T - 瓦

土層 K - 攪乱



- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は60分の1、遺構実測図は60分の1縮尺で掲載することを基本とした。

(2) 遺物実測図は原則として3分の1で掲載することを基本とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構及び遺物の実測図中の表示は次の通りである。特別な場合は別記で図中に凡例を記した。

 砂層・赤彩・施釉・樹皮  火床・炉・炭化材・繊維・煤・圧痕・炭化

 竈部材・粘土・黒色処理・油煙  漆

● 土器 ○ 土製品 □ 石器・石製品 ■ 木器・木製品

- 4 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

- 5 遺構一覧表、遺物観察表の表記は次のとおりである。

(1) 計測値の（ ）内の数値は現存値を、[] の数値は推定値を示した。計測値の単位は、法量をm、cm、重量をgで示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、現存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

- 6 「主軸」は、竈（炉）を持つ堅穴住居跡については竈（炉）を通る軸線とし、他の遺構については長軸（径）を通る軸線を主軸とみなした。「主軸・長軸（径）方向」は、それぞれの軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N-10°-E）。

- 7 木器・木製品の分類項目は、奈良国立文化財研究所編『木器集成図録-近畿古代編』（1984）及び『木器集成図録-近畿原始編』（1993）を基本とした。

- 8 保存処理された木器・木製品については、遺物観察表の備考欄に★で表示した。

抄 録

ふりがな	くりしまいせき							
書名	栗島遺跡							
副書名	一般国道50号下館バイパス改築事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次	Ⅲ							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第268集							
著者名	奥沢哲也							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行年月日	2007(平成19)年3月23日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
くりしまいせき 栗島遺跡	いばらきけんちくせいしりしまあざ 茨城県筑西市栗島字 くりしま 栗島494番地の2ほか	08206 071	36度 19分 20秒	139度 57分 22秒	34.4 ~ 35.6m	20041001 ~ 20050331 20050401 ~ 20050831	8,574m ²	一般国道50号下館バイパス改築事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
栗島遺跡	集落跡	縄文	竪穴住居跡	1軒	縄文土器(深鉢) 磨石		流路跡から、多量の土器、木器・木製品が出土している。木簡及び墨書土器など文字資料が多く出土した。第1号木簡には、表に「伊佐郷春米卍一斛 白六石」、裏に「□□米料八百廿束□□□」と書き記されている。第3号木簡には「乙巳[年]」と年紀記載が確認された。さらに、流路跡から把手付槽(田舟)を解体して構築された水場遺構が確認された。	
		弥生	土坑	2基	弥生土器(壺)、磨石			
		古墳	竪穴住居跡 土坑 溝跡	25軒 10基 6条	土師器、石器、石製品、木器・木製品(柱材、刳物、両端加工材)			
	奈良・平安	土坑 溝跡 不明遺構	2基 5条 1基	土師器、須恵器、土製品(管状土鉢)、木器・木製品(曲物、横槌、杭)				
	流路跡	奈良・平安	流路跡 水場遺構 曲物埋設遺構	1条 1か所 1基	土師器、須恵器、土製品(管状土鉢)、金属製品(鈴)、木器・木製品(木簡、鳴鏑、鎌柄、横槌、竪杵、木錘、大足、糸巻、横櫛、挽物、刳物、曲物、楕円形曲物、甌、把手付槽、形代(刀形、剣形)、斎串、火鑽臼、火鑽杵、彫刻入板材、部材、杭)			
	その他	時期不明	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 流路跡 杭列 土坑 円形周溝状遺構	3軒 1棟 1条 1条 132基 2基	土師器、須恵器、石器(剥片)弥生土器(鉢)、金属製品(銅鏡)			
要約	古墳時代の集落跡、奈良・平安時代の流路跡、溝跡を中心とした縄文時代から近世までの複合遺跡である。古墳時代の集落は、前期・後期に集落が形成されていた。奈良・平安時代の流路跡からは大量の土器、木器・木製品が出土した。さらに流路右岸に水場遺構が確認され、湧水を溜めて利用したと考えられる。							

目 次

序	
例 言	
凡 例	
抄 録	
目 次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	2
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	11
第1節 遺跡の概要	11
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	12
1 縄文時代の遺構と遺物	12
竪穴住居跡	12
2 弥生時代の遺構と遺物	14
土坑	14
3 古墳時代の遺構と遺物	16
(1) 竪穴住居跡	16
(2) 土坑	91
(3) 溝跡	105
4 奈良・平安時代の遺構と遺物	114
(1) 流路跡	114
(2) 水場遺構	184
(3) 曲物埋設遺構	192
(4) 土坑	193
(5) 溝跡	195
(6) 不明遺構	203
5 その他の遺構と遺物	204
(1) 竪穴住居跡	204
(2) 掘立柱建物跡	208
(3) 流路跡	209
(4) 杭列	212
(5) 円形周溝状遺構	214
(6) 土坑	215
(7) 遺構外出土遺物	234
第4節 まとめ	235
付章 出土木製品の樹種について	249
栗島遺跡における自然科学的分析	273
写真図版	283

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

平成15年6月24日、国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般国道50号下館バイパス改築事業における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。

これを受けて茨城県教育委員会は、平成15年7月17日に現地踏査を、平成15年10月20～22日、11月13日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成15年11月19日、茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所長あてに、事業地内に栗島遺跡が存在すること及びその取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、平成16年1月7日に文化財保護法第57条の3第1項（現 第94条）の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成16年1月29日、国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、平成16年2月20日、一般国道50号下館バイパス改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議をした。平成16年2月23日、茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所長あてに、栗島遺跡について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成16年10月1日から平成17年3月31日まで発掘調査を実施することとなった。

平成17年1月12日、財団法人茨城県教育財団理事長は、茨城県教育委員会教育長に対して、栗島遺跡の遺構内から多量の木器・木製品が出土したことにより、調査期間内での終了が困難であるため、発掘調査計画の変更についての協議をした。平成17年1月19日、茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所長に対して、栗島遺跡について調査期間と面積等の発掘調査計画の変更についての協議をした。平成17年2月2日、国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、栗島遺跡の発掘調査計画の変更について同意する旨の回答をした。平成17年2月4日、茨城県教育委員会教育長は、財団法人茨城県教育財団理事長に対して、栗島遺跡の面積等の発掘調査計画を変更することを回答した。平成17年2月16日、国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般国道50号下館バイパス改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議をした。平成17年2月21日、茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所長に対して、栗島遺跡について、発掘調査の範囲及び面積等について回答した。また、併せて調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成17年4月1日から平成17年8月31日まで発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

調査は平成16年10月1日から平成17年8月31日まで実施した。その概要を表で記載する。

工程	期間	平成16年度					
		10月	11月	12月	1月	2月	3月
調査準備 表土除去 遺構確認		■					
遺構調査		■					
遺物洗浄 注記作業 写真整理			■				
補足調査 撤収							■

工程	期間	平成17年度				
		4月	5月	6月	7月	8月
調査準備 表土除去 遺構確認		■				
遺構調査		■				
遺物洗浄 注記作業 写真整理		■				
補足調査 撤収						■

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

栗島遺跡は、茨城県筑西市栗島字栗島494番地の2ほかに所在している。

筑西市は、茨城県西部に位置し、栃木県と県境を接している。当遺跡は、旧下館市域（以下、下館地域）にあり、筑西市の北西部に位置している。

下館地域は、西部に鬼怒川、東部に小貝川が南流し、その支流である大谷川、五行川が中央部を流れている。

当地域の地形は、洪積台地と沖積低地に大きく分けることができる。台地は、前述の4河川によって開析された南北に伸びる狭長な台地である。中央部の下館台地は、大谷川によって東西に二分され、東側の台地は北へ延び、栃木県真岡市付近から宝積寺にわたる宝積寺台地に続く。また、大谷川の西側の台地はより広く南へ延び、その南端は下妻市街地付近にあたる。台地には、多くの支谷津が入り込み、複雑な地形を形成している¹⁾。

また、沖積低地は、各河川の流域に発達し、現在、広く水田として活用されている。この低地には、河川の流路変更によって土砂が堆積してできた自然堤防が点在し、微高地を形成している。当該地域に「塚」や「島」のつく地名が多いのはそのためであるとされている。

栗島遺跡は、大谷川の右岸から400mほど離れた所に位置しており、周辺の地形は、大谷川によって形成されたと考えられる。大谷川周辺の低地は広く氾濫原が認められ、旧河道が分布している²⁾。当遺跡もこれらの氾濫源の微高地上に立地しており、調査前の現況は水田である。

第2節 歴史的環境

栗島遺跡の所在する下館地域は、洪積台地と河川の流域に展開する沖積低地が交錯する地域で、そこに多くの遺跡が確認されている³⁾。

旧石器時代の遺跡数は他の時代と比べると少ないが、大谷川左岸の台地上にある八丁台遺跡〈2〉において、安山岩製の石核4点と剥片1点が出土している⁴⁾。また、小貝川左岸の台地縁辺部にある宮本A遺跡では、頁岩製の剥片などが出土しており⁵⁾、台地上に旧石器時代の生活の痕跡を確認することができる。

縄文時代には、河川に沿った台地上に遺跡が多く点在している。鬼怒川沿いの台地上には、前期の十二天遺跡〈3〉、早期から晩期まで続く本田前遺跡〈4〉、中期末から後期初頭の弁天遺跡〈5〉がある。さらに、鬼怒川対岸の栃木県小山市には、環状盛土遺構と水場遺構で著名な中期から晩期にかけての寺野東遺跡がある。大谷川、五行川沿いには中期から後期の鷹の巣遺跡、中期から晩期の外塚遺跡〈6〉がある。外塚遺跡は大谷川左岸の低地の自然堤防上に立地しており、昭和56年に下館市教育委員会により発掘調査が行われた。遺構は土坑1基が確認されたのみであるが、加曾利EⅢ式から安行Ⅱ式までの多くの遺物が出土し、低地の遺跡として特筆される⁶⁾。小貝川沿いには、段丘の縁辺部に当財団で平成14年度に発掘調査を実施した堂東遺跡〈7〉がある。中期中葉から後期後葉までの竪穴住居跡7軒、屋外炉1基、土坑175基、ピット194基が確認された⁷⁾。また、中期の大関遺跡〈8〉は、小貝川右岸の低地に立地していることから、前述の外塚遺跡同様、その遺跡

の性格が注目される。

弥生時代には、鬼怒川左岸の台地上に、中期前半の標識遺跡となっている^{おざかた}女方遺跡〈9〉がある。遺跡の性格は再葬墓跡で、11号土坑からは耳、目、鼻、口が粘土紐によって表現された人面付壺が出土している⁹⁾。また、八丁台遺跡では、後期後半の竪穴住居跡3軒が確認され、広口壺、土製紡錘車、ガラス小玉、敲石などが出土している。広口壺は、茨城県西部から栃木県にかけて分布する二軒屋式土器の特徴を有している。また、ガラス小玉は第1号住居跡の炉の覆土中から出土している⁹⁾。

古墳時代の遺跡は、台地上から低地へと広がって分布している。鬼怒川左岸の台地上には、^{べんてん}弁天古墳群〈10〉、^{おざかた}女方古墳群〈11〉、^{ふなだま}船玉古墳群〈12〉などがある。船玉古墳群は方墳1基と円墳8基からなる終末期の古墳群で、方墳の第1号墳の横穴式石室の壁には、赤色顔料と白色顔料で装飾壁画が施されている。文様は靱を中心とした武器・武具を主体に表現されている¹⁰⁾。大谷川、五行川沿いの台地上には、^{ほんごう}本郷古墳、^{ふじがし}富士東古墳群〈13〉、^{はちようだい}八丁台古墳群〈14〉、^{にしほう}西方古墳〈15〉、^{にしほうしんでん}西方新田古墳群〈16〉などが、低地には^{いずみ}泉古墳〈17〉、^{ごしよ}五所神社古墳〈18〉、^{のだ}野田古墳〈19〉など多くの古墳が点在している。小貝川沿いの左岸には、新治国造の墳墓と考えられている^{とくもち あしやま}徳持(葦間山)古墳〈20〉がある。この古墳は、後円部の直径82m、高さ10.5m、前方部の巾35m、高さ40m、全長141mの前方後円墳と推定され、4世紀末から5世紀初頭の古墳と位置づけられ、新治国境内では最大級である。特に、沖積低地に構築されている点が注目される¹¹⁾。また、同様に小貝川右岸の低地には、径60m、高さ6mの円墳である^{しま}島古墳〈21〉がある。

古墳時代の集落は調査例が少なく、不明な点が多いが、鬼怒川沿岸では、十二天遺跡、女方遺跡、本田前遺跡、^{もとむら}元村遺跡〈22〉、^{まえはら}前原遺跡〈23〉などが確認されている。大谷川・五行川沿いには、両河川の間中に位置し、当遺跡の南4km程の低地に^{かまた}鎌田遺跡〈24〉がある。圃田整備により、多くの遺物が出土したが、発掘調査は未実施のため、遺跡の状況は不明である。S字状口縁台付甕や南関東系の土器が出土している前期の遺跡である¹²⁾。さらに、大谷川と小貝川の合流付近には、^{いのうえたかだ}井上高田遺跡(前期・後期)〈25〉、^{うちきざき}打木崎遺跡(後期)〈26〉、^{つかだ}塚田遺跡(中期～後期)〈27〉、^{なかす}中州遺跡(前期～後期)〈28〉がある。その中でも、井上高田遺跡は東海地方の弥生時代後半の特徴を残す壺が出土している¹³⁾。前述の鎌田遺跡同様、前期の集落が低地に立地している点は興味深く、当遺跡との関連も考えられる。また、大谷川右岸の台地縁辺部には、中期の集落である^{のどのふかさく}野殿深作遺跡〈29〉、^{のどのふかさくひがし}野殿深作東遺跡〈30〉がある。野殿深作遺跡は、当財団により平成5年度に発掘調査が実施され、5世紀後葉の4軒の竪穴住居跡が確認された。TK216からTK208の間に位置づけられる須恵器の樽形壺が出土している¹⁴⁾。隣接する野殿深作東遺跡では、5世紀中葉の竪穴住居跡住居跡19軒が確認され、多くの石製模造品が出土している¹⁵⁾。小貝川沿いでは、堂東遺跡で前期の竪穴住居跡が2軒と方形周溝墓が5基確認されている。

奈良・平安時代の遺跡は、各河川沿いに30か所を超える遺跡が確認されている。しかし、ほとんどの遺跡が発掘調査未実施のため、当該期の集落の様相も不明な点が多い。下館地域は、律令期には新治郡に属しており、^{たけしま}竹嶋郷・^{はかた}博多郷・^{ぬまた}沼田郷・^{いさ}伊讚郷に比定されている。そして、当遺跡周辺は伊讚郷に属していたと考えられ¹⁶⁾、直線距離で東に8kmの位置に、^{にいりくがあと}新治郡衙跡〈31〉、^{にいりはいじあと}新治廃寺跡〈32〉がある。また、当該地域を新治郡衙と下野を結ぶ常陸・下野連絡駅路が通っていたと想定されており、当該期には交通の要衝であったことが想定できる。新治郡は平安末期までに、東郡・中郡・西郡・^{おぐりみくりや}小栗御厨に四分され、下館地域は西郡・小栗御厨が該当する。西郡はさらに南条・北条に分かれ、南条は赤郡、北条は伊佐郡と称した。

中世には、天永2(1111)年に^{ふじわらさねとも}藤原実宗が伊佐氏を名のり、その子孫は鎌倉幕府の御家人として、伊佐城〈33〉を中心に勢力を張った。南北朝動乱期には奥州伊達氏の祖とされる伊佐氏が、南朝方に呼応し、中館・伊

佐城によって北朝勢と激しく戦いを繰り広げたが、興国4年（1343）年に伊佐城は陥落している。伊佐氏の滅亡後、文明10年（1478）に結城氏の家臣水谷氏^{みずのや}が下館地方を与えられ、下館城〈34〉主となり、その後の下館の基礎を築いた。

※文中の〈 〉内の番号は、表1及び第1図の該当番号と同じである。

註

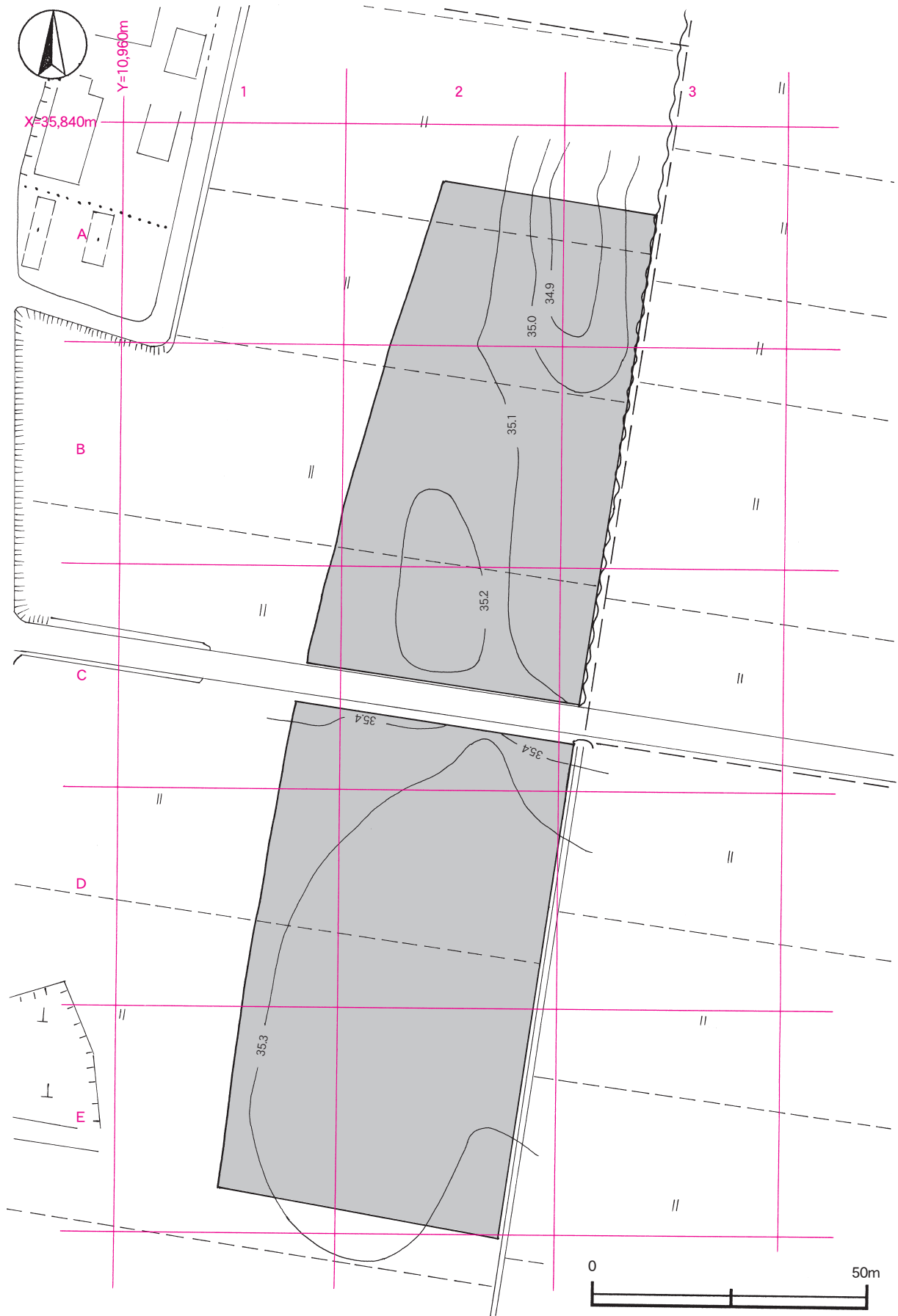
- 1) 下館市史編さん委員会『下館市史』下館市教育委員会 1968年3月
- 2) 外塚遺跡調査会『外塚遺跡』下館市教育委員会 1985年3月
- 3) 茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図（地名表編・地図編）』茨城県教育委員会 2001年3月
- 4) 川津法伸「一般国道50号下館バイパス改築工事地内埋蔵文化財調査報告書 八丁台遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第138集 茨城県教育財団 1998年6月
- 5) 協和町史編さん委員会『協和町史』協和町 1993年3月
- 6) 註2に同じ
- 7) 荒蒔克一郎「堂東遺跡 一般国道50号下館バイパス改築工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第213集 茨城県教育財団 2004年3月
- 8) 茨城県史編集委員会『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』茨城県 1991年3月
- 9) 註4に同じ
- 10) 関城町史編さん委員会『関城町史 通史編 上巻』関城町 1987年3月
- 11) 三木ますみ「Ⅲ-2 葦間山古墳」『古墳測量調査報告書Ⅰ - 茨城県南部古代地域史研究 -』筑波大学歴史・人文学系 1991年3月
- 12) 三木ますみ「Ⅲ-4 鎌田遺跡」註11)に同じ
- 13) 註10に同じ
- 14) 小島敏「茨城県県西生涯学習センター建設用地内埋蔵文化財調査報告書 野殿深作遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第91集 茨城県教育財団 1994年6月
- 15) 下館市教育委員会『野殿深作東遺跡』下館市教育委員会 1996年3月
- 16) 中山信名『新編常陸国史』崙書房 宮崎報恩会版 1979年12月

表1 栗島遺跡周辺遺跡一覧表

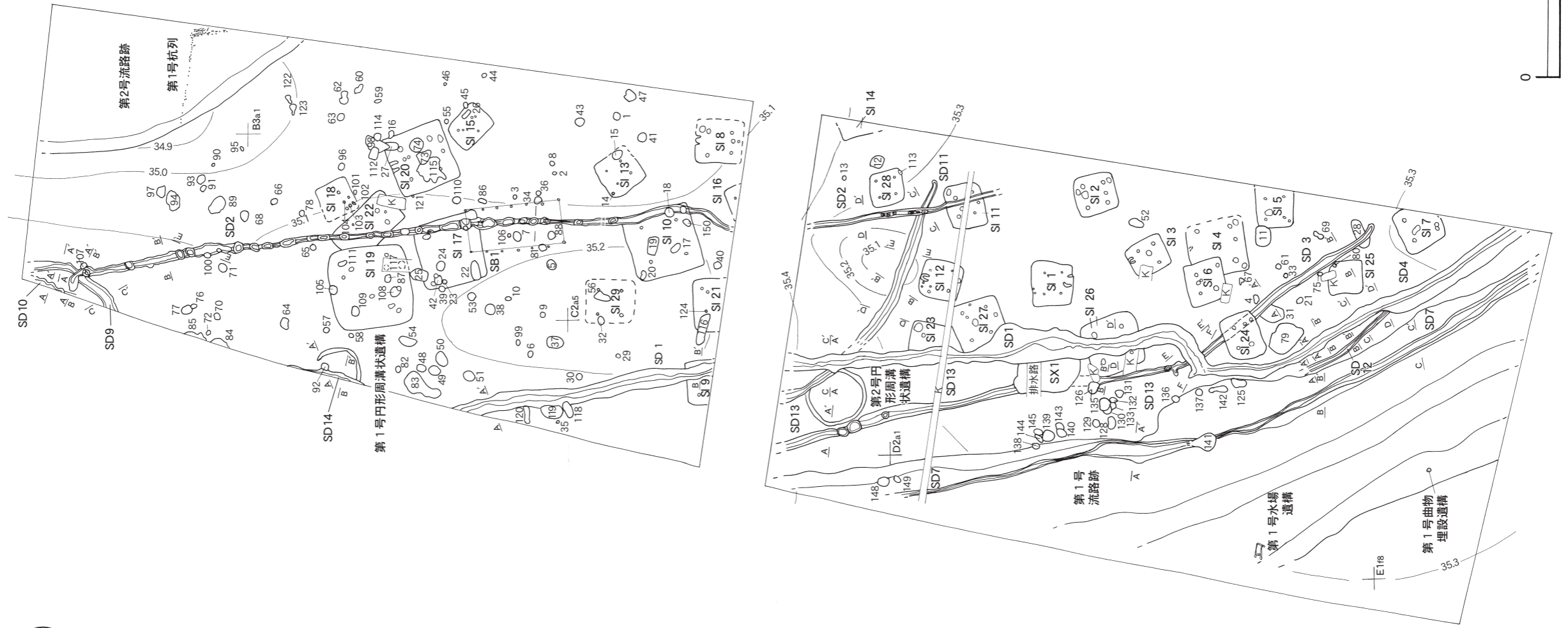
番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代					
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中・近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中・近世
①	栗島遺跡		○	○	○	○	○	31	新治郡衙跡					○	
2	八丁台遺跡	○	○	○	○	○	○	32	新治廃寺跡					○	
3	十二天遺跡		○		○	○		33	伊佐城跡						○
4	本田前遺跡		○	○	○	○		34	下館城跡						○
5	弁天遺跡		○	○				35	不動坂遺跡		○		○	○	
6	外塚遺跡		○					36	清水不動遺跡		○		○	○	
7	堂東遺跡		○		○		○	37	上河原遺跡		○				
8	大関遺跡		○					38	玉戸新田遺跡		○				
9	女方遺跡		○	○	○	○		39	野殿古墳				○		
10	弁天古墳群				○			40	薬師古墳				○		
11	女方古墳群				○			41	二所神社遺跡					○	
12	船玉古墳群		○	○	○			42	春日神社古墳				○		
13	富士東古墳群				○			43	千仮台遺跡		○		○	○	
14	八丁台古墳群				○			44	井の上遺跡				○	○	
15	西方古墳				○			45	飯島遺跡			○	○		
16	西方新田古墳群				○			46	笹塚古墳				○		
17	泉古墳				○			47	笹塚遺跡				○	○	
18	五所神社古墳				○			48	石原田遺跡				○	○	
19	野田古墳				○			49	地藏堂遺跡				○	○	
20	徳持(葦間山)古墳				○			50	上中山・稲荷神社遺跡					○	
21	島古墳				○			51	大明神遺跡				○	○	
22	元村遺跡					○		52	八幡神社遺跡					○	
23	前原遺跡		○			○		53	富士神社遺跡		○			○	
24	鎌田遺跡				○			54	山崎・観音堂遺跡					○	
25	井上高田遺跡		○		○	○		55	玉戸古墳				○		
26	打木崎遺跡				○			56	虚空蔵古墳				○		
27	塚田遺跡				○			57	野田遺跡					○	
28	中州遺跡				○			58	仲館・中世墓遺跡						○
29	野殿深作遺跡				○		○	59	布川館跡						○
30	野殿深作東遺跡				○			60	飯塚遺跡		○	○	○		



第1図 栗島遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院「真岡，真壁，壬生，小山」1：50，000を使用）



第2図 栗島遺跡調査区設定図



第3図 栗島遺跡全体図

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

栗島遺跡は、筑西市の北西部に位置し、大谷川の右岸、標高約34～35mほどの微高地上に立地している。調査前の現況は水田であり、調査面積は8,574m²である。

調査の結果、縄文時代から近世までの遺構と遺物が確認された。遺構は竪穴住居跡29軒（縄文時代1、古墳時代25、時期不明3）、掘立柱建物跡1棟、土坑146基、溝跡11条、流路跡2条、水場遺構1か所、曲物埋設遺構1基、杭列1条、円形周溝状遺構2基、不明遺構1基である。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に227箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、弥生土器（壺）、石器（磨石、敲石）、土師器（坏、高坏、壺、甕、甑）、須恵器（坏、高台付坏、盤、高盤、甕、甑）、木器・木製品（木簡、鳴鏑、鋏、竪杵、大足、糸巻、挽物、曲物）、金属製品（鈴、古銭）などである。

第2節 基本層序

調査区の中央部（C2a1）にテストピットを設定して、基本土層の観察を行った。

第1層は、黒褐色を呈する耕作土で、粘土粒子、鉄分を少量含んでいる。粘性・締まりとも普通で、層厚は10～15cmである。

第2層は、黒褐色を呈する粘土質の層への漸移層である。第1層より耕作によって混入したと思われる黒褐色土ブロック中量と白色火山灰粒子を少量含んでいる。粘性は強く、締まりは普通であり、層厚は3～13cmである。

第3層は、にぶい黄褐色を呈する粘土質の層で、柱状の酸化した鉄分を微量含んでいる。粘性は弱く、締まりは強く、層厚は2～10cmである。

第4層は、にぶい黄褐色を呈する粘土質の層で、柱状及び斑状の酸化した鉄分を少量含んでいる。粘性は弱く、締まりは普通で、層厚は25～45cmである。

第5層は、にぶい黄橙色を呈する粘土質の層で、柱状の酸化した鉄分を中量と砂粒を微量含んでいる。粘性、締まりはともに弱く、層厚は12～30cmである。

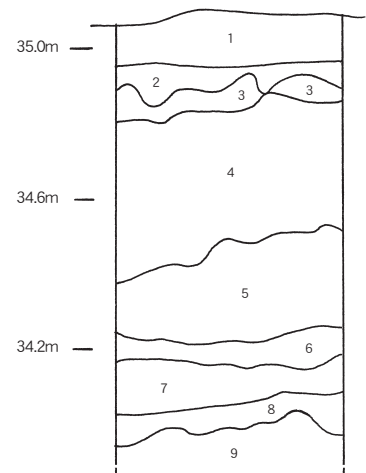
第6層は、黄褐色を呈する砂層で、柱状及び斑状の酸化した鉄分を中量含んでいる。粘性は普通で、締まりは弱く、層厚は5～13cmである。

第7層は、暗灰黄色を呈する砂層で、柱状の酸化した鉄分を微量含んでいる。粘性は弱く、締まりは普通で、層厚は7～15cmである。

第8層は、黄褐色を呈する粘土質の層で、斑状の酸化した鉄分を少量と砂粒を微量含んでいる。粘性は強く、締まりは普通で、層厚は3～11cmである。

第9層は、黄灰色を呈する粘土層で、砂粒を少量含んでいる。粘性・締まりとも極めて強い。下層が未掘のため、本来の層厚は不明である。

遺構の多くは、第2層上面で確認された。



第4図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

遺構は、竪穴住居跡1軒が確認された。以下、確認された遺構及び遺物について記述する。

竪穴住居跡

第22号住居跡（第5～7図）

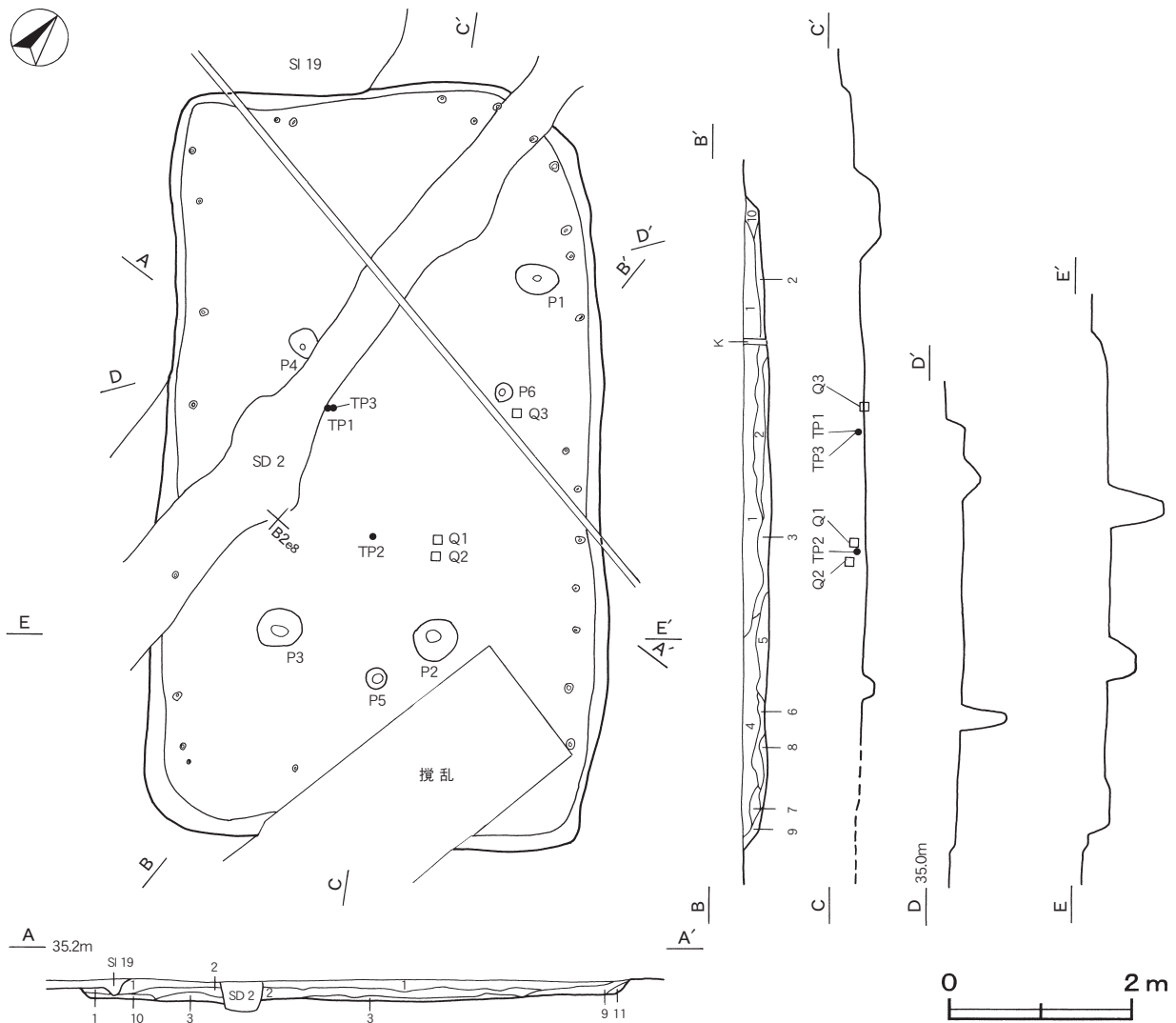
位置 調査区北部のB2d7区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

重複関係 第19号住居，第2号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸8.52m，短軸5.16mの長方形で，主軸方向はN-33°-Wである。壁高は6～26cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

ピット 32か所。P1～P4は深さ18～59cmで，規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ15cmで南部中央に，P6は深さ34cmで中央部東寄りに位置し，ともに補助柱穴と考えられる。P7～P32は，壁に沿って



第5図 第22号住居跡実測図

周回する円形のピット群で壁柱穴と考えられる。

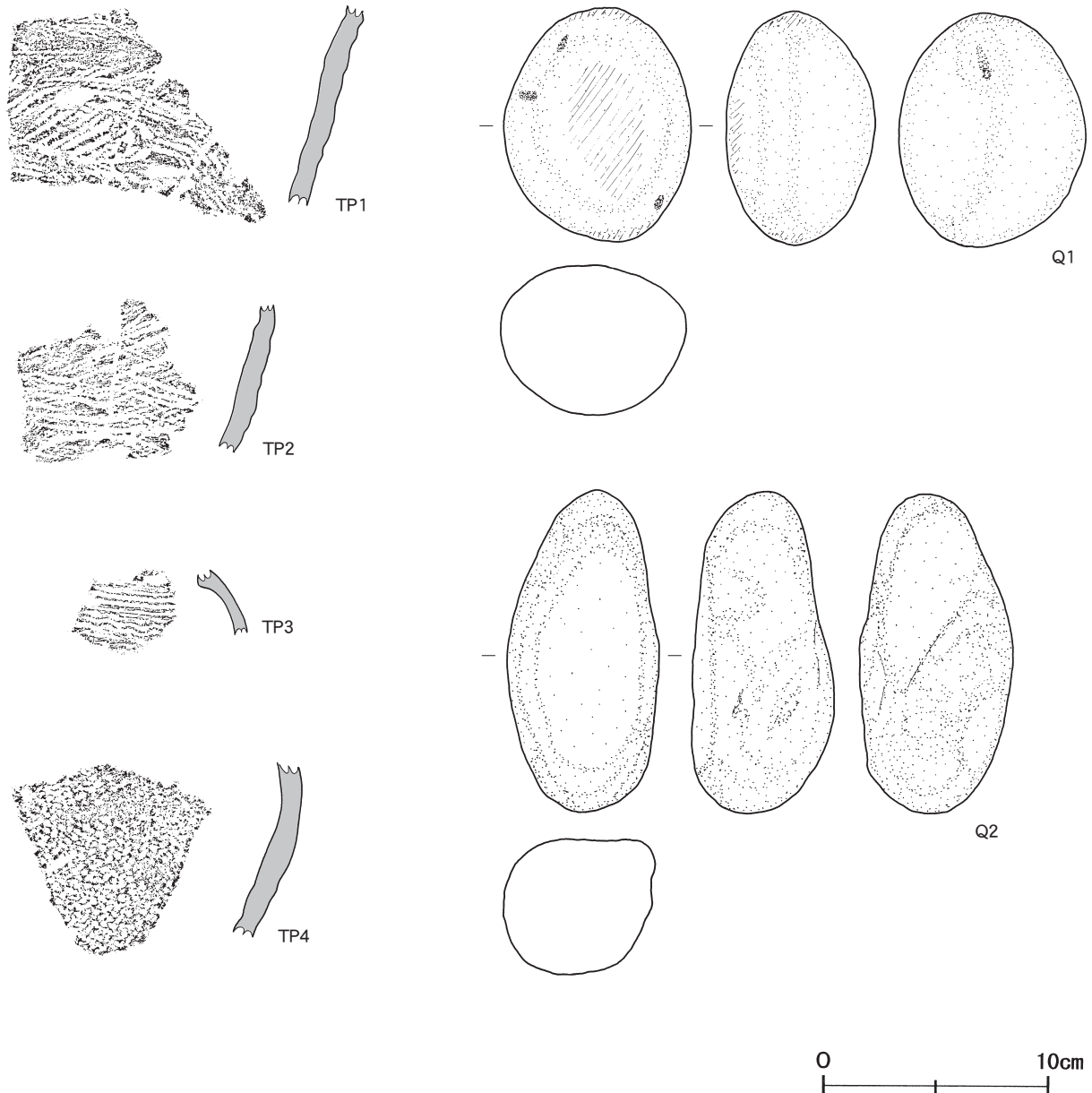
覆土 11層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

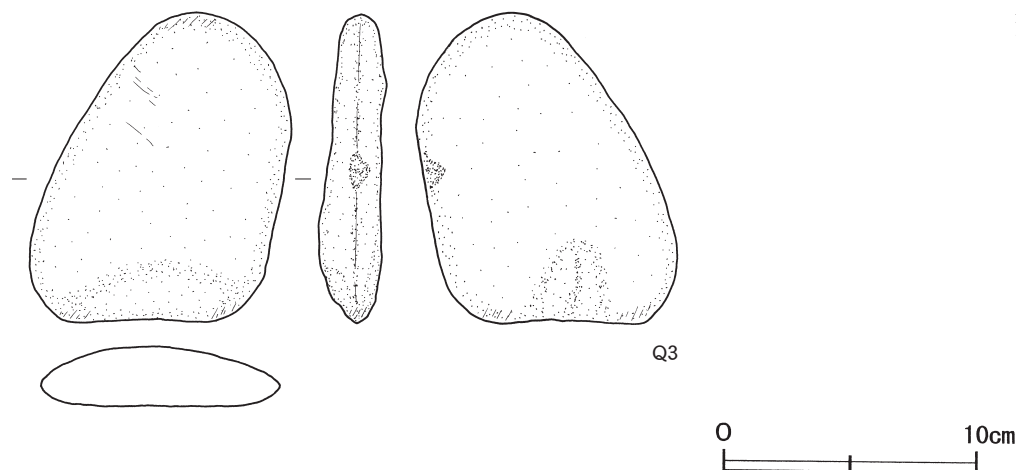
- | | | | |
|-------|---------------------|-----------|---------------|
| 1 黒褐色 | 粘土ブロック・炭化粒子・白色粒子微量 | 7 黒褐色 | 粘土ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 粘土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 8 灰黄褐色 | 焼土粒子多量, 炭化物少量 |
| 3 黒褐色 | 粘土ブロック中量 | 9 暗褐色 | 粘土ブロック少量 |
| 4 黒褐色 | 粘土粒子少量, 炭化粒子・白色粒子微量 | 10 黒褐色 | 粘土粒子微量 |
| 5 黒褐色 | 粘土ブロック少量 | 11 にぶい黄褐色 | 粘土ブロック少量 |
| 6 黒褐色 | 粘土粒子少量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片76点（深鉢），石器15点（剥片11，磨石3，敲石1）が中央部を中心とした覆土中層から床面にかけて出土している。また，混入した土師器片7点，須恵器片1点も出土している。TP1～TP3は中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。Q1・Q2は中央部の覆土中層，Q3は中央部東寄りの床面から出土している。

所見 時期は，出土土器から前期前半と考えられる。



第6図 第22号住居跡出土遺物実測図（1）



第7図 第22号住居跡出土遺物実測図(2)

第22号住居跡出土遺物観察表(第6・7図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP 1	縄文土器	深鉢	石英	黒褐	普通	胴部片 単節縄文施文 繊維含む	中央部下層	5% PL37
TP 2	縄文土器	深鉢	長石・赤色粒子	橙	普通	胴部片 単節縄文施文 繊維含む	中央部下層	5% PL37
TP 3	縄文土器	深鉢	長石	黒褐	普通	口縁部片 波状文施文後平行沈線施文 繊維含む	中央部下層	5% PL37
TP 4	縄文土器	深鉢	石英・雲母	黒褐	普通	胴部片 組紐文施文 繊維含む	覆土中	5% PL37

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	磨石	10.3	8.3	6.6	744	安山岩	全面に削痕	中央部中層	
Q 2	磨石	14.3	6.7	6.3	827	安山岩	全面に削痕	中央部中層	
Q 3	磨石	12.2	10.3	2.7	368	砂岩	側面に削痕	東部床面	

2 弥生時代の遺構と遺物

遺構は、土坑2基が確認された。以下、確認された遺構及び遺物について記述する。

土坑

第50号土坑(第8図)

位置 調査区北部のB2g4区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

規模と形状 長径2.00m、短径1.36mの楕円形で、長径方向はN-64°-Eである。深さは17cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

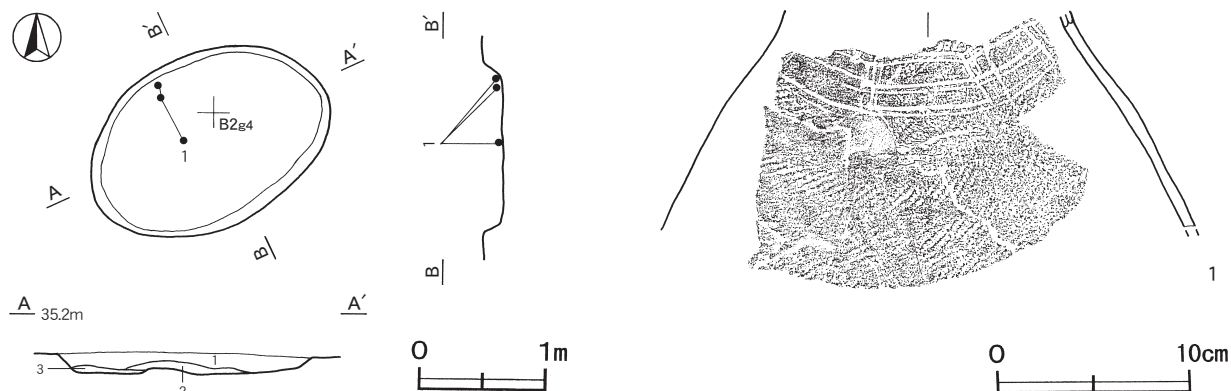
1 黒褐色 粘土粒子・白色粒子・鉄分微量

2 黒褐色 粘土粒子少量、鉄分微量

3 におい黄褐色 粘土粒子中量、砂粒少量、鉄分微量

遺物出土状況 弥生土器片7点(壺)が出土している。また、流れ込んだ縄文土器片2点、土師器片4点、石器2点(剥片)も出土している。1は覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後半と考えられる。



第8図 第50号土坑・出土遺物実測図

第50号土坑出土遺物観察表（第8図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	壺	-	(11.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	LR単節縄文施文 平行沈線施文	覆土下層	5% PL23

第108号土坑（第9・10図）

位置 調査区北部のB2 e6区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

重複関係 第19号住居に掘り込まれている。

規模と形状 径1.30mほどの円形で、深さは72cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

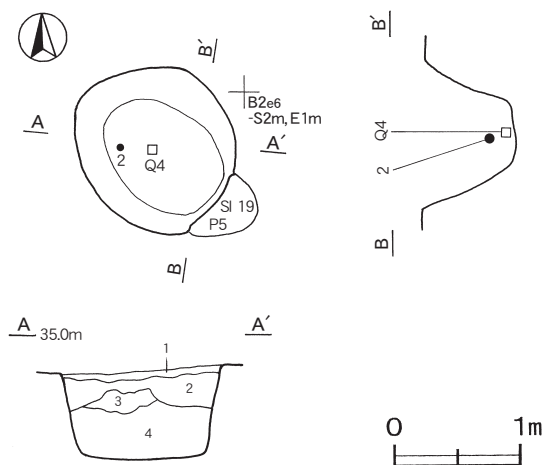
覆土 4層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

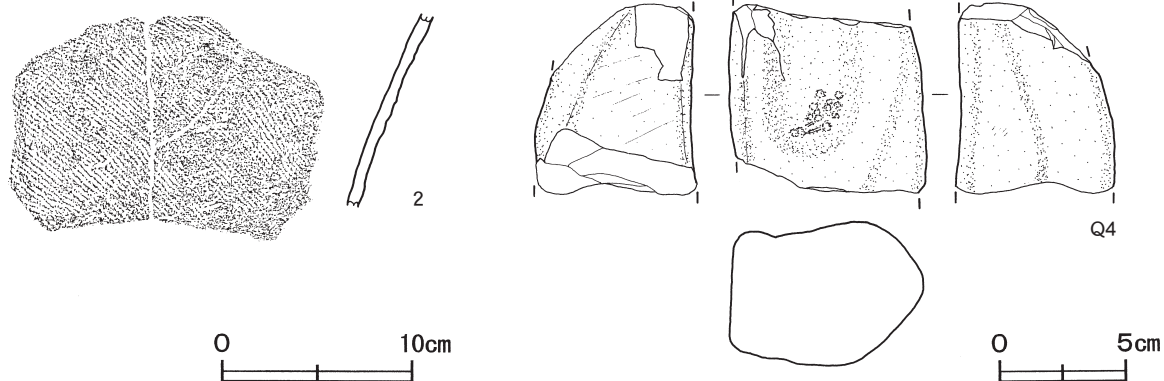
- 1 黒褐色 粘土粒子少量
- 2 黒褐色 粘土ブロック・鉄分少量
- 3 灰黄褐色 粘土粒子中量
- 4 黒褐色 粘土粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片3点（壺）、石器1点（磨石）が出土している。また、流れ込んだ縄文土器片1点も出土している。2は覆土下層、Q4は底面から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後半と考えられる。



第9図 第108号土坑実測図



第10図 第108号土坑出土遺物実測図

第108号土坑出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
2	弥生土器	壺	-	(10.2)	-	石英・雲母・赤色 粒子	にぶい 黄橙	普通	RL単節縄文施文	覆土下層	5%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q4	敲石	(7.5)	(8.0)	(6.4)	(532)	砂岩	敲打痕 両端部欠損	底面	

表2 弥生時代の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係 (旧→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ (cm)					
50	B2g4	N-64°-E	楕円形	2.00×1.36	17	外傾	平坦	人為	弥生土器、縄文土器、土師器、石器	
108	B2e6	-	円形	1.34×1.28	72	外傾	平坦	人為	弥生土器、石器	本跡→SI 19

3 古墳時代の遺構と遺物

遺構は、竪穴住居跡25軒、土坑10基、溝跡6条が確認された。以下、確認された遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡（第11・12図）

位置 調査区南部のD2f6区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

規模と形状 長軸5.74m、短軸5.50mの方形で、主軸方向はN-2°-Eである。壁高は6~16cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。P5の東西には、20cmほどの高まりが確認された。

竈 北壁中央部に付設されていたと考えられる。攪乱により、遺存状態は不良である。火床面に焼土と炭化物が、また、袖部の構築土と考えられる粘土がわずかに確認された。

ピット 6か所。P1~P4は深さ12~38cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ15cmで、南壁寄りのほぼ中央部に位置し、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ32cmで、南西壁際に位置しているが、性格は不明である。

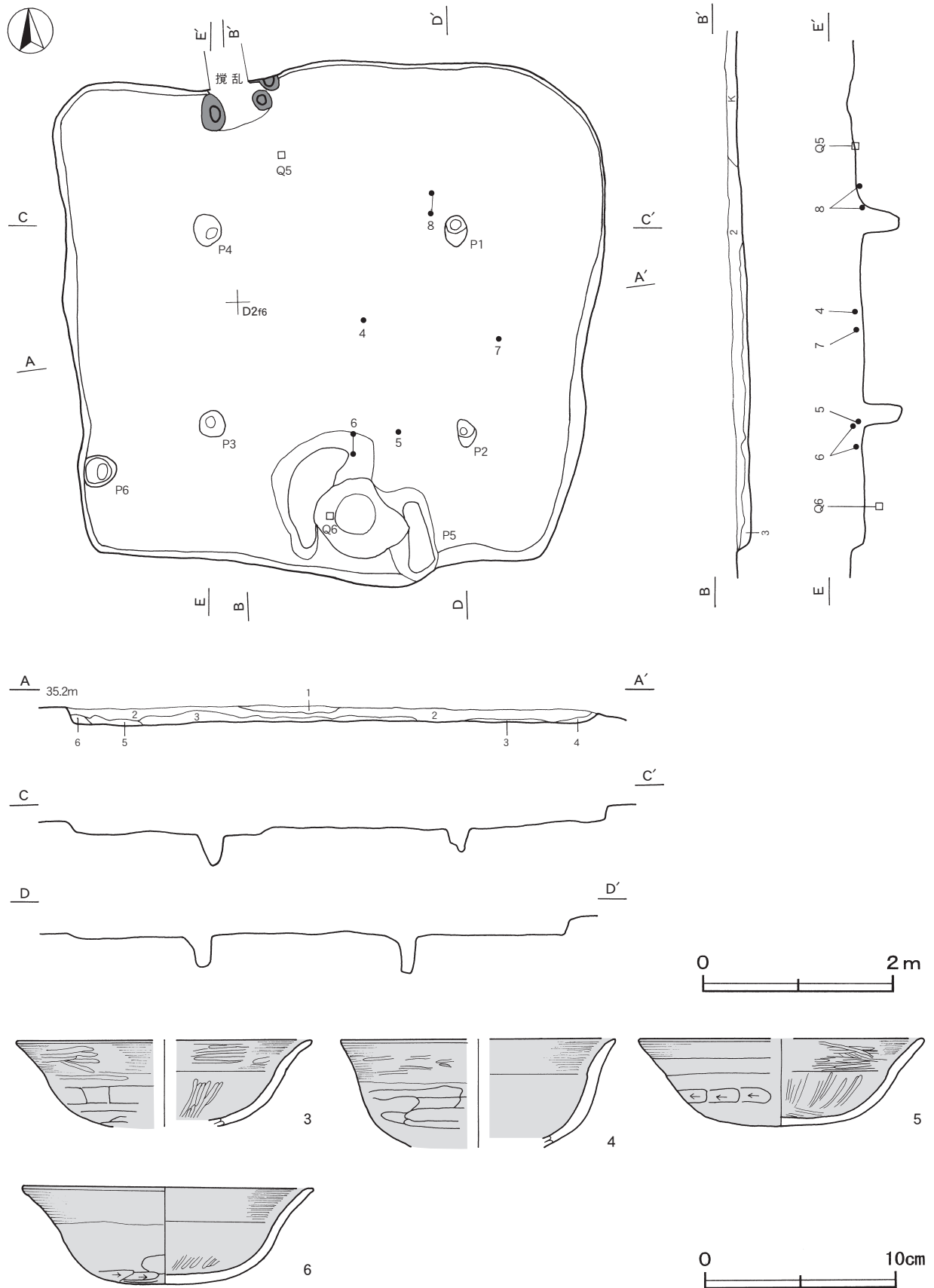
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

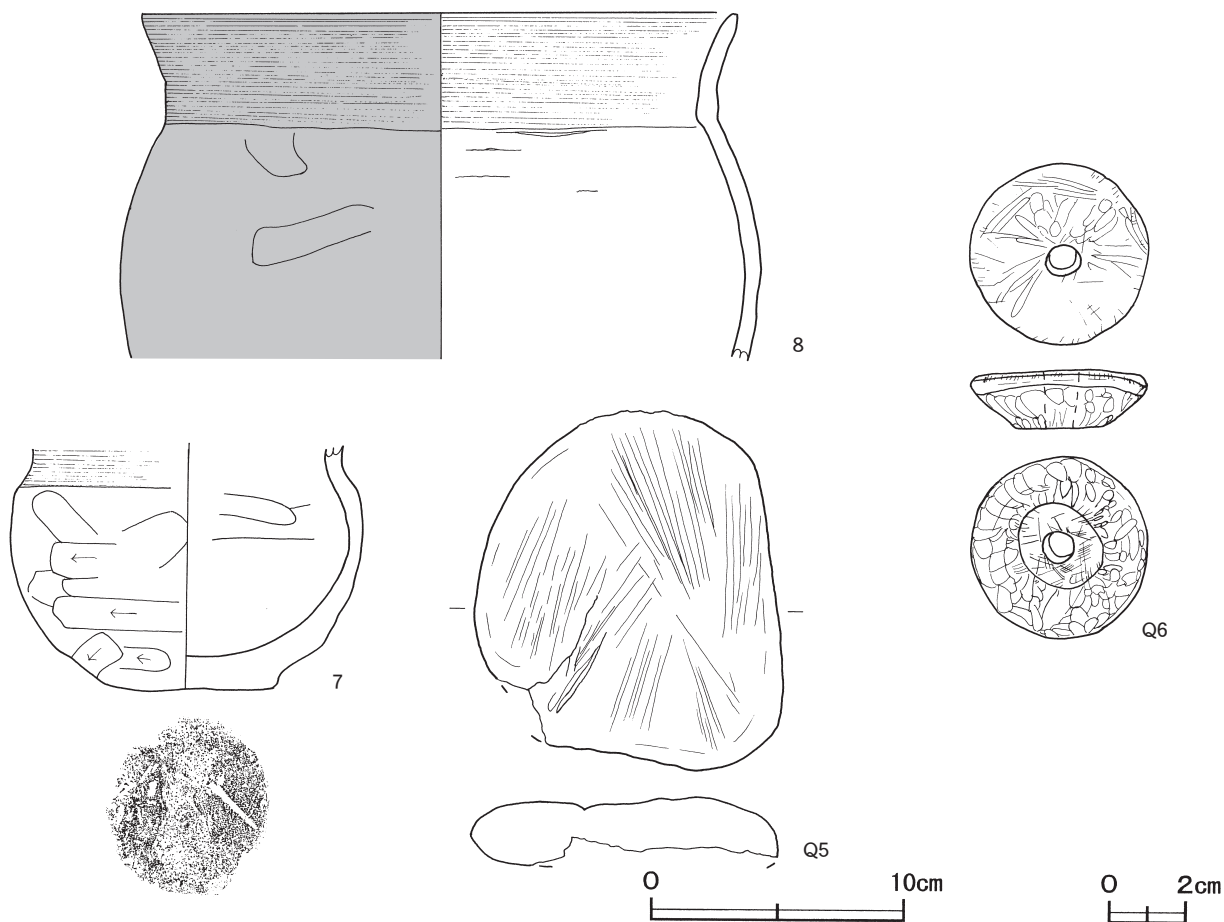
1 黒褐色	焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量	4 黒褐色	焼土粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量
2 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	5 黒褐色	焼土粒子中量、炭化粒子微量
3 黒褐色	粘土ブロック・焼土粒子微量	6 黒褐色	粘土粒子中量

遺物出土状況 土師器片419点（坏67、碗1、埴9、高坏1、甕340、甗1）、石器1点（砥石）、石製品1点（紡錘車）が中央部から東壁際を中心とした覆土上層から下層にかけて出土している。坏67点中、33点が赤彩されている。また、流れ込んだ縄文土器片1点も出土している。5・6は南部の覆土下層、8は北東部の床面から出土している。Q6は、P5の覆土中層から出土しており、柱抜き取り後、混入した可能性が考えられる。

所見 時期は、出土土器から6世紀初頭と考えられる。



第11図 第1号住居跡・出土遺物実測図



第12図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表 (第11・12図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3	土師器	坏	[15.4]	(4.5)	-	長石	赤	普通	口縁部内・外面ヘラ磨き ヘラナデ 内面ヘラ磨き	覆土中	25%
4	土師器	坏	[14.2]	(5.6)	-	長石	赤	普通	口縁部外面ヘラ磨き 体部ヘラナデ	中央部下層	25%
5	土師器	坏	[14.8]	4.6	-	長石・白色粒子	暗赤褐	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	南部下層	50% PL26
6	土師器	坏	15.2	5.2	-	長石・石英	赤褐	普通	体部下端ヘラ削り 内面ヘラ磨き	南部下層	70% PL26
7	土師器	碗	-	(9.7)	6.4	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ ヘラ削り	東部下層	40%
8	土師器	甌カ	23.4	(13.7)	-	長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部外面横ナデ 体部外面ヘラ削り	北東部床面	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q5	砥石	(14.2)	12.3	(2.6)	(592)	礫岩	砥面1カ所 刃物痕多数	北部床面	

番号	器種	最大径	最大厚	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q6	紡錘車	4.8	1.6	0.9	44.6	蛇紋岩	全面工具痕 穿孔部付近に削痕	P5中層	PL38

第2号住居跡（第13～15図）

位置 調査区南部のD2g9区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

規模と形状 長軸5.29m、短軸4.99mの方形で、主軸方向はN-13°-Wである。壁高は7～15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦であるが、中央部から西壁にかけて幅34～128cm、深さ4～6cmほど溝状に低くなっている。

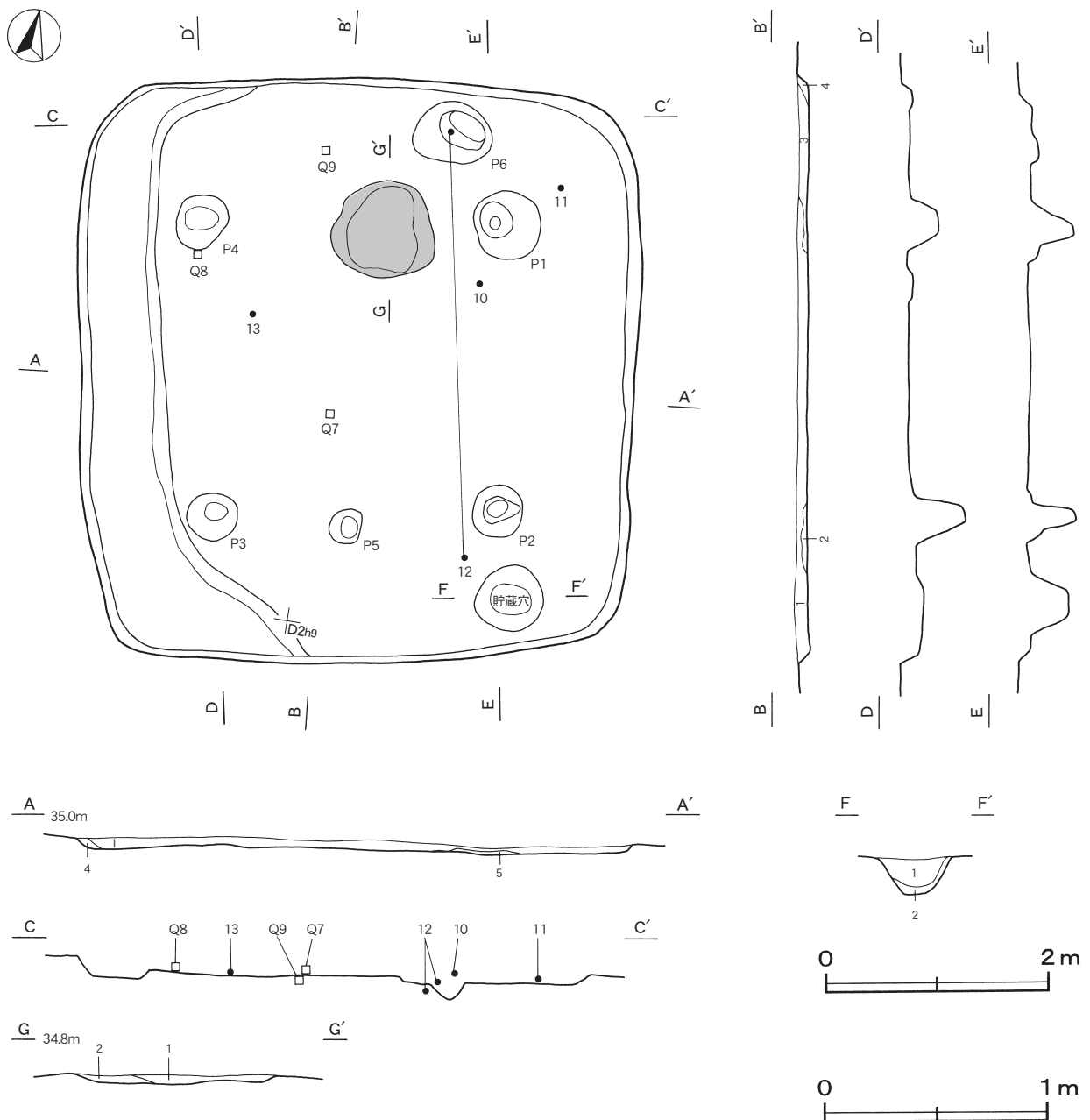
炉 中央部のやや北寄りに位置している。径80cmほどの円形で、床面を5cmほど掘り込んだ地床炉である。炉床は火熱により硬化している。

炉土層解説

1 黒褐色 粘土ブロック・炭化粒子中量

2 黒褐色 粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量

ピット 6か所。P1～P4は深さ40～45cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ22cmで、南



第13図 第2号住居跡実測図

壁寄りのほぼ中央部に位置し、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ12cmで、北壁際のやや東寄りに位置しているが性格は不明である。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。径60cmの円形で、深さは34cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 黒褐色 粘土ブロック・炭化粒子少量

2 灰オリーブ色 粘土ブロック中量

覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色 粘土ブロック・炭化粒子少量

4 黒褐色 粘土粒子少量

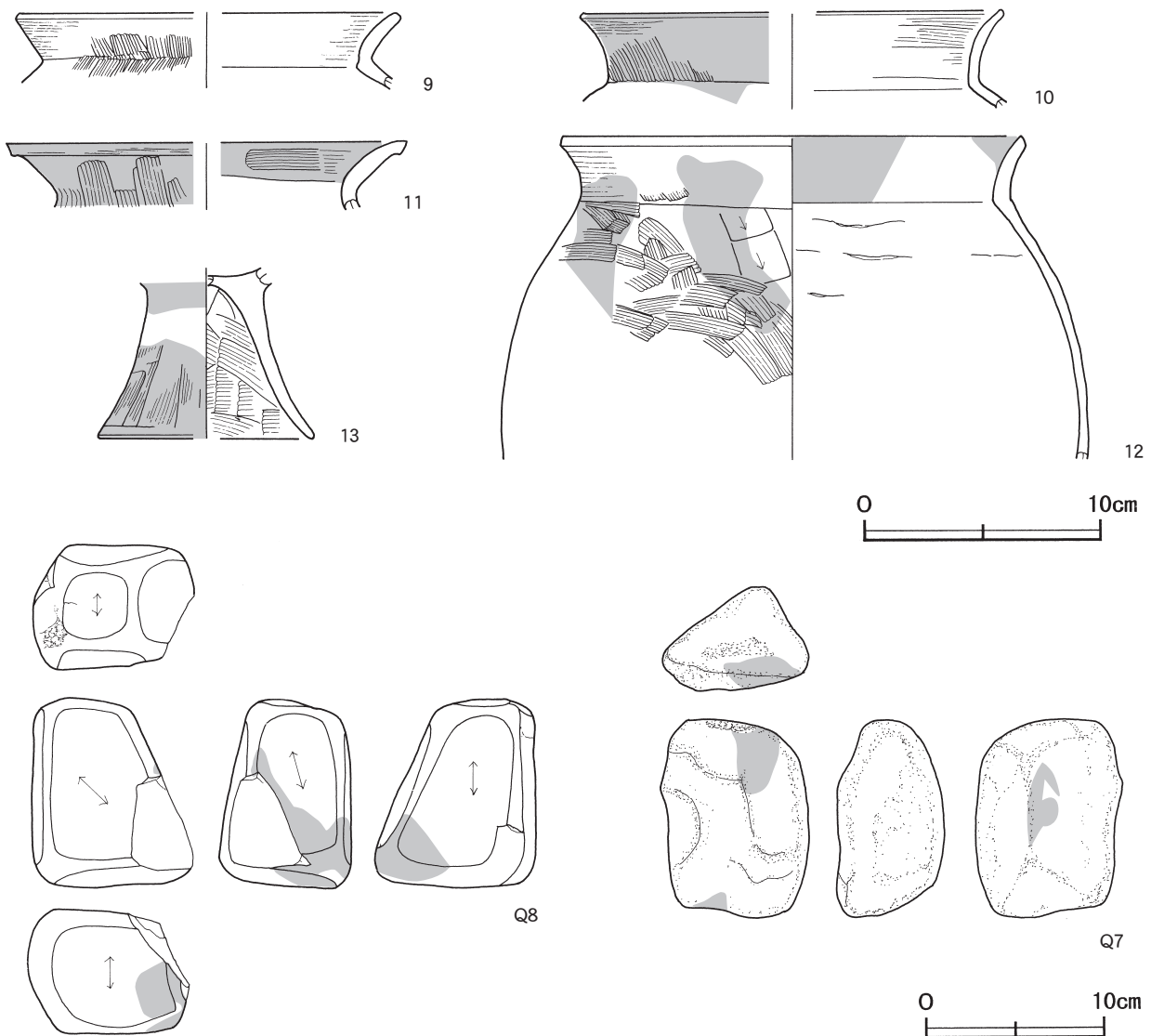
2 黒褐色 粘土ブロック中量

5 黒褐色 粘土粒子中量

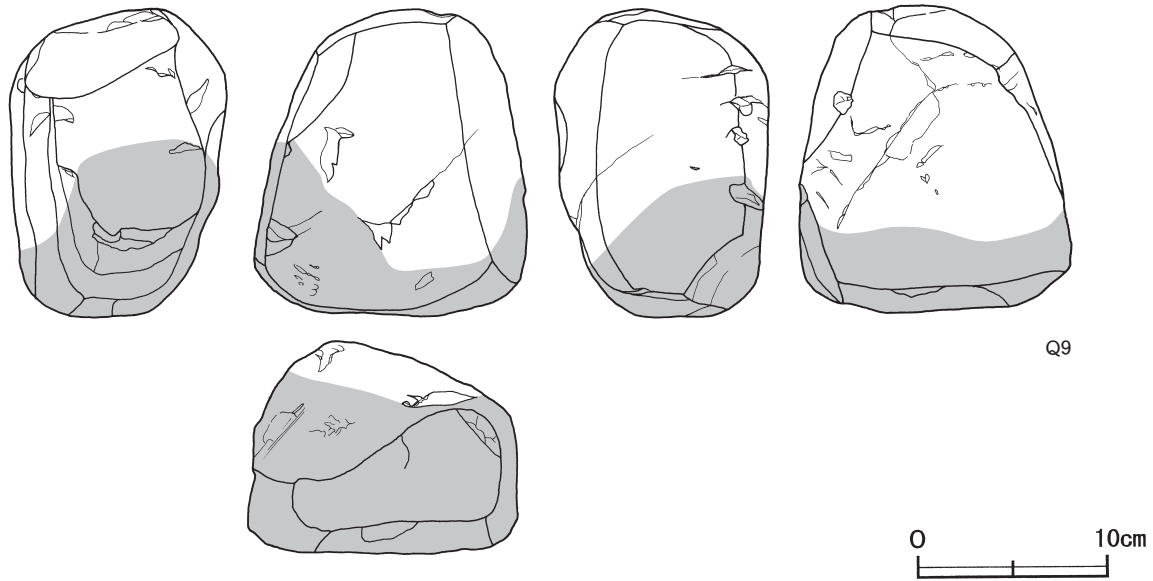
3 黒褐色 炭化粒子少量、粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片145点(甕), 石器3点(敲石1, 砥石2), 炭化材が覆土上層から床面にかけて、全域に散在した状態で出土している。また、流れ込んだ縄文土器片1点も出土している。12は南東部の床面とP6の中層から出土した破片が接合したものである。13は中央部のやや西寄りの覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から前期前葉と考えられる。



第14図 第2号住居跡出土遺物実測図(1)



第15図 第2号住居跡出土遺物実測図(2)

第2号住居跡出土遺物観察表(第14・15図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
9	土師器	甕	[16.0]	(3.2)	-	長石・石英	にぶい黄褐	普通	口縁端部面取り ハケ目調整	口縁部・体部外面	覆土中	5%
10	土師器	甕	[17.6]	(4.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁端部面取り ハケ目調整	口縁部内・外面	中央部下層	5%
11	土師器	甕	[17.0]	(2.9)	-	長石・石英・雲母	黒	普通	口縁部内・外面ハケ目調整		北東部下層	5%
12	土師器	甕	19.6	(13.9)	-	長石・石英・雲母・小礫	にぶい黄橙	普通	口縁端部面取り 調整後横ナデ 調整・ヘラ削り	口縁部外面ハケ目 体部外面ハケ目調整 内面輪積痕	南東部床面・P6中層	30%
13	土師器	台付甕	-	(7.3)	[9.2]	長石・石英・雲母	黒褐	普通	脚部内・外面ハケ目調整		西部下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q7	敲石	11.3	8.2	5.9	671	ザクロ石安山岩	敲打痕1か所	中央部床面	
Q8	砥石	10.8	(9.1)	7.2	(1000)	花崗岩	砥面5か所	西部床面	
Q9	炉石	16.0	14.4	11.0	3700	花崗岩	火熱を受けて変色	北部床面	

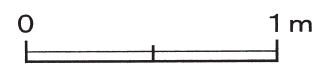
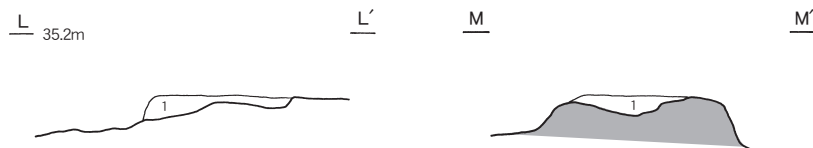
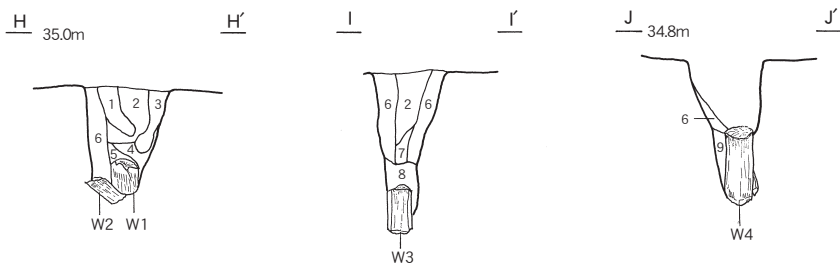
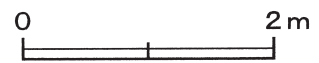
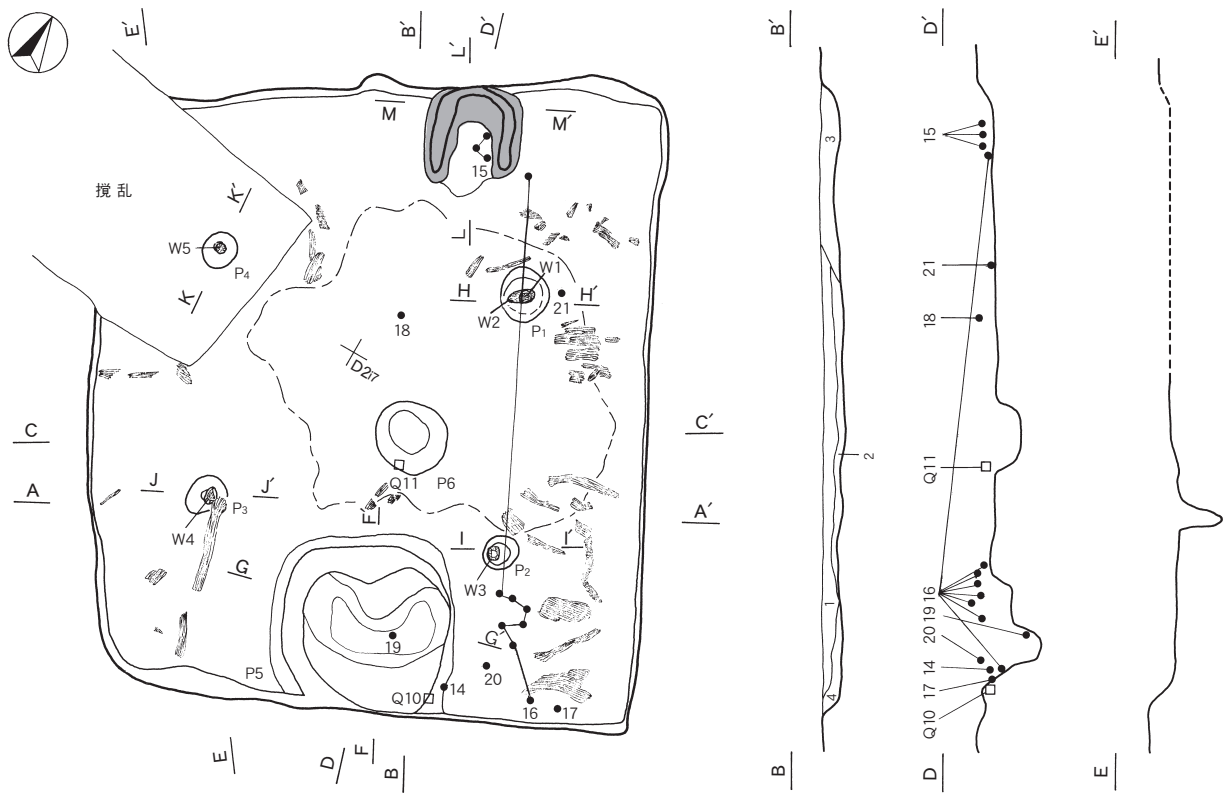
第3号住居跡(第16~19図)

位置 調査区南部のD2i7区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

規模と形状 長軸5.18m、短軸4.42mの長方形で、主軸方向はN-29°-Wである。壁高は19~22cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦であるが、P5の周囲に5~18cmほどの高まりがある。中央部が踏み固められており、全体に炭化材の広がり確認された。

竈 北壁のやや東寄りに付設されているが、覆土が薄く、遺存状態は不良である。規模は、焚口部から煙道部まで長さ85cm、袖部幅75cmである。袖部は、床面と同じ高さを基部とし、白色粘土で構築されている。火床部は平坦で、火床面は、火熱によりわずかに赤変している。煙道部は壁外への掘り込みがなく、緩やかに外傾して立ち上がっている。



第16图 第3号住居跡实测图

竈土層解説

1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量, 粘土粒子微量

ピット 6か所。P1～P4は深さ25～64cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。各主柱穴に柱材が残存していた。P1の柱材(W1)は、長さ16.3cm、幅10.1cmの丸材で、下端が鈍角に加工されている。また、礎板の代用と考えられる長さ16.1cm、幅7.2cmの角材(W2)が、柱材の下から出土している。P2の柱材(W3)は、長さ21.6cm、幅6.2cmのやや角の丸い角材で下端が鈍角に加工されている。P3の柱材(W4)は、長さ24.1cm、幅10.3cmで、側面は多角形に、下端は多方向から鈍角に加工されている。柱の脇に板状の木が差し込まれていた。P4の柱材(W5)は、長さ27.5cm、径8.7cmの丸材で下端は鈍角に加工されている。P5は深さ37cmで、南壁寄りのほぼ中央部に位置し、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ19cmで中央部に位置しているが、性格は不明である。

ピット土層解説

- | | |
|------------------------|----------------------|
| 1 黒褐色 砂粒少量, 炭化粒子微量 | 7 黒褐色 粘土粒子多量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 炭化物・粘土ブロック・砂粒微量 | 8 黒褐色 砂粒多量, 粘土粒子少量 |
| 3 黒褐色 粘土ブロック中量, 炭化粒子微量 | 9 黒褐色 粘土粒子・砂粒中量 |
| 4 黒褐色 粘土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 10 黒褐色 粘土粒子多量, 砂粒微量 |
| 5 黒褐色 粘土ブロック・炭化粒子・砂粒微量 | 11 黒褐色 粘土粒子・砂粒微量 |
| 6 黒褐色 粘土ブロック中量, 炭化粒子微量 | |

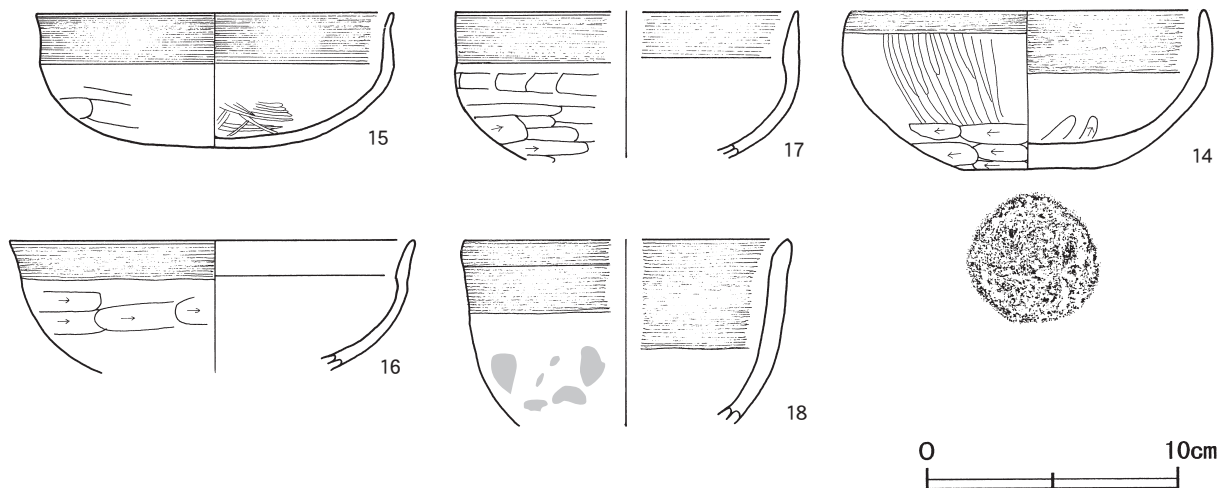
覆土 8層に分層される。焼土・炭化物を含み、不規則なブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

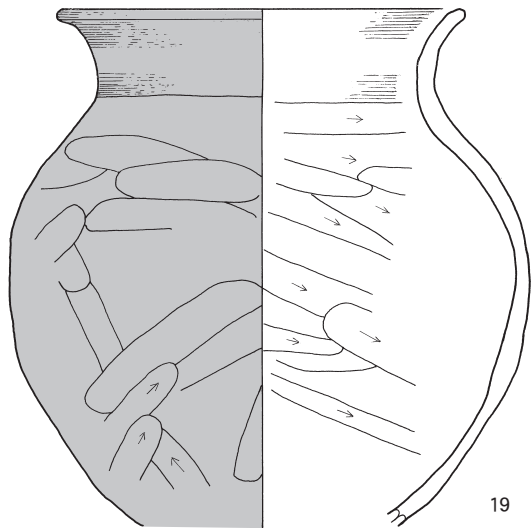
- | | |
|----------------------------|---------------------|
| 1 黒褐色 炭化物・粘土粒子中量, 焼土粒子微量 | 5 黒褐色 炭化物・粘土ブロック少量 |
| 2 黒褐色 粘土ブロック少量, 炭化物微量 | 6 黒褐色 粘土ブロック少量 |
| 3 黒褐色 焼土ブロック・粘土ブロック・焼土粒子少量 | 7 黒褐色 粘土ブロック・炭化粒子少量 |
| 4 黒褐色 粘土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 8 黒褐色 炭化粒子・粘土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片253点(坏45, 椀2, 器台3, 高坏4, 甕199), 石器2点(磨石, 敲石), 粘土塊2点, 炭化材が、覆土上層から床面にかけて、全域に散在した状態で出土している。炭化材は放射状に出土しており、焼失した住居の構築材と考えられる。また、流れ込んだ縄文土器片2点, 須恵器片1点も出土している。14は南部の床面から逆位, 20は横位, 21は北部の東壁際の床面から横位でそれぞれ出土している。15は竈の内部でつぶれた状態で出土している。16は南部の覆土下層を中心に散在しているが、北部の竈付近から出土した破片と接合しており、住居廃絶時に投げ込まれた可能性がある。

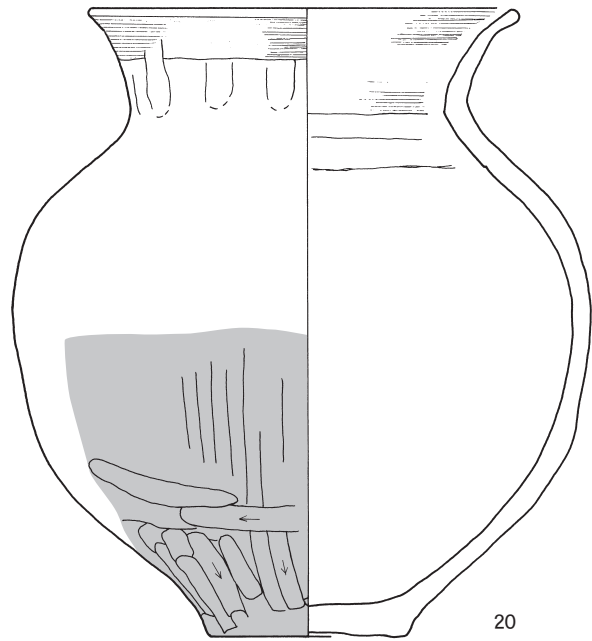
所見 炭化材の出土状況から焼失住居と考えられる。時期は、出土土器から5世紀末葉と考えられる。



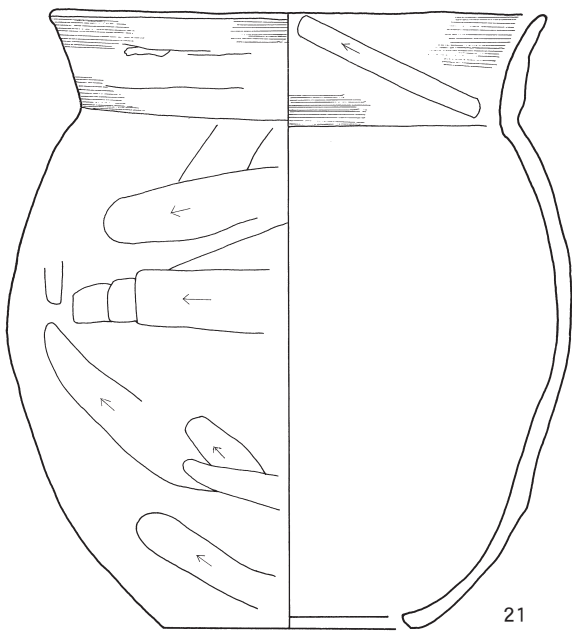
第17図 第3号住居跡出土遺物実測図(1)



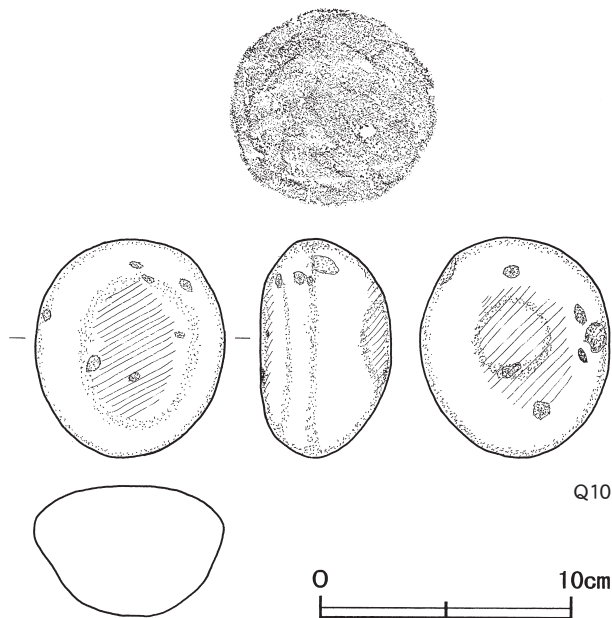
19



20

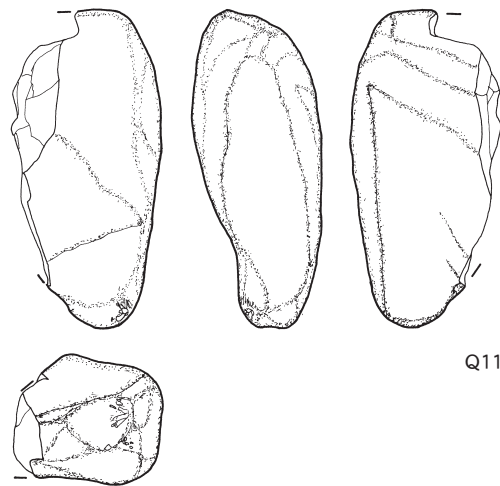


21



Q10

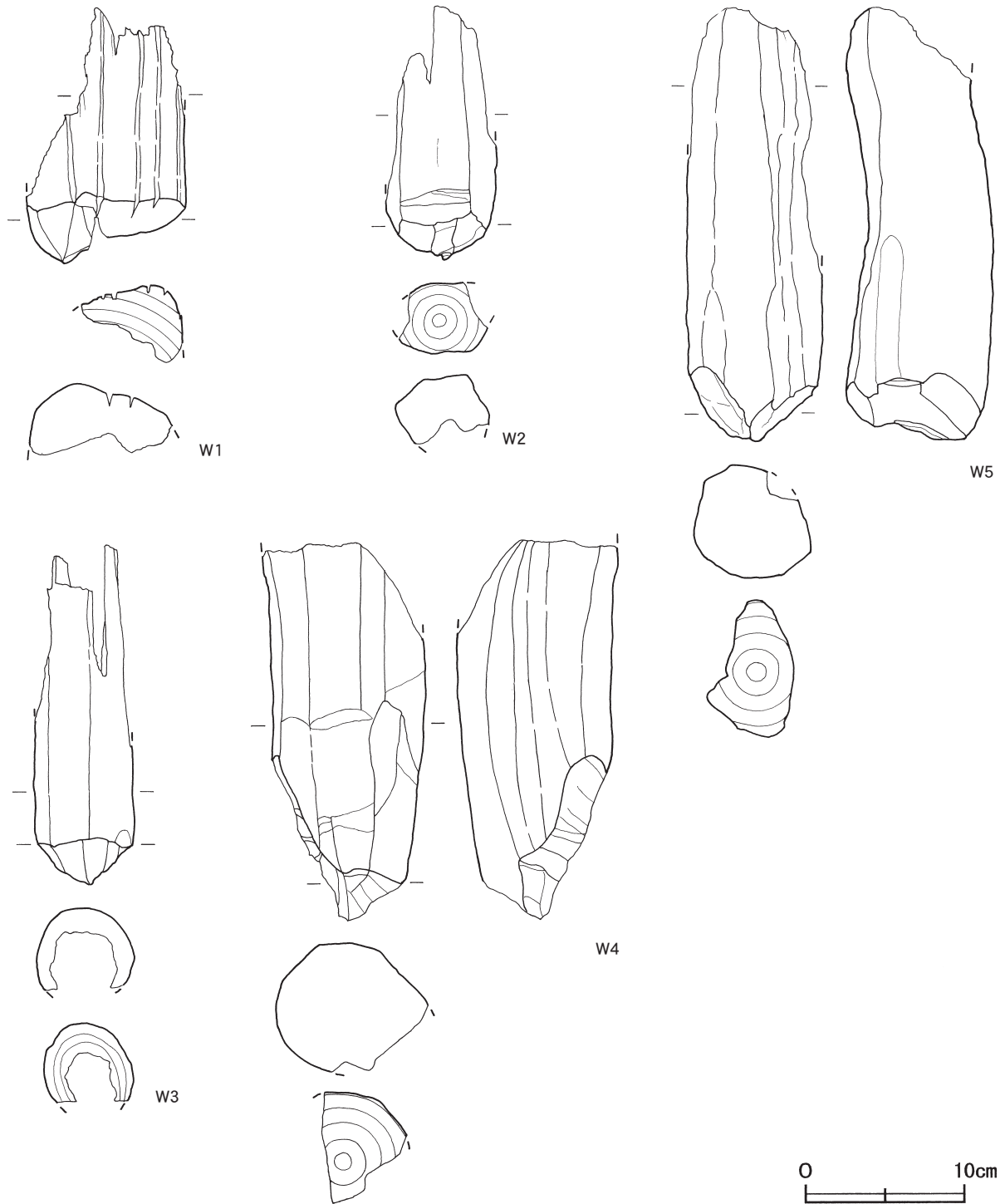
0 10cm



Q11

0 10cm

第18図 第3号住居跡出土遺物実測図(2)



第19図 第3号住居跡出土遺物実測図（3）

第3号住居跡出土遺物観察表（第17～19図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
14	土師器	坏	14.0	6.4	5.0	長石・石英・雲母	赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 磨き 体部下端へラ削り	体部へラ磨き 南部床面	98% PL26
15	土師器	坏	14.2	5.3	-	長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 磨き	体部内面へ 磨き 竈内	90% PL26

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
16	土師器	坏	16.2	(5.2)	-	長石・赤色粒子	赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ ヘラ削り	体部外面へ 北部・南部 下層～床面	30%	
17	土師器	坏	[13.6]	(5.8)	-	長石・雲母・赤色 粒子	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ ヘラ削り	体部外面へ 南東部床面	10%	
18	土師器	椀	[12.2]	(7.5)	-	長石・雲母・赤色 粒子	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ	中央部下層	15%	
19	土師器	甕	15.8	(20.5)	-	長石・赤色粒子	黒褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部内・外 面へラ削り	P5中層	70% PL25	
20	土師器	甕	16.8	24.8	7.7	長石・雲母・赤色 粒子	灰黄褐	普通	口縁部内・外面横ナデ ヘラ削り	体部外面へ 内面輪積痕 底部へラ削り	南部床面	50% PL25
21	土師器	甕	19.2	24.5	9.8	長石・石英	褐灰	普通	口縁部内・外面横ナデ 後内面へラ削り	体部外面へ 北部床面	80% PL25	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q10	磨石	8.7	7.6	5.3	491	安山岩	全面に削痕	南部床面	
Q11	敲石	16.8	(8.0)	6.9	(1140)	チャート	側面欠損	中央部下層	

番号	種別	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W1	建築部材	柱材	(16.3)	10.1	(4.7)	(222.0)	サクラ属	芯持丸木 先端部工具痕	P1	
W2	建築部材	柱材	(16.1)	7.2	(4.6)	(202.0)	コナラ属 アカガシ亜種	芯持丸木 先端部工具痕	P1	
W3	建築部材	柱材	(21.6)	6.2	(5.0)	(206.0)	コナラ属 アカガシ亜種	芯持丸木 先端部工具痕	P2	
W4	建築部材	柱材	(24.1)	10.3	(8.4)	(900.0)	コナラ属 アカガシ亜種	芯持丸木 先端部工具痕	P3	
W5	建築部材	柱材	(27.5)	8.7	(8.8)	(957.0)	コナラ属 アカガシ亜種	芯持丸木 先端部工具痕	P4	

第4号住居跡（第20～23図）

位置 調査区南部のE2a7区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

重複関係 第6号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸7.20m、短軸6.80mの方形で、主軸方向はN-12°-Wである。壁高は3～15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。間仕切り溝が、南壁のほぼ中央部に1条確認された。

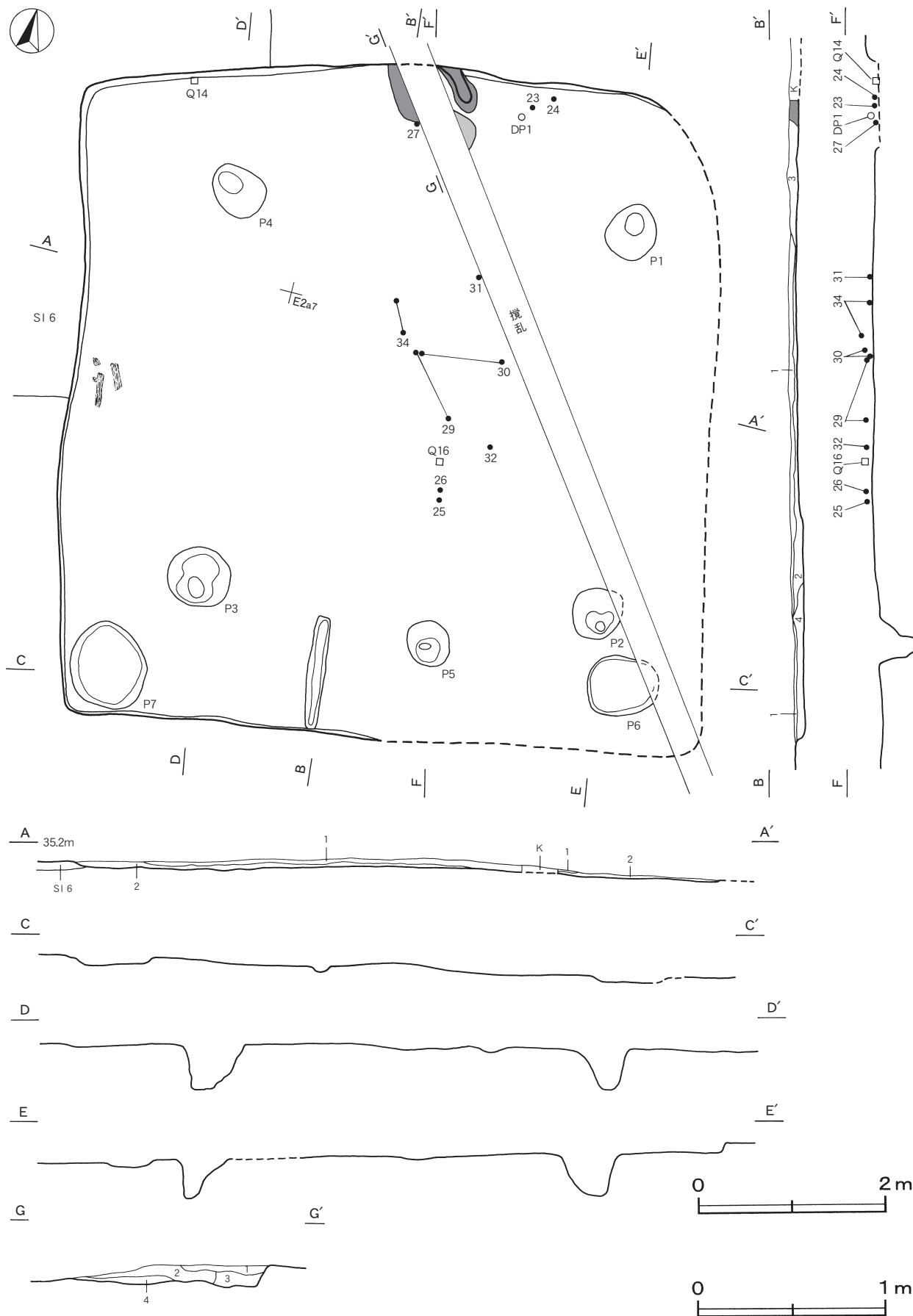
竈 北壁の中央部に付設されている。攪乱のため、遺存状態は不良である。規模は、推定で焚口部から煙道部まで150cm、袖部幅130cmである。袖部は東袖部と西袖部の一部が確認され、床面と同じ高さを基部とし、白色粘土で構築されている。火床部は円形に掘りくぼめていると推察される。

竈土層解説

- | | |
|-------------------------------|------------------------------|
| 1 黒褐色 粘土粒子少量 | 3 黒褐色 粘土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 灰黄褐色 粘土粒子多量, 焼土粒子中量, 炭化粒子少量 | 4 黒色 炭化粒子中量, 焼土ブロック・粘土ブロック少量 |

ピット 7か所。P1～P4は深さ45～50cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P2とP3から、板状の木片が出土しており、礎板と考えられる。P5は深さ40cmで、南壁寄りのほぼ中央部に位置し、出入口口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ8cmで南東コーナー付近、P7は深さ7cmで南西コーナー付近に位置しているが、性格は不明である。

覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。



第20图 第4号住居跡実測图

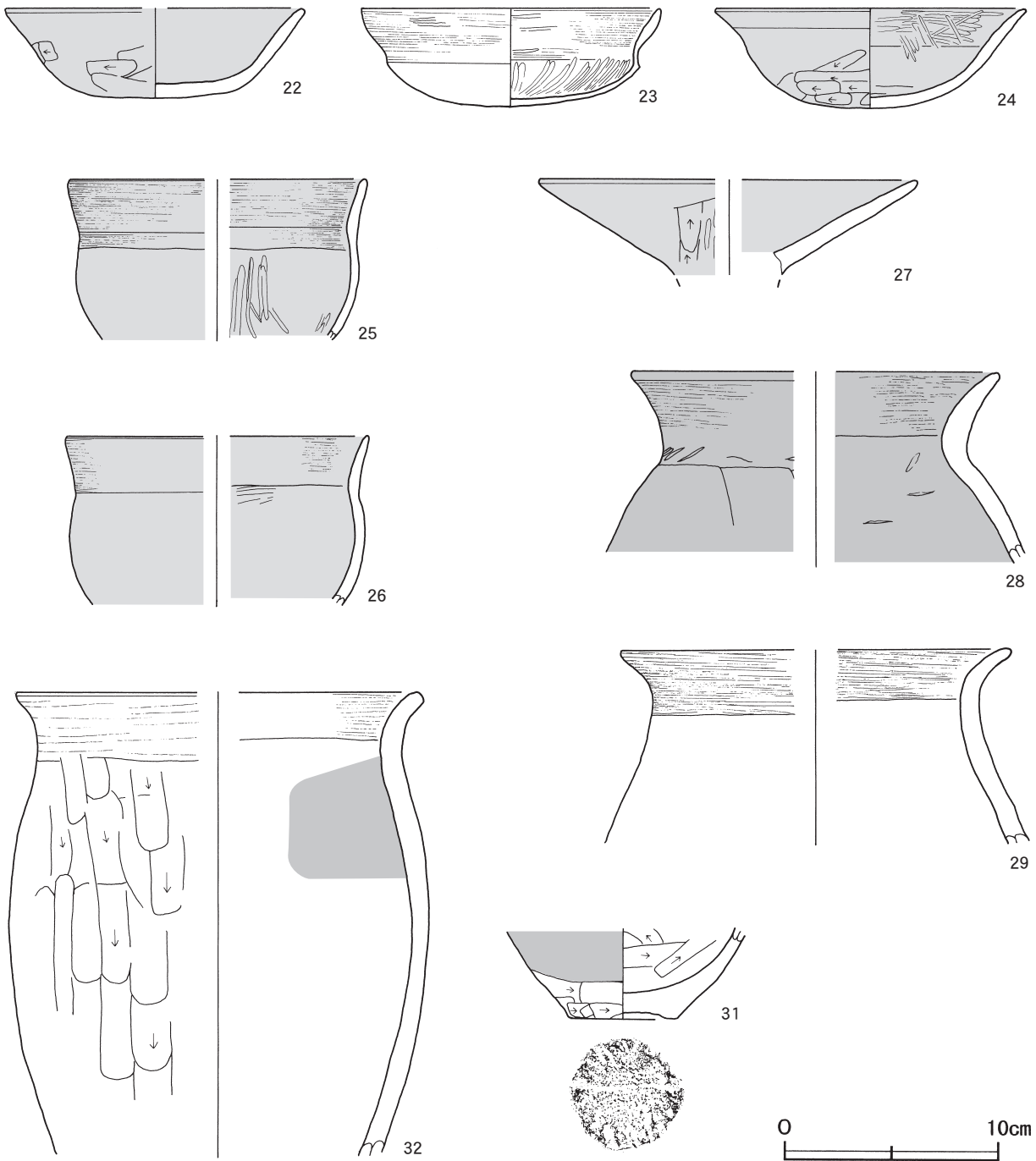
土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
 2 黒褐色 炭化粒子・粘土粒子少量

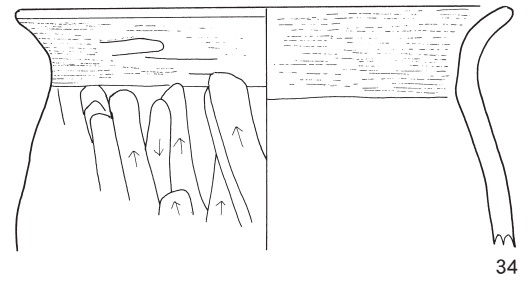
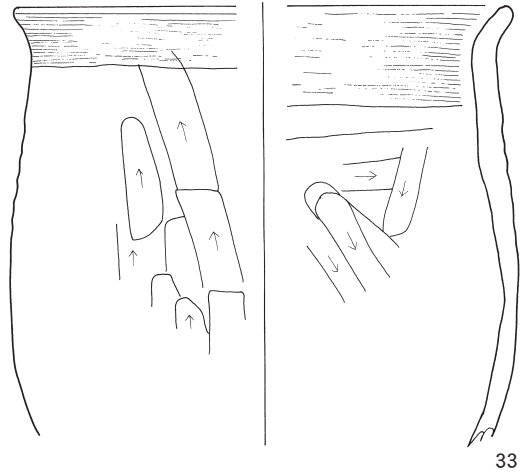
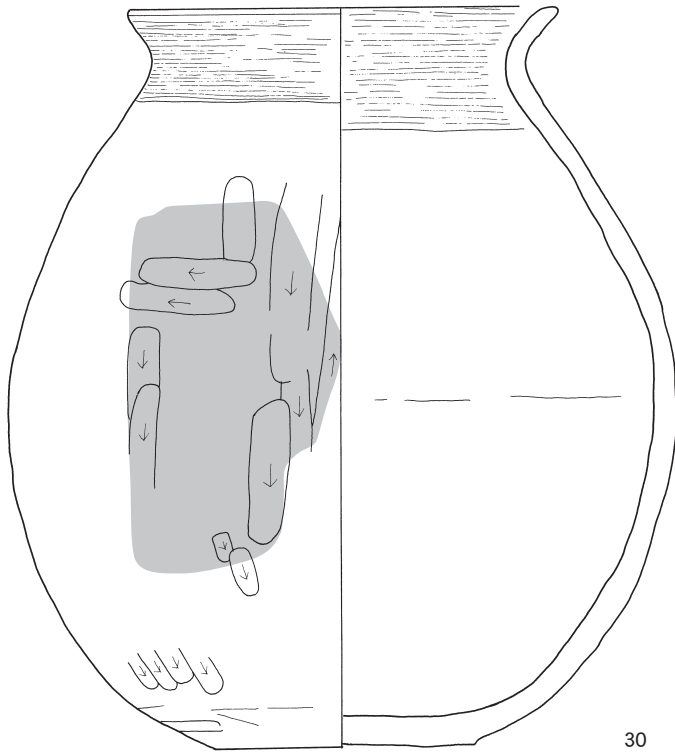
- 3 黒褐色 粘土粒子中量, 炭化粒子微量
 4 暗褐色 焼土粒子多量

遺物出土状況 土器器片122点（坏110, 器台1, 高坏9, 碗2）, 石器13点（磨石8, 敲石5）, 土製品1点（支脚）, 炭化材が, 竈周辺及び中央部から北西コーナー部を中心とした覆土上層から床面にかけて出土している。坏110点中, 78点が赤彩されている。また, 流れ込んだ縄文土器片4点, 須恵器片5点も出土している。23・24は北壁際の覆土下層から逆位で出土している。25・26・29～32・34・Q16は中央部の覆土下層及び床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から6世紀初頭と考えられる。



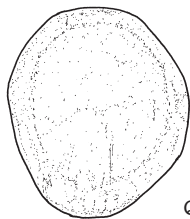
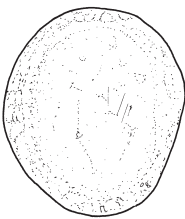
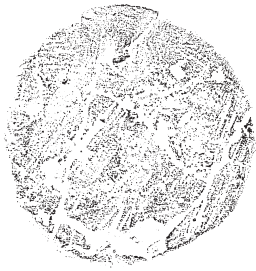
第21図 第4号住居跡出土遺物実測図（1）



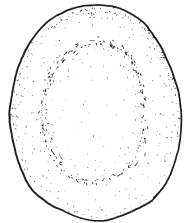
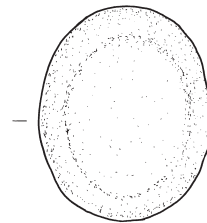
30

33

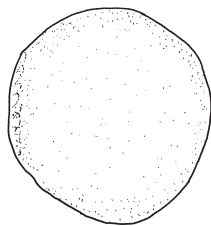
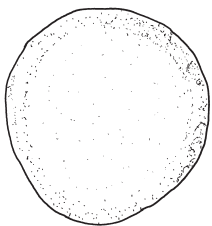
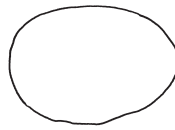
34



Q12



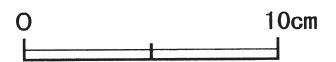
Q14



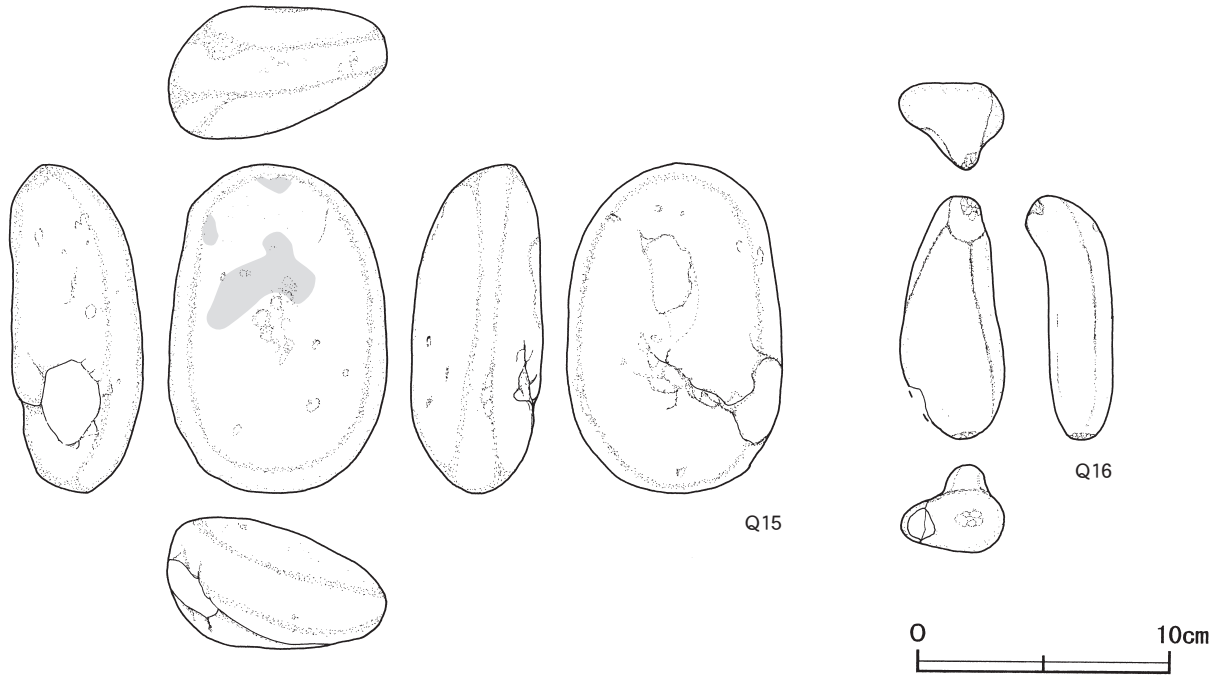
Q13



DP1



第22图 第4号住居跡出土遺物実測图(2)



第23図 第4号住居跡出土遺物実測図(3)

第4号住居跡出土遺物観察表(第21~23図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
22	土師器	坏	[13.8]	4.1	6.0	長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り 内・外面摩滅	覆土中	40%
23	土師器	坏	14.0	4.6	-	長石・赤色粒子	明赤褐	良好	口縁部横ナデ 内面ヘラ磨き	北東部下層	60% PL26
24	土師器	坏	14.5	4.7	-	長石	赤褐	普通	口縁部内面ヘラ磨き 体部外面ヘラ削り	北東部下層	100% PL26
25	土師器	碗	[14.0]	(7.5)	-	長石	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部内面ヘラ磨き	中央部下層	20%
26	土師器	碗	[14.0]	(7.9)	-	長石	赤褐	普通	口縁部・体部内・外面横ナデ	中央部下層	20%
27	土師器	高坏	[17.6]	(4.5)	-	長石	橙	普通	坏部外面ヘラ削り	竈袖部内	20%
28	土師器	甕	[17.0]	(9.0)	-	長石・雲母	明褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面ヘラナデ	覆土中	10%
29	土師器	甕	[18.2]	(9.1)	-	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	中央部下層	5%
30	土師器	甕	16.8	29.3	9.8	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 底部粗い削り後ナデ	中央部下層 ~床面	45% PL25
31	土師器	甕	-	(4.3)	5.1	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	体部内・外面ヘラ削り 底部ヘラ削り	中央部床面	5%
32	土師器	甕	[18.8]	(21.8)	-	長石・黒雲母・赤色粒子・礫	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り	中央部下層	20%
33	土師器	甕カ	[19.2]	(17.5)	-	長石	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部内・外面ヘラ削り	覆土中	20%
34	土師器	甕カ	19.1	(9.5)	-	白色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り	中央部中層 ~床面	20%

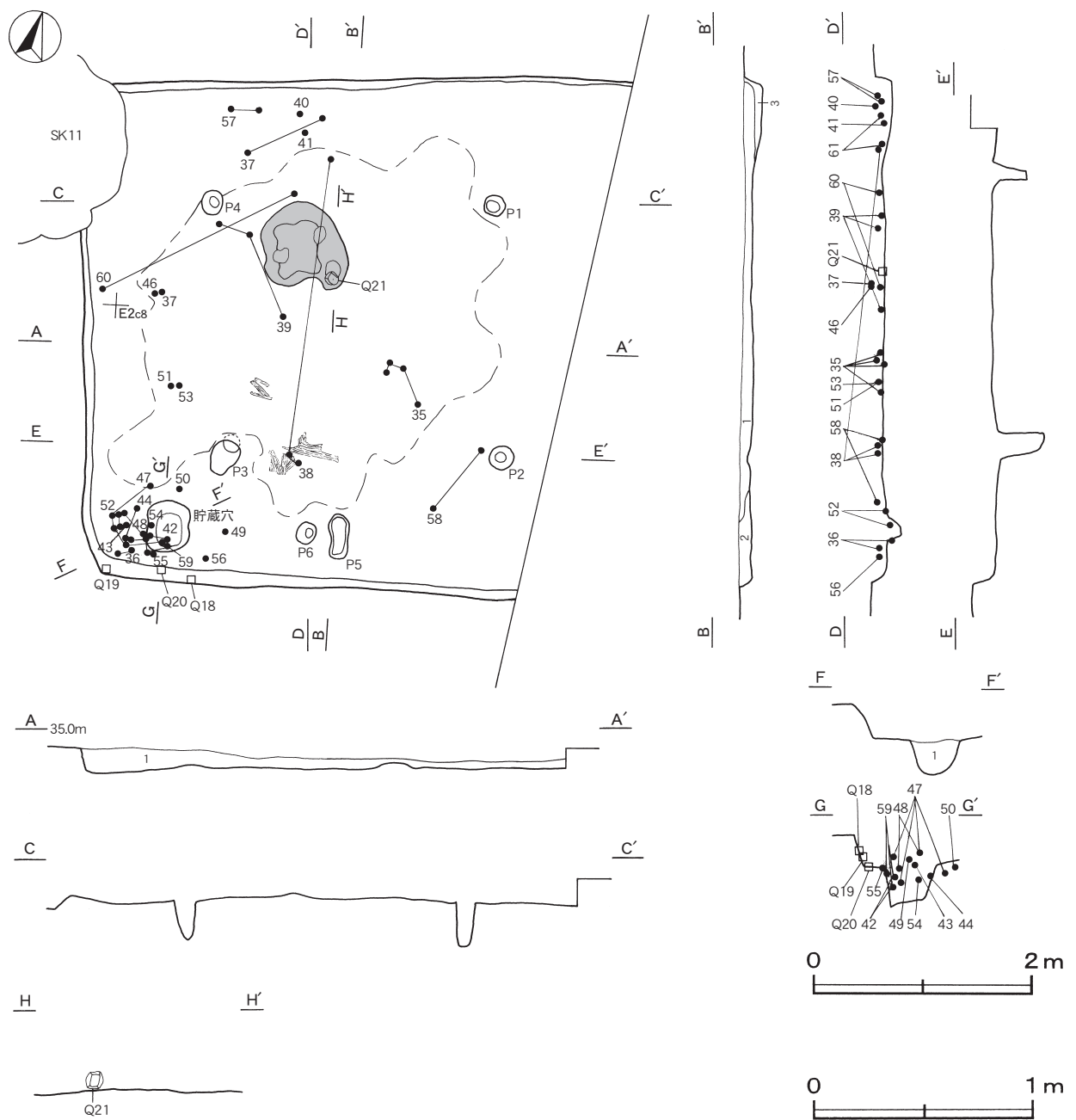
番号	器種	長さ	最大径	最小径	重量	材質	手法の特徴	出土位置	備考
DP 1	支脚	(7.4)	(5.9)	(3.3)	(115.1)	粘土	指頭痕を残すナデ	北部下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q12	磨石	8.3	6.9	3.4	243	玄武岩	全面に削痕	覆土中	
Q13	磨石	8.5	7.9	3.3	307	安山岩	全面に削痕	覆土中	
Q14	磨石	8.5	6.8	4.7	353	安山岩	全面に削痕	北西部床面	
Q15	磨石	13.0	8.5	5.2	699	安山岩	全面に削痕 赤色顔料付着	覆土中	
Q16	敲石	10.6	4.1	3.3	(147)	蛇紋岩	敲打痕 2か所	中央部下層	

第5号住居跡（第24～29図）

位置 調査区南部のE2c8区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

重複関係 第11号土坑に掘り込まれている。



第24図 第5号住居跡実測図

規模と形状 東部が調査区域外に延びているため、確認された範囲は、長軸4.82m、短軸4.74mである。平面形は方形と推定され、主軸方向はN-4°-Wである。壁高は10~25cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。炉を中心に中央部が踏み固められている。

炉 中央部のやや北寄りに位置している。長径45cm、短径40cmの不整円形で、掘り込みはなく直接に床面を炉床とした地床炉である。炉床には3か所の火熱による赤変が確認されたが、硬化は認められなかった。炉の南東部に火熱痕を有した炉石が据えられていた。

ピット 6か所。P1~P4は深さ40~46cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5・P6は深さ14cmで、南壁寄りのほぼ中央部に位置し、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南西コーナー部に位置している。長径45cm、短径40cmの楕円形で、深さは37cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 黒色 炭化粒子・粘土粒子微量

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

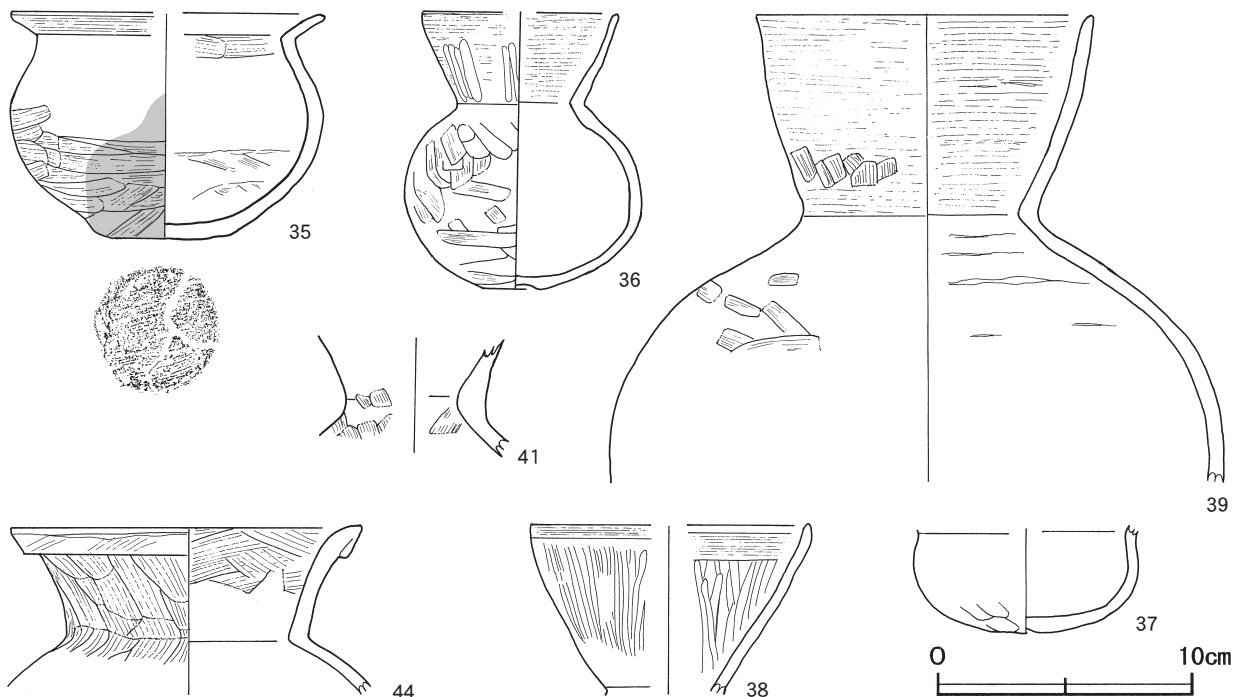
1 黒色 炭化物・粘土ブロック少量

3 黒色 粘土ブロック少量、炭化粒子微量

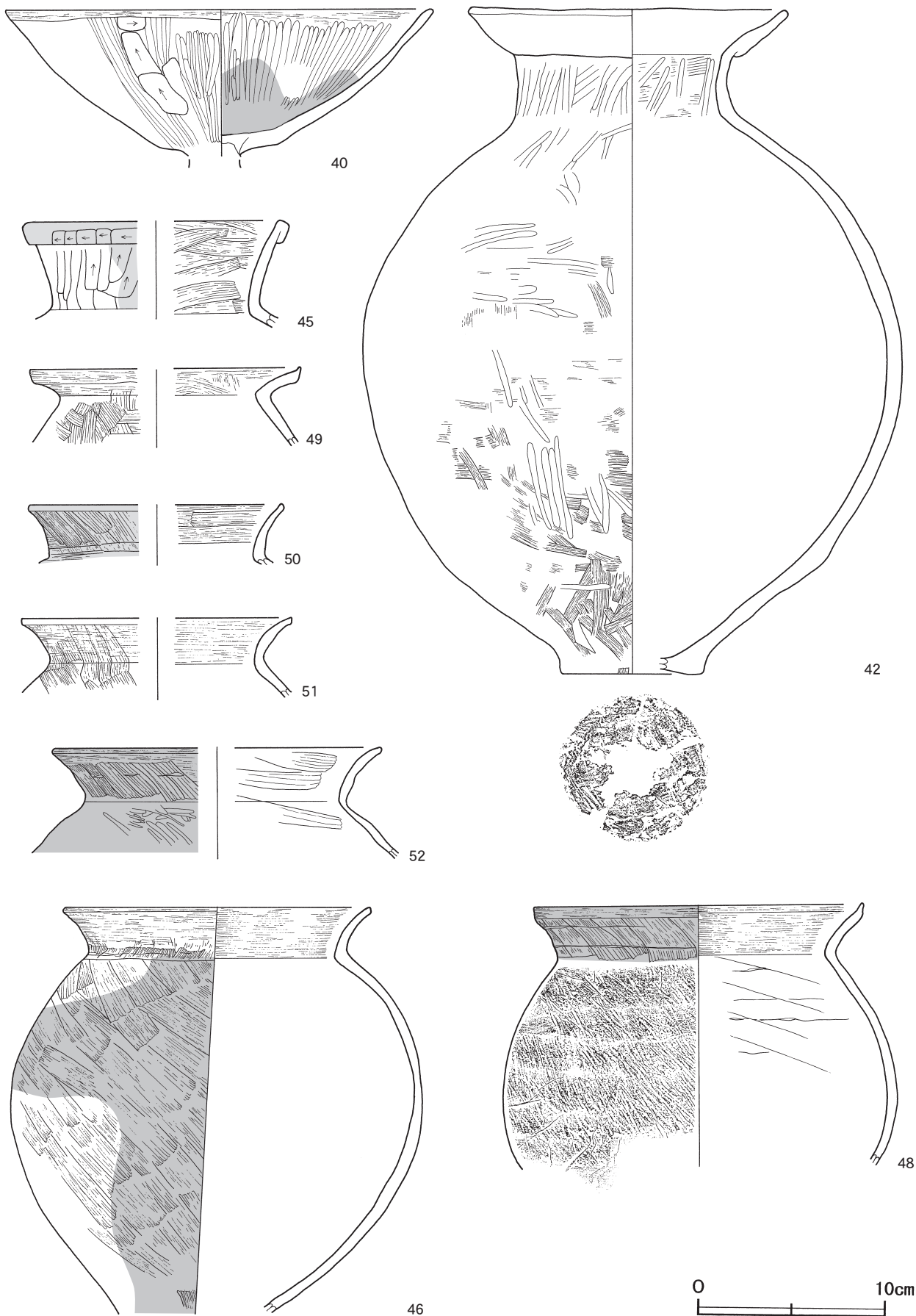
2 黒色 粘土粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片595点(坏2, 碗1, 埴16, 器台2, 高坏2, 壺3, 甕568, 甑1), 石器10点(磨石6, 敲石2, 砥石1, 炉石1)が覆土上層から床面にかけて、全域に散在した状態で出土している。また、流れ込んだ縄文土器片2点, 土製品1点(耳環)も出土している。36・42~44・47~50・52・54~56・59, Q18~Q20は南西コーナー部の覆土中層から貯蔵穴の覆土中層にかけて折り重なって出土しており、住居廃絶時に一括して廃棄されたものと考えられる。40は北壁際の覆土中層から逆位で出土している。46はつぶれた状態で西壁際の覆土下層から横位で出土している。

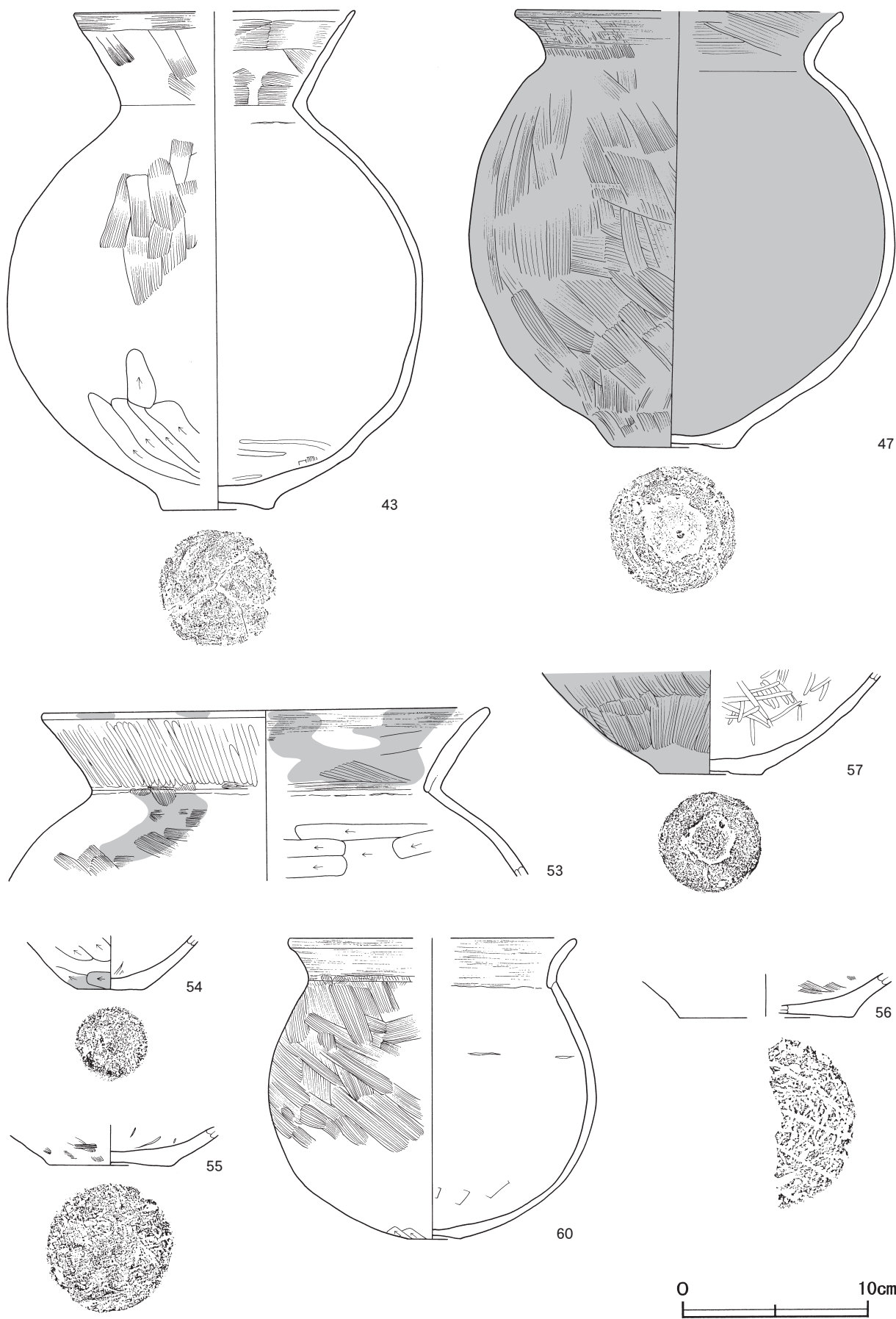
所見 時期は、出土土器から前期前葉と考えられる。



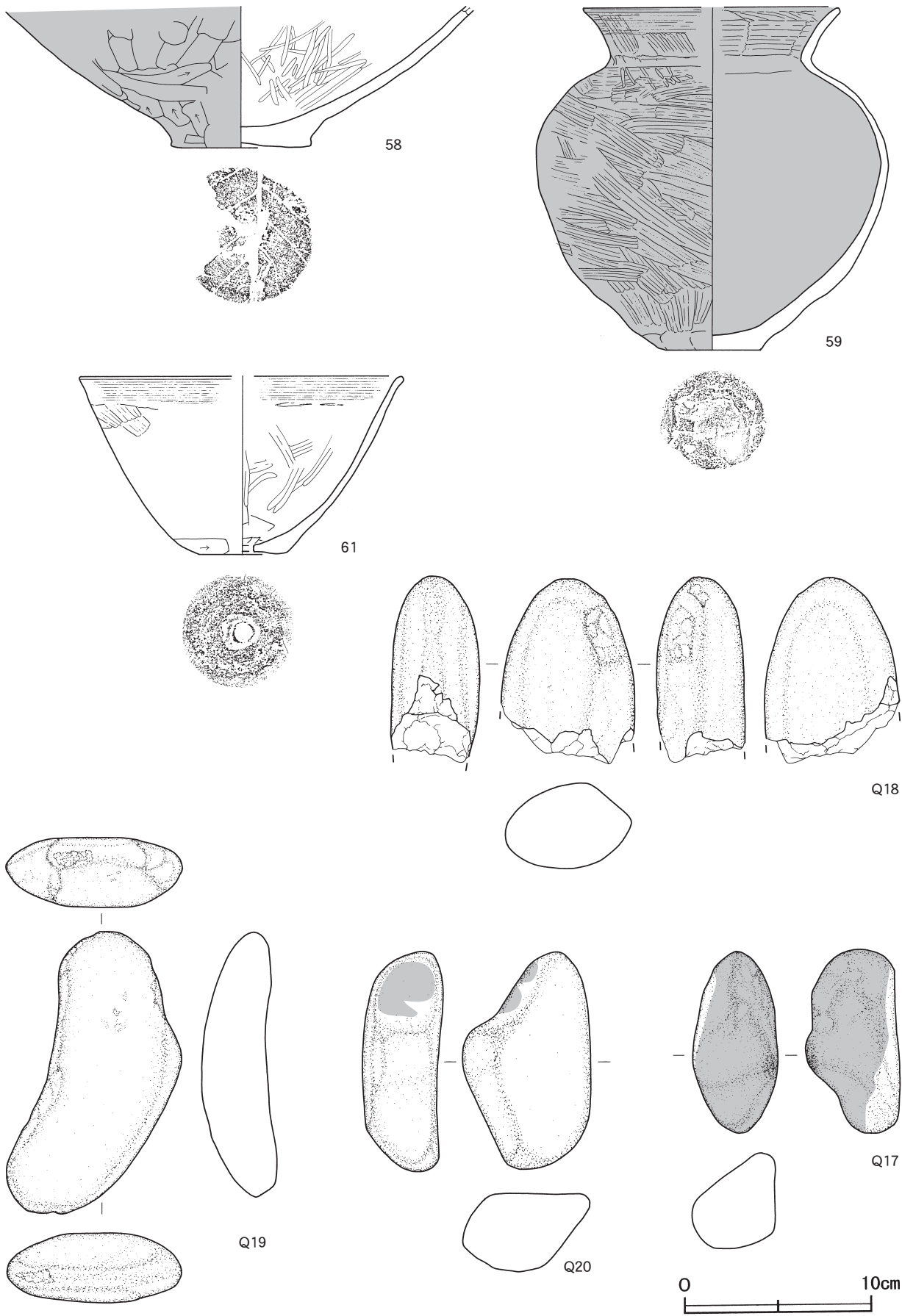
第25図 第5号住居跡出土遺物実測図(1)



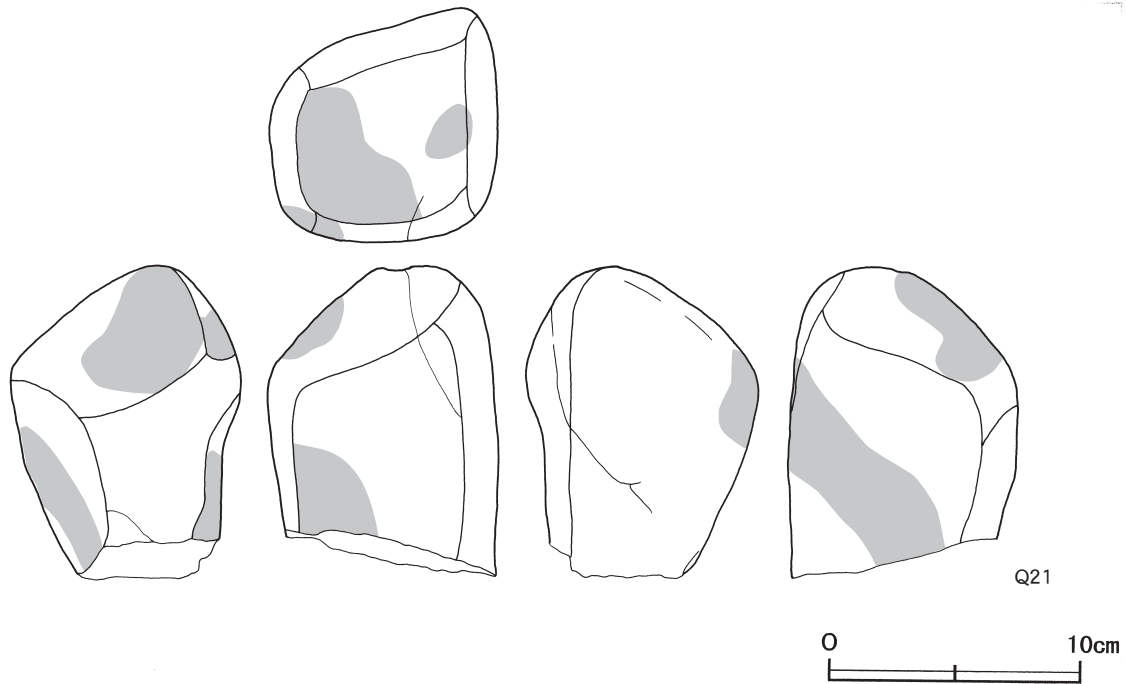
第26图 第5号住居跡出土遺物実測図(2)



第27图 第5号住居跡出土遺物実測図(3)



第28图 第5号住居跡出土遺物実測図（4）



第29図 第5号住居跡出土遺物実測図(5)

第5号住居跡出土遺物観察表(第25~29図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
36	土師器	埴	[7.5]	10.9	2.2	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部外面へラ磨き 体部外面ハケ目調整	南西部中層~床面	80% PL23
37	土師器	埴	-	(4.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面ハケ目調整	西部下層	40%
38	土師器	埴	[11.0]	(6.7)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口唇部内・外面横ナデ 口縁部内・外面へラ磨き	北部・南部下層	30%
40	土師器	高坏	22.9	(7.8)	-	長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部内・外面ナデ 体部内・外面へラ磨き 一部へラ削り	北部上層	50% PL23
39	土師器	壺	13.0	(18.5)	-	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部・体部外面ハケ目調整後ナデ 内面輪積痕	中央部下層~床面	50% PL23
41	土師器	壺	-	(4.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	体部内・外面ハケ目調整	北部下層	10%
42	土師器	壺	17.1	36.0	7.6	長石・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部折返し 内・外面ナデ 体部外面ハケ目調整後ナデ後磨きカ 底部ナデ	貯蔵穴内	95% PL23
43	土師器	壺	[15.2]	26.9	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部外面ハケ目調整後ナデ 体部外面上部ハケ目調整 下部へラ削り 底部ナデ	南西部中層	70%
44	土師器	壺	13.7	(6.7)	-	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部折り返し 外面横ナデ 体部内・外面ハケ目調整	南西部中層	15%
45	土師器	壺	[13.2]	(5.2)	-	長石・白色粒子	暗褐	普通	口縁部折り返し 外面へラ削り 内面ハケ目調整	覆土中	5%
46	土師器	甕	16.3	(21.9)	-	長石・白色粒子	褐灰	普通	口縁端面取り 口縁部外面ハケ目調整後横ナデ 体部外面ハケ目調整	西部下層	80% PL23

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
47	土師器	甕	[17.5]	23.6	6.8	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁端部ナデ 口縁部・体部内・外面ハケ目調整 底部ナデ 輪高台状	南西部床面・貯蔵穴内	70%
48	土師器	甕	17.5	(14.0)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁端部ナデ 口縁部・体部外面ハケ目調整	南西部床面	70%
49	土師器	甕	[14.3]	(4.2)	-	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁端部ナデ 口縁部内面ハケ目調整 体部外面ハケ目調整	南西部床面	5%
50	土師器	甕	[13.4]	(3.2)	-	長石・石英・赤色粒子	暗褐	普通	口縁端部面取り 口縁部内・外面ハケ目調整	南西部床面	5%
51	土師器	甕	[14.4]	(4.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁端部面取り 口縁部・体部外面ハケ目調整	西部床面	5%
52	土師器	甕	[17.4]	(6.0)	-	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口縁端部面取り 口縁部内・外面ハケ目調整	南西部床面	10%
53	土師器	甕	24.0	(9.2)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁端部ナデ 口縁部外面ヘラ磨き 体部外面ハケ目調整	西部床面	10%
54	土師器	甕	-	(2.9)	3.8	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ削り 底部ヘラナデ	貯蔵穴内	5%
55	土師器	甕	-	(2.1)	6.8	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面ハケ目調整 底部ナデ	貯蔵穴内	5%
56	土師器	甕	-	(2.4)	[9.4]	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	体部内面ハケ目調整 底部木葉痕	南西部	5%
57	土師器	甕	-	(5.6)	5.5	長石	灰褐	普通	体部外面ハケ目調整 内面ヘラ磨き 底部ナデ 輪高台状	北部下層	10%
58	土師器	甕	-	(7.6)	7.4	長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き 底部木葉痕	南東部下層～床面	10%
35	土師器	小形甕	[11.9]	8.9	4.8	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部外面横ナデ 体部内・外面ハケ目調整 内面輪積痕	中央部下層～床面	60%
59	土師器	小形甕	[13.7]	18.5	5.2	長石・白色粒子	褐灰	普通	口縁端部面取り 口縁部外面ハケ目調整後ナデ 内面ハケ目調整 体部外面ハケ目調整 底部ナデ	貯蔵穴内	75% PL23
60	土師器	小形甕	[15.4]	16.2	2.8	長石・石英・雲母・白色粒子	橙	普通	口縁端部ナデ 口縁部ハケ目調整後ナデ 体部外面ハケ目調整 内面輪積痕	中央部・西部床面	40%
61	土師器	甕	17.3	9.6	4.8	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部内・外面ナデ 体部ハケ目調整後ナデ・下端削り 内面ヘラ磨き	北部下層	50% PL23

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q17	磨石	9.9	4.1	5.1	286	礫岩	側面に削痕	覆土中	
Q18	磨石	(10.0)	7.2	4.8	(286)	安山岩	全面に削痕	南西部下層	
Q19	磨石	15.2	9.4	3.8	607	安山岩	側面に削痕	南西部床面	
Q20	磨石	11.8	6.9	4.3	403	砂岩	側面に削痕	南西部床面	
Q21	炉石	10.3	9.0	9.2	1290	花崗岩	火熱を受けて変色	炉石床面	

第6号住居跡（第30～32図）

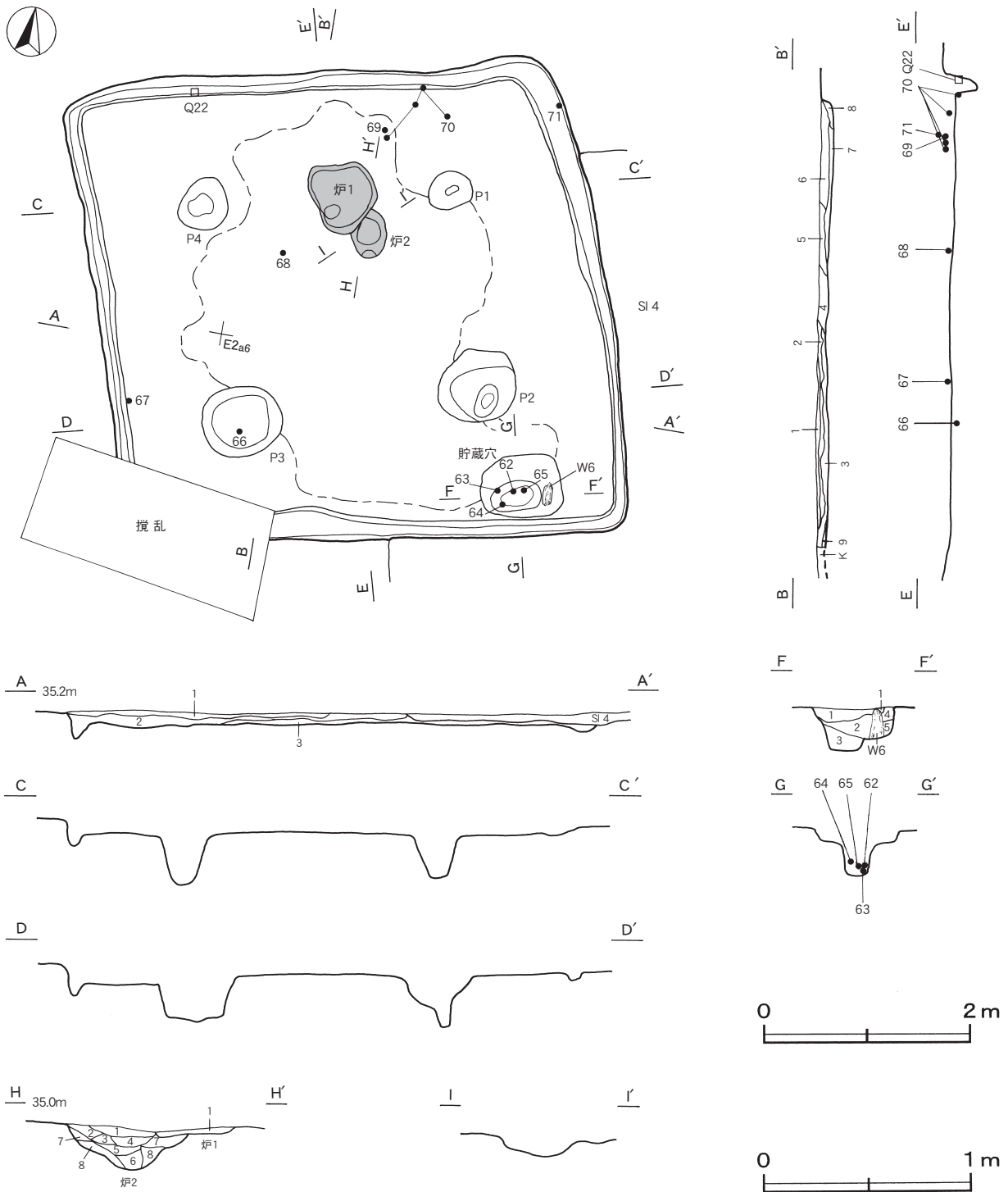
位置 調査区南部のD2j6区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

重複関係 第4号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.27m, 短軸4.93mの方形で, 主軸方向はN-13°-Wである。壁高は9~13cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。壁溝が全周している。

炉 2か所。ともに中央部やや北側に位置している。炉1は, 径60cmほどの不整形円で, 掘り込みはなく直接に床面を炉床とした地床炉である。炉2は, 長径45cm, 短径35cmの楕円形で, 床面を20cmほど掘り込んだ地床炉である。炉床は, ともに火熱により赤変硬化している。炉2使用後に炉1が作られたと考えられる。



第30図 第6号住居跡実測図

炉 1 土層解説

1 灰黄褐色 焼土ブロック・炭化物中量, ローム粒子少量

炉 2 土層解説

1 黒褐色 炭化粒子少量, 焼土粒子・粘土粒子微量
 2 にぶい黄褐色 粘土粒子少量, 炭化粒子微量
 3 黒褐色 炭化粒子少量, 粘土粒子微量
 4 にぶい黄褐色 粘土粒子少量, 炭化粒子微量

5 黒褐色 炭化粒子・粘土粒子中量, 焼土ブロック微量
 6 黒褐色 焼土粒子少量, 粘土ブロック・炭化粒子微量
 7 灰黄褐色 粘土ブロック多量
 8 灰黄褐色 粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 4か所。P1～P4は深さ40～50cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。長径78cm, 短径64cmの楕円形で、深さは40cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。東壁際に長さ34.7cm, 幅23.5cm, 厚さ10.8cmほどで、先端が鈍角に加工された板状の木材(W6)が埋め込まれた状態で確認されている。

貯蔵穴土層解説

1 黒褐色 粘土ブロック・炭化粒子微量
 2 黒褐色 粘土粒子少量, 炭化物微量
 3 黒褐色 粘土粒子中量

4 にぶい黄褐色 粘土ブロック少量, 炭化粒子微量
 5 にぶい黄褐色 粘土ブロック中量

覆土 9層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

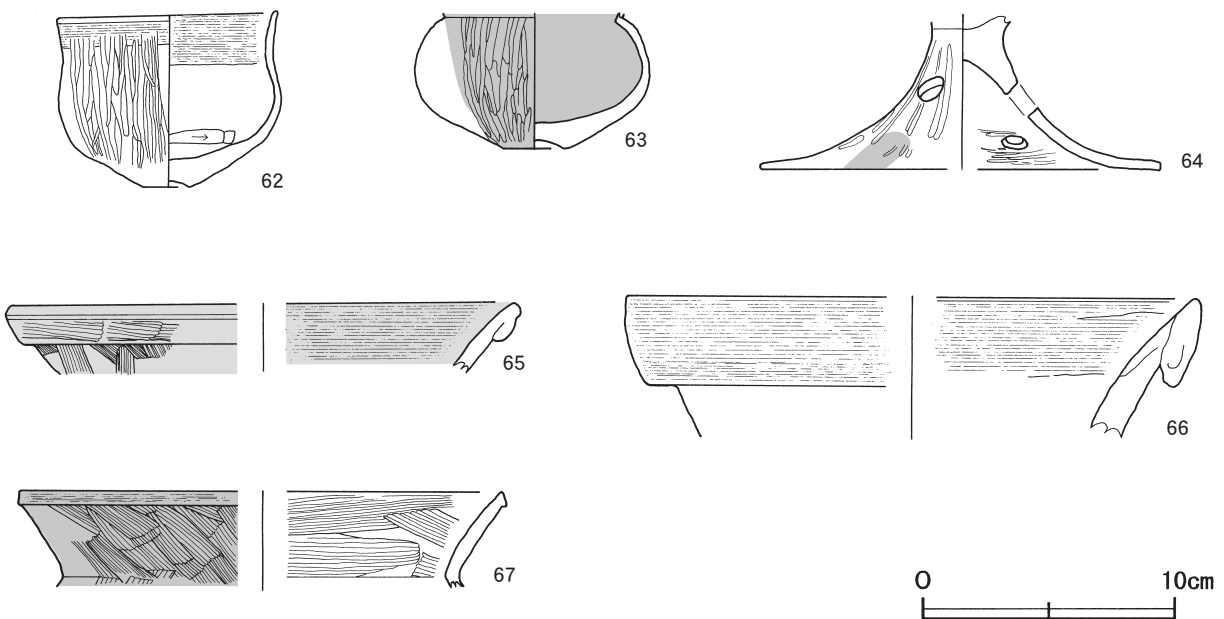
土層解説

1 暗褐色 粘土粒子少量
 2 黒褐色 粘土ブロック微量
 3 黒褐色 粘土ブロック中量
 4 黒褐色 粘土ブロック中量, 炭化粒子微量
 5 黒褐色 粘土ブロック少量, 炭化粒子微量

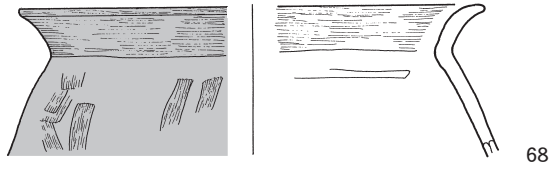
6 黒褐色 粘土ブロック・粘土粒子微量
 7 黒褐色 炭化物・粘土粒子微量
 8 黒褐色 粘土ブロック少量
 9 黒褐色 粘土ブロック少量, 炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片189点(埴30, 器台4, 高坏16, 小形鉢2, 壺2, 甕135), 石器1点(敲石)が覆土上層から床面にかけて、全域に散在した状態で出土している。また、流れ込んだ縄文土器片10点, 須恵器片1点も出土している。68・69は炉の周辺の床面及び覆土下層, 70は炉の北側の覆土下層からそれぞれ出土している。62～65は、貯蔵穴の底面から折り重なって出土している。W6は貯蔵穴の東壁際に埋め込まれており、貯蔵穴の補強材の可能性が考えられる。

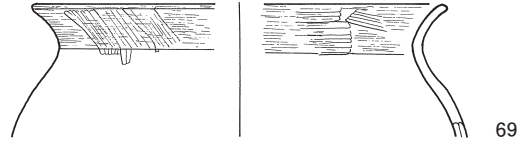
所見 時期は、出土土器から前期前葉と考えられる。



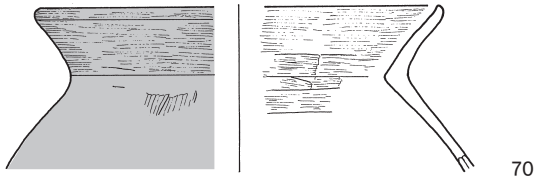
第31図 第6号住居跡出土遺物実測図(1)



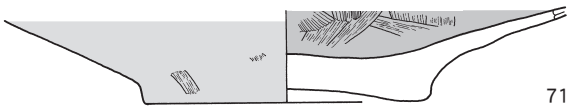
68



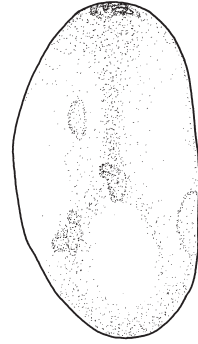
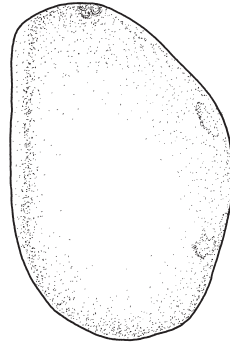
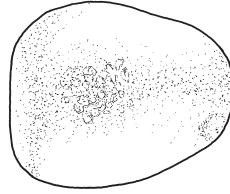
69



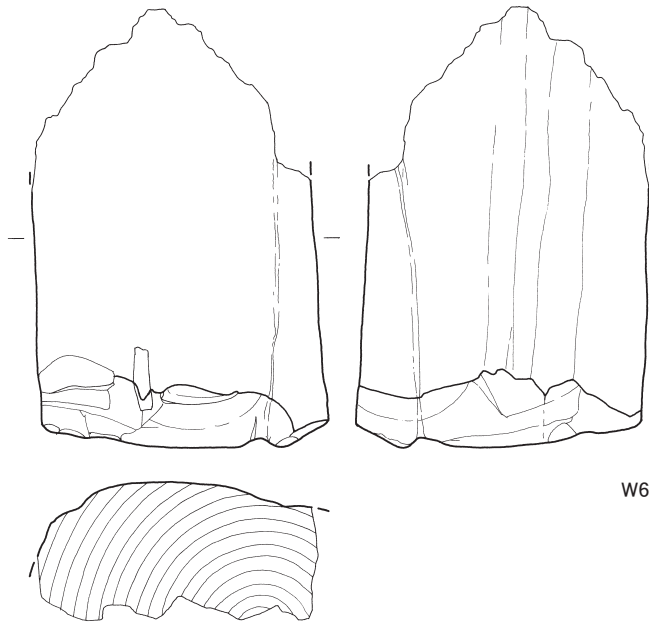
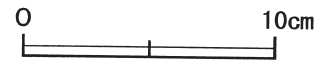
70



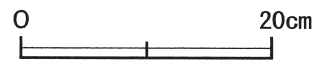
71



Q22



W6



第32図 第6号住居跡出土遺物実測図(2)

第6号住居跡出土遺物観察表（第31・32図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
64	土師器	器台	-	(6.1)	[16.0]	長石・赤色粒子・礫	にぶい橙	普通	脚部上部3孔・下部3孔 内外面ヘラ磨き	貯蔵穴内	30% PL24
62	土師器	小形鉢	8.7	6.9	1.8	長石・石英・雲母・白色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ磨き 内面ヘラ削り	貯蔵穴内	95% PL23
63	土師器	小形鉢	-	(5.4)	2.4	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ磨き	貯蔵穴内	80% PL23
65	土師器	壺	[19.8]	(2.7)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部折返し 体部外面ハケ目調整 内面横ナデ	貯蔵穴内	5%
66	土師器	壺	[22.6]	(5.6)	-	長石・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	口縁部折返し 内・外面ナデ 輪積痕	P3上層	5%
67	土師器	甕	[19.0]	(3.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部端部ナデ 口縁部内・外面ハケ目調整	西部床面	5%
68	土師器	甕	[18.4]	-	-	長石・石英・雲母	黒褐・黄褐	普通	口縁部端部面取り 体部外面ハケ目調整 内面ナデ	中央部床面	5% PL37
69	土師器	甕	[16.0]	(5.3)	-	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	口縁部端部ナデ 口縁部内・外面ハケ目調整	北部下層	5%
70	土師器	甕	[15.8]	(6.6)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部端部ナデ 口縁部内・外面ナデ 体部内・外面ハケ目調整	北部下層	5%
71	土師器	甕	-	(3.7)	11.2	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	体部内・外面ハケ目調整 底部ナデ	北東部中層	15%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q22	敲石	13.3	8.9	7.4	1100	安山岩	敲打痕2か所	北部下層	

番号	種別	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W6	建築部材	板材	(34.7)	23.5	(10.8)	(408.0)	ムクロジ	板目 先端部工具痕	貯蔵穴	

第7号住居跡（第33～37図）

位置 調査区南部のE2g7区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

規模と形状 南東コーナー部が調査区域外に延びているため、確認された範囲は、長軸5.68m、短軸5.62mである。平面形は方形と推定され、主軸方向はN-27°-Wである。壁高は26～40cmで、外傾して立ち上がっている。

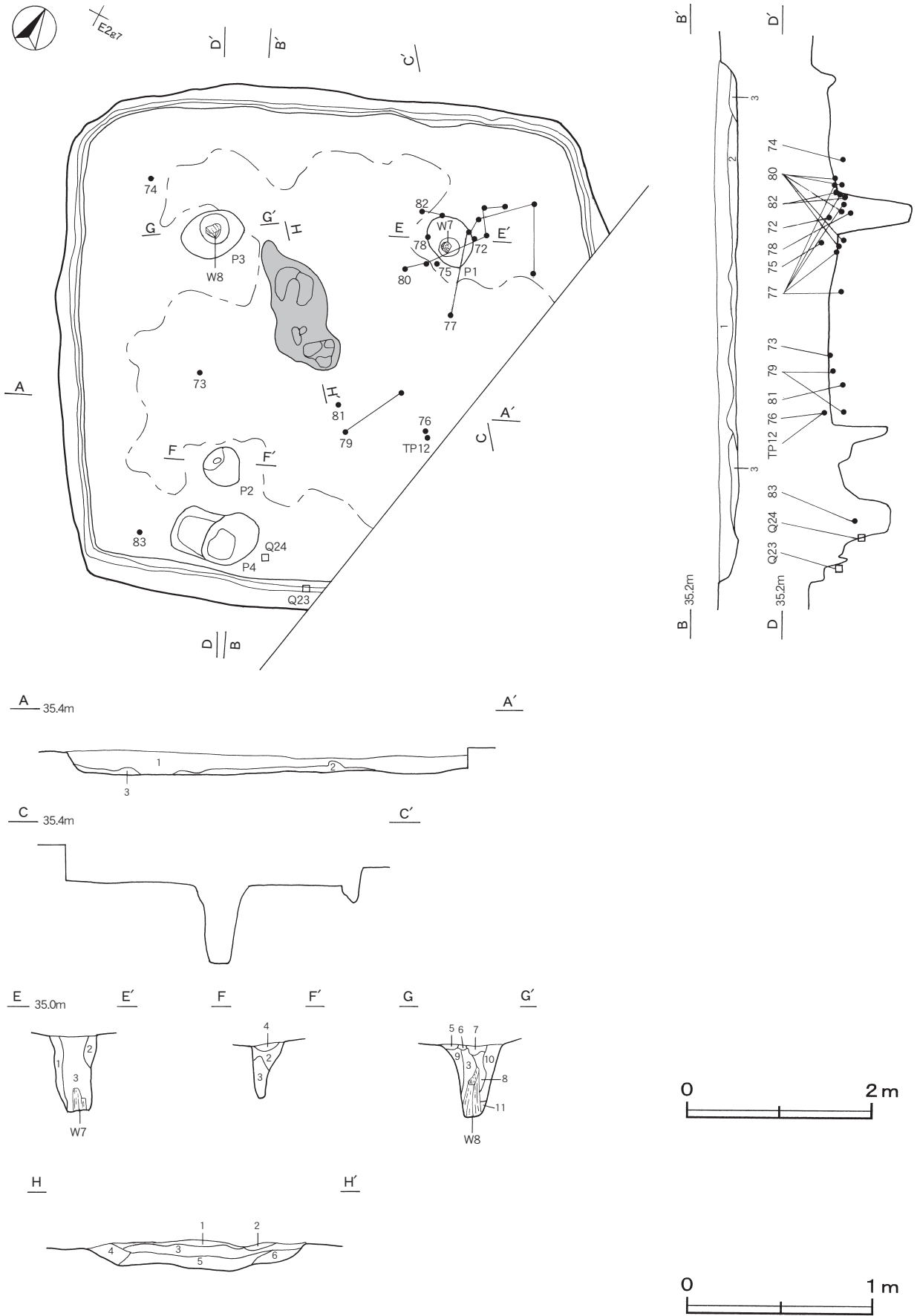
床 ほぼ平坦である。壁溝が全周している。全体に焼土・炭化材の広がりが確認された。

炉 中央部に位置している。長径156cm、短径60cmの楕円形で、20cmほど掘り込んだ地床炉である。炉床は、火熱により赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|----------|
| 1 黒色 | 炭化物・粘土粒子多量、焼土ブロック中量 | 4 黒褐色 | 粘土ブロック中量 |
| 2 赤褐色 | 焼土粒子多量、炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | 粘土粒子少量 |
| 3 黒褐色 | 粘土ブロック少量 | 6 黒褐色 | 粘土粒子中量 |

ピット 4か所。P1～P3は深さ58～80cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P1とP3には、柱材が残存していた。P1の柱材(W7)は、長さ24.8cm、幅12.0cmの角材と推定され、下端が鈍角に加工されている。P3の柱材(W8)は、長さ49.8cm、幅19.6cmのみかん割りされた丸木で、側面は多角形に、下端は鈍角に加工されている。P4は深さ62cmで、南西部に位置しているが、性格は不明である。



第33图 第7号住居跡実測図

ビット土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------|-----------|----------------------|
| 1 暗灰黄色 | 粘土粒子多量 | 7 黒色 | 炭化粒子・砂粒少量, 粘土ブロック微量 |
| 2 褐灰色 | 焼土粒子中量, 炭化粒子微量 | 8 黒褐色 | 炭化粒子・砂粒少量, 粘土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 炭化物・粘土ブロック少量, 砂粒微量 | 9 暗オリーブ褐色 | 粘土粒子多量, 砂粒微量 |
| 4 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化物・粘土ブロック中量 | 10 黒褐色 | 粘土粒子中量, 炭化粒子少量, 砂粒微量 |
| 5 黒褐色 | 炭化粒子・粘土粒子微量 | 11 黒褐色 | 粘土粒子中量, 砂粒微量 |
| 6 灰黄褐色 | 粘土粒子中量, 炭化粒子微量 | | |

覆土 3層に分層される。下層には焼土・炭化物を含み、不規則な堆積状況を示す人為堆積である。上層は、レンズ状に堆積しており、焼失後自然堆積したと考えられる。

土層解説

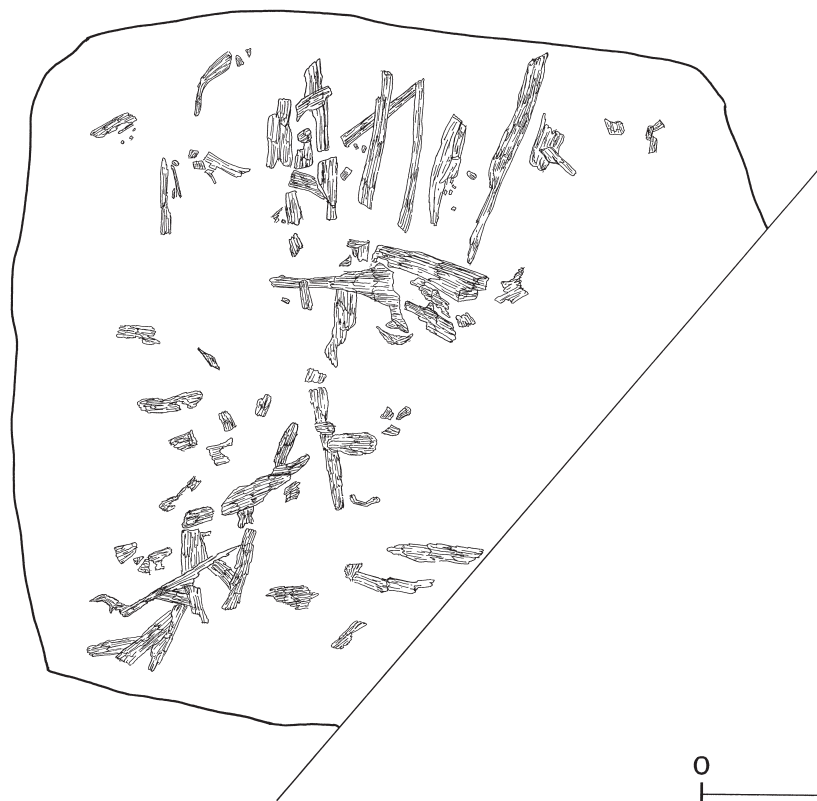
- | | | | |
|---------|-------------------------|-------|----------------|
| 1 オリーブ黒 | 粘土粒子少量, 炭化物微量 | 3 黒褐色 | 粘土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 炭化物中量, 粘土ブロック少量, 焼土粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片181点（埴11, 器台・高坏類43, 鉢1, 壺22, 甕104）, 石器5点（磨石2, 敲石2, 砥石1）, 粘土塊1点, 炭化材が覆土上層から床面にかけて、全域に散在した状態で出土している。炭化材は覆土下層から床面にかけて放射状に出土しており、焼失した住居の構築材と考えられる。72・75・78・82は炭化材の下からほぼ完形で出土しており、焼失前に遺棄されていた可能性が高い。76は南東部の覆土下層から横位で、Q24は南部の床面から出土している。

所見 炭化材・遺物の出土状況から、焼失住居と考えられる。テフラ分析の結果、覆土上層から下層にかけて、4世紀初頭の浅間C軽石に起源する火山ガラスが検出され、特に中層で多く検出されている。時期は、検出された火山ガラスと出土土器から前期前葉と考えられる。



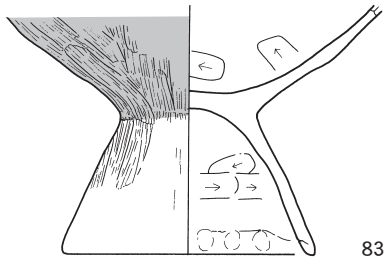
E267



第34図 第7号住居跡遺物出土状況図



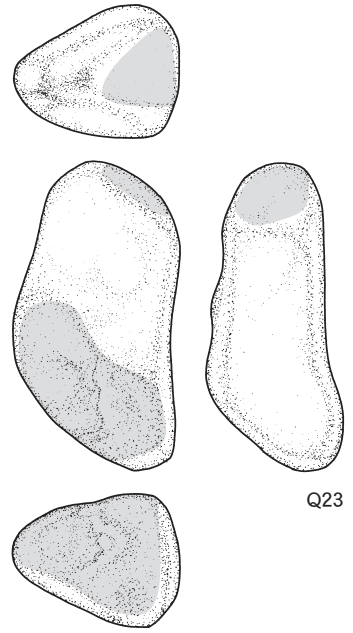
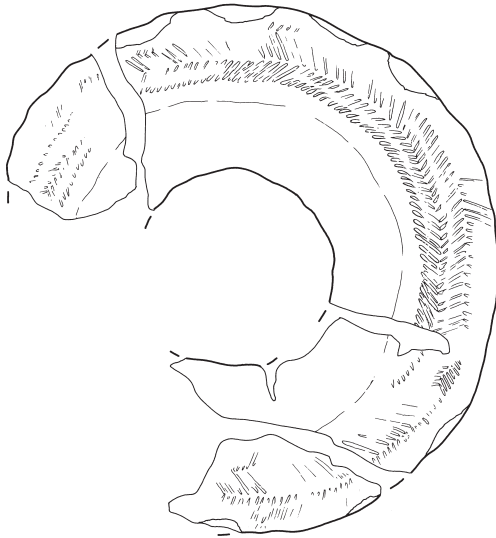
第35图 第7号住居跡出土遺物実測図(1)



83



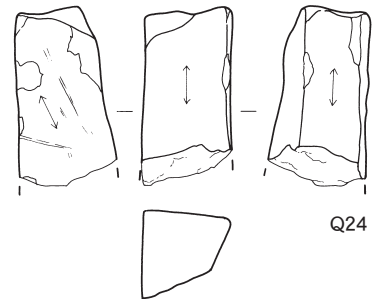
TP12



Q23



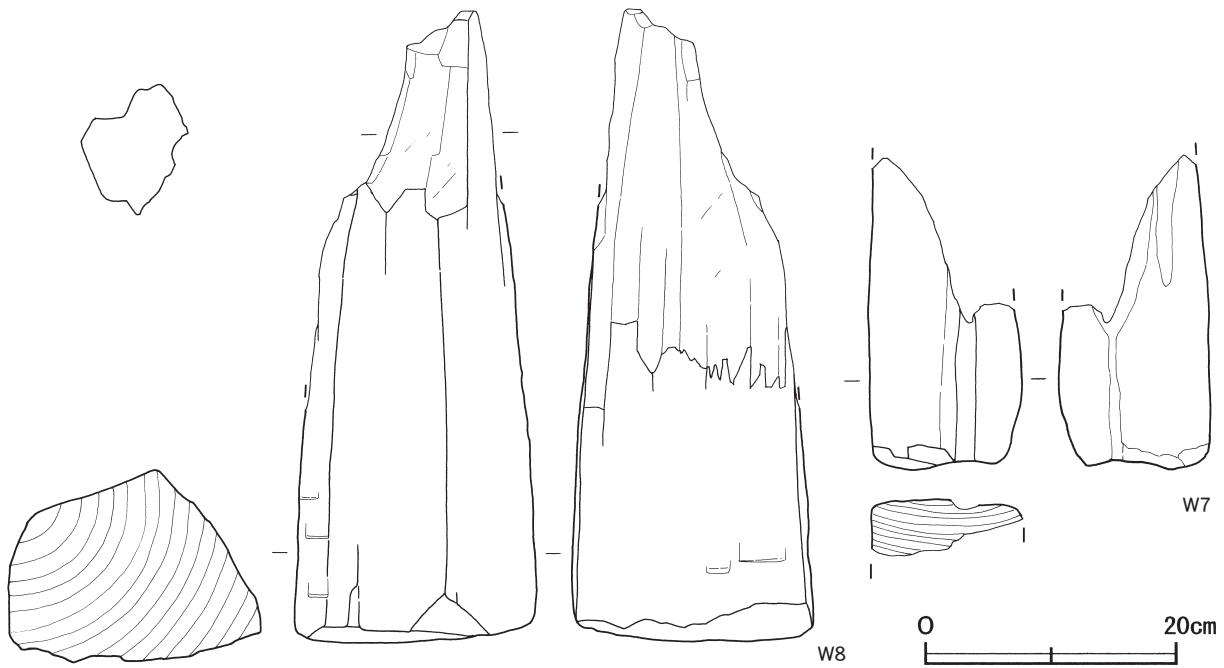
76



Q24



第36图 第7号住居跡出土遺物実測図(2)



第37図 第7号住居跡出土遺物実測図(3)

第7号住居跡出土遺物観察表(第35~37図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
72	土師器	器台	[7.4]	6.3	10.0	長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	器受部1孔 内・外面ヘラ磨き 脚部3孔 外面ヘラ磨き 内面ハケ目調整	北東部下層	80% PL24
73	土師器	器台	-	(6.5)	[10.8]	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	脚部外面ヘラ削り 内面ハケ目調整	中央部床面	40%
74	土師器	鉢	[9.9]	5.5	-	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	口縁部ナデ 体部内・外面ヘラ削り	北西部床面	50%
75	土師器	壺	[8.0]	3.4	4.0	長石	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ磨き一部ヘラ削り 内面下部ハケ目調整 底部ナデ	北東部中層	80% PL24
76	土師器	壺	20.8	(26.9)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部内面綾杉文施文 外面連続押圧 頸部-体部隆帯で区画 体部外面中央部に綾杉文を施文した隆帯で区画 区画上半横走文施文後2段の山形文施文 赤彩残存 内面指頭圧痕	南東部下層	40% PL24
77	土師器	小形甕	[18.2]	(15.0)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁端面取り 口縁部内・外面ハケ目調整 体部内・外面ハケ目調整	北東部床面	20%
78	土師器	小形甕	13.1	11.2	4.4	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁端部ナデ 口縁部内・外面横ナデ 体部内・外面ハケ目調整 底部ハケ目調整	P 1 上層	98% PL24
79	土師器	小形甕	14.5	14.5	3.5	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁端部ナデ 口縁部・体部ハケ目調整 底部ナデ	中央部床面	80%
80	土師器	小形甕	12.8	16.3	5.4	長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外面横ナデ 内面ハケ目調整 体部外面ハケ目調整 底部ナデ	北東部床面	90% PL24

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
81	土師器	小形甕	16.2	18.2	4.4	長石・石英	にぶい 褐	普通	体部内・外面ハケ目調整 底部ハケ目調整	中央部床面	90% PL24
82	土師器	台付甕	12.0	14.4	5.7	長石・石英・雲母	にぶい 黄橙	普通	体部内・外面ハケ目調整 脚部外面 工具痕	北東部床面	90% PL24
83	土師器	台付甕	-	(9.9)	10.0	長石・雲母・白色 粒子	にぶい 黄橙	普通	体部外面ハケ目調整 内面へら削り 脚部内面へら削り・指頭圧痕	南西部床面	50%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP12	土師器	壺	石英・雲母	にぶい黄褐	普通	櫛描文施文後2条の円形刺突文施文	南東部下層	PL37

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 23	磨石	12.2	6.5	5.2	505	ザクロ石安山岩	全面に削痕 赤色顔料付着	南部下層	
Q 24	砥石	(7.1)	(3.6)	(4.0)	(133)	砂岩	砥面3か所	南部床面	

番号	種別	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W 7	建築部材	柱材	(24.8)	(12.0)	(4.2)	(456)	コナラ属クスギ節	芯持丸木 先端部工具痕	P 1	
W 8	建築部材	柱材	(49.8)	19.6	16.2	(7020)	コナラ属クスギ節	みかん割 先端部工具痕	P 3	

第8号住居跡（第38～40図）

位置 調査区北部のC2e0区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

規模と形状 長軸6.02m、短軸5.42mの長方形で、主軸方向はN-2°-Eである。壁高は6～12cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が北西コーナーから西壁にかけて周回している。竈周辺から北西コーナーにかけて、焼土・炭化材の広がりが確認された。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで78cm、袖部幅135cmである。袖部は、床面と同じ高さを基部とし、白色粘土で構築されている。火床部は床面を5cmほど掘りくぼめており、火床面はわずかに赤変硬化し、支脚が据えられていた。煙道部は壁外への掘り込みがなく、緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1 黒褐色	焼土粒子・粘土粒子少量	7 黒褐色	焼土ブロック多量、炭化物・粘土ブロック微量
2 黒褐色	焼土ブロック多量、炭化物・粘土ブロック少量	8 黒褐色	炭化物中量、焼土粒子・炭化粒子少量
3 暗褐色	焼土粒子中量、炭化粒子少量、粘土ブロック微量	9 赤褐色	焼土粒子多量、炭化粒子微量
4 暗褐色	焼土ブロック中量、粘土粒子少量、炭化粒子微量	10 黒褐色	焼土ブロック少量
5 黒褐色	炭化粒子中量、焼土ブロック・粘土ブロック微量	11 褐灰色	粘土ブロック中量、焼土粒子微量
6 黒褐色	焼土ブロック中量、炭化物・粘土ブロック少量		

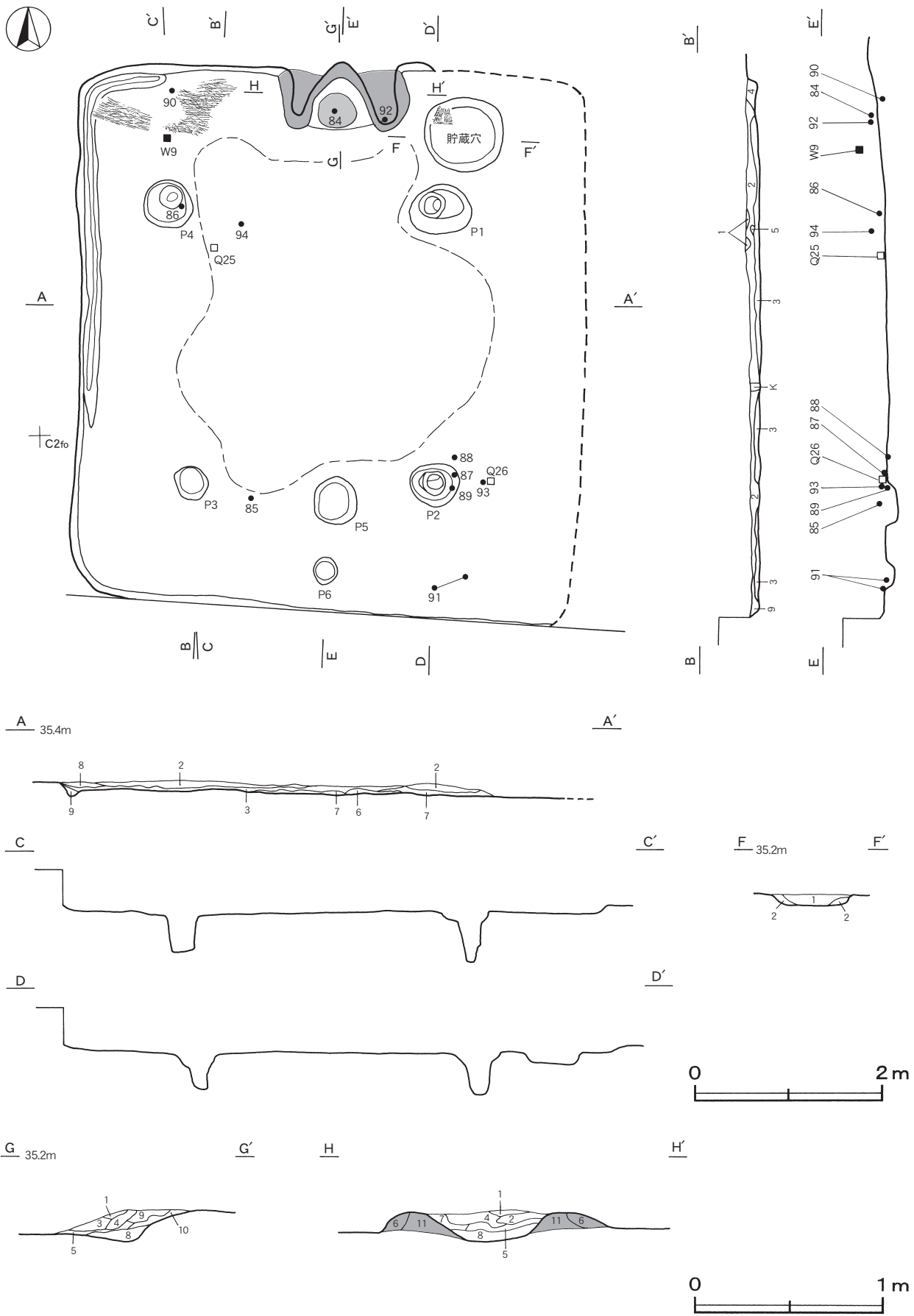
ピット 6か所。P1～P4は深さ38～56cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P5・P6は深さ10cm・12cmで、南壁寄りのほぼ中央部に位置し、ともに入出口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 北東コーナー部に位置している。径85cmほどの円形で、深さは12cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 黒褐色	粘土ブロック微量	2 灰黄色	粘土粒子中量、炭化粒子微量
-------	----------	-------	---------------

覆土 9層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示す人為堆積である。



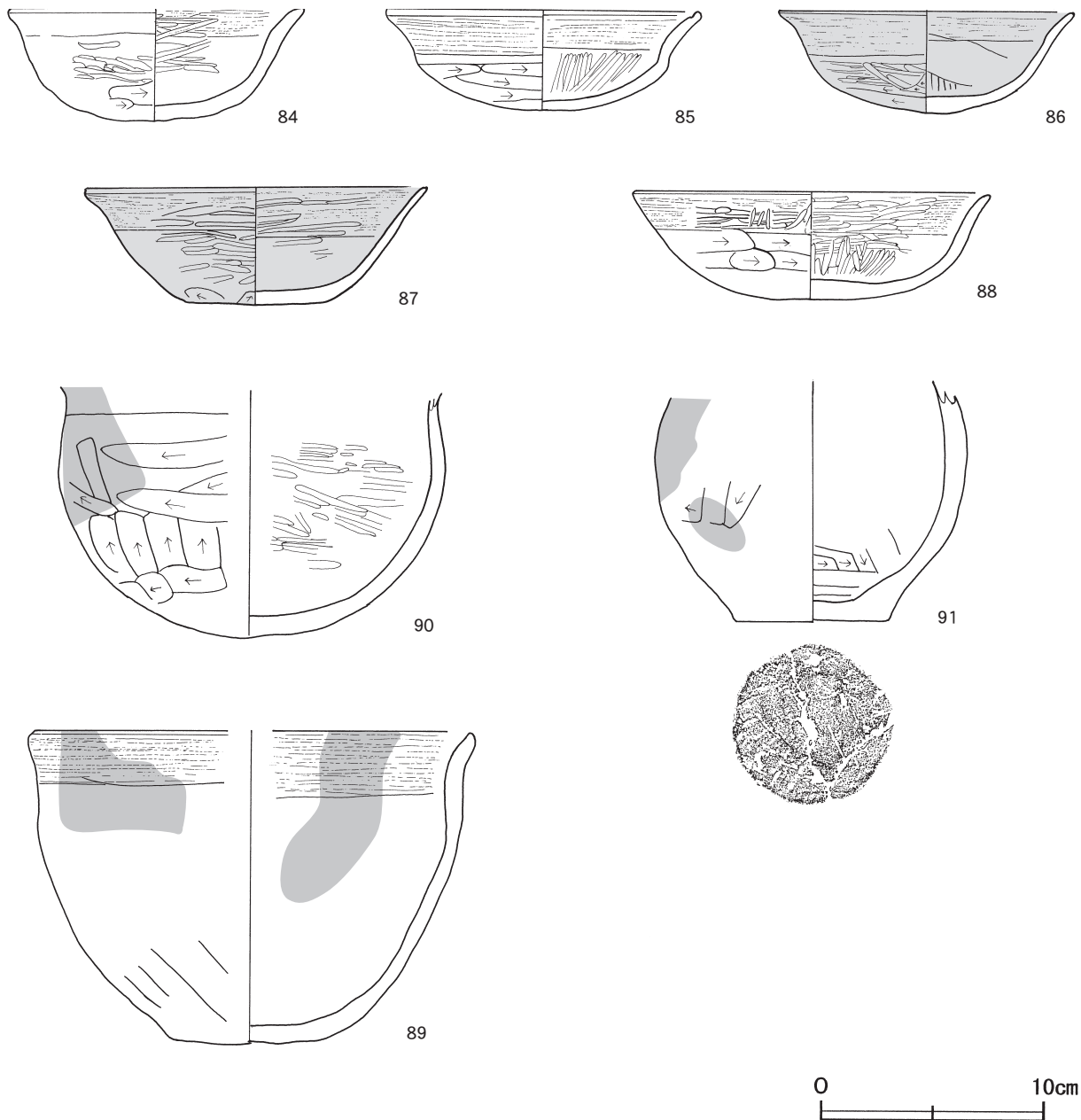
第38图 第8号住居迹实测图

土層解説

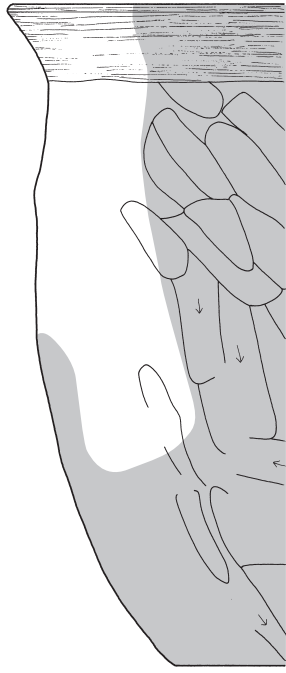
- | | | | |
|---------|----------------------------|---------|------------------------|
| 1 黒 褐 色 | 粘土ブロック・炭化粒子中量, 白色粒子少量 | 6 黒 褐 色 | 粘土粒子中量, 炭化粒子・白色粒子微量 |
| 2 黒 色 | 炭化粒子・粘土粒子・白色粒子中量, 焼土ブロック少量 | 7 黒 色 | 粘土粒子中量, 炭化粒子少量, 白色粒子微量 |
| 3 黒 褐 色 | 粘土粒子中量, 炭化粒子少量, 白色粒子微量 | 8 黒 褐 色 | 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 4 黒 褐 色 | 粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量, 白色粒子少量 | 9 黒 褐 色 | 粘土粒子中量, 白色粒子微量 |
| 5 黒 褐 色 | 粘土粒子多量, 白色粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片356点(坏74, 高坏3, 甕276, 甌3), 石器2点(磨石, 砥石), 種子1, 炭化材, 茅材が, 北西部と南部を中心とした覆土上層から床面にかけて出土している。坏74点中, 25点が赤彩されている。84は竈の支脚の上から逆位で, 92は竈の東袖部の上部から逆位で出土している。87~89・93・Q26はP2付近の覆土下層及び床面から集中して出土している。W9は, 北東コーナー部から出土しており, 周辺から茅材も出土していることから, 住居の構築材であった可能性が考えられる。

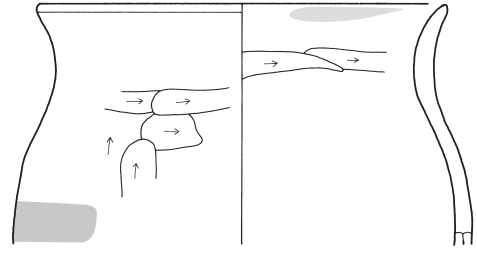
所見 時期は, 出土土器から6世紀初頭と考えられる。



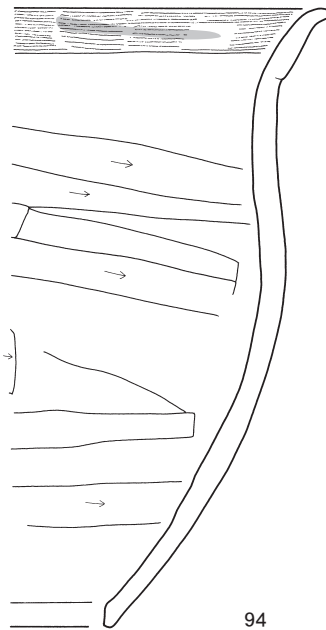
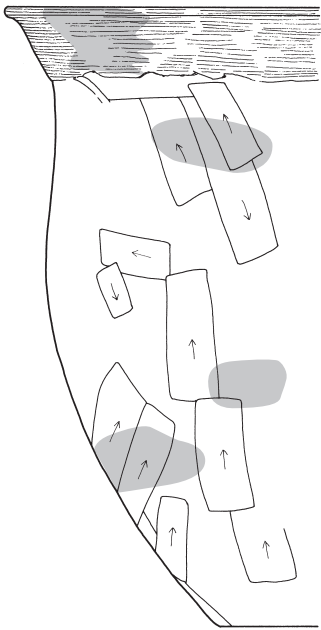
第39図 第8号住居跡出土遺物実測図(1)



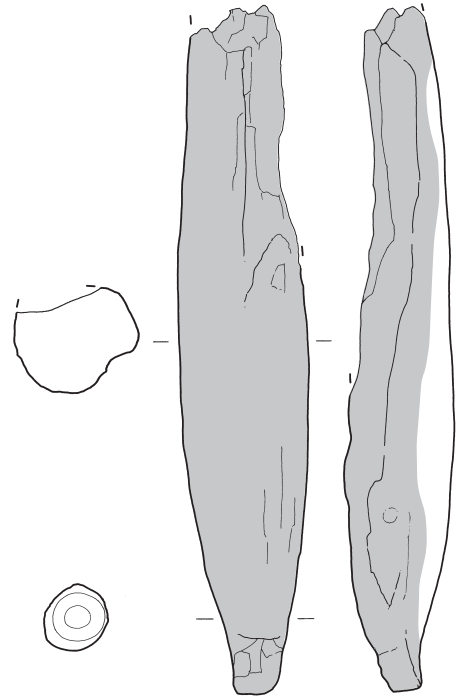
93



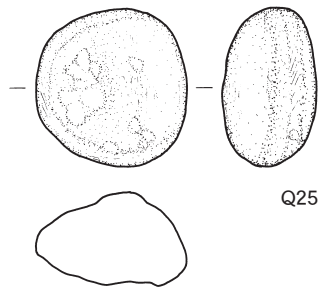
92



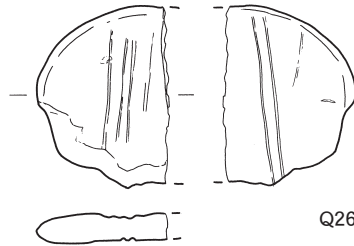
94



W9



Q25



Q26



第40图 第8号住居跡出土遺物実測図(2)

第8号住居跡出土遺物観察表（第39・40図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
84	土師器	坏	13.1	5.0	-	長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部外面ナデ 体部内・外面ヘラ磨き 底部外面下端ヘラ削り	竈火床部内	90% PL26
85	土師器	坏	14.0	4.5	-	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	南部下層	90% PL26
86	土師器	坏	13.3	4.5	-	長石・白色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き 内面ヘラ磨き後ナデ	北西部下層	75% PL26
87	土師器	坏	15.2	5.2	-	長石	灰黄褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部内・外面ヘラ磨き 体部下端ヘラ削り	南東部床面	80% PL26
88	土師器	坏	15.8	4.8	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り後磨き 内面ヘラ磨き	南東部床面	70%
89	土師器	鉢	[19.6]	13.9	6.6	長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部内・外面ナデ	南東部床面	35%
90	土師器	鉢	-	(11.0)	-	長石・石英・白色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	北西部床面	35%
91	土師器	甕	-	(10.2)	6.8	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラ削り・ナデ	南部床面	40%
92	土師器	甌	16.0	(9.5)	-	長石・石英・白色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面ナデ 体部内・外面ヘラ削り	竈袖部	15%
93	土師器	甌	[23.4]	26.2	[10.6]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面工具痕・輪積痕	南東部下層	30%
94	土師器	甌	[26.8]	24.5	[9.8]	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部内・外面ヘラ削り	中央部下層	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q25	磨石	6.2	6.0	3.7	175	安山岩	全面に削痕	中央部床面	
Q26	砥石	7.1	5.3	1.2	46	玄武岩	砥面2か所 刃物痕有	南東部床面	

番号	種別	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W9	建築部材	垂木	(27.3)	5.2	(4.2)	(273.0)	ヒノキ	芯持丸木 反面炭化	北西部下層	

第9号住居跡（第41図）

位置 調査区北部のC2e3区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

重複関係 第1号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南部が調査区域外に延びているため、確認された範囲は、長軸5.60m、短軸3.48mである。平面形は方形または長方形と推定され、主軸方向はN-10°-Wである。壁高は6~18cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、西部に焼土と炭化材が広がる範囲が確認された。壁溝が東壁際を除いて周回している。

ピット 深さ36cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。

覆土 12層に分層される。焼土や炭化物を含み、ブロック状の不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

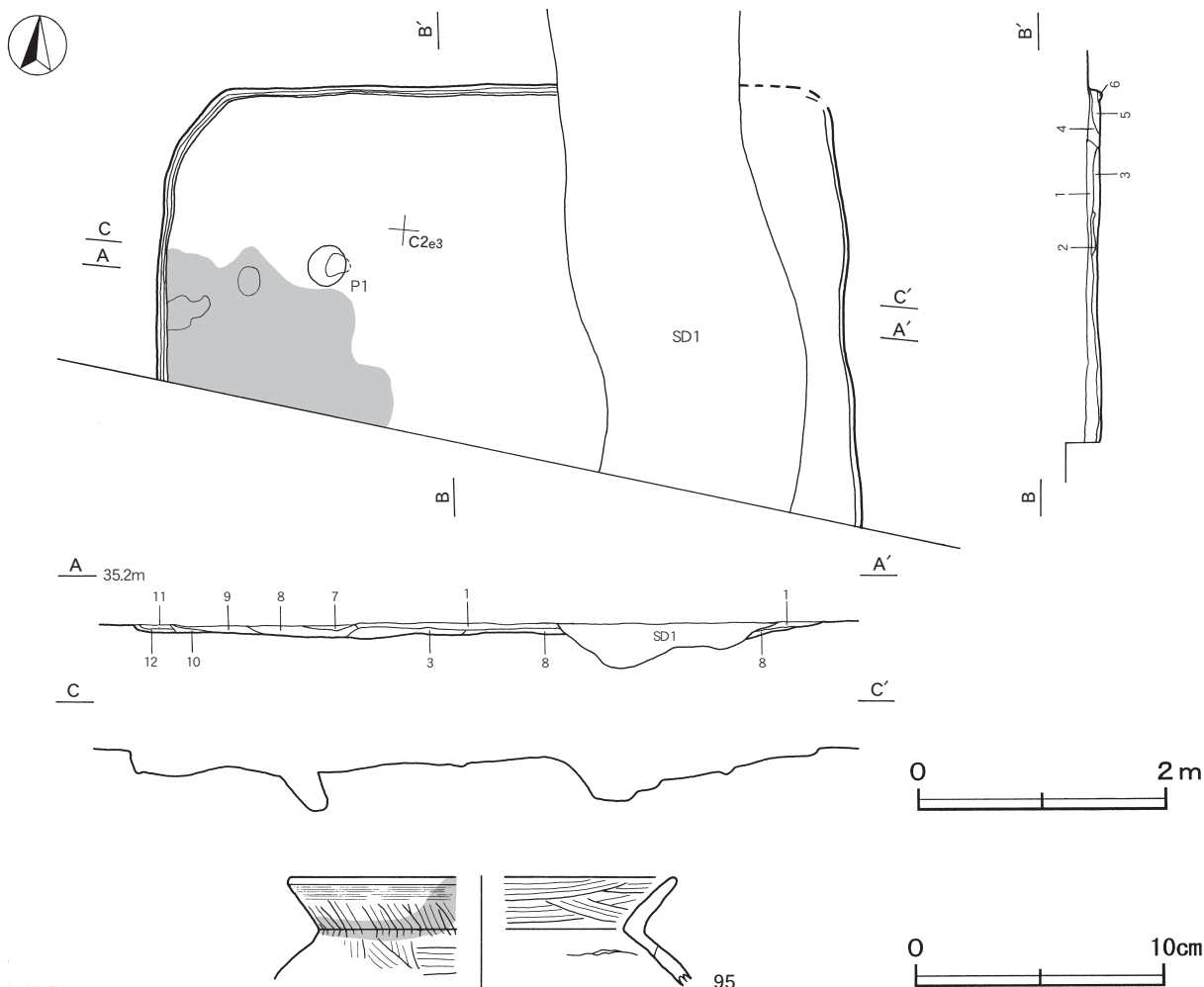
- | | |
|------------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色 粘土ブロック中量, 炭化粒子微量 | 5 黒褐色 粘土ブロック中量, 炭化物少量 |
| 2 黒褐色 炭化粒子・粘土粒子中量 | 6 にぶい黄褐色 粘土粒子中量, 炭化粒子少量 |
| 3 黒褐色 粘土ブロック中量, 炭化粒子少量 | 7 黒褐色 粘土ブロック少量 |
| 4 黒褐色 粘土ブロック中量 | 8 黒褐色 炭化物・粘土ブロック中量 |

9 黒色 炭化物少量, 粘土ブロック微量
 10 黒褐色 焼土ブロック・炭化物・粘土ブロック中量

11 黒色 粘土ブロック中量, 焼土粒子少量
 12 黒褐色 焼土ブロック・炭化物・粘土ブロック中量

遺物出土状況 土師器片43点(坏6, 甕37), 石器1点(剥片)が全域に散在した状態で出土しているが, ほとんどが細片である。95は北部の覆土中から出土している。

所見 時期は, 出土土器から前期前葉と考えられる。



第41図 第9号住居跡・出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物観察表 (第41図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	特徴	出土位置	備考
95	土師器	甕	[15.4]	(4.3)	-	長石・赤色粒子	にぶい 橙	普通	口縁端部ナデ 面ハケ目調整	口縁部・体内内・外 輪積痕	覆土中	5%

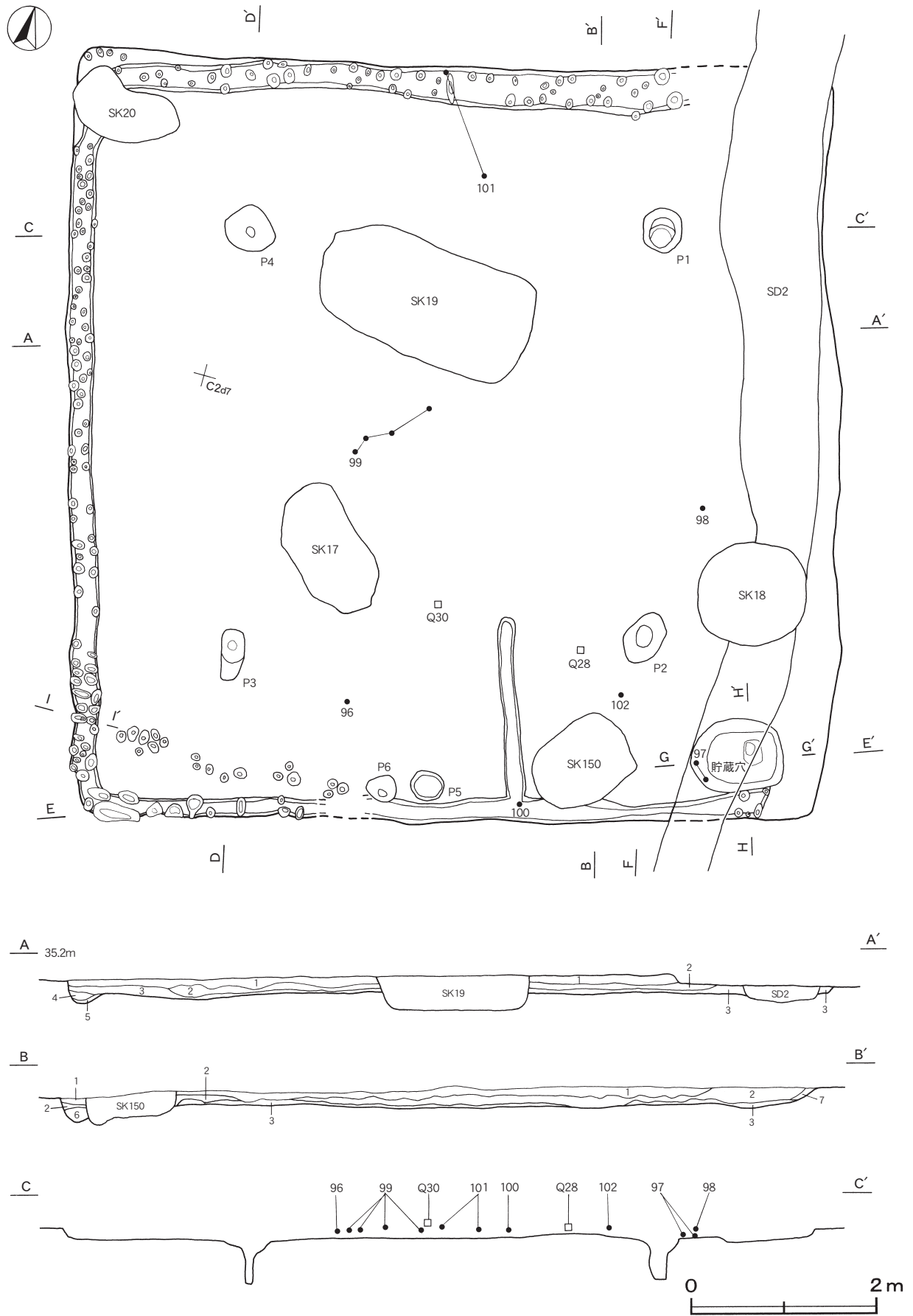
第10号住居跡 (第42~45図)

位置 調査区北部の C 2 c7区で, 標高35.0m ほどの平坦部に位置している。

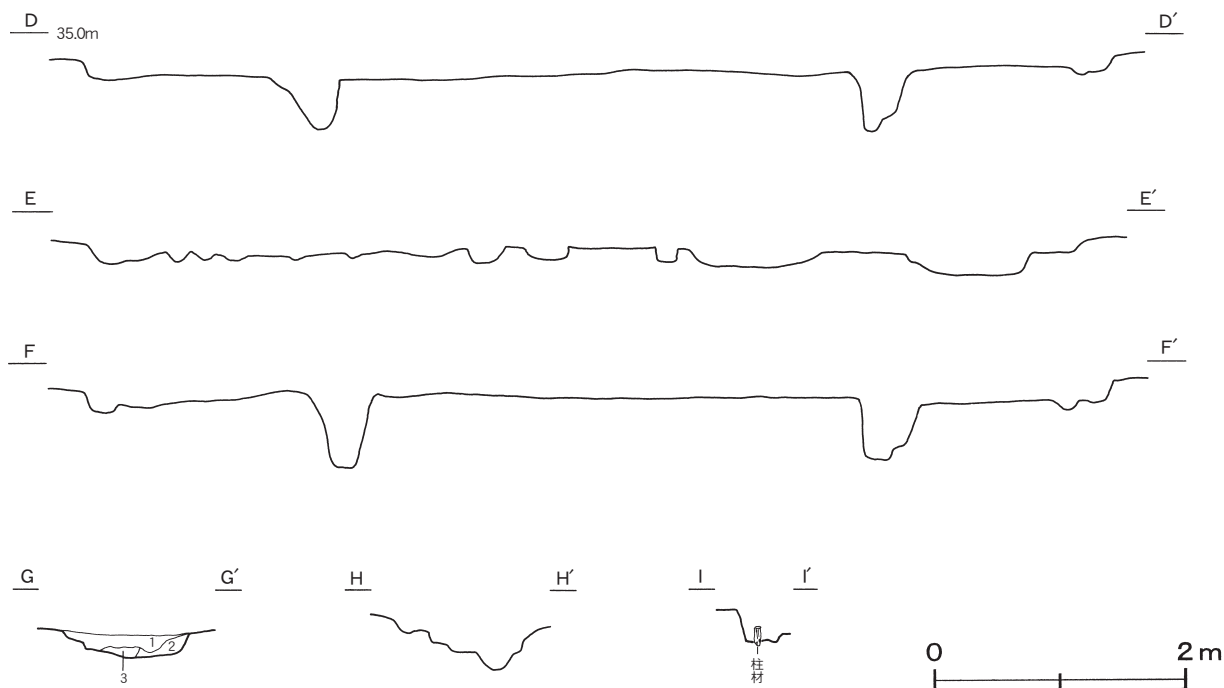
重複関係 第2号溝, 第17~20・150号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸8.18m, 短軸7.56m ほどの方形で, 主軸方向は N - 19° - W である。壁高は10~21cm で, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。間仕切り溝が, 南壁のほぼ中央部に1条確認された。壁溝が全周している。



第42図 第10号住居跡実測図(1)



第43図 第10号住居跡実測図（2）

ピット 171か所。P1～P4は深さ42～58cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5・P6は深さ10cm・12cmで、南壁寄りのほぼ中央部に位置し、ともに入出口施設に伴うピットと考えられる。P7～P171は、壁溝内とその周辺に位置し、壁に沿って周回する円形及び楕円形の小ピット群で、壁柱穴と考えられる。南西部の壁溝内には、柱材が1か所残存していた。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。長径100cm、短径78cmほどの楕円形で、深さは18cmである。底面は凹凸で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|--------------------------|----------------|
| 1 黒褐色 粘土ブロック・鉄分少量、炭化粒子微量 | 3 黒褐色 粘土ブロック微量 |
| 2 灰黄褐色 粘土ブロック中量、鉄分微量 | |

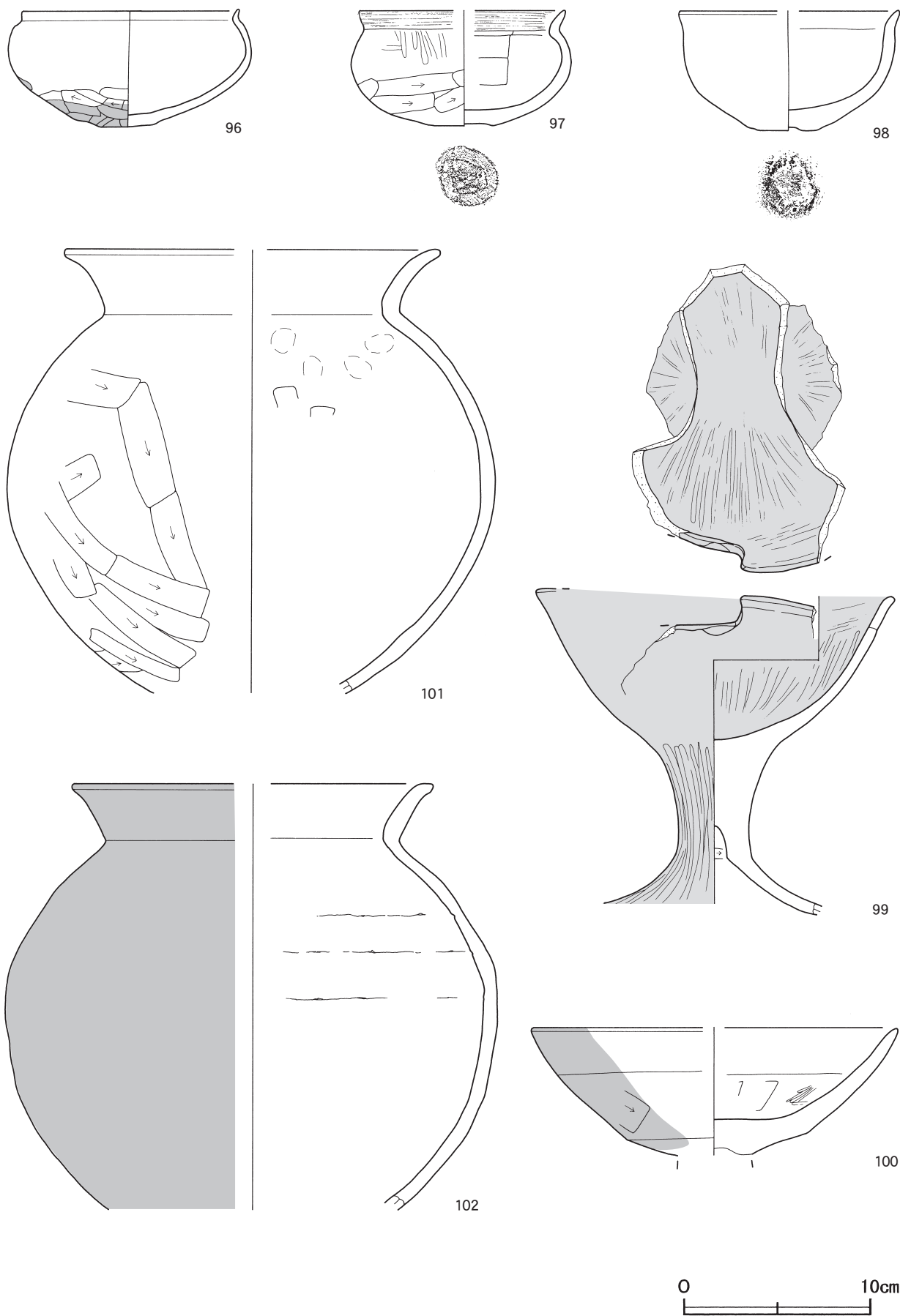
覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

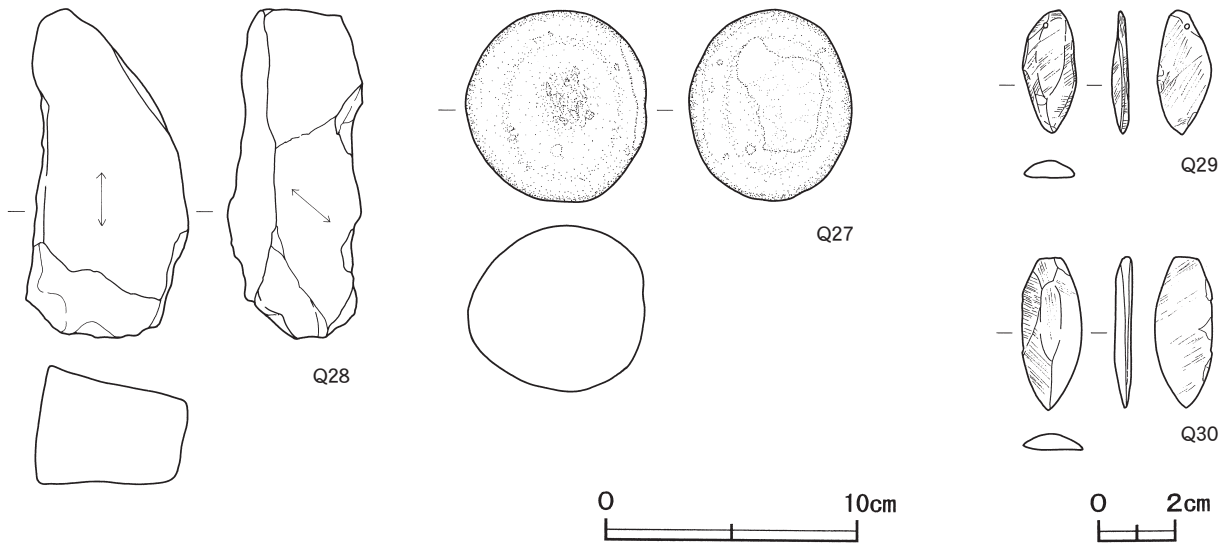
- | | |
|---------------------|--------------|
| 1 赤黒色 白色粒子少量、粘土粒子微量 | 5 黒褐色 粘土粒子少量 |
| 2 黒褐色 粘土粒子少量、白色粒子微量 | 6 褐灰色 粘土粒子少量 |
| 3 黒褐色 粘土粒子多量 | 7 黒褐色 粘土粒子微量 |
| 4 黒褐色 粘土ブロック少量 | |

遺物出土状況 土師器片651点（坏140，碗17，高坏62，甕432），石器4点（磨石2，敲石，砥石），石製模造品2点（剣形），粘土塊3点，炭化材が覆土上層から床面にかけて、全域に散在した状態で出土している。坏140点中、101点が赤彩されている。また、流れ込んだ縄文土器片33点、須恵器片3点、陶器片1点も出土している。99は中央部の覆土下層から出土している。101は北部の覆土下層から横位、102は南東部の覆土下層から横位でそれぞれ出土している。Q30は中央部やや南寄りの覆土中層から出土している。

所見 テフラ分析の結果、覆土上層から中層にかけて、6世紀初頭の榛名二ツ岳渋川テフラが検出されている。時期は、検出された火山灰と出土土器から5世紀後葉と考えられる。



第44图 第10号住居跡出土遺物実測図（1）



第45図 第10号住居跡出土遺物実測図（2）

第10号住居跡出土遺物観察表（第44・45図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
96	土師器	椀	11.6	6.3	3.0	長石・雲母・赤色 粒子	にぶい 黄橙	普通	口縁部・体部内・外面ナデ 体部外 面ヘラ削り	南部下層	50%
97	土師器	椀	[10.4]	6.2	3.2	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面ヘ ラ磨き・削り 内面ナデ	貯蔵穴内	70% PL26
98	土師器	椀	[11.6]	6.4	3.0	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	体部内・外面磨減の為調整不明 底 部ナデ	東部下層	40%
99	土師器	異形高坏	[19.3]	(17.4)	-	長石・石英・赤色 粒子	明赤褐	普通	口縁部ヘラ状工具による抉り部削 出 坏部内面ヘラ磨き 脚部外面ヘ ラ磨き 内面ヘラ削り	中央部下層	35% PL27
100	土師器	高坏	[19.4]	(6.9)	-	長石	にぶい 褐	普通	口縁部ナデ 体部外面ヘラ削り 内 面ヘラ磨き・工具痕	南東部下層	40%
101	土師器	甕	[19.6]	(24.0)	-	長石・石英・雲母	にぶい 褐	普通	口縁部内・外面ナデ 体部外面ヘラ 削り 内面指頭圧痕・工具痕	北部下層	30%
102	土師器	甕	[19.2]	(23.1)	-	長石・石英	にぶい 橙	普通	体部内・外面ナデ 内面輪積痕	南東部下層	30%

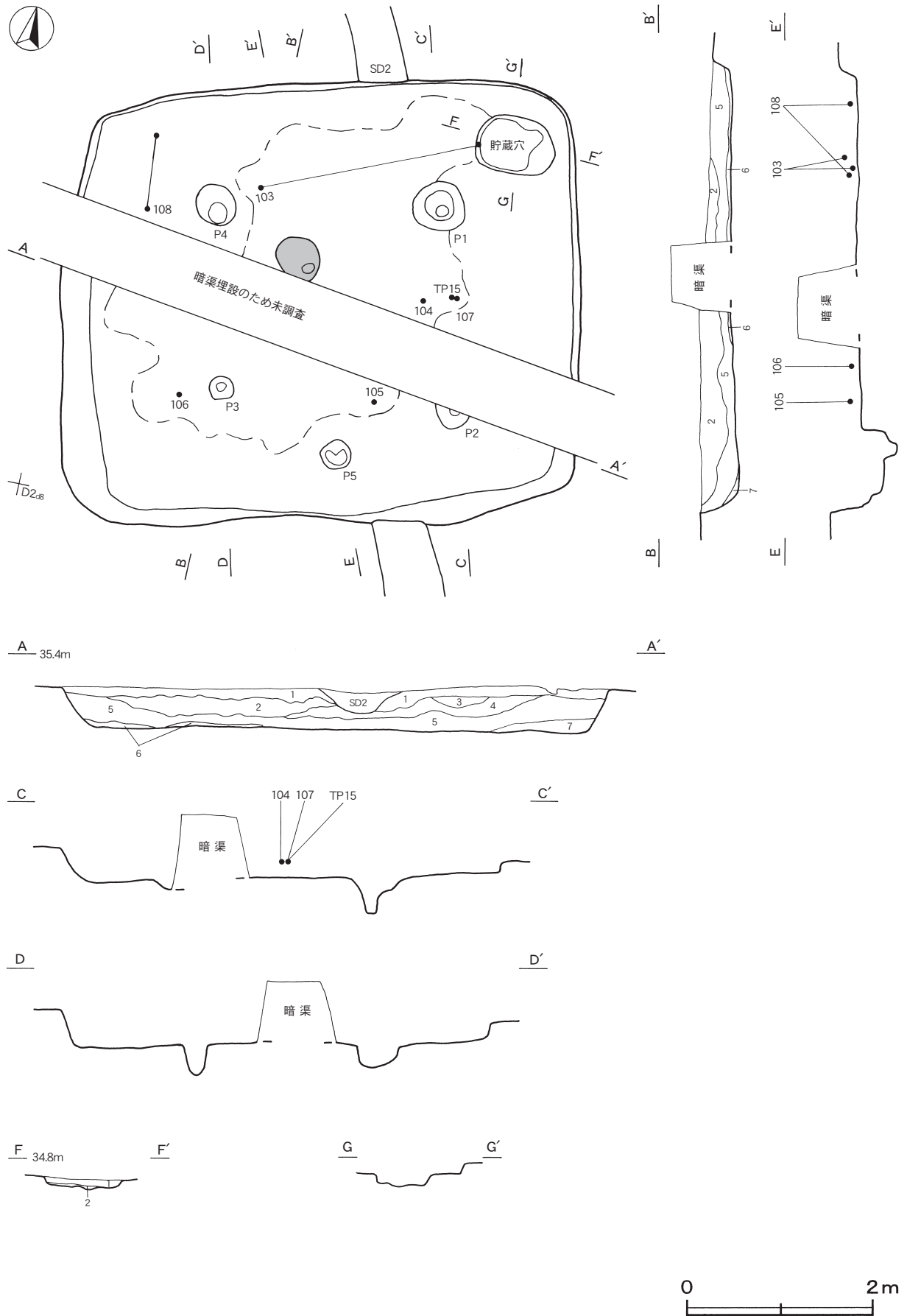
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q27	磨石	7.5	7.1	6.9	444	安山岩	全面に削痕	覆土中	
Q28	砥石	11.0	6.5	5.3	499	珪岩	砥面2カ所	南部下層	
Q29	剣形品	3.3	1.5	0.5	2.40	滑石	裏表両面とも丁寧な研磨 切先より鑄が通る 断面台形 茎部に小孔穿孔	覆土中	PL38
Q30	剣形品	4.0	1.5	0.4	3.78	滑石	裏表両面とも丁寧な研磨 切先より鑄が通る 断面台形	中央部中層	PL38

第11号住居跡（第46・47図）

位置 調査区南部のD2c8区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

重複関係 第2号溝に掘り込まれている。

規模と形状 中央部が東西方向に攪乱を受けている。長軸5.66m、短軸4.78mの長方形で、主軸方向はN-13°-Wである。壁高は10~44cmで、外傾して立ち上がっている。



第46図 第11号住居跡実測図

床 ほぼ平坦である。炉を中心に中央部が踏み固められている。

炉 中央部に位置している。径50cmほどの円形で、掘り込みはなく直接に床面を炉床とした地床炉である。炉床は、火熱により赤変硬化している。

ピット 5か所。P1～P4は深さが12～44cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ34cmで、南壁寄りのほぼ中央部に位置し、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 北東コーナー部に位置している。長径90cm、短径60cmほどの楕円形で、深さは14cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック少量, 炭化粒子微量 2 黒褐色 粘土粒子中量

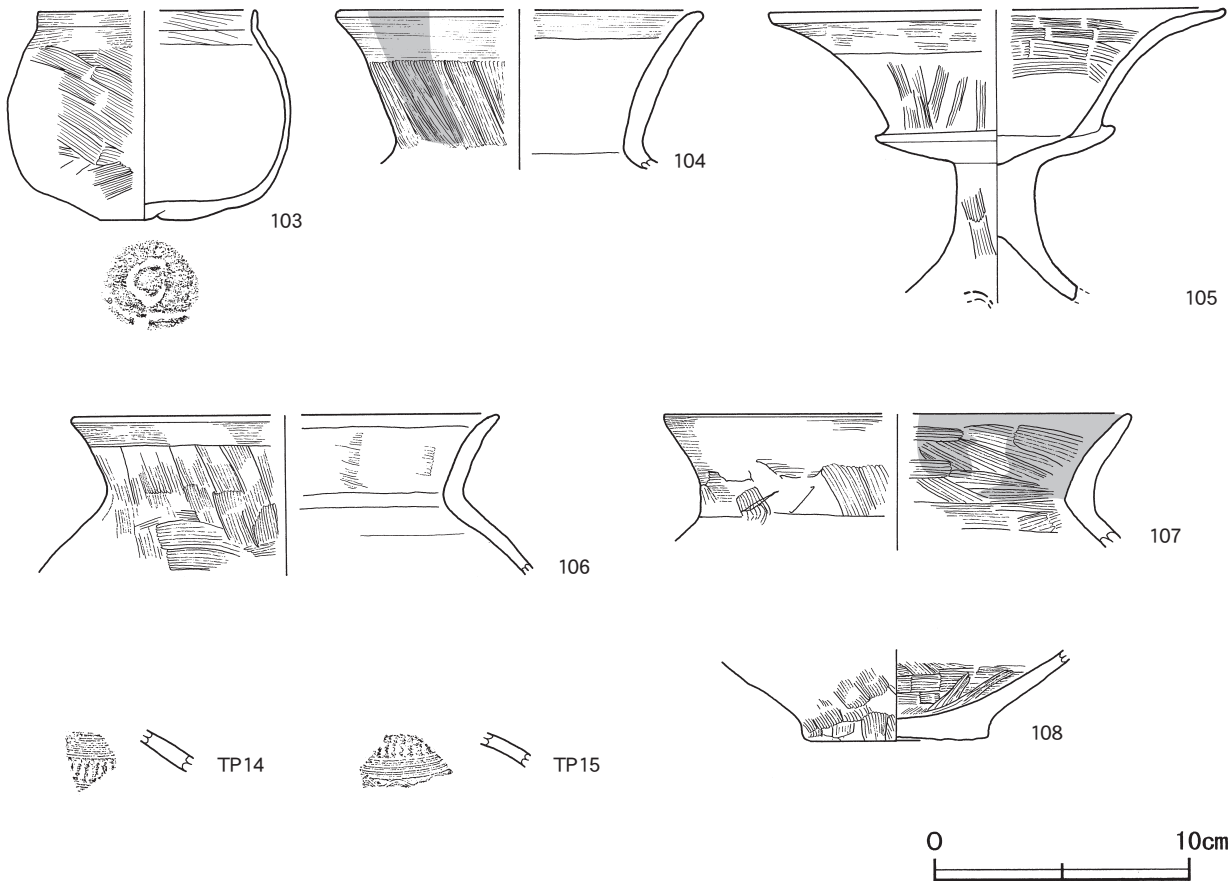
覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- 1 黒色 白色粒子中量, 炭化物・粘土粒子微量 5 黒色 粘土粒子少量
2 黒褐色 粘土ブロック・炭化粒子・白色粒子微量 6 黒褐色 粘土粒子中量
3 黒色 白色粒子中量, 粘土粒子微量 7 黒褐色 粘土ブロック少量, 炭化粒子微量
4 黒褐色 粘土粒子少量, 炭化粒子・白色粒子微量

遺物出土状況 土師器片494点(椀21, 埴13, 器台2, 高坏44, 甕414), 石器1点(磨石)が覆土上層から下層にかけて、全域に散在した状態で出土している。また、流れ込んだ縄文土器片7点, 磁器2点も出土している。103は炉の北側と貯蔵穴内から出土した破片が接合したものである。105は中央部やや南寄りの覆土下層, 106はP3のやや西寄り覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から前期前葉と考えられる。



第47図 第11号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡出土遺物観察表（第47図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
105	土師器	器台	[17.8]	(11.6)	-	長石・石英・赤色 粒子	にぶい 黄橙	普通	器受部内・外面ハケ目調整 脚部 内・外面ハケ目調整 脚部孔有	中央部下層	70% PL24
103	土師器	鉢	[8.6]	8.3	3.4	長石・石英・赤色 粒子	にぶい 黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面ハ ケ目調整 底部ナデ	北部下層 貯蔵穴内	80% PL24
104	土師器	壺	[14.0]	(6.3)	-	長石・石英	にぶい 橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 頸部外面ハ ケ目調整	東部下層	10%
106	土師器	甕	[16.6]	(6.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい 黄橙	普通	口縁端部ナデ 口縁部外面ハケ目調 整後横ナデ 内面ハケ目調整	南西部下層	5%
107	土師器	甕	[18.2]	(5.3)	-	長石・石英・礫	橙	普通	口縁部外面ハケ目調整後横ナデ 内 面ハケ目調整	東部下層	5%
108	土師器	甕	-	(3.6)	7.0	長石・石英	明赤褐	普通	体部内・外面ハケ目調整 底部磨滅	北西部下層	5%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP14	土師器	壺	石英	にぶい橙	普通	櫛描横走文施文後連続刺突文施文	覆土中	
TP15	土師器	壺	長石	にぶい橙	普通	櫛描横走文施文後波状文・連続刺突文施文	中央部下層	PL37

第12号住居跡（第48～50図）

位置 調査区南部のD2b6区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

規模と形状 南部が東西方向に攪乱を受けている。長軸5.15m、短軸4.84mの方形で、主軸方向はN-12°-Eである。壁高は6～16cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで110cm、袖部幅87cmである。袖部は床面と同じ高さを基部とし、白色粘土で構築されている。火床部は床面を4cmほど楕円形に掘りくぼめており、火床面は火熱により赤変硬化している。煙道部は壁外への掘り込みがなく、緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|-----------------------------------|------------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子・白色粒子中量, 粘土粒子少量, 炭化粒子微量 | 3 黒褐色 焼土ブロック中量, 炭化粒子少量 |
| 2 黒色 焼土粒子中量, 粘土粒子・白色粒子少量 | 4 黒褐色 焼土粒子少量 |

ピット 8か所。P1～P4は深さ33～56cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ38cmで、南壁寄りのほぼ中央部に位置し、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ20cmでP4の西側に、P7・P8は深さ8～9cmで竈の西側に位置しているが、性格はそれぞれ不明である。

覆土 13層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

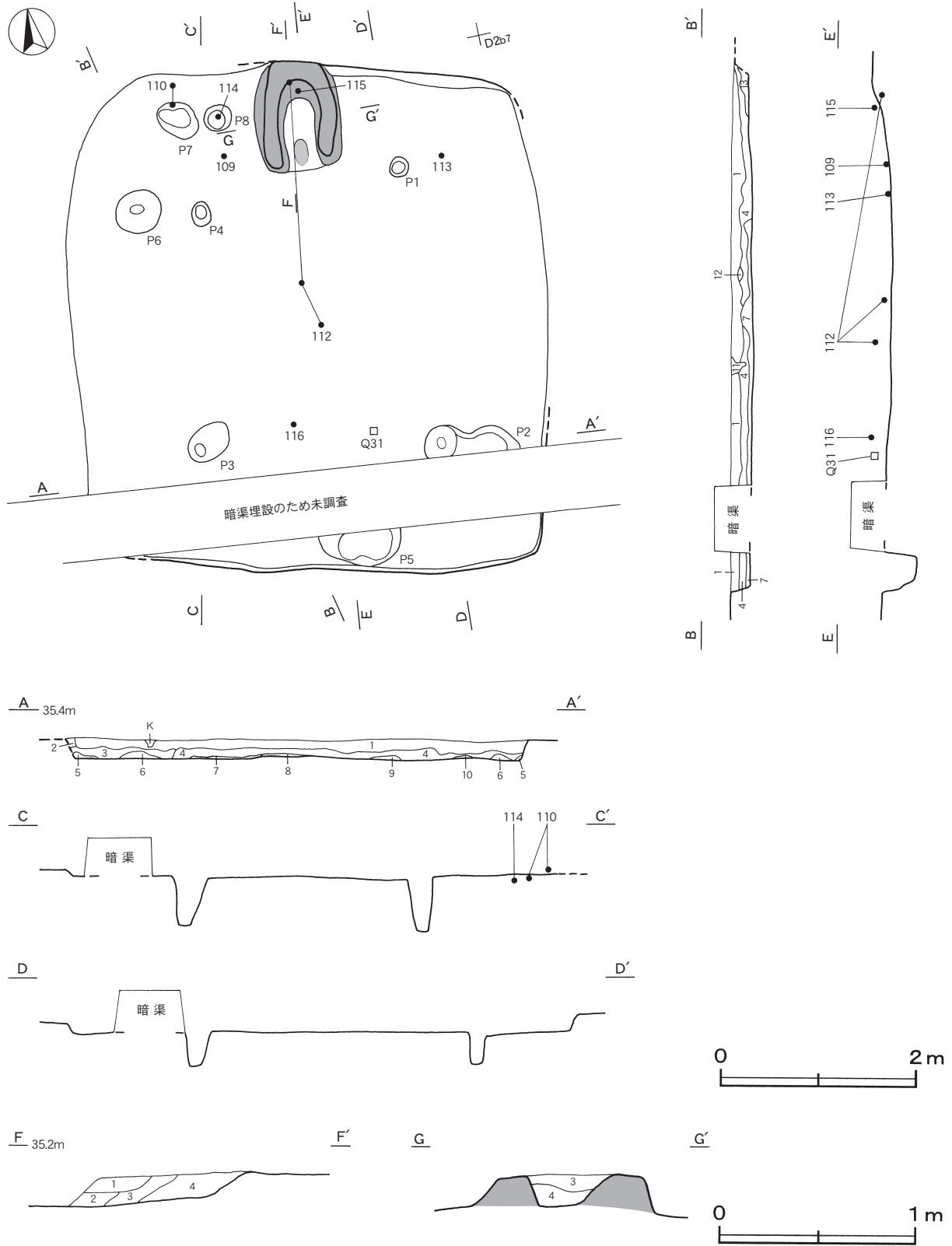
土層解説

- | | |
|--|------------------------------|
| 1 黒色 粘土ブロック・白色粒子中量, 炭化物少量, 焼土粒子微量 | 8 にぶい黄褐色 粘土粒子多量, 砂粒少量 |
| 2 黒褐色 炭化粒子中量, 粘土粒子・白色粒子少量 | 9 黒褐色 粘土ブロック多量 |
| 3 黒褐色 粘土ブロック中量, 炭化粒子少量, 白色粒子微量 | 10 にぶい黄褐色 粘土粒子多量 |
| 4 黒色 炭化粒子多量, 粘土ブロック中量, 焼土粒子・白色
粒子微量 | 11 黒褐色 粘土ブロック・炭化粒子中量, 白色粒子少量 |
| 5 褐灰色 粘土ブロック中量, 炭化粒子少量, 白色粒子微量 | 12 褐灰色 粘土粒子多量, 炭化粒子少量 |
| 6 黒色 粘土粒子多量, 炭化粒子微量 | 13 黒褐色 粘土ブロック中量, 炭化粒子少量 |
| 7 黒褐色 粘土ブロック中量, 焼土粒子微量 | |

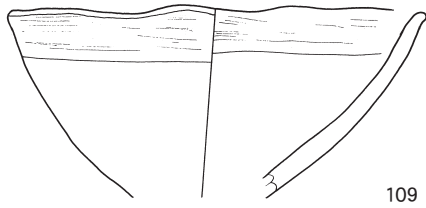
遺物出土状況 土師器片1,907点（坏85, 埴11, 高坏6, 鉢2, 壺1, 甕1,558, 甌244）、石器6点（磨石3, 敲石3）、石製品12点（白玉）が、中央部を中心とした覆土上層から床面にかけて出土している。坏85点中21点

が赤彩されている。115は竈内の火床部から横位で出土している。112は竈の内部と中央部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。113は竈の東側、109は竈の西側床面からそれぞれ出土している。

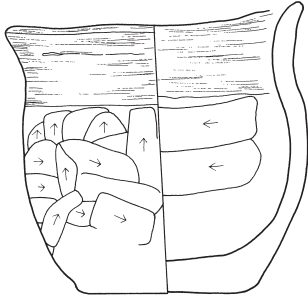
所見 時期は、出土土器から6世紀初頭と考えられる。



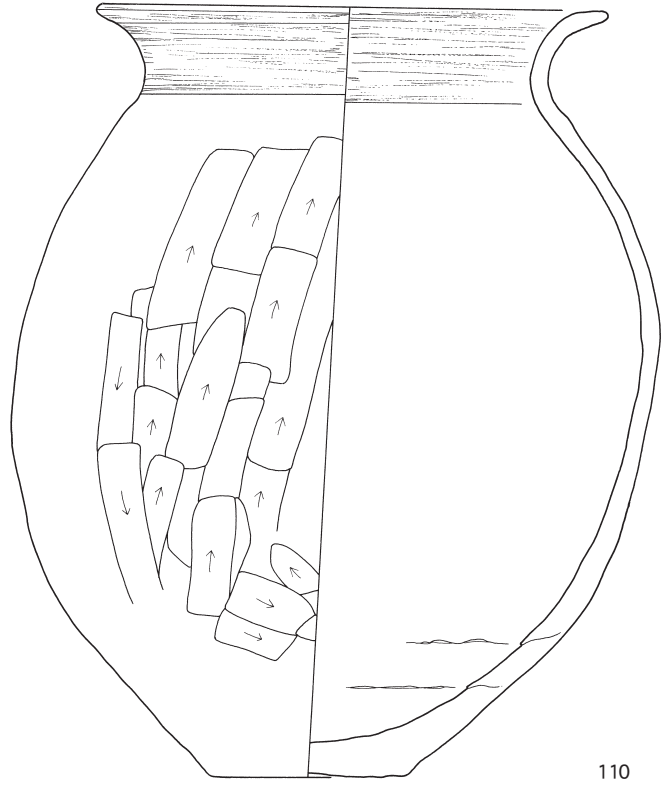
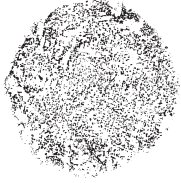
第48図 第12号住居跡実測図



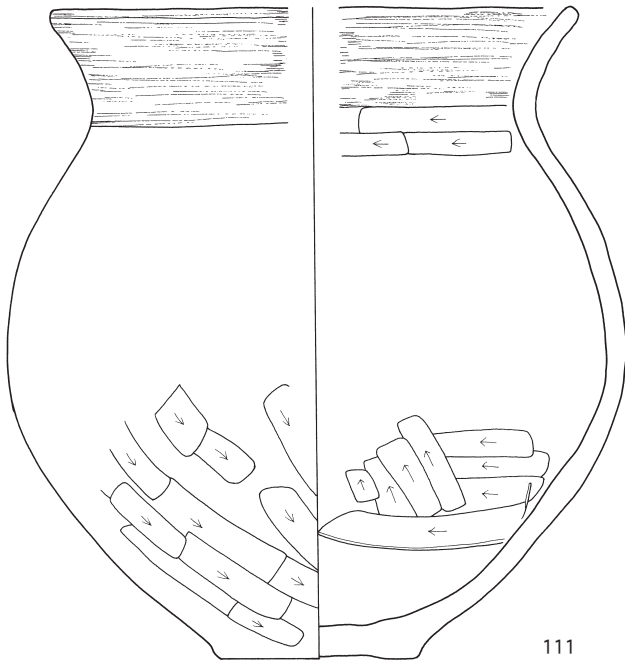
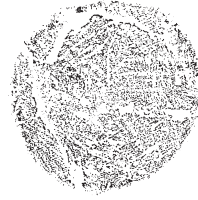
109



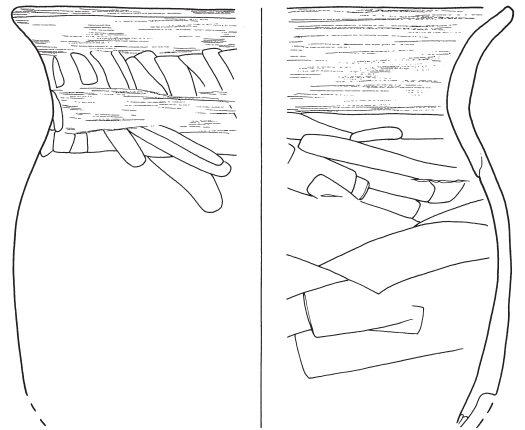
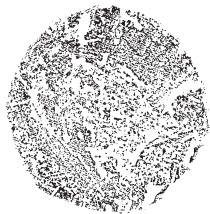
114



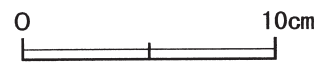
110



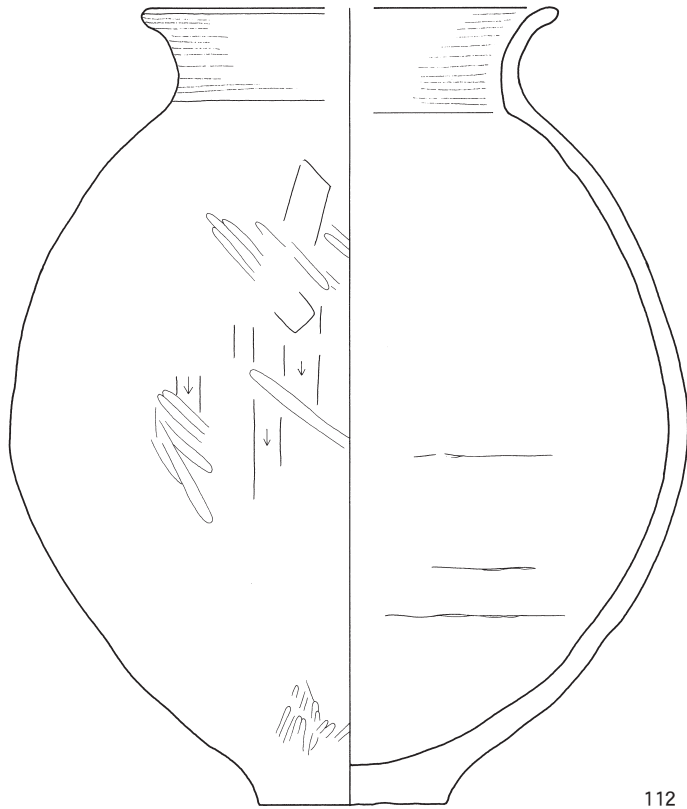
111



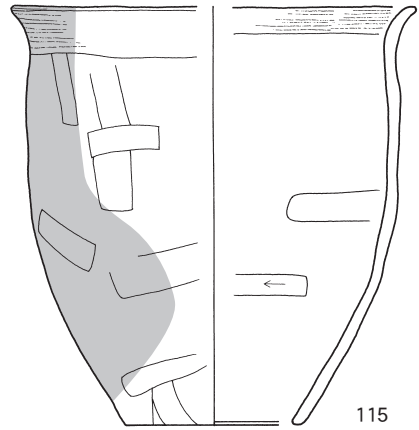
113



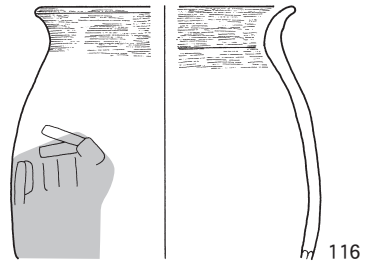
第49图 第12号住居跡出土遺物実測図(1)



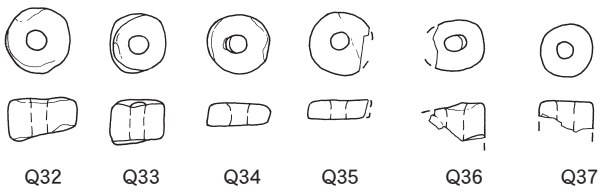
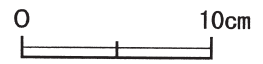
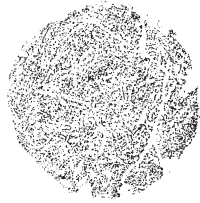
112



115



116



Q32

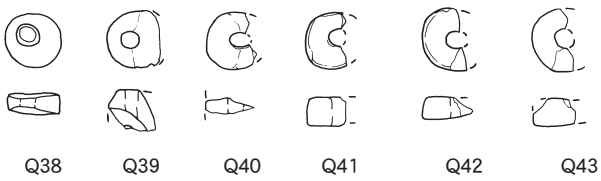
Q33

Q34

Q35

Q36

Q37



Q38

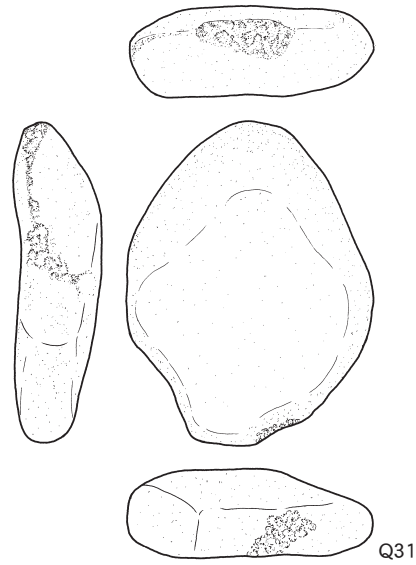
Q39

Q40

Q41

Q42

Q43



Q31



第50图 第12号住居跡出土遺物実測図(2)

第12号住居跡出土遺物観察表（第49・50図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
109	土師器	鉢	16.3	(7.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい 黄橙	普通	口縁部内・外面ナデ	北西部床面	85%
110	土師器	甕	19.9	30.6	7.6	長石・石英	褐灰	普通	口縁部内・外面横ナデ ヘラ削り 内面輪積痕	北西部床面 ・P7上層	90% PL27
111	土師器	甕	[20.5]	25.7	7.9	長石・石英・赤色 粒子	明黄褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部内・外面 ヘラ削り	覆土中	60%
112	土師器	甕	[22.0]	42.2	9.8	長石・石英	灰黄褐	普通	口縁部内・外面横ナデ ヘラ削り後磨き 内面輪積痕 底部ナデ	竈火床部内 ・中央部 中層～下層	70%
113	土師器	甕	[19.4]	(16.6)	-	長石・石英	にぶい 橙	普通	口縁部外面ヘラナデ後横ナデ 内面 横ナデ 体部内面ヘラナデ	北東部床面	20%
114	土師器	小形甕	11.4	11.5	6.4	長石・石英・赤色 粒子・礫	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ ヘラ削り 体部内外面 底部ヘラ削り後ナデ	P8中層	70% PL26
115	土師器	甕	[21.0]	22.0	9.3	長石・石英・赤色 粒子	明黄褐	普通	口縁部内・外面横ナデ ヘラナデ・ヘラ削り	竈火床部内	60%
116	土師器	甕カ	[13.4]	(13.4)	-	長石・石英	にぶい 褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面ナ デ	覆土中層	25%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q31	敲石	12.8	9.7	3.5	599	砂岩	敲打面3か所	南部下層	

番号	器種	径	厚さ	口径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q32	白玉	0.88	0.49	0.20	0.47	頁岩	側面円筒状 片面穿孔	覆土中	
Q33	白玉	0.79	0.57	0.30	0.43	頁岩	側面円筒状 片面穿孔	覆土中	
Q34	白玉	0.81	0.27	0.20	0.24	頁岩	側面円筒状 片面穿孔	覆土中	
Q35	白玉	0.84	0.24	0.20	(0.20)	滑石	一部欠損 側面円筒状 片面穿孔	覆土中	
Q36	白玉	0.72	(0.49)	0.30	(0.20)	滑石	一部欠損 側面円筒状 片面穿孔	覆土中	
Q37	白玉	0.75	(0.36)	0.20	(0.18)	頁岩	一部欠損 側面円筒状 片面穿孔	覆土中	
Q38	白玉	0.72	0.29	0.20	0.15	頁岩	側面円筒状 片面穿孔	覆土中	
Q39	白玉	0.75	(0.43)	0.20	(0.20)	頁岩	一部欠損 側面円筒状 片面穿孔	覆土中	
Q40	白玉	0.77	(0.18)	0.20	(0.07)	頁岩	一部欠損 側面円筒状 片面穿孔	覆土中	
Q41	白玉	0.76	0.35	0.20	(0.16)	滑石	一部欠損 側面円筒状 片面穿孔	覆土中	
Q42	白玉	0.80	0.30	0.20	(0.19)	滑石	一部欠損 側面円筒状 片面穿孔	覆土中	
Q43	白玉	0.78	0.35	0.20	(0.11)	滑石	一部欠損 側面円筒状 片面穿孔	覆土中	

第13号住居跡（第51・52図）

位置 調査区北部のC2b9区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

重複関係 第14・15号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東コーナー部が削平されている。長軸5.13m、短軸5.10mの方形で、主軸方向はN-51°-Eである。壁高は最大8cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

竈 北東壁中央部に付設されている。遺存状態は極めて悪く、推定される規模は、焚口部から煙道部まで100cm、袖部幅75cmである。袖部は床面と同じ高さを基部とし、白色粘土で構築されている。火床部は床面

を8cmほど楕円形に掘りくぼめており、火床面は、火熱によりわずかに赤変硬化している。煙道部は壁外に10cmほど三角形状に掘り込まれ、緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|---------------------------------|------------------------------|
| 1 黒褐色 炭化粒子多量, 焼土ブロック・粘土ブロック中量 | 6 黒褐色 炭化粒子多量, 焼土粒子・粘土粒子中量 |
| 2 黒褐色 炭化粒子多量, 焼土ブロック・粘土ブロック少量 | 7 黒褐色 焼土ブロック中量, 炭化物・粘土ブロック少量 |
| 3 灰黄褐色 粘土粒子多量, 砂粒中量, 炭化粒子少量 | 8 灰黄褐色 粘土ブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子中量 |
| 4 黒色 粘土ブロック・炭化粒子・白色粒子中量, 焼土粒子微量 | 9 褐灰色 炭化物中量, 焼土ブロック・粘土ブロック少量 |
| 5 黒色 焼土ブロック多量, 粘土ブロック・炭化粒子中量 | |

ピット 4か所。P1～P4は深さ19～30cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。

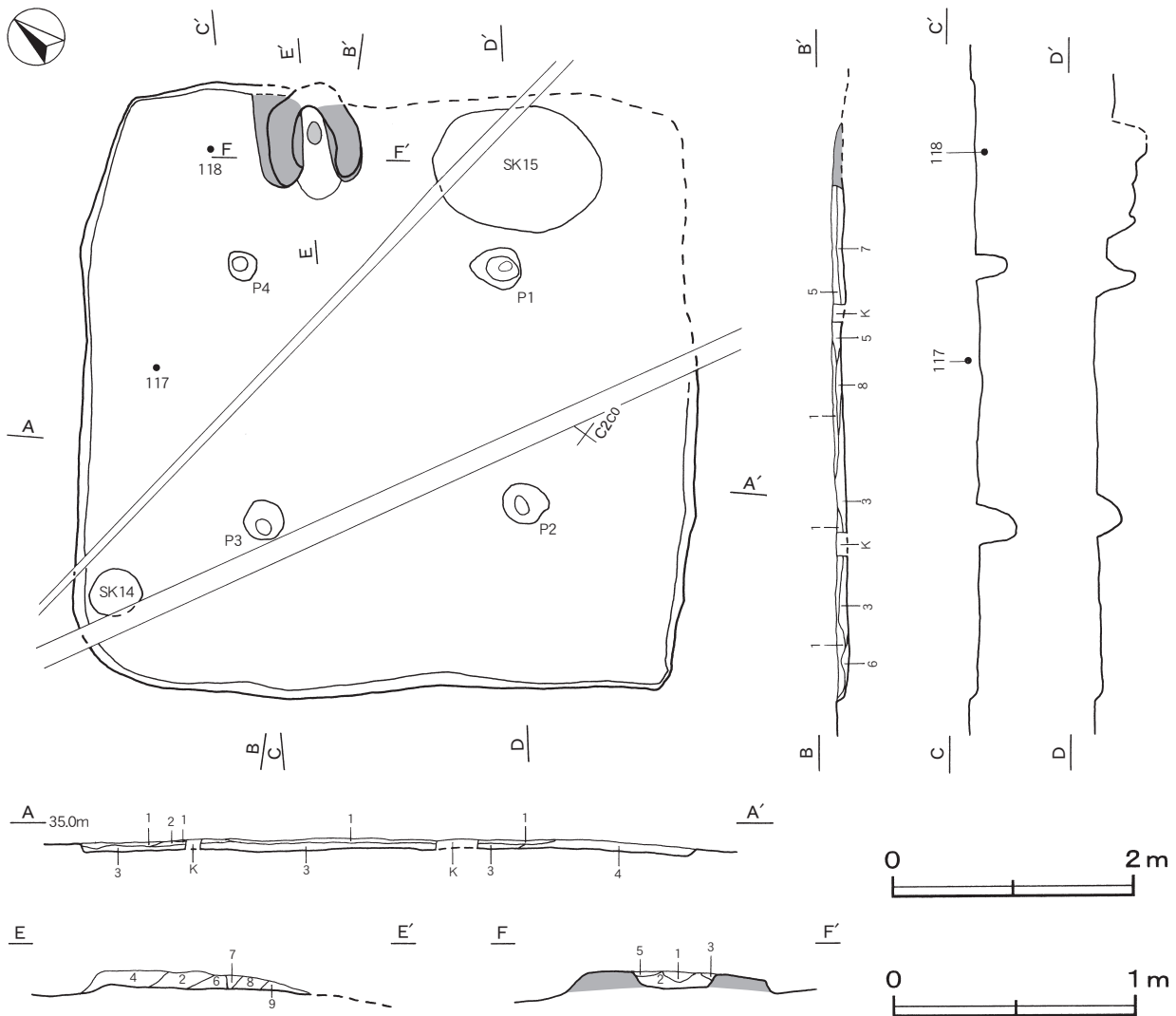
覆土 8層に分層される。不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

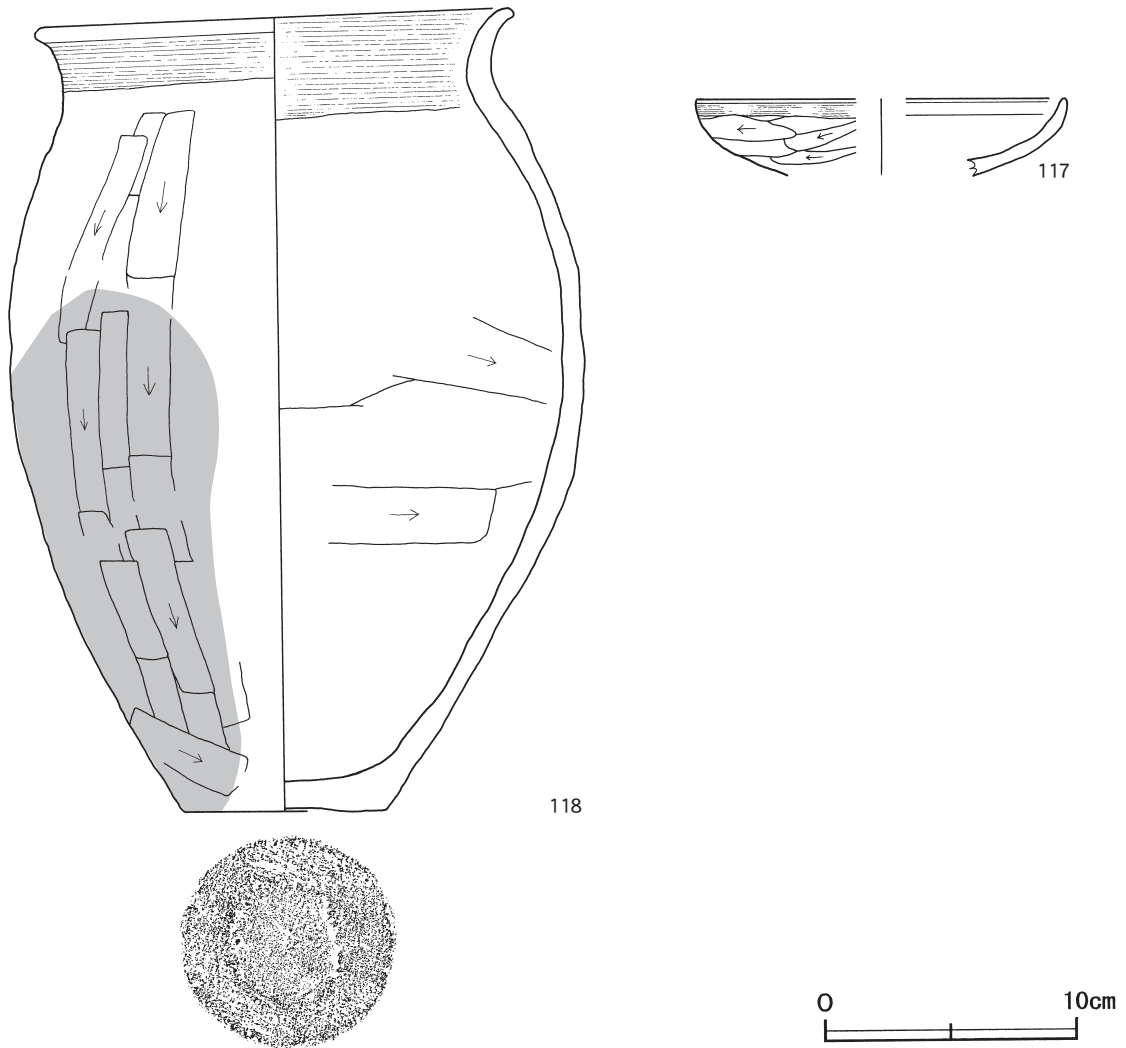
- | | |
|----------------------------------|----------------------------|
| 1 黒褐色 粘土ブロック・炭化粒子・白色粒子少量, 焼土粒子微量 | 5 黒褐色 炭化物・粘土ブロック中量, 白色粒子少量 |
| 2 黒色 粘土ブロック少量, 炭化粒子・白色粒子微量 | 6 オリーブ褐色 粘土ブロック中量 |
| 3 黒褐色 粘土ブロック中量 | 7 黒色 粘土粒子多量, 白色粒子微量 |
| 4 黒褐色 粘土ブロック多量 | 8 黒褐色 粘土粒子中量, 炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器28点(坏12, 埴2, 器台1, 甕13), 石器1点(敲石)が、竈の周辺を中心とした覆土下層から床面にかけて出土している。また、流れ込んだ縄文土器片2点も出土している。118は竈西側の床面からつぶれた状態の横位で出土している。

所見 時期は、出土土器から7世紀前葉と考えられる。



第51図 第13号住居跡実測図



第52図 第13号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡出土遺物観察表（第52図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
117	土師器	坏	[14.4]	(3.0)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰白	普通	口縁部外面横ナデ 体部外面ヘラ削り	北西部中層	20%
118	土師器	甕	18.4	31.2	8.0	長石・小礫	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部内・外面ヘラ削り 底部ヘラナデ	北部床面	90% PL27

第14号住居跡（第53図）

位置 調査区南部のC3i1区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

確認状況 東部のほとんどが調査区域外に延びている。柱穴等を確認することができなかったが、壁と床面を認めることができたため住居と判断した。

規模と形状 確認された規模は、南北軸3.60m、東西軸1.60mである。平面形は方形または長方形と推定され、主軸方向はN-16°-Wである。壁高は2~6cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

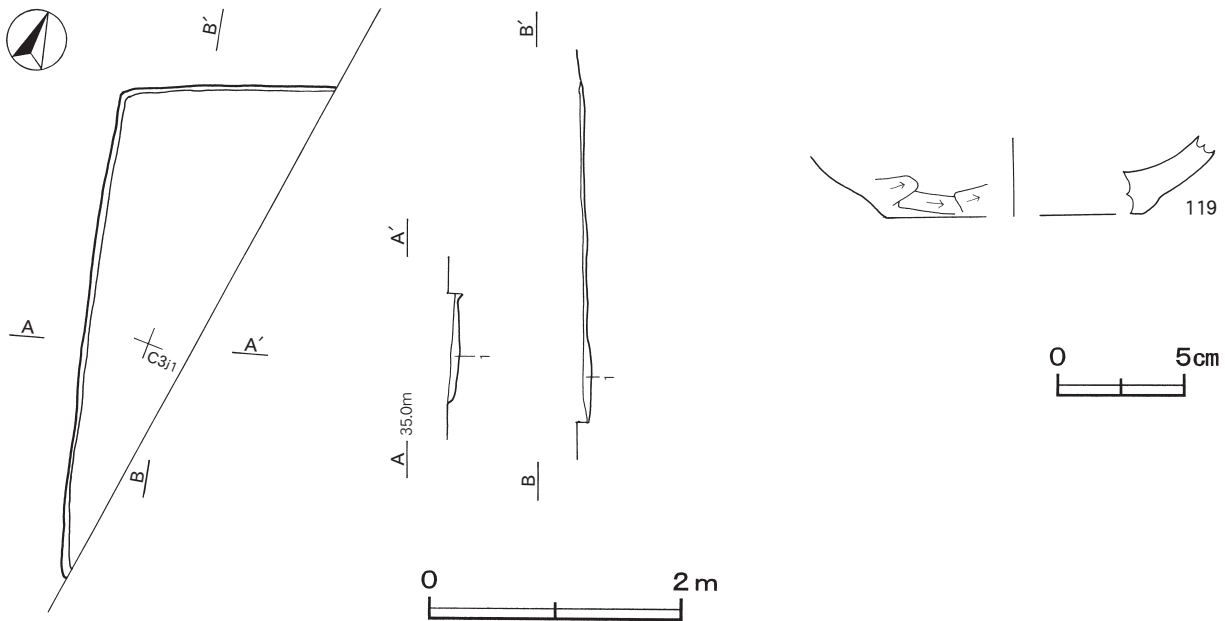
覆土 単一層で，層厚が薄いため，堆積状況は不明である。

土層解説

1 黒 色 粘土ブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 2 点（甕）が出土している。

所見 確認された範囲がわずかであり，出土土器が少なく，時期を決定することは困難であるが，出土土器と周辺の遺構の様相から後期と考えられる。



第53図 第14号住居跡・出土遺物実測図

第14号住居跡出土遺物観察表（第53図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
119	土師器	甕	-	(3.1)	[10.2]	長石・石英・雲母	にぶい 橙	普通	体部外面ヘラ削り	覆土中	5%

第15号住居跡（第54図）

位置 調査区北部の B3g1区で，標高35.0m ほどの平坦部に位置している。

重複関係 第26・45号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.25m，短軸4.02m の長方形で，主軸方向は N-44°-W である。壁高は 2~30cm で，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。壁溝が，南東壁を除いて周回している。

ピット 5か所。P1・P2は深さ12cm・18cmで，規模と配置から主柱穴と考えられる。P3は深さ18cmで，南壁寄りのほぼ中央部に位置し，出入口施設に伴うピットの可能性が考えられる。P4・P5は深さ15cm・20cmで，それぞれP1・P2の中央寄りに位置しているが，性格は不明である。

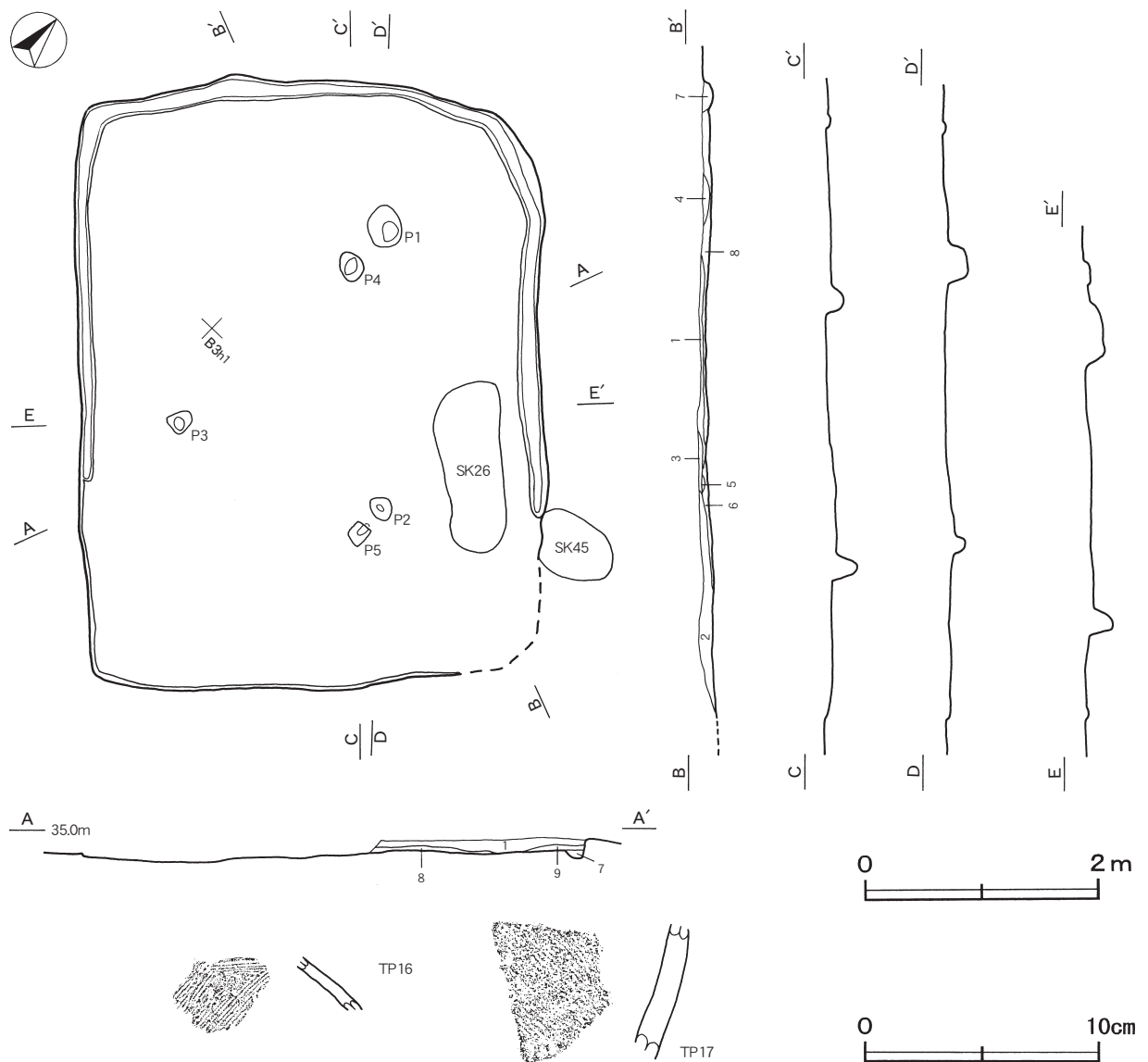
覆土 9層に分層される。層厚が薄いが，ブロック状の不規則な堆積状況を示した人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|----------|-----------------------|--------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | 粘土ブロック少量, 炭化粒子・白色粒子微量 | 6 黒褐色 | 粘土ブロック中量, 白色粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 粘土ブロック・炭化粒子・白色粒子少量 | 7 黒褐色 | 粘土ブロック多量, 炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 焼土粒子・粘土粒子多量, 炭化粒子中量 | 8 灰黄褐色 | 粘土ブロック中量 |
| 4 にぶい黄褐色 | 粘土粒子多量, 炭化粒子微量 | 9 黒褐色 | 粘土粒子多量, 炭化粒子少量 |
| 5 灰黄褐色 | 粘土粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片24点（坏2，甕22）が出土している。また、流れ込んだ縄文土器片3点も出土している。細片がほとんどで図示できる遺物はない。TP16・TP17が覆土中から出土している。

所見 出土土器が細片で少なく，時期を判断することは困難であるが，出土土器と遺構の様相から前期と考えられる。



第54図 第15号住居跡・出土遺物実測図

第15号住居跡出土遺物観察表（第54図）

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP16	土師器	甕	長石	にぶい黄橙	普通	体部外面ハケ目調整	覆土中	
TP17	土師器	甕	長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部外面ハケ目調整	覆土中	

第16号住居跡（第55図）

位置 調査区北部のC2f9区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

規模と形状 南東部のほとんどが調査区域外に延びているため、確認された範囲は長軸3.54m、短軸2.10mである。平面形は方形または長方形と推定され、主軸方向はN-21°-Wである。壁高は10~14cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。全体に炭化材が放射状に広がっている。壁溝が全周している。

ピット 32か所。P1は深さ17cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P2~P32は、壁溝内とその周辺に位置し、壁に沿って周回する円形及び楕円形の小ピット群で、壁柱穴と考えられる。

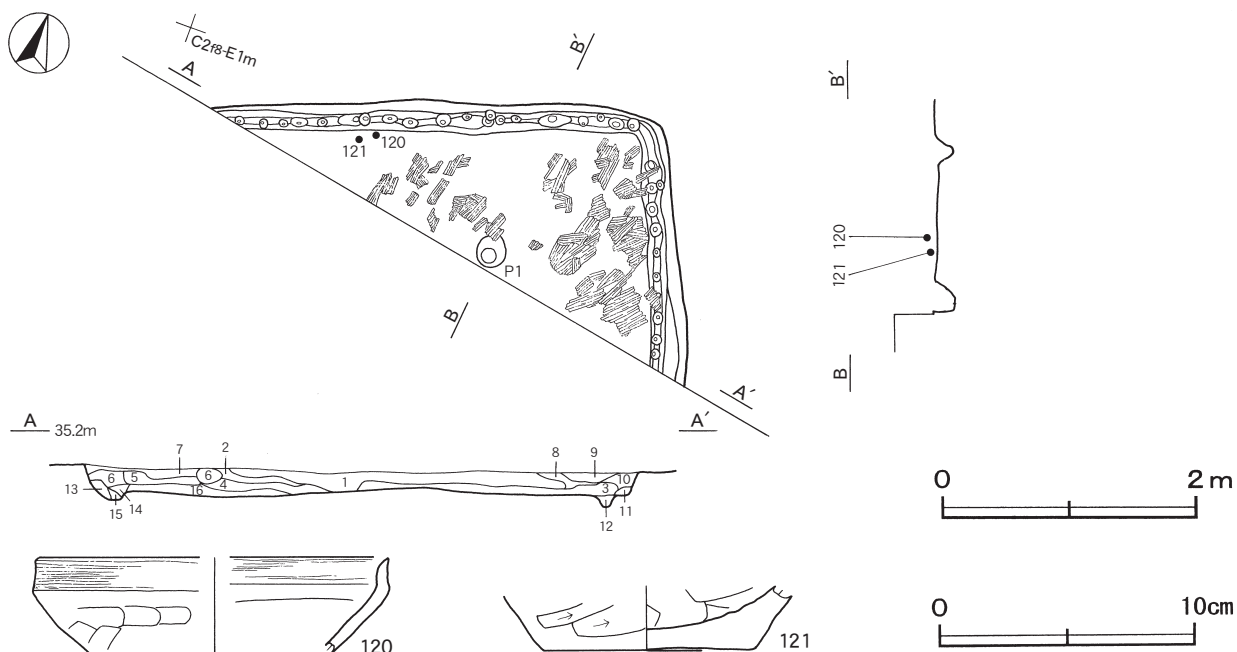
覆土 16層に分層される。各層に焼土や炭化粒子を含み、不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

1	黒色	粘土粒子・白色粒子中量，炭化物少量	9	黒色	炭化粒子・粘土粒子・白色粒子微量
2	黒色	焼土ブロック・粘土ブロック多量，炭化粒子中量	10	黒褐色	粘土粒子中量，白色粒子微量
3	黒褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子中量	11	にぶい黄褐色	粘土粒子少量，炭化粒子・白色粒子微量
4	黒褐色	粘土ブロック中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量	12	褐色灰色	粘土ブロック多量，炭化粒子中量
5	黒褐色	焼土ブロック・粘土ブロック多量，炭化粒子中量	13	褐色灰色	粘土ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
6	黒褐色	粘土ブロック多量，炭化粒子微量	14	黒色	粘土ブロック・炭化粒子微量
7	黒色	粘土ブロック・焼土粒子中量，炭化粒子少量	15	灰黄褐色	粘土粒子多量，炭化粒子微量
8	褐色灰色	焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量	16	黒色	粘土粒子中量

遺物出土状況 土師器片41点(坏6, 甕35), 炭化材が覆土上層から床面にかけて、全域に散在した状態で出土している。炭化材は床面全体から放射状に出土しており、焼失した住居の構築材と考えられる。また、流れ込んだ縄文土器片3点も出土している。120・121は北壁際の覆土下層で、炭化材の上面から出土しており、焼失後廃棄されたものと考えられる。

所見 炭化材の出土状況から、焼失住居と考えられる。時期は、出土土器から6世紀前葉と考えられる。



第55図 第16号住居跡・出土遺物実測図

第16号住居跡出土遺物観察表（第55図）

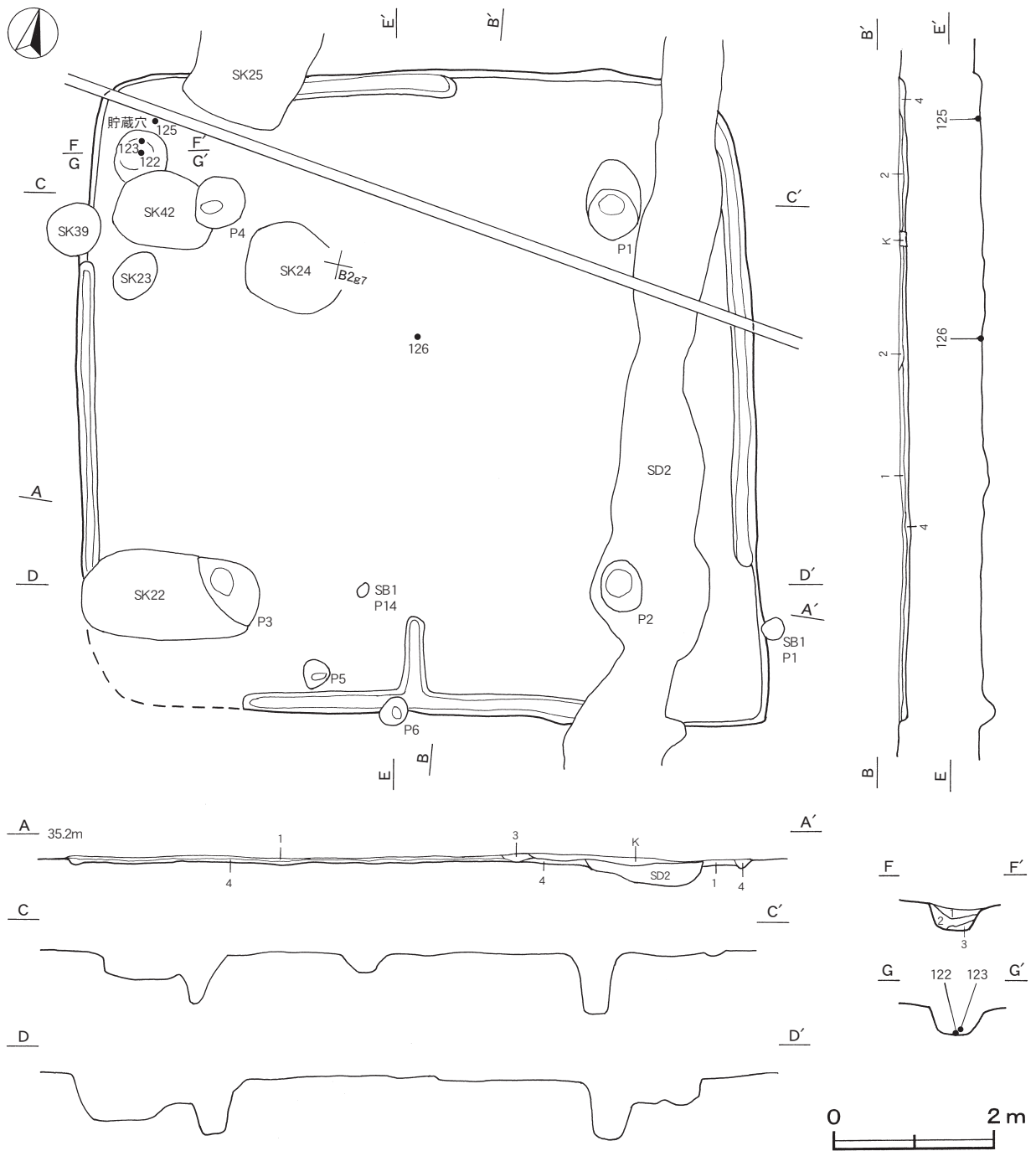
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
120	土師器	坏	[13.8]	(3.8)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面ヘラナデ	北部下層	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
121	土師器	甕	-	(2.6)	8.0	長石・石英・雲母	こぶい 黄橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	北部下層	5%

第17号住居跡（第56・57図）

位置 調査区北部のB2g7区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

重複関係 第22～25・39・42号土坑，第2号溝，第1号掘立柱建物に掘り込まれている。



第56図 第17号住居跡実測図

規模と形状 長軸8.46m, 短軸8.16mの方形で, 主軸方向はN-13°-Wである。壁高は2~8cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。間仕切り溝が, 南壁の中央部に1条確認された。壁溝が, 各コーナー部を除いて周回している。

ピット 6か所。P1~P4は深さ64~75cmで, 規模と配置から主柱穴と考えられる。P5・P6は深さ19cm・20cmで, 南壁寄りのほぼ中央部に位置し, 出入口施設に伴うピットの可能性が考えられる。

貯蔵穴 北西コーナー部に位置している。径65cmほどの円形で, 深さは35cmである。底面は平坦で, 壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|---------------------------|------------------------|
| 1 黒褐色 炭化物・焼土粒子・粘土粒子・鉄分少量 | 3 ぬい黄褐色 粘土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 粘土ブロック・鉄分少量, 炭化粒子微量 | |

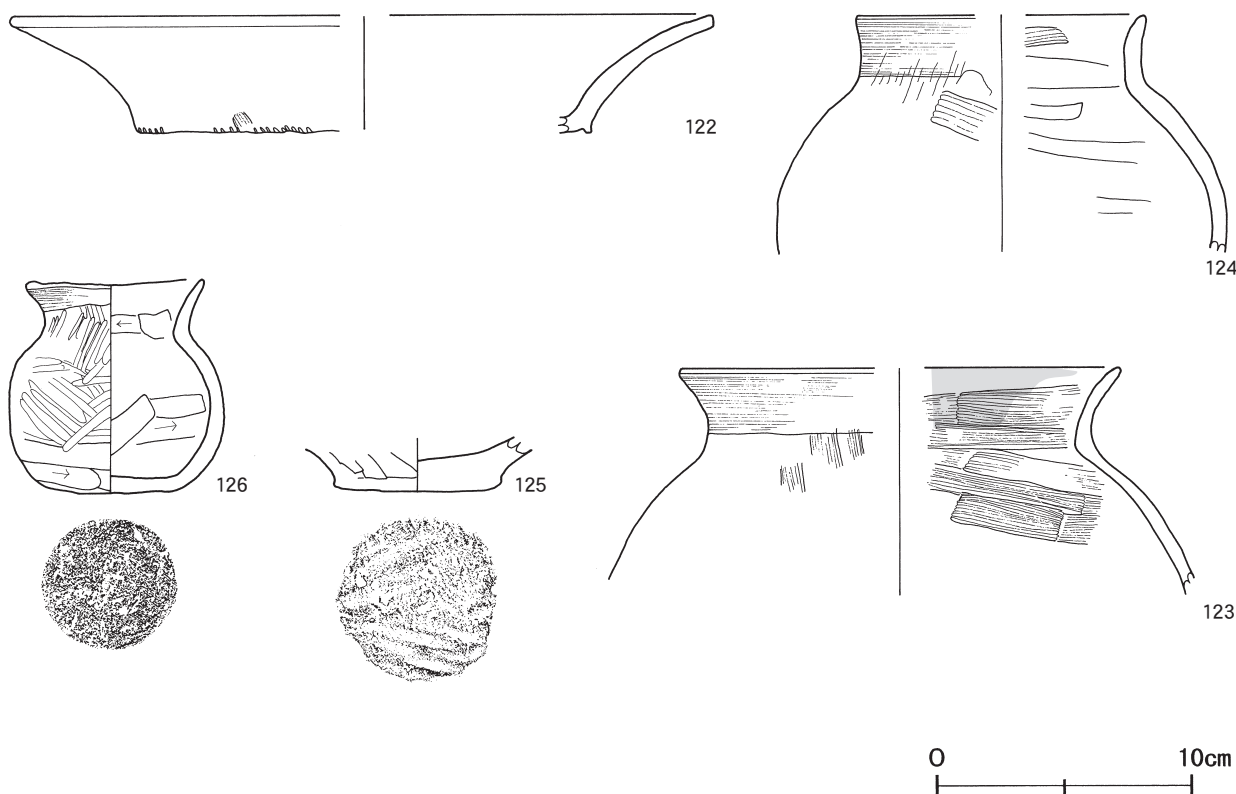
覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

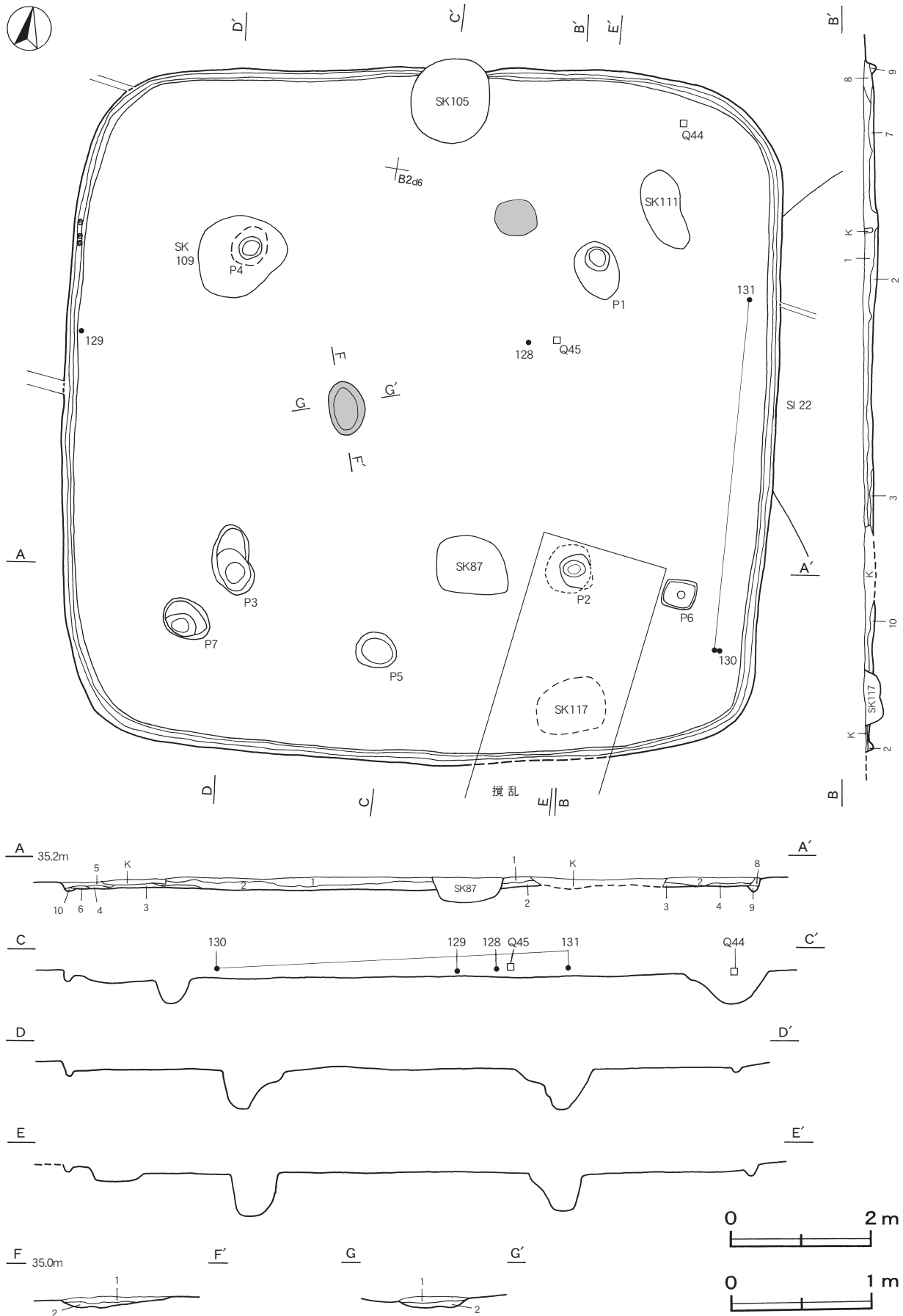
- | | |
|---------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色 粘土ブロック・白色粒子少量 | 3 暗褐色 粘土粒子少量, 炭化粒子・白色粒子微量 |
| 2 黒褐色 粘土ブロック微量 | 4 黒褐色 粘土粒子中量, 白色粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片170点(埴4, 器台・高坏類20, 甕146)が, 中央部から北西コーナー部を中心とした覆土上層から床面にかけて散在した状態で出土している。また, 流れ込んだ縄文土器片1点, 石器3点(剥片), 古銭1点も出土している。126は中央部床面から横位で, 122・123は貯蔵穴内の底面及び覆土下層から, それぞれ出土している。

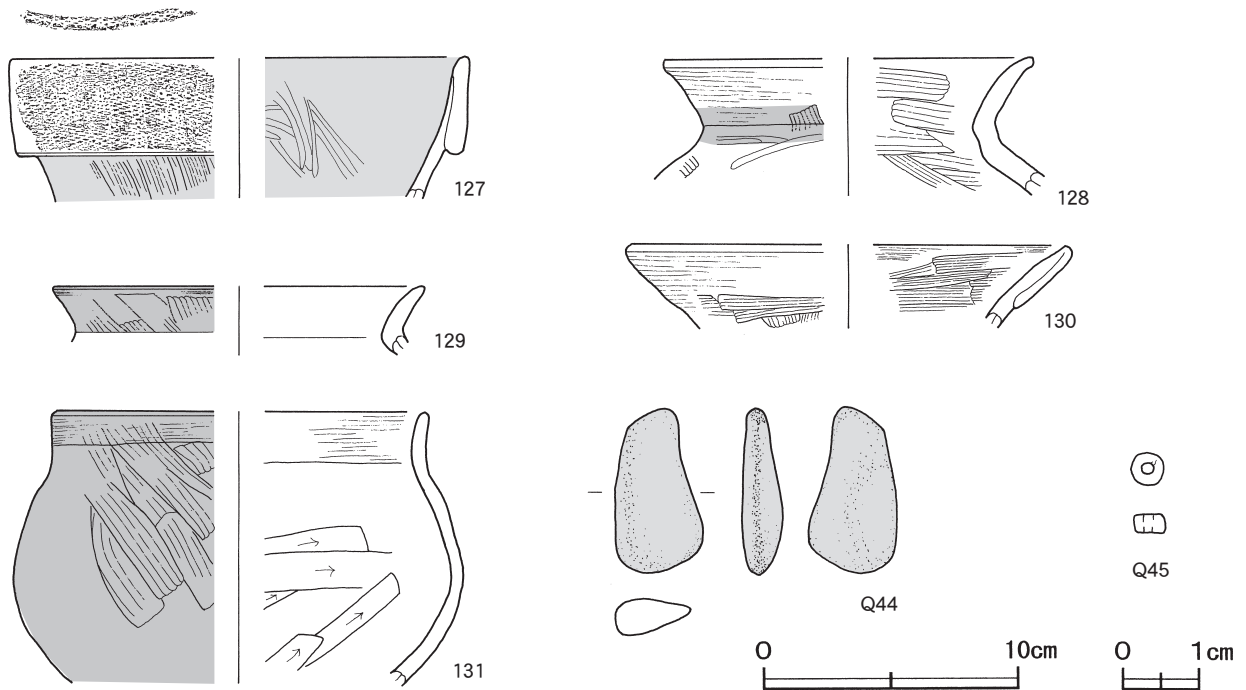
所見 時期は, 出土土器から前期前葉と考えられる。



第57図 第17号住居跡出土遺物実測図



第58图 第19号住居跡実测图



第59図 第19号住居跡出土遺物実測図

第19号住居跡出土遺物観察表（第59図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
127	土師器	壺	[18.0]	(5.6)	-	長石・石英・雲母・白色粒子	赤	普通	口縁部折返し 外面網目状捺糸文施文 内面ヘラ磨き	覆土中	5% PL25
130	土師器	壺	[17.0]	(3.3)	-	長石・石英・雲母・白色粒子	橙	普通	口縁部折返し 外面ハケ目調整後横ナデ 内面ハケ目調整	南東部下層	5%
128	土師器	甕	[14.4]	(5.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部ナデ 口縁部外面ハケ目調整後ナデ 内面ハケ目調整	中央部下層	5%
129	土師器	甕	[14.4]	(2.7)	-	石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部ナデ 口縁部外面ハケ目調整 内面ナデ	西部下層	5%
131	土師器	鉢	[14.4]	(10.7)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外面ハケ目調整後横ナデ 内面横ナデ	北東部下層 南東部下層	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q44	磨石	6.5	3.5	1.6	36	安山岩	側面に削痕 赤色顔料付着	北東部下層	

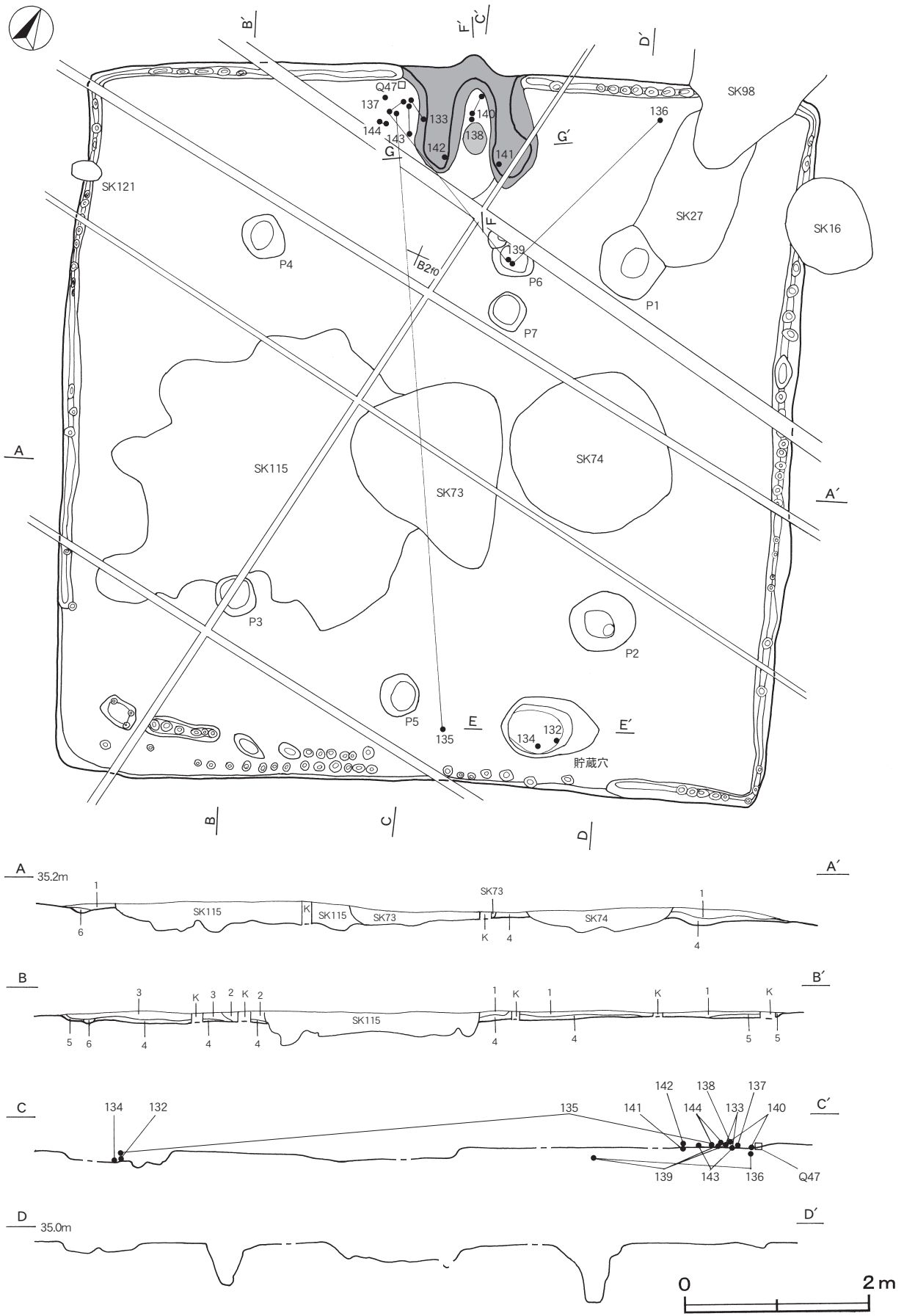
番号	器種	径	厚さ	口径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q45	白玉	0.42	0.16	0.25	0.08	滑石	側面円筒状 片面穿孔	中央部下層	

第20号住居跡（第60～63図）

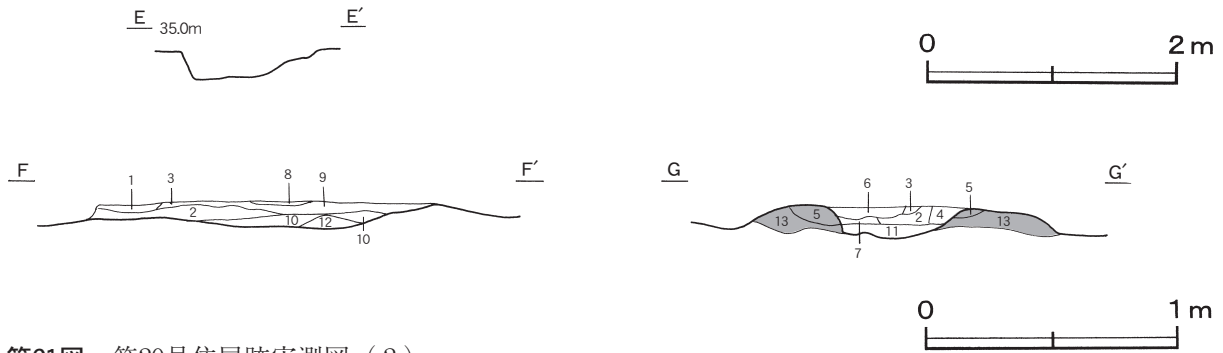
位置 調査区北部の B 2 f0区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

重複関係 第16・27・73・74・98・115・121号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸7.86m，短軸7.70mの方形で，主軸方向はN-20°-Wである。壁高は5～9cmで，外傾して立ち上がっている。



第60図 第20号住居跡実測図（1）



第61図 第20号住居跡実測図（2）

床 ほぼ平坦である。壁溝が、南西コーナー部を除いて周回している。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで162cm，袖部幅132cmである。袖部は、床面と同じ高さを基部とし、白色粘土で構築されている。火床部は床面を5cmほど楕円形に掘りくぼめており、火床面は火熱によりわずかに赤変硬化している。煙道部は壁外へ16cmほど三角形に掘り込まれ、火床部から緩やかに外傾して立ち上がっている。

電土層解説

- | | |
|-------------------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子・粘土粒子少量 | 8 暗赤褐色 炭化物中量，焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 焼土ブロック多量，炭化物・粘土ブロック少量 | 9 暗赤褐色 焼土粒子多量 |
| 3 暗赤褐色 焼土粒子中量，炭化粒子少量，粘土ブロック微量 | 10 暗赤褐色 焼土粒子多量，炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 焼土ブロック中量，粘土粒子少量，炭化粒子微量 | 11 黒褐色 焼土粒子多量，炭化粒子微量 |
| 5 灰黄褐色 炭化粒子中量，焼土ブロック・粘土ブロック微量 | 12 灰褐色 焼土粒子多量，炭化粒子微量 |
| 6 明赤褐色 焼土ブロック中量，炭化物・粘土ブロック少量 | 13 灰黄褐色 焼土粒子多量，炭化粒子微量 |
| 7 黒褐色 焼土ブロック多量，炭化物・粘土ブロック微量 | |

ピット 110か所。P1～P4は深さ35～64cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ18cmで、南壁寄りのほぼ中央部に位置し、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P8～P110は、壁溝内と壁際下に位置し、壁に沿って周回する円形及び楕円形の小ピット群で、壁柱穴と考えられる。

貯蔵穴 南東コーナー部の中央寄りに位置している。長径107cm，短径67cmの楕円形で、深さは20cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

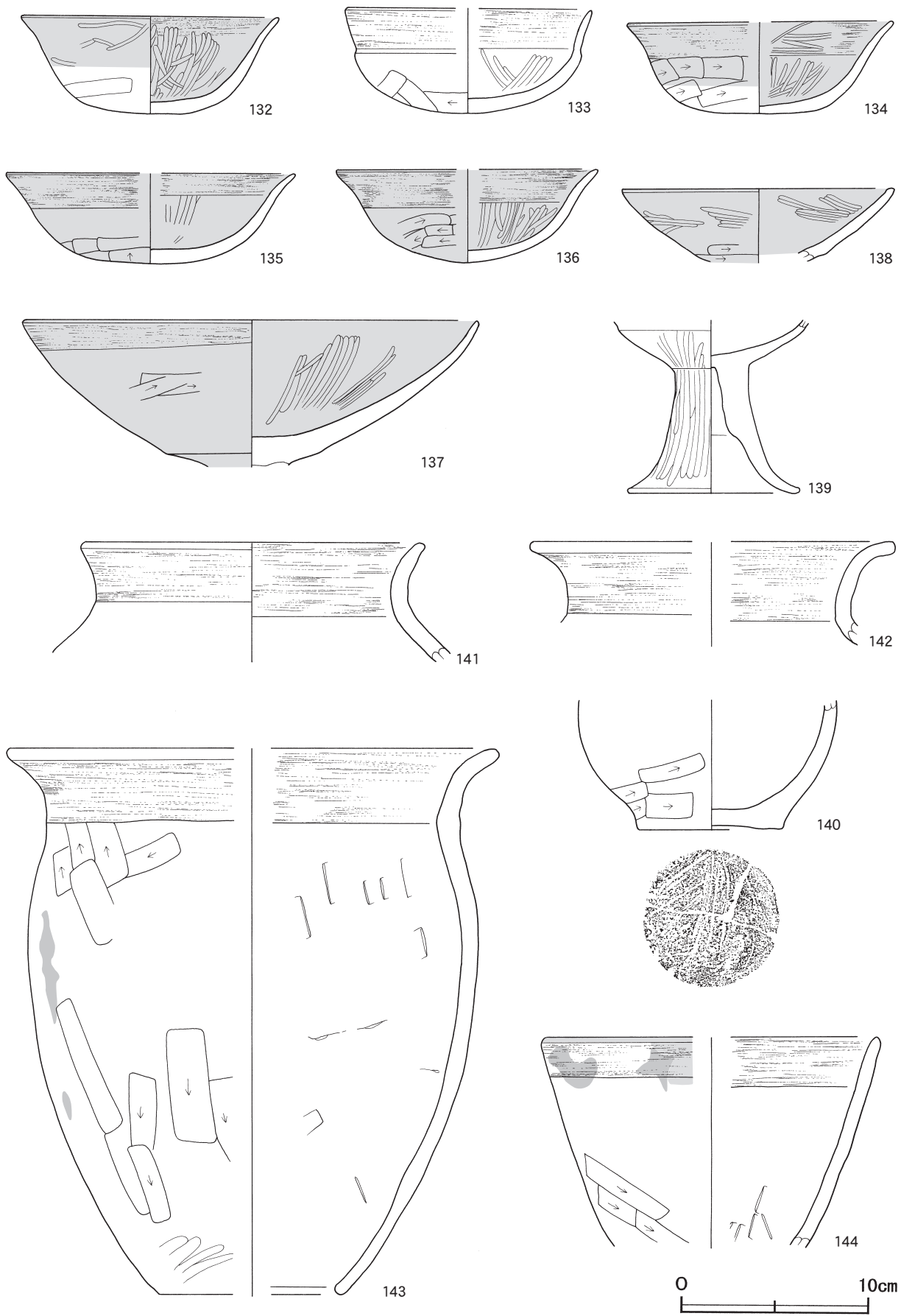
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

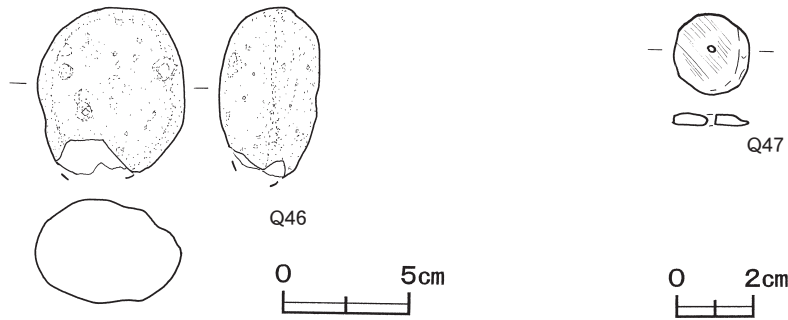
- | | |
|----------------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色 粘土ブロック・白色粒子少量，炭化粒子微量 | 4 にぶい黄褐色 粘土ブロック中量，炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 粘土粒子少量，白色粒子・鉄分微量 | 5 黒褐色 粘土粒子微量 |
| 3 黒褐色 粘土粒子・白色粒子・鉄分微量 | 6 黒褐色 粘土粒子少量，炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片837点（坏245，高坏5，甕581，甑6），石器3（磨石2，敲石1），石製品1（有孔円板）が、竈周辺を中心とした覆土下層から床面にかけて出土している。坏192点中、53点が赤彩されている。また、流れ込んだ縄文土器片20点，須恵器片3点，陶器片3点も出土している。133・137は逆位で、143は横位で竈の西側の床面からそれぞれ出土している。138・140は竈の火床部内から、141・142は袖部からそれぞれ出土している。132・134は貯蔵穴内から出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀初頭と考えられる。



第62図 第20号住居跡出土遺物実測図(1)



第63図 第20号住居跡出土遺物実測図（2）

第20号住居跡出土遺物観察表（第62・63図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
132	土師器	坏	13.7	5.3	-	長石・石英	橙・赤	普通	体部外面ヘラ磨き・ヘラナデ 内面ヘラ磨き	貯蔵穴内	100% PL27
133	土師器	坏	[13.2]	5.6	-	長石・石英	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	北部床面	80% PL27
134	土師器	坏	14.2	5.0	4.0	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	貯蔵穴内	80% PL27
135	土師器	坏	[15.4]	4.8	-	長石・石英	赤	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面ヘラナデ・ヘラ削り 内面ヘラ磨き	北部床面 南部床面	40%
136	土師器	坏	[14.0]	5.0	-	長石・石英・赤色粒子	赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	北部床面 P 6下層	30%
137	土師器	高坏	24.2	(7.8)	-	長石	赤	普通	口縁部外面横ナデ 坏部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	北部床面	50% PL27
138	土師器	高坏	14.5	(3.9)	-	長石・石英・赤色粒子	赤褐	普通	坏部外面ヘラ削り・ヘラ磨き 内面ヘラ磨き	竈火床部内	30%
139	土師器	高坏	-	(9.4)	9.1	長石・赤色粒子	橙	普通	坏部外面ヘラ磨き 脚部外面ヘラ磨き 内面ナデ	北部床面	80%
140	土師器	甕	-	(7.0)	7.5	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ削り 底部ヘラ削り	竈火床部内	10%
141	土師器	甕	17.8	(6.4)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	竈袖部	10%
142	土師器	甕	19.4	(5.6)	-	長石・石英・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	竈袖部	10%
143	土師器	甕	[26.0]	29.5	[9.8]	長石・石英・赤色粒子	明黄褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面輪積痕・工具痕	北部床面	30%
144	土師器	甕	[17.6]	(11.2)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面工具痕	北部床面	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q46	磨石	(6.6)	5.9	4.0	(171)	安山岩	側面に削痕	覆土中	

番号	器種	径	厚さ	口径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q47	有孔円板	2.1	0.3	0.16	1.30	頁岩	中央部に穿孔1か所	北部床面	PL38

第21号住居跡（第64図）

位置 調査区北部の C 2 e5区で、標高35.0m ほどの平坦部に位置している。

重複関係 第116・124号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南部が調査区域外に延びているため、確認された規模は、長軸6.65m、短軸3.62mである。平面形は方形または長方形と推定され、主軸方向はN-3°-Wである。壁高は2~12cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。壁溝が、東壁の一部を除いて周回している。

ピット 2か所。P1は深さ24cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P2は深さ38cmで、P1の北東寄りに位置し、補助柱穴と考えられる。

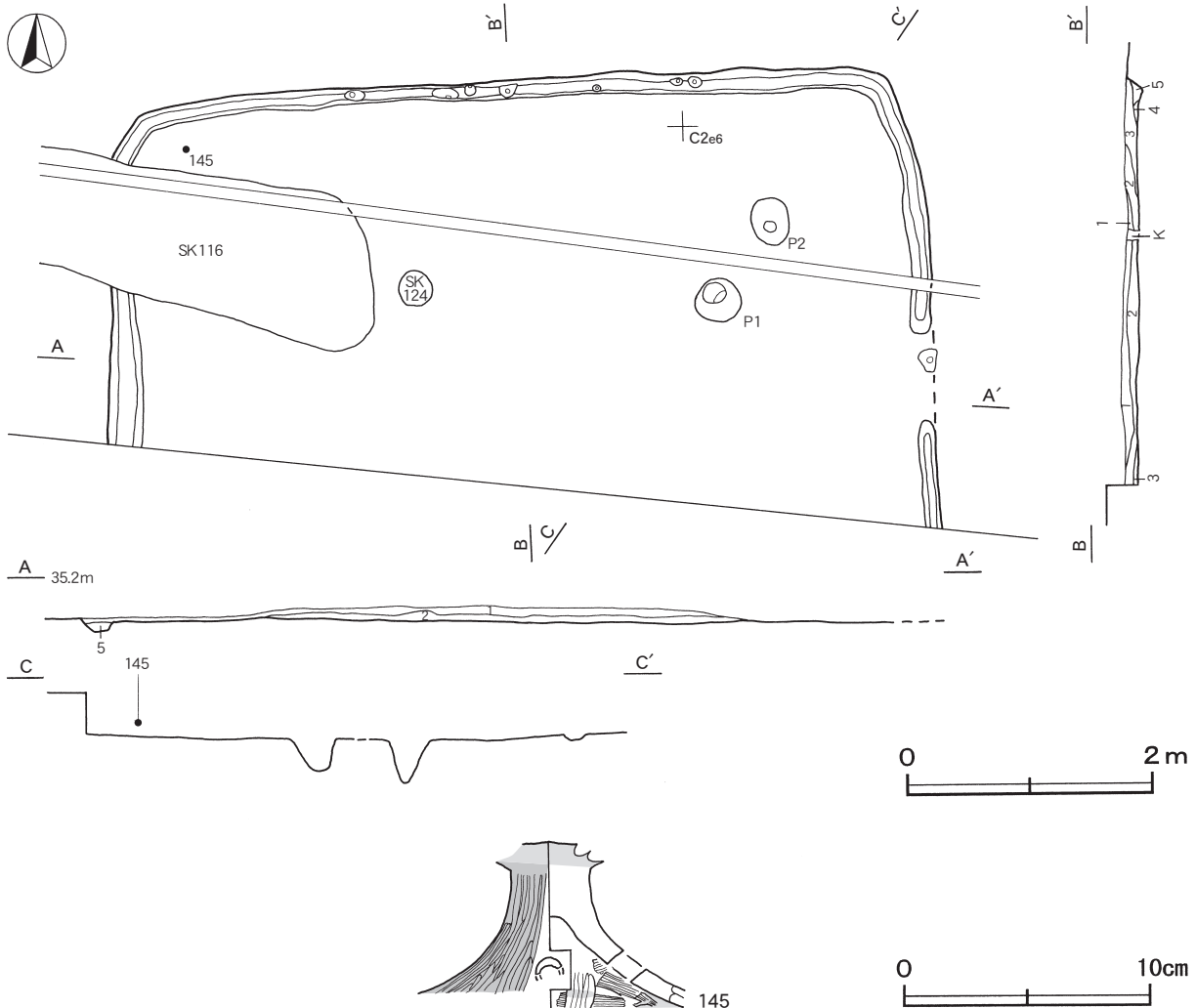
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | |
|----------------------------|--------------|
| 1 黒褐色 粘土ブロック少量、炭化粒子・白色粒子微量 | 4 黒褐色 粘土粒子少量 |
| 2 黒褐色 粘土ブロック微量 | 5 黒褐色 粘土粒子微量 |
| 3 黒褐色 粘土ブロック少量 | |

遺物出土状況 土師器片38点(坏4, 高坏1, 甕33), 礫3点, 炭化材が出土している。また、混入した須恵器片も1点出土している。145は北西コーナー部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から前期前葉と考えられる。



第64図 第21号住居跡・出土遺物実測図

第21号住居跡出土遺物観察表（第64図）

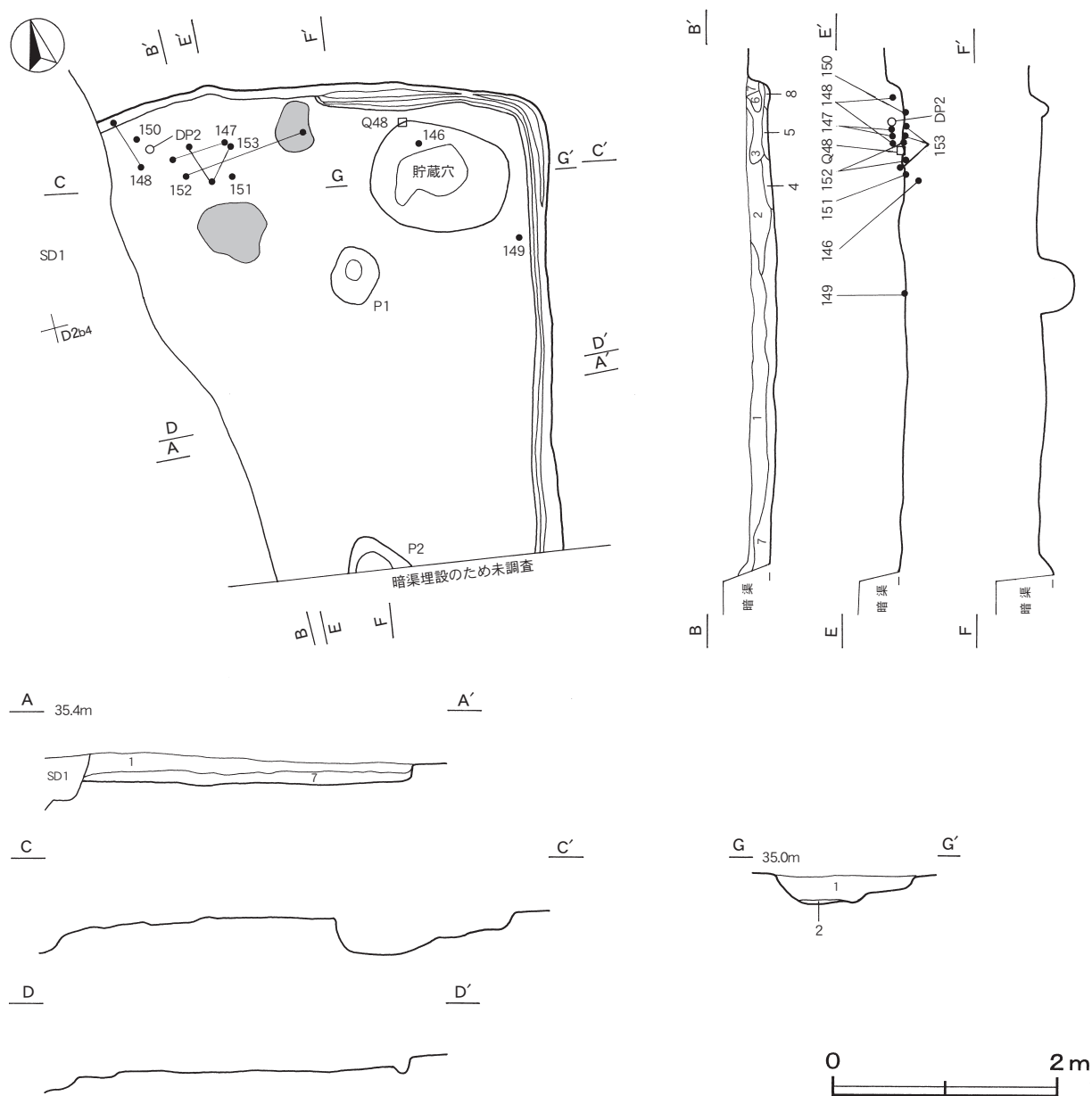
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
145	土師器	高坏	-	(6.7)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	脚部3孔 外面ヘラ磨き 内面ハケ目調整	北西部床面	50%

第23号住居跡（第65～67図）

位置 調査区北部のD2b4区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

重複関係 第1号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南部が東西方向に攪乱(暗渠埋設)を受けている。確認された規模は、長軸4.34m、短軸3.96mである。平面形は方形または長方形と推定され、主軸方向はN-14°-Eである。壁高は14~16cmで、外傾して立ち上がっている。



第65図 第23号住居跡実測図

床 ほぼ平坦である。中央部北寄り及び北壁際に薄い焼土の広がり確認された。壁溝が、北東から東壁にかけて周回している。

竈 北壁中央部に付設されていたと推定される。遺存状態は極めて悪く、詳細は不明であるが、焼土、炭化物及び甕、甌、支脚の集中的な出土から竈があったと判断した。

ピット 2か所。P1・P2は深さ20cm・44cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。

貯蔵穴 北東コーナー部に位置している。長径120cm、短径95cmの楕円形で、深さは34cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|--------------------|--------------|
| 1 黒褐色 粘土粒子少量, 鉄分微量 | 2 黒褐色 粘土粒子少量 |
|--------------------|--------------|

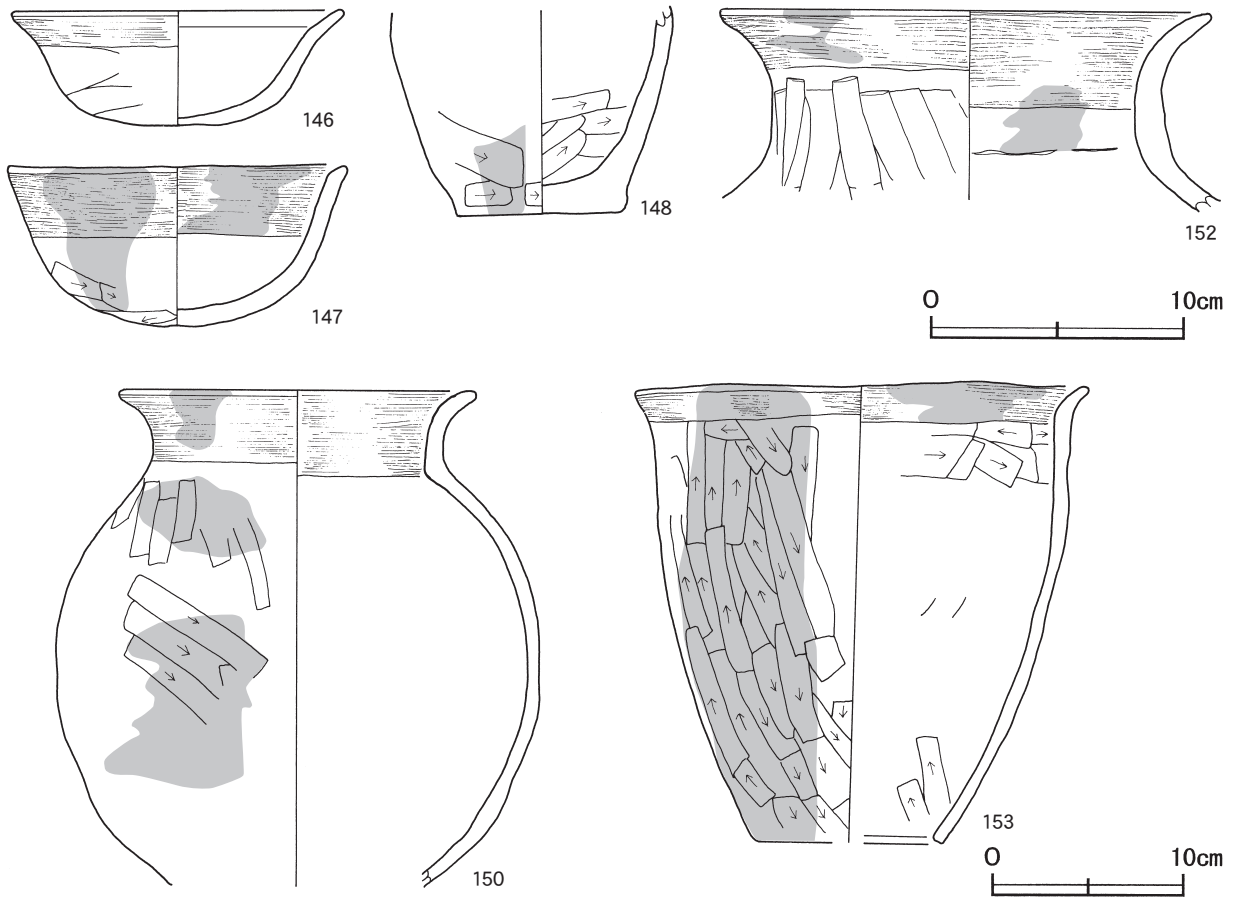
覆土 8層に分層される。不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

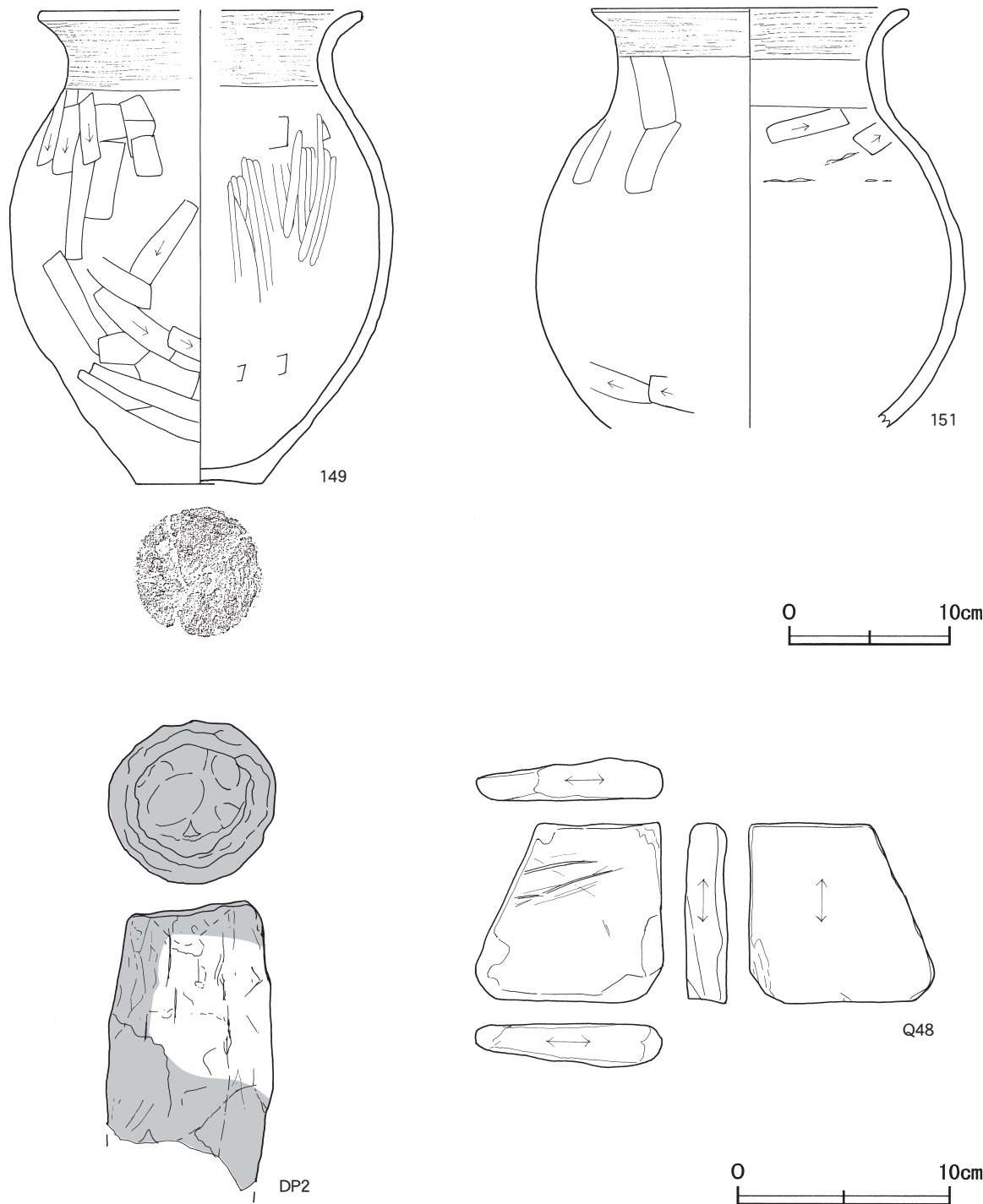
- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 1 暗褐色 粘土ブロック中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | 5 灰黄褐色 粘土ブロック・炭化粒子中量, 焼土ブロック少量 |
| 2 黒褐色 焼土ブロック少量, 炭化物微量 | 6 明赤褐色 焼土ブロック多量, 炭化粒子中量 |
| 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量 | 7 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 4 褐灰色 粘土ブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 褐灰色 焼土ブロック・粘土ブロック中量, 炭化粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片323点(坏36, 椀1, 埴3, 甕282, 甌1), 石器1点(砥石), 土製品1点(支脚), 炭化材が、北壁際を中心とした覆土上層から床面にかけて出土している。坏36点中、10点が赤彩されている。また、流れ込んだ縄文土器片1点と須恵器片7点も出土している。151~153は北壁際の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀初頭と考えられる。



第66図 第23号住居跡出土遺物実測図(1)



第67図 第23号住居跡出土遺物実測図（2）

第23号住居跡出土遺物観察表（第65～67図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
146	土師器	坏	13.0	4.5	-	長石・石英・赤色 粒子	にぶい 橙	普通	口縁部外面横ナデ 体部外面ヘラナ デ	貯蔵穴内	98% PL28
147	土師器	椀	13.2	6.3	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい 黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面ヘ ラ削り	北部下層	70% PL28
148	土師器	甕	-	(8.1)	6.5	長石・石英・雲母	橙	普通	体部内・外面ヘラ削り	北部下層	30%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
149	土師器	甕	[20.0]	29.6	8.0	長石・石英	明黄褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ後ヘラ磨き 底部ヘラナデ	東部床面	65%
150	土師器	甕	18.4	(26.1)	-	長石・石英・赤色粒子	明黄褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面上位ヘラナデ・中位ヘラ削り	北部床面	60% PL28
151	土師器	甕	19.7	(26.2)	-	長石・石英・小礫	にぶい褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面上位ヘラナデ・下位ヘラ削り 内面上位ヘラ削り・輪積痕	北部床面	50%
152	土師器	甕	19.2	(8.0)	-	長石・石英・赤色粒子・細礫	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面ヘラナデ 内面輪積痕	北部床面	10%
153	土師器	甕	24.3	24.8	[10.2]	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部内・外面ヘラ削り	北部床面	75% PL28

番号	器種	長さ	最大径	最小径	重量	材質	手法の特徴	出土位置	備考
DP 2	支脚	(13.5)	7.9	7.6	(529.0)	粘土	ナデ	北部下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q48	砥石	8.5	8.8	2.0	242	ホルンフェルス	砥面4か所 刃物痕有	北東部床面	

第24号住居跡（第68図）

位置 調査区南部のE2b4区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

重複関係 第3号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.85m、短軸4.50mの長方形で、主軸方向はN-21°-Eである。壁高は12~28cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。壁溝が、西壁を除いて周回している。

ピット 5か所。P1~P4は深さ42~60cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ70cmで、南壁寄りの南東コーナー部に位置し、性格は不明である。

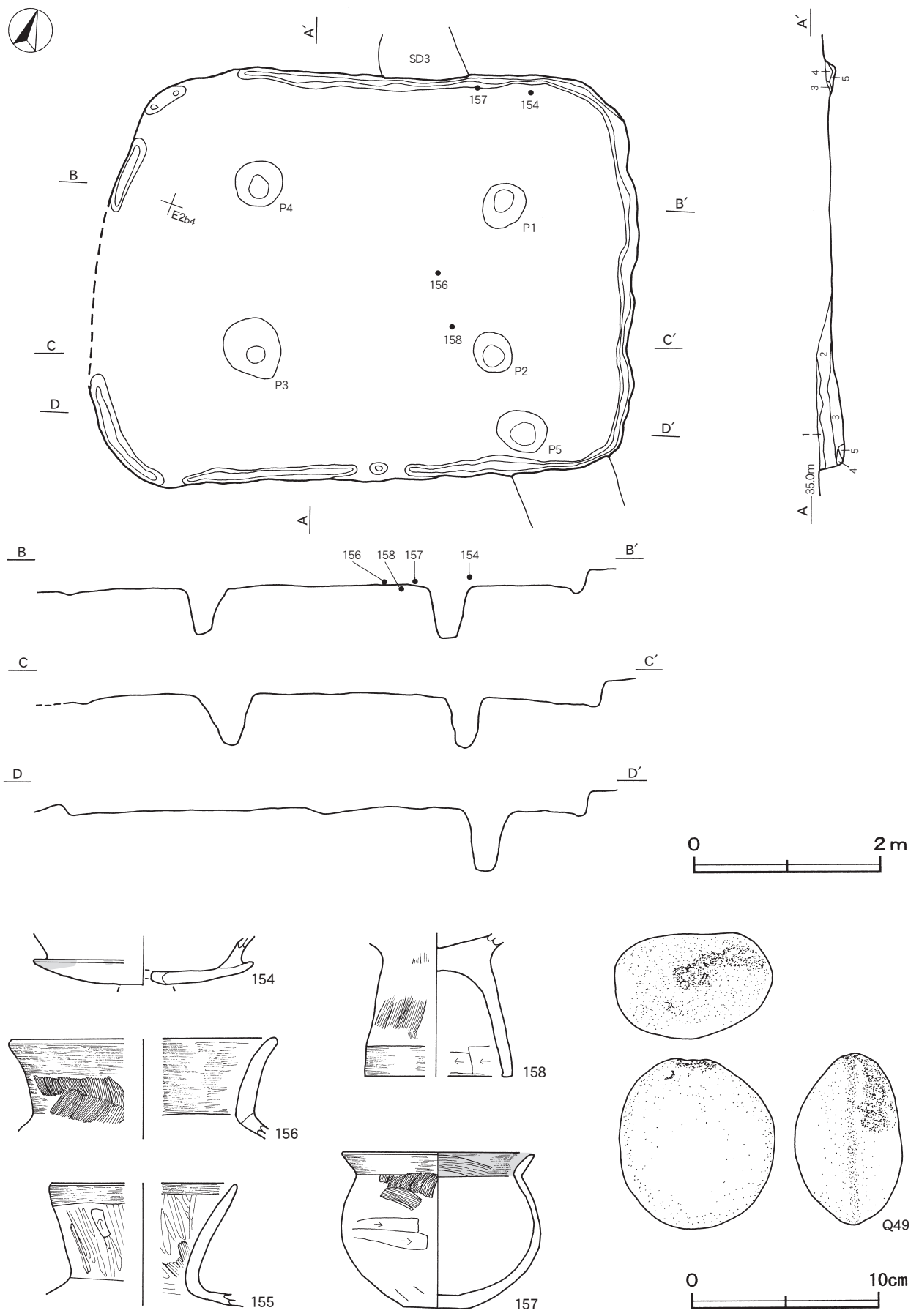
覆土 5層に分層される。削平のため、遺存状態は不良であるが、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|----------|--------------------|
| 1 黒褐色 | 粘土ブロック少量、白色粒子微量 | 4 にぶい黄褐色 | 粘土ブロック中量、炭化粒子・鉄分少量 |
| 2 黒色 | 焼土粒子中量、炭化粒子・鉄分少量、白色粒子微量 | 5 黒色 | 粘土粒子中量、炭化粒子・鉄分少量 |
| 3 褐灰色 | 粘土ブロック中量、炭化粒子・鉄分少量 | | |

遺物出土状況 土師器片267点（坏18、碗1、埴7、器台・高坏類9、壺3、甕227、台付甕2）、石器1（敲石）、礫5、種子1（桃）、炭化材が覆土下層から床面にかけて、全域に散在した状態で出土している。また、流れ込んだ縄文土器片2点、石器1点（剥片）、須恵器片7点も出土している。154・157は北壁際の覆土下層、156・158は中央部の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から前期前葉と考えられる。



第68图 第24号住居跡・出土遺物実測図

第24号住居跡出土遺物観察表（第68図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
154	土師器	器台	-	(2.7)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	器受部内・外面ナデ	北部下層	5%
155	土師器	壺	[9.8]	(6.6)	-	長石・石英・雲母・白色粒子	赤橙	普通	口縁部横ナデ 頸部外面ヘラ磨き 内面ハケ目調整後ヘラ磨き	覆土中	15%
156	土師器	甕	[14.0]	(5.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ハケ目調整	中央部床面	10%
157	土師器	小形甕	10.0	8.5	3.6	長石・石英・礫	にぶい黄橙	普通	口縁部外面横ナデ 内面ハケ目調整 体部外面ハケ目調整・ヘラ削り	北部下層	60% PL25
158	土師器	台付甕	-	(7.8)	[8.0]	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	脚部外面ハケ目調整 横ナデ 内面ヘラ削り	中央部床面	30%

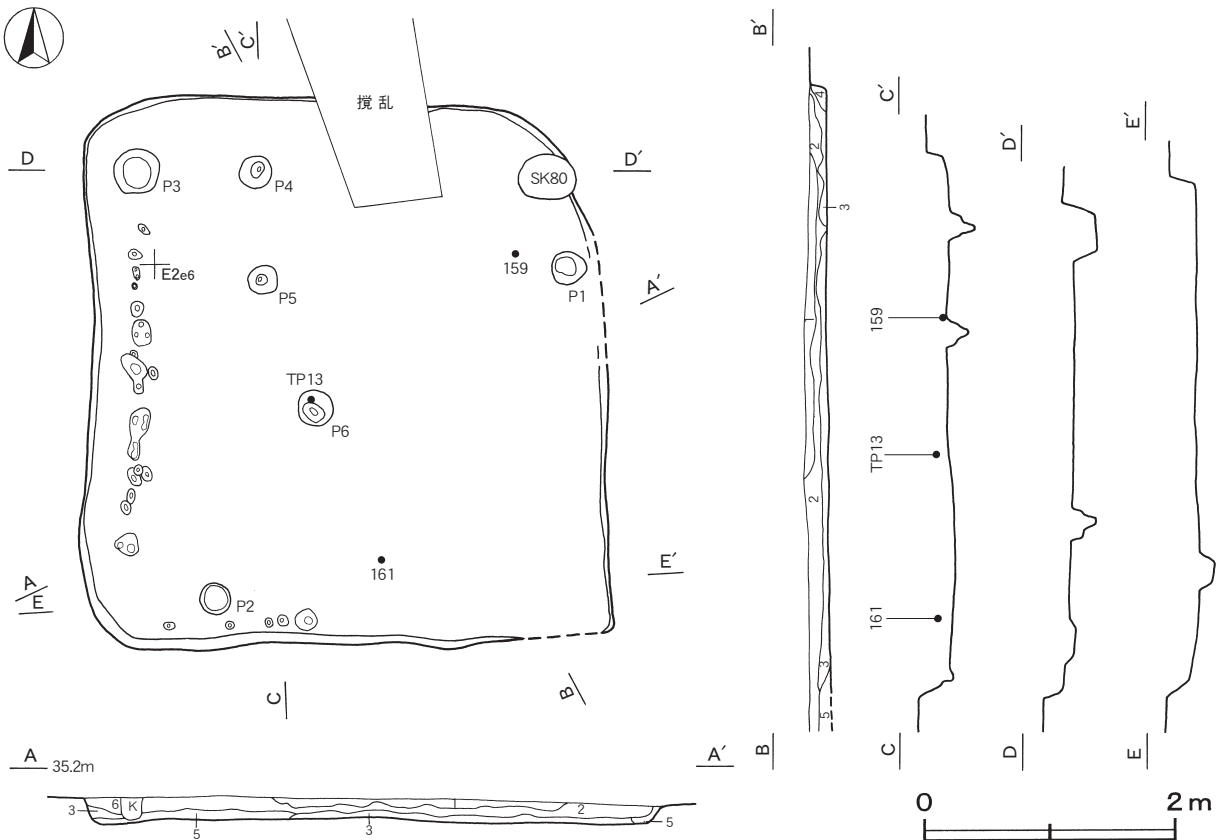
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q49	敲石	9.3	8.3	5.8	547	安山岩	敲打痕1か所	覆土中	

第25号住居跡（第69・70図）

位置 調査区南部のE2e6区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

重複関係 第80号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.30m、短軸4.19mの方形で、主軸方向はN-0°である。壁高は10~25cmで、外傾して立ち上がっている。



第69図 第25号住居跡実測図

床 ほぼ平坦である。

ピット 31か所。P1～P6は深さ9～23cmで、不規則に位置している。それぞれ柱穴であるが、性格は不明である。P7～P31は、西壁際から南壁際に沿って周回する円形及び楕円形の小ピット群で、壁柱穴と考えられる。

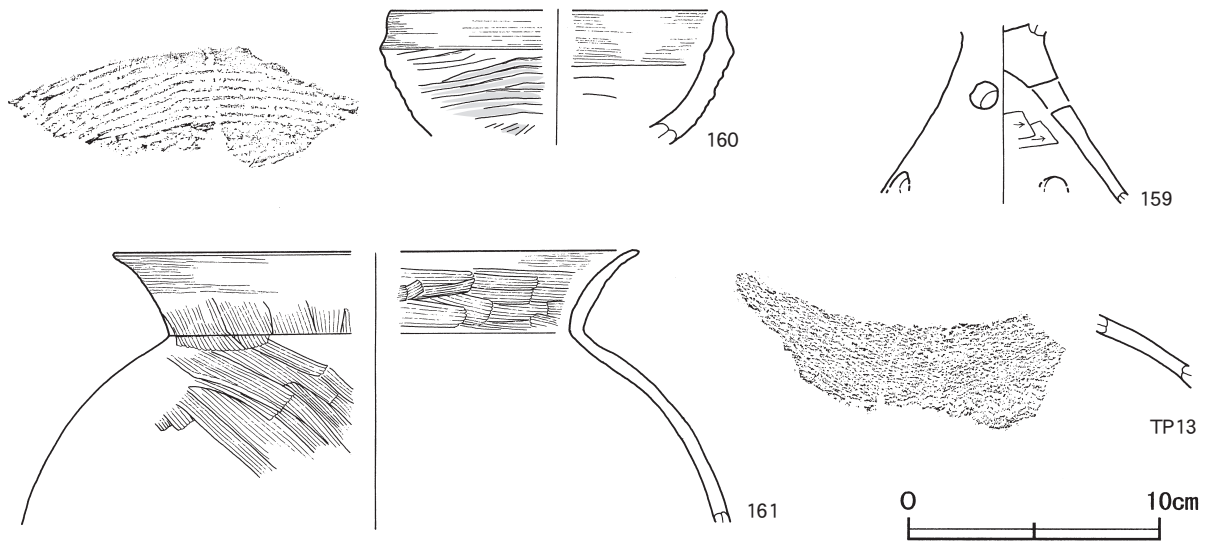
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|----------|------------------------|
| 1 黒色 | 粘土ブロック・白色粒子少量, 炭化物・鉄分微量 | 4 灰黄褐色 | 粘土粒子少量, 炭化粒子・鉄分微量 |
| 2 黒褐色 | 粘土粒子少量, 炭化物・白色粒子・鉄分微量 | 5 にぶい黄褐色 | 粘土ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 粘土ブロック中量, 炭化粒子・鉄分微量 | 6 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・鉄分少量, 白色粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片212点(坏24, 器台4, 鉢1, 壺1, 甕182), 石器2点(磨石, 敲石)が, 覆土上層から下層にかけて, 全域に散在した状態で出土している。また, 流れ込んだ弥生土器片1点, 陶器片1点も出土している。159は北東部の覆土下層から出土している。161は南部の覆土中層から破片が帯状に散在した状態で出土している。TP13は中央部の覆土中層から出土し, 隣接する第7号住居跡から出土した破片と接合している。160は流れ込んだ弥生土器片であるが, 北東部の覆土中から出土し, 本跡の西側に位置する第1号流路跡から出土した破片と接合している。

所見 時期は, 出土土器から前期前葉と考えられる。



第70図 第25号住居跡出土遺物実測図

第25号住居跡出土遺物観察表 (第70図)

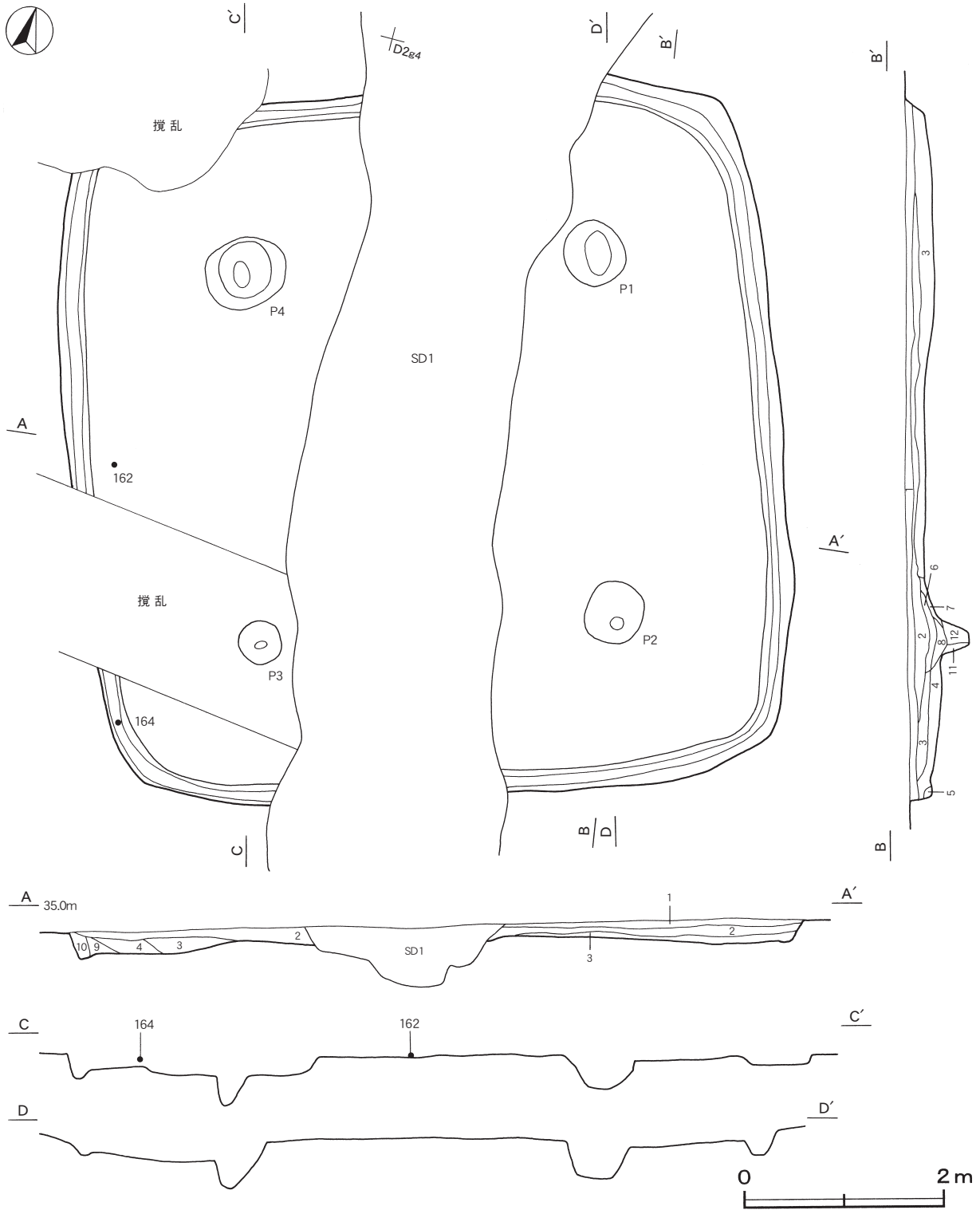
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
159	土師器	器台	-	(7.1)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	脚部上段3孔・下段3孔 内面ヘラ削り	北東部下層	40%
160	弥生土器	鉢	[13.2]	(5.3)	-	赤色粒子・礫	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ 体部内面ナデ 外面条痕文施文	覆土中	20% PL25
161	土師器	甕	[20.7]	(10.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面ハケ目調整後横ナデ 体部外面ハケ目調整	南部中層	15%
TP13	土師器	壺	長石・赤色粒子		灰黄褐	普通	網目状燃糸文施文後S字状結節文施文		中央部中層		

第26号住居跡（第71・72図）

位置 調査区北部のD2g4区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

重複関係 第1号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸7.12m、短軸6.90mの方形で、主軸方向はN-20°-Wである。壁高は6~26cmで、外傾して立ち上がっている。



第71図 第26号住居跡実測図

床 ほぼ平坦である。壁溝が全周している。

ピット 4か所。P1～P4は深さ34～45cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。

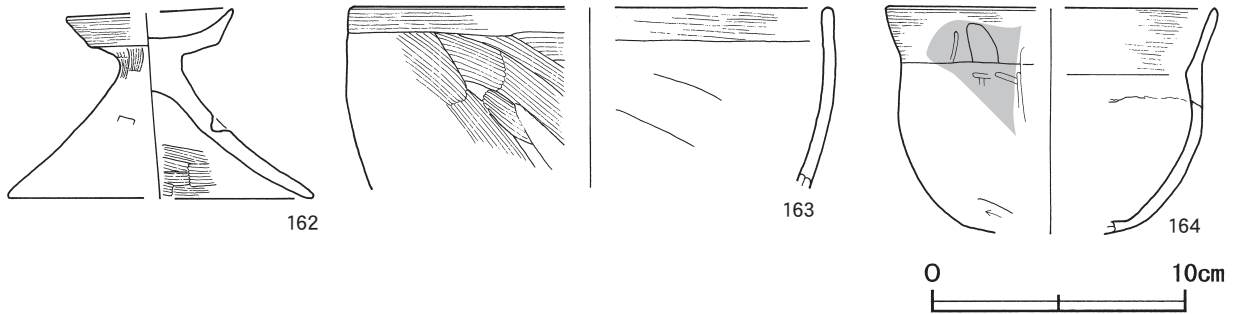
覆土 12層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------|---------|----------------------|
| 1 黒 褐色 | 炭化物・粘土ブロック・鉄分少量 | 7 黒 色 | 粘土ブロック中量, 鉄分微量 |
| 2 黒 褐色 | 粘土粒子中量, 鉄分少量, 炭化物微量 | 8 黒 色 | 粘土粒子・炭化粒子・鉄分微量 |
| 3 黒 色 | 粘土粒子多量, 鉄分少量, 炭化粒子微量 | 9 黒 褐色 | 粘土粒子多量, 鉄分少量, 炭化粒子微量 |
| 4 黒 褐色 | 粘土ブロック多量, 鉄分微量, 炭化粒子微量 | 10 褐 灰色 | 粘土ブロック多量, 鉄分微量 |
| 5 暗 褐色 | 粘土ブロック多量, 鉄分微量 | 11 褐 灰色 | 粘土ブロック中量, 鉄分微量 |
| 6 黒 色 | 粘土ブロック少量, 鉄分微量 | 12 黒 色 | 粘土粒子中量, 炭化粒子少量, 鉄分微量 |

遺物出土状況 土師器片676点(坏122, 椀2, 卍5, 器台・高坏類29, 鉢2, 甕516), 粘土塊1点, 種子3(桃), 炭化材が覆土上層から床面にかけて, 全域に散在した状態で出土している。また, 流れ込んだ縄文土器片1点, 須恵器片56点も出土している。162は西壁際の床面から出土している。164は南西コーナー部の覆土下層から出土している。

所見 時期は, 出土土器から前期前葉と考えられる。



第72図 第26号住居跡出土遺物実測図

第26号住居跡出土遺物観察表 (第72図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
162	土師器	器台	[6.5]	7.5	[12.0]	長石・石英・赤色 粒子・礫	にぶい 橙	普通	頸部外面ハケ目調整 脚部内面ハケ 目調整	西部床面	60% PL25
163	土師器	鉢	[18.6]	(7.1)	-	長石・石英・雲母・ 白色粒子	にぶい 黄橙	普通	口縁部ハケ目調整後横ナデ 体部外面 ハケ目調整 内面ナデ	覆土中	5%
164	土師器	鉢	[12.8]	(8.9)	-	長石・石英・礫	にぶい 黄橙	普通	体部外面ヘラ磨き・ヘラナデ・ヘラ 削り 内面輪積痕	南西部下層	20%

第27号住居跡 (第73・74図)

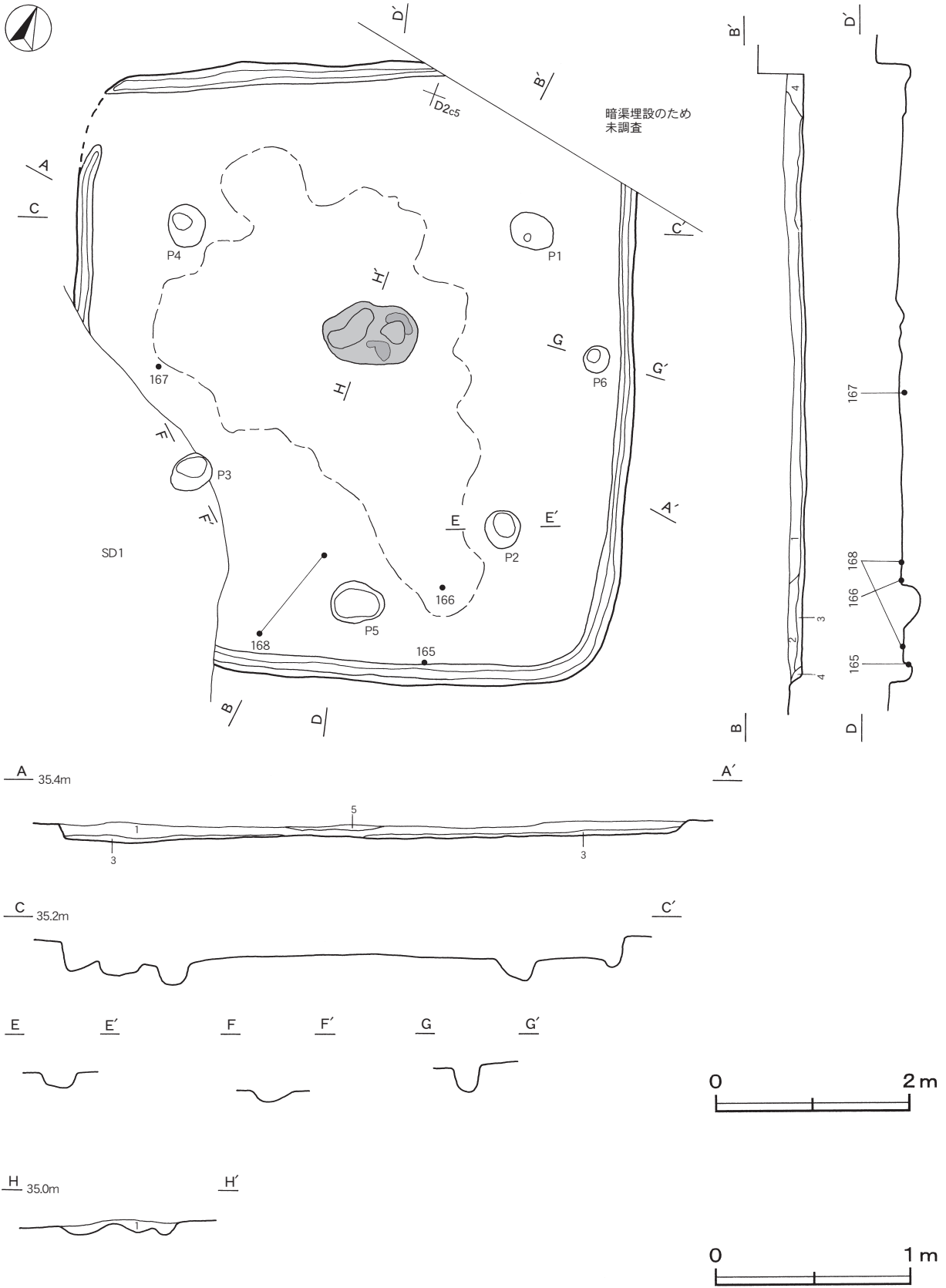
位置 調査区北部のD2c5区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

重複関係 第1号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北東コーナー部が攪乱(暗渠埋設)を受けている。確認された範囲は、長軸6.20m, 短軸5.70mである。平面形は方形で、主軸方向はN-19°-Wである。壁高は12～15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。壁溝が全周している。

炉 中央部に位置している。長径98cm, 短径65cmの楕円形で、床面を8cmほど掘り込んだ地床炉である。



第73図 第27号住居跡実測図

炉床は、火熱により赤変しているが、硬化は認められなかった。また、炉床内に、粘土塊が確認された。

炉土層解説

1 赤褐色 焼土ブロック・粘土ブロック中量, 炭化粒子少量

ピット 6か所。P1～P4は深さ20～27cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ22cmで南壁寄りのほぼ中央部に位置し、出入り口施設に伴うピットの可能性が考えられる。P6は深さ29cmで東壁寄りのほぼ中央部に位置し、性格は不明である。

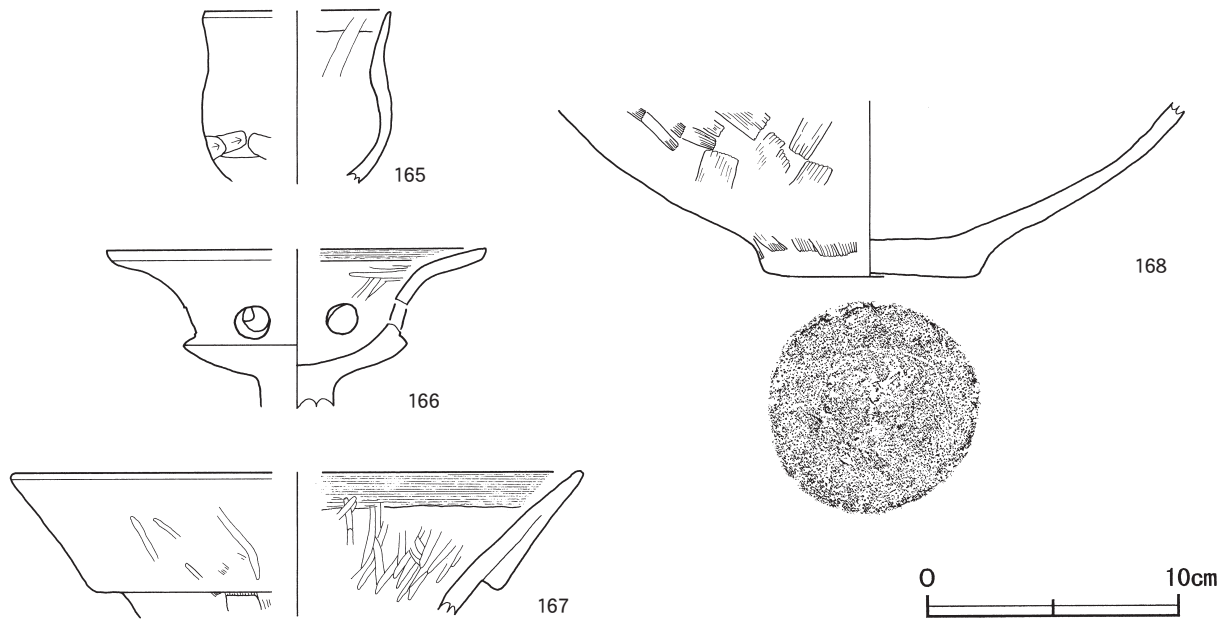
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子・白色粒子中量, 粘土ブロック少量, 鉄分微量
- 2 黒褐色 炭化粒子・粘土粒子・白色粒子少量, 鉄分微量
- 3 黒褐色 粘土ブロック・炭化粒子中量, 焼土粒子少量
- 4 黒色 粘土ブロック少量, 炭化物・白色粒子微量
- 5 黒褐色 粘土粒子・白色粒子少量, 炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片190点（坏22, 器台・高坏類27, 壺1, 甕140）が覆土上層から床面にかけて、全域に散在した状態で出土している。165は南壁際の床面から横位, 166・168は南部の床面から逆位でそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から前期前葉と考えられる。



第74図 第27号住居跡出土遺物実測図

第27号住居跡出土遺物観察表（第74図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
165	土師器	小形甕	[7.4]	(6.8)	-	長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	南部床面	40%
166	土師器	器台	[15.0]	(6.2)	-	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口縁部内面横ナデ 器受部6孔 外面ナデ 内面ヘラ磨き	南部床面	40% PL25

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
167	土師器	壺	[22.6]	(5.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部折返し 外面ヘラ磨き・ハケ目調整 内面横ナデ・ヘラ磨き	西部床面	5%
168	土師器	甕	-	(6.9)	8.4	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面ハケ目調整 底部ヘラナデ	南部床面	10%

表3 古墳時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設						覆土	主な出土遺物	時期	備考 新旧関係 (旧→新)
								主柱穴	出入口	ピット	炉・竈	貯蔵穴					
1	D 2 f6	N - 2° - E	方形	5.74×5.50	6~16	平坦	-	4	1	1	竈1	-	自然	土師器・石器	6世紀初頭		
2	D 2 g9	N - 13° - W	方形	5.29×4.99	7~15	平坦	-	4	1	1	炉1	1	自然	土師器, 石器, 炭化材	前期前葉		
3	D 2 i7	N - 29° - W	長方形	5.18×4.42	19~22	平坦	-	4	1	1	竈1	-	人為	土師器, 石器, 粘土塊, 炭化材	5世紀末葉	柱材有 4本	
4	E 2 a7	N - 12° - W	方形	(7.20)×[6.80]	3~15	平坦	-	4	1	2	竈1	-	自然	土師器・石器・土製品・炭化材	6世紀初頭	SI 6 →本跡	
5	E 2 c8	N - 4° - W	[方形]	4.82×(4.74)	10~25	平坦	-	4	2	-	炉1	1	自然	土師器・石器	前期前葉	本跡→SK11	
6	D 2 j6	N - 13° - W	方形	5.27×4.93	9~13	平坦	全周	4	-	-	炉2	1	人為	土師器, 石器	前期前葉	本跡→SI 4	
7	E 2 g7	N - 27° - W	[方形]	5.68×5.62	26~40	平坦	全周	3	-	1	炉1	-	人為 自然	土師器, 石器, 粘土塊, 炭化材	前期前葉	柱材有 2本	
8	C 2 e0	N - 2° - E	長方形	6.02×5.42	6~12	平坦	一部	4	2	-	竈1	1	人為	土師器, 石器, 種子, 炭化材	6世紀初頭		
9	C 2 e3	N - 10° - W	方形	5.60×(3.48)	6~18	平坦	一部	1	-	-	-	-	人為	土師器・石器	前期前葉	本跡→SD 1	
10	C 2 c7	N - 19° - W	方形	8.18×(7.56)	10~21	平坦	(全周)	4	2	165	-	1	自然	土師器, 石器, 石製品, 粘土塊, 炭化材	5世紀後葉	間仕切り有 本跡→SK17~20・150, SD 2	
11	D 2 c8	N - 13° - W	長方形	5.66×4.78	10~44	平坦	-	4	1	-	炉1	1	自然	土師器・石器	前期前葉	本跡→SD 2	
12	D 2 b6	N - 12° - E	方形	5.15×4.84	6~16	平坦	-	4	1	3	竈1	-	人為	土師器, 石器, 石製品	6世紀初頭		
13	C 2 b9	N - 51° - E	方形	5.13×5.10	8	平坦	-	4	-	-	竈1	-	人為	土師器・石器	7世紀前葉	本跡→SK14・15	
14	C 3 i1	N - 16° - W	[方形・長方形]	(3.60)×(1.60)	2~6	平坦	-	-	-	-	-	-	不明	土師器	後期		
15	B 3 g1	N - 44° - W	長方形	5.25×4.02	2~30	平坦	一部	2	1	2	-	-	人為	土師器	前期	本跡→SK26・45	
16	C 2 f9	N - 21° - W	[方形・長方形]	(3.54)×(2.10)	10~14	平坦	[全周]	1	-	31	-	-	人為	土師器・炭化材	6世紀前葉		
17	B 2 g7	N - 13° - W	方形	8.46×8.16	2~8	平坦	一部	4	-	2	-	1	自然	土師器	前期前葉	間仕切り有 本跡→SK22~25・39・42, SD2, SB 1	
19	B 2 d6	N - 6° - W	方形	10.22×9.96	9~20	平坦	全周	4	1	5	炉1	-	人為	土師器, 石器	前期前葉	SI22, SK108→本跡→SK87・105・109・111・117	
20	B 2 f0	N - 20° - W	方形	7.86×7.70	5~9	平坦	一部	4	1	105	竈1	1	自然	土師器, 石器, 石製品	6世紀初頭	本跡→SK16・27・73・74・98・115・121	

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考 新旧関係 (旧→新)
								主柱穴	出入口	ピット	炉・竈	貯蔵穴				
21	C 2 e5	N-3°-W	[方形・長方形]	6.65×(3.62)	2~12	平坦	一部	1	-	1	-	-	自然	土師器, 炭化材	前期前葉	本跡→SK116・124
23	D 2 b4	N-14°-E	[方形・長方形]	(4.34)×(3.96)	14~16	平坦	一部	2	-	-	竈(1)	1	人為	土師器, 石器, 土製品, 炭化材	6世紀初頭	本跡→SD 1
24	E 2 b4	N-21°-E	長方形	5.85×4.50	12~28	平坦	一部	4	-	1	-	自然	土師器, 石器, 種子, 炭化材	前期前葉	本跡→SD 3	
25	E 2 e6	N-0°	方形	4.30×4.19	10~25	平坦	-	-	-	31	-	自然	土師器・石器	前期前葉	本跡→SK80	
26	D 2 g4	N-20°-W	方形	7.12×6.90	6~26	平坦	全周	4	-	-	-	自然	土師器, 須恵器, 粘土塊, 種子	前期前葉	本跡→SD 1	
27	D 2 c5	N-19°-W	方形	6.20×5.70	12~15	平坦	(全周)	4	1	1	炉1	-	自然	土師器	前期前葉	本跡→SD 1

(2) 土坑

第4号土坑 (第75・76図)

位置 調査区南部のE 2 b5区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.12m, 短径0.80mの不整楕円形で、長径方向はN-90°-Wである。深さは10cmで、底面は凹凸である。壁は外傾して立ち上がっている。

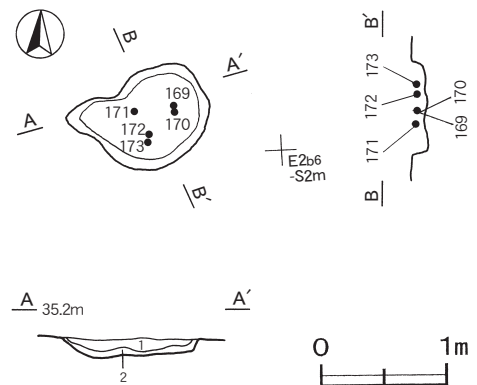
覆土 2層に分層される。各層に焼土・炭化物を含んだ人為堆積である。

土層解説

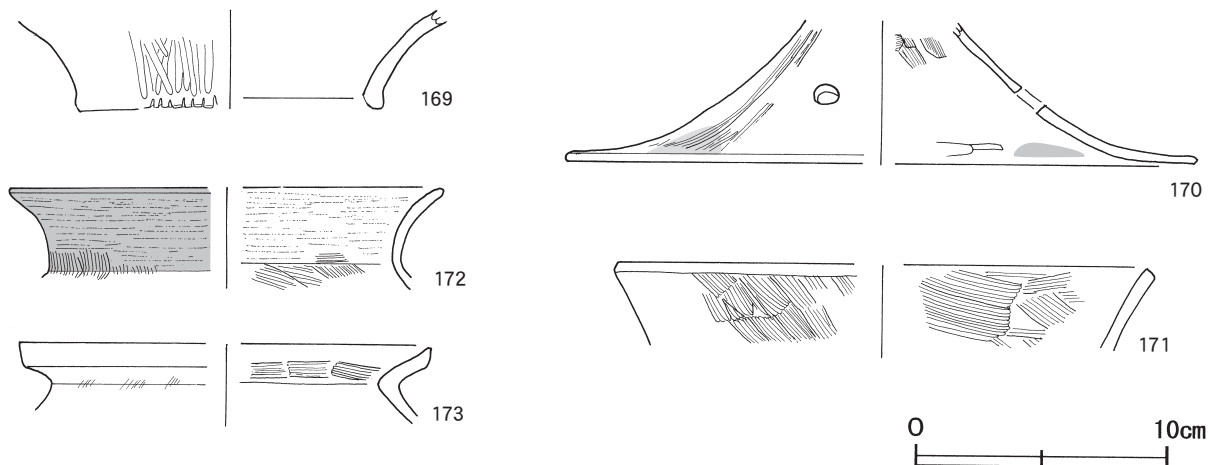
- 1 黒褐色 焼土ブロック・炭化物中量, 粘土ブロック・白色粒子少量
- 2 灰黄褐色 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物中量

遺物出土状況 土師器片18点(高坏・器台類7, 甕11), 礫1点が散在した状態で覆土中層から底面にかけて出土している。169~173はいずれも破片でまとまって出土しており、一括して廃棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から前期前葉と考えられる。



第75図 第4号土坑実測図



第76図 第4号土坑出土遺物実測図

第4号土坑出土遺物観察表 (第76図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
169	土師器	高坏	-	(3.9)	-	雲母・白色粒子	灰白	普通	坏部外面へラ磨き 坏部下端に刻目を有する	覆土下層	5%
170	土師器	高坏	-	(5.5)	[25.0]	長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい橙	普通	脚部1孔のみ確認 外面へラ磨き 内面ハケ目調整	覆土下層	10%
171	土師器	甕	[21.0]	(3.2)	-	長石	にぶい黄褐	普通	口縁端面取り 口縁部内・外面横ナデ	覆土中層	5%
172	土師器	甕	(17.0)	(4.0)	-	長石	にぶい褐	普通	口縁部内・外面ハケ目調整後横ナデ	覆土中層	5%
173	土師器	甕	[16.2]	(3.1)	-	長石	にぶい赤褐	普通	口縁端部横ナデ 口縁部外面ハケ目調整後ナデ 内面ハケ目調整	覆土下層	5%

第28号土坑 (第77図)

位置 調査区南部の E2e7区で、標高35.0m ほどの平坦部に位置している。

重複関係 第3号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長径3.50m, 短径1.58mの長楕円形で、長径方向はN-66°-Eである。深さは18cmで、底面は凹凸である。壁は緩やかに立ち上がっている。

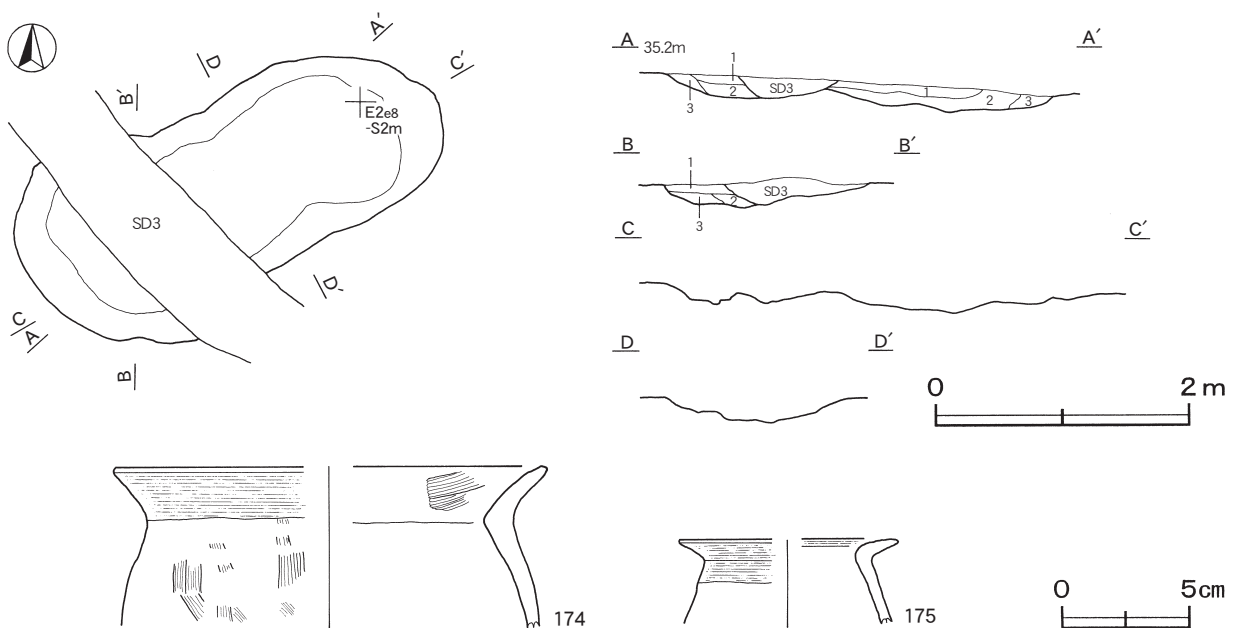
覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 黒色 炭化粒子・白色粒子少量, 焼土ブロック・粘土ブロック・鉄分微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック中量, 炭化物・焼土粒子・鉄分微量
- 3 にぶい黄褐色 粘土ブロック中量, 炭化物微量

遺物出土状況 土師器片41点(坏1, 高坏・器台類1, 壺1, 甕38), 礫1点が散在した状態で底面から出土している。また, 流れ込んだ縄文土器片2点, 須恵器片2点も出土している。174・175はそれぞれ覆土中から出土している。

所見 時期は, 出土土器から前期前葉と考えられる。



第77図 第28号土坑・出土遺物実測図

第28号土坑出土遺物観察表（第77図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
174	土師器	甕	[16.8]	(6.4)	-	長石・雲母・赤色 粒子・白色粒子	にぶい 黄橙	普通	口縁部外面横ナデ 内面ハケ目調整 体部外面ハケ目調整 内面ナデ	覆土中	5%
175	土師器	小形甕	(7.6)	(3.6)	-	長石	黄灰	普通	口縁部内・外面横ナデ	覆土中	10%

第52号土坑（第78・79図）

位置 調査区南部のD2h8区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.84m，短径1.00mの楕円形で，長径方向はN-7°-Eである。深さは52cmで，底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

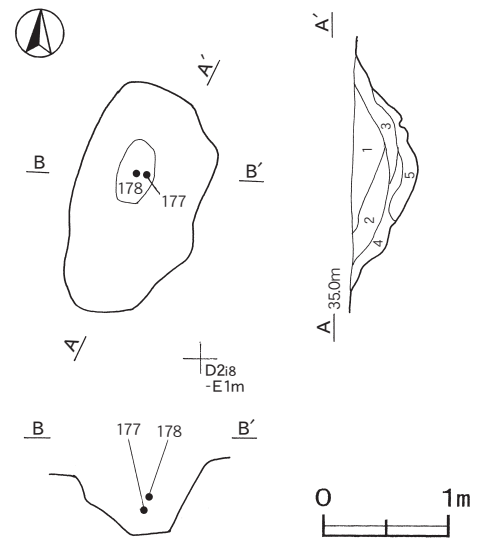
覆土 5層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

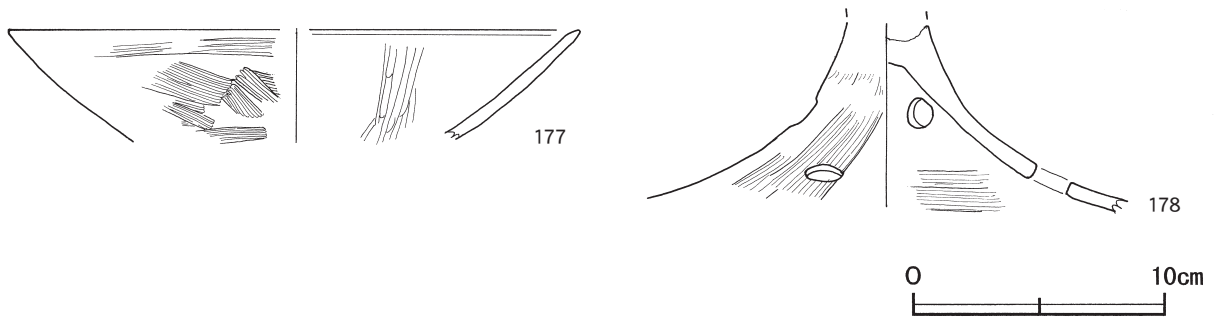
- 1 黒色 炭化粒子少量，焼土粒子・粘土粒子・白色粒子少量
- 2 黒色 炭化物・粘土ブロック少量
- 3 黒褐色 粘土粒子中量，炭化物微量
- 4 黒褐色 粘土粒子微量
- 5 黒褐色 粘土ブロック中量

遺物出土状況 土師器片88点（埴1，高坏・器台類9，壺1，甕77）が覆土中層から下層にかけて出土している。177は覆土下層，178は覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は，出土土器から前期前葉と考えられる。



第78図 第52号土坑実測図



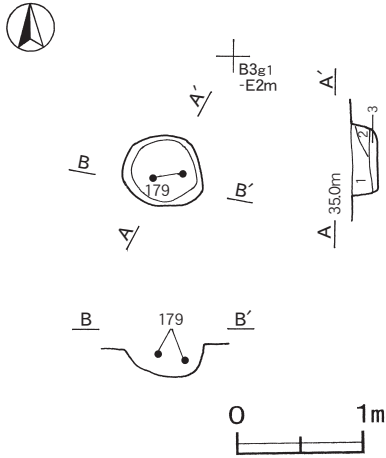
第79図 第52号土坑出土遺物実測図

第52号土坑出土遺物観察表（第78・79図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
177	土師器	高坏	[22.7]	4.3	-	白色粒子	にぶい 褐	普通	口縁部横ナデ 坏部外面ハケ目調整 内面ヘラ磨き	覆土下層	10%
178	土師器	高坏	-	(7.3)	-	長石・石英・赤色 粒子	明赤褐	普通	脚部上部3孔・下部3孔 内・外面 ハケ目調整	覆土中層	30%

第55号土坑（第80・81図）

位置 調査区北部の B3g1区で、標高35.0m ほどの平坦部に位置している。



規模と形状 長径0.65m, 短径0.58mの楕円形で、長径方向は N-62°-Wである。深さは24cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層される。不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

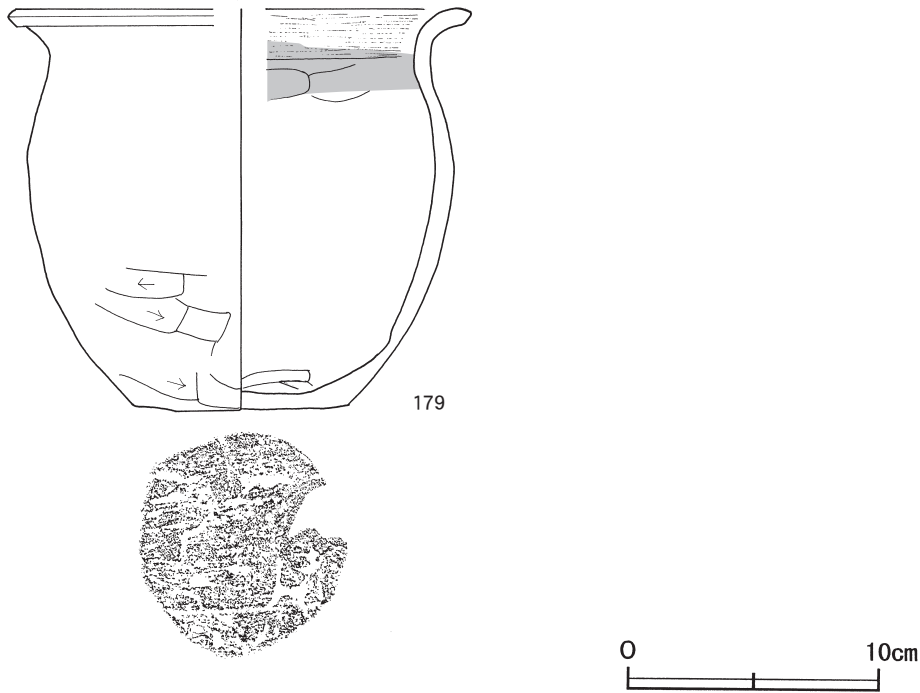
土層解説

- 1 黒色 粘土ブロック・白色粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック多量
- 3 黒色 粘土粒子少量

遺物出土状況 土師器片4点（坏1, 甕3）が覆土中層から下層にかけて出土している。179は上層から中層にかけて正位の状態で、出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀末葉と考えられる。

第80図 第55号土坑実測図



第81図 第55号土坑出土遺物実測図

第55号土坑出土遺物観察表（第81図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
179	土師器	小形甕	[17.6]	15.8	8.4	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 内面ヘラナデ 体部外面ヘ 底部ヘラ削り	覆土上層～ 中層	40%

第78号土坑（第82・83図）

位置 調査区北部のB2b8区で、標高35.0mの平坦部に位置している。

規模と形状 長径0.78m、短径0.62mの楕円形で、長径方向はN-56°-Eである。深さは17cmで、底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

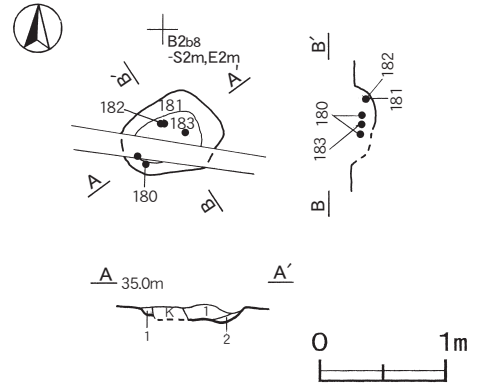
覆土 2層に分層される。攪乱を受けており、土層から堆積状況を判断することは困難であるが、覆土中に多量の遺物が混入し、覆土に焼土・炭化粒子が含まれることから人為堆積と考えられる。

土層解説

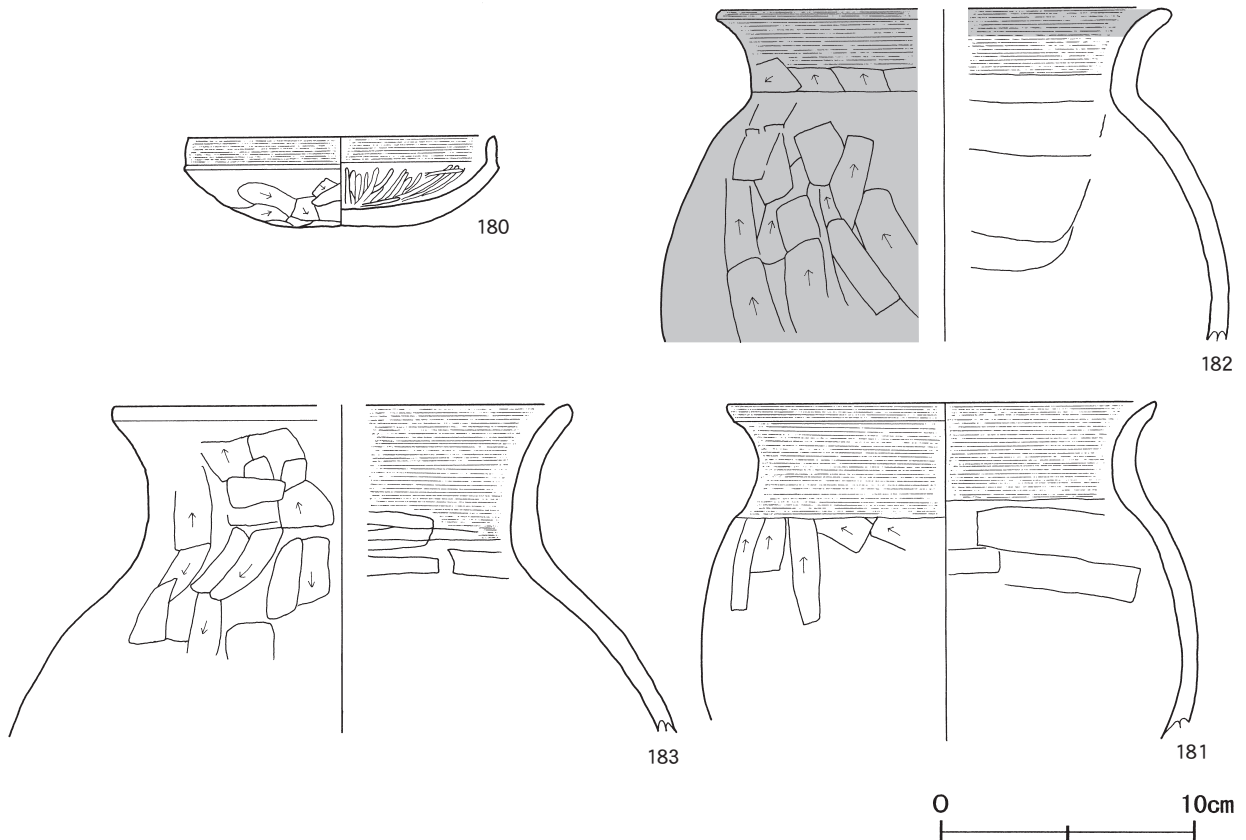
- 1 黒褐色 炭化粒子・粘土粒子・白色粒子微量
- 2 黒褐色 粘土粒子少量

遺物出土状況 土師器片28点（坏2，甕26）が散在した状態で覆土中層から下層にかけて出土している。また、流れ込んだ縄文土器片1点も出土している。180は覆土中層から正位で、181～183は覆土中層から下層にかけて、それぞれ逆位で出土している。一括して廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第82図 第78号土坑実測図



第83図 第78号土坑出土遺物実測図

第78号土坑出土遺物観察表（第83図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
180	土師器	坏	12.0	3.5	5.5	白色粒子	にぶい 黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 内面ヘラ磨き	体部外面ヘ ラ磨き	覆土中層 95% PL28

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
181	土師器	甕	16.8	(13.6)	-	長石・赤色粒子・白色粒子	にぶい灰黄褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土下層	30%
182	土師器	甕	[17.9]	(13.1)	-	長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部外面ヘラ削り後横ナデ 内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土下層	20%
183	土師器	甕	[17.8]	(12.9)	-	長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外面ヘラ削り 内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土中層	20%

第83号土坑 (第84・85図)

位置 調査区北部の B2f3区で、標高35.0mの平坦部に位置している。

規模と形状 長径4.80m、短径2.40mの不整楕円形で、長径方向はN-25°-Eである。深さは32cmで、底面は凹凸である。壁は外傾して立ち上がっている。

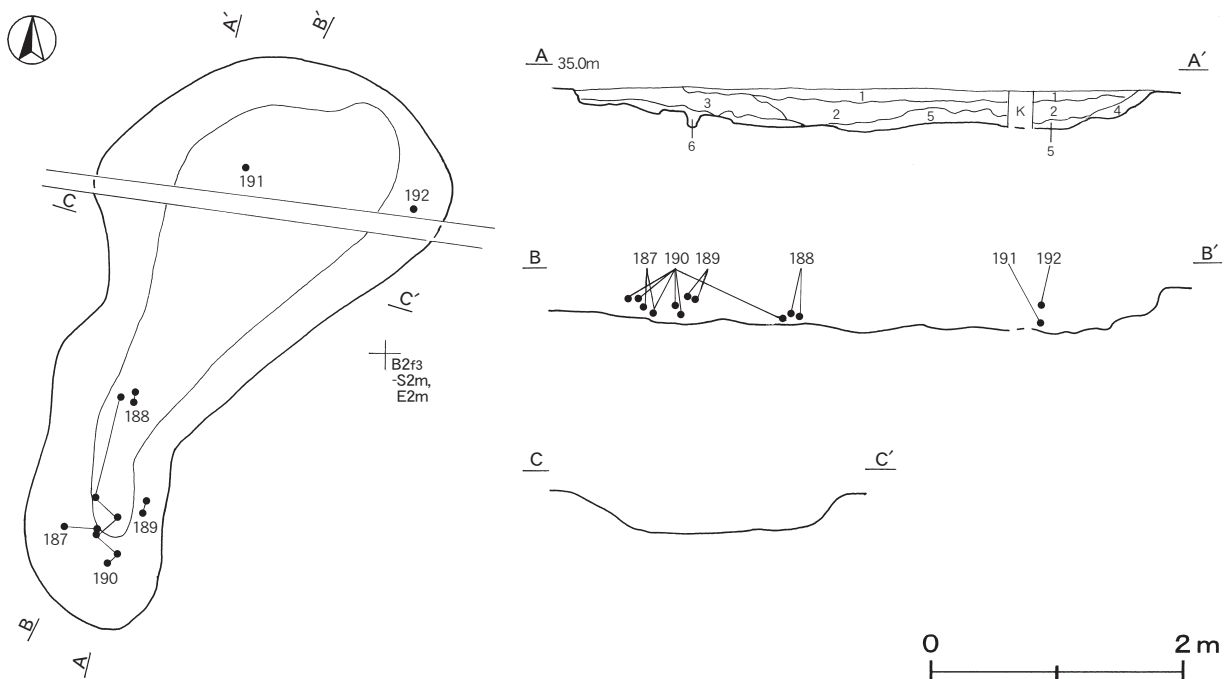
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積と考えられる。

土層解説

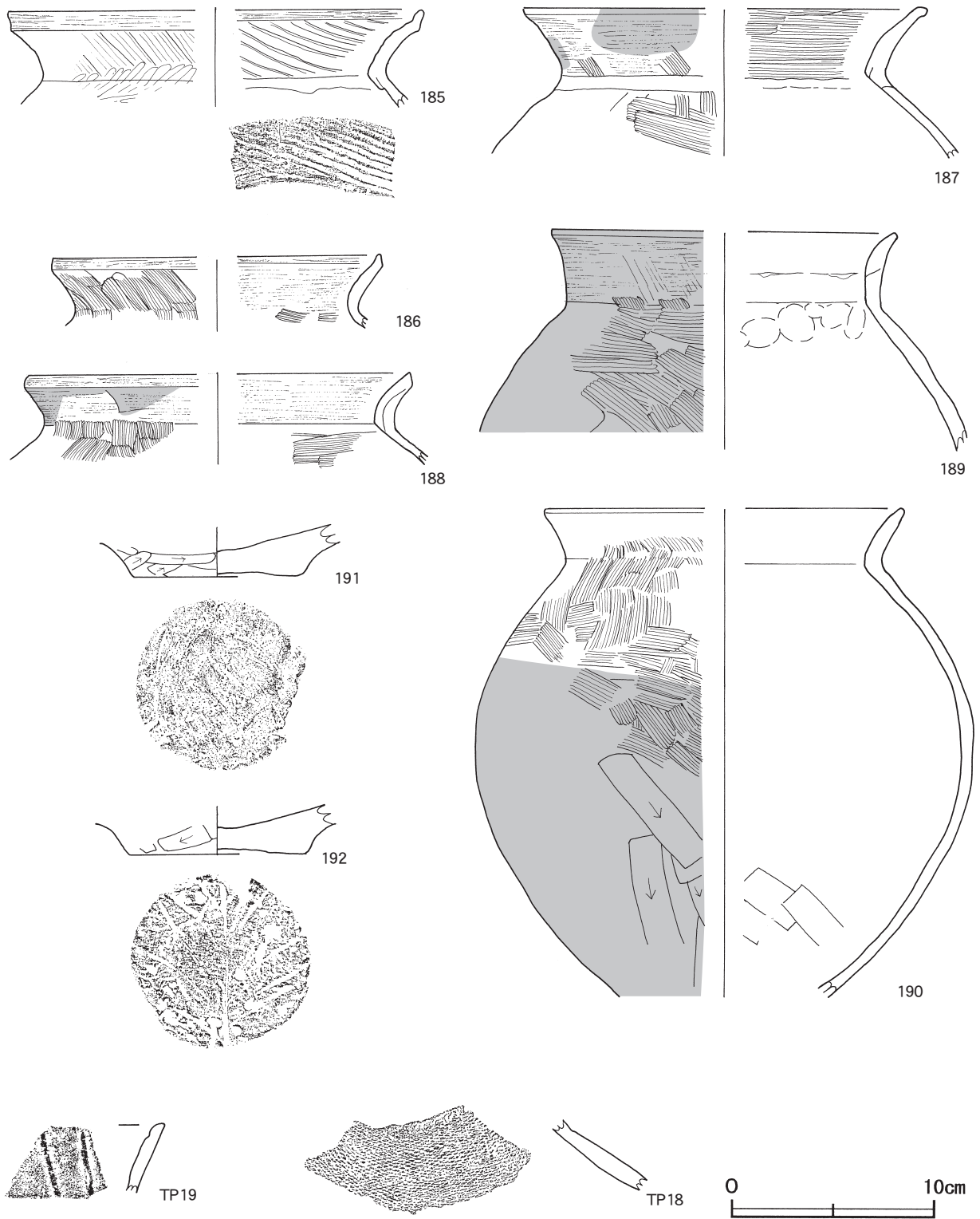
- | | | | |
|-------|--------------------|-------|----------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量 | 4 黒褐色 | 焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | 焼土粒子中量, 炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 6 黒褐色 | 粘土ブロック多量, 砂粒・鉄分少量 |

遺物出土状況 土師器片218点(埴8, 高坏・器台類15, 壺7, 甕188)が、覆土中層から下層にかけて散在した状態で出土している。187~189は南部の覆土中層から下層にかけて、191・192は北部の覆土中層から下層にかけて、それぞれ出土している。TP18・TP19は覆土中から出土している。190は南部を中心に覆土中層から下層にかけて散在しており、埋没していく過程でそれぞれ投棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から前期前葉と考えられる。



第84図 第83号土坑実測図



第85図 第83号土坑出土遺物実測図

第83号土坑出土遺物観察表 (第85図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
185	土師器	甕	[20.5]	(4.8)	-	長石・石英・白色 粒子	灰褐	普通	口縁端部横ナデ 口縁部外面ハケ目 調整 内面粗いハケ目調整	覆土中	5% PL37

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
186	土師器	甕	[16.1]	(3.6)	-	長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい橙	普通	口縁端部横ナデ 口縁部外面ハケ目調整 内面横ナデ・ハケ目調整 輪積痕	覆土中	5%
187	土師器	甕	[20.0]	(7.4)	-	長石・雲母・白色粒子	にぶい黄褐	普通	口縁端部横ナデ 口縁部外面ハケ目調整後ナデ 内面ハケ目調整 体部外面ハケ目調整 輪積痕	覆土下層	5%
188	土師器	甕	[18.8]	(4.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁端部横ナデ 口縁部横ナデ 体部内・外面ハケ目調整	覆土下層	5% PL37
189	土師器	甕	[17.0]	(10.6)	-	長石・雲母・礫	にぶい橙	普通	口縁端部横ナデ 口縁部外面ハケ目調整後ナデ 内面横ナデ・輪積痕 体部外面ハケ目調整 内面指頭圧痕	覆土中層	10%
190	土師器	甕	[17.4]	(24.1)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外面ハケ目調整後ナデ 内面ナデ 体部外面上位ハケ目調整 下位ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土中層～下層	30%
191	土師器	甕	-	(2.5)	8.4	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面・底部ヘラ削り	覆土下層	10%
192	土師器	甕	-	(2.4)	8.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り 底部木葉痕	覆土中層	10%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP18	土師器	壺	石英・小礫	灰黄褐	普通	網目状捻糸文施文 円形の赤彩2か所	覆土中	PL37
TP19	土師器	壺	石英	にぶい黄橙	普通	口縁部 棒状浮文貼付	覆土中	PL37

第99号土坑（第86・87図）

位置 調査区北部の B2i4区で、標高35.0mの平坦部に位置している。

規模と形状 長径0.71m、短径0.52mの隅丸長方形で、長径方向はN-80°-Eである。深さは18cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

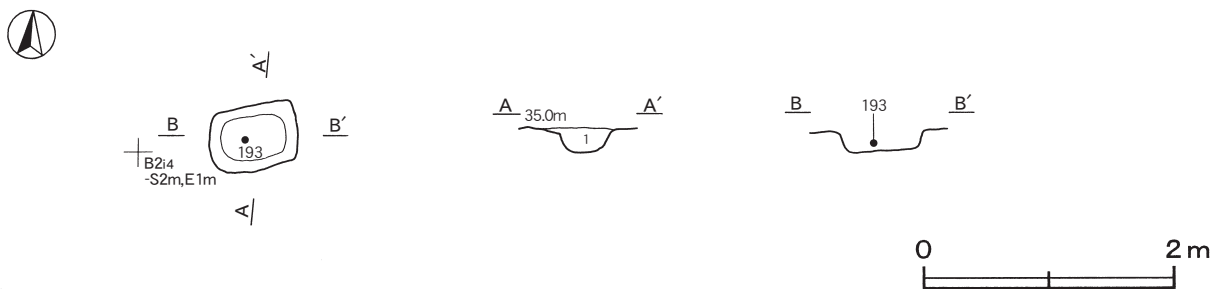
覆土 単一層である。多量に遺物が含まれていることから人為堆積と考えられる。

土層解説

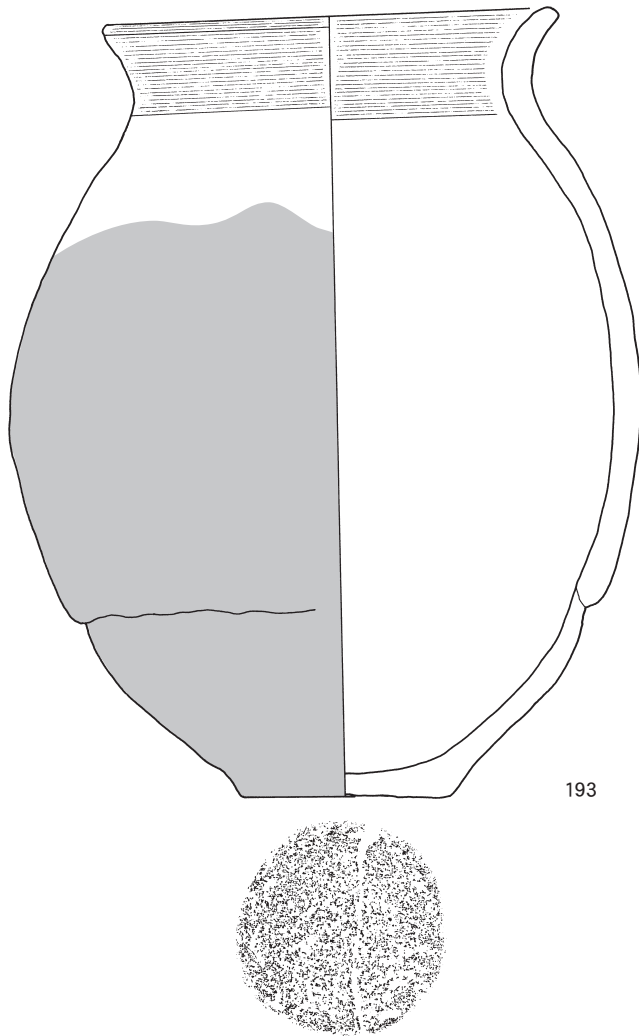
1 黒褐色 粘土ブロック・白色粒子少量

遺物出土状況 土師器片21点（甕）が出土している。193は覆土上層から底面にかけて横位で出土している。一括して廃棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から6世紀末葉と考えられる。



第86図 第99号土坑実測図



第87図 第99号土坑出土遺物実測図

第99号土坑出土遺物観察表 (第87図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
193	土師器	甕	17.7	31.3	8.1	長石・石英	明褐色	普通	口縁部内・外面横ナデ面磨滅により調整不明	体部内・外輪積痕	覆土上層～底面	80%

第115号土坑 (第88図)

位置 調査区北部の B2 f9区で、標高35.0m ほどの平坦部に位置している。

重複関係 第20号住居跡を掘り込み、第73号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径3.82m, 短径3.32mの不整楕円形で、長径方向はN-32°-Eである。深さは18cmで、底面は凹凸である。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

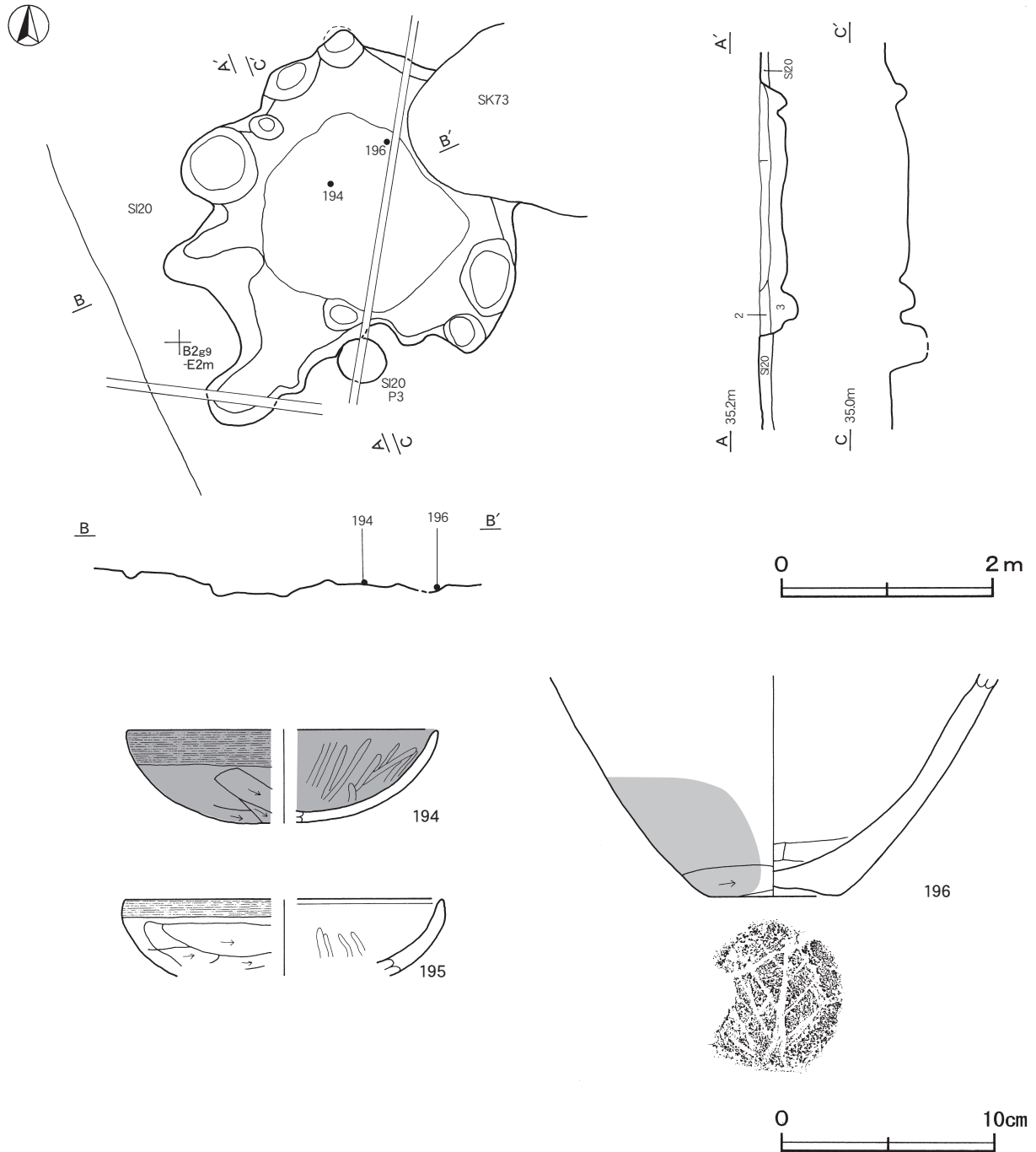
1 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量

3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量

2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片42点（坏19, 甕21, 鉢2）, 礫7点が出土している。194・196は, それぞれ底面から出土している。

所見 時期は, 出土土器から7世紀前葉と考えられる。



第88図 第115号土坑・出土遺物実測図

第115号土坑出土遺物観察表（第88図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
194	土師器	坏	[14.5]	(4.4)	-	白色粒子	黒褐	普通	口縁部外面横ナデ 内面ヘラ磨き	底面	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
195	土師器	甕	[14.5]	(3.6)	-	石英・雲母	灰白	普通	口縁部外面横ナデ 体部外面へら削り 内面へら磨き	覆土中	15%
196	土師器	甕	-	(10.5)	6.1	長石・石英・礫	にぶい赤褐	普通	体部外面へら削り 内面へらナデ 底部木葉痕	底面	10%

第135号土坑（第89・90図）

位置 調査区南部のD2g2区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

重複関係 第130・133号土坑を掘り込み、第132号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.87m、短径1.41mの不整楕円形で、長径方向はN-82°-Eである。深さは40cmで、底面は皿状である。壁は緩やかに立ち上がっている。

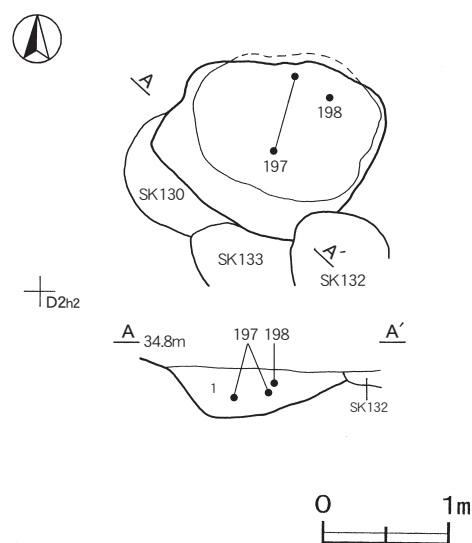
覆土 単一層である。多量の粘土ブロックを含んでいることから人為堆積と考えられる。

土層解説

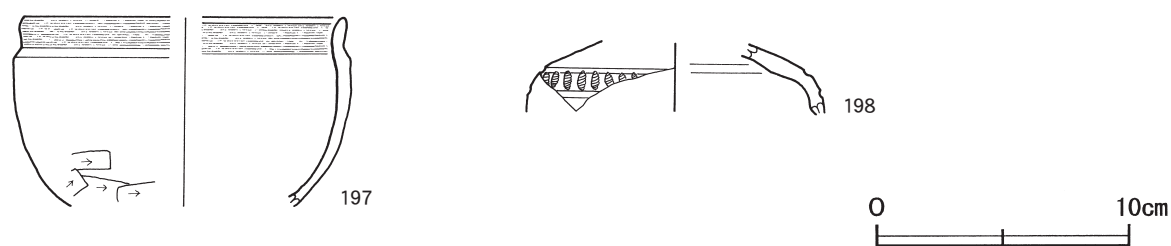
1 黒褐色 粘土ブロック多量、鉄分中量、白色粒子微量

遺物出土状況 土師器片33点（坏10、碗6、甕17）、須恵器片1点（甕）、礫1点が出土している。197・198はそれぞれ覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀末葉と考えられる。



第89図 第135号土坑実測図



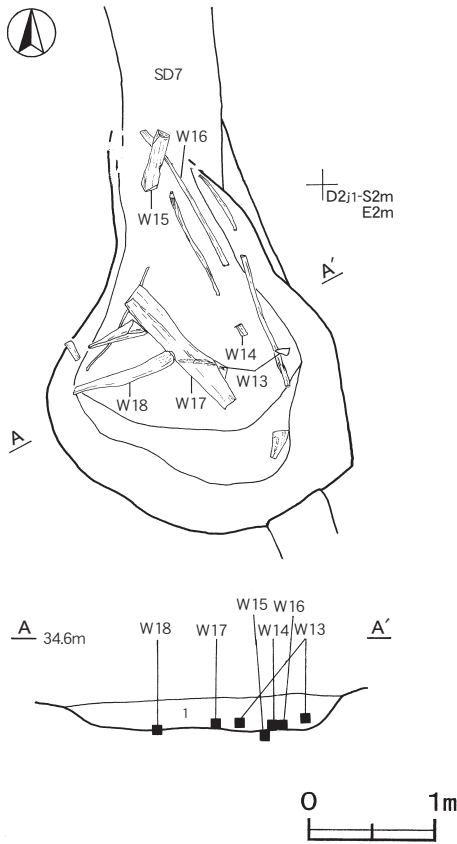
第90図 第135号土坑出土遺物実測図

第135号土坑出土遺物観察表（第90図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
197	土師器	碗	[12.7]	(7.4)	-	赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ナデ・へら削り 内面ナデ	覆土中層	25%
198	須恵器	甕	-	(2.8)	-	長石・石英・雲母	暗灰黄	普通	体部内・外面ロクロナデ 櫛歯状工具による圧痕	覆土中層	5%

第141号土坑（第91～94図）

位置 調査区南部のD2j1区で、標高34.0mほどの第1号流路の中央部東側に位置している。



重複関係 第1号流路内に位置し、7号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長径3.33m、短径2.33mほどの不整楕円形で、長径方向はN-9°-Wである。深さは26cmで、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。

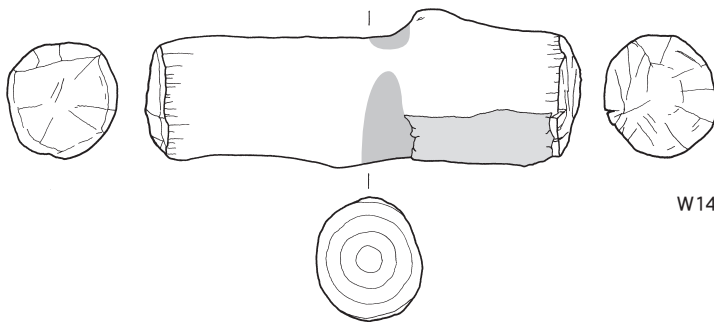
覆土 単一層である。砂粒が均一に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説
1 黒色 砂粒中量

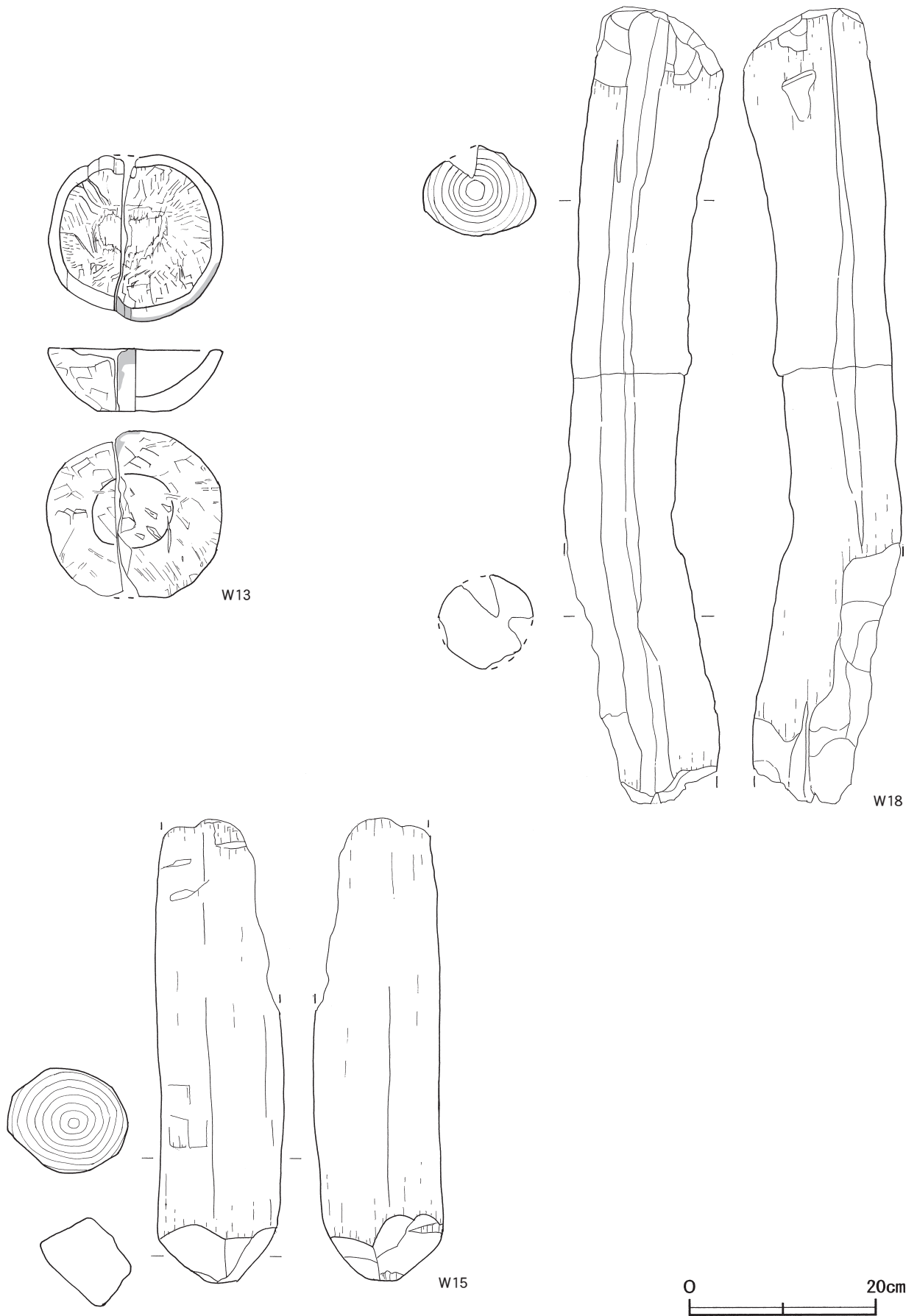
遺物出土状況 土師器片24点（坏7，埴1，高坏・器台類1，甕15），木器・木製品6点（刳物1，板材1，柱材1，両端加工材1，杭2）が出土している。W13は2片に割れた状態で出土している。W14～W18はほぼ南北に同一方向を向いて出土しており、第1号流路の流れの影響があったものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から5世紀末葉と考えられる。

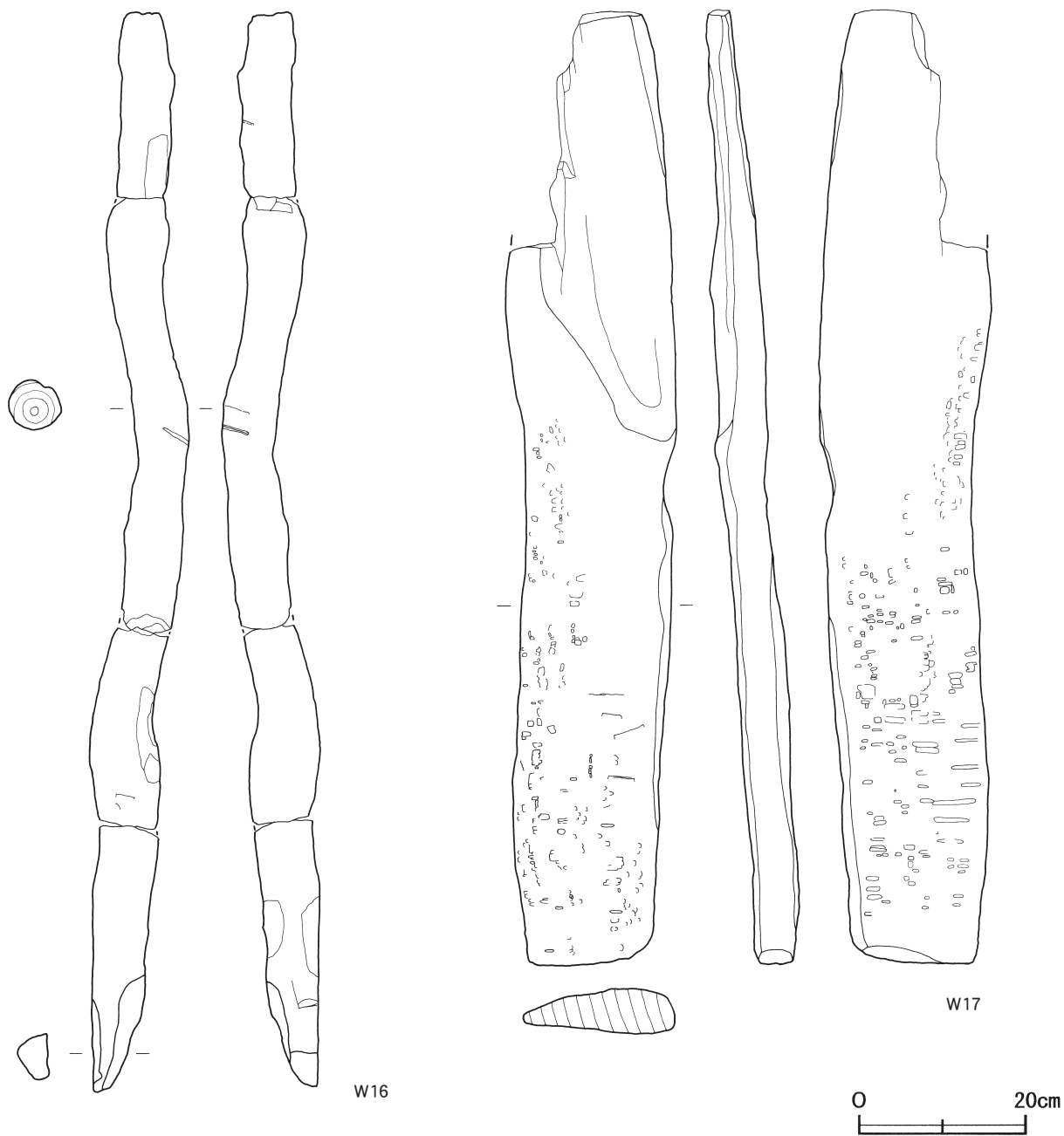
第91図 第141号土坑実測図



第92図 第141号土坑出土遺物実測図（1）



第93图 第141号土坑出土遗物实测图（2）



第94図 第141号土坑出土遺物実測図（3）

第141号土坑出土遺物観察表（第92～94図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
199	土師器	坏	[14.0]	(4.3)	-	長石・石英・雲母・白色粒子	灰黄	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	覆土中	15%
200	土師器	坏	[14.2]	(3.9)	-	長石・石英・雲母	赤褐	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	覆土中	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W13	容器	刳物未製品	18.6	6.8	7.9	626.0	ムクロジ	横木取り 内・外面削り加工	覆土下層	★ PL52

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W14	部材	両端加工材	17.5	6.3	4.4	289.0	コナラ属 クヌギ節	芯持丸木 両端部削り加工	底面	★ PL52
W15	部材	丸材	(49.8)	13.8	11.4	(4210.0)	コナラ属 アカガシ亜種	芯持丸木 先端部五方向から求心状の削り加工	底面	
W16	部材	丸材	134.0	7.3	7.0	3840.0	コナラ属 クヌギ節	芯持丸木 先端部三方向から求心状の削り加工	覆土下層	
W17	部材	板材	(115.0)	20.4	5.8	(6310.0)	コナラ属 コナラ節	柁目 両面削り調整痕	底面	
W18	部材	角材	(85.2)	14.8	10.3	(6780.0)	コナラ属 アカガシ亜種	芯持丸木 両端部削り加工	底面	

表4 古墳時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係 (旧→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ (cm)					
4	E 2 b5	N-90°-W	不整楕円形	1.12×0.80	10	外傾	凹凸	人為	土師器	
28	E 2 e7	N-66°-E	長楕円形	(3.50)×(1.58)	18	緩斜	凹凸	自然	土師器, 縄文土器, 須恵器	本跡→SD 3
52	D 2 h8	N-7°-E	楕円形	1.84×1.00	52	外傾	皿状	人為	土師器	
55	B 3 g1	N-62°-W	楕円形	0.65×0.58	24	外傾	平坦	人為	土師器	
78	B 2 b8	N-56°-E	楕円形	0.78×0.62	17	外傾	皿状	人為	土師器, 縄文土器	
83	B 2 f3	N-25°-E	不整楕円形	4.80×2.40	32	外傾 緩斜	凹凸	自然	土師器	
99	B 2 i4	N-80°-E	隅丸長方形	0.71×0.52	18	外傾	平坦	人為	土師器	
115	B 2 f9	N-32°-E	不整楕円形	(3.82)×(3.32)	18	緩斜	凹凸	自然	土師器	SI20→本跡→SK73
135	D 2 g2	N-82°-E	不整楕円形	1.87×1.41	40	緩斜	皿状	人為	土師器, 須恵器	SK130-6 K133→本跡 →SK132
141	D 2 j1	N-9°-W	不整楕円形	(3.33)×2.33	26	緩斜	平坦	自然	土師器, 木器・木製品	第1号流路跡→本跡→SD 7

(3) 溝跡

第3号溝跡 (第3・95図)

位置 調査区南部のD 2 j3～E 2 e7区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

重複関係 第24号住居跡、第28・31号土坑を掘り込み、第1号溝に掘り込まれている。

規模と形状 D 2 j3区から南東方向 (N-42°-W) に直線的にE 2 e7区まで延びている。確認された長さは26.7mで、上幅0.5～1.3m、下幅0.3～0.9mで、深さは8～20cmである。底面は南東方向に緩やかに傾斜しており、断面形は弧状を呈している。

覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

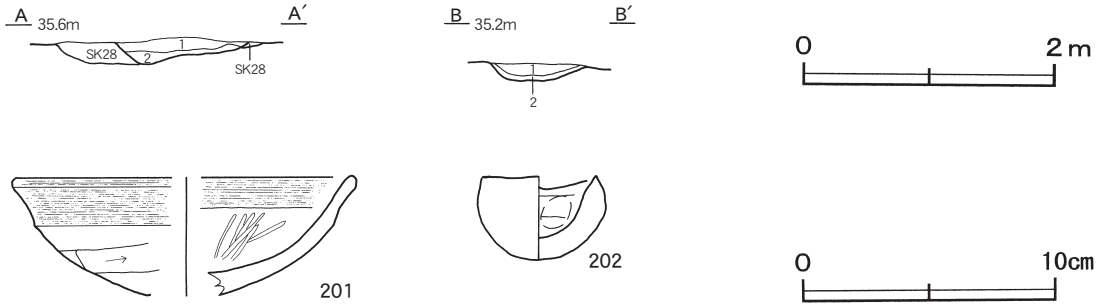
土層解説

1 黒色 粘土粒子少量、焼土ブロック・白色粒子微量

2 にぶい黄褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量

遺物出土状況 土師器片189点 (坏23, 埴2, 高坏・器台類4, 壺1, 甕159), 手捏土器1点が散在した状態で出土している。また、混入した縄文土器片2点 (深鉢), 須恵器片6点 (坏2, 高台付坏1, 甕3) も出土している。201・202は覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、重複関係及び主となる出土土器から、古墳時代前期以降に掘削され、6世紀前葉まで機能していたと推測される。第1号流路跡方向に延びており、利水に伴う水路の可能性が考えられる。



第95図 第3号溝跡・出土遺物実測図

第3号溝跡出土遺物観察表（第95図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
201	土師器	坏	[13.2]	(4.6)	-	長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	覆土中層	10%
202	手捏土器	-	4.1	3.3	-	長石・赤色粒子	明黄褐	普通	外面ナデ 内面指頭圧痕	覆土中層	100%

第4号溝跡（第3・96・97図）

位置 調査区南部のD2j3～E2j7区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

重複関係 第12号溝跡を掘り込んでおり、第1号溝に掘り込まれている。

規模と形状 D2j3区から南東方向（N-30°-W）に直線的にE2j7区まで延び、さらに調査区域外に延びている。確認された長さは41.0mで、上幅1.0～2.6m、下幅0.2～1.2mで、深さは38～50cmである。底面は南東方向に緩やかに傾斜しており、断面形はU字状を呈している。

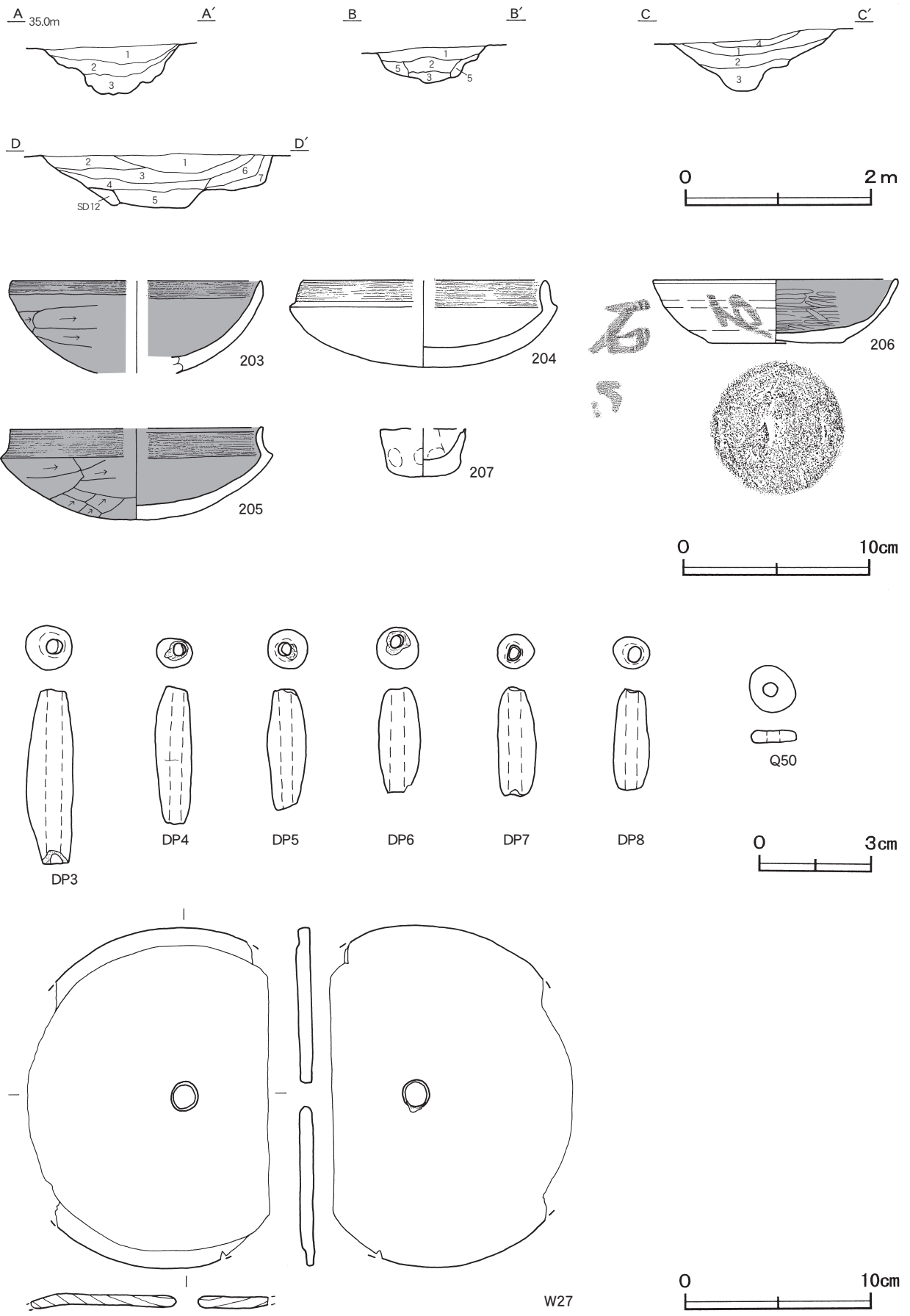
覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

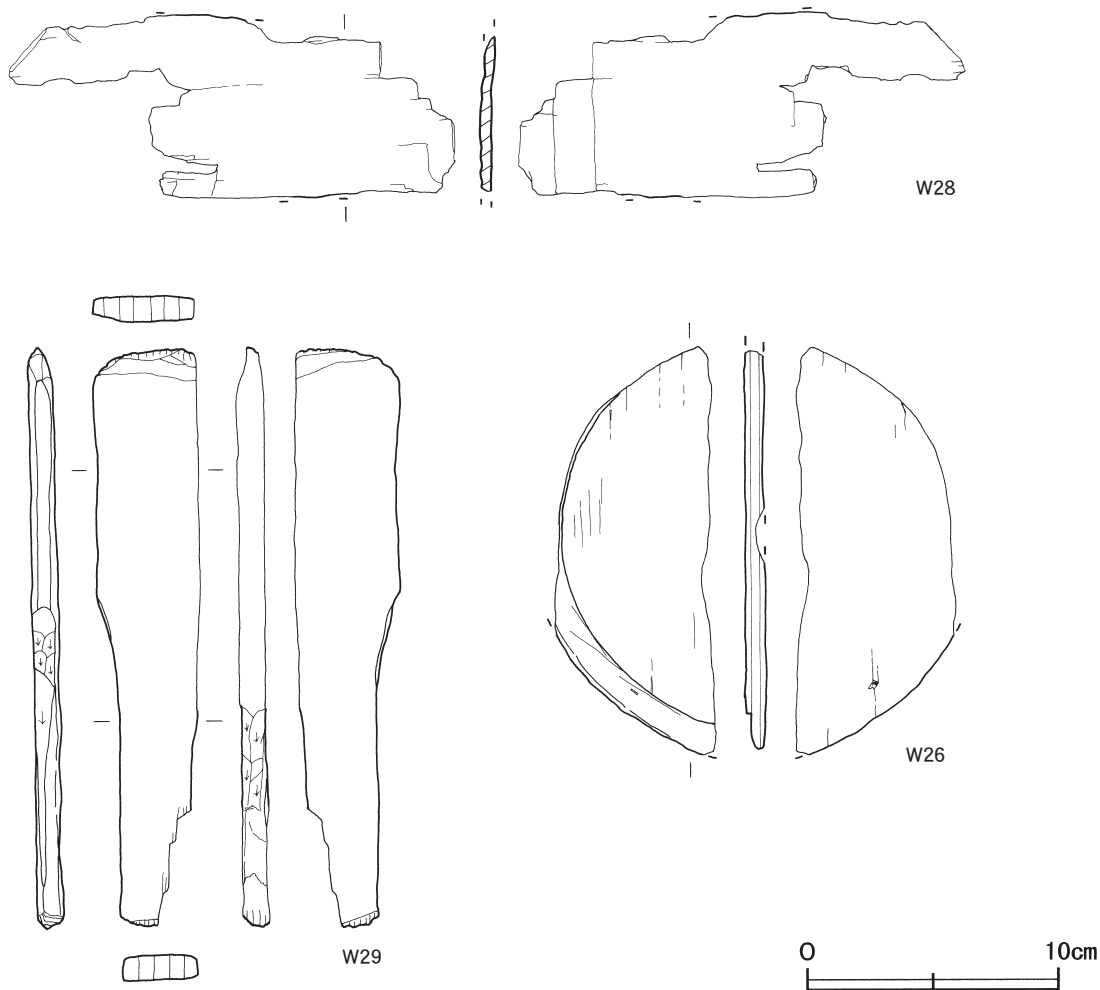
- | | |
|---------------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量 | 5 黒褐色 焼土粒子中量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 粘土粒子中量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量 | 7 灰黄褐色 粘土粒子中量、砂粒少量、白色粒子微量 |
| 4 黒褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 縄文土器片5点、土師器片807点（坏268、椀3、埴7、高坏・器台類27、壺4、甕498）、須恵器片40点（坏20、高台付坏2、盤2、蓋2、瓶類2、甕12）、手捏土器1点、土製品6点（管状土錘）、石器3点（磨石）、石製品1点（白玉）、金属製品1点（古銭）、木器・木製品10点（曲物6、甌1、板状木製品2、串状木製品1）、礫26点が散在した状態で出土している。204・205は覆土下層からそれぞれ出土している。206・W26～W29は、覆土上層から出土しており、奈良・平安時代の遺物と考えられることから第1号流路跡からの混入と推測される。

所見 時期は、主となる出土土器から6世紀後葉まで機能していたと推測される。埋没する過程でくぼ地であった時期に第1号流路跡の遺物が混入したと考えられる。また、第1号流路跡に平行に延びており、利水に伴う水路の可能性が考えられる。



第96图 第4号沟迹·出土遗物实测图



第97図 第4号溝跡出土遺物実測図

第4号溝跡出土遺物観察表（第96・97図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
203	土師器	坏	[13.3]	(5.0)	-	白色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り	覆土中	10%
204	土師器	坏	[13.0]	4.7	-	黒色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部内・外面摩滅の為調整不明	覆土下層	60%
205	土師器	坏	[13.5]	5.0	-	長石・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り	覆土下層	30%
206	土師器	坏	[12.9]	3.4	7.0	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部ヘラナデ	覆土上層	60% PL28 墨書「石□」
207	手捏土器	-	[4.6]	2.6	2.4	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	内・外面指頭押圧痕 指ナデ	覆土上層	50%

番号	器種	長さ	最大径	孔径	重量	材質	手法の特徴	出土位置	備考
DP 3	管状土錘	4.80	1.20	0.40	(5.20)	粘土	ナデ 一部欠損	覆土中	
DP 4	管状土錘	3.70	1.00	0.30	(2.40)	粘土	ナデ 一部欠損	覆土中	
DP 5	管状土錘	3.30	1.10	0.30	(2.60)	粘土	ナデ 一部欠損	覆土中	
DP 6	管状土錘	2.80	1.10	0.30	(2.70)	粘土	ナデ 一部欠損	覆土中	

番号	器種	長さ	最大径	孔径	重量	材質	手法の特徴	出土位置	備考
DP 7	管状土錘	2.90	1.00	0.30~0.40	(2.20)	粘土	ナデ 一部欠損	覆土中	
DP 8	管状土錘	2.80	0.90	0.40	1.90	粘土	ナデ	覆土中	

番号	器種	径	最大厚	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q50	白玉	1.20	0.33	0.40	0.57	頁岩	側面円筒状 片面穿孔 鉄分付着	覆土中	

番号	種別	器種	径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W26	容器	曲物底板・蓋板類	[18.0]	1.0	(56.8)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ	覆土上層	
W27	容器	甌	18.4	(0.8)	(101.2)	アスナロ属	板目 中央部に円孔穿孔 孔の周辺炭化	覆土上層	★ PL46

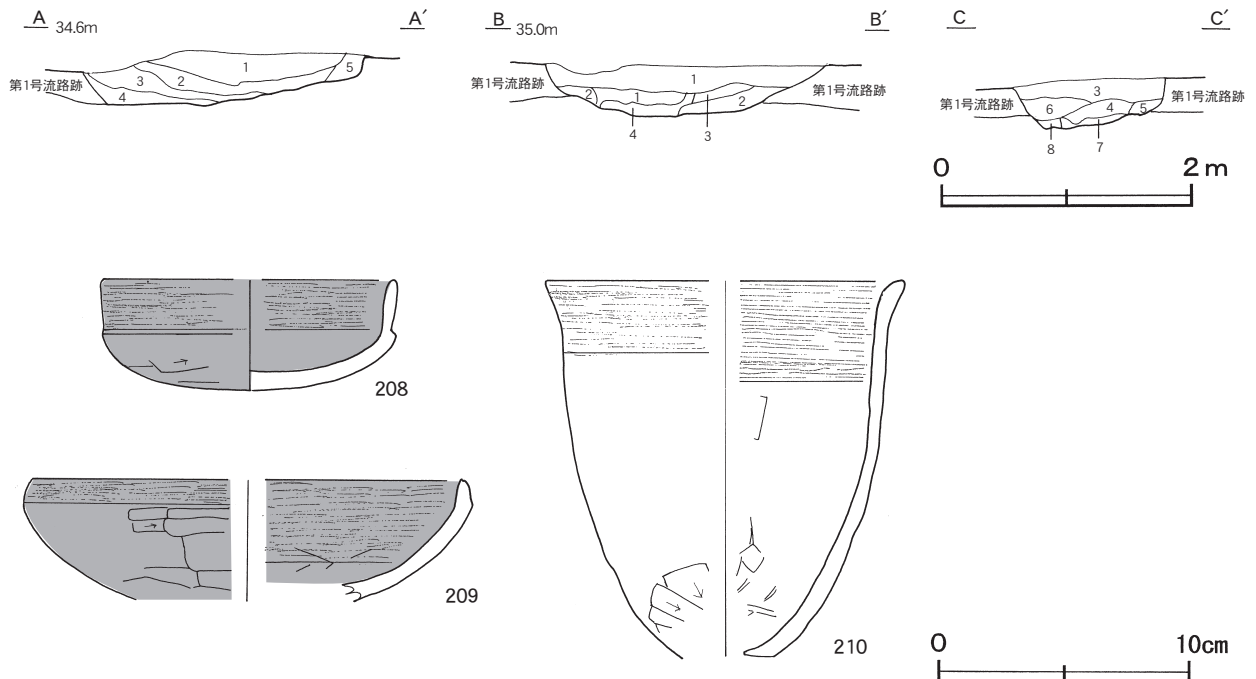
番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W28	容器	曲物側板	(17.8)	7.4	(0.4)	(23.9)	ヒノキ	柁目 内面にケビキ線	覆土上層	★
W29	部材	板材	23.0	(4.2)	1.0	(57.4)	モミ属	柁目 上下端部・側面削り加工	覆土上層	

第7号溝跡 (第3・98図)

位置 調査区南部のC1j9～E2j6区で、標高34.0mほどの第1号流路跡内に位置している。

重複関係 第1号流路，第141号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 C1j9区から南東方向(N-22°-W)に直線的にE2j6区まで延び、さらに調査区域外に延びている。また、C1j9区から北西方向に延びていくと推測される。確認された長さは85.9mで、上幅0.4~1.6m、下幅0.2~0.5mで、深さは38~42cmである。底面は南東方向に緩やかに傾斜しており、断面形はU字状を呈している。



第98図 第7号溝跡・出土遺物実測図

覆土 8層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | | | | | |
|---|--------|----------------------------|---|-----|-----------------------------|
| 1 | オリーブ黒色 | 粘土ブロック中量, 炭化粒子・砂粒微量 | 6 | 黒色 | 砂粒中量, 炭化物・植物遺体少量, 鉄分微量 |
| 2 | オリーブ黒色 | 砂粒多量, 粘土ブロック少量, 炭化粒子・鉄分微量 | 7 | 黒色 | 砂粒中量, 粘土ブロック・炭化粒子・植物遺体・鉄分微量 |
| 3 | 黒褐色 | 砂粒多量, 炭化物・植物遺体少量, 鉄分微量 | 8 | 黒褐色 | 粘土粒子・鉄分微量 |
| 4 | 褐灰色 | 砂粒多量, 炭化物・植物遺体・鉄分微量 | | | |
| 5 | 黒色 | 砂粒中量, 粘土粒子・炭化物少量・植物遺体・鉄分微量 | | | |

遺物出土状況 土師器片591点(坏202, 器台3, 高坏6, 甕352, 甌28), 土製品1点(羽口), 木器・木製品7点(部材3, 杭1, 板状製品2, 棒状製品1), 礫8点が全域から出土している。また, 混入した須恵器片21点(坏18, 蓋2, 甕1)も出土している。208・210は覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 主となる出土土器から6世紀後葉まで機能していたと推定される。第1号流路跡の範囲内に位置しており, 第1号流路の渇水した時期に掘り込まれたと考えられる。第1号流路跡方向に延びており, 取水溝の可能性が考えられる。第1号流路の増水や流路変更などにより, 埋没したと考えられる。

第7号溝跡出土遺物観察表(第98図)

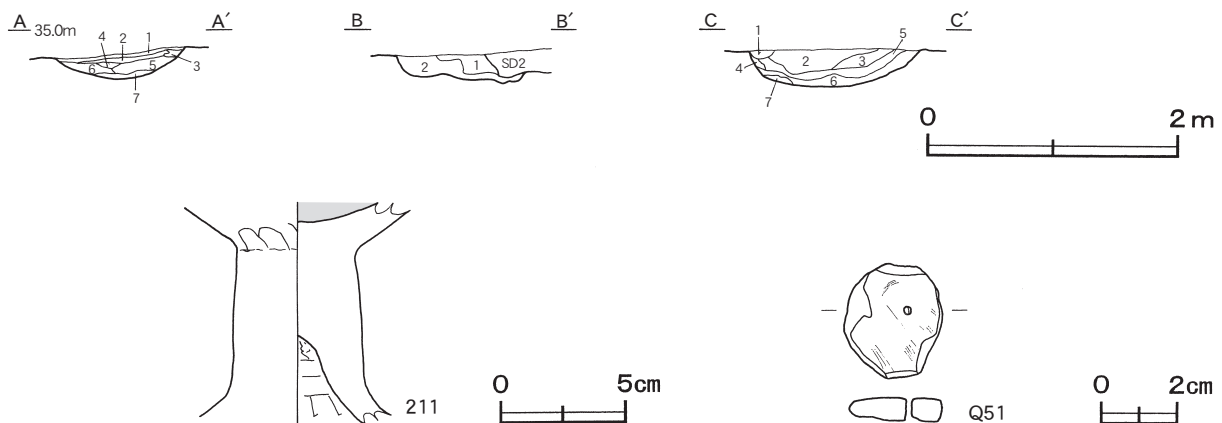
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
208	土師器	坏	[11.6]	4.3	-	長石・石英	灰白	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ナデ	覆土下層	60%
209	土師器	坏	[17.0]	(4.8)	-	石英	灰黄	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り後 ナデ 内面工具痕	覆土中	20%
210	土師器	甌	[14.1]	(14.9)	-	長石・石英・礫	にぶい 褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 工具痕	覆土下層	40%

第9号溝跡(第3・99図)

位置 調査区北部のA2d6~A2f5区で, 標高35.0mほどの平坦部に位置している。

重複関係 第2号溝に掘り込まれている。

規模と形状 A2d6区から南西方向(N-20°-E)に直線的にA2f5区まで延び, そのまま調査区域外に延びていくと考えられる。確認された長さは11.8mで, 上幅0.7~1.3m, 下幅0.3~0.9mで, 深さは20~30cmである。底面は南西方向に緩やかに傾斜しており, 断面形はU字状を呈している。



第99図 第9号溝跡・出土遺物実測図

覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | |
|---------------------------|------------------------|
| 1 黒色 粘土粒子多量, 白色粒子微量 | 5 黒褐色 粘土ブロック・白色粒子・鉄分微量 |
| 2 黒褐色 粘土粒子中量, 白色粒子・鉄分少量 | 6 黒褐色 粘土粒子・白色粒子・鉄分微量 |
| 3 黒色 白色粒子・鉄分少量, 粘土ブロック微量 | 7 にぶい黄褐色 砂粒多量, 鉄分少量 |
| 4 灰黄褐色 焼土粒子中量, 砂粒少量, 鉄分微量 | |

遺物出土状況 縄文土器片5点, 土師器片182点(坏43, 埴1, 高坏・器台類8, 甕130), 石器7点(剥片), 石製品1点(有孔円板), 礫8点, 種子1点(桃)が全域から出土している。211は覆土下層から出土している。

所見 時期は, 重複関係及び主となる出土土器から6世紀代まで機能していたと推測される。確認された範囲が一部分のため, 詳細な性格は不明である。

第9号溝跡出土遺物観察表(第99図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
211	土師器	高坏	-	(8.7)	-	長石・赤色粒子・礫	にぶい黄橙	普通	接合部外面ナデ 脚部内面ナデ	覆土下層	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q51	有孔円板	3.00	2.60	0.60	7.60	滑石	片面穿孔1か所 未製品カ	覆土中	PL38

第11号溝跡(第3・100・101図)

位置 調査区南部のC2g2~D2b9区で, 標高35.0mほどの平坦部に位置している。

重複関係 第2号円形周溝状遺構を掘り込み, 第1・2号溝に掘り込まれている。

規模と形状 E2g3区から南東方向(N-60°-W)に直線的にE2e7区まで延びている。確認された長さは33.9mで, 上幅0.5~1.3m, 下幅0.3~0.9mで, 深さは22~44cmである。底面は緩やかに南東方向に傾斜しており, 断面形はU字状を呈している。

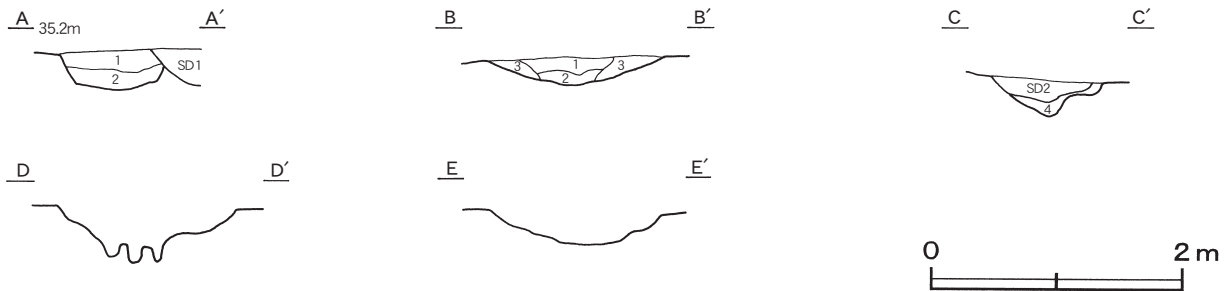
覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

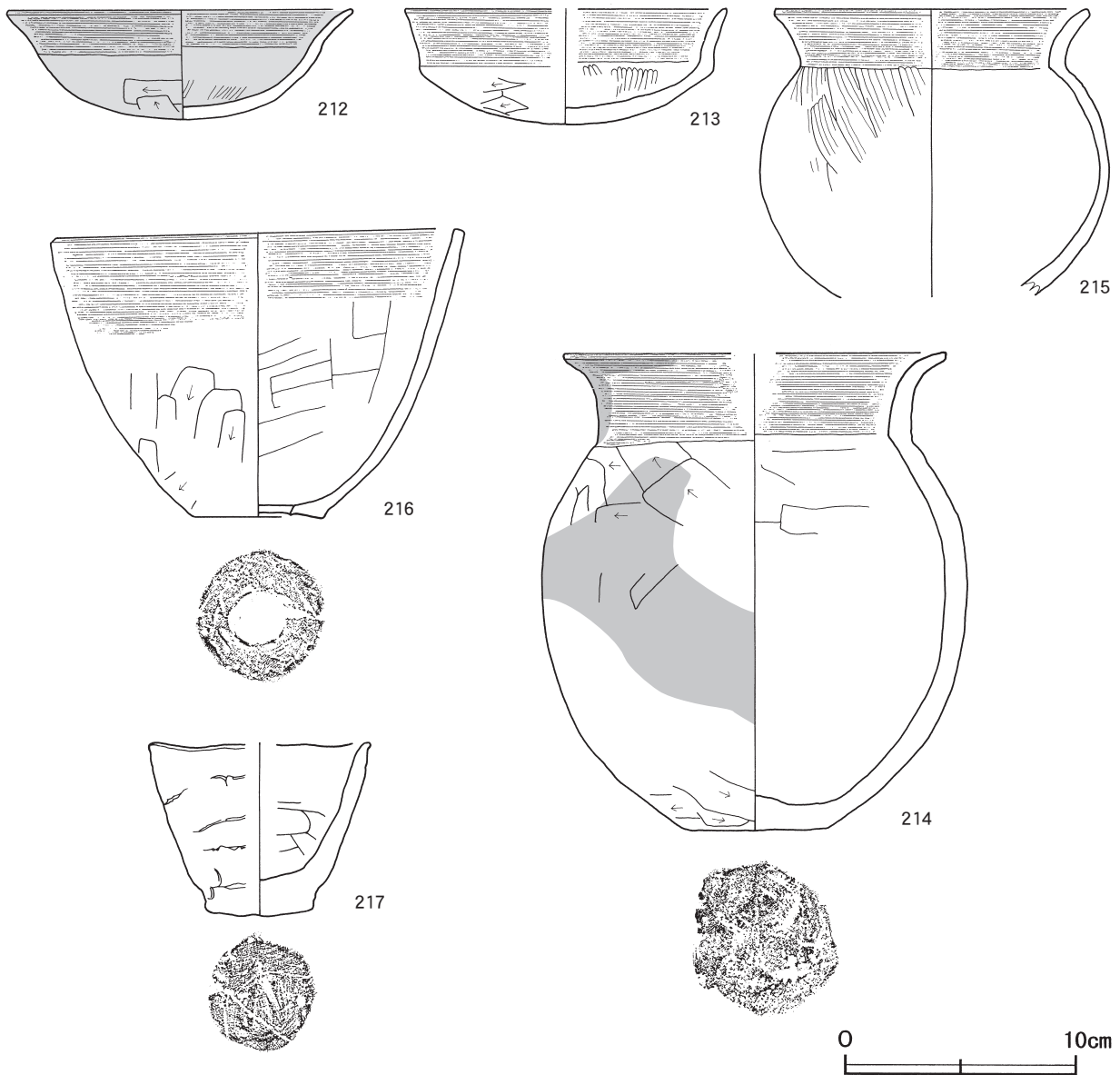
- | | |
|---------------------|---------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック・白色粒子少量 | 3 黒褐色 粘土粒子中量 |
| 2 黒褐色 粘土粒子少量 | 4 黒色 粘土ブロック少量 |

遺物出土状況 縄文土器片3点, 土師器片86点(坏26, 高坏1, 甕58, 甌1), 手捏土器3点, 陶器片1点が散在した状態で出土している。214~216は覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 重複関係及び主となる出土土器から6世紀前葉まで機能していたと推測される。第1号流路跡方向に延びており, 取水溝の可能性が考えられる。



第100図 第11号溝跡実測図



第101図 第11号溝跡出土遺物実測図

第11号溝跡出土遺物観察表（第101図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
212	土師器	坏	14.8	4.9	-	長石・石英・雲母	赤	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	覆土中層	95% PL28
213	土師器	坏	14.8	5.0	-	赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	覆土中層	60%
214	土師器	甕	[16.4]	20.8	6.2	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土下層	50%
215	土師器	小形甕	13.6	(12.4)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面木口状工具によるナデ	覆土下層	70%
216	土師器	甗	17.2	12.6	5.6	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土下層	80% PL29
217	手捏土器	-	[9.4]	7.6	4.5	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	外面輪積み痕 内面ナデ	覆土中	40%

第12号溝跡（第3・102図）

位置 調査区南部のE2c3～E2f5区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

重複関係 第4号溝に掘り込まれている。

規模と形状 E2d3区から南東方向（N-22°-W）に直線的にE2f5区まで延びている。確認された長さは12.8mで、上幅0.5～1.3m、下幅0.2～0.9mで、深さは22～24cmである。底面は緩やかに南東方向に傾斜しており、断面形は緩やかなU字状を呈している。

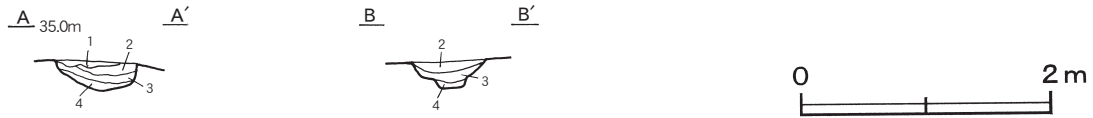
覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | |
|---------------------------------|----------------------------|
| 1 黒褐色 粘土ブロック中量 | 3 灰黄褐色 粘土ブロック少量, 炭化粒子・鉄分微量 |
| 2 灰黄褐色 粘土ブロック中量, 炭化粒子・白色粒子・鉄分微量 | 4 暗褐色 炭化粒子・粘土粒子・鉄分微量 |

遺物出土状況 土師器片42点(坏10, 甕32), 須恵器片2点, 馬歯1点が、散在した状態で出土している。出土土器は細片のみで、図化することはできなかった。

所見 第4号溝に掘り込まれているが、出土遺物から、時期差はないと考えられ、主となる出土土器から6世紀後葉まで機能していたと推測される。第1号流路跡に平行に延びており、利水に伴う水路の可能性が考えられる。



第102図 第12号溝跡実測図

表5 古墳時代溝跡一覧表

遺構番号	位置	方向	形状	規模				断面	覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係(旧→新)
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)				
3	D2j3～E2e7	N-42°-W	直線	(26.7)	(0.5)～(1.3)	(0.3)～(0.9)	8～20	弧状	自然	土師器, 手捏土器, 縄文土器, 須恵器	SI24, SK28・31→本跡→SD1
4	D2j3～E2j7	N-30°-W	直線	(41.0)	(1.0)～(2.6)	(0.2)～(1.2)	38～50	U字状	自然	土師器, 須恵器, 木器・木製品	SD12→本跡→SD1
7	C1j9～E2j6	N-22°-W	直線	(85.9)	(0.4)～(1.6)	(0.2)～(0.5)	38～42	U字状	自然	土師器, 須恵器, 木器・木製品	第1号流路跡→SK141→本跡
9	A2d6～A2f5	N-20°-E	直線	(11.8)	(0.7)～(1.3)	0.3～0.9	20～30	U字状	自然	土師器, 縄文土器, 石器, 石製品	本跡→SD2
11	C2g2～D2b9	N-60°-W	直線	(33.9)	(0.5)～(1.3)	(0.3)～(0.9)	22～44	U字状	自然	土師器, 手捏土器	第2号円形周溝状遺構→本跡→SD1・2
12	E2c3～E2f5	N-22°-W	直線	(12.8)	(0.5)～(1.3)	(0.2)～(0.9)	22～24	U字状	自然	土師器, 須恵器, 馬歯	本跡→SD4

4 奈良・平安時代の遺構と遺物

遺構は、流路跡1条、水場遺構1か所、曲物埋設遺構1基、土坑2基、溝跡5条、不明遺構1基が確認された。以下、確認された遺構及び遺物について記述する。

(1) 流路跡

第1号流路跡（SD5）（第103～152図）

位置 調査区南部のC1h0～E2j6区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

確認状況 平成16年度の調査で、遺構の確認作業時に広い範囲で黒色土の広がりと同量の遺物が散在して確認された。16か所にトレンチ（A～P）を設定し、流路跡の範囲を確認した。平成17年度は、流路跡を1～10区に区分し、調査を行った。

重複関係 流路跡内に第7号溝、第1号水場遺構、第1号曲物埋設遺構、第125・136～138・141・142・148・149号土坑が位置している。

規模と形状 C1h0区から緩やかに東に湾曲しながら南流（N－14°－W）し、E1d8区付近からさらに南東方向（N－37°－W）に湾曲してE2j6区まで伸び、調査区域外に延びている。さらにC1h0区から北西方向にも続いていると推測される。確認された長さは96.8mで、最大で上幅26.0m、下幅12.8mで、深さは122.0cmである。底面は南東方向に緩やかに傾斜しており、断面形は弧状を呈している。第1号水場遺構の東側にあたるE1b9～E2b2区にかけて東西方向に砂層の広がる範囲が確認された。

土層 レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

A－A'（Cトレンチ）土層解説

1 暗オリーブ褐色	焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量、鉄分微量（現耕作土）	8 黒褐色	砂粒・鉄分中量
2 暗褐色	炭化粒子・粘土粒子少量、焼土粒子・白色粒子・鉄分微量（現耕作土）	9 黒褐色	粘土粒子・砂粒・植物遺体中量
3 黒褐色	白色粒子・黄色粒子・細礫中量、炭化物・砂粒少量、焼土粒子・鉄分微量	10 黒褐色	砂粒中量、粘土粒子・鉄分微量
4 黒色	炭化粒子・白色粒子・砂粒・鉄分少量、焼土粒子微量	11 暗オリーブ褐色	砂粒多量、粘土ブロック少量、鉄分微量
5 黒色	炭化粒子多量、砂粒・鉄分少量、白色粒子微量	12 暗オリーブ褐色	砂粒多量、植物遺体微量
6 黒色	白色粒子中量、炭化粒子・砂粒・鉄分少量	13 オリーブ褐色	粘土粒子多量、砂粒中量、鉄分微量
7 黒色	粘土粒子中量、砂粒少量、白色粒子・鉄分微量	14 黒褐色	砂粒中量、焼土粒子少量、鉄分微量
		15 黒褐色	粘土ブロック・砂粒中量、鉄分微量
		16 黒褐色	砂粒多量、鉄分・植物遺体微量
		17 黒褐色	砂粒多量、粘土粒子・植物遺体少量、鉄分微量

C－C'（Dトレンチ）土層解説

1 黒色	炭化粒子多量、砂粒少量	5 黒褐色	粘土粒子少量、砂粒・鉄分微量
2 黒褐色	白色粒子・鉄分少量、砂粒微量	6 暗オリーブ色	粘土粒子中量、砂粒微量
3 黒色	鉄分中量、白色粒子・砂粒微量	7 黒褐色	粘土粒子・砂粒・鉄分少量
4 黒褐色	鉄分少量、白色粒子・砂粒微量		

D－D'（Eトレンチ）土層解説

1 黒褐色	粘土粒子少量、炭化粒子・白色粒子・砂粒微量	5 黒褐色	粘土粒子少量、白色粒子微量
2 黒褐色	白色粒子・鉄分少量、砂粒微量	6 オリーブ黒色	砂粒多量、鉄分少量、炭化粒子・粘土粒子微量
3 黒色	鉄分中量、白色粒子・砂粒微量	7 黒色	砂粒多量、炭化物・鉄分微量
4 黒色	粘土粒子・砂粒・鉄分少量、炭化粒子微量		

I－I'（Iトレンチ）土層解説

1 黒褐色	粘土粒子少量、炭化粒子・白色粒子・砂粒微量	8 黒褐色	粘土粒子・白色粒子・中礫少量、砂粒・炭化粒子微量
2 黒褐色	白色粒子・鉄分少量、砂粒微量	9 黒色	中礫・砂粒少量、粘土ブロック微量
3 黒色	鉄分中量、白色粒子・砂粒微量	10 黒色	粘土粒子中量、砂粒少量
4 黒色	砂粒中量、粘土粒子・炭化粒子・白色粒子微量	11 黒褐色	砂粒中量、粘土粒子少量、炭化粒子・中礫微量
5 黒褐色	砂粒中量、粘土ブロック微量	12 黒褐色	粘土粒子・砂粒少量
6 黒色	炭化粒子中量、砂粒少量、粘土粒子・白色粒子・中礫微量	13 黒色	粘土粒子多量、砂粒少量
7 黒褐色	中礫・砂粒中量、粘土粒子・白色粒子微量	14 灰黄褐色	粘土粒子多量

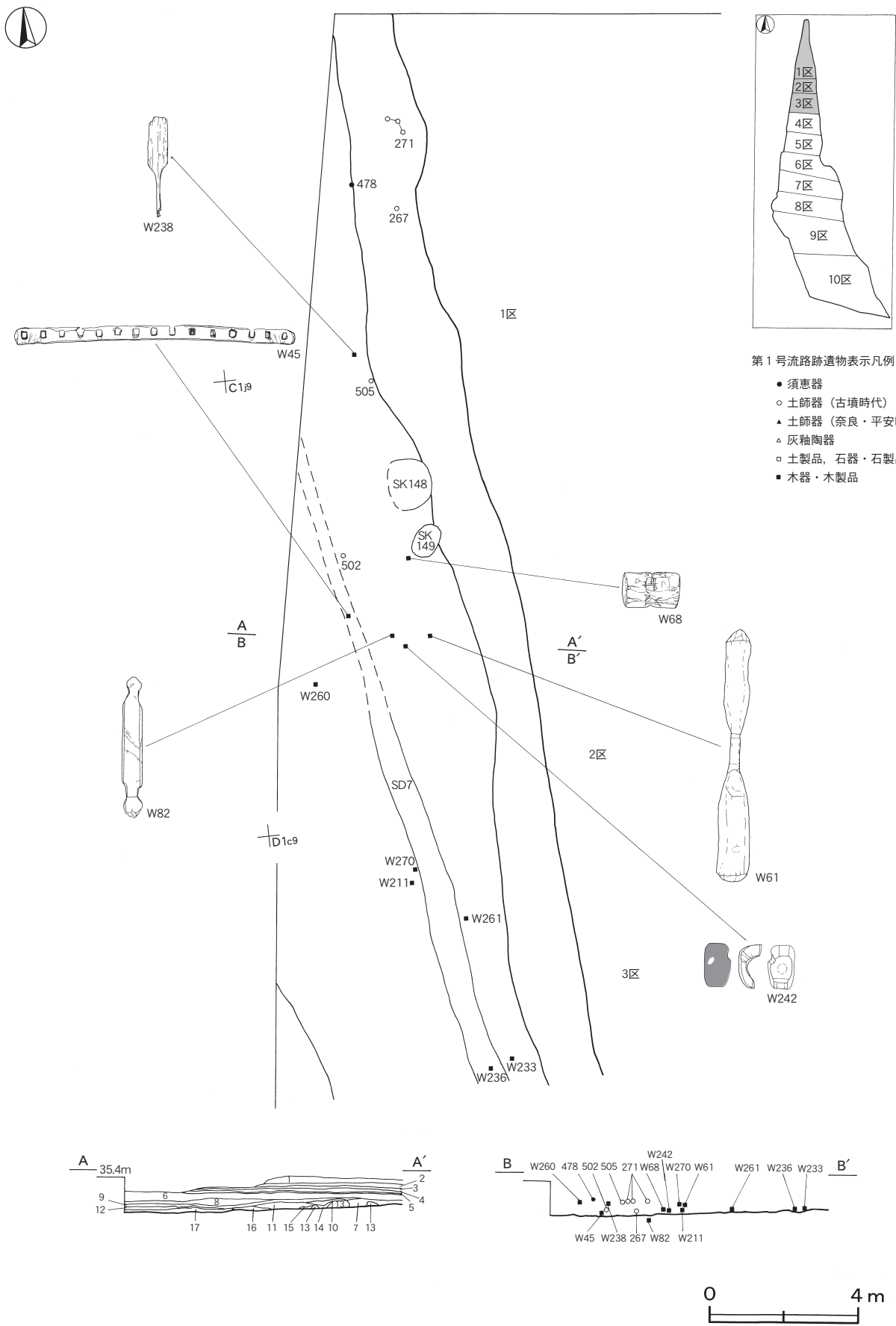
L－L'（Fトレンチ）土層解説

1 黒褐色	粘土粒子少量、炭化粒子・白色粒子・砂粒微量	5 黒色	粘土粒子中量、砂粒少量
2 黒褐色	白色粒子・鉄分少量、砂粒微量	6 黒色	粘土粒子多量、砂粒少量
3 黒色	鉄分中量、白色粒子・砂粒微量	7 黒褐色	粘土粒子多量、砂粒微量
4 黒色	中礫・砂粒少量、粘土ブロック微量	8 黒色	粘土粒子多量、炭化粒子微量

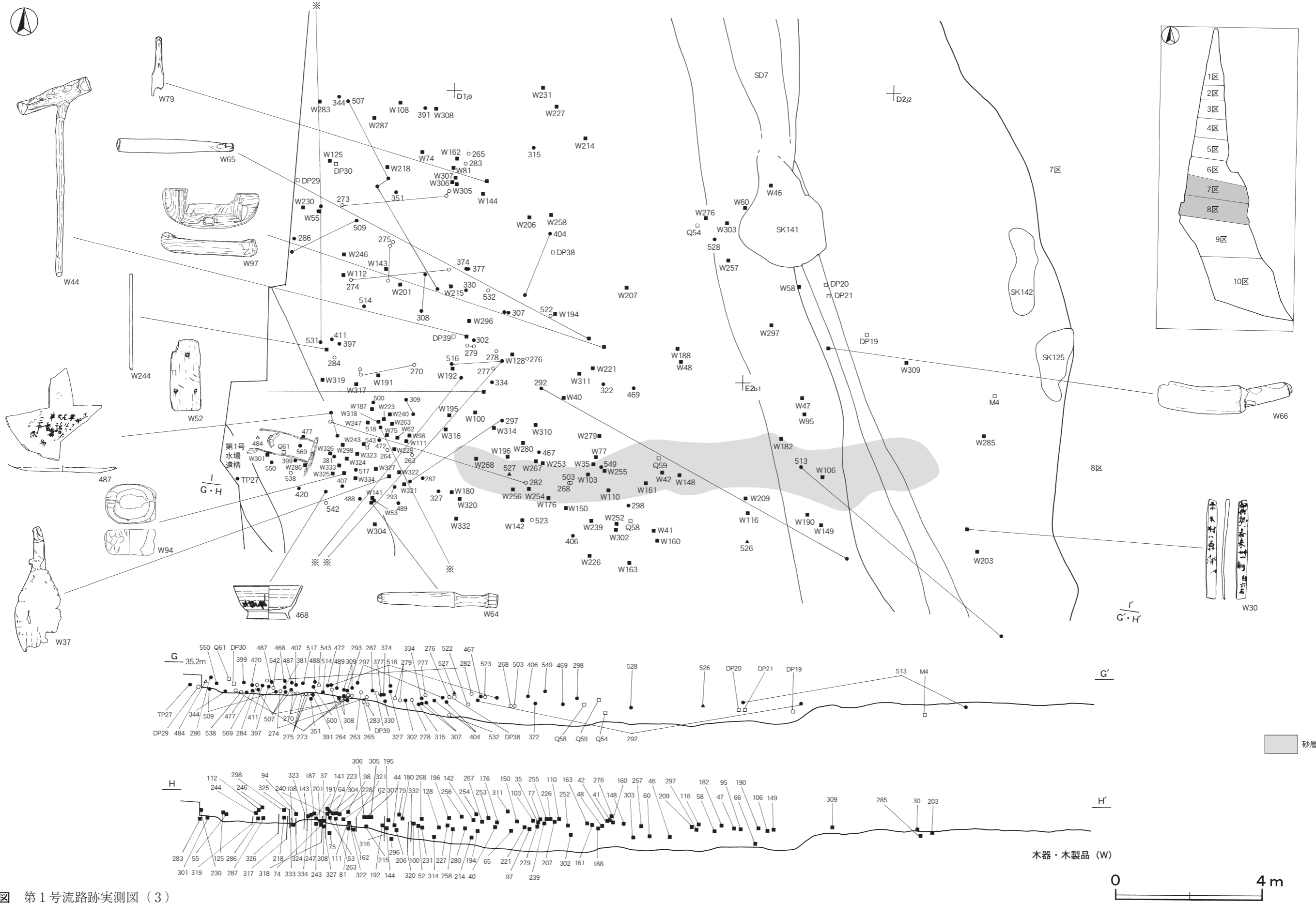
遺物出土状況 縄文土器片29点（深鉢）、弥生土器片2点（厚口鉢）、土師器片30,213点（坏13,150, 椀84, 高台付皿1, 埴28, 器台・高坏類320, 鉢24, 壺15, 甕16,542, 小形甕7, 台付甕23, 甑19）、須恵器片8,795点（坏6,676, 高台付坏327, 盤35, 蓋338, 高盤30, 鉢2, 壺28, 短頸壺10, 瓶類31, 長頸瓶14, 横瓶10, 提瓶1, 甕4, 甕1,265, 大甕1, 甑23）、手捏土器41点、ミニチュア土器1点、土師質土器4点（内耳鍋）、陶器片37点、灰釉陶器片3点（椀）、磁器片4点、土製品23点（小玉1, 土錘5, 管状土錘13, 円板1, 有孔円板1, 紡錘車1, 羽口1）、石器19点（剥片10, 石斧2, 磨石1, 敲石1, 凹石1, 砥石2, 石鏃2）、石製品9点（勾玉1, 白玉2, 小玉2, 紡錘車2, 双孔円板2）、鉄製品1点（紡錘車）、銅製品2点（耳環, 鈴）、鉄滓4点、木器・木製品989点（木簡5, 楔1, 篋1, 鋏類8, 大足類12, 鎌柄4, 竪杵4, 横槌3, 木錘5, 目盛板1, 編み台1, 柄2, 把手2, 糸巻1, 枷類2, 織機腰板1, 弓3, 挽物類8, 削り物類3, 釣瓶1, 曲物類201, 甑10, 斎串2, 形代類10, 鳴鏑1, 削出棒1, 火鑽杵1, 火鑽臼1, 串材4, 带状樹皮3, 留め具4, 結合部材1, 部材類467, 杭151点, 彫刻入り板材1, 荷札状木製品1, 円柱状木製品1, 竪杵状木製品1, 用途不明60）、瓦10点, 粘土塊8点, 種子673点（桃651, クルミ19, 栗3）、馬歯1点が散在した状態で全域から出土している。古墳時代前期から9世紀後葉までの土器が、混在した状態で出土しており、古墳時代の土器がやや低い層位から出土しているが、明確にその違いを示すことは困難である。また、古墳時代の土器は磨滅が著しく流水の影響が伺える。8世紀前葉から9世紀後葉にかけての須恵器片, 土師器片には、墨書・漆書・刻書・ヘラ書きが199点確認されている。

1～3区は流路の中央部が調査区域外のため、全体的な様相は分からないが、調査範囲内では古墳時代の土師器片の出土量が多い。271は東部の覆土中層, 267・502は東部の覆土下層からそれぞれ出土している。また、W61・W242は東部の覆土下層, W45は東部の底面からそれぞれ出土している。4～6区は8世紀前葉から9世紀中葉までの須恵器片が主体であるが、9世紀後葉の内面黒色処理の土師器片も混在している。483は西部の覆土上層, 447は中央部の覆土上層, 400・486は西部の覆土中層, 531は西部の覆土中層から下層にかけてそれぞれ出土している。また、第4号木簡（W33）・W83は中央部の覆土中層, W38・W86・W335・W340は西部の覆土中層からそれぞれ出土している。7～9区には、第1号水場遺構が位置しており、その周辺を中心に8世紀前葉から9世紀中葉にかけての須恵器片が大量に投棄された状況で出土している。468は水場遺構南の中層, 487は水場遺構東の覆土下層, 318・463は西岸の覆土中層からそれぞれ出土している。また、木器・木製品も曲物を中心に様々な器種が多量に出土している。第1号木簡（W30）は東部の覆土下層, 第2号木簡（W31）・W64は西部の覆土中層, W79は西部の覆土上層, W37・W44は西部の覆土下層からそれぞれ出土している。10区は他と比べると極端に遺物の出土量が少なくなる。511は東部の下層, 541は東部の覆土中層, W84は東部の覆土下層からそれぞれ出土している。

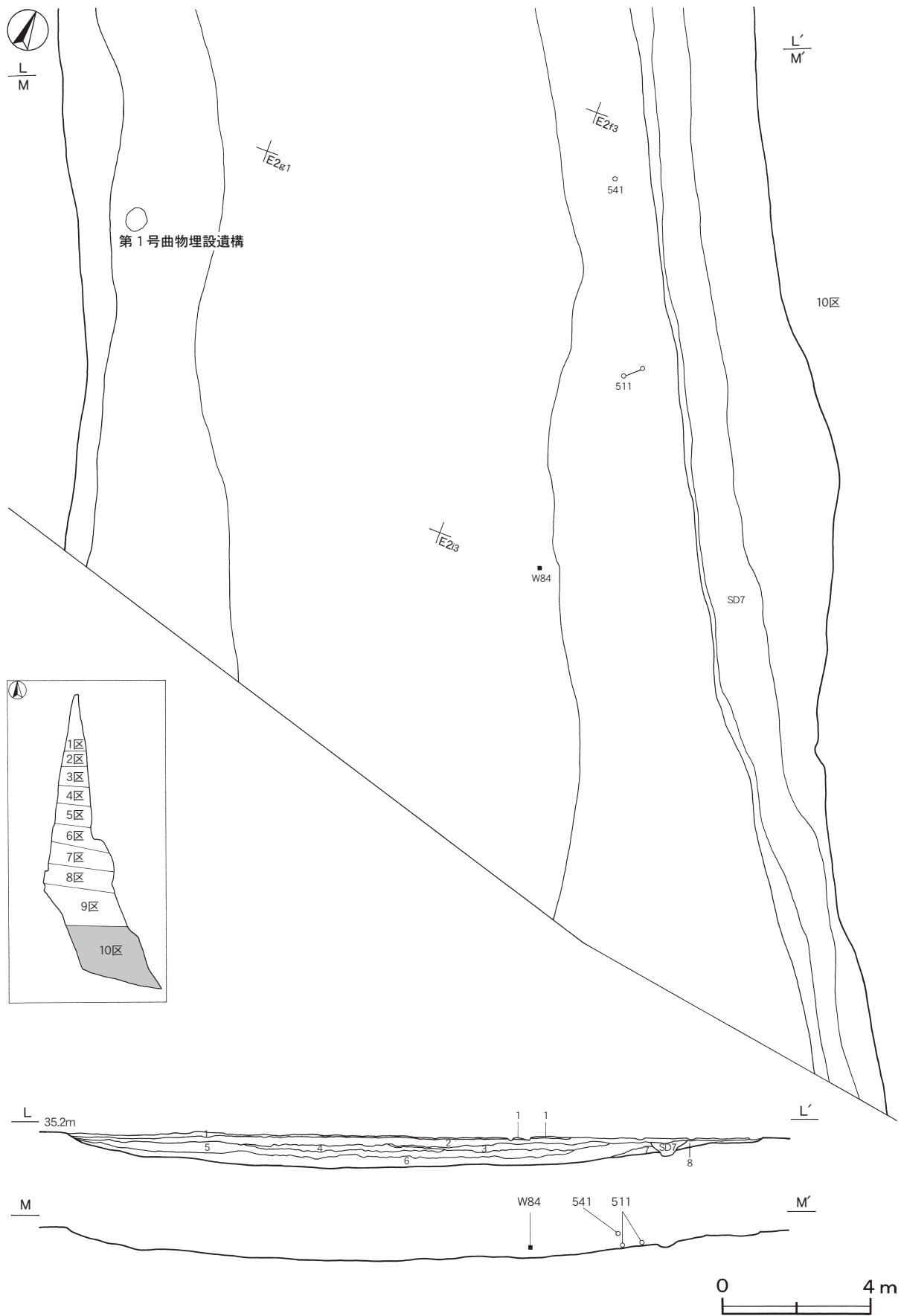
所見 廃絶時期は出土遺物から9世紀中葉と考えられる。古墳時代前期から後期にかけての土器は、本遺跡内及びその周辺の住居で使用されていたものが流れ込んだ可能性が高い。また、8世紀前葉から9世紀中葉にかけての遺物が大量に確認されたが、当該期の竪穴住居跡は確認されておらず、周辺に集落があったと想定される。9世紀中葉以降の遺物も確認されているが、出土量はわずかで、流路の河道変更もしくは渇水によって水流が弱まり、徐々に埋没していく過程で流れ込んだものと推定される。また、遺物の出土傾向が調査区によって異なることから、流路はたびたび氾濫や河道変更をしていたと推測される。第1号流路の埋没後に堆積したA-A' 第5層及びB-B' 第1・2層から浅間Bテフラ（AS-B）が検出されていることから、1108年以前には流路は完全に埋没していたと考えられる。さらに、流路跡の底面付近からは、本遺跡の他の住居跡で検出された浅間Cテフラ（AS-C）は検出されておらず、4世紀以前から流路として機能していたことが推測される。



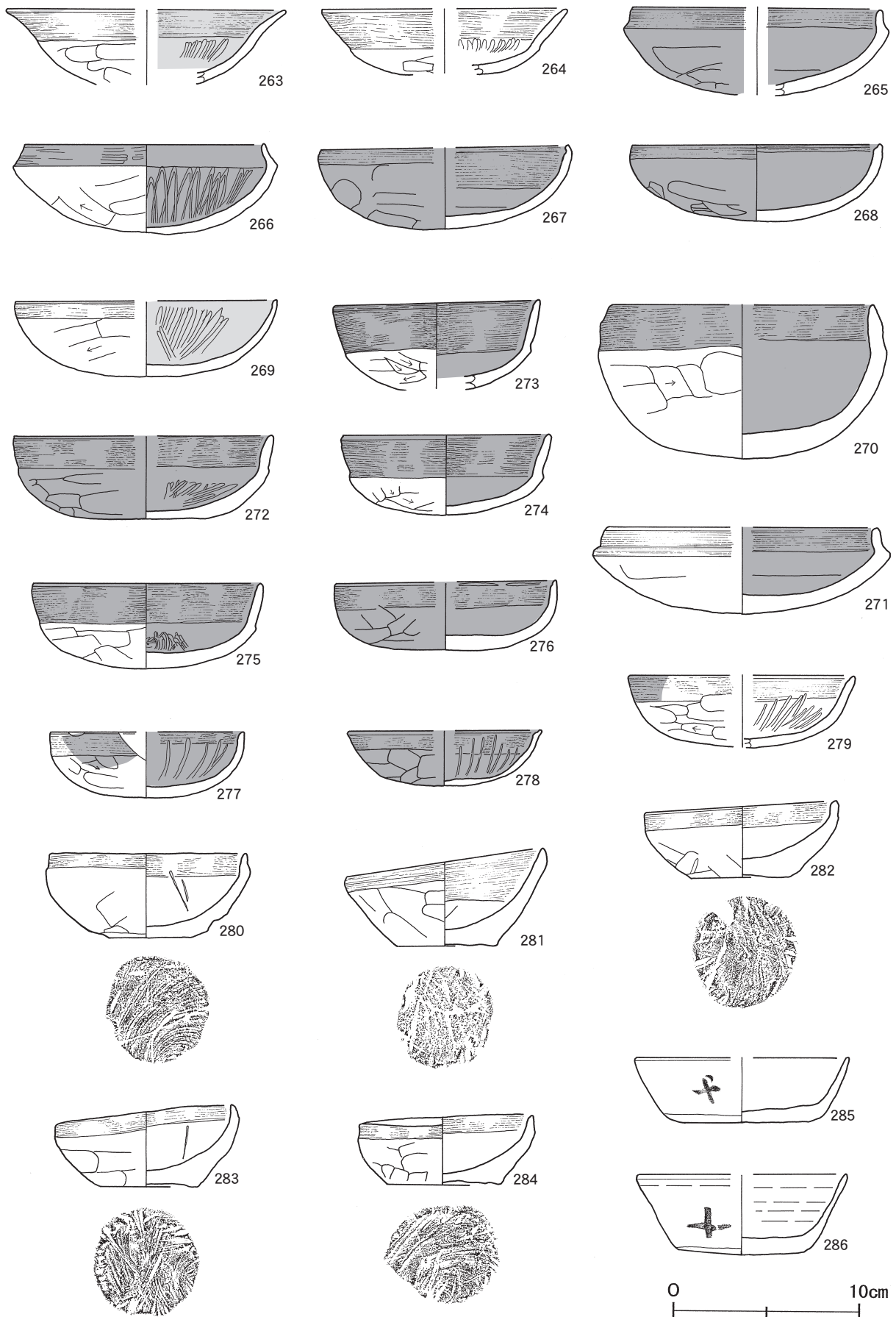
第103図 第1号流路跡実測図(1)



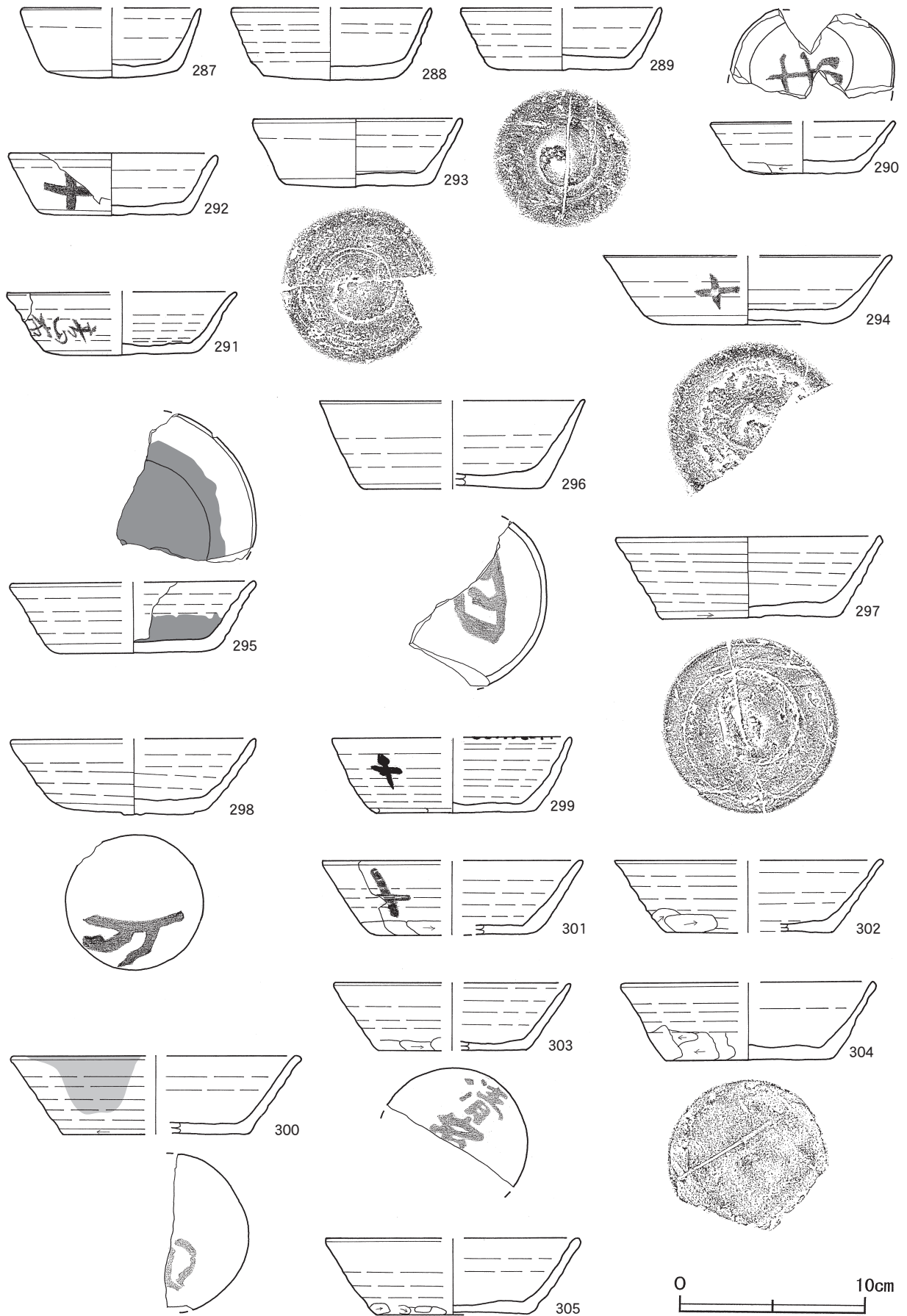
第105図 第1号流路跡実測図(3)



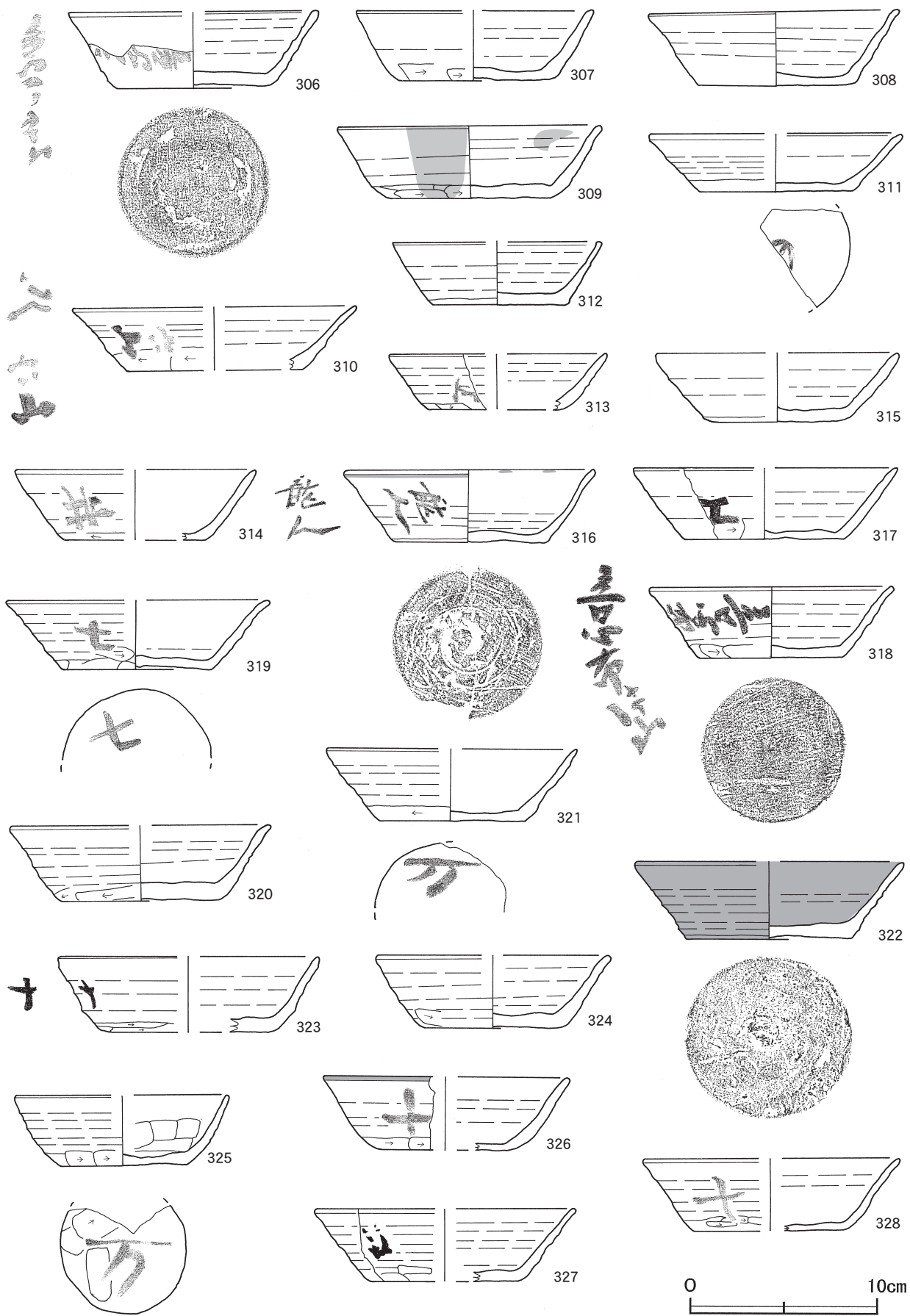
第107图 第1号流路迹实测图(5)



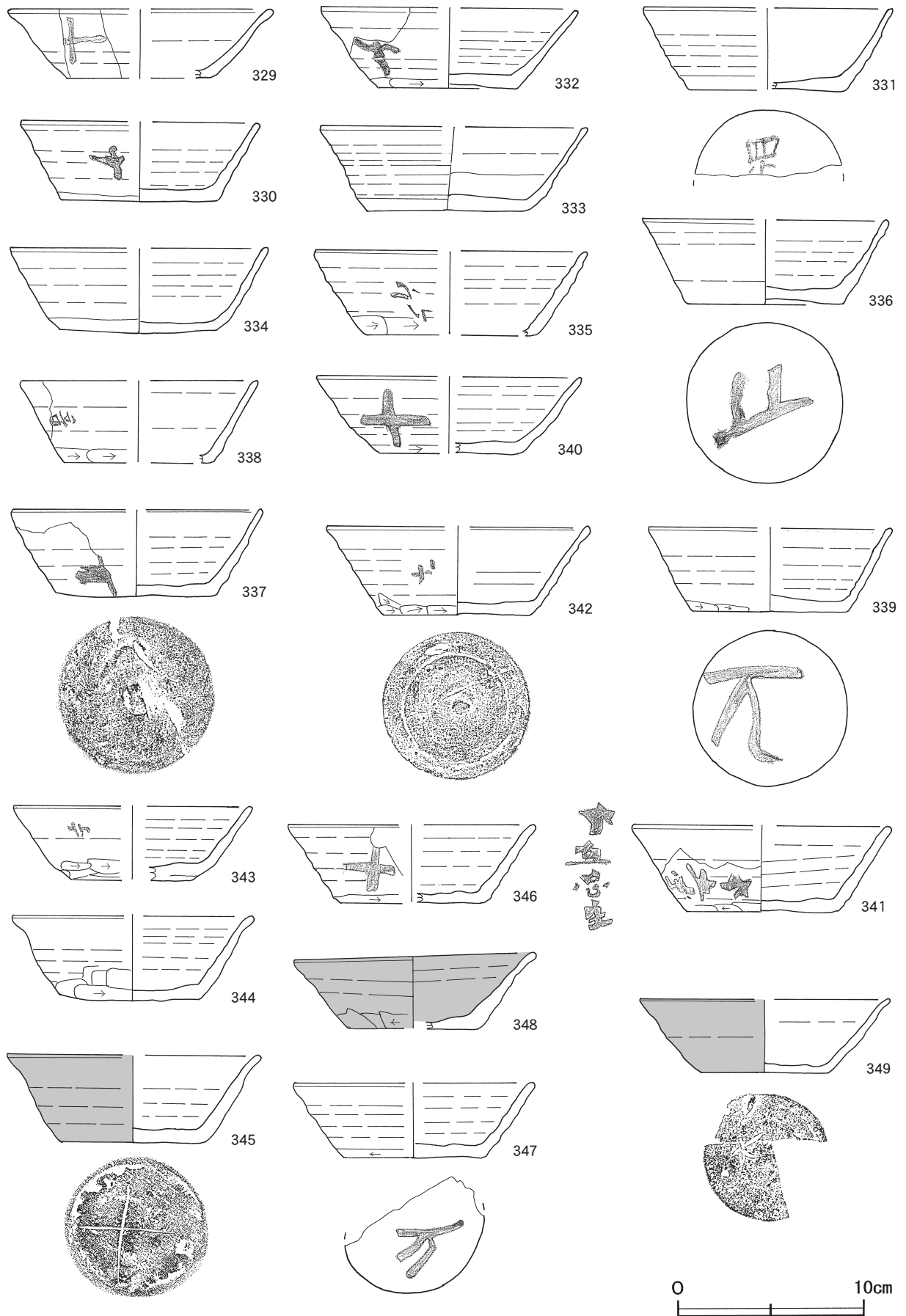
第108图 第1号流路迹出土遺物実測図(1)



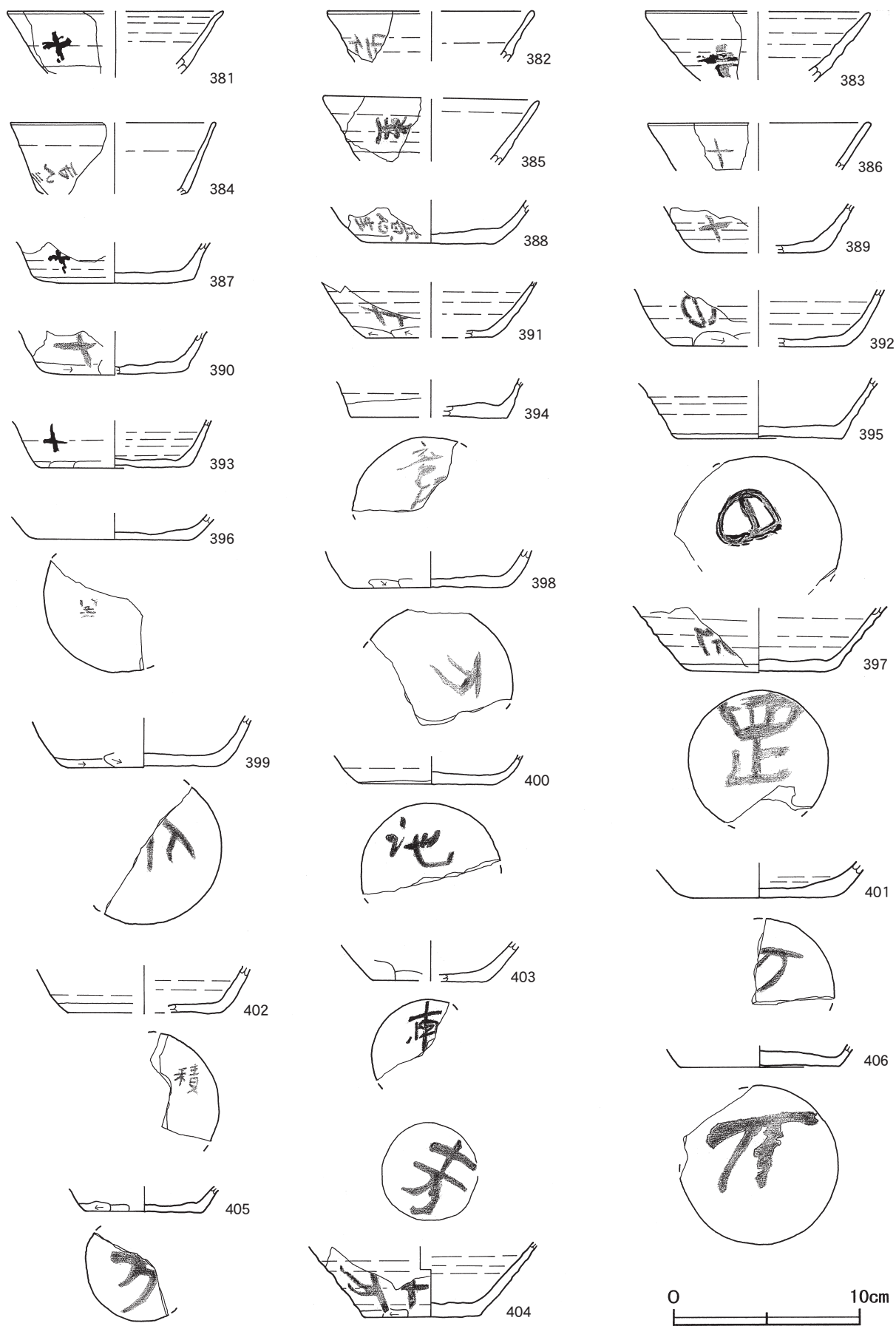
第109图 第1号流路跡出土遺物実測図(2)



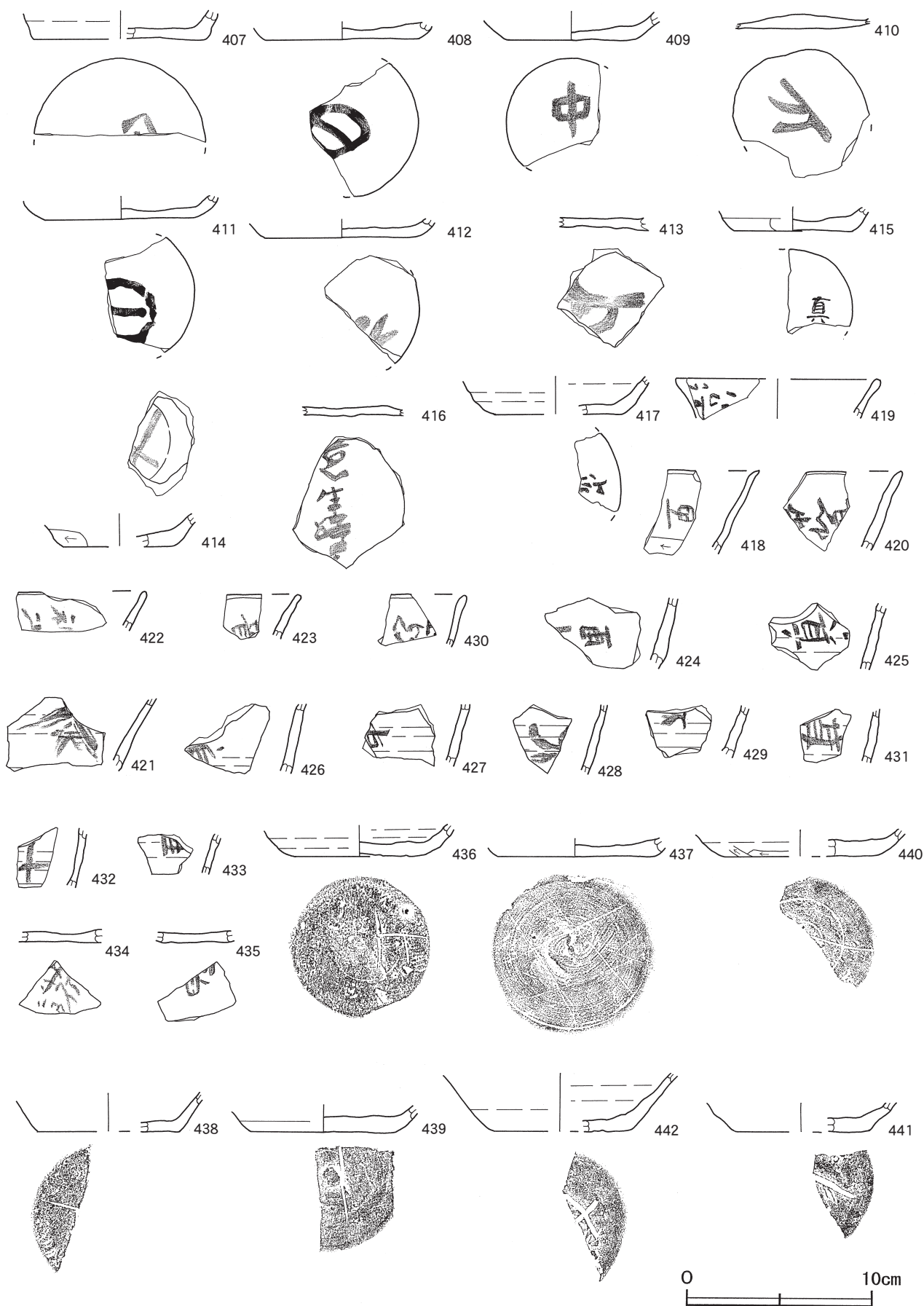
第110图 第1号流路跡出土遺物実測図(3)



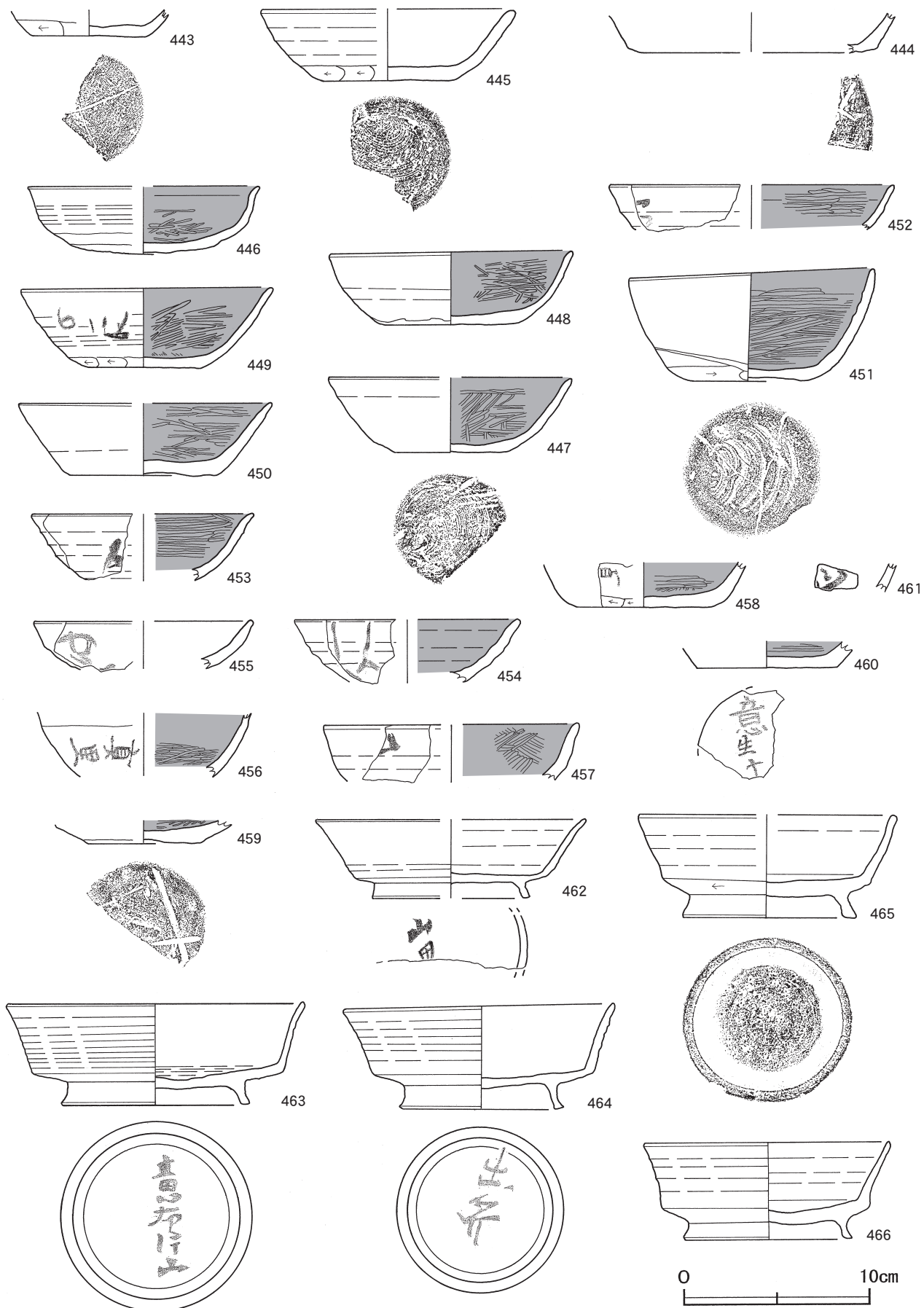
第111图 第1号流路跡出土遺物実測図(4)



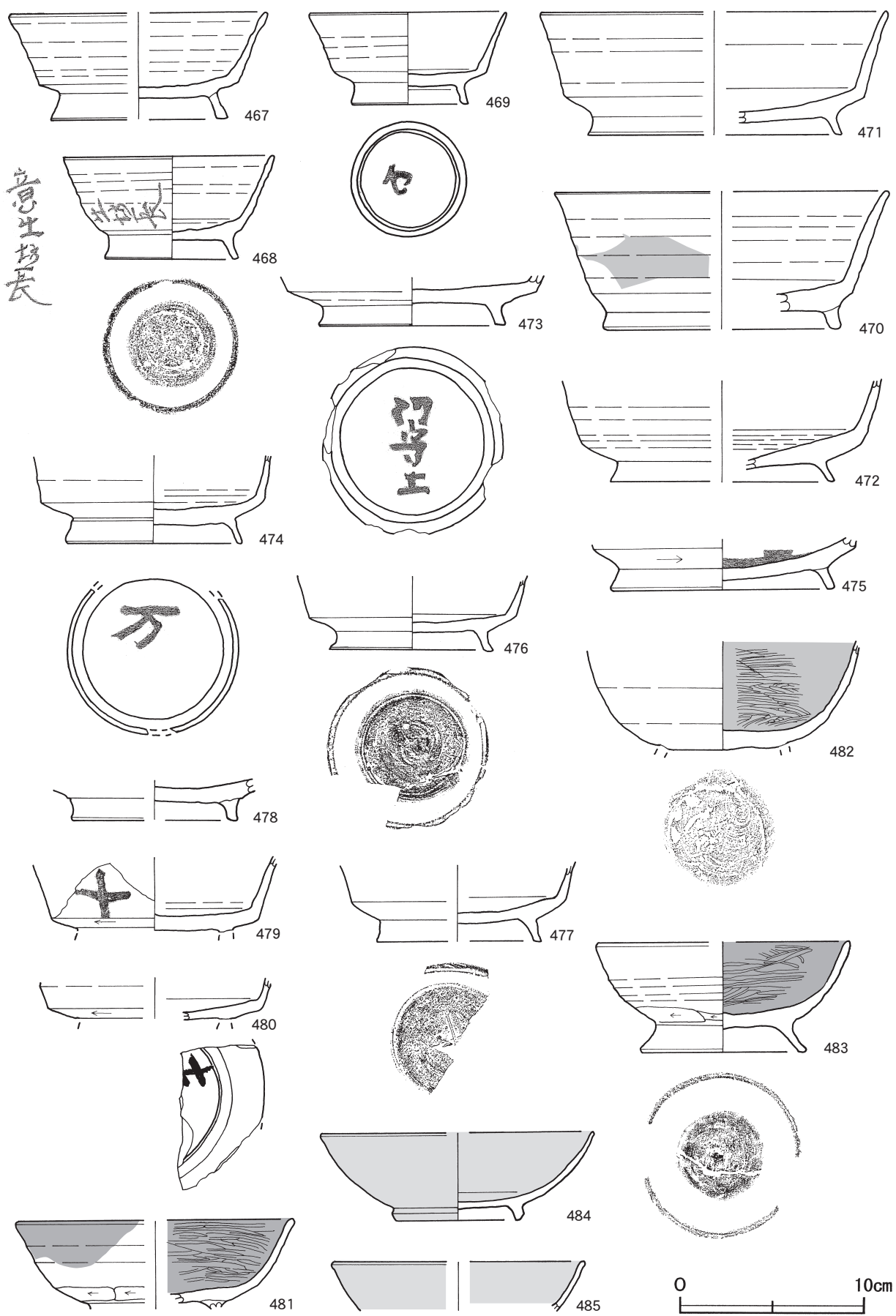
第113图 第1号流路迹出土遗物实测图(6)



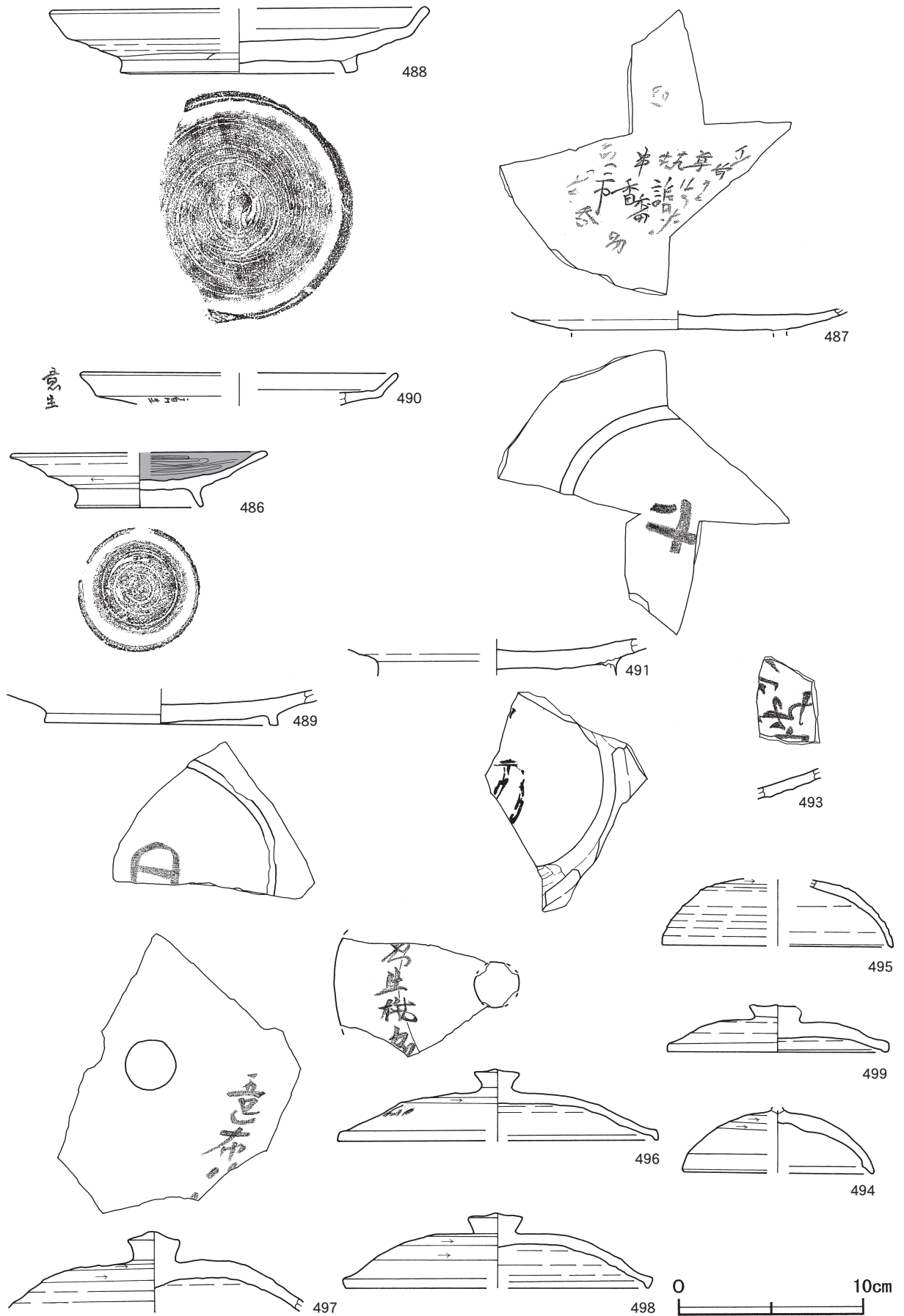
第114图 第1号流路跡出土遺物実測図(7)



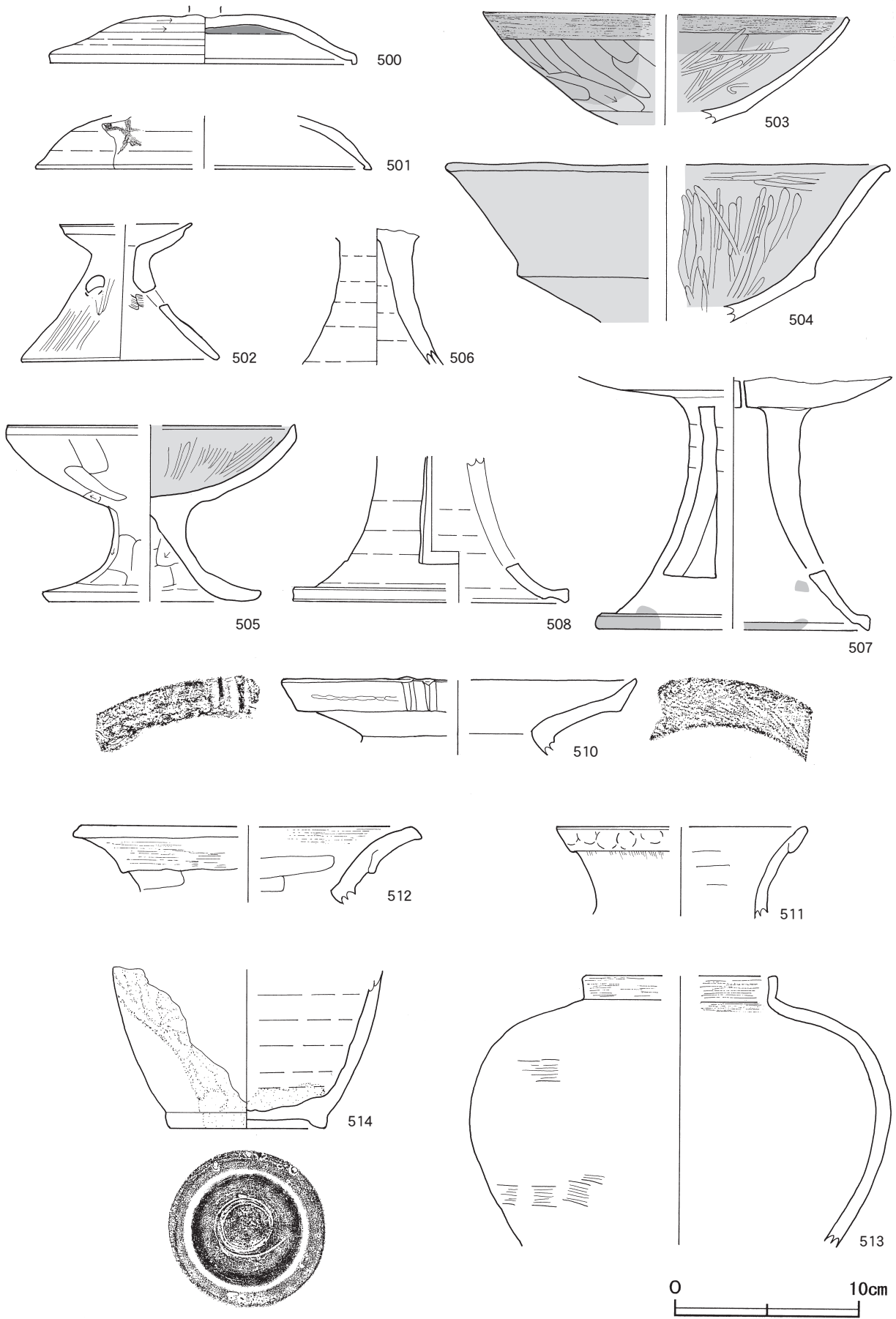
第115図 第1号流路跡出土遺物実測図(8)



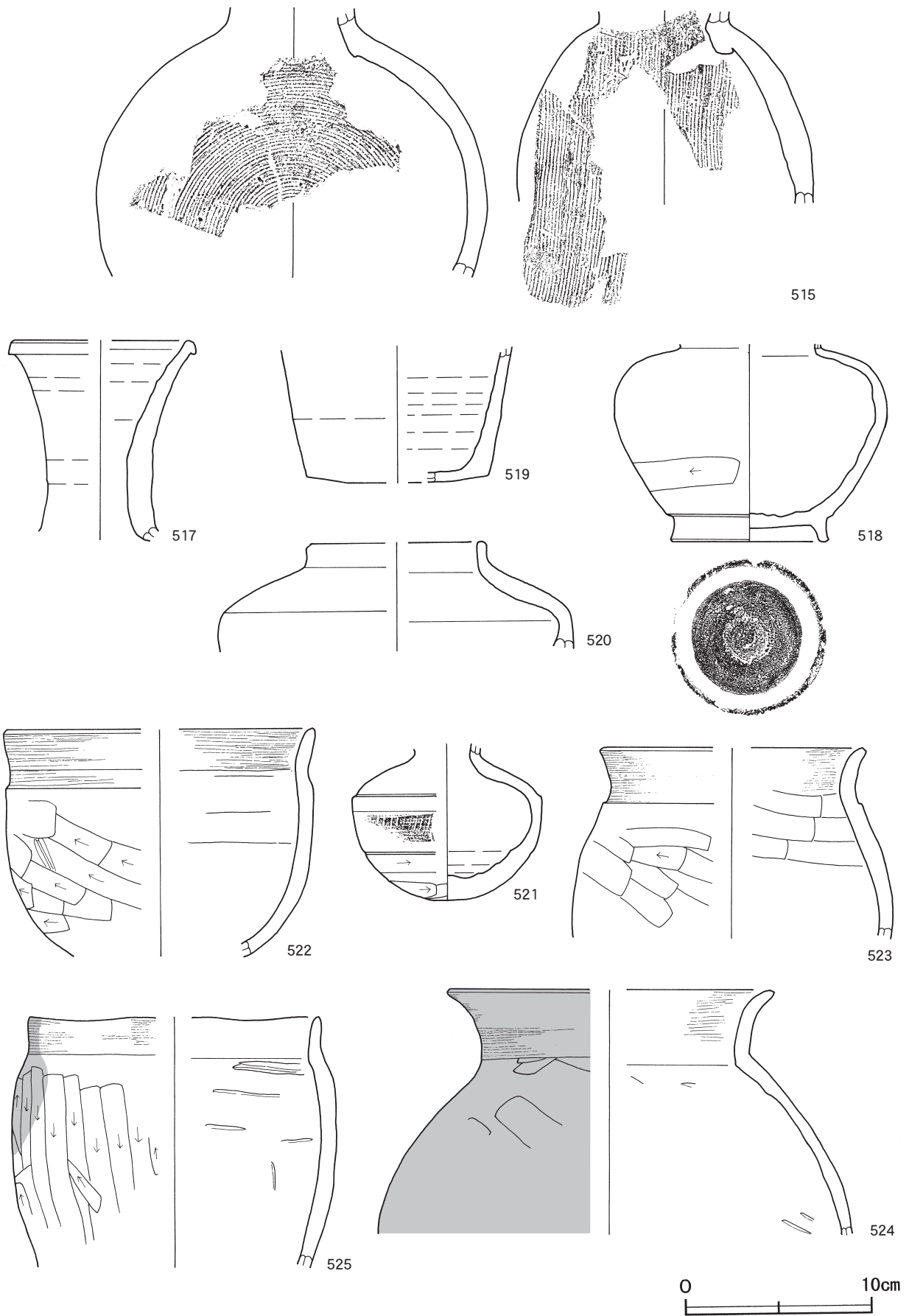
第116図 第1号流路跡出土遺物実測図(9)



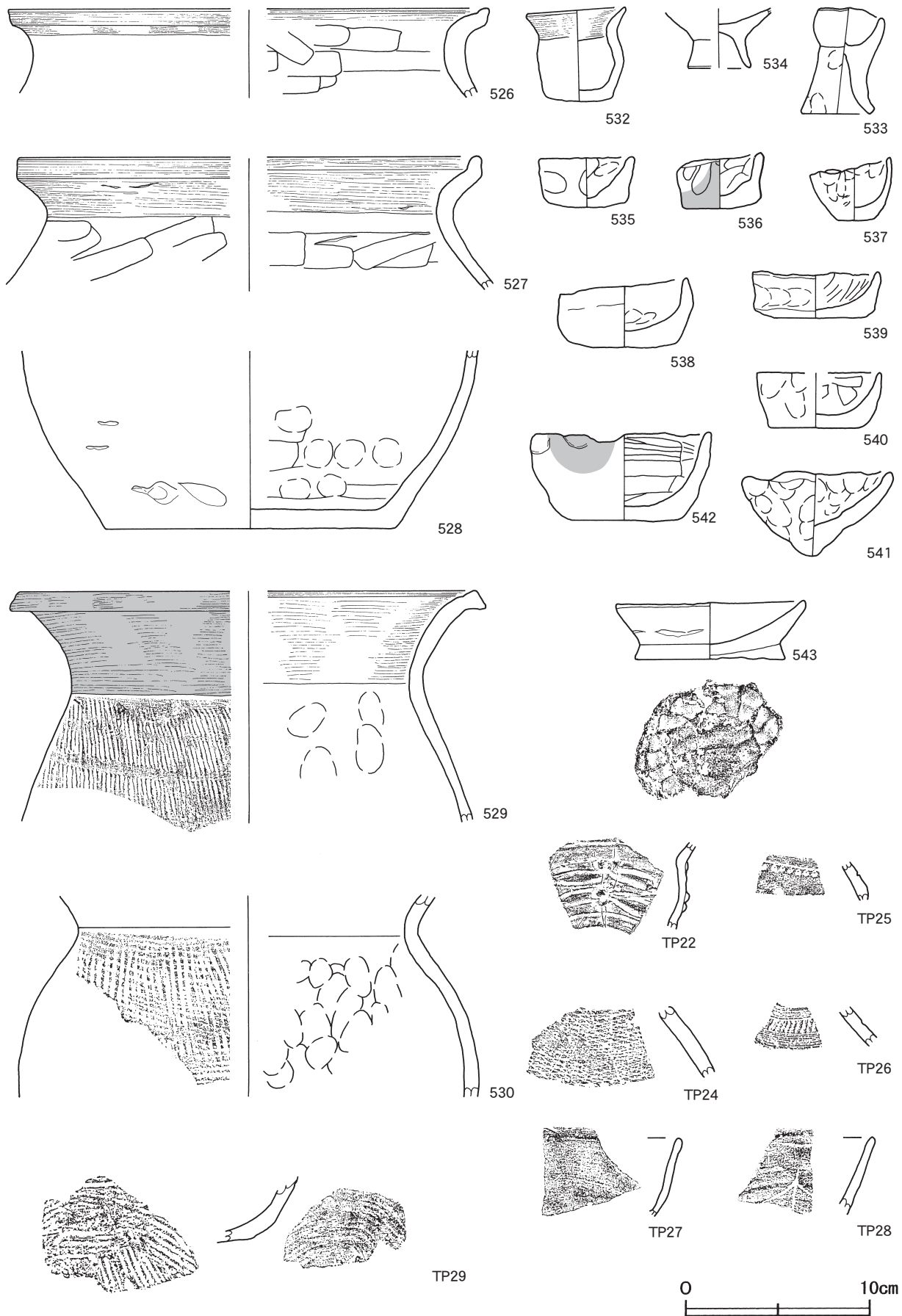
第117图 第1号流路跡出土遺物実測図(10)



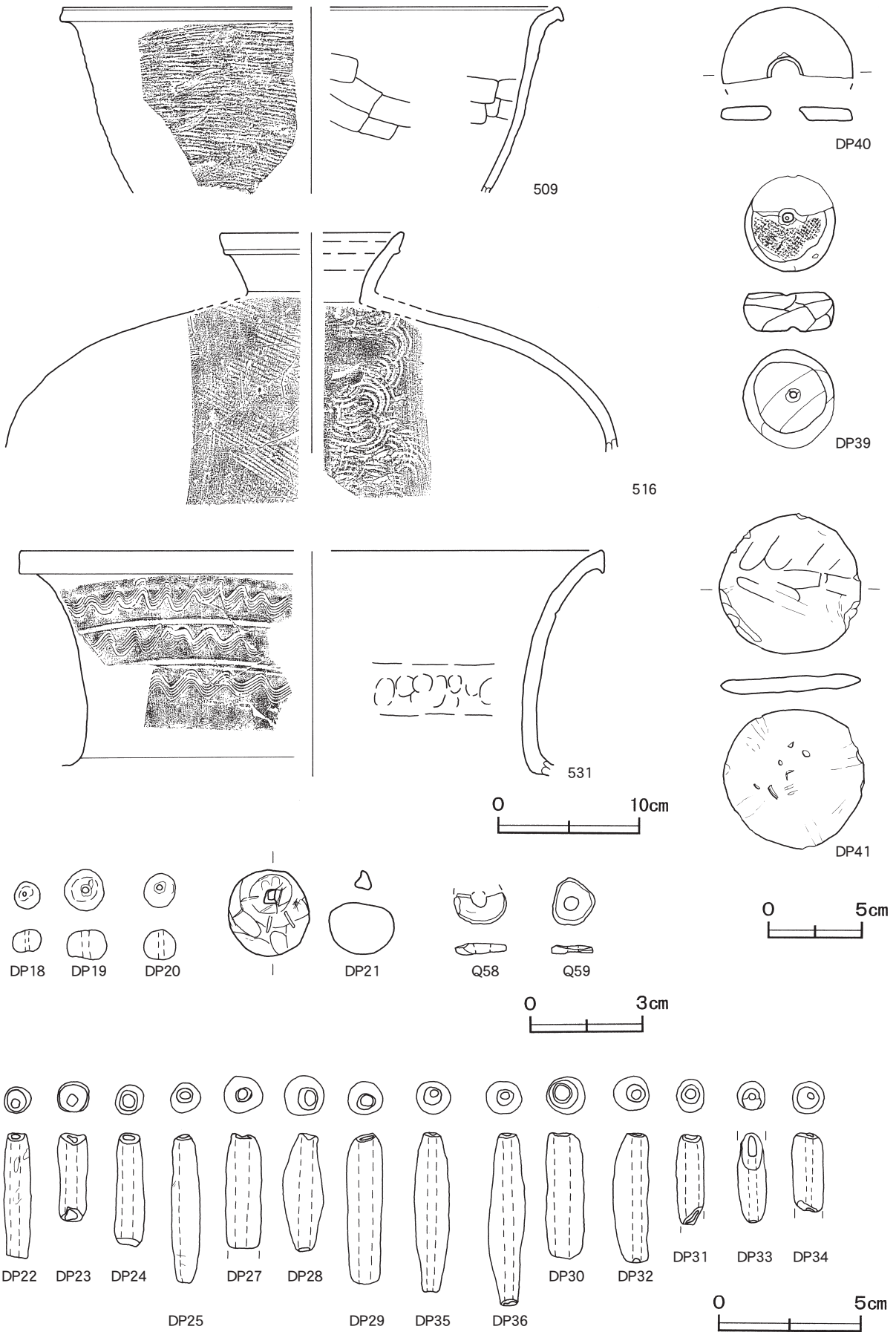
第118图 第1号流路跡出土遺物実測図 (11)



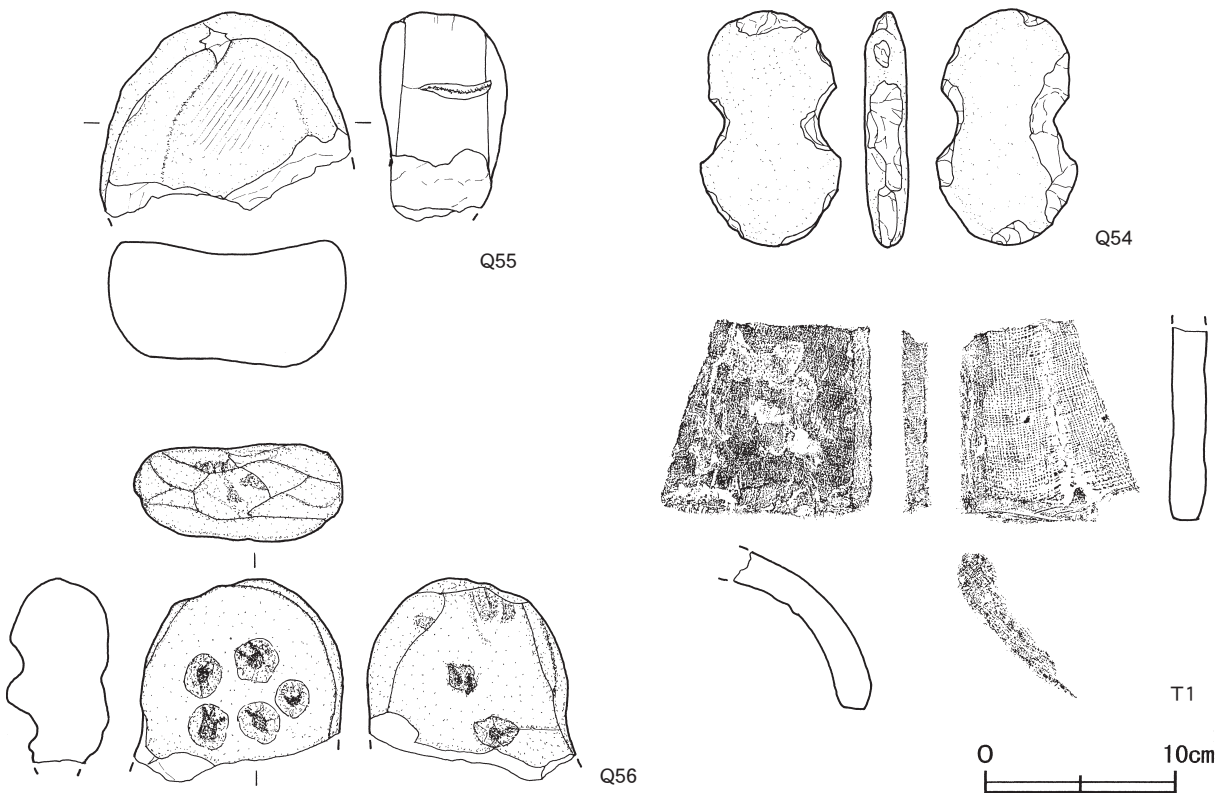
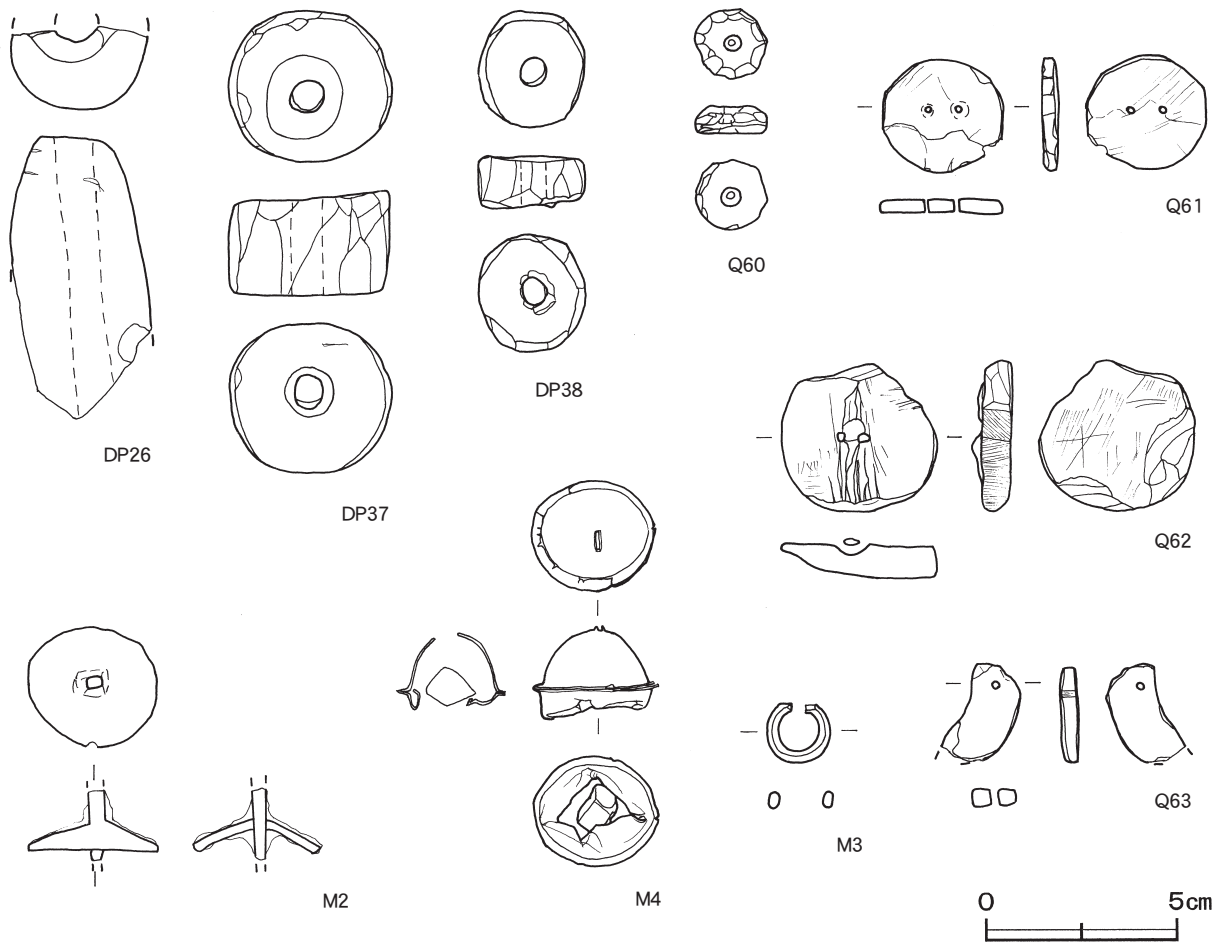
第119図 第1号流路跡出土遺物実測図(12)



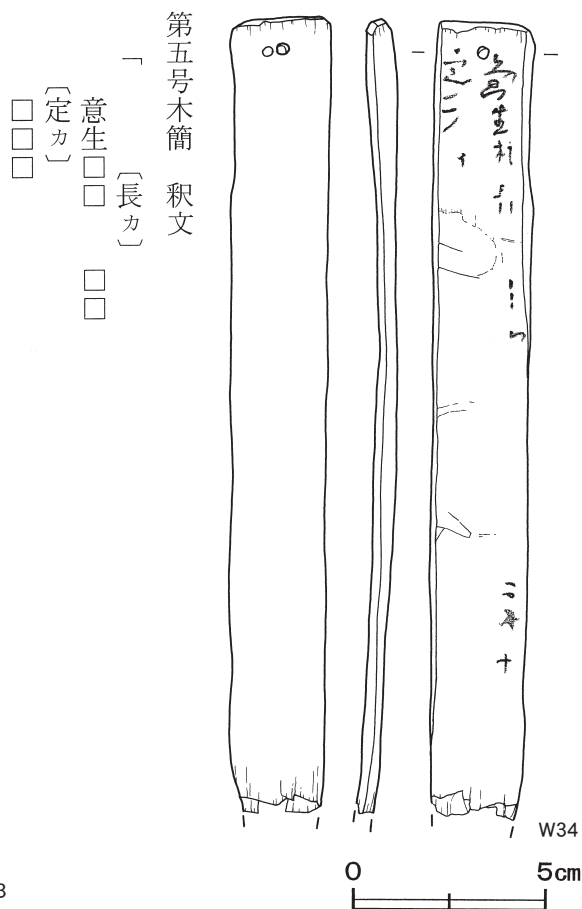
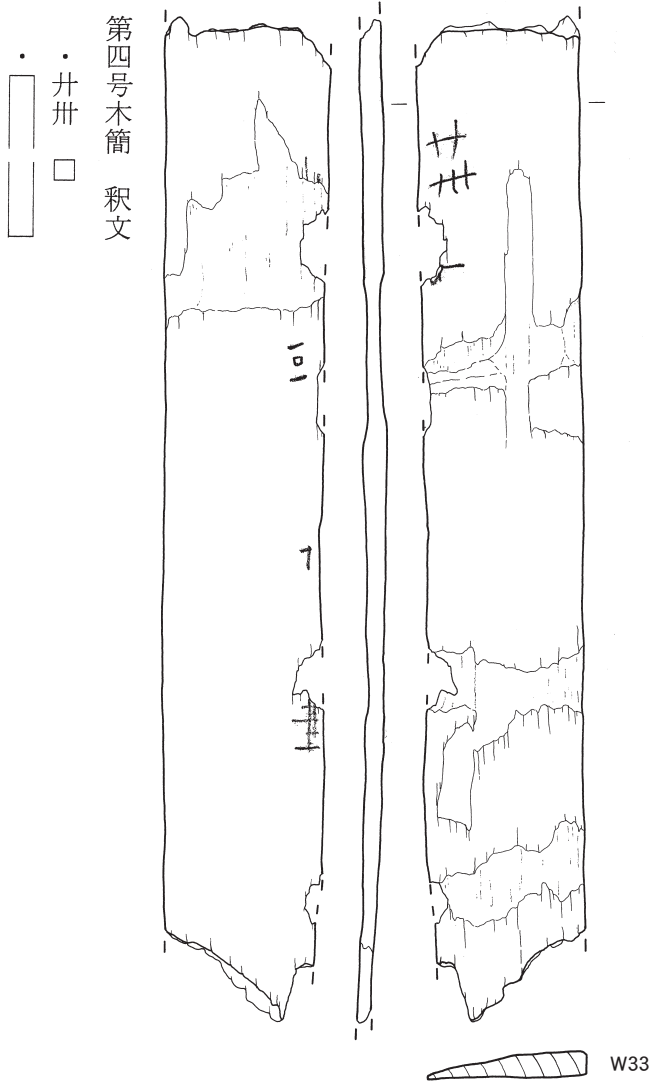
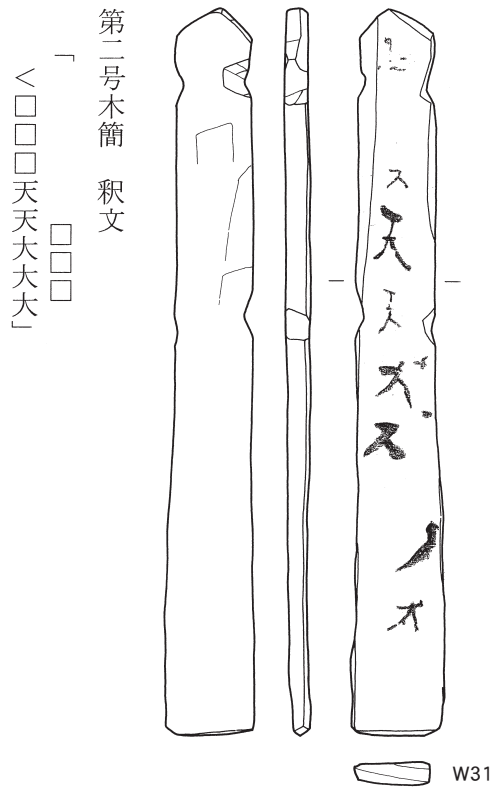
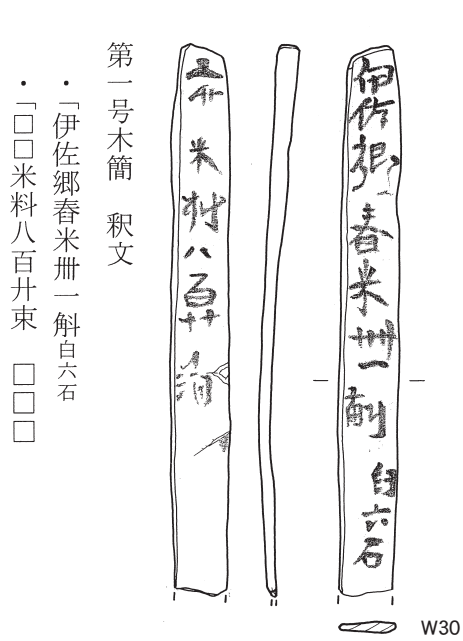
第120图 第1号流路跡出土遺物実測図 (13)



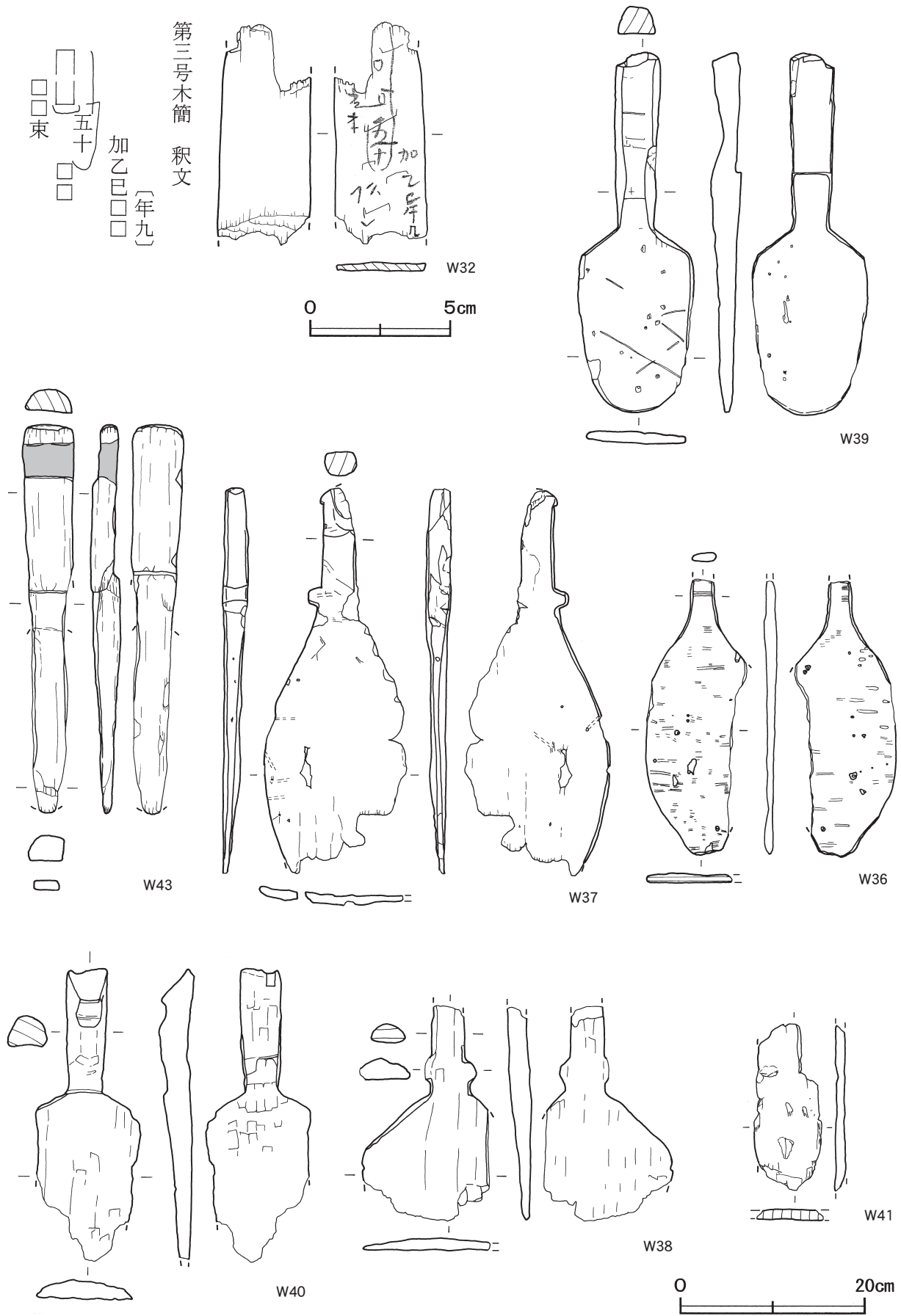
第121图 第1号流路跡出土遺物実測図(14)



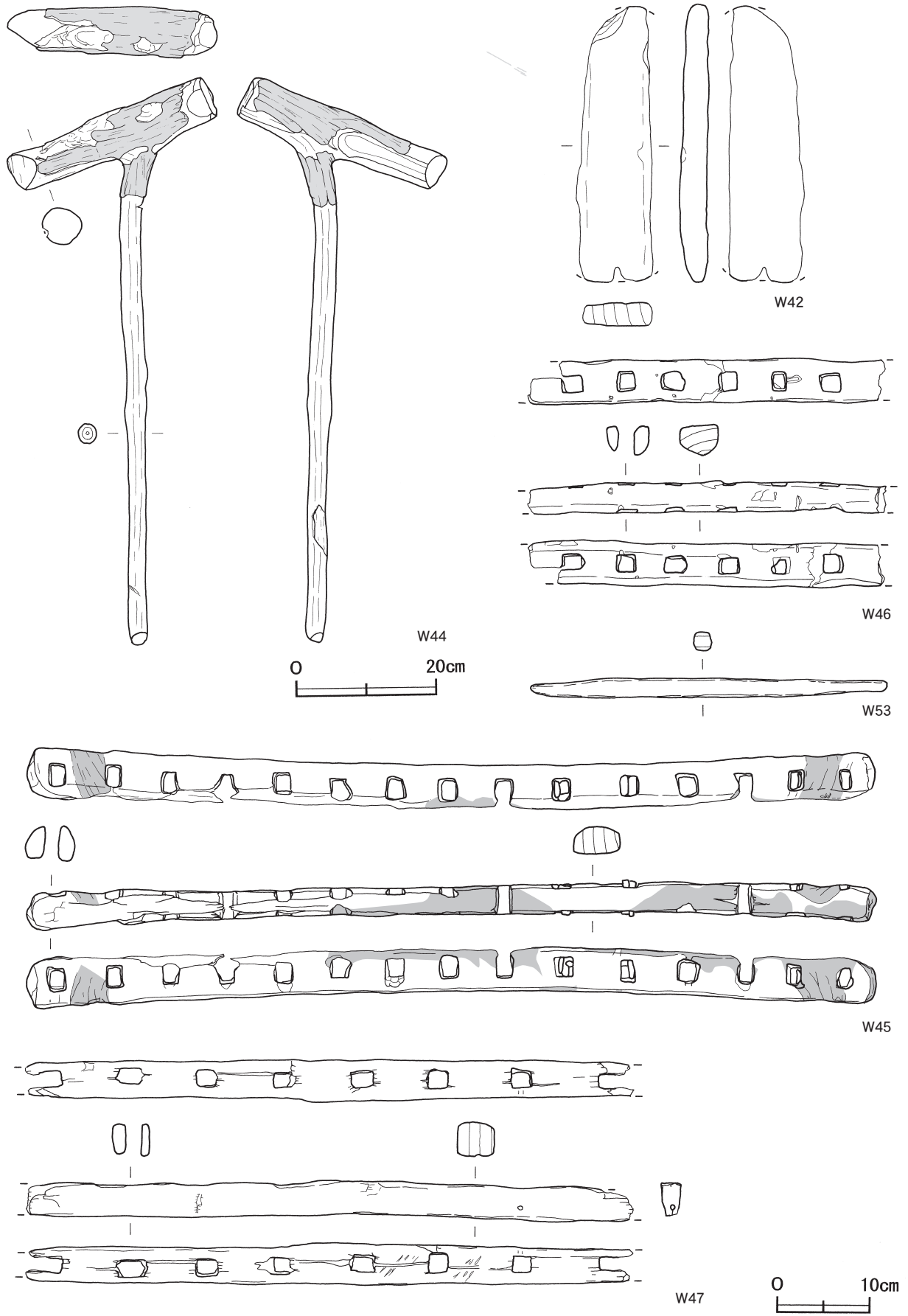
第122图 第1号流路跡出土遺物実測図 (15)



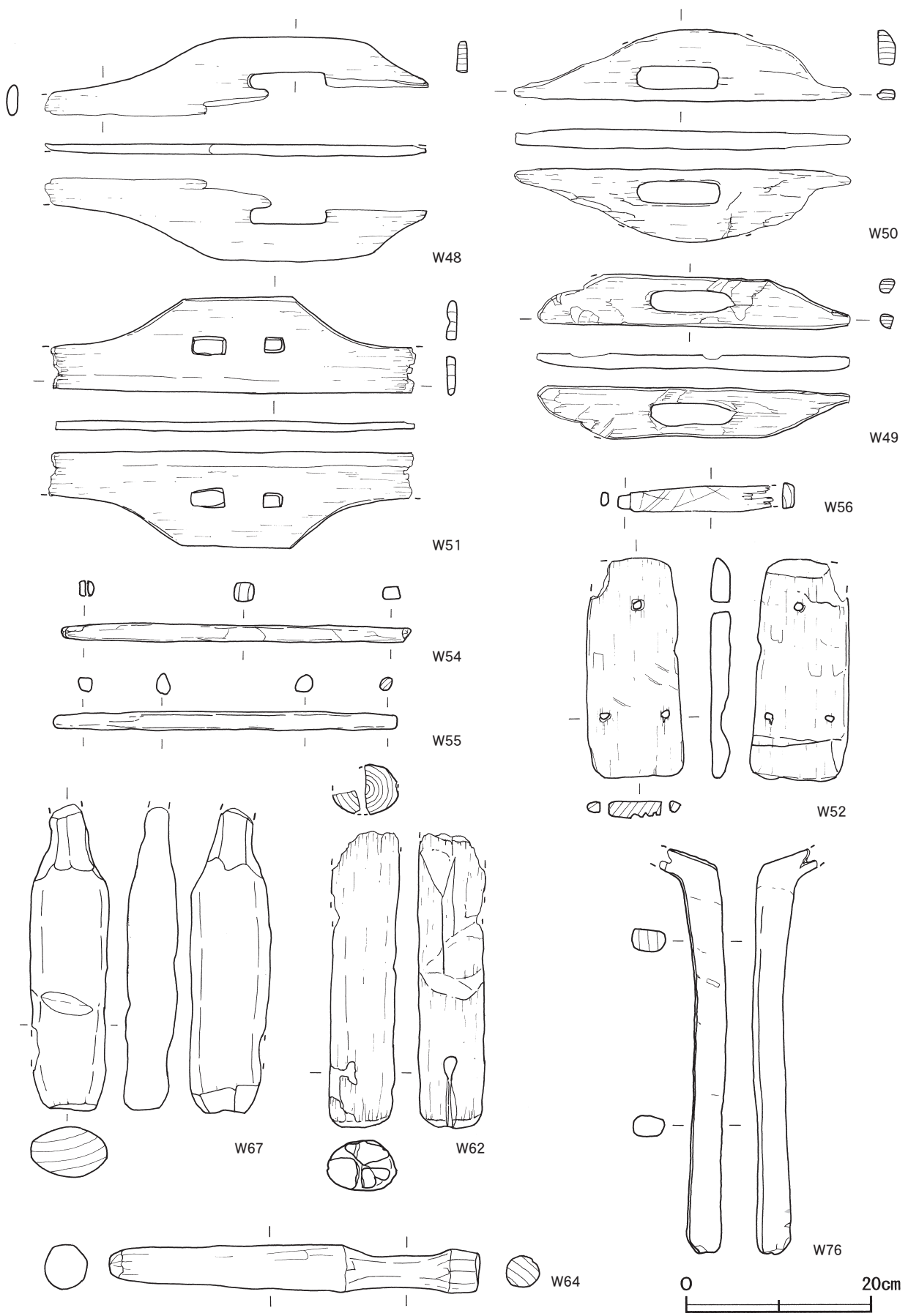
第123図 第1号流路跡出土遺物実測図 (16)



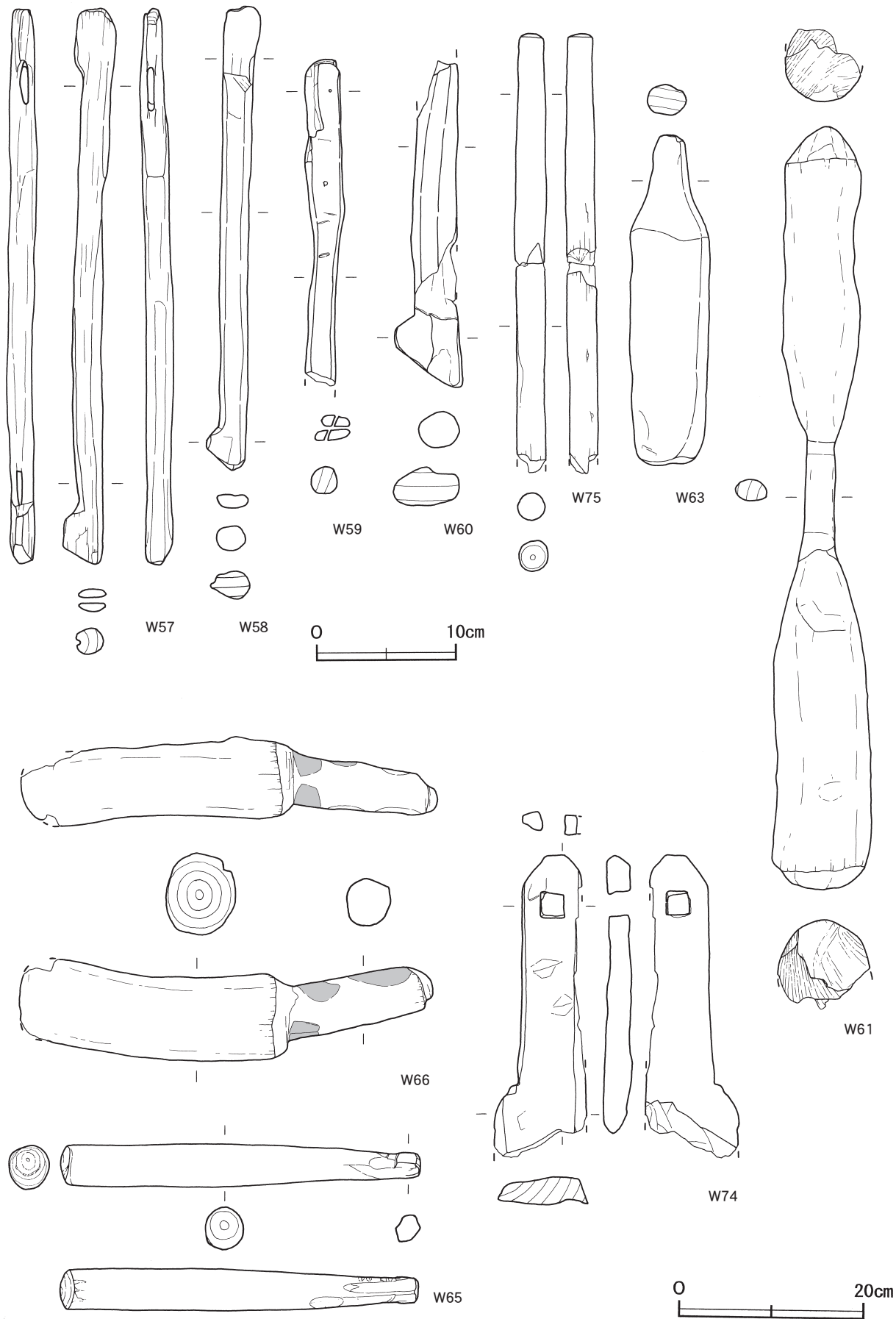
第124图 第1号流路跡出土遺物実測図 (17)



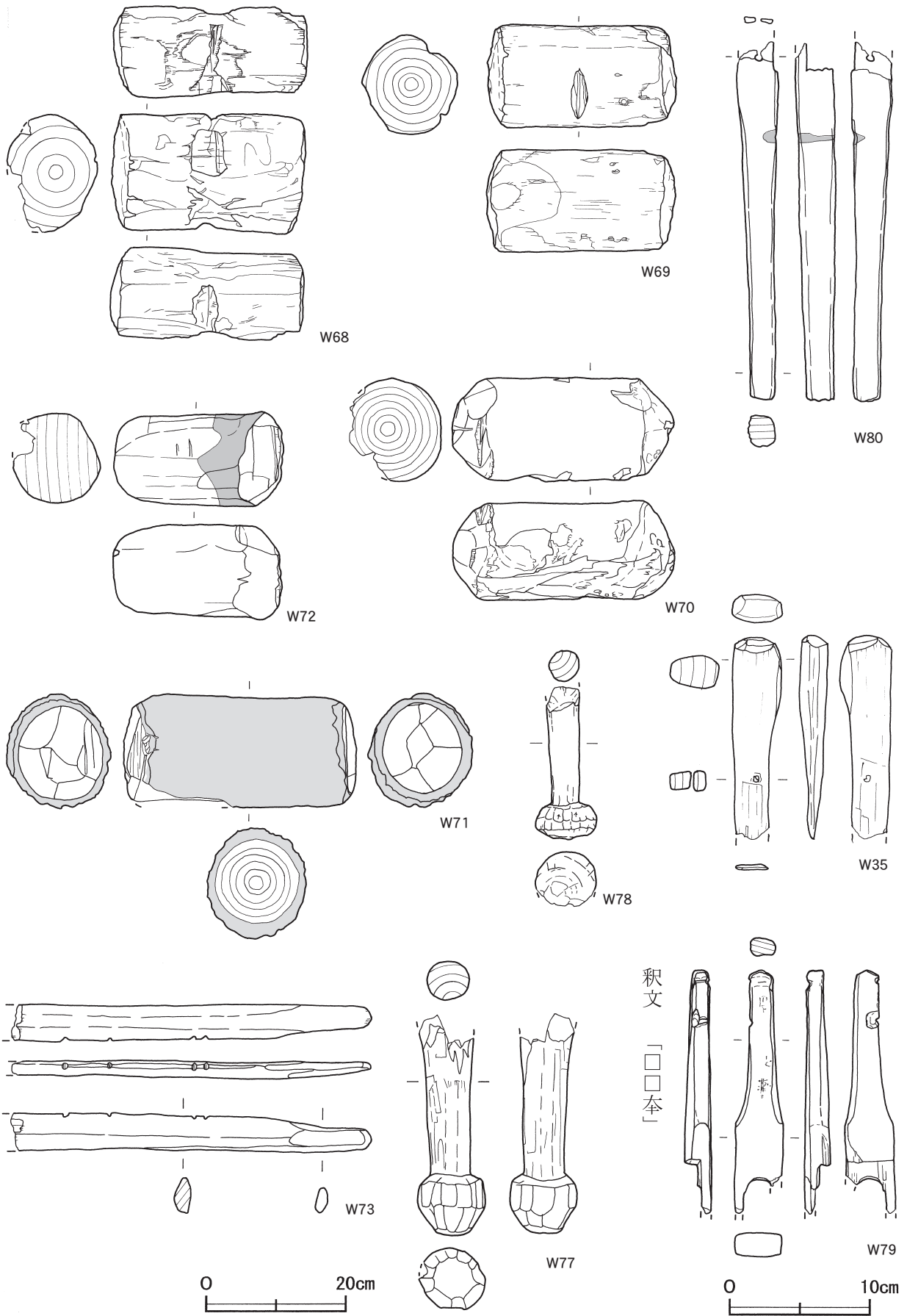
第125図 第1号流路跡出土遺物実測図 (18)



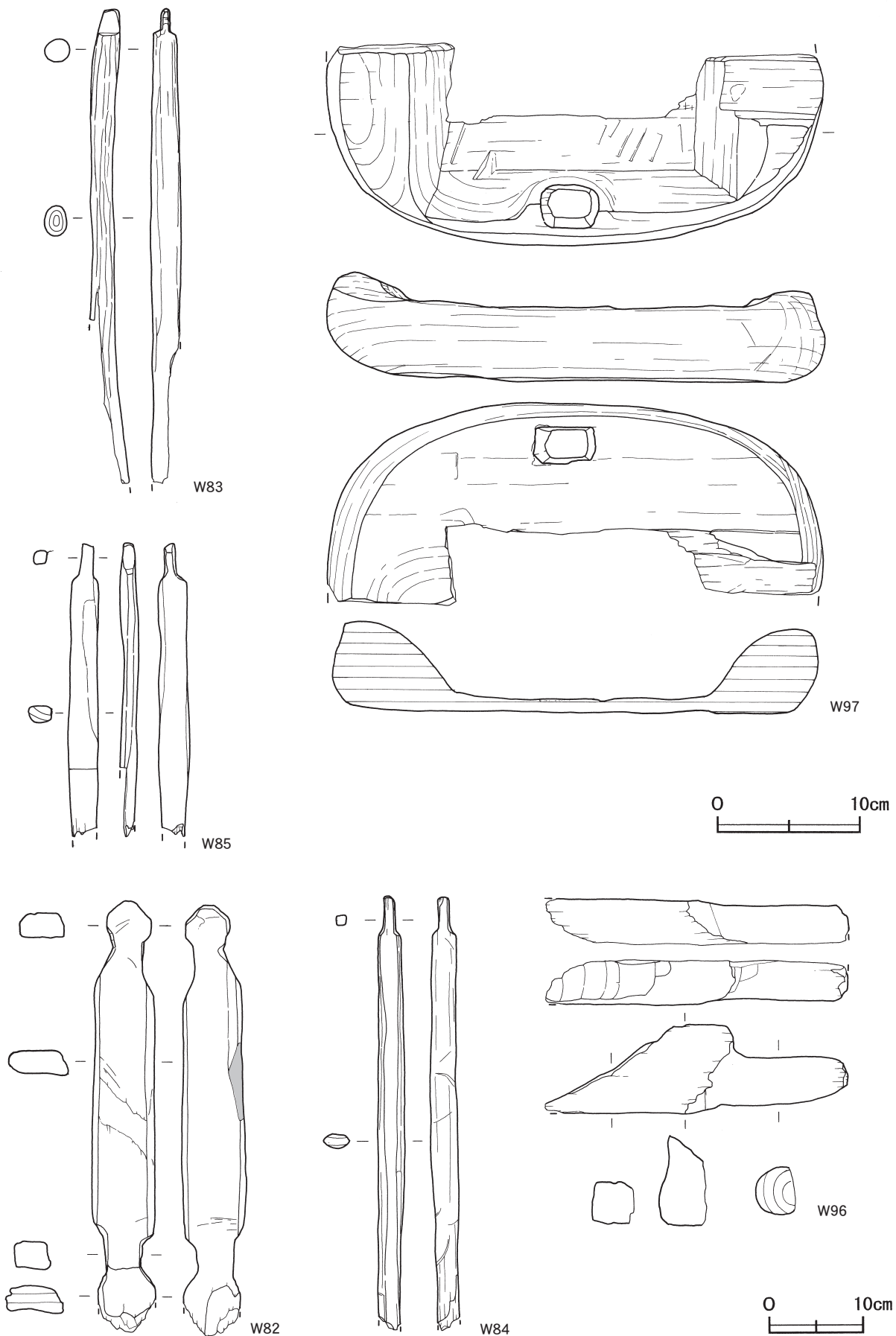
第126图 第1号流路跡出土遺物実測図 (19)



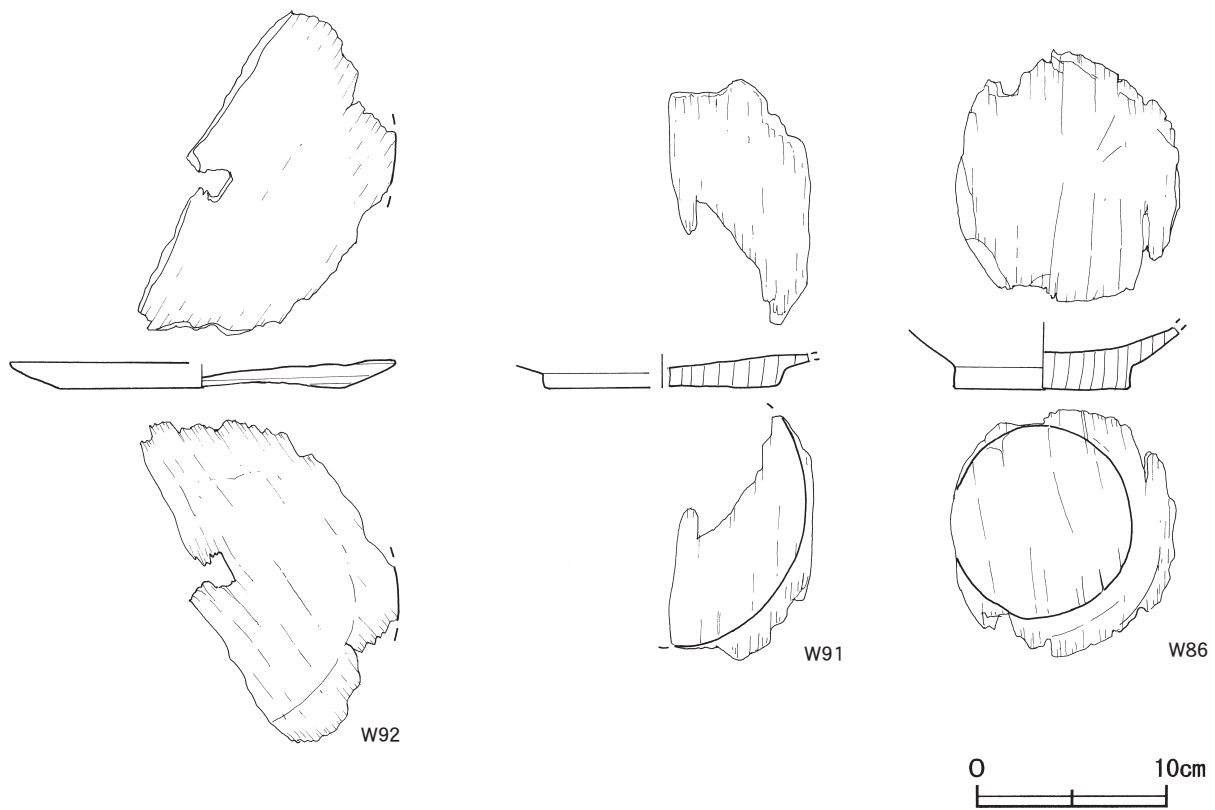
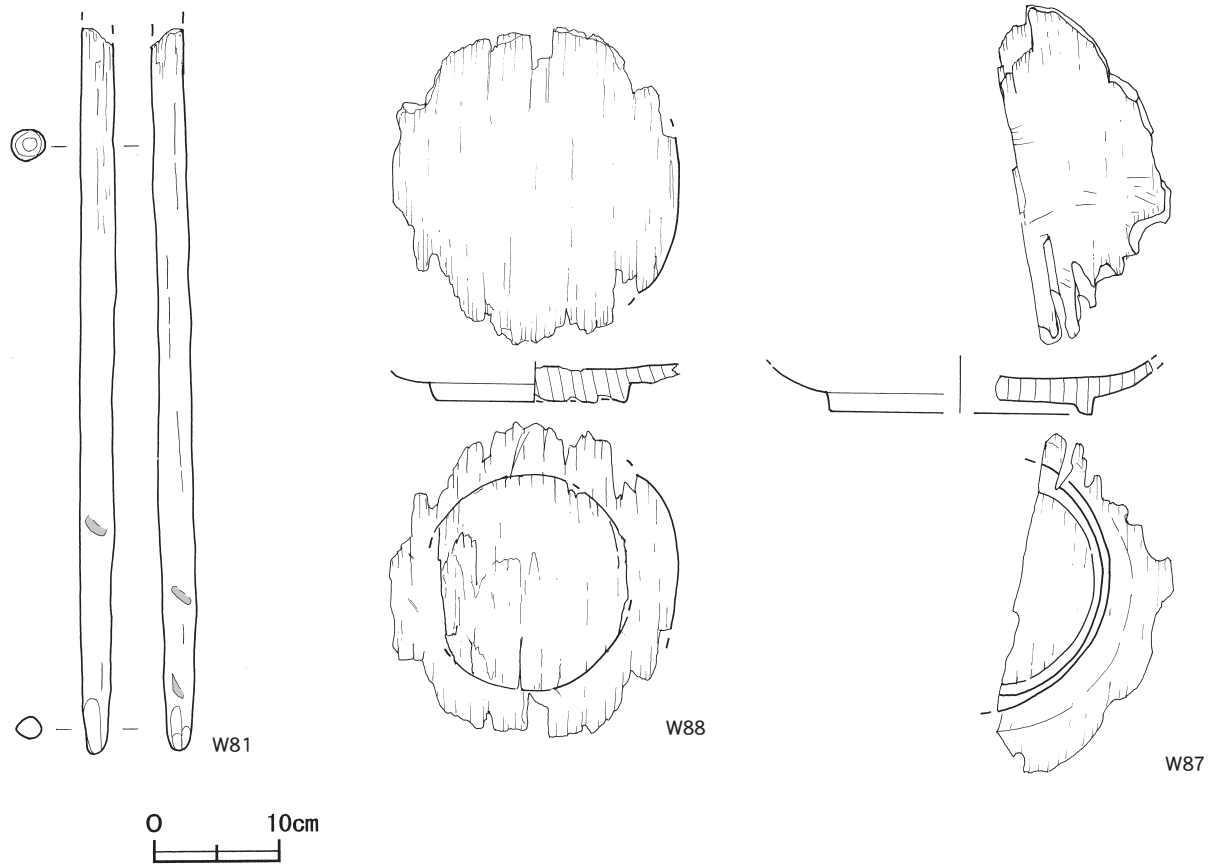
第127图 第1号流路跡出土遺物実測図 (20)



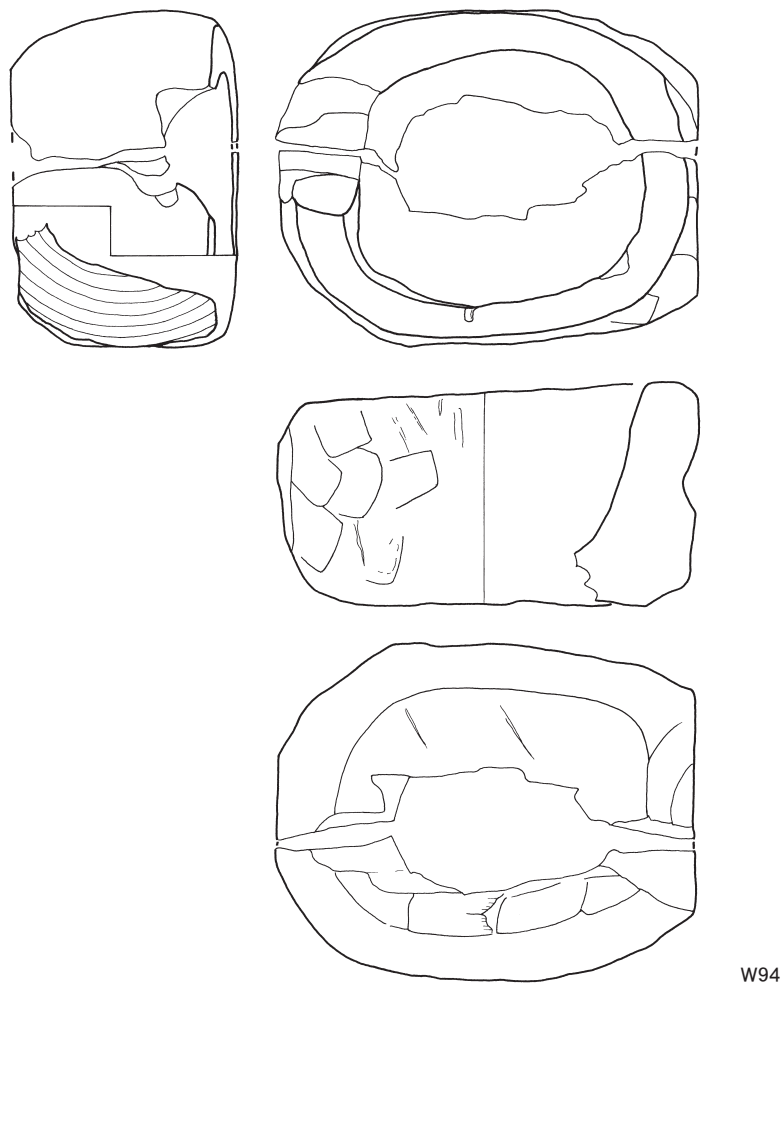
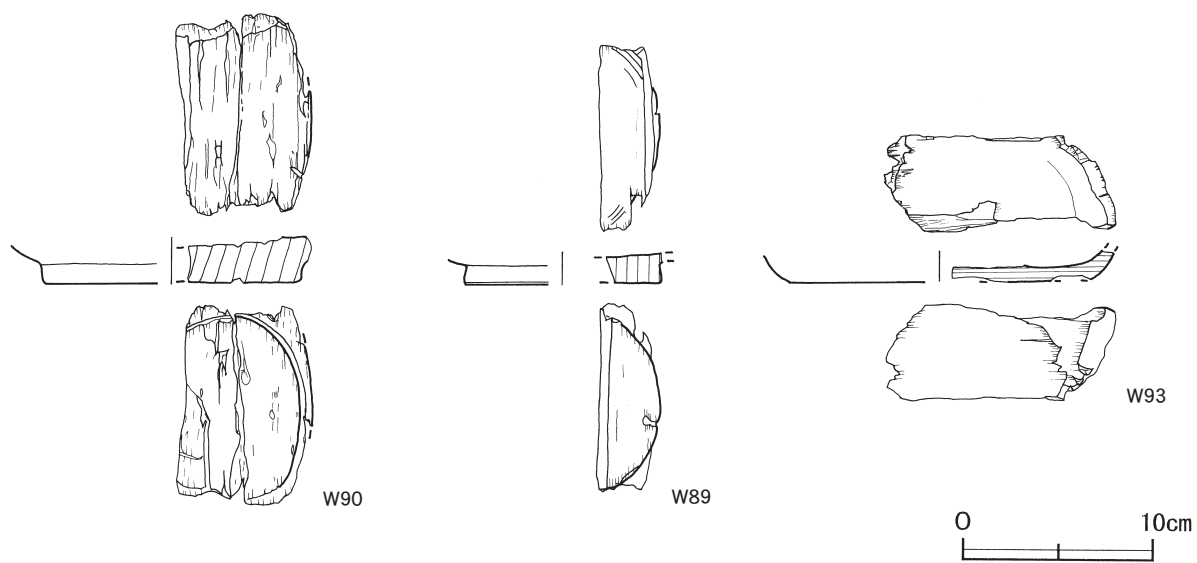
第128图 第1号流路跡出土遺物実測図 (21)



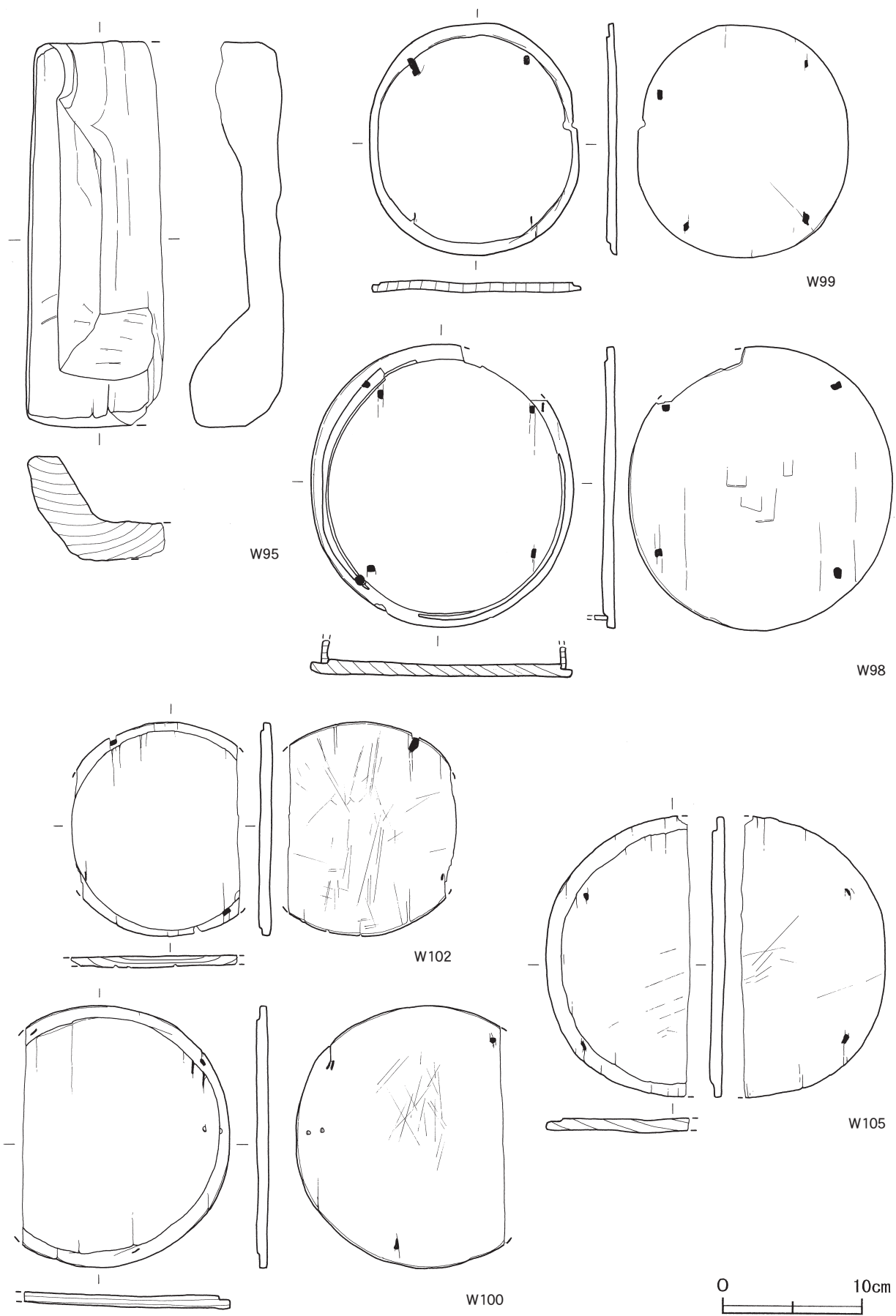
第129図 第1号流路跡出土遺物実測図 (22)



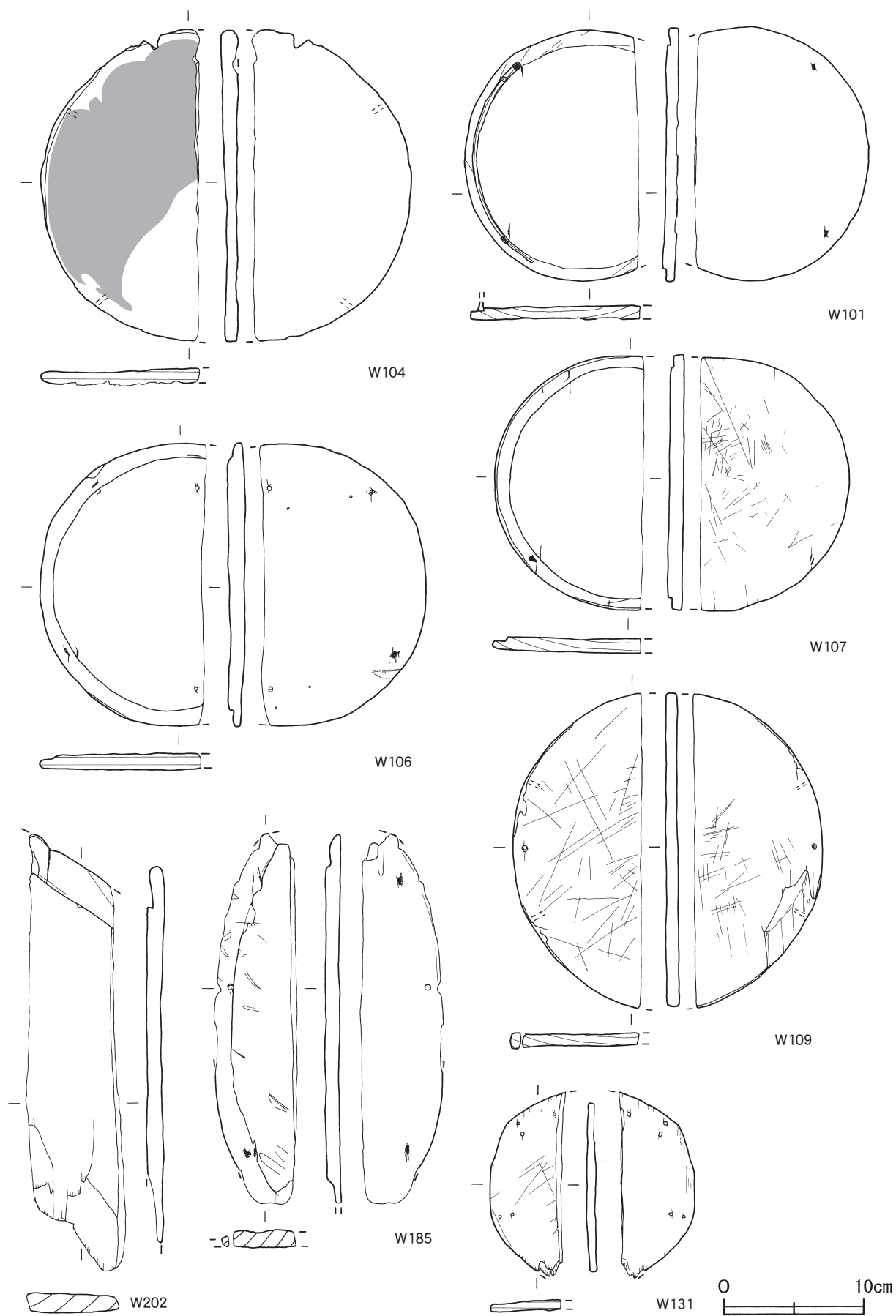
第130图 第1号流路跡出土遺物実測図 (23)



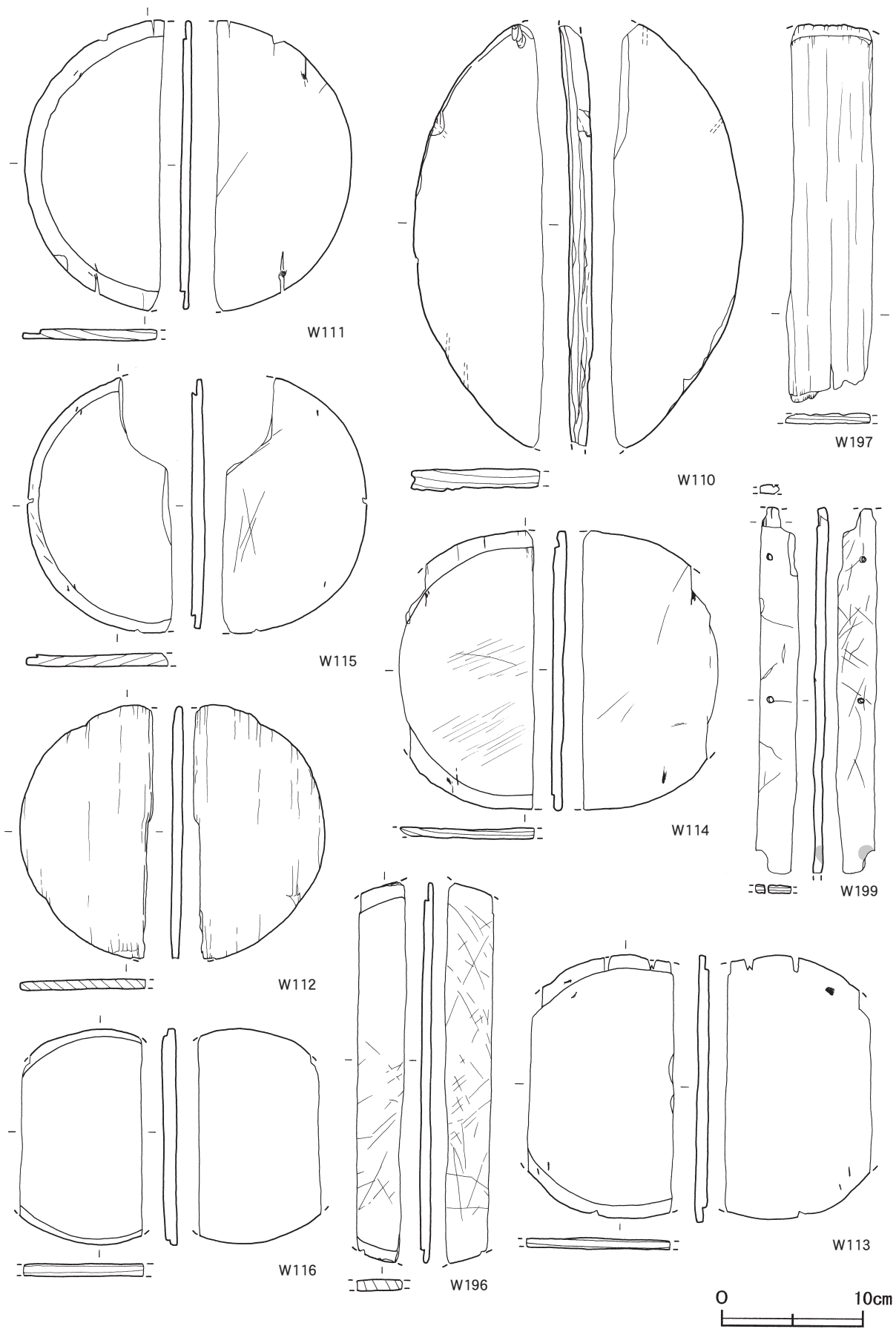
第131图 第1号流路跡出土遺物実測図 (24)



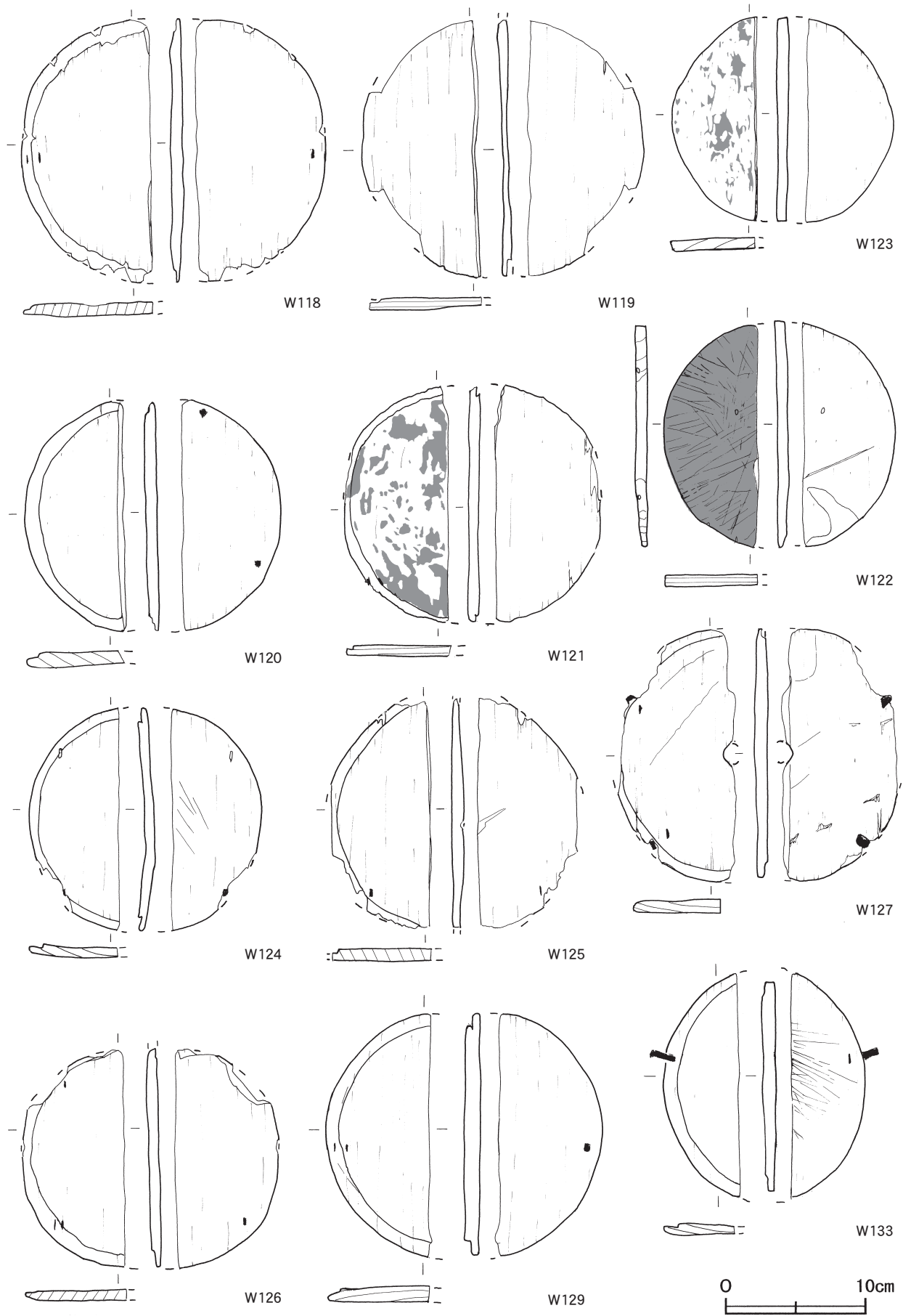
第132图 第1号流路跡出土遺物実測図 (25)



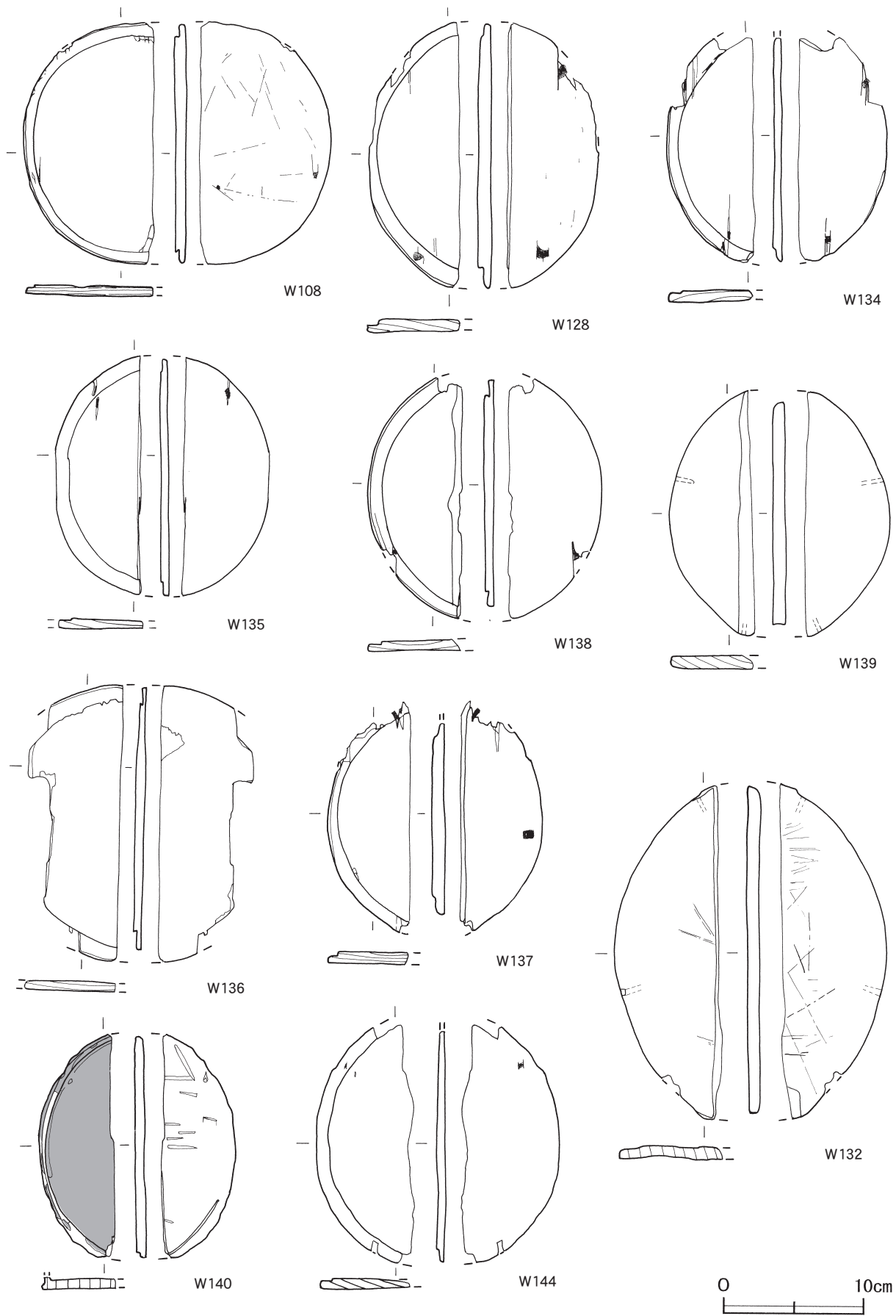
第133图 第1号流路跡出土遺物実測図 (26)



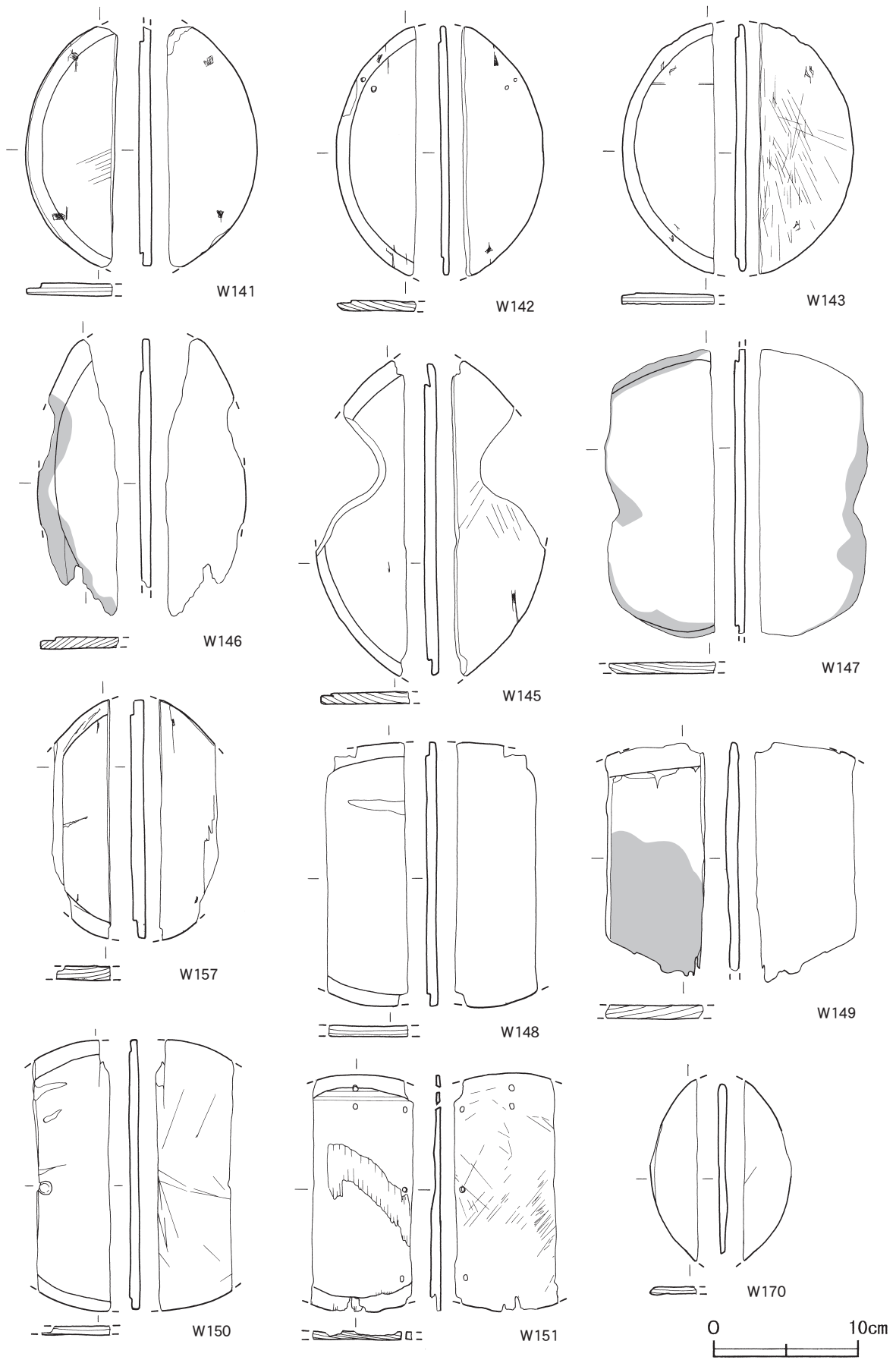
第134图 第1号流路跡出土遺物実測図 (27)



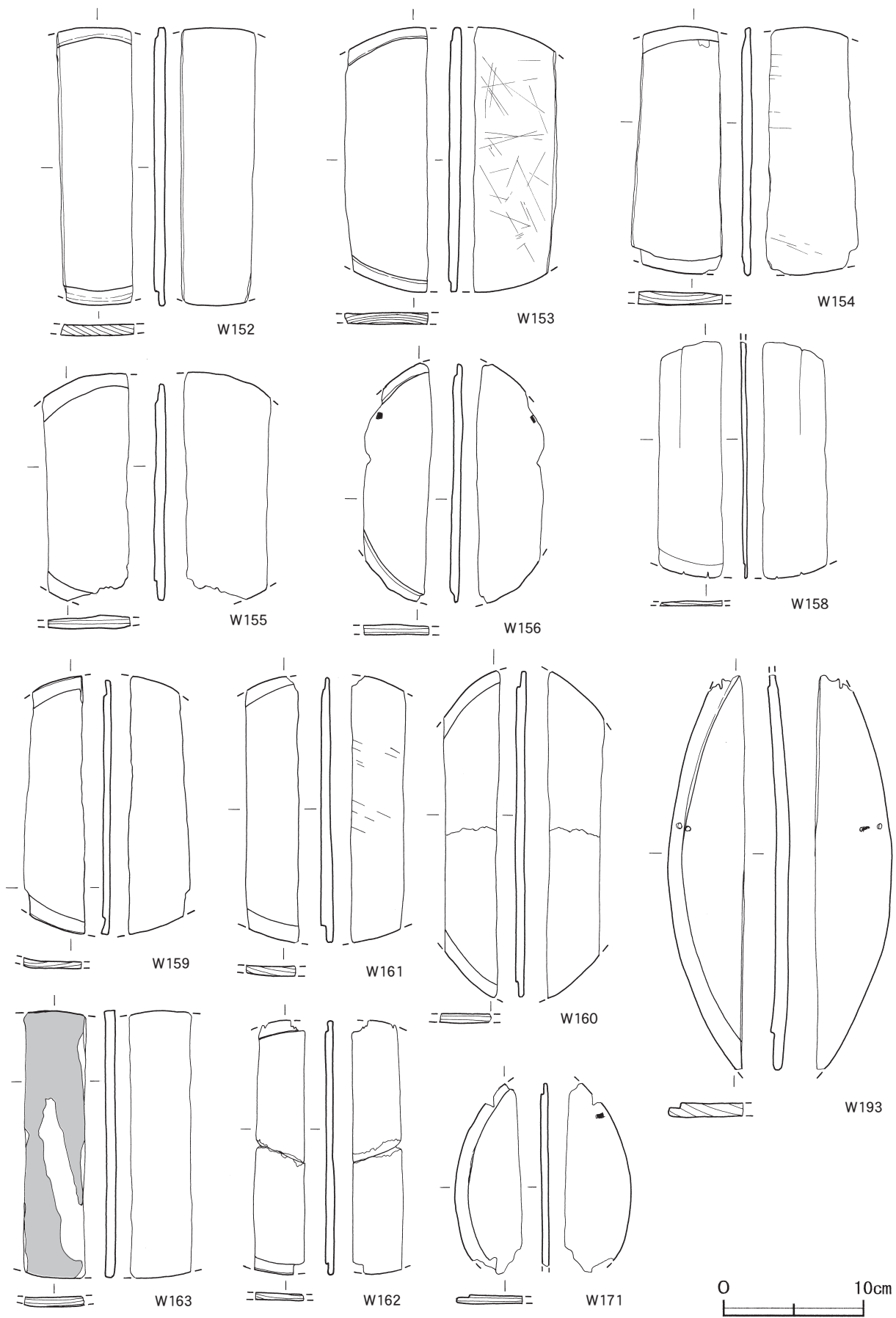
第135图 第1号流路迹出土遺物実測図 (28)



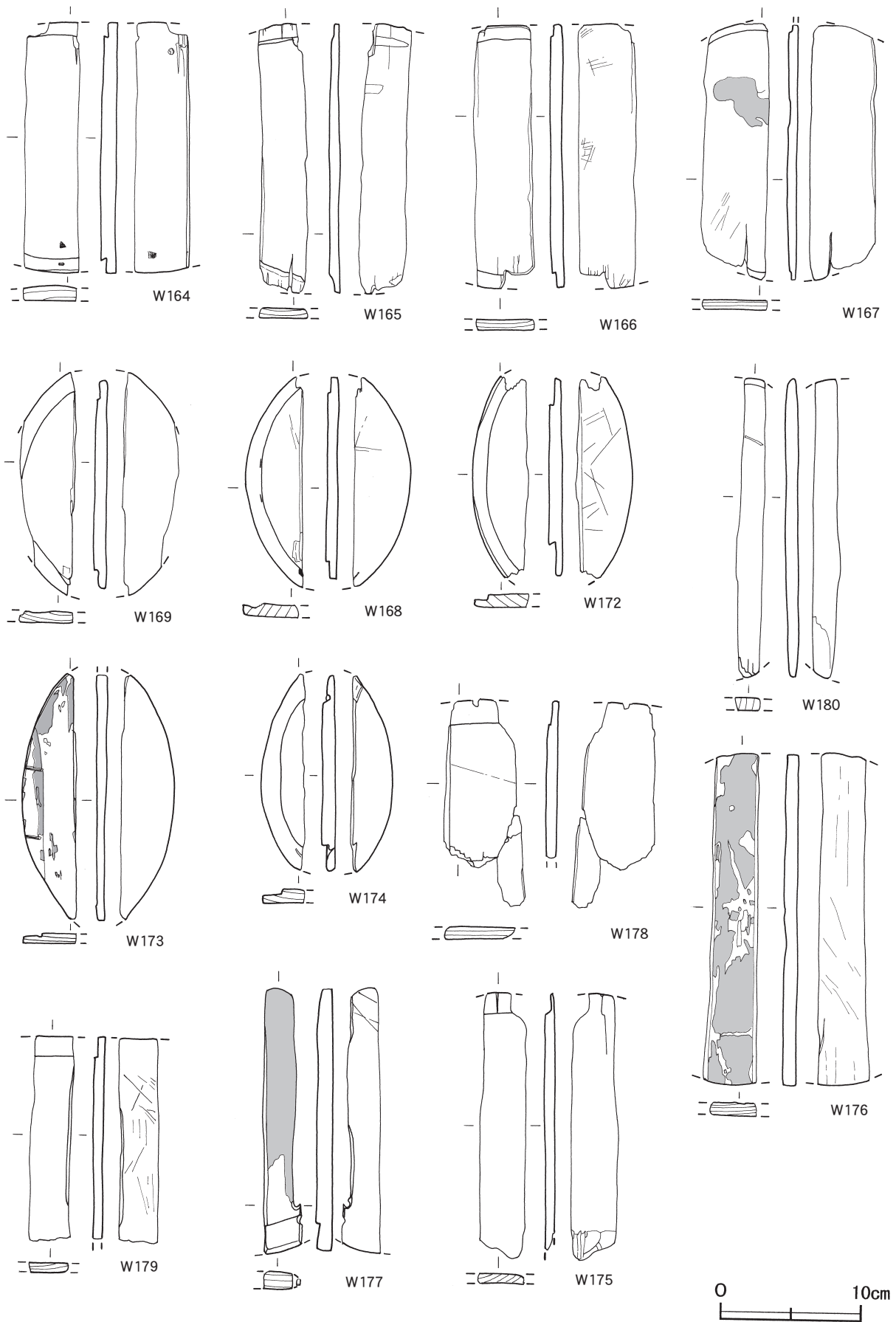
第136图 第1号流路跡出土遺物実測図 (29)



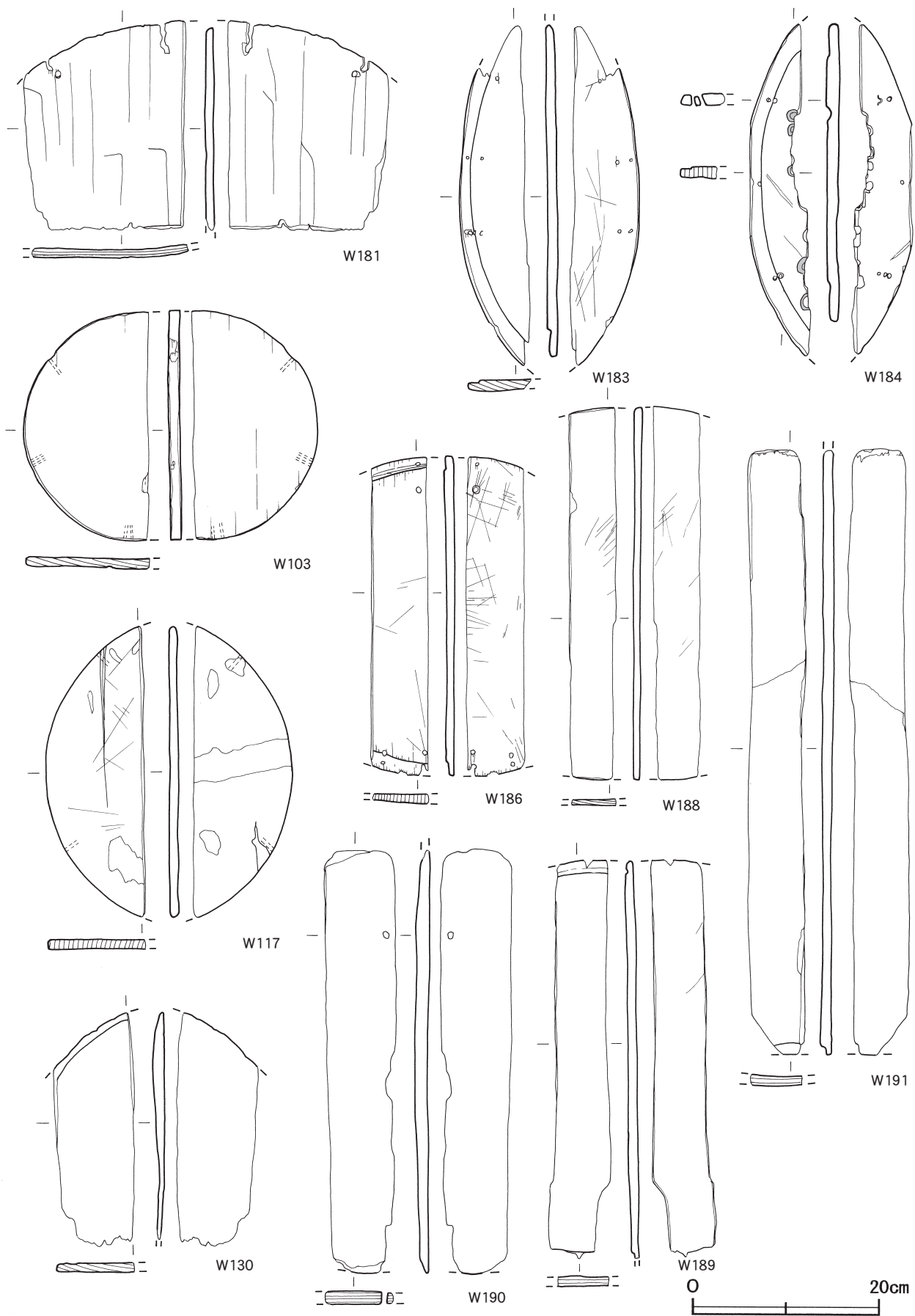
第137图 第1号流路跡出土遺物実測図 (30)



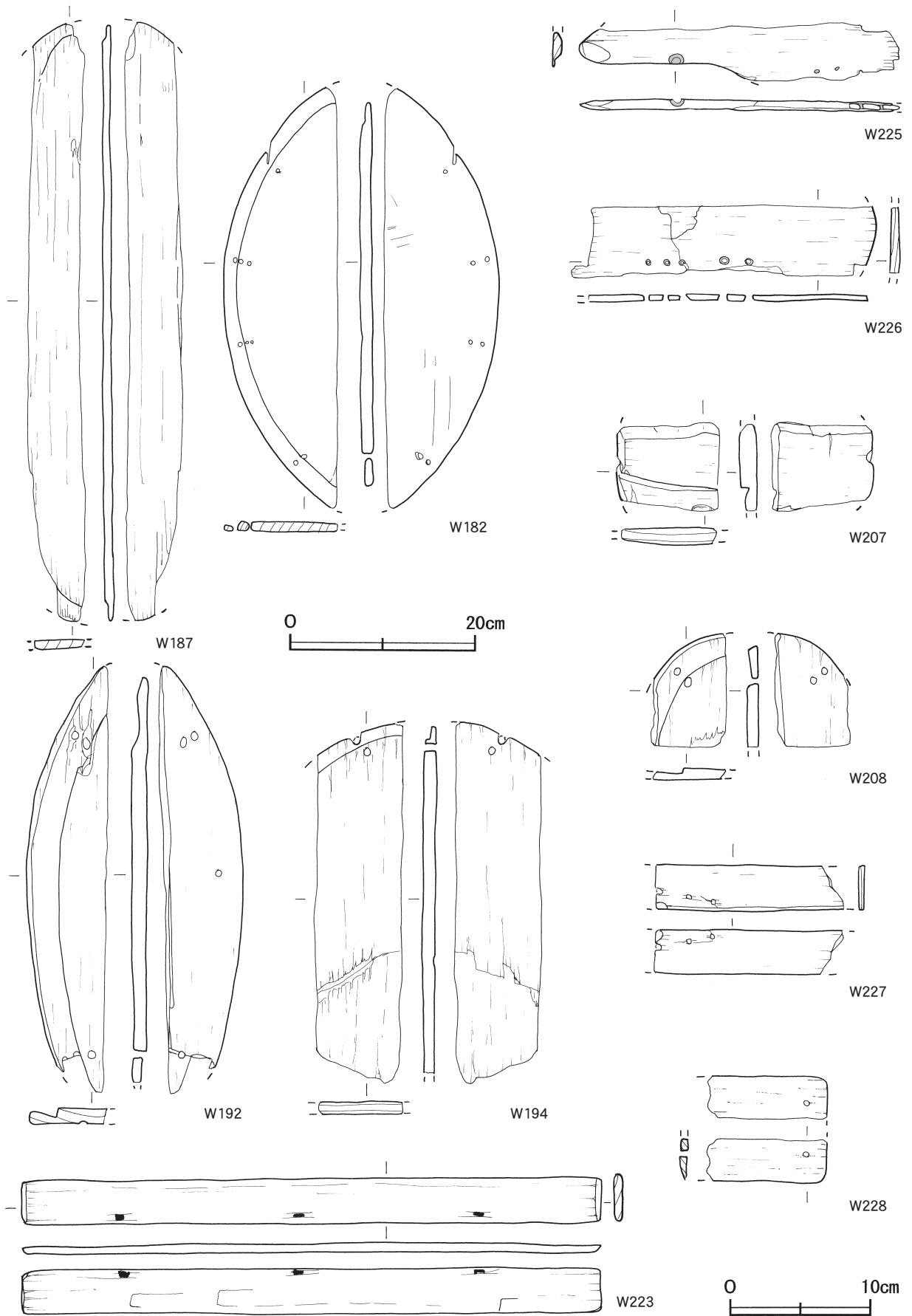
第138图 第1号流路跡出土遺物実測図 (31)



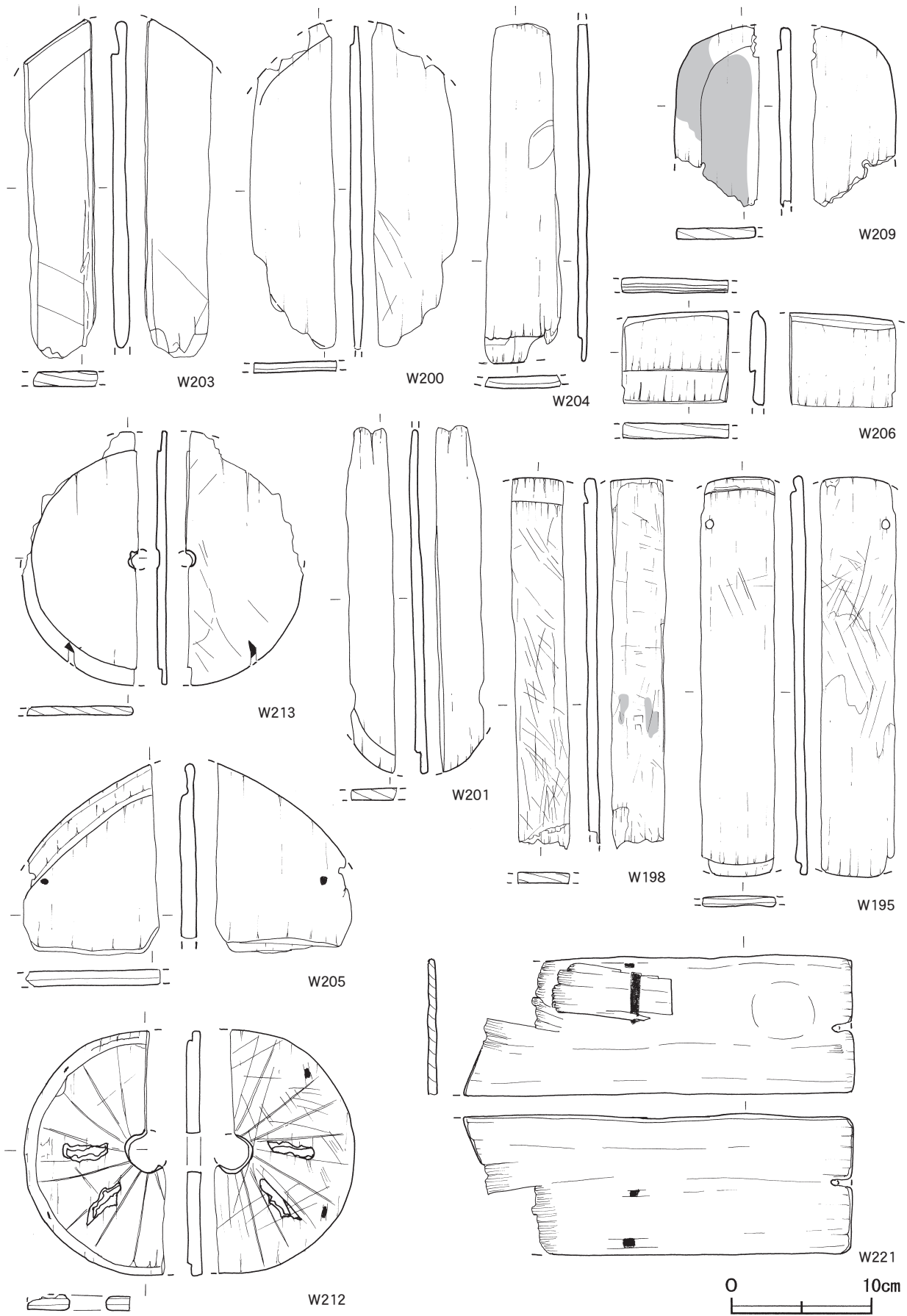
第139图 第1号流路跡出土遺物実測図 (32)



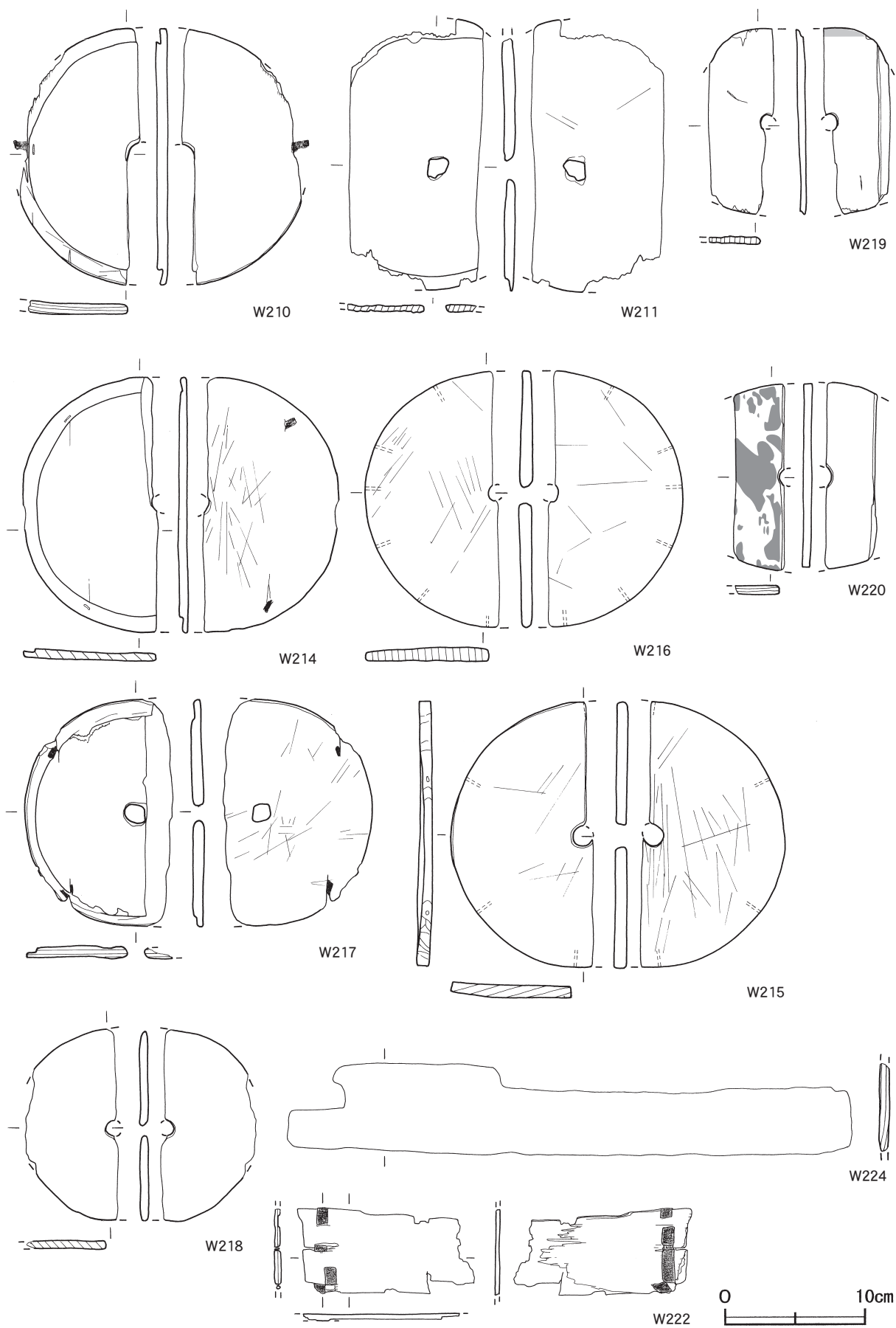
第140图 第1号流路跡出土遺物実測図 (33)



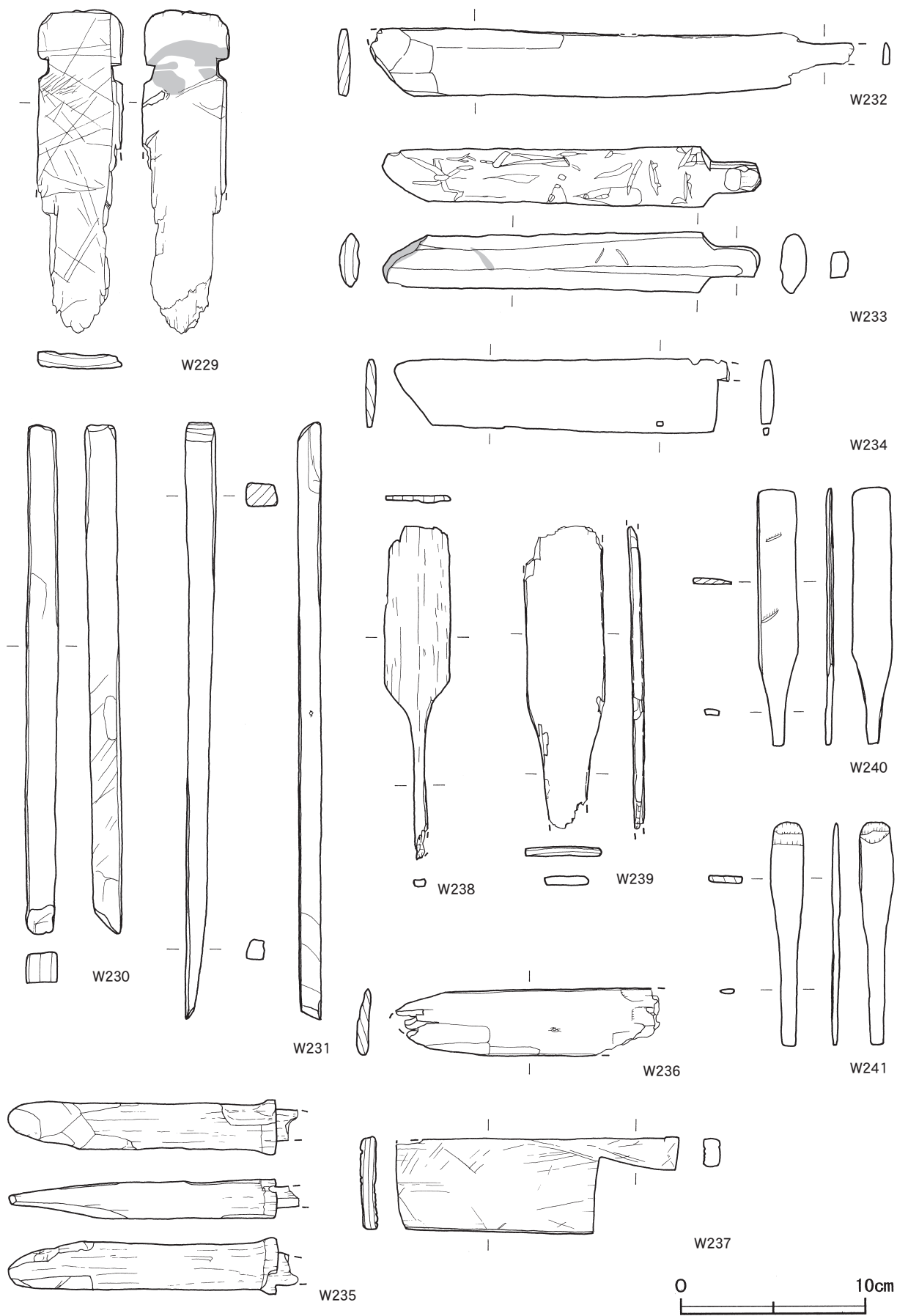
第141图 第1号流路跡出土遺物実測図 (34)



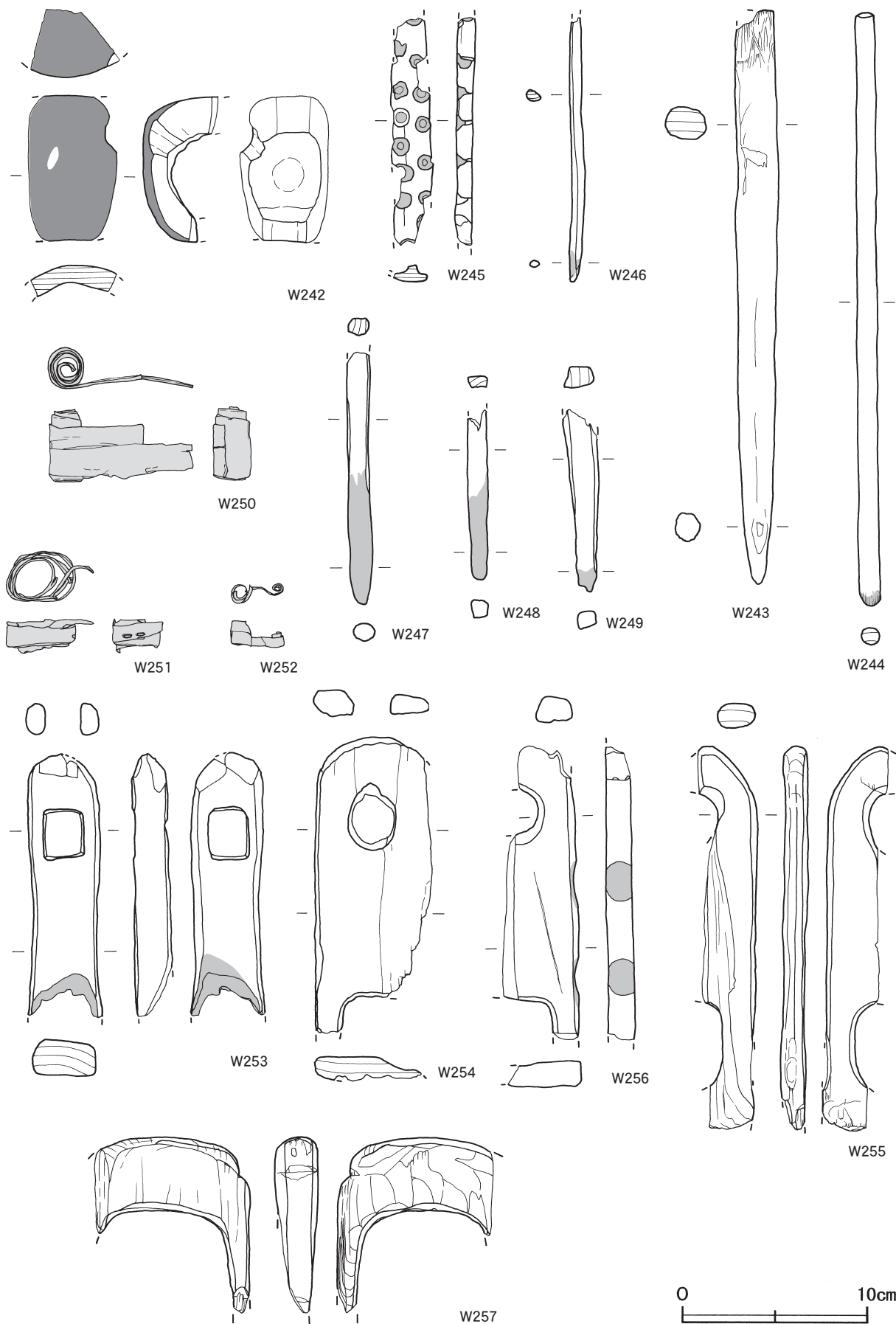
第142图 第1号流路跡出土遺物実測図 (35)



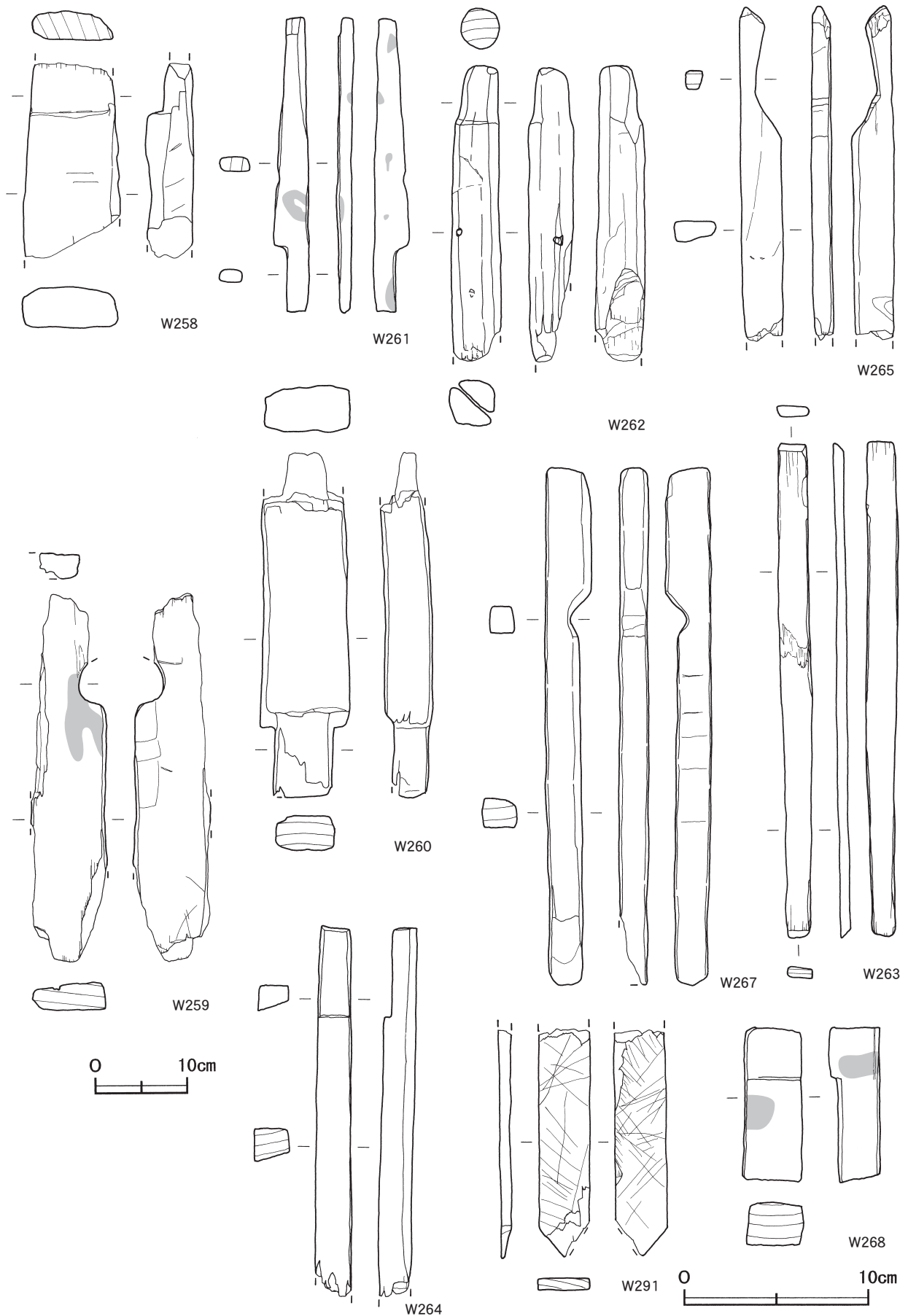
第143图 第1号流路跡出土遺物実測図 (36)



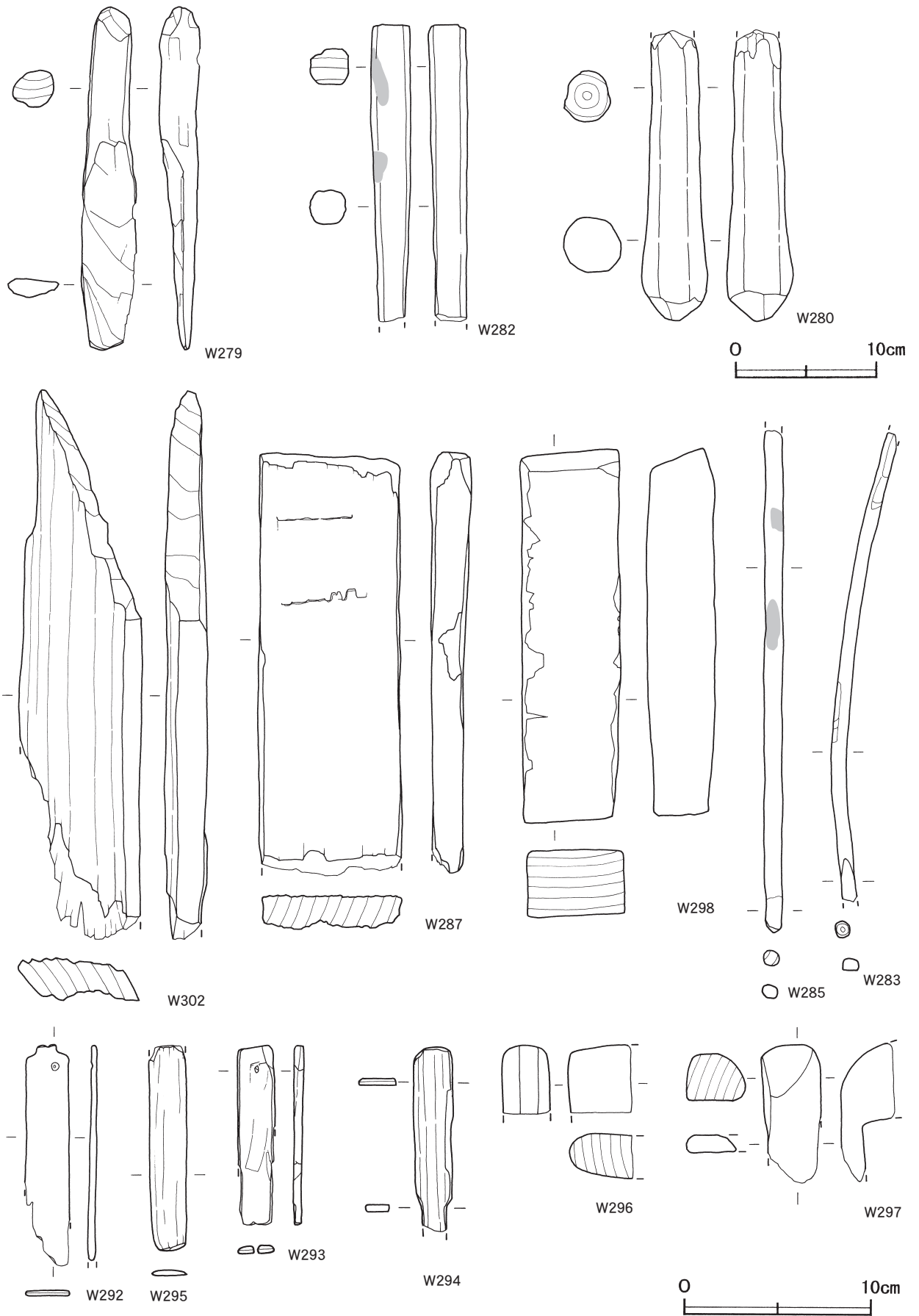
第144图 第1号流路跡出土遺物実測図 (37)



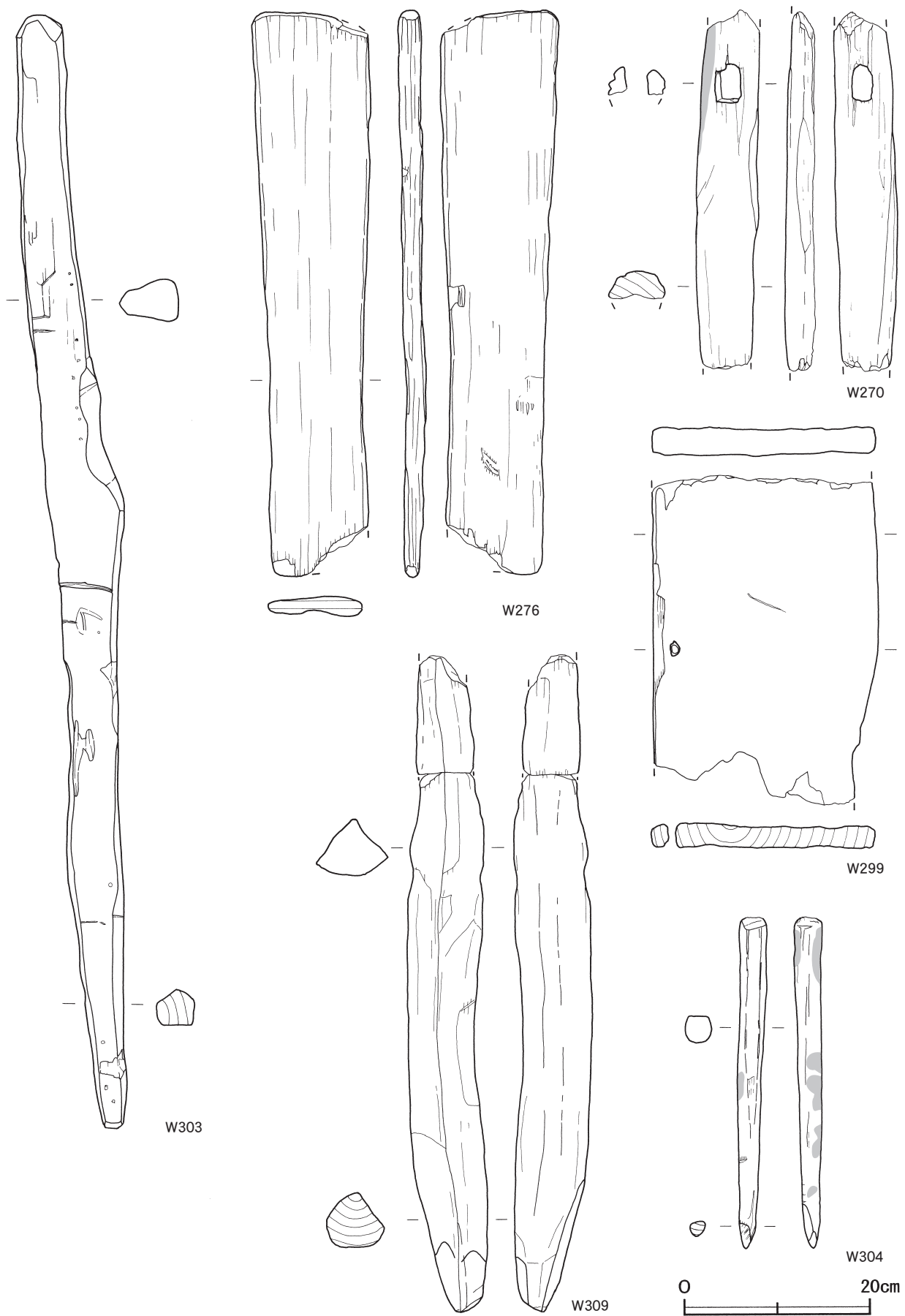
第145图 第1号流路跡出土遺物実測図 (38)



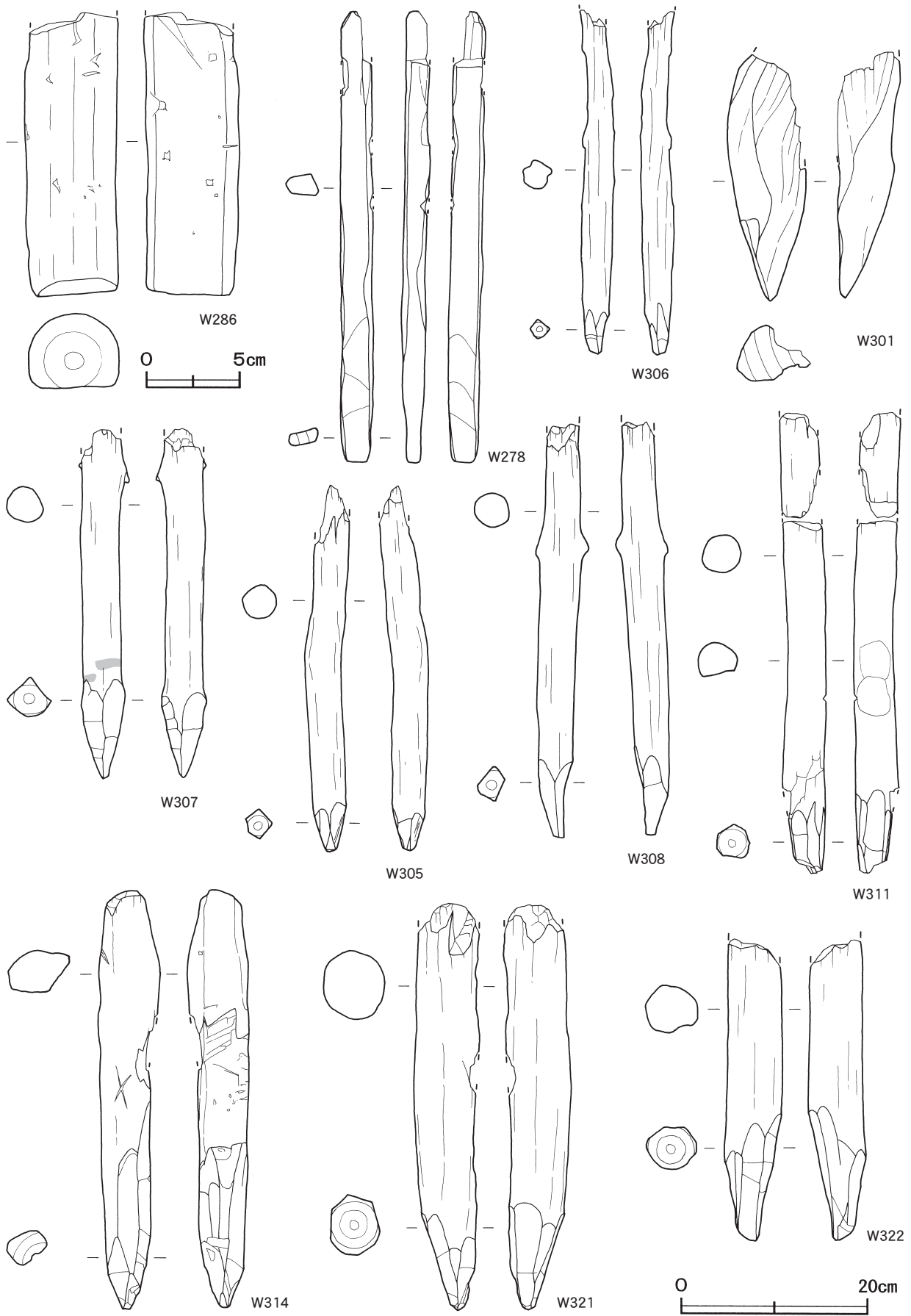
第146图 第1号流路跡出土遺物実測図 (39)



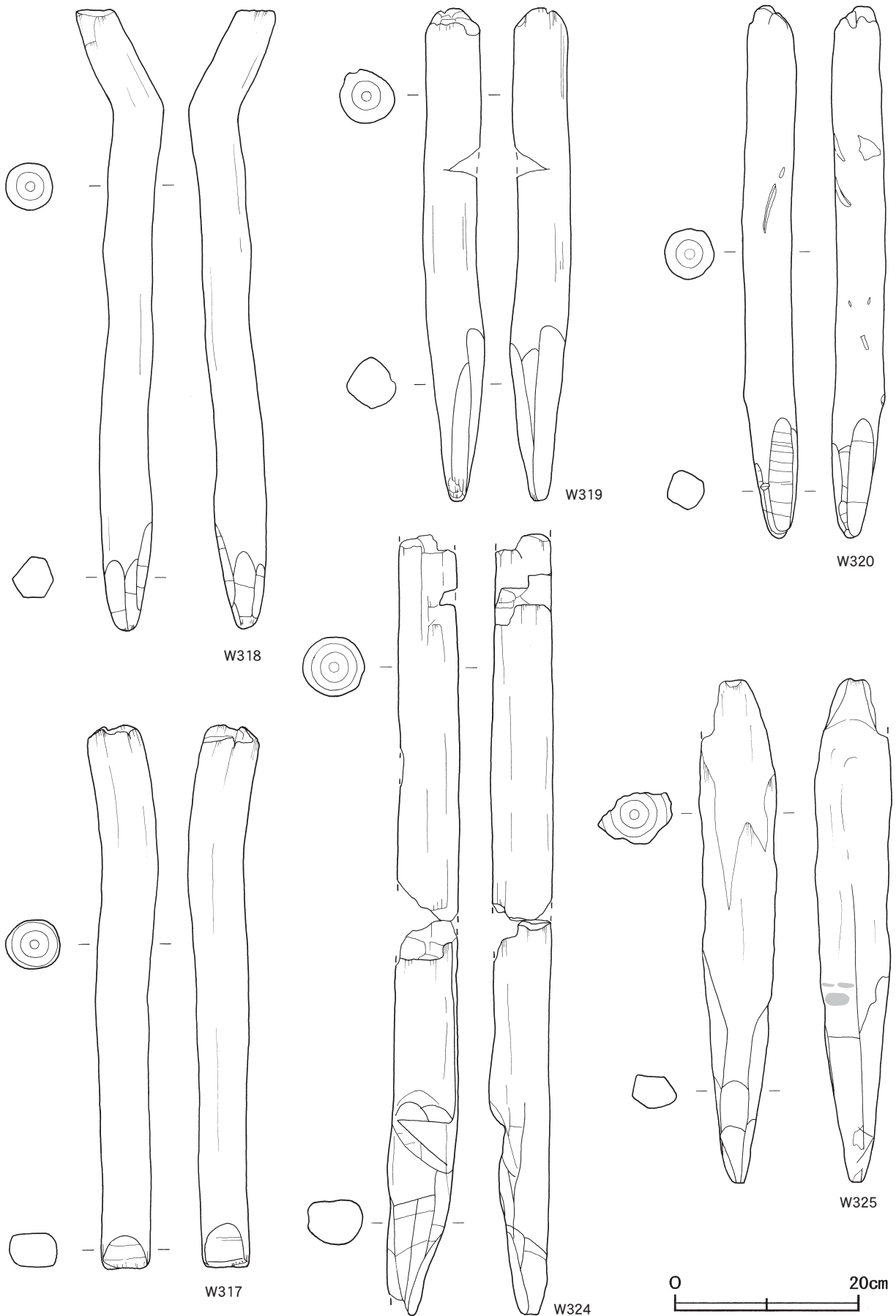
第147图 第1号流路跡出土遺物実測図 (40)



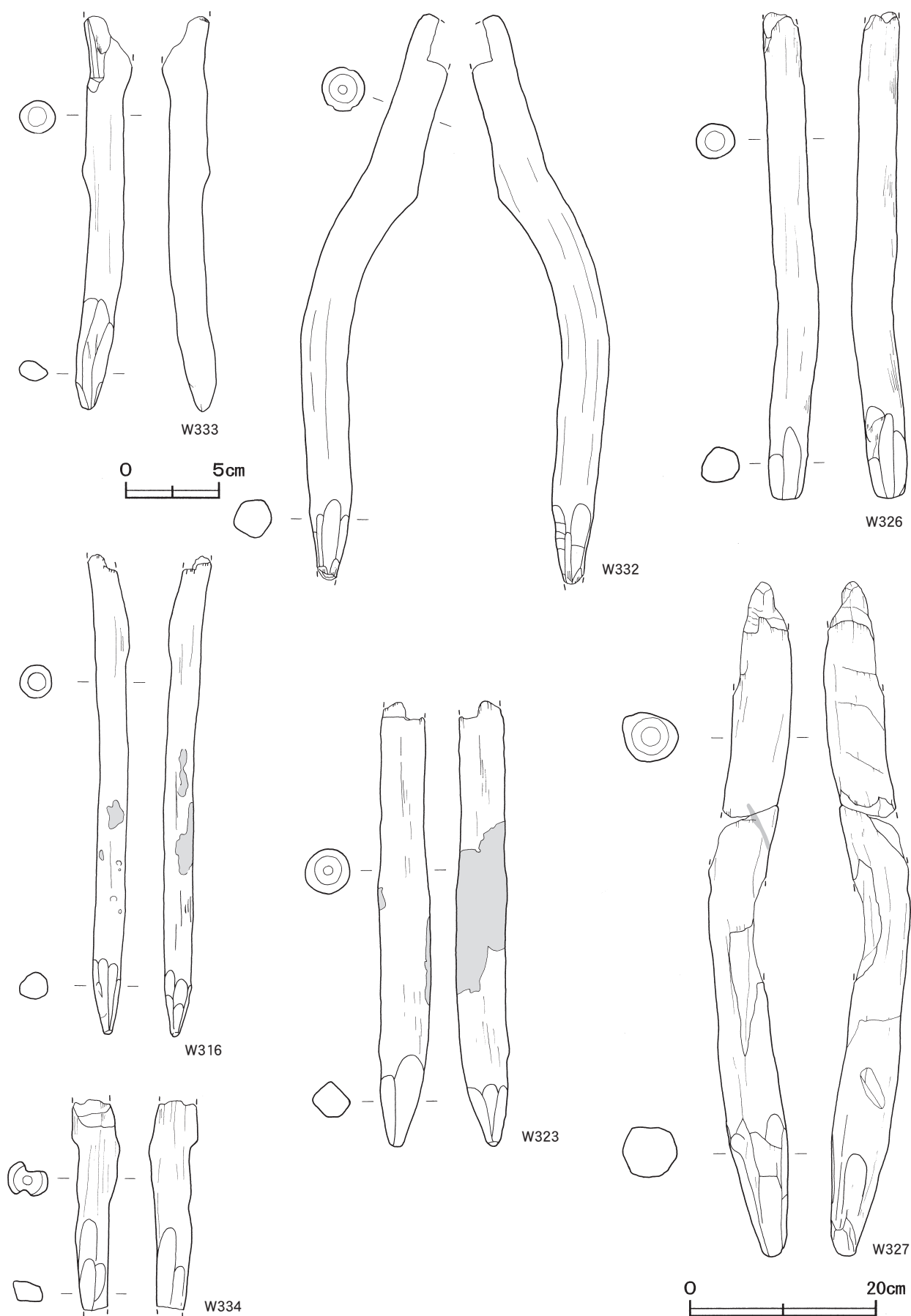
第148图 第1号流路跡出土遺物実測図(41)



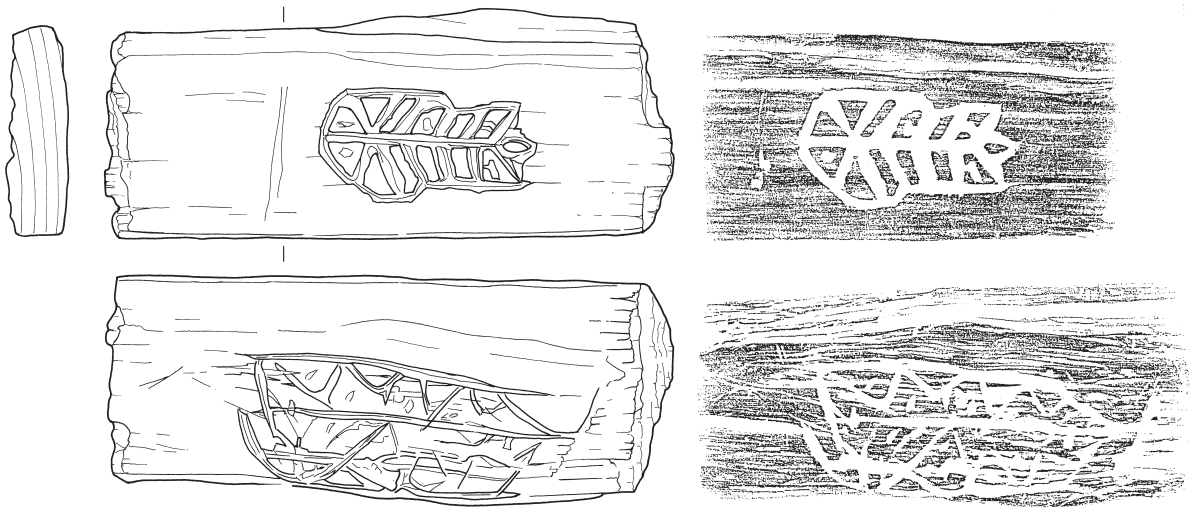
第149图 第1号流路跡出土遺物実測図 (42)



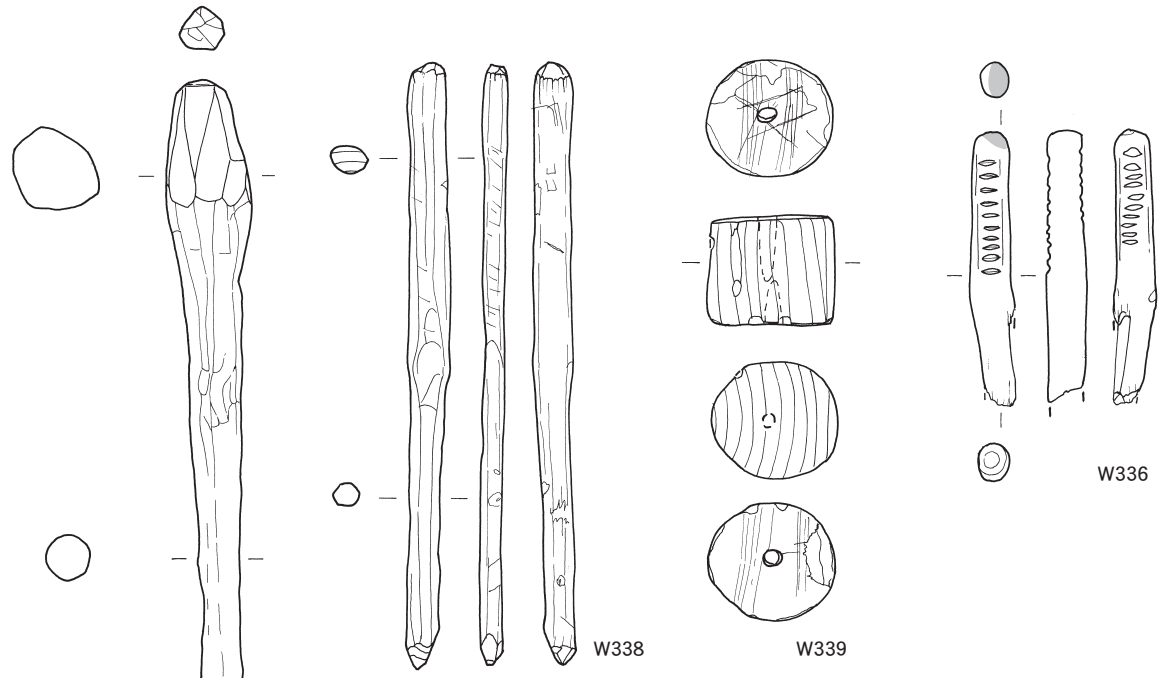
第150图 第1号流路跡出土遺物実測図 (43)



第151图 第1号流路跡出土遺物実測図 (44)



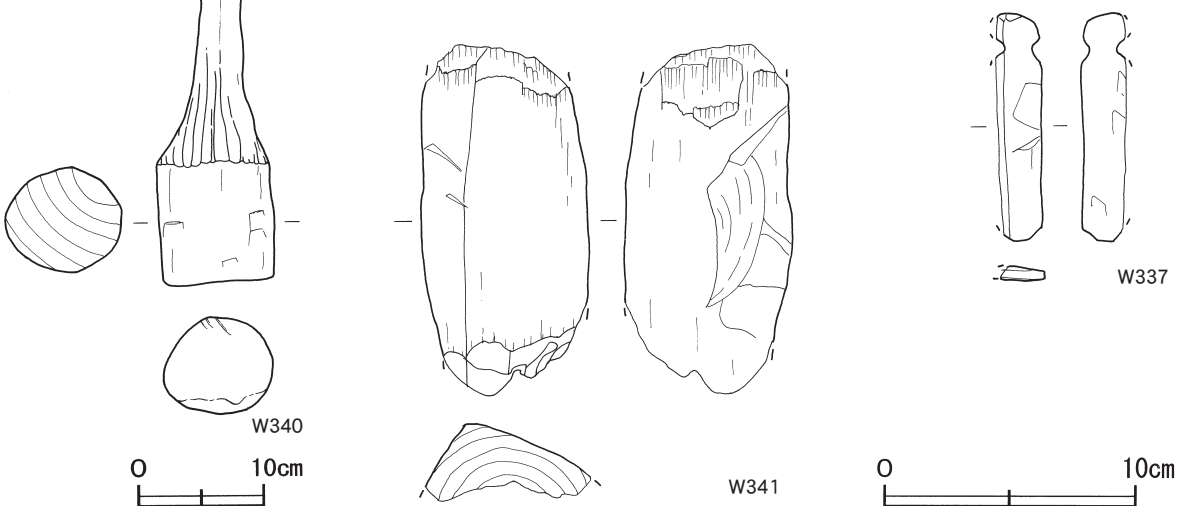
W335



W338

W339

W336



W340

W341

W337

第152图 第1号流路跡出土遺物実測図 (45)

第1号流路跡出土遺物観察表（第108～152図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
263	土師器	坏	[15.0]	(4.0)	-	長石・赤色粒子	黄褐	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ磨き	8区中層	20%
264	土師器	坏	[13.2]	(3.5)	-	長石・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ磨き	8区中層	30%
265	土師器	坏	[13.4]	(4.7)	-	長石・白色粒子	黒	普通	体部外面ヘラ削り 内面ナデ	7区下層	30%
266	土師器	坏	12.9	4.8	-	長石・石英・雲母	黒	普通	外面ヘラ削り後ナデ 内面放射状のヘラ磨き	1区覆土中	80% PL30
267	土師器	坏	[13.2]	4.5	-	長石・雲母	灰	普通	口縁部内面に沈線 体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ	1区下層	60%
268	土師器	坏	13.3	4.1	-	長石	灰黄褐	普通	口縁部内面に沈線 体部外面ヘラ削り	8区中層	70% PL30
269	土師器	坏	[14.0]	4.1	-	白色粒子	灰黄	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ磨き	1区覆土中	40%
270	土師器	坏	[14.0]	8.3	-	長石・雲母	浅黄	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ	8区下層	40% PL30
271	土師器	坏	[14.6]	4.6	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ磨き	1区中層	25%
272	土師器	坏	[13.8]	4.5	5.5	長石・石英	暗灰	普通	体部外面ヘラ削り 内面放射状のヘラ磨き	8区覆土中	60% PL30
273	土師器	坏	11.0	(4.8)	-	赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ナデ	7区下層	80% PL30
274	土師器	坏	11.0	4.3	-	長石	灰黄褐	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	7区下層	70%
275	土師器	坏	12.1	4.6	-	長石	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ	7区下層	60% PL30
276	土師器	坏	[11.8]	3.6	5.4	長石	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	8区中層	30%
277	土師器	坏	[10.3]	3.5	-	長石・石英	灰黄褐	普通	口縁部内面に沈線 体部外面ヘラ削り後ナデ 内面放射状のヘラ磨き	8区中層	45%
278	土師器	坏	[10.4]	2.9	-	白色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内面に沈線 体部外面ヘラ削り 内面放射状のヘラ磨き	8区中層	30%
279	土師器	坏	[12.1]	(3.8)	-	赤色粒子	にぶい褐	普通	体部外面ヘラナデ 内面放射状のヘラ磨き 底部ヘラ削り後ナデ	8区中層	40% PL30
280	土師器	坏	10.6	4.6	5.3	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ 体部内・外面ヘラナデ 工具痕 底部ヘラ切り未調整	8区覆土中	80%
281	土師器	坏	10.6	5.3	5.4	長石・雲母	灰黄褐	普通	体部内・外面ヘラナデ 工具痕 底部ヘラ切り未調整	8区覆土中	80% PL30
282	土師器	坏	10.1	4.1	5.3	長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部内・外面ヘラナデ 工具痕 底部ヘラ切り未調整	8区上層	90% PL30
283	土師器	坏	9.5	4.6	5.4	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内・外面ヘラナデ 底部ヘラ切り未調整	7区下層	98% PL30
284	土師器	坏	9.3	3.8	6.1	長石	にぶい橙	普通	体部内・外面ヘラナデ 底部ヘラ切り未調整	8区中層	100%
285	須恵器	坏	[11.4]	3.5	7.2	長石・雲母・白色粒子	灰	普通	体部内・外面ナデ 底部回転ヘラ削り後ナデ	9区中層	50% PL31 墨書「十」
286	須恵器	坏	[11.2]	4.3	6.7	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部内・外面ナデ 底部回転ヘラ削り後ナデ	7区上層	50% 墨書「十」
287	須恵器	坏	[9.6]	3.7	6.0	長石	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り後ナデ	8区中層	50% PL31
288	須恵器	坏	[10.7]	3.9	7.2	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部内・外面クロコナデ ヘラ削り後ナデ 底部回転	5区下層	65%
289	須恵器	坏	[10.8]	3.4	7.4	長石	黄灰	普通	体部内・外面クロコナデ ヘラ削り後ナデ 底部回転	9区中層	50% ヘラ記号「一」
290	須恵器	坏	[9.8]	2.8	6.1	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ削り後ナデ	7区覆土中	30% 墨書「十万」
291	須恵器	坏	[12.2]	3.3	6.8	長石	灰	普通	体部内・外面クロコナデ ヘラ削り後ナデ 底部回転	5区覆土中	20% 墨書「意布」
292	須恵器	坏	11.1	3.3	8.1	長石・石英	灰	普通	体部内・外面クロコナデ ヘラ削り後ナデ 底部回転	8区中層	75% PL32 墨書「十」
293	須恵器	坏	11.1	3.7	8.2	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	体部内・外面クロコナデ ヘラ削り後ナデ 底部回転	8区中層	80% PL31
294	須恵器	坏	[15.4]	3.7	9.0	長石	黄灰	普通	体部内・外面クロコナデ ヘラ削り後ナデ 底部回転	9区中層	50% 墨書「十」
295	須恵器	坏	[13.0]	3.8	8.7	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部内・外面クロコナデ 底部一方のヘラ削り	9区中層	25% 内面漆付着
296	須恵器	坏	[14.0]	4.8	[9.4]	長石・石英・雲母	灰	普通	体部内・外面クロコナデ 底部回転ヘラ削り	9区中層	30% 墨書「□」
297	須恵器	坏	14.1	4.5	9.4	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り後ナデ	8区上層	70% PL31
298	須恵器	坏	[13.0]	4.1	7.4	長石・石英・赤色粒子	灰	普通	体部内・外面クロコナデ 底部回転ヘラ削り後ナデ	8区中層	70% PL35 墨書「万」
299	須恵器	坏	[12.8]	4.0	8.5	長石	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ削り後ナデ	9区中層	50% PL32 漆書「十」
300	須恵器	坏	[15.2]	4.2	[10.0]	長石	赤灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ削り	9区中層	40% 墨書「□」
301	須恵器	坏	[14.0]	4.0	[9.0]	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部手持ちヘラ削り	9区覆土中	20% 墨書「十」
302	須恵器	坏	[14.3]	3.9	[9.0]	長石	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	8区中層	40%
303	須恵器	坏	[12.5]	3.7	[8.0]	長石・石英	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方のヘラ削り	9区中層	45% PL35 墨書「清□」
304	須恵器	坏	[13.4]	4.2	9.0	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方のヘラ削り	9区中層	45% ヘラ記号「一」
305	須恵器	坏	[13.4]	4.1	[8.4]	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ削り後ナデ	5区中層	50%
306	須恵器	坏	[13.2]	4.1	8.3	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部内・外面クロコナデ ナデ 底部ヘラ	9区下層	70% PL32 墨書「意布片山」
307	須恵器	坏	[12.4]	3.8	7.9	長石・石英	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ削り後ナデ	8区中層	50%
308	須恵器	坏	13.2	4.2	8.3	長石・石英・雲母	灰	普通	底部多方向のヘラ削り	7区下層	50%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
309	須恵器	坏	13.9	3.9	8.6	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部一方 向のへら削り	8区中層	75% PL31
310	須恵器	坏	[15.1]	3.4	[9.2]	長石	灰	普通	体部下端手持ちへら削り	9区中層	15% 墨書「□□山」
311	須恵器	坏	[13.2]	3.1	[8.0]	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部ナデ	9区中層	10% 墨書「○」
312	須恵器	坏	[11.2]	3.4	7.0	長石・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部一方 向のへら削り	6区中層	60%
313	須恵器	坏	[11.6]	3.0	[7.0]	長石・石英	褐灰	普通	体部下端手持ちへら削り	9区中層	5% 墨書「□」
314	須恵器	坏	[12.8]	3.8	[7.6]	長石・雲母	灰白	普通	体部下端手持ちへら削り 底部回転 へら切り 底部内・外面墨痕	8区覆土中	15% 墨書「井」
315	須恵器	坏	[12.8]	3.7	7.9	長石	灰	普通	底部回転へら切り後ナデ	7区中層	40%
316	須恵器	坏	13.2	4.0	8.0	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部下端手持ちへら削り 底部回転 へら切り後ナデ	8区覆土中	60% PL32 墨書「龍人」
317	須恵器	坏	[13.8]	3.8	8.4	長石・石英	褐灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部多方向 のへら削り	9区中層	30% 墨書「□」
318	須恵器	坏	12.9	3.9	7.7	長石・石英	褐灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部一方 向のへら削り	9区中層	70% PL31 墨書「意布片山」
319	須恵器	坏	[13.8]	3.8	8.0	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部回転 へら切り後ナデ	8区覆土中	50% PL35 墨書「部七」 底部「七」
320	須恵器	坏	[13.8]	4.1	8.5	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部多方向 のへら削り	9区下層	60%
321	須恵器	坏	[13.2]	3.9	7.8	長石・石英	暗青灰	普通	体部下端回転へら削り 底部一方 向のへら削り	9区中層	40% 墨書「万」
322	須恵器	坏	[14.3]	4.2	8.8	長石・雲母	灰	普通	底部回転へら切り後ナデ	8区中層	65% PL31
323	須恵器	坏	[13.8]	4.1	[8.6]	長石・石英	褐灰	普通	底部下端手持ちへら削り 底部ナデ	9区下層	15% 墨書「十」
324	須恵器	坏	[12.3]	4.0	7.3	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部一方 向のへら削り	5区中層	60%
325	須恵器	坏	[11.4]	3.8	6.8	長石・石英	赤灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部多方向 のへら削り	9区覆土中	30% PL35 墨書「万」
326	須恵器	坏	[13.0]	3.9	[7.0]	長石・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部手持 ちへら削り	8区覆土中	15% 墨書「十」カ
327	須恵器	坏	[13.6]	3.9	[8.0]	長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部へら 削り	8区上層	20% 漆書「○」
328	須恵器	坏	[13.6]	3.9	[8.0]	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部二方向 のへら削り	9区中層	25% 墨書「十」
329	須恵器	坏	[14.1]	3.7	[7.8]	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体内・外面口ロナデ	8区覆土中	5% 墨書「十」
330	須恵器	坏	[12.6]	4.3	8.4	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部多方向 のへら削り	7区下層	40% 墨書「十」
331	須恵器	坏	[13.2]	4.5	[8.0]	長石・石英・細礫	黄灰	普通	体内・外面口ロナデ 体部下端 回転へら削り 底部回転へら削り	9区中層	40% 墨書「置」カ
332	須恵器	坏	[13.6]	4.3	7.4	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部一方 向のへら削り	9区中層	60% 墨書「十」
333	須恵器	坏	[14.2]	4.5	8.6	長石・雲母	黄灰	普通	体部下端回転へら削り 底部多方向 のへら削り 底部内・外面墨痕	9区上層	80%
334	須恵器	坏	[13.8]	4.6	8.5	長石・石英	にぶい 褐	普通	底部回転へら切り後ナデ	8区中層	60%
335	須恵器	坏	[14.4]	4.5	[9.0]	長石・石英	褐灰	普通	体部下端手持ちへら削り	5区覆土中	10% 墨書「□」
336	須恵器	坏	[13.1]	4.5	8.4	長石・石英	灰	普通	底部回転へら切り後ナデ	8区覆土中	70% 墨書「万」カ
337	須恵器	坏	[13.2]	4.7	8.6	長石・石英・雲母	褐灰	普通	底部回転へら切り後ナデ	9区中層	65% 墨書「十」カ
338	須恵器	坏	[12.6]	4.4	[8.2]	石英	灰褐	普通	体部下端手持ちへら削り	5区覆土中	10% PL32 墨書「意」カ
339	須恵器	坏	[13.0]	4.5	8.3	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部回転 へら切り後ナデ	9区中層	60% PL35 墨書「万」
340	須恵器	坏	[14.2]	4.1	[7.5]	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部多方向 のへら削り	9区下層	45% 墨書「十」
341	須恵器	坏	[13.8]	4.7	8.0	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部一方 向のへら削り	9区中層	60% 墨書「十意生」
342	須恵器	坏	[14.1]	4.7	8.0	長石・石英	灰白	普通	体部下端手持ちへら削り 底部回転 へら切り後ナデ	9区中層	70% 墨書「十」
343	須恵器	坏	[12.7]	3.9	[6.4]	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部一方 向のへら削り	9区中層	40% PL32 墨書「井」
344	須恵器	坏	[12.8]	4.6	7.5	長石・雲母	灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部回転 へら切り後一方のへら削り	7区下層	40%
345	須恵器	坏	[13.6]	4.7	7.7	長石	黄灰	普通	底部回転へら切り後ナデ	9区中層	75% へら記号「十」
346	須恵器	坏	[13.2]	4.2	[7.6]	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部多方向 のへら削り	6区覆土中	40% 墨書 「十」
347	須恵器	坏	[12.8]	4.0	7.4	長石・雲母	黄灰	普通	体部下端回転へら削り 底部一方 向のへら削り	9区中層	30% 墨書 「万」
348	須恵器	坏	12.8	4.1	[6.7]	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	体部下端手持ちへら削り 底部一方 向のへら削り	6区中層	75% PL31
349	須恵器	坏	[13.4]	4.0	6.8	長石・石英	黒褐	普通	底部ナデ	5区覆土中	30% PL35 へら書き「大」
350	須恵器	坏	[13.2]	4.5	6.5	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部回転 へら切り後ナデ	5区覆土中	30% 墨書 「井万」カ
351	須恵器	坏	[13.3]	4.1	6.6	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部下端手持ちへら削り 底部一方 向のへら削り	7区下層	40% 墨書 「十万」
352	須恵器	坏	[14.0]	4.5	[6.8]	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部手持 ちへら削り	8区覆土中	10% 墨書外面「十」 内面「□□」
353	須恵器	坏	[13.6]	4.8	[6.6]	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部ナデ	5区覆土中	20% 墨書「万」カ
354	須恵器	坏	[12.7]	3.8	[5.5]	長石・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちへら削り	7区覆土中	15% PL33 墨書「十万」

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
355	須恵器	坏	[15.2]	(3.8)	-	石英・雲母	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	8区覆土中	5% ヘラ記号有
356	須恵器	坏	[12.6]	(3.8)	-	長石・石英	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	8区覆土中	10% PL33 墨書「龍人」
357	須恵器	坏	[14.8]	(3.4)	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	9区中層	10% 漆書「十」
358	須恵器	坏	[14.5]	(3.1)	-	長石・石英・雲母	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	8区覆土中	5% 墨書「〇生」
359	須恵器	坏	[14.4]	(4.2)	-	長石	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	6区覆土中	10% PL33 墨書「〇」
360	須恵器	坏	[13.8]	(2.9)	-	長石・石英	灰白	普通	体部内・外面ロクロナデ	9区覆土中	5% 漆書「十」
361	須恵器	坏	[12.4]	(3.5)	-	長石・雲母	灰黄褐	普通	体部内・外面ロクロナデ	9区中層	5% 墨書「十」
362	須恵器	坏	[13.8]	(3.1)	-	長石	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	6区覆土中	5% PL33 墨書「〇防長」
363	須恵器	坏	[14.1]	(3.6)	-	長石・石英	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ 体部下端 手持ちヘラ削り	9区覆土中	10% PL33 漆書「十」
364	須恵器	坏	[13.2]	(3.0)	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	9区覆土中	5% 墨書「十」
365	須恵器	坏	[14.2]	(4.2)	-	長石・石英	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	9区覆土中	10% PL33 墨書「〇」
366	須恵器	坏	[14.0]	(3.1)	-	石英・白色粒子	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	8区覆土中	5% 墨書「〇布〇」
367	須恵器	坏	[14.2]	(2.9)	-	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	9区中層	10% PL33 墨書「意」カ
368	須恵器	坏	[14.0]	(2.6)	-	長石	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	6区覆土中	5% 墨書「〇」
369	須恵器	坏	[13.0]	(4.2)	-	長石・石英	暗青灰	普通	体部内・外面ロクロナデ 体部下端 手持ちヘラ削り	10区覆土中	5% PL33 墨書「山真」カ
370	須恵器	坏	[13.4]	(3.4)	-	長石・白色粒子	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	9区覆土中	10% 墨書「十」
371	須恵器	坏	[12.7]	(4.5)	-	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部内・外面ロクロナデ 体部下端 手持ちヘラ削り	9区覆土中	10% PL33 墨書「意」カ
372	須恵器	坏	[12.6]	(3.0)	-	石英	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	4区覆土中	10% PL33 墨書「十萬」
373	須恵器	坏	[11.8]	(3.1)	-	長石・雲母	灰白	普通	体部内・外面ロクロナデ	9区中層	10% PL33 漆書「十」
374	須恵器	坏	[13.0]	(4.9)	-	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部内・外面ロクロナデ 体部下端 手持ちヘラ削り	7区中層	20% PL33 墨書「〇〇」
375	須恵器	坏	[12.6]	(3.9)	-	長石・石英	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	9区中層	10% 墨書「十」カ
376	須恵器	坏	[12.0]	(4.4)	-	長石・石英・礫	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	6区上層	5% 墨書「〇〇」
377	須恵器	坏	[12.0]	(3.4)	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部内・外面ロクロナデ	7区中層	10% PL33 墨書「十意」
378	須恵器	坏	[12.8]	(4.3)	-	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部内・外面ロクロナデ 体部下端 手持ちヘラ削り	8区覆土中	10% PL33 墨書「意生西」
379	須恵器	坏	[11.6]	(2.5)	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	5区覆土中	5% 墨書「十萬」
380	須恵器	坏	[13.0]	(2.9)	-	長石・石英	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	8区覆土中	5% 墨書「意生」
381	須恵器	坏	[11.4]	(3.3)	-	長石	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	8区中層	5% 墨書「十」
382	須恵器	坏	[11.0]	(2.7)	-	長石・石英	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	8区覆土中	5% 墨書「〇〇」
383	須恵器	坏	[12.0]	(3.7)	-	雲母	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	9区覆土中	5% 漆書「十」
384	須恵器	坏	[10.8]	(3.8)	-	長石・石英・雲母	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	5区覆土中	5% 墨書「意〇」カ
385	須恵器	坏	[11.5]	(3.5)	-	長石・雲母	褐灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	9区覆土中	5% 墨書「〇生」
386	須恵器	坏	[11.8]	(2.5)	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	8区覆土中	5% 墨書「十」
387	須恵器	坏	-	(2.2)	8.4	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部ナデ	8区覆土中	25% 漆書「十」
388	須恵器	坏	-	(2.4)	[7.0]	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方 向のヘラ削り	5区中層	15% 墨書「意生」
389	須恵器	坏	-	(2.6)	[7.0]	長石・石英	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部多方向 のヘラ削り	9区覆土中	20% 墨書「十」
390	須恵器	坏	-	(2.3)	[7.4]	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部手持 ちヘラ削り	9区中層	15% 墨書「十」
391	須恵器	坏	-	(3.0)	[6.8]	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部手持 ちヘラ削り	7区下層	15% 墨書「井」カ
392	須恵器	坏	-	(3.1)	[9.4]	長石・雲母	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転 ヘラ切り後多方向のヘラ削り	9区中層	20% PL33 墨書「〇」
393	須恵器	坏	-	(2.6)	[8.0]	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転 ヘラ切り後ナデ	8区覆土中	20% PL34 漆書「十」
394	須恵器	坏	-	(2.1)	[8.4]	長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転 ヘラ切り後ナデ	9区中層	15% 墨書「意〇」
395	須恵器	坏	-	(3.2)	[9.0]	長石・石英	灰白	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	9区中層	35% PL35 墨書「〇」
396	須恵器	坏	-	(1.4)	[8.4]	長石・雲母	褐灰	普通	底部回転ヘラ切り後一方のヘラ削り	10区覆土中	15% 墨書「里」カ
397	須恵器	坏	-	(3.5)	7.3	長石・石英	褐灰	普通	底部回転ヘラ削り	8区中層	50%墨書体部 「〇」底部「里」
398	須恵器	坏	-	(2.0)	[8.2]	長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転 ヘラ切り後ナデ	9区中層	20% 墨書「万」
399	須恵器	坏	-	(2.7)	[8.2]	長石・石英	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部多方向 のヘラ削り	8区中層	20% 墨書「〇」
400	須恵器	坏	-	(1.6)	[7.4]	長石	灰	普通	底部回転ヘラ削り後ナデ	4区中層	20% PL35 墨書「池」

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
401	須恵器	坏	-	(1.9)	[8.2]	長石・石英・白色 粒子	灰	普通	底部ナデ	8区覆土中	15% 墨書「万」 _カ
402	須恵器	坏	-	(2.6)	[8.0]	長石・雲母	灰白	普通	体部下端回転ヘラ削り 後ナデ	6区中層	15% 墨書「積」
403	須恵器	坏	-	(2.2)	[6.2]	長石・石英	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部手持ちヘラ削り	8区覆土中	20% PL34 墨書「口」
404	須恵器	坏	-	(3.8)	6.0	長石・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方 向のヘラ削り	7区中層	50% PL34 墨書「体部「十 万」底部内面 「十万」
405	須恵器	坏	-	(1.4)	[6.2]	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 向のヘラ削り	8区覆土中	15% 墨書「万」 _カ
406	須恵器	坏	-	(1.2)	8.5	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 後ナデ	8区上層	20% PL34 墨書「万」
407	須恵器	坏	-	(1.6)	[9.4]	長石	灰	普通	底部回転ヘラ削り	8区中層	15% 墨書「口」
408	須恵器	坏	-	(0.9)	[8.2]	長石・石英・雲母	褐灰	普通	底部一方のヘラ削り	9区中層	10% 漆書「口」
409	須恵器	坏	-	(1.5)	[7.0]	長石・石英	灰	普通	底部ヘラナデ	6区覆土中	10% PL34 墨書「中」ヘ ラ記号「一」
410	須恵器	坏	-	(0.8)	(7.2)	長石・石英・雲母	にぶい 褐	普通	底部多方向のヘラ削り	9区覆土中	10% 墨書「万」
411	須恵器	坏	-	(1.2)	[8.0]	長石・石英	灰	普通	底部多方向のヘラ削り	8区中層	10% PL34 漆書「口」
412	須恵器	坏	-	(1.0)	[8.2]	長石・石英・雲母 ・細礫	灰黄褐	普通	底部ヘラナデ	8区覆土中	10% 墨書「口」
413	須恵器	坏	-	(4.9)	長石	灰褐	普通	底部回転ヘラ削り後ナデ	7区覆土中	5% 墨書「万」 _カ	
414	須恵器	坏	-	(1.8)	[6.0]	長石	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ 削り	6区覆土中	5% 墨書 「口」
415	須恵器	坏	-	(1.3)	[6.4]	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部手持 ちヘラ削り	5区覆土中	10% 墨書「真」
416	須恵器	坏	-	(0.6)	(5.4)	長石・石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り後ナデ	4区覆土中	10% PL35 墨書「意生」
417	須恵器	坏	-	(2.1)	[7.0]	長石	灰白	普通	底部回転ヘラ削り後ナデ	8区覆土中	5% 墨書「口」
418	須恵器	坏	-	(4.6)	-	長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り	5区覆土中	5% 墨書「里」 _カ
419	須恵器	坏	[11.0]	(2.2)	-	長石・石英	褐灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	5区覆土中	5% 墨書「口」
420	須恵器	坏	-	(4.3)	-	長石・石英	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	8区下層	20% 墨書「意生」
421	須恵器	坏	-	(3.9)	-	長石	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	8区覆土中	5% 墨書「口」
422	須恵器	坏	-	(2.2)	-	雲母	にぶい 褐	不良	体部内・外面ロクロナデ	8区覆土中	5% 墨書「口」
423	須恵器	坏	-	(2.4)	-	長石・石英	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	8区覆土中	5% 墨書「意」 _カ
424	須恵器	坏	-	(3.8)	-	長石・石英	褐灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	8区覆土中	5% 墨書「口里」
425	須恵器	坏	-	(3.6)	-	長石	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	5区覆土中	5% PL34 墨書「真」
426	須恵器	坏	-	(3.8)	-	長石	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	8区覆土中	5% 墨書「口」
427	須恵器	坏	-	(3.3)	-	長石・石英	褐灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	6区覆土中	5% 墨書「真」 _カ
428	須恵器	坏	-	(3.7)	-	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	5区覆土中	5% 墨書「万」 _カ
429	須恵器	坏	-	(2.8)	-	長石・雲母	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	8区覆土中	5% 墨書「口」
430	須恵器	坏	-	(2.8)	-	長石・雲母	褐灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	8区覆土中	5% 墨書 「口」
431	須恵器	坏	-	(2.9)	-	長石	褐灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	8区覆土中	5% 墨書 「口」
432	須恵器	坏	-	(3.3)	-	長石	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	8区覆土中	5% 墨書「十」
433	須恵器	坏	-	(2.2)	-	長石・雲母	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	6区覆土中	5% 墨書「生」 _カ
434	須恵器	坏	-	(4.4)	長石・石英	褐灰	普通	底部ナデ	8区覆土中	5% 墨書「口」	
435	須恵器	坏	-	(4.2)	長石・石英	褐灰	普通	底部ナデ	8区覆土中	5% 墨書「口」	
436	須恵器	坏	-	(1.7)	7.6	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ削り後ナデ	7区覆土中	20% PL34 ヘラ書き「上」
437	須恵器	坏	-	(1.0)	8.5	長石・石英・雲母	灰白	普通	底部回転ヘラ削り後ナデ	9区中層	20% ヘラ記号「井」
438	須恵器	坏	-	(2.1)	[7.6]	長石・石英	灰	普通	底部ナデ	8区覆土中	5% ヘラ記号有
439	須恵器	坏	-	(1.5)	[7.8]	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ削り後ナデ	9区覆土中	10% ヘラ記号有
440	須恵器	坏	-	(1.5)	[8.4]	長石・石英・赤色 粒子・白色粒子	灰	普通	底部回転ヘラ削り	8区覆土中	10% ヘラ記号有
441	須恵器	坏	-	(1.6)	[7.2]	長石・石英	灰	普通	底部ヘラナデ	5区覆土中	5% ヘラ記号有
442	須恵器	坏	-	(3.2)	[7.7]	長石・石英	オリ ーフ灰	普通	底部ヘラナデ	6区覆土中	30% ヘラ記号有
443	須恵器	坏	-	(1.5)	[6.0]	長石	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方 向のヘラ削り	6区覆土中	10% ヘラ記号「十」
444	須恵器	坏	-	(2.2)	[13.2]	長石・石英	灰	普通	底部ヘラ削り	5区覆土中	5% ヘラ記号有
445	土師器	坏	[13.4]	3.9	[6.6]	長石・雲母・白色 粒子	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転 糸切り	2区覆土中	30%
446	土師器	坏	[12.4]	3.7	5.6	長石・赤色粒子	にぶい 橙	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ削 り後ナデ	5区上層	40%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
447	土師器	坏	[13.1]	4.1	6.0	長石・石英	にぶい 黄橙	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転糸切り	5区上層	30%
448	土師器	坏	13.0	4.0	7.3	長石・石英・赤色 粒子	にぶい 橙	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り 後ナデ	5区覆土中	50% PL30
449	土師器	坏	13.5	4.4	6.0	長石・石英・雲母	にぶい 黄橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 内面ヘラ 磨き 底部一方向のヘラ削り	6区中層	80% PL30 墨書「□□」
450	土師器	坏	[13.6]	4.0	8.0	長石・雲母	にぶい 黄褐	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り 後ナデ	5区中層	60%
451	土師器	坏	13.1	6.1	7.0	赤色粒子・白色粒子	橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 工具 痕 内面ヘラ磨き 底部回転糸切り	9区中層	85% PL31
452	土師器	坏	[15.2]	(2.4)	-	雲母・赤色粒子	にぶい 黄橙	普通	体部内面ヘラ磨き	7区覆土中	10% 墨書「□」
453	土師器	坏	[11.8]	(3.6)	-	長石・石英	にぶい 橙	普通	体部内面ヘラ磨き	6区覆土中	10% 墨書「□」
454	土師器	坏	[12.0]	(3.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい 橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り	5区中層	10% 墨書「□」
455	土師器	坏	[11.6]	(2.6)	-	長石・石英・赤色 粒子	にぶい 赤褐	普通	体部内・外面口ロナデ	5区覆土中	5% 墨書「□」
456	土師器	坏	-	(3.5)	-	長石・石英・赤色 粒子	にぶい 橙	普通	体部下端ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ 磨き	5区上層	10% PL34 墨書「真里」
457	土師器	坏	[13.7]	(3.1)	-	長石・石英	にぶい 赤褐	普通	体部内面ヘラ磨き	5区覆土中	5% 墨書「□」
458	土師器	坏	-	2.5	[7.4]	長石・石英・雲母・ 赤色粒子・白色粒子	橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 内面ヘラ 磨き 底部多方向のヘラ削り	5区中層	25% PL34 墨書「真」カ
459	土師器	坏	-	(1.3)	6.6	長石・雲母・赤色 粒子	にぶい 赤褐	普通	体部内面ヘラ磨き 底部ナデ	7区覆土中	20% ヘラ記号有
460	土師器	坏	-	(4.0)	[7.4]	長石・石英・雲母	にぶい 黄橙	普通	体部内面ヘラ磨き 底部一方向のヘ ラ削り	8区覆土中	10% 墨書「意生十」
461	土師器	坏	-	(1.5)	-	長石・石英	黒	普通	体部内・外面口ロナデ	7区覆土中	5% 墨書「山」カ
462	須恵器	高台付坏	[14.5]	4.3	[8.4]	長石・石英・雲母・ 小礫	灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼付	9区中層	40% PL35 墨書「山田」
463	須恵器	高台付坏	15.8	5.5	10.0	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼付	9区中層	60% PL35 墨書「意布片山」
464	須恵器	高台付坏	14.4	5.8	8.6	長石・石英	紫灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼付	9区中層	75% PL31 墨書「□□」
465	須恵器	高台付坏	[13.8]	5.6	9.3	長石・石英	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘ ラ削り後高台貼付	5区中層	70%
466	須恵器	高台付坏	13.0	5.3	8.9	長石・石英・雲母	灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼付	6区中層	70% PL31
467	須恵器	高台付坏	[13.8]	5.8	[9.4]	長石・石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼付	8区上層	45%
468	須恵器	高台付坏	11.3	5.6	7.0	長石・石英・雲母	褐灰	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼付	8区中層	60% PL32 墨書「意生坊長」
469	須恵器	高台付坏	10.6	5.0	6.3	長石・石英・小礫	褐灰	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼付	8区中層	85% PL31-35 墨書「万」カ
470	須恵器	高台付坏	[18.0]	7.5	[12.8]	長石・雲母	灰	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼付	6区下層	30%
471	須恵器	高台付坏	[18.8]	6.7	[13.8]	長石	灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼付	9区下層	40%
472	須恵器	高台付坏	-	(5.5)	[12.0]	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼付	8区中層	30%
473	須恵器	高台付坏	-	(2.7)	10.0	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼付	6区中層	45% PL35 墨書「門守上」
474	須恵器	高台付坏	-	(4.8)	9.3	長石・石英・小礫	灰	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼付	9区中層	40% 墨書「万」
475	須恵器	高台付坏	-	(2.8)	12.0	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転 ヘラ切り後高台貼付	9区下層	25% 視転用
476	須恵器	高台付坏	-	(4.0)	8.7	長石・雲母	灰	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼付	9区中層	50% 刻書「十」
477	須恵器	高台付坏	-	(4.2)	[9.0]	長石・石英・雲母	灰	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼付	8区下層	20% 底部ヘラ記号有
478	須恵器	高台付坏	-	(2.2)	[8.8]	長石	オリ ー フ 灰	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼付	1区中層	10%
479	須恵器	高台付坏	-	(4.1)	-	長石・石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼付	9区中層	30% 墨書「十」
480	須恵器	高台付坏	-	(2.3)	-	石英・白色粒子	灰	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼付	9区中層	10% PL35 漆書「□」
481	土師器	椀	[14.9]	(4.7)	-	赤色粒子	にぶい 黄橙	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り 後高台貼付 体部下端手持ちヘラ 削り	4区覆土中	40%
482	土師器	椀	-	(5.9)	-	赤色粒子	浅黄橙	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転糸切り 後高台貼付	5区覆土中	40%
483	土師器	椀	[13.6]	6.0	8.8	長石・石英・雲母	橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 内面ヘラ 磨き 底部回転ヘラ切り後高台貼付	5区上層	60%
484	灰釉陶器	碗	[14.6]	5.8	6.6	緻密	灰白	良好	体部内・外面口ロナデ 底部回転 糸切り後高台貼付	8区中層	30% PL36
485	灰釉陶器	碗	[13.5]	(2.6)	-	緻密	灰白	良好	体部内・外面口ロナデ	8区覆土中	5%
486	土師器	高台付皿	[13.7]	2.9	6.7	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り 後高台貼付	5区中層	65%
487	須恵器	盤	-	(1.2)	-	長石・石英・雲母	褐灰	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼付	8区下層	30% PL32 墨書底部「□□ □尊□□誰申 番香□□市吞 □」十
488	須恵器	盤	[20.2]	3.5	[12.8]	長石・石英・雲母	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼付	8区中層	45%
489	須恵器	盤	-	(1.9)	[12.6]	長石・石英・雲母	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼付	8区中層	20% 墨書「①」視転用
490	須恵器	盤	[17.0]	(1.6)	-	石英	灰	普通	体部内・外面口ロナデ	6区覆土中	5% PL34 墨書「意生」
491	須恵器	盤	-	(1.4)	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼付	1区覆土中	30% 漆書「①」

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
493	須恵器	盤	-	(1.7)	-	長石・雲母	褐灰	普通	体内・外面ロクロナデ	9区覆土中	5% PL34 墨書「□□皮」
494	須恵器	蓋	[10.2]	(3.4)	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	9区覆土中	20%
495	須恵器	蓋	[12.4]	(3.6)	-	長石・赤色粒子	褐灰	普通	天井部回転ヘラ削り	8区覆土中	20%
496	須恵器	蓋	[17.4]	3.8	-	長石・石英	灰	良好	天井部回転ヘラ削り	9区中層	30% PL34 墨書「□□□□」
497	須恵器	蓋	-	(4.4)	-	長石・石英・細礫	褐灰	普通	天井部回転ヘラ削り	5区上層	50% PL35 墨書「意布□□」
498	須恵器	蓋	[16.3]	4.0	-	長石・石英	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	5区中層	25%
499	須恵器	蓋	12.0	2.5	-	長石・石英	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	5区中層	90% PL36
500	須恵器	蓋	16.5	(2.7)	-	長石・石英・細礫	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	8区中層	80% PL36 視転用
501	須恵器	蓋	[18.2]	(2.9)	-	長石	にぶい 褐	普通	天井部回転ヘラ削り	5区覆土中	10% 墨書「□」
502	土師器	器台	[7.1]	7.4	[10.6]	長石・石英・小礫	にぶい 橙	普通	受部1孔 脚部孔有 外面ヘラ磨き 内面ハケ目調整	1区下層	35% PL36
503	土師器	高坏	[20.0]	(5.9)	-	赤色粒子・白色粒子	浅黄	普通	口縁部横ナデ 坏部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	8区中層	30%
504	土師器	高坏	[23.7]	(8.5)	-	赤色粒子	浅黄	普通	坏部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ 磨き	4区覆土中	30% PL36
505	土師器	高坏	[15.6]	9.5	[11.8]	長石・雲母・赤色 粒子	にぶい 黄橙	普通	坏部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ 削り 脚部内・外面ヘラ削り	1区中層	50%
506	須恵器	高盤	-	(7.3)	-	長石・石英	灰	良好	脚部内・外面ロクロナデ	6区中層	20%
507	須恵器	高盤	-	(13.6)	[14.8]	長石・石英・赤色 粒子	灰白	普通	坏部中央に小孔穿孔 脚部ヘラ切り による透かし3か所	7区下層	40%
508	須恵器	高盤	-	(7.9)	[15.0]	長石	灰	普通	脚部ヘラ切りによる透かし4か所	6区中層	10%
509	須恵器	鉢	[35.2]	(13.2)	-	石英・雲母	褐灰	良好	体部外面平行叩き 内面ロクロナデ	7区下層	10%
510	土師器	壺	[19.2]	(4.0)	-	長石・石英・小礫	黄褐	普通	口縁部外面棒状浮文貼付 内面綾杉 文施文	1区覆土中	5%
511	土師器	壺	(13.6)	(4.9)	-	長石・礫	にぶい 黄橙	普通	口縁部外面指頭圧痕 内面ナデ	10区下層	10%
512	土師器	壺	[18.1]	(4.2)	-	長石・赤色粒子・ 小礫	にぶい 橙	普通	口縁部折返し 内・外面横ナデ 体 部内・外面ヘラナデ	9区上層	10%
513	須恵器	短頸壺	[10.4]	(14.5)	-	長石	灰	普通	体内・外面ロクロナデ	8区下層	30%
514	須恵器	長頸瓶	-	(8.6)	8.5	長石・石英	灰	良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転 ヘラ切り後高台貼付	8区下層	20%
515	須恵器	提瓶	-	(14.2)	-	長石・石英・白色 粒子	灰白	普通	体部外面カキ目 内面ロクロナデ	9区下層	20%
516	須恵器	横瓶	[13.0]	(15.7)	-	長石	灰	普通	体部外面平行叩き 内面同心円当て 具痕	9区中層	10%
517	須恵器	長頸瓶	[9.4]	(10.8)	-	長石・雲母	灰	普通	頸部ロクロナデ	8区中層	10%
518	須恵器	長頸瓶カ	-	(10.6)	8.3	長石	褐灰	良好	底部回転ヘラ削り後高台貼付	8区上層	30%
519	須恵器	長頸瓶カ	-	(7.3)	[8.8]	長石	灰	普通	体内・外面ロクロナデ 底部ナデ	9区覆土中	10%
520	須恵器	短頸壺	[9.2]	(5.8)	-	長石	褐灰	良好	体内・外面ロクロナデ	9区下層	20%
521	須恵器	甗	-	(8.4)	-	長石・石英	灰	普通	体部2条の沈線施文後刺突文施文 底部ヘラ削り	9区中層	40%
522	土師器	甗	[16.4]	(12.2)	-	長石・石英・赤色 粒子	にぶい 黄橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り	7区中層	20%
523	土師器	甗	[14.0]	(10.3)	-	石英・雲母・小礫	浅黄橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り	8区上層	10%
524	土師器	甗	[17.0]	(13.2)	-	赤色粒子・小礫	褐灰	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面輪積痕	7区覆土中	45%
525	土師器	甗	[15.6]	(13.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい 褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面工具痕	5区中層	10%
526	土師器	甗	[26.0]	(4.8)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部つまみ上げ 口縁部横ナデ	8区中層	5%
527	土師器	甗	[25.0]	(7.2)	-	石英・雲母・赤色 粒子	にぶい 褐	普通	口縁部つまみ上げ 口縁部横ナデ	8区上層	20%
528	須恵器	甗	-	(9.6)	15.5	雲母・白色粒子	褐灰	良好	体内・外面ロクロナデ 底部ナデ	7区中層	10%
529	須恵器	甗	[24.6]	(12.5)	-	雲母・赤色粒子	黄灰	普通	体部外面縦位の平行叩き 内面ナデ 指頭圧痕	6区中層	10%
530	須恵器	甗	-	(11.0)	-	長石・雲母	黄灰	普通	体部外面格子状の叩き 内面指頭圧 痕	4区覆土中	5%
531	須恵器	大甗	[41.4]	(16.0)	-	長石	灰	普通	体部外面ヘラ削り 内面指頭圧痕	6区中層	10% PL37
532	ミニチュア 土器	-	5.2	5.1	3.5	長石・石英・雲母	にぶい 黄褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部・底部 ヘラナデ	7区下層	90% PL36
533	手捏土器	-	3.4	5.7	3.7	長石	にぶい 黄橙	普通	体内・外面ナデ 指頭圧痕	4区覆土中	85% 白型 PL36
534	手捏土器	-	-	(3.2)	[3.4]	雲母・赤色粒子	浅黄橙	普通	体内・外面ナデ	2区覆土中	40% 白型
535	手捏土器	-	[5.2]	2.7	4.1	長石・石英・雲母	淡黄	普通	体内・外面ナデ 指頭圧痕 底部 ナデ	9区中層	98%
536	手捏土器	-	4.4	3.0	4.0	長石・石英・雲母	にぶい 黄橙	普通	体内・外面指頭圧痕 底部ナデ	5区覆土中	98%
537	手捏土器	-	4.3	3.4	1.9	長石・赤色粒子	灰黄褐	普通	体内・外面ナデ	4区覆土中	100% PL36
538	手捏土器	-	6.8	3.2	5.8	長石・石英・雲母	灰白	普通	口縁部横ナデ 体内・外面ナデ 指頭圧痕 底部ヘラ削り	8区下層	98%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
539	手捏土器	-	6.8	2.5	4.7	長石・石英・雲母	にぶい 黄橙	普通	体部内・外面ナデ 底部ナデ	5区覆土中	98% PL36
540	手捏土器	-	[6.7]	3.0	4.7	長石・石英・雲母	にぶい 黄橙	普通	体部外面指頭圧痕 内面ヘラナデ 底部ナデ	1区覆土中	60%
541	手捏土器	-	7.8	4.5	-	長石・石英・赤色 粒子	灰白	普通	体部内・外面指頭圧痕	10区中層	95% PL36
542	手捏土器	-	9.3	4.8	5.8	長石・石英・雲母	にぶい 赤褐	普通	体部外面ナデ 内面ヘラナデ 底部 ナデ	8区下層	95%
543	手捏土器	-	10.3	3.0	[8.0]	長石・石英・雲母	にぶい 赤褐	普通	体部内・外面ナデ 底部貼り付け 指頭圧痕	8区中層	70%
544	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部内・外面口クロナデ	9区中層	5% 墨書体部「万」カ
545	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部内・外面口クロナデ	8区覆土中	5% 墨書体部「十」カ
546	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母	灰	普通	体部内・外面口クロナデ	9区覆土中	5% 墨書体部「十」カ
547	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部内・外面口クロナデ	7区覆土中	5% 墨書体部「十」カ
548	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母	灰	普通	体部内・外面口クロナデ	9区覆土中	5% PL34 漆書体部「十」カ
549	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部内・外面口クロナデ	8区上層	5% 墨書体部「口」
550	須恵器	坏	-	-	-	石英・雲母	黄灰	普通	体部内・外面口クロナデ	8区下層	5% 漆書体部「十」カ
551	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部内・外面口クロナデ	8区覆土中	5% 墨書体部「口」
552	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英	灰	普通	体部内・外面口クロナデ	9区覆土中	5% 墨書体部「十」カ
553	須恵器	坏	-	-	-	石英・細礫	灰	普通	体部内・外面口クロナデ	9区中層	5% 墨書体部「口」
554	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部内・外面口クロナデ	8区覆土中	5% 墨書体部「口」
555	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部内・外面口クロナデ	7区覆土中	5% 墨書体部「口」
556	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英	灰黄	普通	体部内・外面口クロナデ	8区覆土中	5% 墨書体部内面「口」
557	須恵器	坏	-	-	-	石英・細礫	灰	普通	体部内・外面口クロナデ	8区覆土中	5% 墨書体部「口」
558	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部内・外面口クロナデ	5区覆土中	5% 墨書体部「口」
559	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英	灰	普通	体部内・外面口クロナデ	8区覆土中	5% 墨書体部「口」
560	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母	灰	普通	体部内・外面口クロナデ	9区中層	5% 墨書体部「口」
561	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英	灰	普通	体部内・外面口クロナデ	9区覆土中	5% 墨書体部「口」
562	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英	灰	普通	体部内・外面口クロナデ	8区覆土中	5% 墨書体部「十」カ
563	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母	灰	普通	体部内・外面口クロナデ	8区覆土中	5% 墨書体部「十」カ
564	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転 ヘラ切り後ナデ	8区覆土中	5% 墨書底部「口」
565	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ 削り	9区中層	5% 墨書体部「十」カ
566	須恵器	坏	-	-	-	石英・細礫	灰白	普通	底部ヘラ削り	9区中層	5% 漆書体部「十」カ
567	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ 削り	6区覆土中	5% 墨書底部「口」
568	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英	灰白	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転 ヘラ切り後ナデ	9区覆土中	5% 墨書体部「口」
569	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ 削り	8区下層	5% 墨書底部「口」
570	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ 削り	9区覆土中	5% 墨書体部「口」
571	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ 削り	7区覆土中	5% 墨書底部「口」
572	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り	9区中層	5% 墨書体部「十」カ
573	須恵器	坏	-	-	-	石英・雲母・細礫	灰白	普通	底部ナデ	8区覆土中	5% 墨書体部「十」カ
574	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ 削り	9区覆土中	5% 墨書体部「口」
575	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ 削り	8区覆土中	5% 墨書底部「口」
576	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母	灰	普通	底部ヘラ削り	6区覆土中	5% 墨書体部「口」
577	須恵器	坏	-	-	-	石英・細礫	黄灰	普通	体部内・外面口クロナデ	5区覆土中	5% 墨書体部「口」
578	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部内・外面口クロナデ	9区中層	5% 墨書体部「口」
579	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英	灰白	普通	体部内・外面口クロナデ	7区覆土中	5% 墨書体部「口」
580	須恵器	坏	-	-	-	石英・細礫	灰	普通	体部内・外面口クロナデ	6区覆土中	5% 墨書体部「口」
581	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部内・外面口クロナデ	6区覆土中	5% 墨書体部「口」
582	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部内・外面口クロナデ	8区覆土中	5% 墨書体部「十」カ
583	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英	灰	普通	体部内・外面口クロナデ	9区覆土中	5% 墨書体部「口」

※544～583は実測図未掲載

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP22	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐	普通	沈線文施文後瘤状突起貼付	6区覆土中	PL37
TP24	土師器	壺	石英・雲母	にぶい褐	普通	網目状捺糸文施文	6区覆土中	PL37
TP25	土師器	壺	石英・雲母	にぶい橙	普通	円形竹管文施文後櫛描文施文	4区覆土中	
TP26	土師器	壺	石英・雲母	にぶい赤褐	普通	櫛描文施文後連続刺突文施文	9区覆土中	
TP27	須恵器	坏	石英・雲母	黄灰	普通	ロクロナデ	8区下層	刻書「七」 PL37
TP28	須恵器	坏	石英・雲母	灰白	普通	ロクロナデ	8区覆土中	刻書「个」 PL37
TP29	弥生土器	厚口鉢	長石・石英	灰白	普通	体部外面条痕文施文	1区覆土中	

番号	器種	長さ	最大径	孔径	重量	材質	手法の特徴	出土位置	備考
DP18	小玉	0.72	0.71	0.10	0.37	粘土	ナデ	3区覆土中	
DP19	小玉	1.07	1.05	0.20	1.02	粘土	ナデ	7区下層	PL38
DP20	小玉	0.82	0.85	0.10	0.62	粘土	ナデ	7区下層	
DP22	管状土錘	4.44	0.88	0.30	3.22	粘土	ナデ	1区覆土中	PL38
DP23	管状土錘	3.05	1.11	0.34~ 0.37	(2.64)	粘土	ナデ 一部欠損	1区覆土中	
DP24	管状土錘	4.00	1.04	0.40	3.34	粘土	ナデ	2区覆土中	
DP25	管状土錘	5.20	1.06	0.40	5.50	粘土	ナデ	5区中層	
DP26	管状土錘	(7.40)	3.70	(0.90)	(43.9)	粘土	ナデ 一部欠損	6区中層	
DP27	管状土錘	(4.10)	1.28	0.43	(5.10)	粘土	ナデ 一部欠損	6区覆土中	
DP28	管状土錘	4.17	1.40	0.39~ 0.50	5.95	粘土	ナデ	6区覆土中	
DP29	管状土錘	5.22	1.27	0.39~ 0.51	(6.75)	粘土	ナデ 一部欠損	7区下層	
DP30	管状土錘	4.43	1.32	0.55	6.25	粘土	ナデ	7区下層	
DP31	管状土錘	(3.13)	1.12	0.37	(2.86)	粘土	ナデ 一部欠損	7区覆土中	
DP32	管状土錘	4.55	1.21	0.32	5.50	粘土	ナデ	8区覆土中	
DP33	管状土錘	3.13	0.96	0.25	(2.52)	粘土	ナデ 一部欠損	8区覆土中	
DP34	管状土錘	2.80	1.11	0.22	(3.14)	粘土	ナデ 一部欠損	8区覆土中	
DP35	管状土錘	5.62	1.21	0.28	6.05	粘土	ナデ	9区覆土中	
DP36	管状土錘	6.09	1.28	0.33	(7.50)	粘土	ナデ 一部欠損	6区覆土中	
DP37	紡錘車	最大厚 2.79	4.25	0.85	54.6	粘土	側面削り調整	5区中層	PL38
DP38	紡錘車	最大厚 1.38	3.10	0.85	54.6	粘土	側面削り調整	7区中層	PL38
DP39	紡錘車 未製品	最大厚 2.10	5.10	0.20	(56.0)	須恵器	須恵器片転用 布目痕 両面穿孔 未完通 一部欠損	8区中層	PL38
DP40	有孔円板	最大厚 0.71	7.10	1.50	(21.8)	粘土	ナデ 中央部穿孔 一部欠損	6区覆土中	PL38
DP41	円板	最大厚 0.91	7.30	-	(61.0)	粘土	ナデ 一部欠損	9区中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	孔径	重さ	材質	手法の特徴	出土位置	備考
DP21	土鈴 模造品	2.22	2.11	1.71	0.20	6.90	粘土	ナデ 上縁に環	7区下層	PL38

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q54	石斧	12.5	7.5	2.0	227	安山岩	分銅型	7区中層	
Q55	石皿	(10.9)	(13.3)	(6.8)	(796)	安山岩	一面使用	6区覆土中	
Q56	くぼみ石	(10.7)	11.1	5.2	(445)	玄武岩	一面使用	8区覆土中	
Q63	勾玉	(2.6)	1.2	0.45	(3.48)	滑石	基部に小孔穿孔	7区覆土中	PL38

番号	器種	径	最大厚	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q58	白玉	1.3	0.3	0.4	(0.32)	頁岩	側面円筒状 片面穿孔 一部欠損	8区中層	
Q59	白玉	1.2	0.2	0.3	0.36	頁岩	側面円筒状 片面穿孔	8区中層	

番号	器種	径	最大厚	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q60	白玉	1.9	0.7	0.5	2.84	頁岩	側面 両面穿孔	1区覆土中	PL38
Q61	双孔円板	3.2	0.4	0.1	7.45	頁岩	中央部に小孔穿孔2か所	8区下層	PL38
Q62	有孔円板	4.0	1.0	0.2	22.9	頁岩	つまみ部削出 両面穿孔	8区覆土中	PL38

番号	器種	径	厚さ	軸棒長	軸棒幅	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M2	紡錘車	3.40	0.40	(1.80)	0.40	(13.7)	鉄	軸部断面方形	5区覆土中	

番号	器種	径	内径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M3	耳環	1.70	1.08	0.45	2.42	銅	銅地銀貼り 表面に緑青	6区上層	PL38

番号	器種	縦径	横径	高さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M4	鈴	2.83	3.30	2.54	9.60	銅	上縁に環 内部に中礫の珠	8区下層	PL38

番号	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	特徴	出土位置	備考
T1	丸瓦	10.8	10.4	2.0	294	粘土	凸面へら削り 凹面布目痕	9区中層	

番号	種別	型式	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W30	木簡	019	(14.6)	1.8	0.5	(5.1)	ヒノキ科 アスナロ属	板目 下部欠損	8区下層	★ PL39 第1号
W31	木簡	065	19.2	2.5	0.6	15.6	ヒノキ	板目 左右からの一対の切り込み 2か所	9区中層	★ PL39 第2号
W32	木簡	081	(8.0)	3.4	0.3	(4.4)	ヒノキ科 アスナロ属	板目 上下端部欠損	9区覆土中	★ PL39 第3号
W33	木簡	081	(26.4)	4.3	0.7	(49.1)	ヒノキ	板目 上下端部欠損	5区中層	★ PL40 第4号
W34	木簡	011	(21.0)	2.7	0.5	(20.0)	ヒノキ	板目 上端部に円孔穿孔1か所 裏面に未貫通の円孔1か所	7区覆土中	★ PL39 第5号

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W35	工具	楔	(14.4)	3.8	2.8	(96.1)	コナラ属 アカガシ亜種	芯無削出 面取り 先端に向って 次第に厚みを減する削り加工	8区中層	PL48
W36	工具	篋	(29.9)	(11.1)	1.3	(141.9)	ヒノキ科 アスナロ属	板目 両面削り調整痕	4区中層	★ PL43
W37	農具	鋏	(41.8)	(15.6)	2.6	(43.9)	コナラ属 アカガシ亜属	追柁目 ナスビ形 軸部に突起削出	8区下層	★ PL41
W38	農具	鋏	(23.5)	(14.0)	2.3	(208.0)	コナラ属 アカガシ亜属	板目 ナスビ形 軸部に突起削出	6区中層	★ PL41
W39	農具	鋏	39.3	12.7	3.3	3990	コナラ属 クヌギ節	追柁目 軸部に段状の削込	5区中層	★ PL41
W40	農具	鋏	(31.9)	11.3	3.3	(350.0)	コナラ属 クヌギ節	板目 軸部に段状の削込	8区中層	★ PL41
W41	農具	鋏	(18.0)	(7.4)	1.2	(83.1)	ケヤキ	柁目 刃部	8区上層	
W42	農具	鋏	(29.8)	(8.2)	(3.2)	(472.0)	コナラ属 クヌギ節	柁目 刃部	8区上層	
W43	農具	鋏	42.2	5.7	3.3	294.0	コナラ属 クヌギ節	板目 刃部欠損 軸部に緊縛痕	5区下層	★
W44	農具	鋏柄未製品	81.0	30.0	6.8	1220	コナラ属 クヌギ節	芯持丸木 樹皮付き 台部両端削り 加工	8区下層	★ PL43
W45	農具	大足杵木	91.7	4.0	5.3	(953.0)	本体 カヤ 楔 クワ	割材 両端部に緊縛痕 楔残存2 か所 長方形孔穿孔15か所	1区底面	★ PL43
W46	農具	大足杵木	(38.6)	3.3	4.7	(318.2)	ニガキ	割材 長方形孔穿孔6か所	7区中層	★ PL43
W47	農具	大足杵木	(64.8)	4.6	4.1	(602.0)	本体 クリ 楔 モミ属	割材 長方形孔穿孔8か所 上面から楔を木釘留め	8区中層	★ PL43
W48	農具	大足小口板	(41.1)	(8.7)	(12.0)	1650	カヤ	板目 中央部に楕円孔穿孔	8区中層	★ PL43
W49	農具	大足小口板	5.7	33.6	1.7	(137.0)	モミ属	板目 中央部に楕円孔穿孔	6区上層	★ PL42
W50	農具	大足小口板	7.7	36.2	2.0	(208.0)	ヒノキ科 アスナロ属	板目 中央部に楕円孔穿孔	9区中層	★ PL42
W51	農具	大足小口板	(39.1)	10.4	1.2	(247.0)	カヤ	板目 中央部に長方形孔穿孔2か所	4区中層	★ PL42
W52	農具	大足足台	23.5	10.5	2.5	(315.0)	クリ	柁目 緒孔は円孔穿孔3か所 左足用カ	8区中層	★ PL42
W53	農具	大足横木	38.3	2.0	1.7	55.2	コナラ属 クヌギ節	芯無削出 先端部ホゾ状の削出	8区中層	
W54	農具	大足横木	37.5	2.2	2.2	109.5	モミ	芯無削出 先端部	6区下層	★ PL48
W55	農具	大足横木	37.3	2.2	1.9	104.2	モミ	芯無削出	7区中層	★ PL48
W56	農具	大足横木	(17.0)	2.7	(1.1)	(30.8)	ヒノキ	板目	6区覆土中	

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W57	農具	鎌柄	39.8	3.5	2.0	105.0	モミ属	芯無削出 刃部装着孔 柄基部下面に突起削出	6区中層	★ PL44
W58	農具	鎌柄	33.3	2.8	2.0	123.4	クヌギ節	芯無削出 柄基部下面に突起削出 刃部装着孔有	7区中層	★ PL44
W59	農具	鎌柄	(23.5)	2.7	2.0	(68.7)	アカガシ亜属	芯無削出 刃部装着孔有 側面に円孔穿孔	6区中層	★ PL44
W60	農具	鎌柄	(23.5)	4.9	2.8	(138.6)	クリ	芯無削出 柄基部下面に突起削出	7区下層	
W61	農具	竪杵	82.3	10.4	9.2	2490	コナラ亜属 クヌギ節	芯無削出 握り部に圧痕 搦き部 両端に磨減痕	1区下層	★ PL43
W62	農具	竪杵	(32.3)	7.5	5.5	(63.0)	コナラ属 アカガシ亜属	芯持削出 搦き部端部に磨減痕	8区中層	★ PL44
W63	農具	竪杵	35.7	8.9	6.4	1290	コナラ属 アカガシ亜属	芯無削出 搦き部端部に磨減痕	5区中層	★ PL43
W64	農具	横槌	40.4	4.4	50.5	501.0	アスナロ属	芯無削出 先端部に磨減痕 杵としても使用カ	8区中層	★ PL43
W65	農具	横槌	39.1	4.5	4.3	482.0	アスナロ属	芯持削出 先端部に磨減痕 杵としても使用カ 柄部に削り加工	8区中層	★ PL44
W66	農具	横槌	44.4	9.1	9.2	(2010)	ヤマグワ	芯持削出 持ち手部削出 圧痕有	7区下層	★ PL44
W67	農具	竪杵	(33.1)	8.6	5.5	(9060)	コナラ属 アカガシ亜種	芯無削出 坏部端部に磨減痕	5区中層	
W68	農具	木錘	13.9	8.6	6.6	(401.0)	クワ属	芯持丸木 側面中央に左右からの切り込み	1区下層	★
W69	農具	木錘	13.5	7.5	7.0	(437.0)	クワ属	芯持丸木 側面中央に左右からの切り込み	1区覆土中	★ PL47
W70	農具	木錘	16.0	7.5	7.0	(449.0)	クワ属	芯持丸木 両端部削り加工	1区覆土中	★ PL47
W71	農具	木錘 未製品	16.7	8.2	(7.2)	(636.0)	コナラ属 クヌギ節	芯持丸木 樹皮つき 両端部削り加工	7区覆土中	
W72	農具	木錘 未製品	12.2	6.8	6.2	(339.0)	クヌギ節	芯無削出 一端部削り加工 緊縛痕有	6区中層	★
W73	農具	目盛板	(51.8)	5.4	2.3	(341.0)	モミ属	榫目 上面に刻み目4か所現存 先端部削り加工	8区覆土中	★ PL44
W74	農具	編み台 支柱	(32.9)	10.1	3.0	(377.0)	コナラ亜属 クヌギ節	追榫目 方形のホゾ穴穿孔	7区下層	★ PL44
W75	農具	柄	(47.3)	3.7	3.4	(304.0)	コナラ属 コナラ節	芯持丸木 面取り 表面加工	8区下層	
W76	農具	柄	(43.8)	4.0	2.7	(323.0)	ヤマグワ	芯無削材 面取り 表面加工	6区中層	
W77	農具	把手	(15.8)	4.8	4.3	(125.8)	ヒノキ科 アスナロ属	芯無削出 柄頭部有頭状の削出	8区上層	★ PL45
W78	農具	把手	(10.9)	4.4	3.8	(61.0)	ヒノキ	芯無削出 柄頭部有頭状の削出	6区下層	★ PL45
W79	紡織具	糸巻	(17.5)	3.6	(1.7)	(42.7)	カヤ	板目 火鑽白転用 端部一面に切り込み 組合せ部に円孔穿孔 表面に墨書	7区上層	★ PL40 墨書 「□□本」
W80	紡織具	杵	(25.6)	3.0	2.5	(101.3)	モミ属	芯無削出 腕木 中央部に円形の支え木柄孔を穿孔 緊縛痕	6区中層	PL48
W81	土木材	杵支え木カ	(52.0)	3.0	2.7	(243.0)	モミ属	芯無削出 先端部削り加工	7区下層	
W82	紡織具	織機腰板	(45.7)	6.9	3.0	(517.0)	モミ属	板目 両端部有頭状の削出	1区底面	★ PL48
W83	武器	弓	(33.6)	1.7	2.1	(69.4)	カヤ	芯持削出 弓弭部削出	5区中層	★ PL48
W84	武器	弓	(46.0)	2.9	1.5	(109.0)	カヤ	芯無削出 弓弭部削出	10区下層	★ PL48
W85	武器	弓	(20.8)	2.2	1.3	(25.2)	イヌガヤ	芯無削出 弓弭部削出	8区覆土中	
W95	容器	剝物	27.7	26.4	7.3	884.0	クリ	板目 体部内・外面削り調整 工具痕	8区中層	★ PL44
W96	容器	把手付槽	(32.3)	(4.7)	(9.5)	(582.0)	モミ属	芯無削出 把手部削出	9区中層	★ PL44
W97	容器	釣瓶	35.2	27.7	7.6	(878.0)	モミ属	板目 長方形の竿装着孔穿孔	8区中層	★ PL44

番号	種別	器種	口径	底径	高さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W86	容器	挽物 椀	-	9.4	(3.4)	(163.8)	ナナカマド	横木取り榫目 ロクロ挽き 台状高台削出	6区中層	★ PL47
W87	容器	挽物 皿	-	[14.0]	(2.8)	(81.0)	キハダ	横木取り榫目 ロクロ挽き 環状高台削出	5区中層	★ PL47
W88	容器	挽物 皿	[16.7]	(11.5)	(2.0)	138.0	サクラ属	横木取り榫目 ロクロ挽き 台状高台削出	6区上層	★ PL47
W89	容器	挽物 皿	-	[10.4]	(1.6)	(26.2)	サカキ	横木取り榫目 ロクロ挽き 台状高台削出	6区中層	★ PL47
W90	容器	挽物 皿	-	[12.0]	(1.7)	(44.0)	カツラ	横木取り榫目 ロクロ挽き 台状高台削出	6区中層	★ PL47
W91	容器	挽物 皿	-	[12.0]	(1.7)	(44.0)	ムクロジ	横木取り追榫目 ロクロ挽き 台状高台削出	5区上層	
W92	容器	挽物 皿	[13.3]	[9.8]	(1.2)	(88.3)	サクラ属	横木取り板目 ロクロ挽き	6区上層	★ PL47
W93	容器	挽物 皿	-	[16.0]	(1.6)	(20.6)	ムクロジ	横木取り板目 ロクロ挽き	4区中層	★ PL47
W94	容器	剝物	16.9 ×13.4	11.6 ×9.8	8.1~ 8.9	(875.0)	バラ科	芯持削出 体部内・外面削り調整	8区中層	★ PL47
W99	容器	曲物底板 蓋板類	最大径 16.7	最小径 15.1	(0.8)	130.7	ヒノキ	榫目 樹皮綴じ	6区中層	★ PL46

番号	種別	器種	径	高さ (2.4)	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W98	容器	曲物底板・蓋板類	20.4			(219.0)	アスナロ属	底板・蓋板 板目 側板 榫目 樹皮綴じ 外面削り痕	8区上層	★ PL46
W100	容器	曲物底板・蓋板類	18.8	0.8		(158.0)	ヒノキ科 アスナロ属	板目 樹皮綴じ 外面刃物痕	8区中層	★ PL46
W101	容器	曲物底板・蓋板類	18.2	0.9		(172.8)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ	5区中層	★ PL46
W102	容器	曲物底板・蓋板類	15.3	0.8		(125.2)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ 外面刃物痕	6区中層	★ PL46
W103	容器	曲物底板・蓋板類	[24.8]	1.2		(327.0)	ヒノキ	板目 釘綴じ	8区上層	★
W104	容器	曲物底板・蓋板類	[22.4]	1.3		(188.0)	ヒノキ	板目 釘綴じ	5区上層	★
W105	容器	曲物底板・蓋板類	21.4	1.0		(158.5)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ 内・外面刃物痕	5区中層	★
W106	容器	曲物底板・蓋板類	20.4	1.2		(217.0)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ 小孔穿孔2か所	8区中層	★
W107	容器	曲物底板・蓋板類	18.3	1.0		(152.4)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ 外面刃物痕	6区中層	★ PL46
W108	容器	曲物底板・蓋板類	17.3	0.8		(97.2)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ 外面刃物痕	7区下層	★ PL46
W109	容器	曲物底板・蓋板類	[23.0]	1.1		(142.3)	スギ	板目 内・外面刃物痕 小孔穿孔 1か所	9区中層	★ PL46
W110	容器	曲物底板・蓋板類	[36.0]	1.5		(304.0)	ヒノキ	板目 釘綴じ	8区上層	★
W111	容器	曲物底板・蓋板類	[21.0]	0.7		(746.0)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ	8区中層	
W112	容器	曲物底板・蓋板類	[18.0]	0.7		(74.0)	サワラ	板目 釘綴じ	7区上層	
W113	容器	曲物底板・蓋板類	18.8	0.8		(113.0)	ヒノキ	追榫目 樹皮綴じ	9区中層	
W114	容器	曲物底板・蓋板類	19.7	0.9		(102.5)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ 内・外面刃物痕	5区中層	
W115	容器	曲物底板・蓋板類	[18.4]	0.9		(92.8)	サワラ	板目 樹皮綴じ 外面刃物痕	6区中層	
W116	容器	曲物底板・蓋板類	15.3	0.9		(91.9)	モミ属	榫目 樹皮綴じ	8区中層	
W117	容器	曲物底板・蓋板類	(36.6)	1.1		(235.0)	ヒノキ	榫目 釘綴じ	9区中層	
W118	容器	曲物底板・蓋板類	[21.2]	0.9		(86.1)	モミ属	板目 樹皮綴じ	6区中層	
W119	容器	曲物底板・蓋板類	[20.0]	0.9		(52.1)	ヒノキ	板目	5区上層	
W120	容器	曲物底板・蓋板類	[17.2]	1.0		(74.0)	サワラ	板目 樹皮綴じ	5区中層	
W121	容器	曲物底板・蓋板類	[17.8]	0.8		(80.6)	サワラ	板目 樹皮綴じ 漆付着	6区覆土中	
W122	容器	曲物底板・蓋板類	[16.6]	0.9		(61.3)	ヒノキ	板目 釘綴じ 片面刃物痕	6区中層	
W123	容器	曲物底板・蓋板類	[15.0]	0.8		(51.5)	ヒノキ	板目 釘綴じ 顔料付着	6区中層	
W124	容器	曲物底板・蓋板類	[16.4]	0.8		(50.9)	ヒノキ	追榫目 樹皮綴じ	6区上層	
W125	容器	曲物底板・蓋板類	[26.0]	0.9		(77.2)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ	7区中層	
W126	容器	曲物底板・蓋板類	[16.8]	0.8		(64.9)	モミ属	追榫目 樹皮綴じ	6区上層	
W128	容器	曲物底板・蓋板類	[19.0]	0.9		(70.7)	ヒノキ	追榫目 樹皮綴じ	8区中層	
W129	容器	曲物底板・蓋板類	[18.0]	1.1		(81.7)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ	5区中層	
W130	容器	曲物底板・蓋板類	[37.2]	1.1		(172.5)	ヒノキ	板目	5区中層	
W131	容器	曲物底板・蓋板類	[13.3]	0.8		(28.6)	ヒノキ	榫目 樹皮綴じ 片面刃物痕 小孔穿孔5か所	5区中層	★ PL46
W132	容器	曲物底板・蓋板類	[27.0]	0.8		(87.7)	ヒノキ	追榫目 釘綴じ 片面刃物痕	9区中層	
W133	容器	曲物底板・蓋板類	[18.0]	0.9		(36.7)	ヒノキ科 アスナロ属	板目 樹皮綴じ 外面刃物痕	4区中層	★ PL46
W134	容器	曲物底板・蓋板類	[20.0]	0.8		(45.1)	アスナロ	板目 樹皮綴じ	6区中層	
W135	容器	曲物底板・蓋板類	[18.6]	0.7		(39.7)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ	5区中層	
W136	容器	曲物底板・蓋板類	19.8	0.6		(61.2)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ	6区上層	
W137	容器	曲物底板・蓋板類	[17.8]	0.8		(51.7)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ	5区中層	
W138	容器	曲物底板・蓋板類	[18.8]	0.8		(52.2)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ	5区中層	
W139	容器	曲物底板・蓋板類	[9.6]	1.0		(70.1)	ヒノキ	板目 釘綴じ	5区中層	★ PL46
W140	容器	曲物底板・蓋板類	[16.0]	0.7		(34.4)	アスナロ属 側板モミ属	榫目 樹皮綴じ 漆付着	6区中層	★ PL46
W141	容器	曲物底板・蓋板類	[20.2]	0.9		(61.8)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ	8区中層	
W142	容器	曲物底板・蓋板類	[19.4]	0.8		(45.2)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ	8区上層	
W143	容器	曲物底板・蓋板類	[18.2]	0.8		(50.6)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ 裏面刃物痕	7区中層	
W144	容器	曲物底板・蓋板類	[18.8]	0.7		(38.5)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ	7区下層	
W145	容器	曲物底板・蓋板類	[26.4]	0.8		(67.9)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ 一部炭化	5区中層	

番号	種別	器種	径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W146	容器	曲物底板・蓋板類	[25.0]	0.9	(44.9)	ヒノキ	追柁目 一部炭化	4区中層	
W147	容器	曲物底板・蓋板類	最大長 (20.0)	0.8	(83.9)	ヒノキ	板目 一部炭化	5区中層	
W148	容器	曲物底板・蓋板類	18.3	0.7	(62.7)	ヒノキ	板目	8区上層	
W149	容器	曲物底板・蓋板類	[24.2]	0.9	(84.4)	ヒノキ	板目 一部炭化	8区中層	
W150	容器	曲物底板・蓋板類	18.8	0.8	(45.8)	ヒノキ	板目 火鑽白転用	8区上層	
W151	容器	曲物底板・蓋板類	16.4	0.7	(49.2)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ 小孔穿孔5か所	4区中層	
W152	容器	曲物底板・蓋板類	20.0	0.8	(70.6)	ヒノキ	板目	6区中層	
W153	容器	曲物底板・蓋板類	19.1	0.9	(77.8)	ヒノキ	板目 外面刃物痕	6区中層	
W154	容器	曲物底板・蓋板類	17.8	0.9	(57.3)	ヒノキ	板目 外面刃物痕	5区中層	
W155	容器	曲物底板・蓋板類	[18.8]	0.9	(62.2)	モミ属	柁目	6区下層	
W156	容器	曲物底板・蓋板類	[18.6]	0.9	(40.0)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ	5区中層	
W157	容器	曲物底板・蓋板類	[17.8]	1.0	(39.4)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ	6区上層	
W158	容器	曲物底板・蓋板類	[17.4]	0.3	(34.5)	ヒノキ	板目	6区中層	
W159	容器	曲物底板・蓋板類	[19.0]	0.7	(36.3)	ヒノキ	板目	5区中層	
W160	容器	曲物底板・蓋板類	[27.6]	0.7	(49.5)	ヒノキ	板目	8区上層	
W161	容器	曲物底板・蓋板類	[19.6]	0.9	(46.7)	ヒノキ	板目 外面刃物痕	8区上層	
W162	容器	曲物底板・蓋板類	18.2	0.5	(29.5)	サワラ	板目	7区下層	
W163	容器	曲物底板・蓋板類	19.3	0.7	(59.7)	ヒノキ	板目 片面炭化	8区上層	
W164	容器	曲物底板・蓋板類	17.9	1.1	(64.9)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ	5区中層	
W165	容器	曲物底板・蓋板類	[19.4]	0.8	(25.9)	ヒノキ	板目	5区中層	
W166	容器	曲物底板・蓋板類	18.9	0.9	(49.8)	ヒノキ	板目	5区上層	
W167	容器	曲物底板・蓋板類	[18.2]	0.7	(50.4)	ヒノキ	板目 一部炭化	5区中層	
W168	容器	曲物底板・蓋板類	[19.0]	0.8	(26.1)	ヒノキ	追柁目 樹皮綴じ	6区中層	
W169	容器	曲物底板・蓋板類	[19.4]	1.0	(28.5)	ヒノキ	板目	6区中層	
W170	容器	曲物底板・蓋板類	[15.4]	0.7	(13.3)	スギ	板目	5区上層	
W171	容器	曲物底板・蓋板類	[19.6]	0.6	(27.2)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ	5区中層	
W172	容器	曲物底板・蓋板類	[24.4]	0.9	(30.0)	ヒノキ	板目 裏面刃物痕	6区中層	
W173	容器	曲物底板・蓋板類	[27.0]	0.8	(27.6)	ヒノキ	板目 釘綴じ 漆付着	6区中層	
W174	容器	曲物底板・蓋板類	[21.2]	0.9	(23.3)	ヒノキ	板目	5区中層	
W175	容器	曲物底板・蓋板類	最大長 (34.1)	0.7	(39.6)	ヒノキ	板目	8区覆土中	
W176	容器	曲物底板・蓋板類	最大長 (23.8)	0.9	(79.8)	ヒノキ	板目 片面炭化 片面刃物痕	8区中層	
W177	容器	曲物底板・蓋板類	最大長 (19.0)	1.3	(38.9)	スギ	板目 一部炭化	9区中層	
W178	容器	曲物底板・蓋板類	最大長 (14.9)	0.8	(36.5)	ヒノキ	板目	5区上層	
W179	容器	曲物底板・蓋板類	最大長 (14.6)	0.7	(25.8)	ヒノキ	板目 外面刃物痕	6区覆土中	
W180	容器	曲物底板・蓋板類	最大長 (21.4)	1.0	(24.8)	ヒノキ	追柁目	8区上層	
W181	容器	曲物底板・蓋板類	[45.8]	1.0	(292.0)	ヒノキ	板目 小孔穿孔2か所	7区覆土中	★
W182	容器	曲物底板・蓋板類	[52.4]	1.3	(358.0)	ヒノキ科 アスナロ属	柁目 小孔穿孔8か所	8区中層	★
W183	容器	曲物底板・蓋板類	[47.0]	1.2	(215.0)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ	6区中層	★
W184	容器	曲物底板・蓋板類	[49.8]	1.3	(144.0)	アスナロ属	柁目 小孔穿孔6か所 火鑽白転用	6区中層	★ PL49
W185	容器	曲物底板・蓋板類	[48.8]	1.3	(101.7)	アスナロ属	追柁目 樹皮綴じ	5区中層	★
W186	容器	曲物底板・蓋板類	[34.8]	1.0	(189.0)	ヒノキ	柁目 内・外面刃物痕	6区中層	★
W187	容器	楕円形曲物底板	最大長 (64.8)	1.0	(266.0)	ヒノキ科 アスナロ属	追柁目	8区中層	★ PL49
W188	容器	曲物底板・蓋板類	[40.6]	0.7	(139.7)	ヒノキ	板目 内・外面刃物痕	8区中層	
W189	容器	曲物底板・蓋板類	[44.0]	1.1	(235.0)	モミ属	板目	6区上層	
W190	容器	曲物底板・蓋板類	最大長 (46.2)	1.4	(325.0)	ヒノキ	板目 小孔穿孔1か所	8区中層	
W191	容器	楕円形曲物底板	最大長 (58.2)	1.1	(233.0)	モミ属	板目	8区中層	

番号	種別	器種	径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W192	容器	曲物底板・蓋板類	[65.2]	1.0	(113.8)	ヒノキ	板目 小孔穿孔3か所	8区中層	
W193	容器	曲物底板・蓋板類	[50.0]	1.0	(98.1)	-	板目 樹皮綴じ 木釘による楔	6区覆土中	
W194	容器	曲物底板・蓋板類	[26.0]	0.9	(110.5)	スギ	板目 小孔穿孔2か所	7区中層	
W195	容器	曲物底板・蓋板類	29.2	0.9	(117.6)	スギ	板目 小孔穿孔1か所	8区上層	
W196	容器	曲物底板・蓋板類	[31.6]	0.9	(82.0)	ヒノキ	追柾目 内・外面刃物痕	8区上層	
W197	容器	曲物底板・蓋板類	最大長 (30.5)	0.8	(123.5)	ヒノキ	板目	9区中層	
W198	容器	曲物底板・蓋板類	最大長 (30.4)	0.9	(103.2)	ヒノキ	板目 内面刃物痕 外面一部炭化	9区中層	
W199	容器	曲物底板・蓋板類	最大長 (29.9)	1.0	(46.7)	ヒノキ	板目 小孔穿孔2か所 火鑽白転用	9区覆土中	
W200	容器	曲物底板・蓋板類	[30.8]	0.9	(102.1)	ヒノキ	板目 外面刃物痕	6区中層	
W201	容器	曲物底板・蓋板類	最大長 (28.3)	0.9	(73.4)	サワラ	板目	7区下層	
W202	容器	曲物底板・蓋板類	最大長 (31.6)	1.3	(172.3)	ヒノキ	追柾目	6区中層	
W203	容器	曲物底板・蓋板類	[40.6]	1.1	(113.3)	ヒノキ	板目 内・外面刃物痕	8区下層	
W204	容器	曲物底板・蓋板類	[26.2]	0.9	(79.6)	ヒノキ	板目	6区上層	
W205	容器	曲物底板・蓋板類	[35.0]	1.1	(100.0)	ヒノキ	板目 小孔穿孔1か所	5区中層	
W127	容器	甌	[19.0]	1.0	(84.4)	サワラ	柾目 樹皮綴じ 中央部に円孔穿孔	9区中層	
W210	容器	甌	18.4	1.0	(82.9)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ 中央部に円孔穿孔	5区中層	
W211	容器	甌	[19.4]	0.8	(77.4)	アスナロ属	柾目 中央部に円孔穿孔	2区下層	★
W212	容器	甌	17.8	1.0	(100.6)	アスナロ属	板目 樹皮綴じ 中央部に円孔穿孔 放射状の切り込み	8区覆土中	★ PL46
W213	容器	甌	18.2	0.7	(60.8)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ 中央部に円孔穿孔	6区上層	
W214	容器	甌	18.3	0.7	(80.1)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ 中央部に円孔穿孔 外面刃物痕	7区中層	
W215	容器	甌	19.0	0.9	(127.4)	サワラ	板目 釘綴じ 中央部に円孔穿孔 外面刃物痕	7区下層	
W216	容器	甌	18.7	1.0	(113.1)	スギ	柾目 釘綴じ 中央部に円孔穿孔 外面刃物痕	9区中層	
W217	容器	甌	16.2	0.9	(96.7)	ヒノキ	板目 樹皮綴じ 中央部に円孔穿孔 外面刃物痕	6区中層	★ PL46
W218	容器	甌	13.5	0.6	(34.3)	ヒノキ	追柾目 中央部に円孔穿孔	7区下層	
W219	容器	甌	13.4	0.7	(17.1)	ヒノキ	柾目 一部炭化 中央部に円孔穿孔	9区中層	
W220	容器	甌	13.3	0.6	(29.9)	ヒノキ	板目 中央部に円孔穿孔 漆付着	5区中層	

番号	種別	器種	長径	短径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W206	容器	楕円形 曲物底板	(7.6)	(6.6)	1.1	(42.7)	サワラ	板目	7区中層	
W207	容器	楕円形 曲物底板	(7.4)	(6.2)	1.3	(44.1)	サワラ	板目	7区上層	
W208	容器	楕円形 曲物底板	(8.2)	(5.2)	0.8	(27.4)	カヤ	追柾目 小孔穿孔2か所	6区覆土中	
W209	容器	楕円形 曲物底板	(12.9)	(6.0)	1.2	(44.5)	ヒノキ	追柾目 一部炭化	8区中層	

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W221	容器	曲物側板	-	-	(0.6)	(132.0)	ヒノキ科 アスナロ属	柾目 樹皮綴じ	8区中層	★ PL49
W222	容器	曲物側板	(12.4)	(6.1)	(0.7)	(16.5)	モミ属	柾目 樹皮綴じ	6区中層	
W223	容器	楕円形 曲物側板	41.7	3.5	0.6	69.5	ヒノキ	追柾目 樹皮綴じ	8区上層	★
W224	容器	曲物側板	(40.0)	(6.2)	(0.8)	(96.4)	ヒノキ	板目	9区中層	
W225	容器	曲物側板	(23.0)	(4.3)	(0.8)	(30.1)	モミ属	板目 火鑽白転用	6区上層	
W226	容器	曲物側板	(21.5)	(4.9)	(0.7)	(43.0)	ヒノキ	板目 小孔穿孔7か所	8区上層	
W227	容器	曲物側板	(13.6)	3.3	(0.4)	(13.7)	ヒノキ	板目 釘綴じ 木釘残存	7区中層	★
W228	容器	曲物側板	(8.6)	(2.2)	0.5	(10.1)	ヒノキ	板目 小孔穿孔1か所	8区上層	
W229	容器	曲物柁木 把手	(17.5)	4.7	0.9	(39.0)	ヒノキ科 アスナロ属	板目 端部両側面から挟り加工 緊縛痕 一部炭化	6区覆土中	★ PL45
W230	祭祀具	斎串	27.6	1.8	1.7	72.5	ヒノキ	割材 端部削り加工	7区中層	★ PL48
W231	祭祀具	斎串	32.3	1.7	1.2	44.4	ヒノキ	割材 両端部削り加工	7区中層	★ PL48
W232	祭祀具	刀形形代	(26.3)	3.7	0.7	(39.4)	ヒノキ	芯無削出 刃部削り加工	5区上層	★ PL45
W233	祭祀具	刀形形代	20.5	3.3	1.4	41.0	カヤ	芯無削出 刃部削り加工 一部炭化	3区下層	★ PL45
W234	祭祀具	刀形形代	(18.1)	4.0	0.7	(26.4)	アスナロ属	板目 曲物側板転用カ 小孔穿孔1か所	6区中層	★ PL45

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W235	祭祀具	刀形形代	15.7	3.0	2.1	54.1	モミ	芯無削出 刃部削り加工	5区上層	★ PL45
W236	祭祀具	剣形形代	(14.3)	3.6	(0.6)	(22.0)	モミ	板目 刃部削り加工	3区下層	★ PL48
W237	祭祀具	武器形形代	15.3	5.2	0.9	(50.8)	ヒノキ	板目 表裏平坦調整 側面一方から 抉り状の削り加工	6区中層	★ PL49
W238	祭祀具	武器形形代	17.9	3.7	0.4	(9.0)	カヤ	板目 表裏平坦調整 両側面から 抉り状に削り加工	1区中層	★ PL49
W239	祭祀具	武器形形代	(16.4)	4.4	0.5	(27.0)	ヒノキ	板目 表裏平坦調整 両側面から 抉り状に削り加工	8区上層	★ PL45
W240	祭祀具	武器形形代	13.9	2.2	0.3	5.8	ヒノキ	板目 表裏平坦調整 両側面から 抉り状に削り加工	8区上層	★ PL45
W241	祭祀具	武器形形代	12.1	1.8	0.4	3.9	ヒノキ	板目 表裏平坦調整 両側面から 抉り状に削り加工	5区上層	★ PL45
W242	儀具	鳴鏑	7.8	(4.8)	(2.0)	(42.6)	イヌガヤ	芯無削出 円孔が上面・側面に2か 所現存 内面削り貫き 外面漆塗	1区下層	★ PL49
W243	儀具	削出棒	30.9	2.3	1.8	(79.7)	モミ属	芯無削出 先端部求心状の削り加工	8区下層	PL48
W244	雑具	火鑽杵	32.0	1.1	1.0	29.0	アスナロ属	芯無削出 先端部磨減 焦痕	8区中層	★ PL49
W245	雑具	火鑽臼	(12.2)	2.3	1.0	(10.2)	アスナロ属	割材 板目の破片 火鑽穴14か所 焦痕	6区中層	★ PL49
W246	雑具	申材	(14.2)	(0.9)	(0.6)	(1.4)	ヒノキ	芯無割材 先端部焦痕	7区上層	
W247	雑具	申材	(13.6)	(1.4)	(1.0)	(7.5)	ヒノキ	芯無削出 先端部焦痕	8区上層	
W248	雑具	申材	(9.2)	(1.2)	(1.0)	(3.4)	ヒノキ	芯無割材 先端部焦痕	5区覆土中	
W249	雑具	申材	(19.9)	(2.0)	(1.3)	(10.7)	ヒノキ	芯無割材 先端部焦痕	6区上層	
W250	雑具	带状樹皮	3.9	7.9	0.1	4.7	ヤマザクラ or カバ樹皮	樹皮 結合具	8区覆土中	★ PL45
W251	雑具	带状樹皮	1.8	4.7	0.1	2.0	ヤマザクラ or カバ樹皮	樹皮 結合具	8区覆土中	★ PL45
W252	雑具	带状樹皮	2.9	1.4	-	0.3	-	樹皮 結合具	8区上層	
W253	部材	留め具	(14.0)	4.0	1.9	(60.3)	サワラ	板目 面取り 方形孔穿孔 一部 焦痕	8区上層	
W254	部材	留め具	(16.0)	(7.9)	(1.4)	(90.1)	ヒノキ	板目 面取り 円孔穿孔2か所	8区上層	★ PL45
W255	部材	留め具	(20.7)	(3.1)	(1.4)	(51.6)	ヒノキ	板目 面取り 円孔穿孔2か所	8区上層	★ PL48
W256	部材	留め具	(15.7)	(4.2)	(1.5)	(50.8)	サワラ	板目 面取り 円孔穿孔2か所	8区上層	
W257	部材	結合部材	(9.4)	(8.4)	2.3	(57.0)	アスナロ属	芯無削出 全面削り加工	7区中層	★ PL48
W258	部材	板材	(10.6)	5.2	2.6	(85.3)	コナラ属 クヌギ節	みかん割 芯無削出 段状の削出	7区中層	
W259	部材	板材	(39.9)	8.2	(3.0)	(615.0)	モミ	板目 半円孔穿孔 一部炭化	6区中層	★
W260	部材	板材	(18.7)	4.8	2.6	(150.0)	ヒノキ	板目 両端部にホゾ状の削出	2区中層	
W261	部材	板材	15.9	1.9	0.8	14.5	カヤ	板目 段状の削出 一部炭化	3区底面	
W262	部材	丸材	16.0	2.8	2.5	61.9	クリ	芯持丸木 先端部多方向から凸状 に加工	6区下層	
W263	部材	板材	26.9	1.7	0.6	22.7	ヒノキ	板目 両端部斜断状の加工	8区中層	★
W264	部材	角材	(20.1)	2.0	1.7	(47.1)	サワラ	芯無割材 段状の削出	5区中層	
W265	部材	板材	(18.0)	(2.3)	(1.0)	(21.9)	ヒノキ	芯無割材 側面に段状の削出	6区下層	
W267	部材	角材	28.2	2.5	1.6	(65.6)	ヒノキ	板目 側面に抉り1か所	8区上層	
W268	部材	角材	8.3	2.7	2.2	56.8	ヒノキ	板目 段上の削出 一部圧痕	8区上層	
W270	部材	板材	(38.7)	6.6	3.0	(417.0)	-	半割 方形孔穿孔 一部炭化	2区下層	
W276	部材	板材	(61.0)	12.6	2.4	(1040)	モミ属	板目 削り調整痕	7区上層	
W278	部材	棒状	48.6	3.7	2.6	(310.0)	クリ	芯無削出 面取り	6区下層	★
W279	部材	丸材	24.7	3.9	2.7	(120.3)	モミ	芯無削出 片面中央部から下方へ 斜断状の削り加工	8区上層	★ PL48
W280	部材	丸材	(20.9)	4.7	4.2	(233.0)	モミ属	芯持丸木 先端部四方向からの削 り加工	8区中層	
W282	部材	丸材	(21.2)	2.9	2.5	(110.9)	モミ属	芯無削出 面取り 一部圧痕	6区中層	
W283	部材	丸材	(25.3)	(3.5)	0.9	(7.6)	ヒノキ	芯持丸木 先端部斜断状の加工	7区下層	
W285	部材	丸材	(27.0)	1.0	0.8	(16.4)	サワラ	芯無削出 先端部磨減痕 一部圧痕	8区下層	
W286	部材	丸材	(15.3)	5.1	4.0	(211.0)	ムクロジ	芯持丸木 面取り 端部削り加工	8区下層	
W287	部材	板材	(22.7)	7.7	2.0	(234.0)	モミ属	追板目 削り調整	7区下層	
W291	部材	板材	(12.4)	2.8	0.7	16.9	ヒノキ	板目 両面刃物痕	5区中層	
W292	部材	板材	(11.8)	2.3	0.3	(11.4)	ヒノキ	板目 端部凸状に削出	8区覆土中	
W293	部材	板材	(9.7)	2.0	(0.5)	(6.7)	ヒノキ	板目 削り調整	5区覆土中	★
W294	部材	板材	(10.0)	2.0	0.4	(6.1)	ヒノキ	板目 端部凸状に削出	5区下層	

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W295	部材	板材	(11.0)	2.1	0.3	(4.5)	ヒノキ	板目 削り調整	6区上層	
W296	部材	板材	(3.7)	(3.4)	2.5	(25.6)	ヒノキ	半割削出 削り調整	8区下層	
W297	部材	板材	(7.4)	3.2	(2.6)	(28.7)	カヤ	板目 削り調整	7区中層	
W298	部材	板材	20.0	5.6	3.6	342.0	モミ属	追柁目 側面手斧・鋸痕	8区中層	PL45
W299	部材	板材	(35.4)	24.3	3.3	(1700)	モミ属	板目 円孔穿孔1か所	6区上層	
W301	土木材	杭	(26.5)	8.4	(6.9)	(410.0)	モミ属	芯無割材 先端部四方向から求心状の削り加工	8区下層	
W302	部材	割截材	(29.6)	6.5	2.2	(170.0)	モミ属	柁目 削り加工	8区中層	
W303	部材	角材	120.8	8.0	4.7	1620	コナラ亜属 クスギ節	みかん割 面取り	7区下層	★
W304	土木材	杭	(35.7)	3.0	3.2	(143.9)	カヤ	芯持丸木 先端部二方向からの削り加工	8区上層	
W305	土木材	杭	(39.4)	5.1	(3.7)	(318.0)	クリ	芯持丸木 先端部五方向から求心状の削り加工	7区上層	
W306	土木材	杭	(37.1)	3.7	(3.2)	(156.0)	クリ	芯持丸木 先端部四方向から求心状の削り加工	7区上層	
W307	土木材	杭	(37.6)	5.5	(3.9)	(334.0)	マツ属 複雑管束亜属	芯持丸木 先端部四方向から求心状の削り加工	7区上層	
W308	土木材	杭	(44.5)	5.7	(3.7)	(458.0)	マツ属 複雑管束亜属	芯持丸木 先端部四方向から求心状の削り加工	7区中層	
W309	土木材	杭	(76.0)	8.9	6.5	(2010)	コナラ属 クスギ節	みかん割 先端部四方向からの削り加工	8区中層	
W311	土木材	杭	(49.2)	5.1	(4.2)	(518.0)	コナラ属 アカガシ亜属	芯持丸木 先端部多方向から求心状の削り加工	8区上層	
W314	土木材	杭	45.1	6.6	4.6	640.0	ヤマゲワ	みかん割 先端部多方向から求心状の削り加工	8区下層	
W316	土木材	杭	(55.5)	(5.0)	(3.7)	(424.0)	エノキ属	芯持丸木 樹皮つき 先端部六方向から求心状の削り加工	8区下層	
W317	土木材	杭	(59.0)	17.7	5.4	(1280)	コナラ属 クスギ節	芯持丸木 先端部二方向から斜断状の削り加工	8区下層	
W318	土木材	杭	67.2	9.4	5.4	1190	コナラ属 クスギ節	芯持丸木 先端部六方向から求心状の削り加工	8区下層	
W319	土木材	杭	(53.3)	6.5	6.2	(1040)	モモ	芯持丸木 先端部四方向からの削り加工	8区下層	
W320	土木材	杭	57.7	5.8	5.4	1090	コナラ属 クスギ節	芯持丸木 先端部六方向から求心状の削り加工	8区下層	
W321	土木材	杭	(43.8)	7.2	(7.5)	(1120)	コナラ属 クスギ節	芯持丸木 先端部多方向から求心状の削り加工	8区下層	
W322	土木材	杭	(32.5)	5.9	5.3	(562.0)	エノキ属	芯持丸木 先端部五方向から求心状の削り加工	8区下層	
W323	土木材	杭	(48.2)	(5.7)	(4.8)	(784.0)	クリ	芯持丸木 先端部五方向から求心状の削り加工	8区下層	
W324	土木材	杭	(84.4)	6.6	(6.8)	(2120)	コナラ属 クスギ節	芯持丸木 先端部六方向から求心状の削り加工	8区下層	
W325	土木材	杭	(54.3)	8.4	(7.2)	(1280)	クリ	芯持丸木 先端部五方向から求心状の削り加工	8区中層	
W326	土木材	杭	(52.5)	(5.7)	(3.8)	(580.0)	モモ	芯持丸木 六方向から求心状の削り加工 先端部切断状の加工	8区下層	
W327	土木材	杭	(72.9)	(9.2)	(6.5)	(1440)	ヤマゲワ	芯持丸木 先端部五方向から求心状の削り加工	8区下層	
W332	土木材	杭	(60.9)	6.2	(4.6)	(876.0)	コナラ属 クスギ節	芯持丸木 先端部多方向から求心状の削り加工	8区下層	
W333	土木材	杭	(21.4)	(2.7)	(2.0)	(45.8)	ヤマゲワ	芯持丸木 先端部三方向からの削り加工	8区下層	
W334	土木材	杭	(22.8)	(5.2)	(4.3)	(172.2)	クリ	芯持丸木 四方向から求心状の削り加工 先端部切断状の加工	8区下層	
W335	用途不明	彫刻入 板材	22.6	9.4	2.4	329.0	アスナロ属	板目 両面に彫刻画 魚カ	6区中層	★ PL49
W336	用途不明	棒状 木製品	(10.9)	(1.8)	(1.5)	(143.0)	モミ属	芯持丸木 先端部に焦痕 左右10か所ずつ側面に刻み目加工	1区覆土中	★ PL51
W337	用途不明	荷札状 木製品	9.1	(1.8)	(0.5)	(6.5)	ヒノキ	板目 上部左右からの切り込み	6区中層	★ PL45
W338	用途不明	棒状 木製品	23.9	1.8	1.0	27.1	ヒノキ	芯無削出	9区中層	★ PL48
W339	用途不明	円柱型 木製品	径5.1	厚さ4.4	口径0.7	(65.0)	クワ属	芯無削出 上面・底面の中央部に両方向から円孔穿孔 未貫通	5区中層	★ PL51
W340	用途不明	堅杵状 木製品	74.2	9.0	8.2	1430	サクラ属	芯無削出 上端多方向からの削り加工 下端スタンプ状に削出	6区中層	★ PL44
W341	加工木	-	(13.9)	(6.8)	(3.8)	(137.4)	コナラ属 クスギ節	芯無割材 切断痕	6区中層	

(2) 水場遺構

第1号水場遺構（第153～158図）

位置 調査区南部のE1b7区で、標高35.0mほどの第1号流路跡が緩やかに東に湾曲しながら南流（N-14°-W）し、E1a8区付近からさらに南東方向（N-37°-W）に湾曲する地点の西岸に位置している。

確認状況 平成16年度の調査時に、遺構の南側60cmほどの地点にトレンチを掘り、多量の土器及び木器・木製品の出土を確認した。平成17年度に第1号流路跡の調査を行っている過程で、木枠が井桁に組まれた状態の遺構と周辺から多量の土器及び木器・木製品の出土が確認された。木枠内部から湧水が確認され、遺構周辺の溜水が第1号流路跡内の他の区域と比べ、絶えず透明な水が溜まっていることから、湧水点であると判断し、木枠が井桁に組まれたこの遺構が湧水点に設置された水場遺構であると捉えた。

規模と形状 規模は、湧水点の砂層及び粘土層を中心に長さ3.16m、幅1.42m、深さ36.0cmほど掘り込んで、木枠を井桁状に埋設して貯水部を構成している。掘り方の内部は裏ごめ状に大礫・中礫が敷き詰められている。貯水部の木枠の規模は、長軸1.14m、短軸0.56mで、平面形は長方形を呈し、長軸方向はN-78°-Wである。木枠を構成する材は、北辺が長さ153.7cm、幅13.0cm、厚さ7.7cmの解体した田舟、南辺が長さ177.2cm、幅20.0～35.4cm、厚さ1.6～16.2cmの解体した把手付槽（田舟）、東辺が長さ121.5cm、幅32.8cm、厚さ10.5cmの板材、西辺が長さ59.6cm、幅47.5cm、厚さ8.7cmの半割した丸木材で、それぞれモミ材が使用されている。それぞれの木材は、18本の木杭と径20cmほどの大礫を敷き詰め固定されている。また、東辺の板材の上面中央部にはV字状の挟り部が設けられている。水場の構造は、湧水が貯水部の中に溜まると東辺の挟り部から流れ出す仕組みになっていたと想定され、貯水部の東に部材が一定方向を向いて出土している。流れ出した水が導水された可能性もあるが、遺構として確認はできなかった。茅材が貯水部の外側の西部、南部から出土しており、水場周辺に敷かれていた可能性が考えられる。

覆土 15層に分層される。1～3層は埋没の過程で堆積した覆土で、不規則な堆積状況を示した人為堆積である。4～15層は構築に伴う埋土である。

土層解説

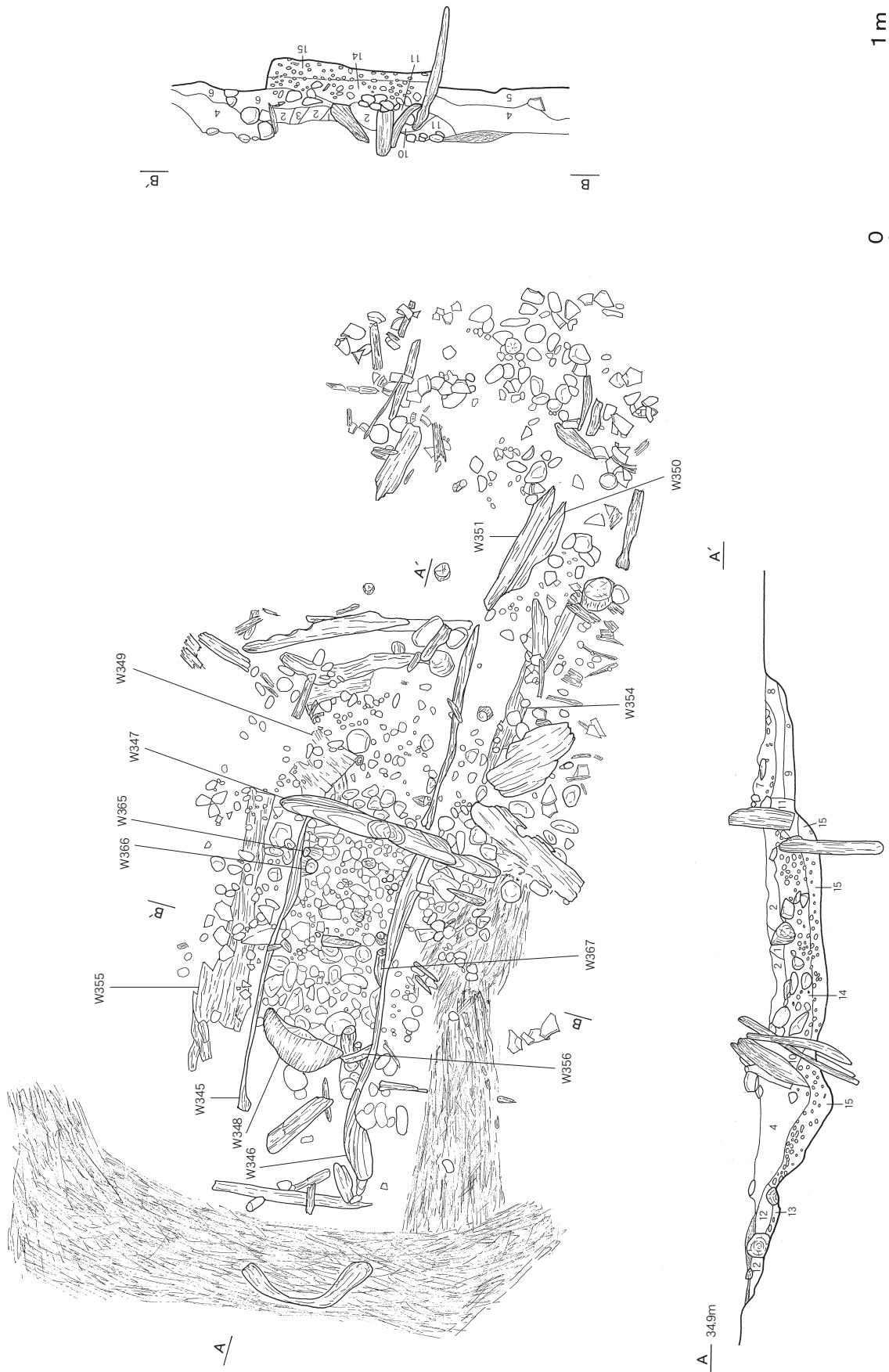
1 暗灰黄色	砂粒少量、炭化粒子・植物遺体微量	9 黒褐色	砂粒中量、粘土粒子微量
2 褐灰色	砂粒中量、大礫少量、植物遺体微量	10 黒褐色	砂粒中量、粘土ブロック・中礫微量
3 黄褐色	砂礫・植物遺体微量	11 黒色	砂粒少量、粘土ブロック微量
4 黒色	砂粒中量、大礫少量、粘土ブロック微量	12 黒褐色	砂粒中量、粘土粒子微量
5 黒色	砂粒中量、粘土ブロック少量	13 暗灰黄色	砂粒・中礫中量
6 黒褐色	砂粒多量、大礫少量、中礫微量	14 黒褐色	中礫多量、粘土粒子・大礫・砂粒少量
7 黒色	砂粒中量、大礫少量、粘土粒子微量	15 黒褐色	粘土粒子・砂粒・中礫中量、大礫・小礫少量
8 黒色	粘土粒子・砂粒少量		

遺物出土状況 貯水部からは、縄文土器片1点、土師器片451点（坏232、高坏・器台類2、甕217）、須恵器片135点（坏117、高台付坏2、甕16）、手捏土器1点、粘土塊1点、種子1点（桃）が出土している。ほとんどが細片で磨滅しており、図化できるものはなかった。出土土器の様相から、水場遺構の構築時に流れ込んだ可能性が考えられる。また、第1号流路跡の遺物は、この水場遺構周辺に集中しており、多量の土器、木器・木製品が出土している（第105図参照）。周辺の土器類の出土状況は投棄された様相を示しており、水場の使用時及び祭祀行為、水場廃絶時などに投棄された可能性が考えられる。

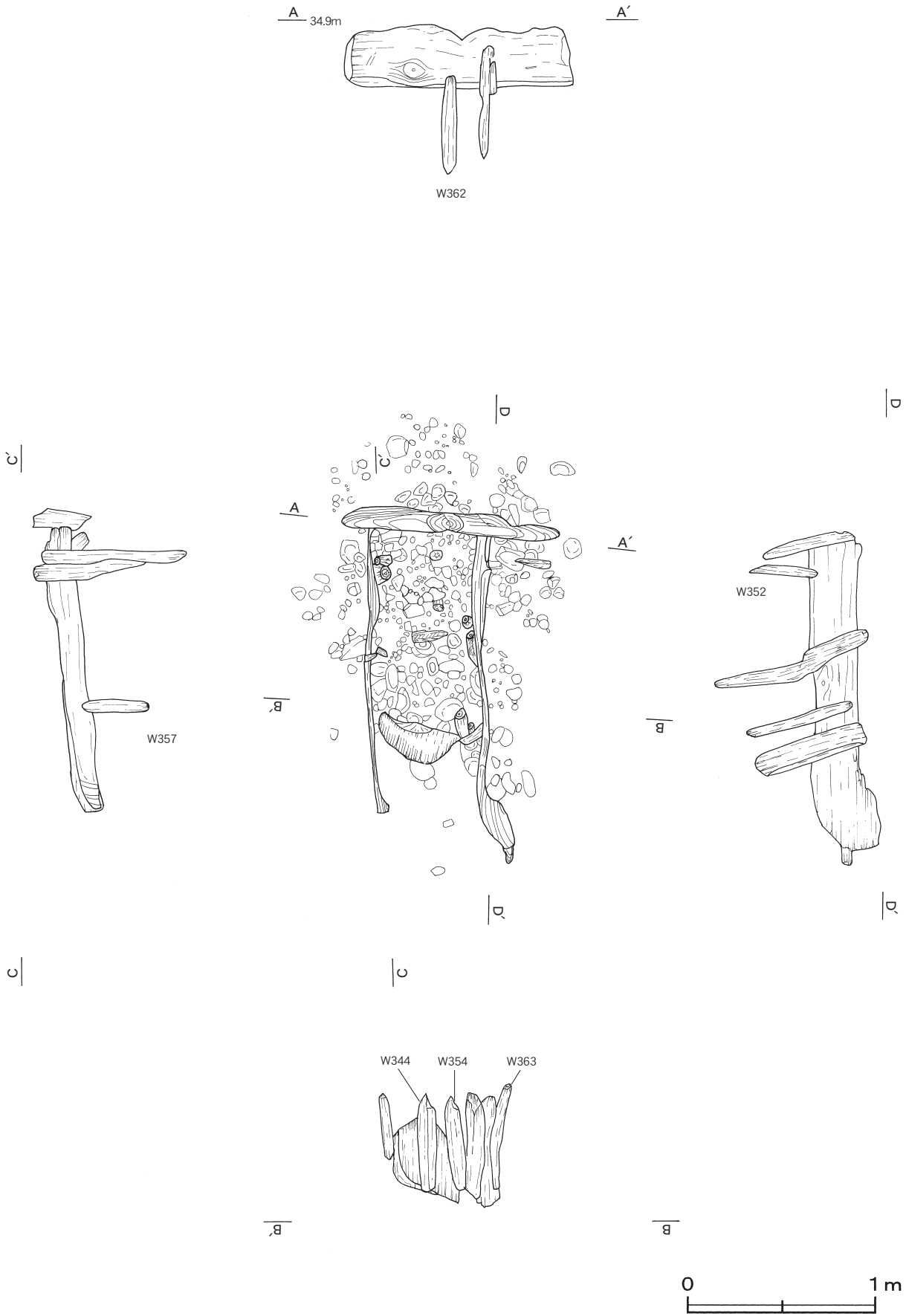
所見 時期は、出土土器から9世紀中葉に機能を終え、埋没したと考えられる。水場遺構の構造から、常に新鮮な水が確保できたと考えられる。そのため、この水場が生活用水として使用されていたと想定される。さらに、周辺から墨書土器や形代が多く出土していることから、この水場遺構を中心として祭祀行為が行われていたと考えられる。



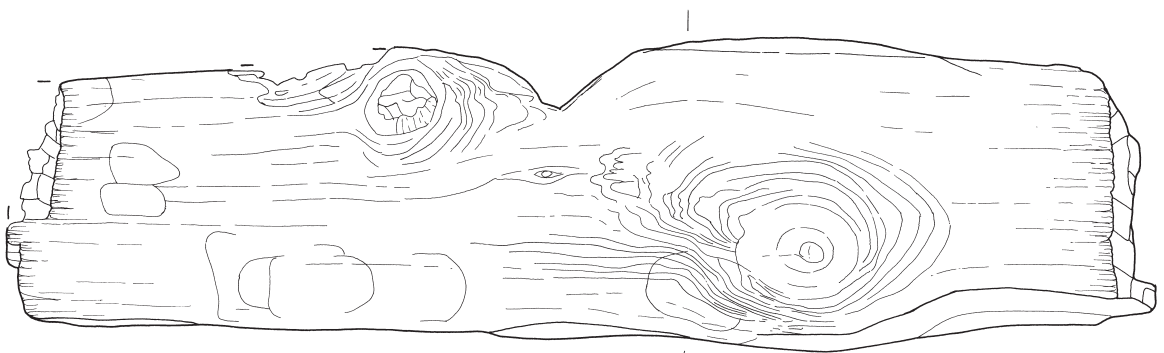
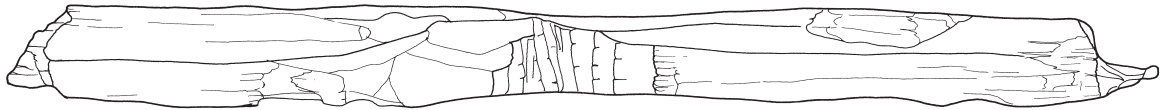
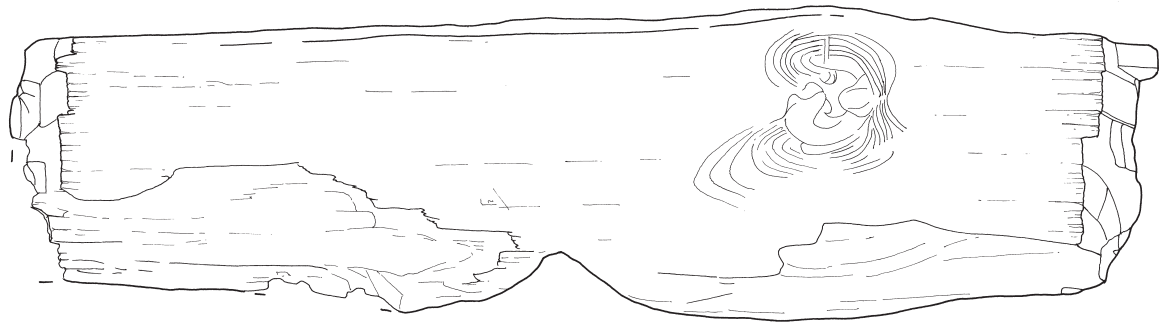
E 1b8



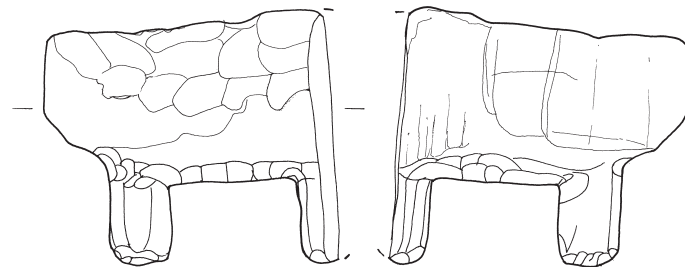
第153図 第1号水場遺構実測図



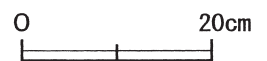
第154図 第1号水場遺構展開図



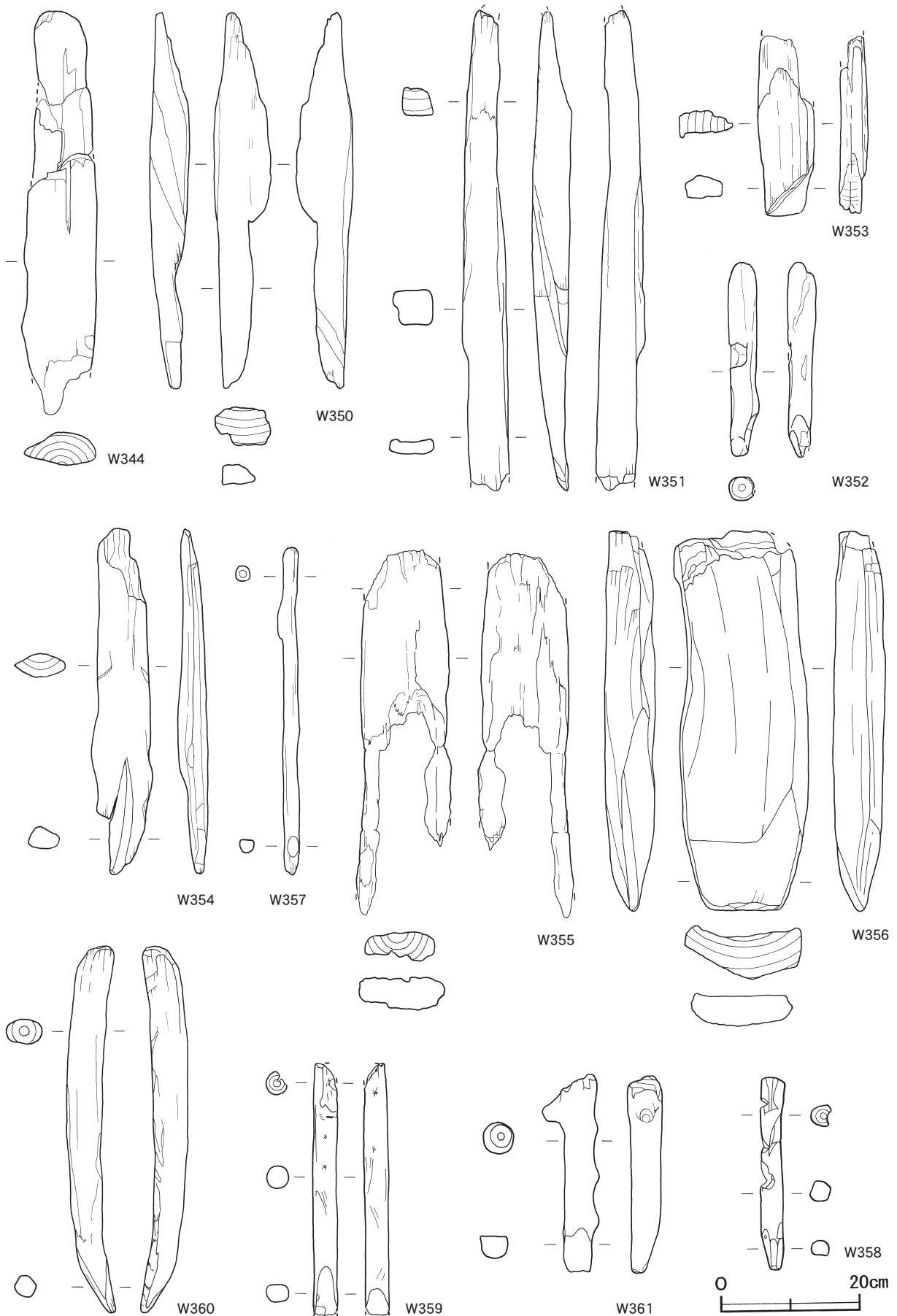
W347



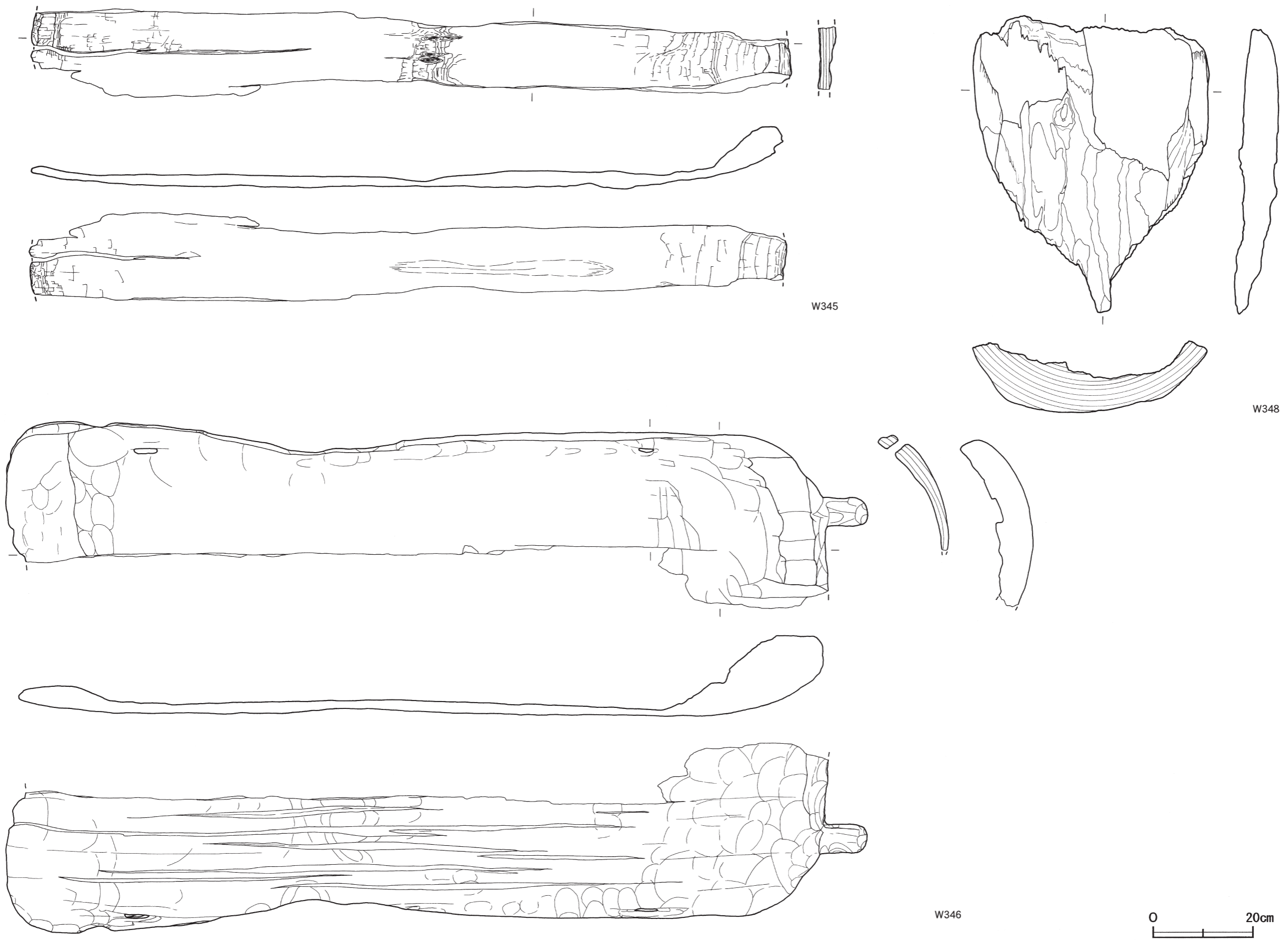
W349



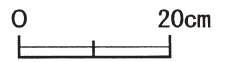
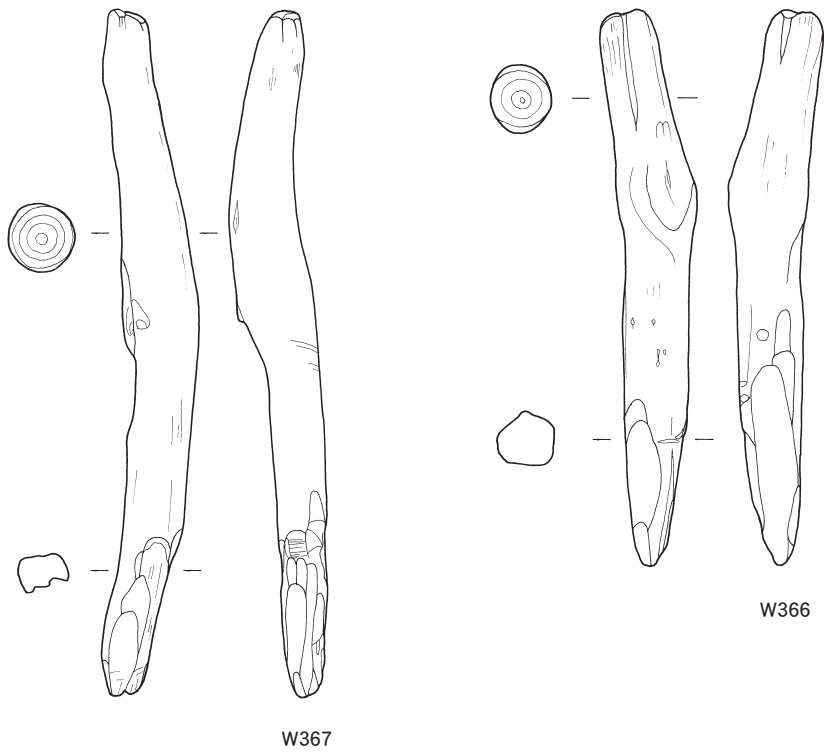
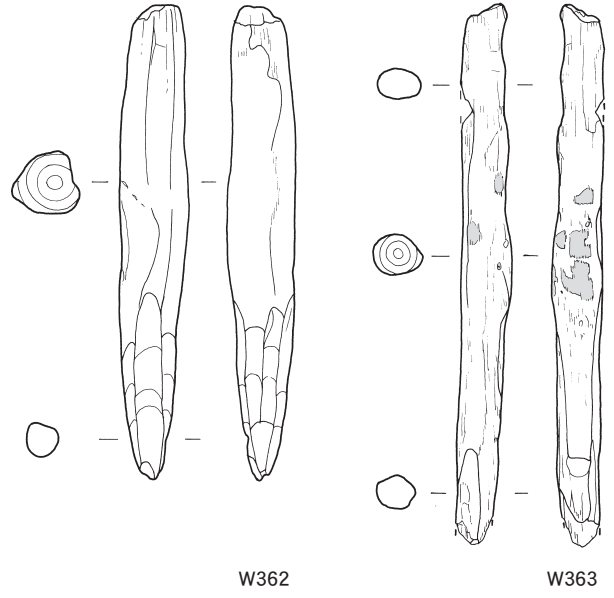
第155図 第1号水場遺構出土遺物実測図(1)



第156図 第1号水場遺構出土遺物実測図(2)



第157図 第1号水場遺構出土遺物実測図(3)



第158図 第1号水場遺構出土遺物実測図(4)

第1号水場遺構出土遺物観察表（第155～158図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W344	土木材	杭	(58.5)	10.9	4.7	(1400)	クリ	半割材	水場遺構	構成材
W345	木枠	田舟	153.7	17.7	13.0	(5000)	モミ	板目 全面削り調整痕	水場遺構	★構成材 PL51
W346	木枠	把手付槽 (田舟)	(177.2)	(35.4)	(16.2)	(18490)	モミ	半割削出 全面削り調整痕 把手部 削出 側面に楕円形孔穿孔2カ所	水場遺構	★構成材 PL50
W347	木枠	板材	121.5	32.8	10.5	(2400)	モミ	半割 両面削り調整痕	水場遺構	★構成材 PL51
W348	木枠	丸木材	(59.6)	(47.5)	(8.7)	(13100)	モミ	半割 表面削り調整痕	水場遺構	★構成材 PL51
W349	容器	把手付槽	(27.1)	(31.2)	(10.2)	(3510)	モミ	半割削出 把手部削出	水場遺構 東部	★構成材 PL51
W350	部材	角材	54.6	(8.2)	(5.7)	(973)	モミ属	横木取 削り加工 槽の一部カ	水場遺構 東部	
W351	部材	角材	(69.8)	(6.7)	(5.8)	(1230)	モミ属	横木取 削り加工 槽の一部カ	水場遺構 東部	
W352	土木材	杭	28.3	4.8	4.2	(432.0)	コナラ属 クスギ節	芯持丸木 先端部五方向から求心 状の削り加工	水場遺構	構成材
W353	部材	板材	(25.7)	(8.4)	(4.3)	(355.0)	モミ属	柁目 削り加工	水場遺構 東部	
W354	部材	板材	(50.0)	8.7	4.0	693.0	クリ	半割 削り加工	水場遺構	構成材
W355	部材	板材	(52.3)	13.9	(4.7)	(1050)	クリ	半割 削り加工	水場遺構 北部	
W356	部材	板材	54.7	19.2	7.4	(3940)	モミ属	板目 削り加工 槽の一部カ	水場遺構	構成材
W357	土木材	杭	47.3	3.3	2.0	278.0	サカキ	芯持丸木 先端部一方向から斜断 状の削り加工	水場遺構	構成材
W358	土木材	杭	27.9	3.7	3.0	(149.7)	クリ	芯持丸木 先端部四方向から求心 状の削り加工	水場遺構 南部	
W359	土木材	杭	(36.4)	3.6	3.5	(292.0)	エノキ属	芯持丸木 先端部二方向から斜断 状の削り加工	水場遺構 東部	
W360	土木材	杭	53.0	7.0	3.5	680.0	モモ	芯持丸木 先端部五方向から求心 状の削り加工	水場遺構	構成材
W361	土木材	杭	28.5	8.5	4.9	398.0	エノキ属	芯持丸木 先端部一方向から斜断 状の削り加工	水場遺構	構成材
W362	土木材	杭	50.1	7.2	7.4	1300	ムクロジ	みかん割 先端部四方向から求心 状の削り加工	水場遺構	構成材
W363	土木材	杭	(57.1)	5.7	4.4	(849.0)	クリ	芯持丸木 樹皮つき 先端部四方 向から求心状の削り加工	水場遺構	構成材
W364	土木材	杭	79.8	5.3	6.8	1310	シキミ	芯持丸木 先端部四方向から求心 状の削り加工	水場遺構	構成材
W365	土木材	杭	(72.8)	6.0	5.0	(1270)	ヤマグワ	芯持丸木 先端部五方向から求心 状の削り加工	水場遺構	構成材
W366	土木材	杭	73.4	10.8	10.7	3900	ヤマグワ	芯持丸木 先端部五方向から求心 状の削り加工	水場遺構	構成材
W367	土木材	杭	90.8	12.8	10.2	3900	ヤマグワ	芯持丸木 先端部五方向から求心 状の削り加工	水場遺構	構成材

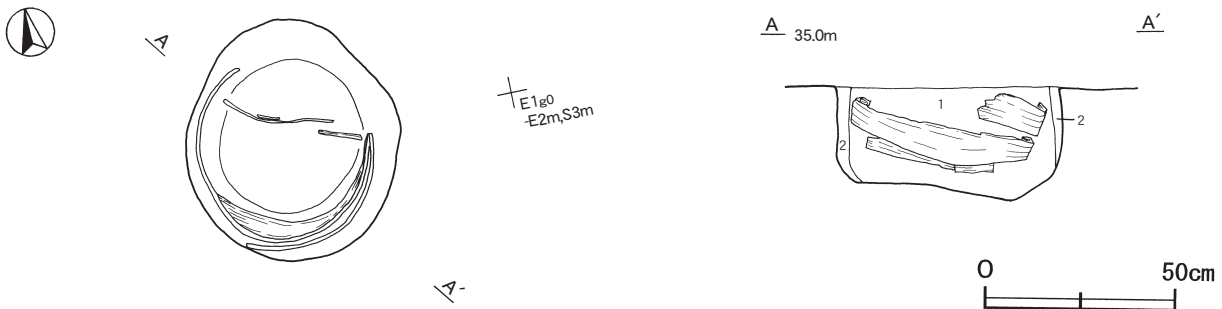
(3) 曲物埋設遺構

第1号曲物埋設遺構（SK127）（第159図）

位置 調査区南部のE1g0区で、標高35.0mほどの平坦部、第1号流路跡の西岸に位置している。

規模と形状 径0.59mほどの円形である。深さは27cmで、底面は平坦である。壁はほぼ直立している。円形に掘り込んだ後、曲物の側板を埋設している。

覆土 2層に分層される。第1層は、曲物内部の堆積層で、堆積物が均一であることから、廃絶後に自然堆積したと考えられる。第2層は、曲物埋設時の埋土と考えられる。



第159図 第1号曲物埋設遺構実測図

土層解説

1 黒色 細礫中量, 粘土粒子微量

2 黒褐色 細礫少量, 粘土粒子微量

遺物出土状況 曲物（側板）が1点出土している。北東方向から土圧及び水压を受けたと推測され、半分ほどつぶされた状態で出土している。

所見 曲物の側板のみの埋設が確認された。性格は不明であるが、水を溜めて使用していた可能性が考えられる。時期は、出土土器がなく特定することは困難であるが、遺構の配置から第1号流路跡と同時期に機能していたと考えられ、9世紀中葉まで機能し、その後埋没したと推測される。

(4) 土坑

第57号土坑（第160・161図）

位置 調査区南部のB2c5区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

規模と形状 長径0.78m, 短径0.68mの楕円形で、長径方向はN-53°-Wである。深さは46cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

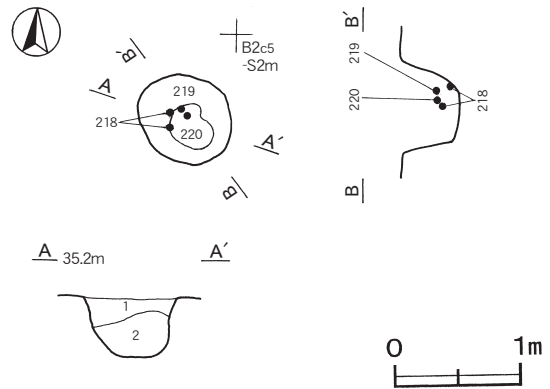
覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

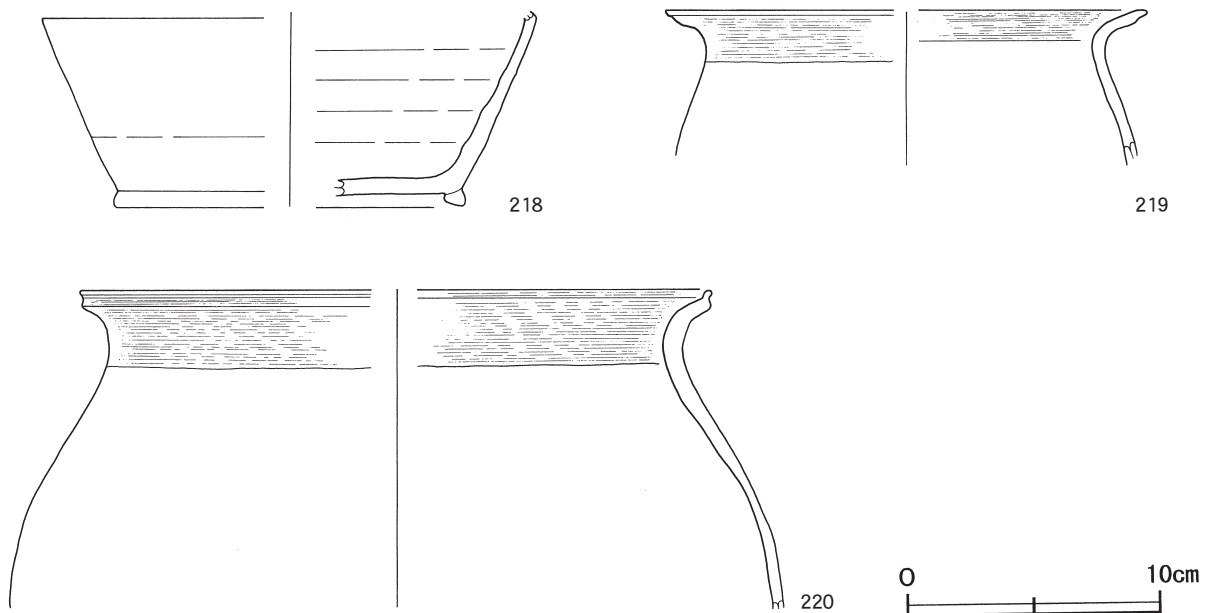
- 1 黒褐色 粘土ブロック・炭化粒子・白色粒子少量
- 2 灰黄褐色 粘土粒子中量

遺物出土状況 土師器片22点（甕），須恵器1点（平瓶），礫10点が出土している。また、流れ込んだ縄文土器片1点，土師器片7点も出土している。218～220は覆土下層から折り重なって出土している。埋没の過程で、一括して廃棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第160図 第57号土坑実測図



第161図 第57号土坑出土遺物実測図

第57号土坑出土遺物観察表（第161図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
218	須恵器	平瓶	-	(7.7)	[13.9]	長石	灰	普通	内外面ロクロナデ 底部ヘラ削り	覆土下層	15%
219	土師器	甕	[19.0]	(6.1)	-	雲母	明赤褐	普通	口縁部・体部内・外面横ナデ	覆土下層	10%
220	土師器	甕	[24.8]	(12.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	口縁部・体部内・外面横ナデ	覆土下層	10%

第84号土坑（第162図）

位置 調査区南部の A2j4区で、標高35.0m ほどの平坦部に位置している。

規模と形状 西部が調査区域外に延びているため、確認された規模は長径2.75m、短径0.88mで、平面形は不整楕円形と推定される。深さは34cmで、底面は皿状である。壁は緩やかに立ち上がっている。

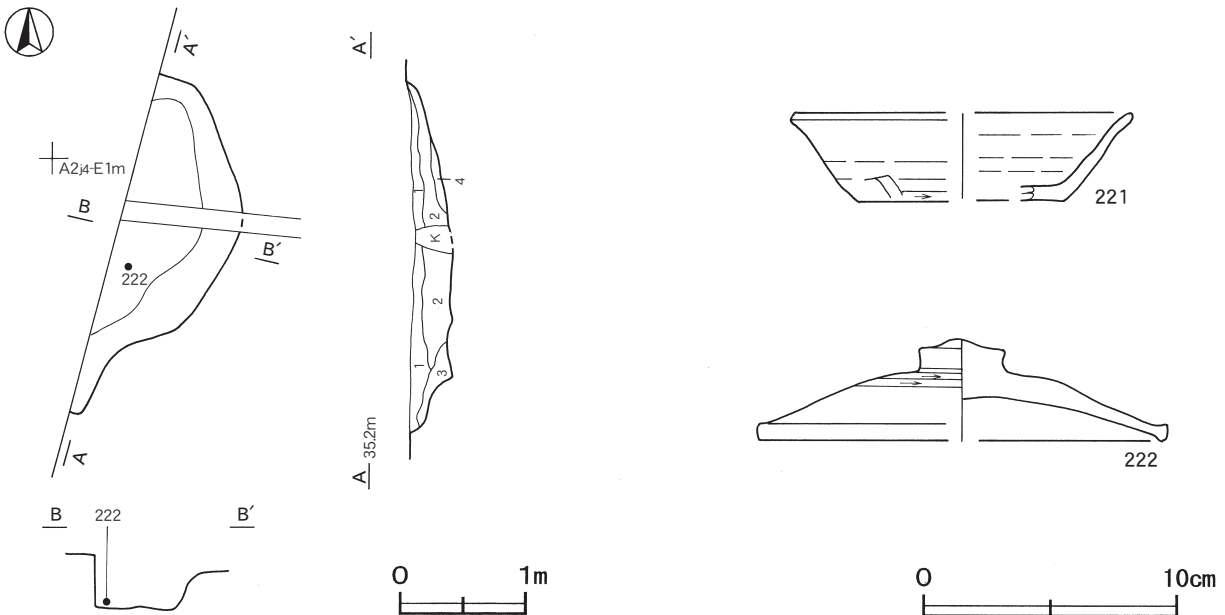
覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 黒色 炭化粒子・白色粒子少量、焼土ブロック・粘土ブロック・鉄分微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック中量、炭化物・焼土粒子・鉄分微量
- 3 にぶい黄褐色 粘土ブロック中量、炭化物微量
- 4 黒褐色 粘土ブロック微量

遺物出土状況 土師器片7点（甕）、須恵器片6点（坏5・蓋1）、礫1点が出土している。また、流れ込んだ縄文土器片2点、古墳時代の土師器片3点も出土している。221は覆土中、222は底面からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第162図 第84号土坑・出土遺物実測図

第84号土坑出土遺物観察表（第162図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
221	須恵器	坏	[13.2]	3.5	[8.9]	長石・雲母	灰	普通	内・外面ロクロナデ 底部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラナデ	覆土中	10%
222	須恵器	蓋	[15.8]	4.0	-	長石・石英	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	底面	40%

表6 奈良・平安時代土坑一覽表

番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係 (旧→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ (cm)					
57	B 2 c5	N-53-W	楕円形	0.78×0.68	46	外傾	平坦	自然	土師器, 須恵器, 礫	
84	A 2 j4	-	[不整楕円形]	(2.75)×(0.88)	34	緩斜	皿状	自然	土師器, 須恵器, 縄文土器, 礫	

(5) 溝跡

第1号溝跡 (第3・163~165図)

位置 調査区北部のB 2 g2~D 2 j3区で, 標高35.0mほどの平坦部に位置している。

重複関係 第9・23・26・27号住居跡, 第118~120号土坑, 第3・11・13号溝跡, 第2号円形周溝状遺構を掘り込んでいる。第13号溝・第1号不明遺構は同時期に存在していた時期があると考えられる。

規模と形状 B 2 g2区から南方向 (N-4°-W) に直線的に延び, D 2 i3区から南西方向 (N-50°-E) に屈曲し, D 2 j3区まで延びている。また, B 2 g2区から北方向に延びていると推定される。確認された長さは124.70mで, 上幅1.4~4.9m, 下幅0.1~1.0mで, 深さは34~56cmである。底面は南方向に傾斜しており, 断面形は緩やかなU字状及び弧状を呈している。

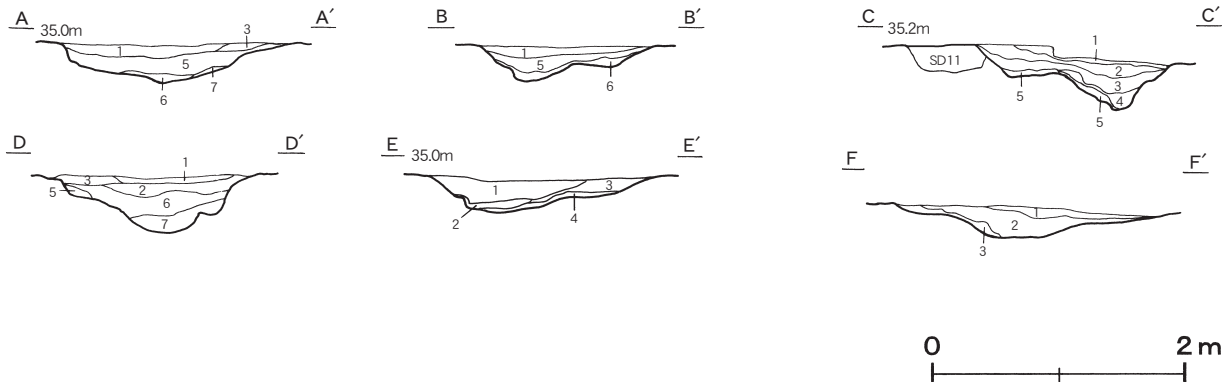
覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

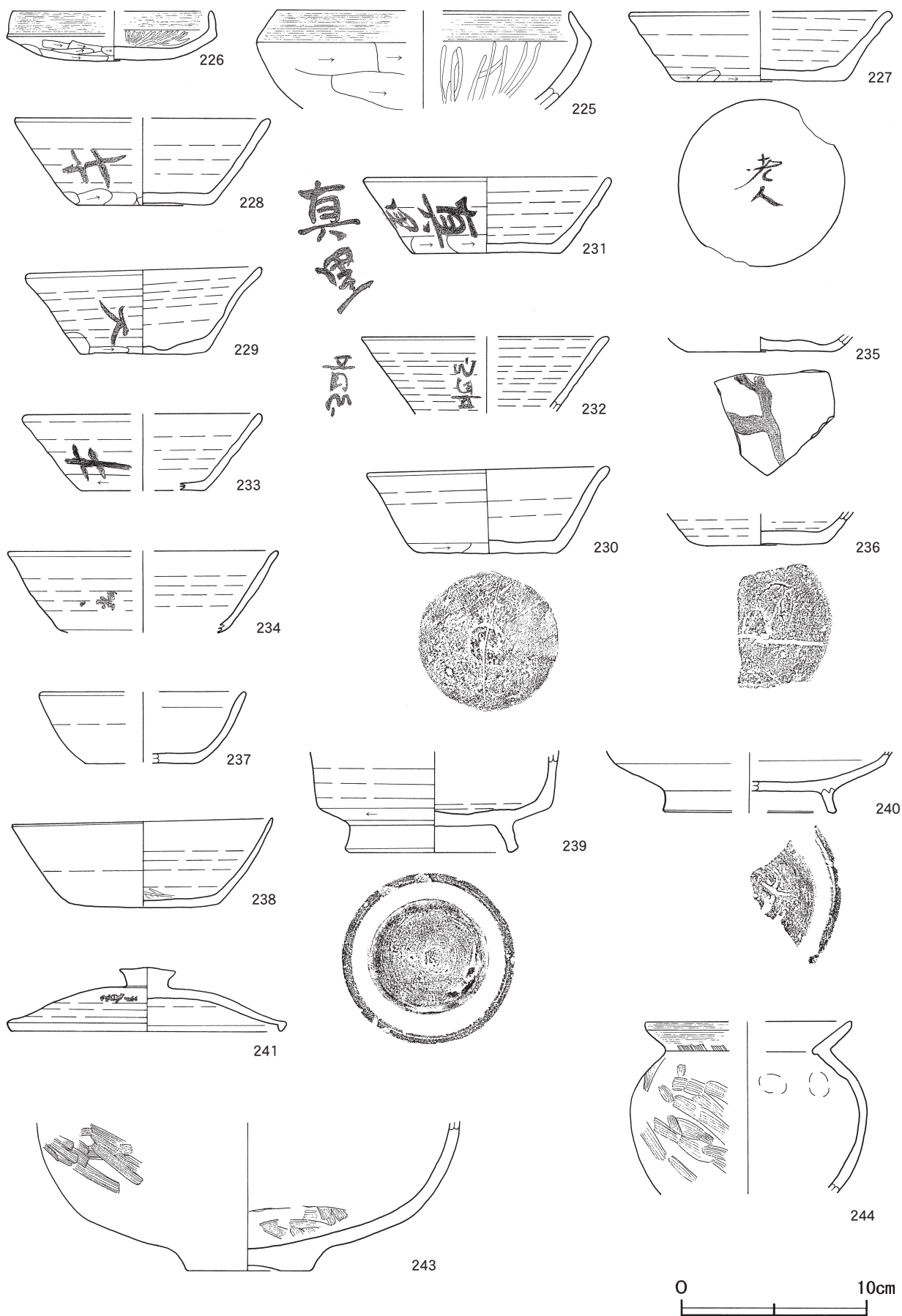
- | | |
|------------------------------|-----------------------------------|
| 1 褐灰色 白色粒子少量, 炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量 | 5 褐灰色 焼土粒子・炭化粒子中量, 粘土粒子少量, 白色粒子微量 |
| 2 黒褐色 粘土粒子中量, 白色粒子微量 | 6 褐黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量, 粘土粒子・砂粒少量 |
| 3 灰黄褐色 粘土粒子多量, 白色粒子微量 | 7 黒褐色 砂粒中量, 粘土ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 4 褐灰色 炭化粒子中量, 粘土粒子少量, 白色粒子微量 | |

遺物出土状況 縄文土器片18点, 土師器片2,921点 (坏572, 碗1, 埴33, 高坏15, 壺18, 甕2,282), 須恵器片354点 (坏304, 高台付坏4, 蓋14, 高盤1, 瓶類2, 甕28, 甌1), 手捏土器1点, 土製品10点 (管状土錘8, 羽口2), 石器11点 (剥片2, 磨石7, 敲石1, 砥石1), 陶器片3点, 金属製品1点 (煙管), 木器・木製品18点 (曲物3, 甌内板1, 横槌1, 編台1, 馬鋏1, 横櫛1, 杭4, 板材3, 棒状製品3) 粘土塊2点, 鉄滓5点, 碗状滓1点, 馬歯1点, 種子37点 (桃・胡桃) が散在した状態で全域から出土している。232・238は覆土中層から, 227~230・W19~W 21は底面からそれぞれ出土している。

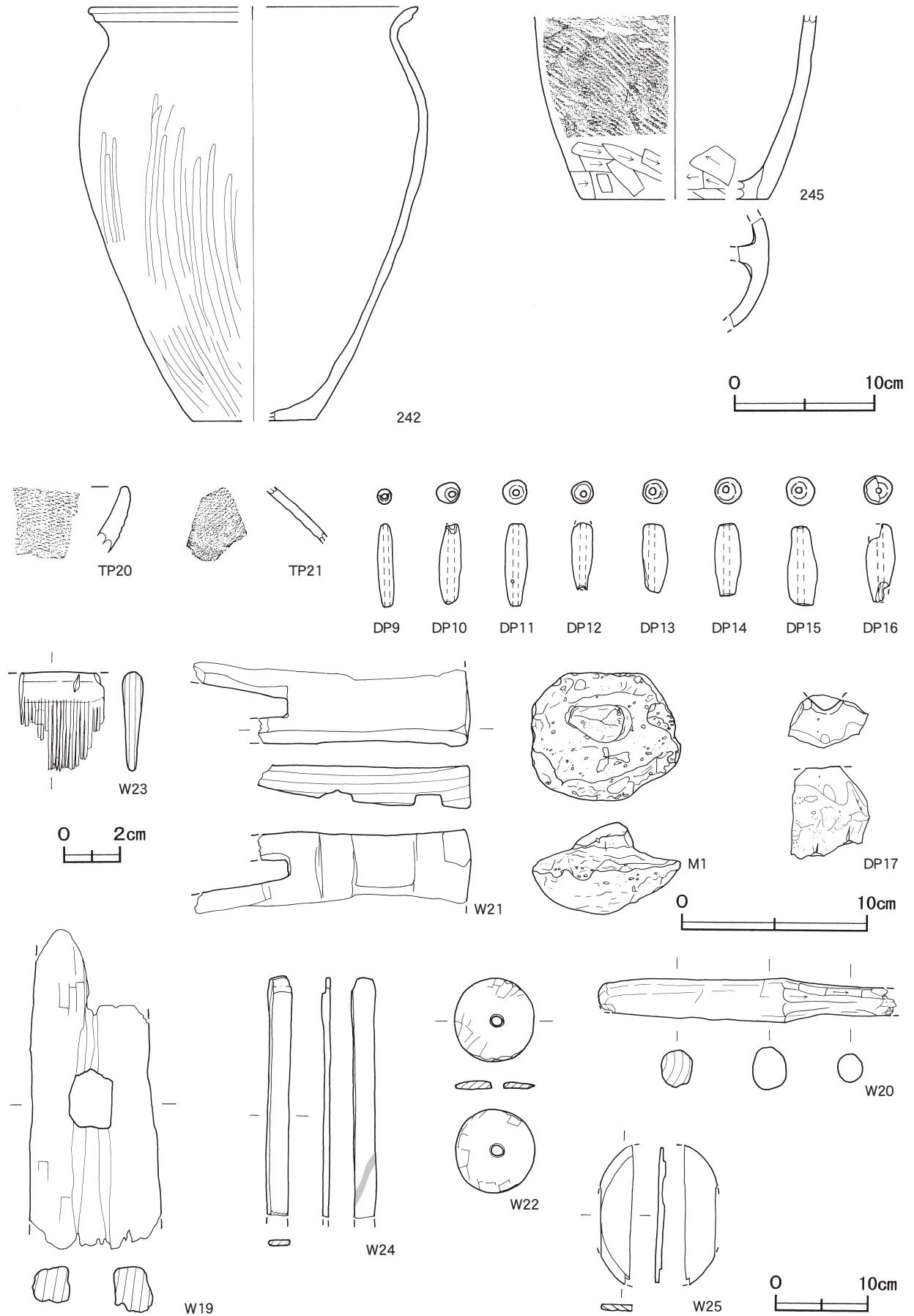
所見 時期は, 出土遺物から9世紀中葉まで機能していたと推測される。第1号流路跡に平行に延びており, 利水に伴う水路の可能性が考えられる。



第163図 第1号溝跡実測図



第164图 第1号沟迹出土遗物实测图(1)



第165图 第1号沟迹出土遗物实测图(2)

第1号溝跡出土遺物観察表(第164・165図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
225	土師器	坏	(16.0)	(5.3)	-	長石・石英・雲母	浅黄	普通	口縁部横ナデ 体部外面へら削り 内面放射状のへら磨き	覆土上層	10%
226	土師器	坏	(10.6)	2.6	[5.4]	長石・石英	褐灰	普通	口縁部横ナデ 体部外面へら削り 内面へら磨き	覆土中層	25%
227	須恵器	坏	[13.8]	3.8	9.0	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部回転 へら切り後多方向のへら削り	底面	60% PL29 墨書「老人」
228	須恵器	坏	[13.6]	4.7	6.8	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	体部下端手持ちへら削り 底部一方 向のへら削り	底面	50% 墨書「井」
229	須恵器	坏	12.6	4.7	6.9	長石・石英	褐灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部回転 へら切り後へら削り	底面	70% PL29 墨書「大」
230	須恵器	坏	12.8	4.7	7.4	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部へら 切り後へら削り	底面	75% PL28 油煙底部へ ら記号「-」
231	須恵器	坏	13.2	4.1	8.0	長石・石英	褐灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部一方 向のへら削り	覆土中	70% PL29 墨書「真里」
232	須恵器	坏	[13.3]	(4.1)	-	石英	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	覆土中層	20% 墨書「意」
233	須恵器	坏	[12.6]	4.2	[6.7]	長石・石英・雲母	灰白	普通	底部下端手持ちへら削り 底部へら 削り	覆土中	20% 漆書「井」
234	須恵器	坏	[14.4]	(4.4)	-	長石・石英・雲母・ 白色粒子	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	覆土下層	5% 墨書「口」
235	須恵器	坏	-	(0.9)	[8.0]	長石・石英・白色 粒子・礫	灰	普通	底部へら削り	底面	5% 墨書「口」
236	須恵器	坏	-	(1.8)	[7.4]	長石・石英・雲母	褐灰色	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転 へら切り後多方向のへら削り	覆土中層	20% 底部へら記号「-」
237	土師器	坏	[10.9]	3.8	[6.0]	長石・赤色粒子	にぶい 橙	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部へら ナデ	覆土中	40%
238	土師器	坏	13.9	4.8	8.0	長石・石英・赤色 粒子	にぶい 褐	普通	体部内・外面ロクロナデ 内面へら 磨き 底部多方向のへら削り	覆土中層	50%
239	須恵器	高台付坏	-	(5.5)	8.7	長石・石英・赤色 粒子	黄灰	普通	体部下端回転へら削り 底部回転へ ら削り後高台貼り付け	底面	70%
240	須恵器	高台付坏	-	(3.2)	[9.0]	長石・石英・雲母	黒褐・ 褐灰	普通	底部回転へら切り後高台貼り付け	覆土下層	20% 底部へら記号「+」
241	須恵器	蓋	14.5	3.5	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	内・外面ロクロナデ	覆土中層	70% PL29 墨書「意生」
242	土師器	甕	[23.8]	29.9	[9.0]	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	口縁部内・外面へらナデ 体部外面 へら磨き 底部木葉痕	覆土中層	40%
243	土師器	甕	-	(8.0)	6.8	長石・石英・赤色 粒子	にぶい 褐	普通	体部内・外面ハケ目調整 内面輪積 み痕 底部木葉痕	底面	20%
244	土師器	小型甕	[11.0]	(9.3)	-	長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ 口縁部・体部外面 ハケ目調整 内面指頭圧痕	覆土下層	30%
245	須恵器	甌	-	13.2	[13.5]	長石・石英・赤色 粒子	黄灰	普通	体部外面上部平行叩き 下部へら削り 内面へら削り 底部へら切り	覆土中層	10%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP20	土師器	壺	石英・白色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部外面網目状熱糸文施文 内面赤彩	覆土中	
TP21	土師器	壺	石英・雲母	黄褐	普通	網目状熱糸文施文 外面赤彩	覆土中	

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	材質	手法の特徴	出土位置	備考
DP 9	管状土鍾	4.40	0.80	0.30	(2.30)	粘土	ナデ 一部欠損	覆土中	
DP10	管状土鍾	(4.20)	1.20	0.32~ 0.37	(3.90)	粘土	ナデ 一部欠損	覆土中	
DP11	管状土鍾	4.40	1.30	0.32	5.40	粘土	ナデ	覆土中	
DP12	管状土鍾	(3.60)	1.20	0.30	(3.90)	粘土	ナデ 一部欠損	覆土中	
DP13	管状土鍾	3.60	1.40	0.30~ 0.32	7.00	粘土	ナデ	覆土中	
DP14	管状土鍾	3.90	1.50	0.32~ 0.35	8.00	粘土	ナデ	覆土中	
DP15	管状土鍾	4.20	1.60	0.31~ 0.38	9.70	粘土	ナデ	覆土中	
DP16	管状土鍾	4.20	1.65	0.31~ 0.32	(8.30)	粘土	ナデ 一部欠損	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	手法の特徴	出土位置	備考
DP17	羽口	(5.0)	(4.3)	(2.7)	(41.0)	粘土	ナデ 被熱痕 胎土に長石・石英を含む	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 1	椀状滓	8.0	6.8	6.0	223	鉄	着磁 表面褐色 一部黒色 地黒褐色	覆土中	

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W19	農具	編み台カ	(34.4)	14.3	5.3	(1000)	クリ	榎目 中央部に方形孔穿孔	底面	★ PL52
W20	農具	横槌	(32.3)	4.9	3.7	(332.0)	ヒノキ	芯無削り出し 搦き部先端に磨減痕 杵としても使用カ	底面	★ PL52

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W21	農具	馬鍬	(15.0)	(4.0)	2.3	(42.2)	ウルシ属	割材 方形孔穿孔 上下面2か所 側面1か所残存	覆土下層	★
W23	服装具	横櫛	3.6	(3.1)	0.8	(4.58)	イスノキ	板目 櫛歯残存23本 1cm間に櫛 歯8本	覆土中	★ PL52

番号	種別	器種	径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W22	食器具	甑中板	9.1	1.3	40.8	アスナロ属	追柁目 両面削り調整痕 中央部 に円孔穿孔1か所	覆土上層	★ PL52
W24	容器	曲物底板・蓋板類	-	(1.0)	(34.9)	ヒノキ	板目	覆土中層	
W25	容器	曲物底板・蓋板類	(15.1)	(0.7)	(22.5)	ヒノキ	追柁目 樹皮綴じ	覆土上層	

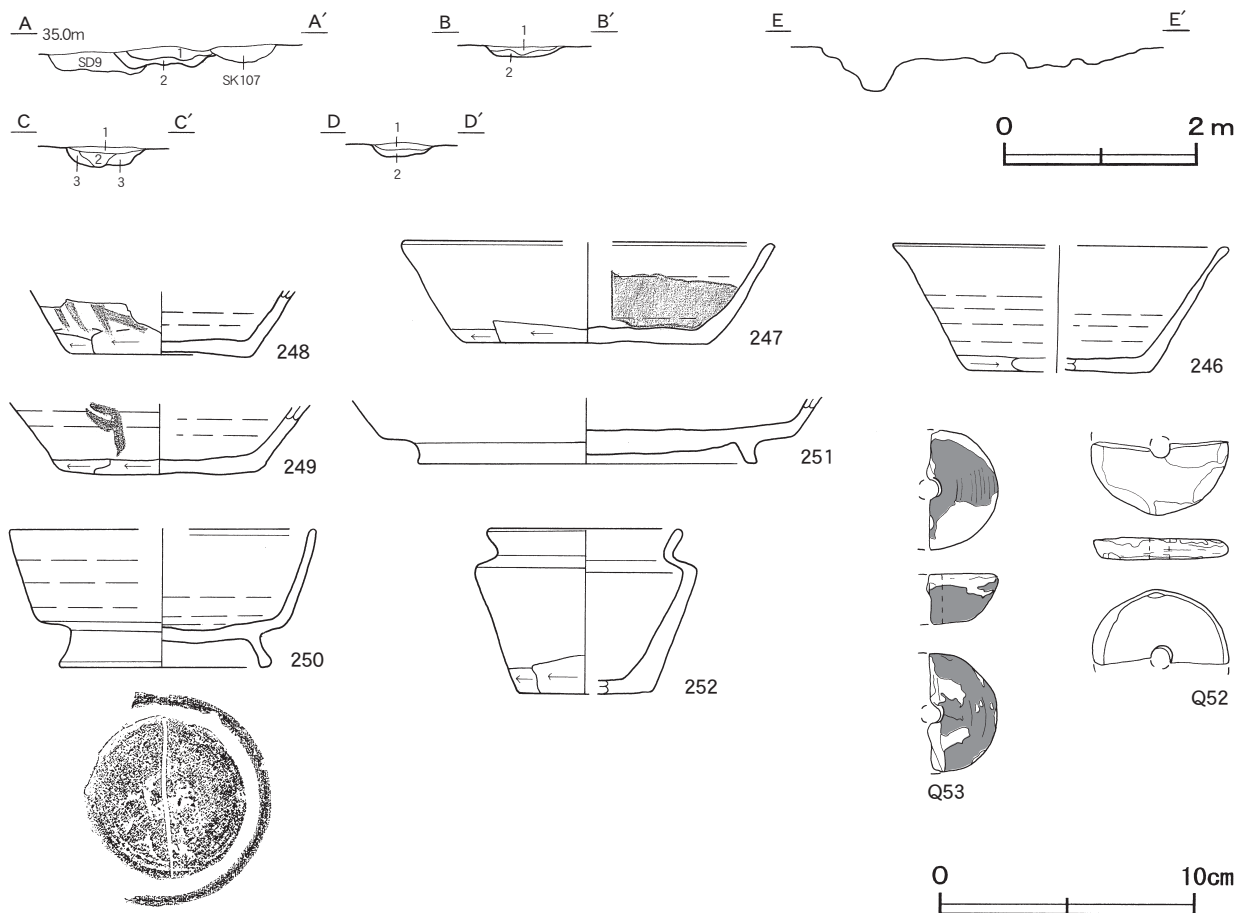
第2号溝跡 (第3・166図)

位置 調査区北部のA2e6～D2d9区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

重複関係 第10・11・17・22号住居跡，第9・11号溝跡を掘り込み，第18・100・107号土坑に掘り込まれている。第1号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。

規模と形状 A2e6区から南方向(N-5°-W)に直線的に伸び、C2e8区から南西方向(N-30°-E)、C2h8区から南方向(N-5°-W)にクランク状に伸びD2d9区まで続いている。確認された長さは115.52mで、上幅0.4～1.6m、下幅0.2～1.0mで、深さは12～22cmである。底面は土坑状の大きなくぼみが連続しており、断面形はU字状及び弧状を呈している。

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積と考えられる。



第166図 第2号溝跡・出土遺物実測図

土層解説

- 1 黒 褐 色 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
 2 黒 褐 色 炭化粒子・粘土粒子少量
 3 黒 褐 色 粘土粒子少量, 焼土ブロック・炭化物微量

遺物出土状況 縄文土器片32点(深鉢), 土師器片790点(坏187, 椀1, 埴1, 高坏1, 甕600), 須恵器片69点(坏53, 高台付坏4, 蓋3, 長頸瓶1, 短頸壺1, 甕7), 石器35(剥片4, 石斧2, 磨石17, 敲石12), 石製品2点(紡錘車), ガラス玉1点, 種子3点(桃), 礫23点が全域にかけて出土している。247・248・252は覆土下層, 250・251・Q53は覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 第10号住居跡との重複関係から, 5世紀末葉以降に掘削されたと考えられ, 出土遺物から9世紀中葉まで機能していたと推測される。形状が土坑を連続させたような掘り方であることから, 道路の側溝であった可能性もあるが詳細な性格は不明である。

第2号溝跡出土遺物観察表(第166図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
246	須恵器	坏	[12.8]	5.0	[7.0]	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土中	30%
247	須恵器	坏	[14.4]	5.0	9.5	長石・石英	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ切り後ナデ	覆土下層	70% 内面墨付着
248	須恵器	坏	-	(2.9)	7.2	長石	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	覆土下層	50% 墨書「□」
249	須恵器	坏	-	(2.8)	[7.6]	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ削り	覆土中	15% 墨書「□」
250	須恵器	高台付坏	[12.0]	5.5	8.1	長石・石英	灰	普通	体部内・外面クロコナデヘラ切り後高台貼り付け	覆土中層	70% 墨書かヘラ記号有「-」
251	須恵器	盤	-	(2.6)	[13.4]	長石・石英・赤色粒子	灰	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け	覆土中層	50%
252	須恵器	短頸壺	7.4	6.5	5.3	長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラナデ	覆土下層	98% PL28

番号	器種	径	最大厚	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q52	紡錘車	5.3	0.9	[0.8]	(15.7)	頁岩	片面穿孔	覆土中	
Q53	紡錘車	[4.8]	2.0	[0.8]	(23.7)	砂岩	片面穿孔 表面漆塗り	覆土中層	PL38

第10号溝跡(第3・167・168図)

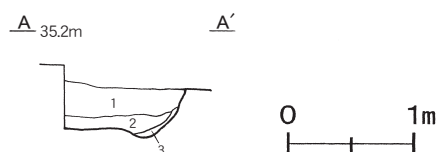
位置 調査区北部のA2d6~A2e6区で, 標高35.0mほどの平坦部に位置している。

規模と形状 A2d6区から南西方向(N-25°-E)に直線的にA2e6区まで延び, そのまま調査区域外に延びている。また, A2d6区からさらに北東方向にも延びていると推測される。大半が調査区域外にあるため, 確認された長さは4.10mで, 上幅0.3~1.1m, 下幅0.4~0.7mで, 深さ36~42cmである。底面は緩やかに南西方向に傾斜しており, 断面形はU字状を呈していると推定される。

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土粒子中量
 2 黒 褐 色 粘土粒子中量, 砂粒少量, 炭化粒子微量
 3 黒 褐 色 焼土粒子・砂粒微量



第167図 第10号溝跡実測図

遺物出土状況 土師器片236点(坏114, 高台付坏1, 埴2, 高坏・器台類16, 甕103), 須恵器片26点(坏20, 甕6)が散在した状態で出土している。253は底面から出土している。

所見 時期は, 出土土器から9世紀中葉まで機能していたと推測される。確認された範囲が, 一部分のため, 詳細な性格は不明である。

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉まで機能していたと推測される。第1号流路跡に平行に延びており、利水に伴う水路の可能性が考えられる。

第13号溝跡出土遺物観察表（第169図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
257	須恵器	坏	12.9	4.0	9.0	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	覆土下層	95% PL29
258	須恵器	坏	13.0	3.7	8.9	長石・石英	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	覆土下層	95%

第14号溝跡（第3・170図）

位置 調査区南部B2 a3～B2 d3区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

重複関係 第1号円形周溝状遺構を掘り込み、第92号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 B2 a3区から、南方向(N-2°-E)に直線的にB2 d3区まで延びている。大半が調査区域外のため、確認された長さは12.00mで、上幅0.1～0.8m、下幅0.1～0.4mで、深さは26～30cmである。底面は南方向に緩やかに傾斜しており、断面形はU字状を呈していると推定される。

覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

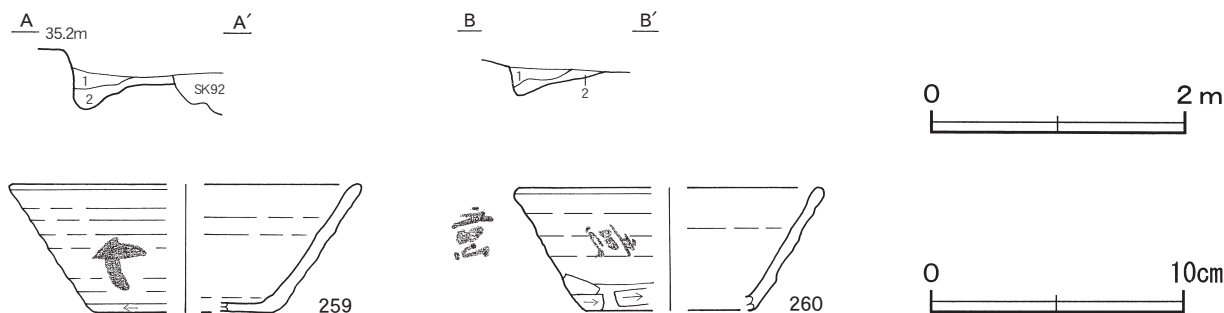
土層解説

1 黒褐色 粘土粒子・白色粒子少量

2 黒褐色 粘土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片9点、土師器片28点(坏6、高坏・器台類1、壺2、甕19)、須恵器15点(坏10、高台付坏2、蓋2、甕1)、陶器片1点、石器1点(磨石)が散在した状態で出土している。259は覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉まで機能していたと推測される。確認された範囲が、一部分のため、詳細な性格は不明である。



第170図 第14号溝跡・出土遺物実測図

第14号溝跡出土遺物観察表（第170図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
259	須恵器	坏	[13.7]	5.1	[7.0]	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部内・外面口クロナデ 底部ヘラ削り	覆土下層	40% 墨書「十」
260	須恵器	坏	[12.0]	4.8	[6.6]	長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り	覆土中	10% 墨書「意」

表7 奈良・平安時代溝跡一覧表

遺構 番号	位置	方向	形状	規模				断面	覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係(旧→新)
				長さ (m)	上幅 (m)	下幅 (m)	深さ (cm)				
1	B 2 g2~D 2 j3	N-4°-W ~ N-50°-E	直線	(124.70)	1.4~4.9	0.1~1.0	34~56	U字状 弧状	自然	縄文土器, 土師器, 須恵器, 手捏土器, 石器, 木器・木製品	SI 9・23・26・27, SK 118~120, SD 3・11・13, 第2 号円形周溝状遺構→ 本跡・SX 1
2	A 2 e6~D 2 d9	N-5°-W N-30°-W	直線 クランク	(115.52)	0.4~1.6	0.2~1.0	12~22	U字状 弧状	自然	縄文土器, 土師器, 須恵器, 石器, 石 製品	SI 10・11・17・22, SD 9・11→本跡→18・ 100・107, SB 1と重 複
10	A 2 d6~A 2 e6	N-25°-E	直線	(4.10)	(0.3)~(1.1)	(0.4)~(0.7)	36~42	U字状	自然	土師器, 須恵器	
13	C 2 g1~D 2 d2	N-18°-W	直線	(52.00)	0.8~1.7	0.4~0.6	4~14	弧状	自然	土師器, 須恵器	本跡→SK 126, SD 1, SX 1
14	B 2 a3~B 2 d3	N-2°-E	直線	(12.00)	(0.1)~(0.8)	(0.1)~(0.4)	(26~30)	U字状	自然	土師器, 須恵器	第1号円形周溝状遺 構→本跡→SK 92

(6) 不明遺構

第1号不明遺構(第171・172図)

位置 調査区南部のD 2 e3区, 標高35.0mほどの平坦部に位置している。

重複関係 第13号溝跡を掘り込み, 第1号溝跡とは出土土器から同時期に機能していたと考えられる。

規模と形状 長径8.2m, 短径4.2mの不整楕円形で, 長径方向はN-8°-Wである。深さは40cmで, 底面は凹凸である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積と考えられる。

土層解説

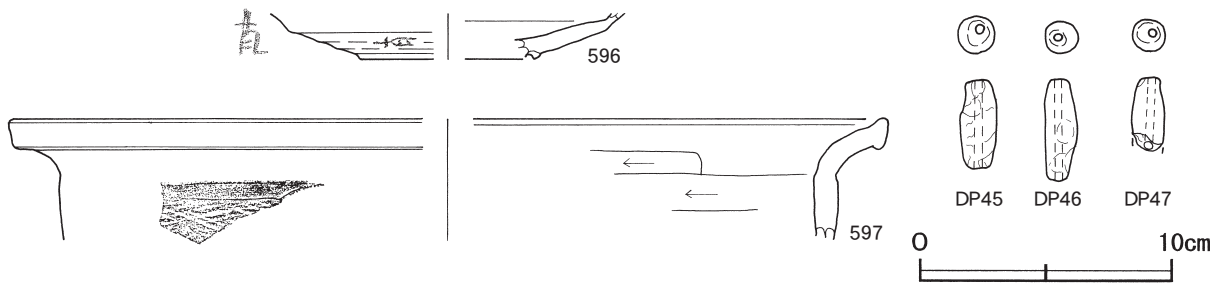
- 1 黒褐色 白色粒子・鉄分微量
- 2 黒褐色 粘土粒子少量, 白色粒子・鉄分微量
- 3 におい黄褐色 粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片194点(坏57, 高坏5, 甕132), 須恵器35点(坏27, 高台付坏2, 盤1, 甕5), 手捏土器1点, 土製品5点(管状土錘3, 羽口2)炭化材3点, 礫5点, 種子5点(桃)が全域から出土している。

所見 時期は, 出土土器から9世紀代まで機能していたと考えられる。第1号溝と同時期に存在し, 本跡が先に埋没していったと推測される。水利施設の可能性も考えられるが, 性格は不明である。



第171図 第1号不明遺構実測図



第172図 第1号不明遺構出土遺物実測図

第1号不明遺構出土遺物観察表（第172図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
596	須恵器	盤	-	(1.8)	[6.9]	長石・石英	褐灰	普通	ロクロナデ 高台貼付	覆土中	5% 墨書「真」
597	須恵器	甕	[34.7]	(4.7)	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部外面平行叩き 内面ヘラ削り	覆土中	5%

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	材質	手法の特徴	出土位置	備考
DP45	管状土錘	3.50	1.48	0.34	7.05	粘土	ナデ	覆土中	
DP46	管状土錘	4.00	1.31	0.32	6.30	粘土	ナデ	覆土中	
DP47	管状土錘	(2.87)	1.27	0.29	(4.42)	粘土	ナデ 一部欠損	覆土中	

5 その他の遺構と遺物

時期の明確でない竪穴住居跡3軒，掘立柱建物跡1棟，流路跡1条，杭列1条，円形周溝状遺構2基，土坑132基が確認された。以下，遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第18号住居跡（第173図）

位置 調査区北部のB2c8区で，標高35.0mの平坦部に位置している。

確認状況 ほとんど削平されており，壁は確認できなかった。柱穴，壁溝，間仕切り溝及び床を認めることができたため住居と判断した。

重複関係 第102～104号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 確認された範囲は，長軸4.34m，短軸4.28mで方形と推定され，主軸方向はN-22°-Wである。

床 ほぼ平坦である。壁溝が北東部から南壁にかけて周回している。間仕切り溝が東壁に1条確認された。

壁溝土層解説

1 黒色 粘土ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子・白色粒子微量 2 におい黄褐色 粘土粒子少量，炭化粒子微量

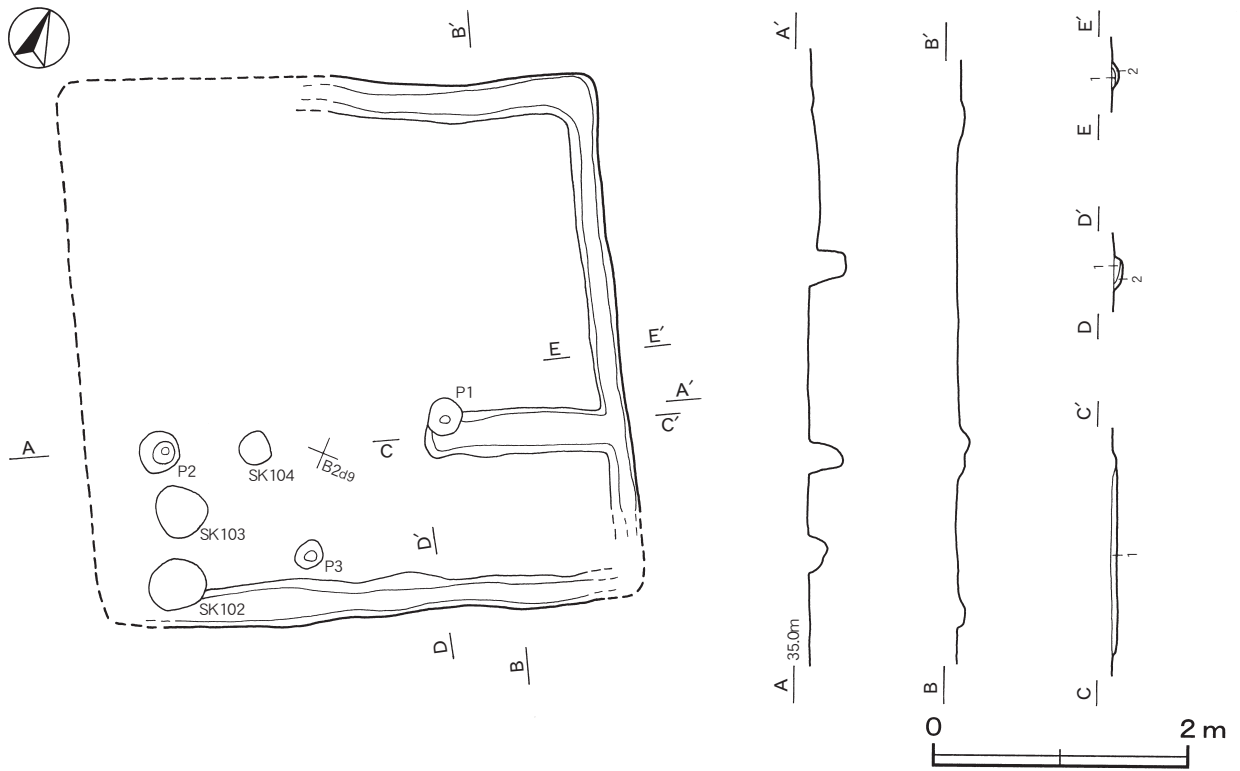
間仕切り溝土層解説

1 黒褐色 粘土粒子少量

ピット 3か所。P1・P2は深さ30cm・16cmで，規模と配置から主柱穴と考えられる。P3は深さ16cmで，南壁寄りのほぼ中央部に位置し，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

遺物出土状況 縄文土器片1点，土師器片5点（甕）が出土している。出土土器は細片のみで，図化できるものはなかった。

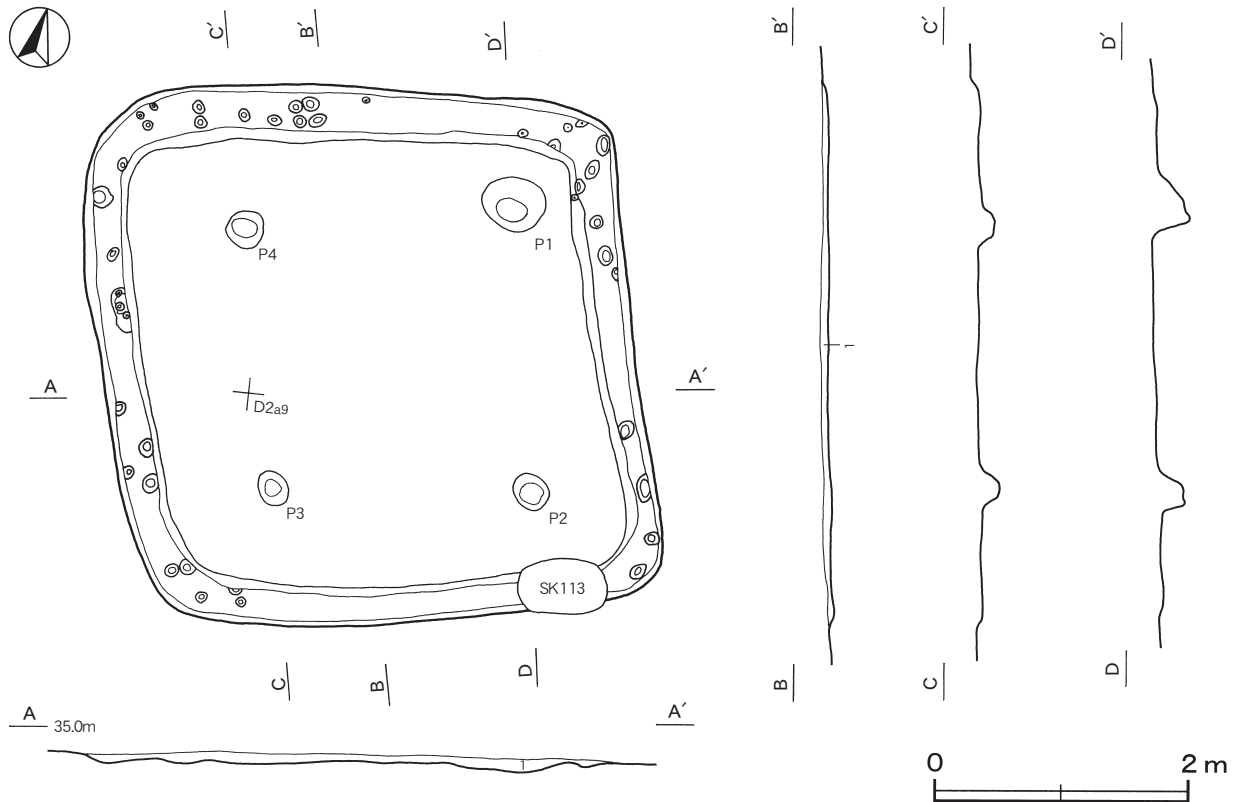
所見 時期は，出土土器が細片のため特定することができず不明である。



第173図 第18号住居跡実測図

第28号住居跡 (第174図)

位置 調査区南部のC2j9区で、標高34.8mの平坦部に位置している。



第174図 第28号住居跡実測図

重複関係 第113号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.00m, 短軸5.50mの方形で, 主軸方向はN-12°-Wである。壁高は5~8cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。壁溝が全周している。

ピット 47か所。P1~P4は深さ12~24cmで, 規模と配置から支柱穴と考えられる。P5~P47は, 壁溝内に周回する円形及び楕円形の小ピット群で, 壁柱穴と考えられる。

覆土 単一層である。層厚が薄く, 堆積状況は不明である。

土層解説

1 暗褐色 炭化粒子・粘土粒子少量

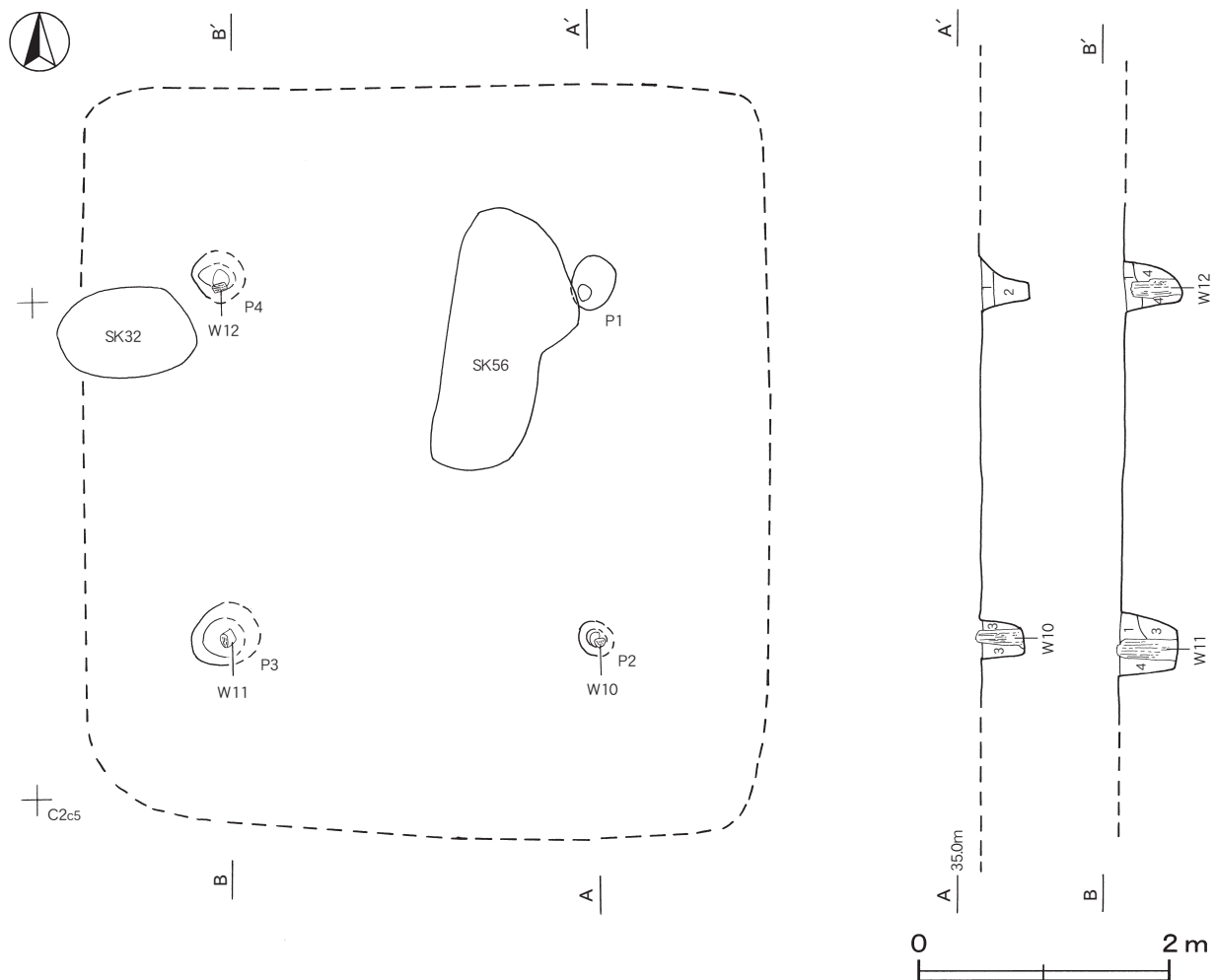
遺物出土状況 土師器片1点(甕)が出土しているが, 細片で図化できなかった。

所見 時期は, 出土土器が1点で細片のため特定することができず不明である。

第29号住居跡 (第175・176図)

位置 調査区北部のC2b5区で, 標高34.8mの平坦部に位置している。

重複関係 第32・56号土坑に掘り込まれている。



第175図 第29号住居跡実測図

規模と形状 削平されているため、柱穴のみが確認された。推定される範囲は、南北軸6.00m、東北軸5.50mほどで、平面形は方形または長方形と想定される。主軸方向はN-0°である。

床 ほぼ平坦である。

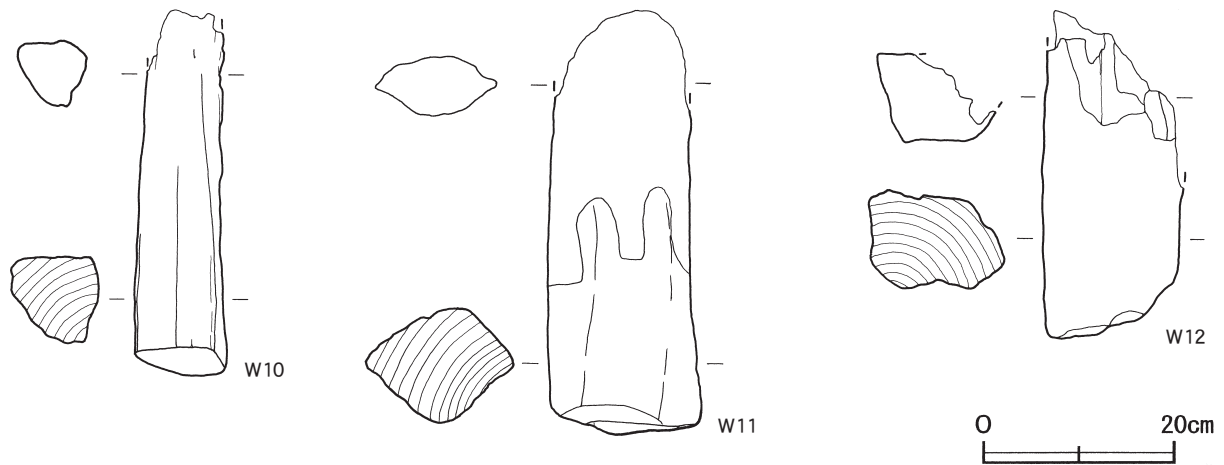
ピット 4か所。P1～P4は深さ32～45cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P2～P4には、柱材が残存しており、P2は一辺9.1cm、P3は一辺12.0cm、P4は一辺9.7cmほどの角材で、最大長34.8～44.5cmである。それぞれ、みかん割り後、四角を面取りしたと推測され、下端が鈍角に加工されている。

ピット土層解説

- 1 黒色 粘土ブロック・炭化粒子中量、焼土ブロック少量、白色粒子微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック多量、炭化粒子少量
- 3 黒褐色 粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量
- 4 褐灰色 粘土ブロック・炭化粒子中量

遺物出土状況 土師器片5点（甕）が出土している。出土土器は細片のみで、図化できるものはなかった。

所見 時期は、柱穴のみが確認されただけであり、出土土器も細片のため特定することができず不明である。



第176図 第29号住居跡出土遺物実測図

第29号住居跡出土遺物観察表（第176図）

番号	種別	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W10	建築部材	柱材	(38.6)	9.8	9.1	(1880)	コナラ属クスギ節	みかん割 先端部工具痕	P 2	
W11	建築部材	柱材	(44.5)	16.0	12.0	(3650)	コナラ属クスギ節	みかん割 先端部工具痕	P 3	
W12	建築部材	柱材	(34.8)	(14.8)	(9.7)	(2790)	コナラ属クスギ節	みかん割 先端部工具痕	P 4	

表8 時期不明竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考 新旧関係 (旧→新)
								主柱穴	出入口	ピット	炬	竈				
18	B 2 c8	N-22°-W	[方形]	[4.34]×4.28	-	平坦	一部	2	1	-	-	-	-	縄文土器、土師器	不明	間仕切り有 本跡→SK 102・103・104
28	C 2 j9	N-12°-W	方形	4.30×4.26	5～8	平坦	全周	4	-	43	-	-	不明	土師器	不明	本跡→SK 113
29	C 2 b5	N-0°	[方形・長方形]	[6.00]×[5.50]	不明	平坦	不明	4	-	-	-	-	土師器	不明	旧SB 2 本跡→ SK 32・56 柱材有 3本	

(2) 掘立柱建物跡

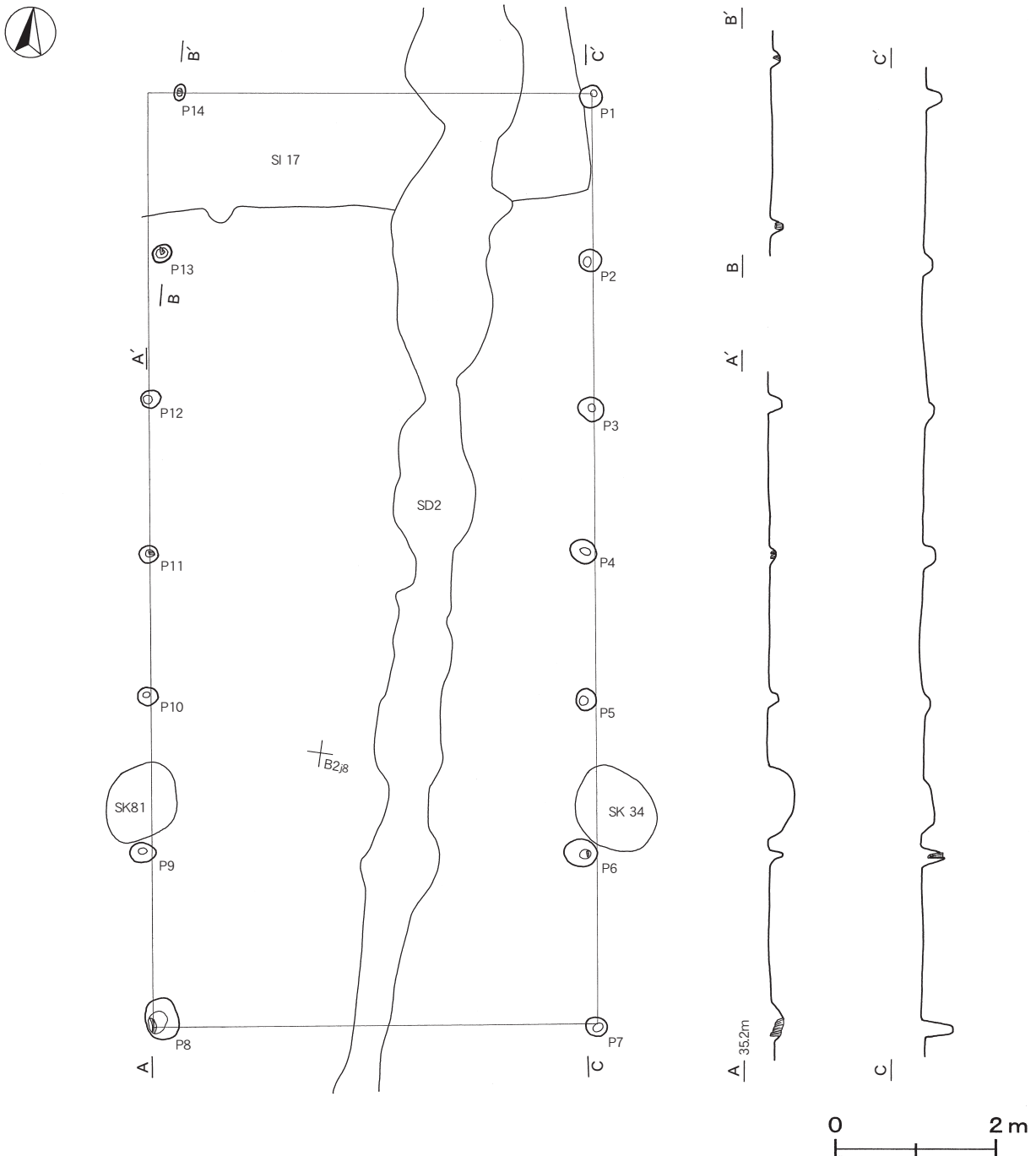
第1号掘立柱建物跡 (第177図)

位置 調査区北部の B2h7区で、標高35.0m ほどの平坦部に位置している。

重複関係 第17号住居跡を掘り込んでいる。第7・34・81・88・106号土坑、第2号溝と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 桁行6間、梁行1間の側柱建物跡で、桁行方向はN-8°-Wの南北棟である。桁行11.60m、梁行5.56mで、桁行の柱間寸法は、1.8mと2.2mを基調としている。面積は64.49㎡である。

柱穴 14か所。平面形は円形及び楕円形で、深さは8~36cmである。P6・8・11・13・14には、柱材が残存していた。



第177図 第1号掘立柱建物跡実測図

所見 時期は、重複関係から古墳時代前期前葉以降であるが、出土土器がなく特定することができず不明である。

(3) 流路跡

第2号流路跡 (S D 6) (第178~180図)

位置 調査区北部のA2e0区~B3b3区で、標高35.0mほどの平坦部に位置している。

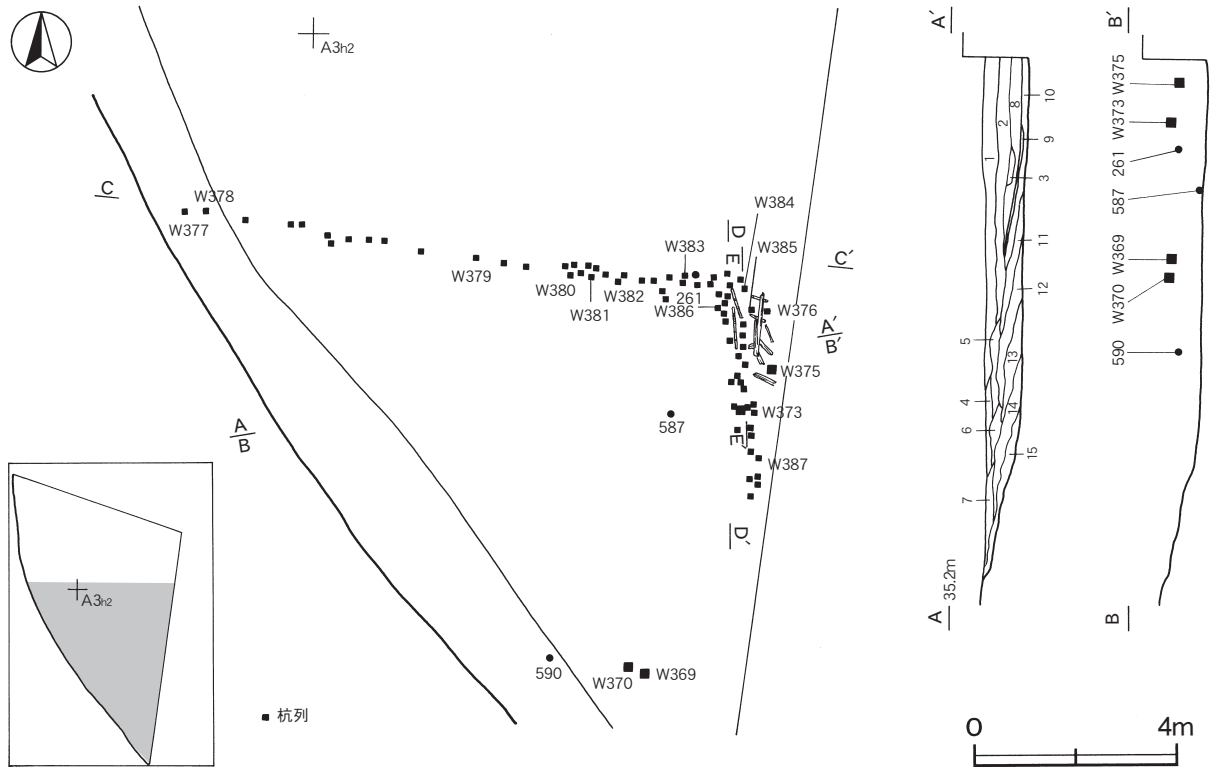
規模と形状 A2e0区から南東方向(N-30°-W)に湾曲しながらB3b3区まで延びており、さらに調査区域外に延びている。また、A2e0区から北西方向に延びていくと考えられる。確認された長さは34.0mで、規模は最大で上幅17.26m、下幅15.6mで、深さは94.0cmである。底面は南東方向に緩やかに傾斜しており、断面形は緩やかなU字状を呈している。

覆土 15層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

1 黒 褐 色	粘土ブロック・砂粒微量	9 黒 褐 色	植物遺体中量, 粘土粒子・砂粒微量
2 黒 褐 色	砂粒少量, 粘土ブロック微量	10 黒 褐 色	粘土粒子中量, 砂粒・植物遺体少量
3 黒 褐 色	砂粒中量, 粘土粒子・細礫微量	11 黒 色	粘土粒子・砂粒・植物遺体少量
4 黒 色	砂粒中量, 細礫少量, 粘土粒子微量	12 黒 色	砂粒中量, 粘土粒子・細礫少量
5 黒 色	粘土粒子・細礫・砂粒少量	13 黒 色	砂粒中量, 粘土粒子少量, 細礫・植物遺体微量
6 黒 色	砂粒中量, 粘土粒子・細礫微量	14 黒 褐 色	粘土粒子中量, 細礫・砂粒少量
7 黒 褐 色	粘土粒子・砂粒少量, 細礫微量	15 褐 灰 色	細礫・砂粒中量, 粘土粒子少量
8 黒 色	植物遺体少量, 粘土粒子・砂粒微量		

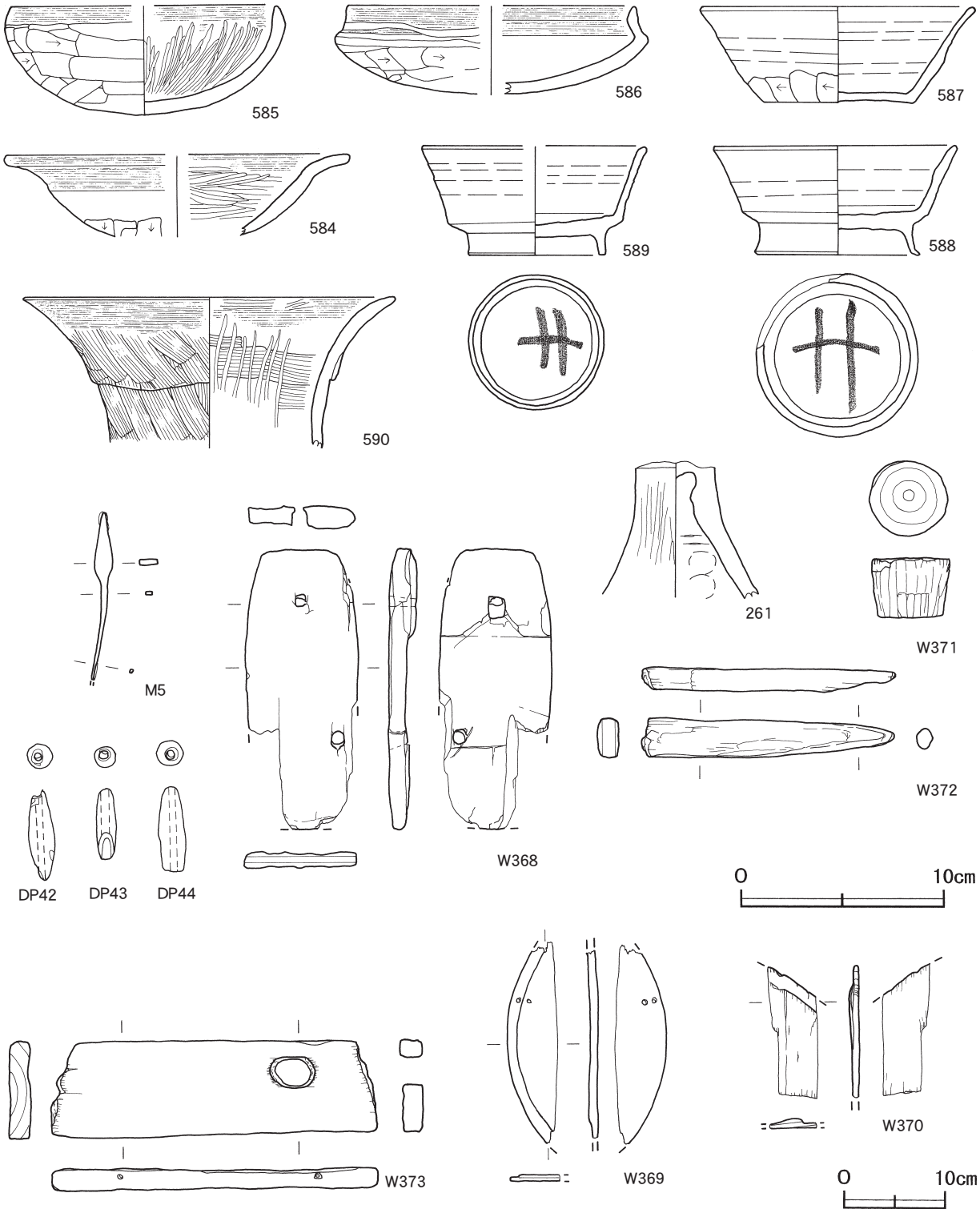
遺物出土状況 縄文土器片29点, 土師器片1,485点(坏352, 椀6, 高台付坏1, 小皿5, 罎2, 器台・高坏類41, 鉢7, 壺2, 甕1,068, 甑1), 須恵器片127点(坏95, 高台付坏12, 蓋4, 壺1, 瓶1, 甕13, 甑1), 土師質土器9点(内耳鍋7, 小皿2), 陶器片15点, 磁器片12点, 土製品3点(管状土錘), 石器67点(剥片65, 石鏃2), 鉄製品2点(鏃, 釘), 古銭1点, 木器・木製品8点(下駄, 部材4, 曲物底板・蓋板類2, 栓), 瓦



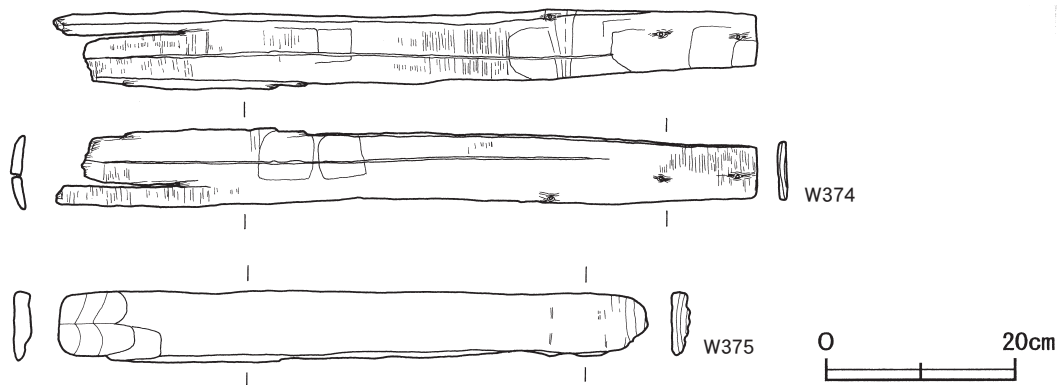
第178図 第2号流路跡・第1号杭列実測図

2点, 種子13点(桃), 鉄滓3点, 炭化材5点, 礫51点が覆土上層から下層にかけて, 全域に散在した状態で出土している。590・261・W369・W370は覆土中層から, 587は底面からそれぞれ出土している。

所見 出土土器は, 各時代の遺物が混在した状態で出土していることから, 層位で時期を特定することは困難である。第1号杭列で使用されている杭が孟宗竹を使用していることから, 近世以降まで機能していたと推測される。



第179図 第2号流路跡出土遺物実測図(1)



第180図 第2号流路跡出土遺物実測図(2)

第2号流路跡出土遺物一覧表(第179・180図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
585	土師器	坏	[13.0]	5.4	-	長石・石英	灰白	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	覆土上層	20%
586	土師器	坏	[14.2]	4.2	-	長石・石英	灰白	普通	体部外面ヘラ削り	覆土中	20%
587	土師器	坏	13.2	4.7	7.3	長石・石英・雲母・小礫	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方のヘラ削り	底面	70% PL29
588	須恵器	高台付坏	11.8	5.4	7.9	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り 高台貼付後ナデ	覆土中層	70% PL29 墨書「井」
589	須恵器	高台付坏	[10.9]	5.4	6.7	長石・石英・雲母	褐灰	普通	底部回転ヘラ切り 高台貼付後ナデ	覆土中	60% 墨書「井」
584	土師器	高坏	[16.6]	(4.0)	-	長石・石英・赤色 粒子	灰白	普通	体部外面下端ヘラ削り 内面ヘラ磨き	覆土中	5%
261	土師器	高坏	-	(6.7)	-	長石・礫	にぶい 橙	普通	脚部外面ヘラ磨き 内面ナデ 指頭 圧痕	覆土中層	5%
590	土師器	壺	18.2	(7.4)	-	長石・石英・赤色 粒子	浅黄橙	普通	口縁部外面ハケ目調整後一部横ナ デ 内面ハケ目調整後ヘラ磨き	覆土中層	30%

番号	器種	長さ	最大径	孔径	重量	材質	手法の特徴	出土位置	備考
DP42	管状土錘	4.50	1.20	0.30	(5.40)	粘土	ナデ 一部欠損	覆土中	
DP43	管状土錘	3.10	1.00	0.40	(3.60)	粘土	ナデ 一部欠損	覆土中	
DP44	管状土錘	(4.30)	1.30	0.40	(6.60)	粘土	ナデ 一部欠損	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 5	鎌	(8.3)	0.9	0.2~ 0.3	(3.60)	鉄	鎌身三角形	覆土中	

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W368	服飾具	下駄	13.8	5.6	1.2	(43.2)	ヒノキ	板目 緒孔は円孔穿孔3か所 前 歯・後歯削出 子供用	覆土中	★ PL52
W372	部材	板材	12.5	1.9	1.2	17.2	モミ属	板目 削り調整痕	覆土中	
W373	部材	板材	32.0	9.6	2.2	488.0	スギ	板目 円孔穿孔 側面小孔穿孔2 か所	覆土中層	
W374	部材	板材	74.5	8.3	1.6	332.0	ヒノキ	板目 削り加工	覆土中	
W375	部材	板材	62.5	7.5	1.7	536.0	ヒノキ	板目 削り加工	覆土中層	

番号	種別	器種	径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W369	容器	曲物底板・盖板類	[31.4]	0.7	(44.2)	サワラ	板目	覆土中層	
W370	容器	曲物底板・盖板類	[30.8]	0.9	(25.5)	サワラ	板目	覆土中層	

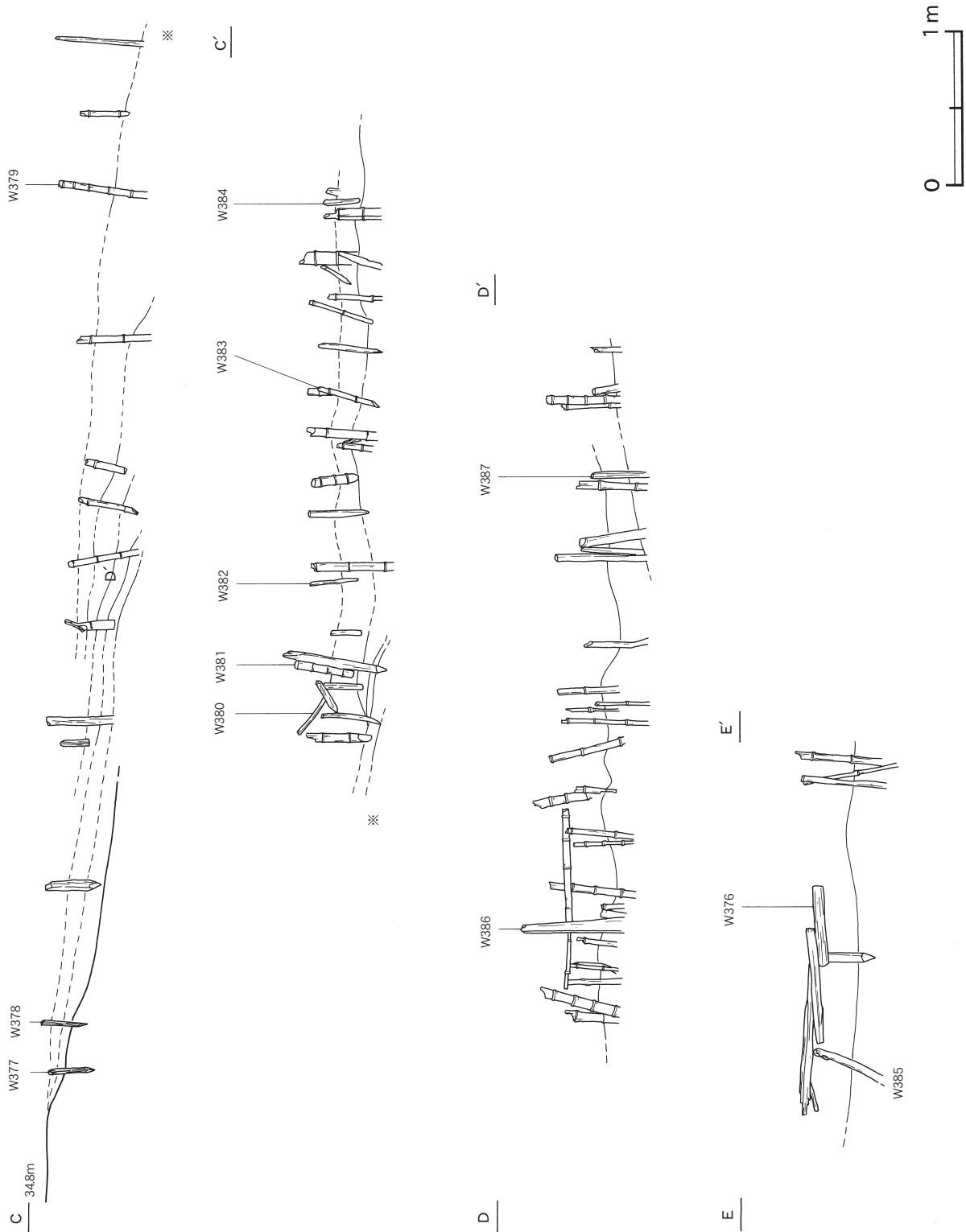
番号	種別	器種	口径	底径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W371	容器	栓	3.9	3.8	3.0	32.1	アスナロ	芯持丸木 側面削り加工	覆土中	

(4) 杭列

第1号杭列 (第178・181・182図)

位置 調査区北部のA3h1区～A3j4区で、標高35.0mほどの第2号流路跡内に位置している。

規模と形状 杭(木杭、竹杭)が、A3h1区から東方向(N-85°-E)に11.0mほど39本が連続しており、A3i4区から南方向(N-5°-E)に5.0mほど11本が連続して延びている。さらに、調査区域外の東・南方向に続いていると想定される。杭の間隔に規則性は見られないが流路の中央部に向って、間隔が密になっている。南

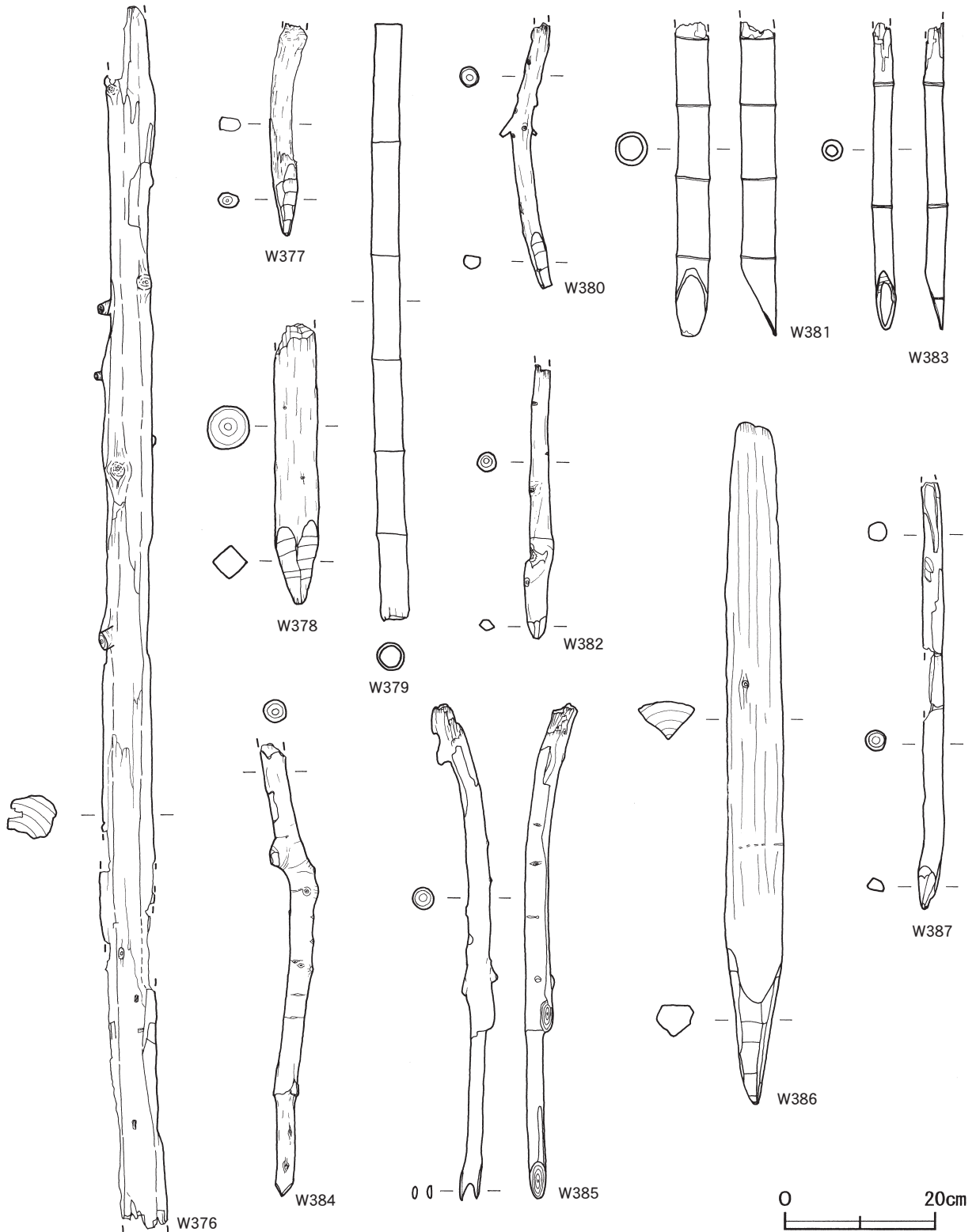


第181図 第1号杭列遺物出土状況立面図

に向う杭には、板材や丸木材、竹材が横に据えられており、平面形はヤナ状を呈している。

遺物出土状況 木製品69点（木杭21、竹杭29、板材8、丸木材6、竹材5）が出土している。杭の先端は、一方
向、二方向、四方向、五方向の加工が施されたものが確認された。

所見 時期は、使用されている竹杭が孟宗竹を使っていることから、近世以降に構築されたと考えられる。



第182図 第1号杭列出土遺物実測図

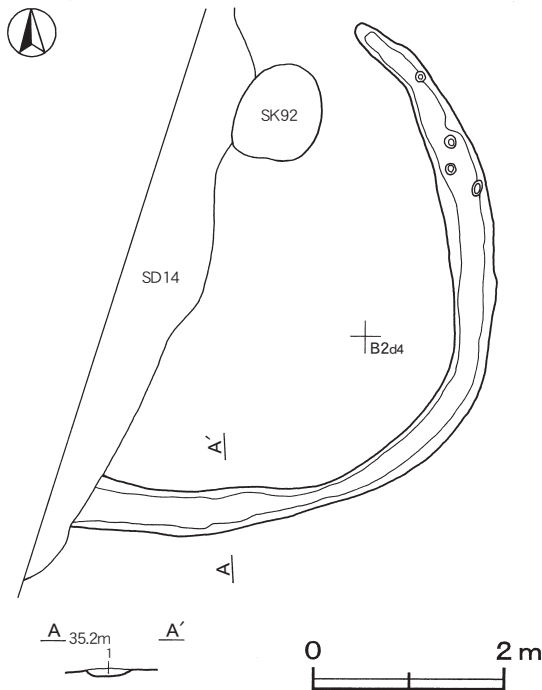
第1号杭列出土遺物観察表（第182図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W376	部材	角材	(163.9)	(6.5)	(6.5)	(3420)	ヒノキ	芯持丸木 面取り 鉄釘残存	第2号流路覆土中	
W377	土木材	杭	(28.5)	4.9	4.3	(133.7)	コナラ属 アカガシ亜属	芯持丸木 先端部四方向から求心状の削り加工	第2号流路覆土中	
W378	土木材	杭	(37.3)	6.0	5.7	(801.0)	ヒノキ	芯持丸木 先端部四方向から求心状の削り加工	第2号流路覆土中	
W379	土木材	杭	79.8	4.0	3.7	446.0	竹笹類	桿 先端部切断状の加工	第2号流路覆土中	
W380	土木材	杭	(35.4)	4.1	2.4	(172.1)	コナラ属 アカガシ亜属	芯持丸木 先端部二方向から斜断状の削り加工	第2号流路覆土中	
W381	土木材	杭	(41.6)	4.8	4.6	(293.0)	竹笹類	桿 先端部一方向から斜断状の削り加工	第2号流路覆土中	
W382	土木材	杭	(36.7)	3.8	3.6	(192.8)	ハンノキ属 ハンノキ節	芯持丸木 先端部五方向から求心状の削り加工	第2号流路覆土中	
W383	土木材	杭	(40.9)	3.3	2.7	(123.2)	竹笹類	桿 先端部一方向から斜断状の削り加工	第2号流路覆土中	
W384	土木材	杭	(60.3)	3.8	3.0	(405.0)	ケヤキ	芯持丸木 先端部二方向から斜断状の削り加工	第2号流路覆土中	
W385	土木材	杭	65.9	8.8	3.0	387.0	ケヤキ	芯持丸木 先端部二股 両端一方向から斜断状の削り加工	第2号流路覆土中	
W386	土木材	杭	90.9	8.0	5.0	170.0	クリ	みかん割 先端部五方向から求心状の削り加工	第2号流路覆土中	
W387	土木材	杭	(57.0)	3.3	2.6	(204.1)	キリ	芯持丸木 先端部五方向から求心状の削り加工	第2号流路覆土中	

(5) 円形周溝状遺構

第1号円形周溝状遺構（第183図）

位置 調査区北部の B2c3～B2d4区で、標高35.0mの平坦部に位置している。



重複関係 第14号溝に掘り込まれている。

規模と形状 確認された規模は、内縁が長径5.21m、短径2.94m、外縁が長径6.15m、短径3.35mである。平面形は北部が途切れた円形と推定され、長径方向はN-33°-Eである。周溝は、深さ2～8cmで、断面形は逆台形状を呈し、底面は浅いU字状である。

覆土 単一層である。含有物が均一に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色 炭化粒子・粘土粒子・白色粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片1点、土師器片14点（坏3、甕11）が出土している。出土土器は細片で図化できるものはなかった。

所見 時期は、重複関係から9世紀中葉以前と考えられるが、出土土器がほとんどなく、細片のため特定することができず不明である。

第183図 第1号円形周溝状遺構実測図

第2号円形周溝状遺構（第184図）

位置 調査区南部の C2h1～C2j3区で、標高35.0mの平坦部に位置している。

重複関係 第1・11号溝に掘り込まれている。

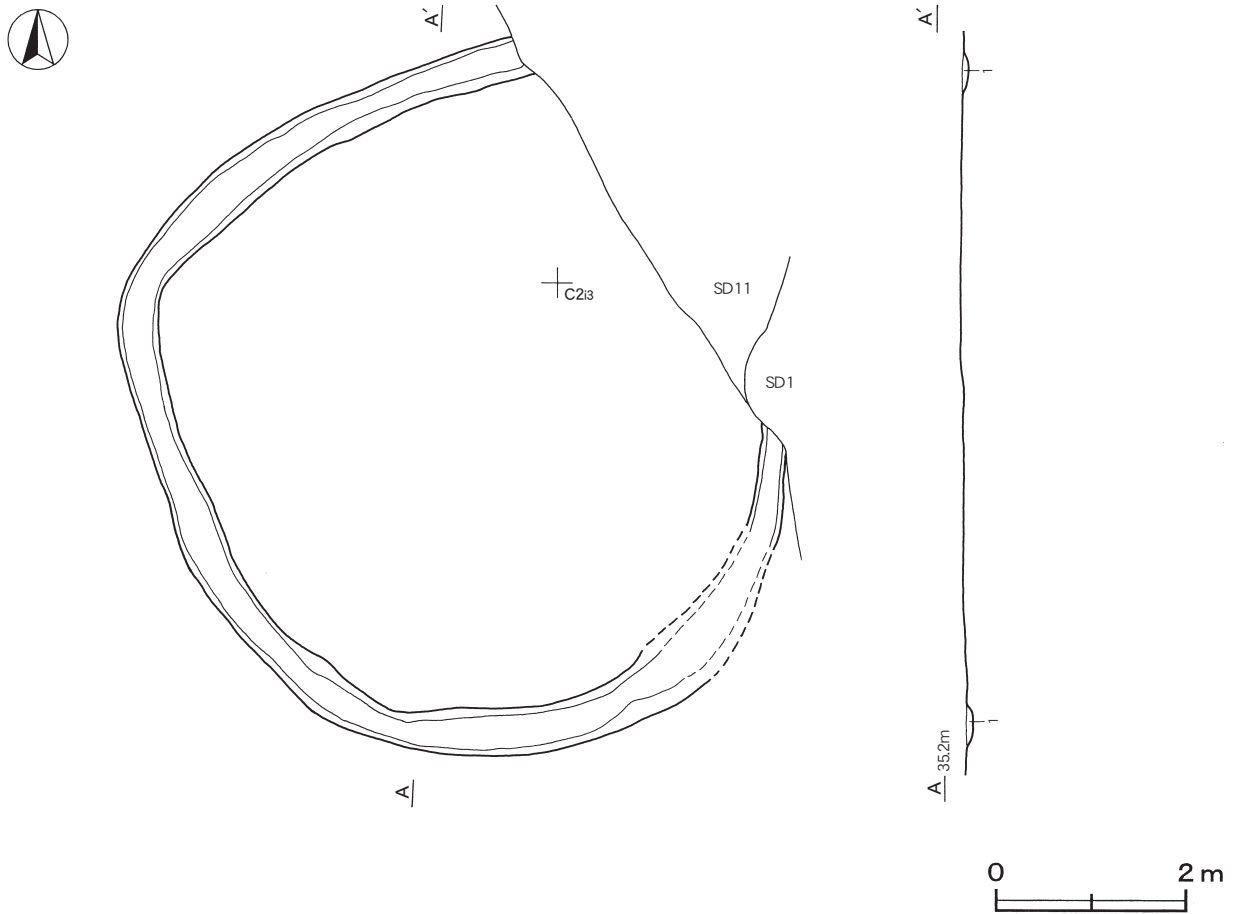
規模と形状 確認された規模は、内縁が長径6.57m、短径6.24m、外縁が長径7.51m、短径6.86mである。平面形は円形と推定され、長径方向はN-4°-Eである。周溝は、深さ6~10cmで、断面形はU字状を呈しており、底面は浅いU字状である。

覆土 単一層である。含有物が均一に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色 粘土粒子少量、白色粒子微量

所見 時期は、重複関係から古墳時代後期以前と考えられるが、出土土器がなく特定できず不明である。



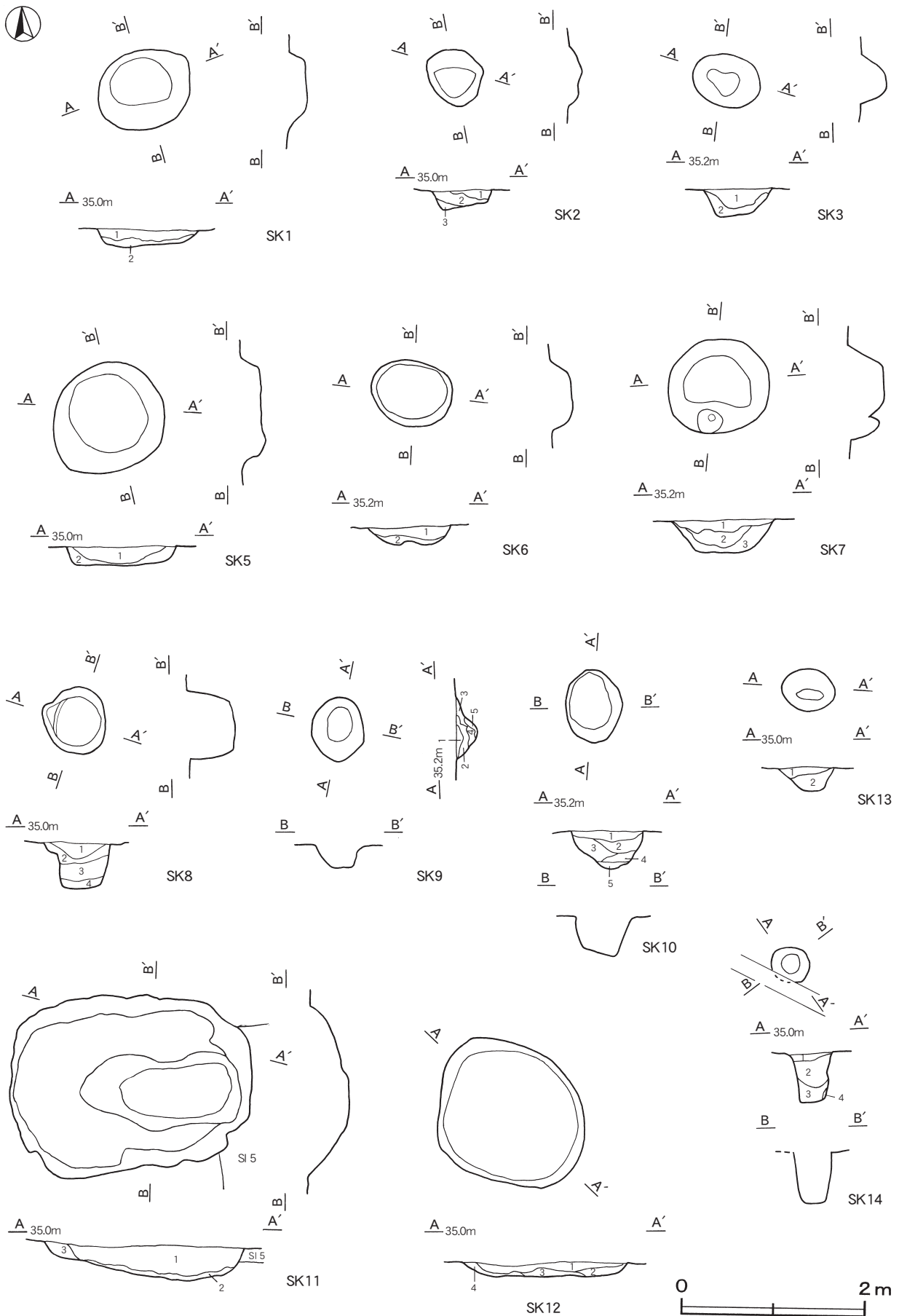
第184図 第2号円形周溝状遺構実測図

表9 円形周溝状遺構一覧表

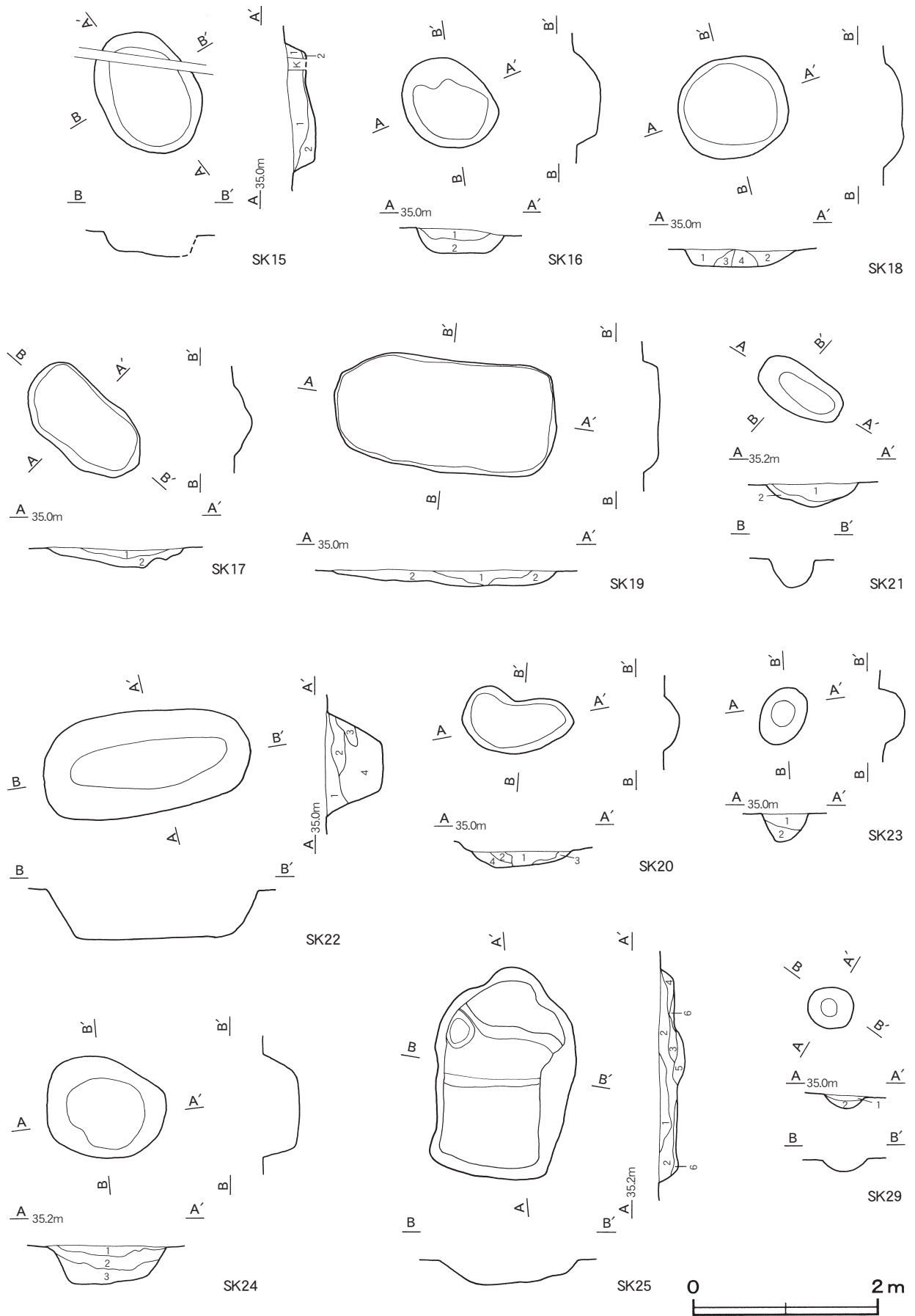
遺構番号	位置	主軸方向	規模		周溝形態 (m)			覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係 (旧→新)
			平面形	外縁 (長径×短径)	内縁 (長径×短径)	断面形	上幅			
1	B 2 c3~B 2 d4	N-33°-E	[円形]	6.15×(3.35)	5.21×(2.94)	弧状	0.19~0.56	0.10~0.34	2~8	自然 土師器 本跡→SD 14
2	C 2 h1~C 2 j3	N-4°-E	[円形]	7.51×6.86	6.57×6.24	弧状	0.30~0.68	0.16~0.40	6~10	自然 土師器 本跡→SD 11 →SD 1

(6) 土坑 (第185~195図)

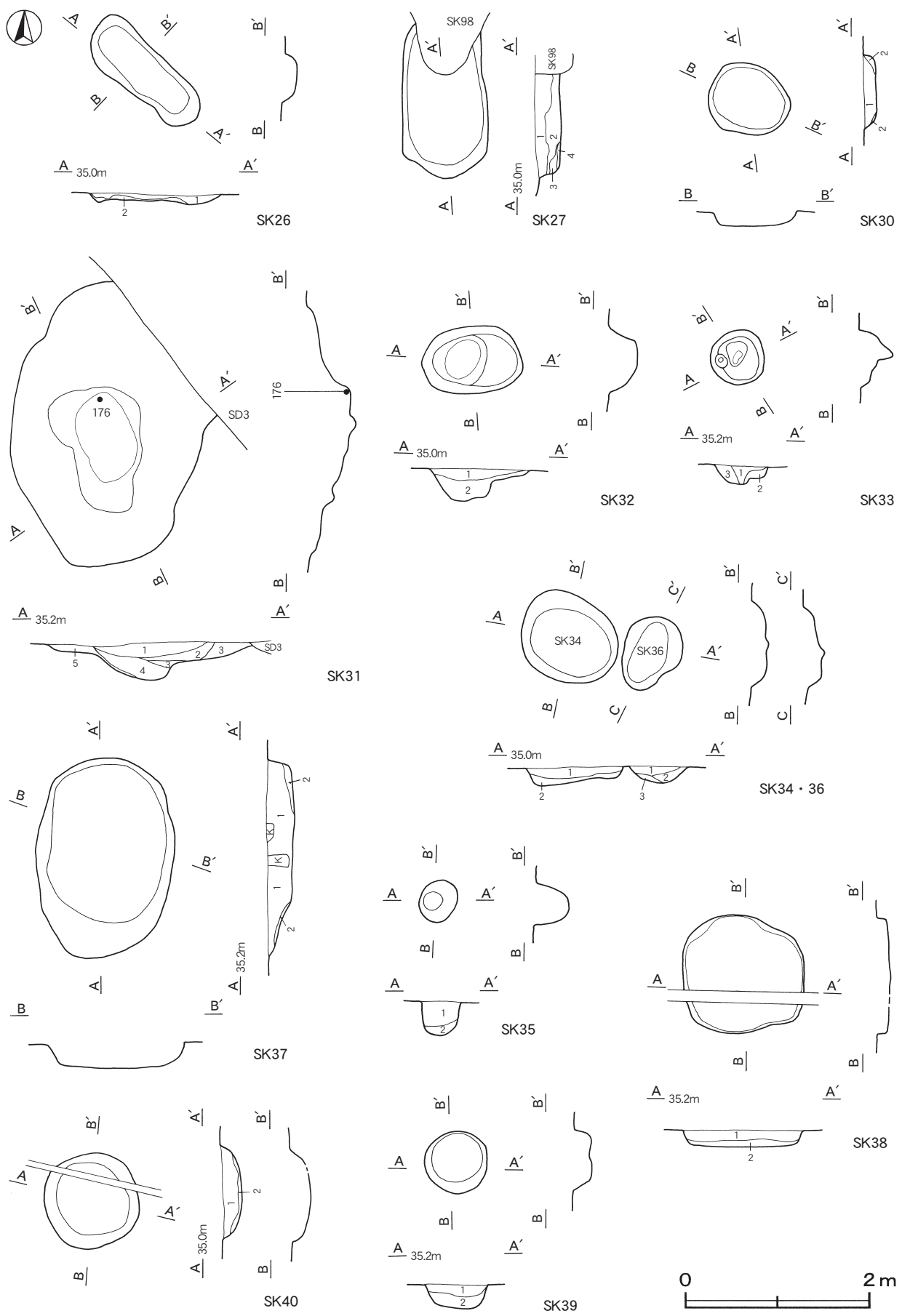
その他の土坑について、平面図と土層断面図で記載する。



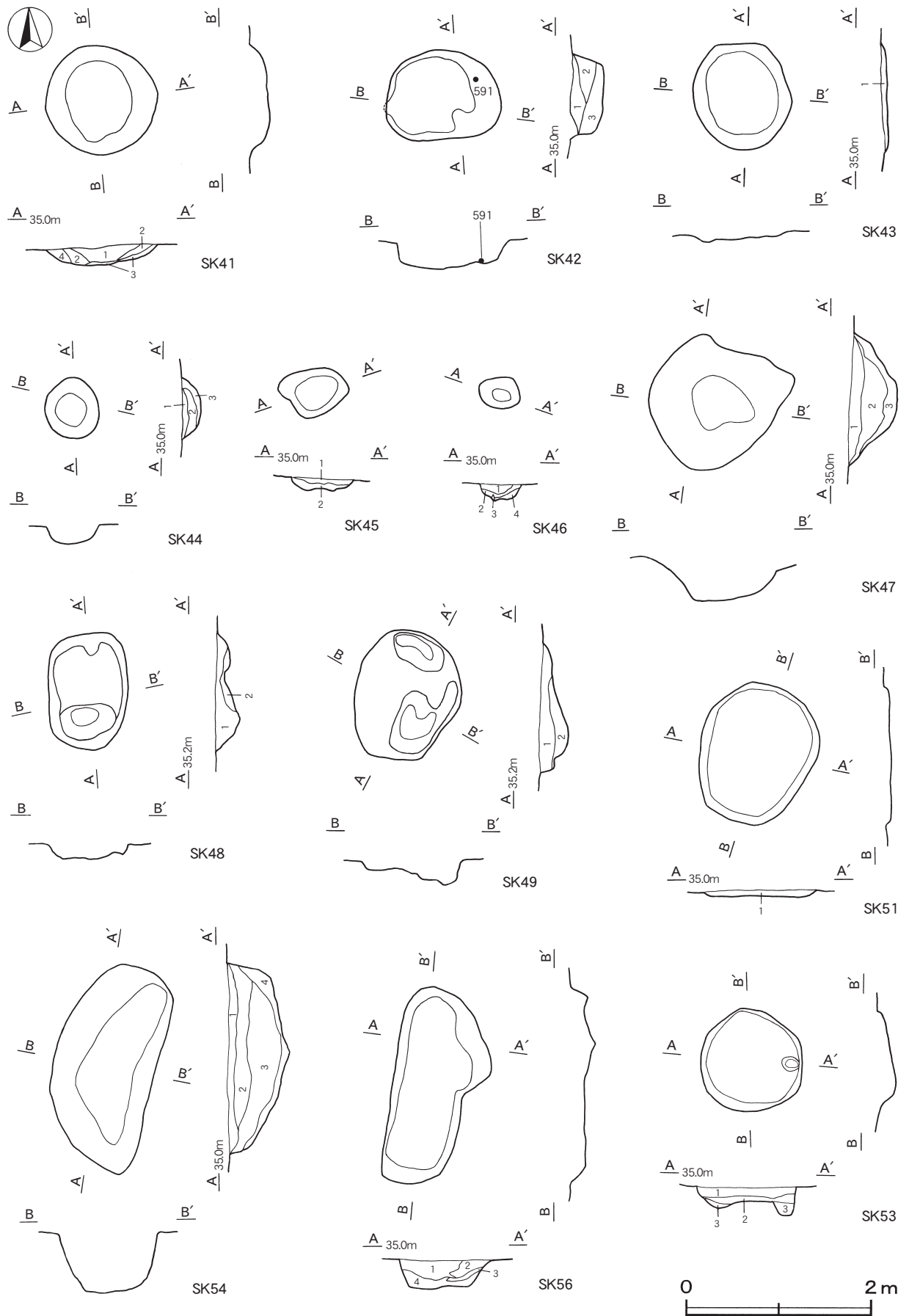
第185図 その他の土坑実測図 (1)



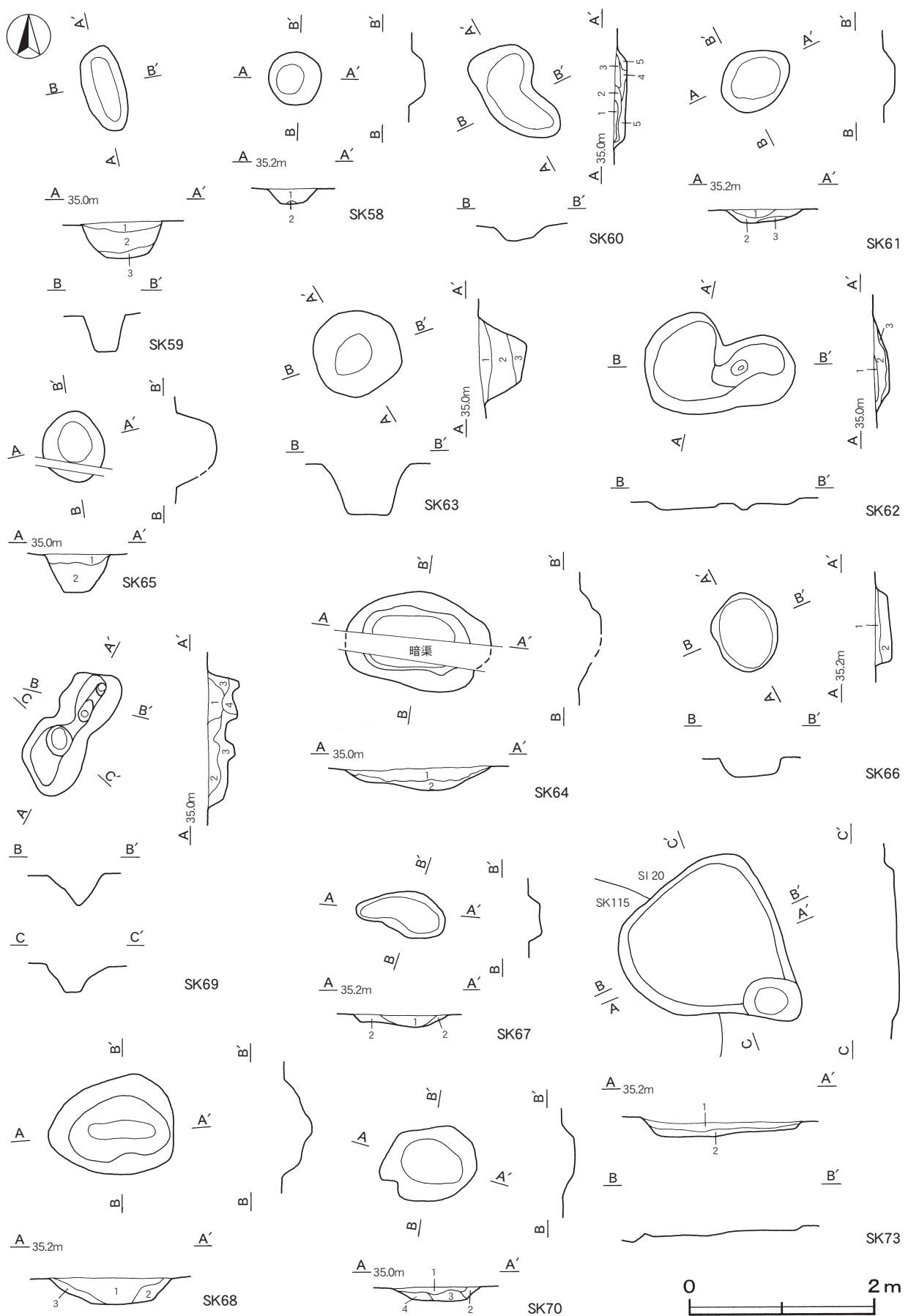
第186図 その他の土坑実測図（2）



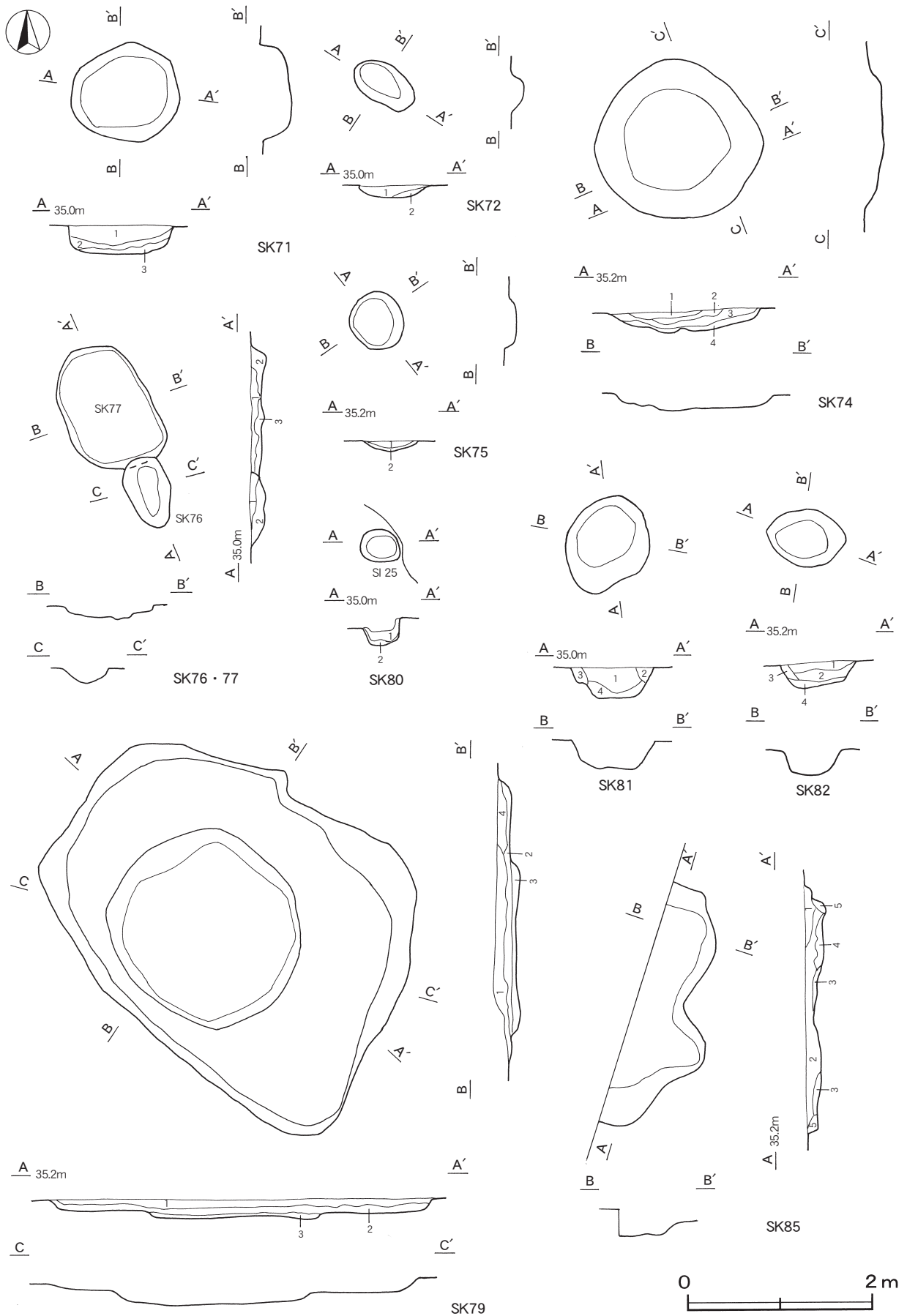
第187図 その他の土坑実測図 (3)



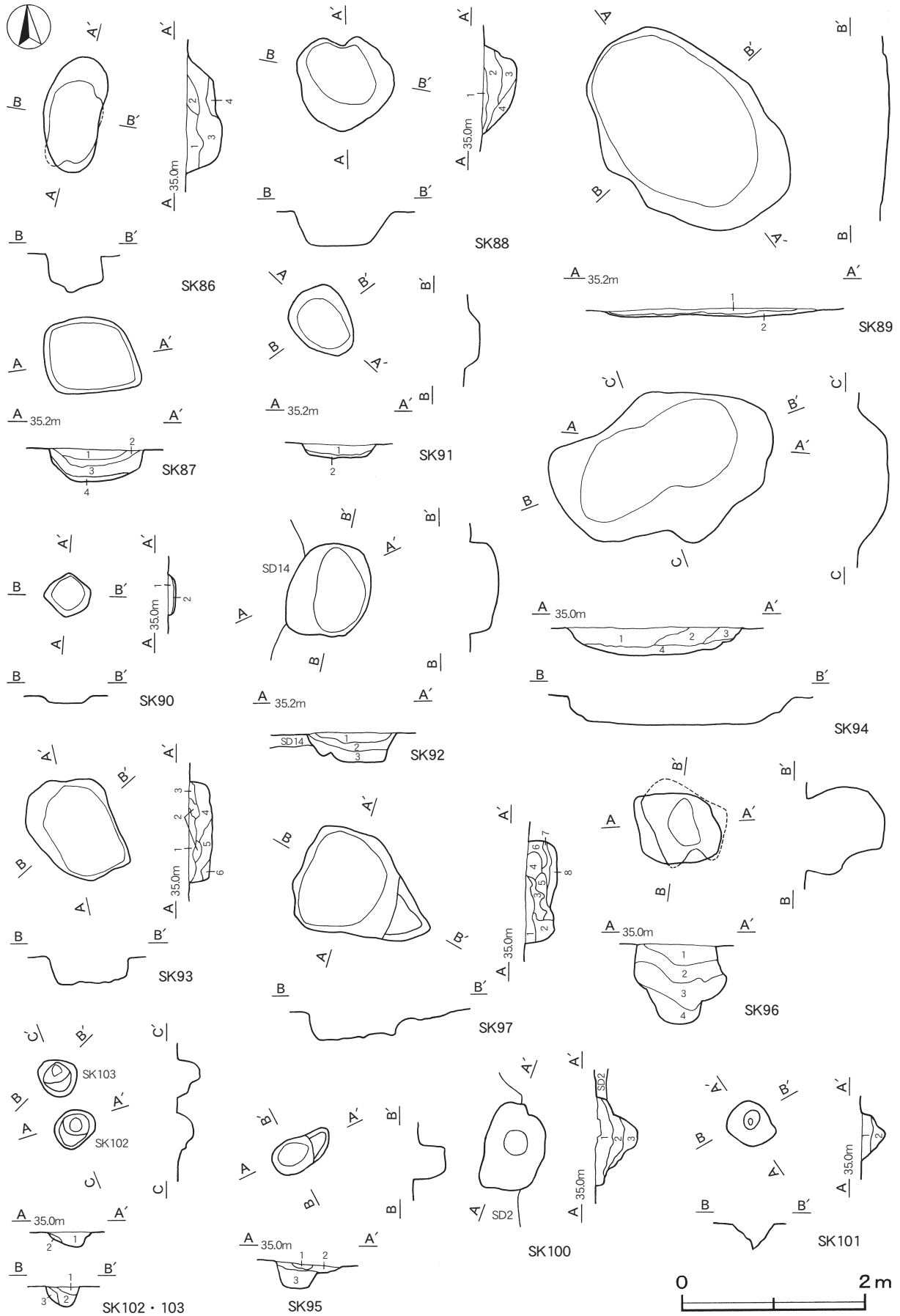
第188図 その他の土坑実測図 (4)



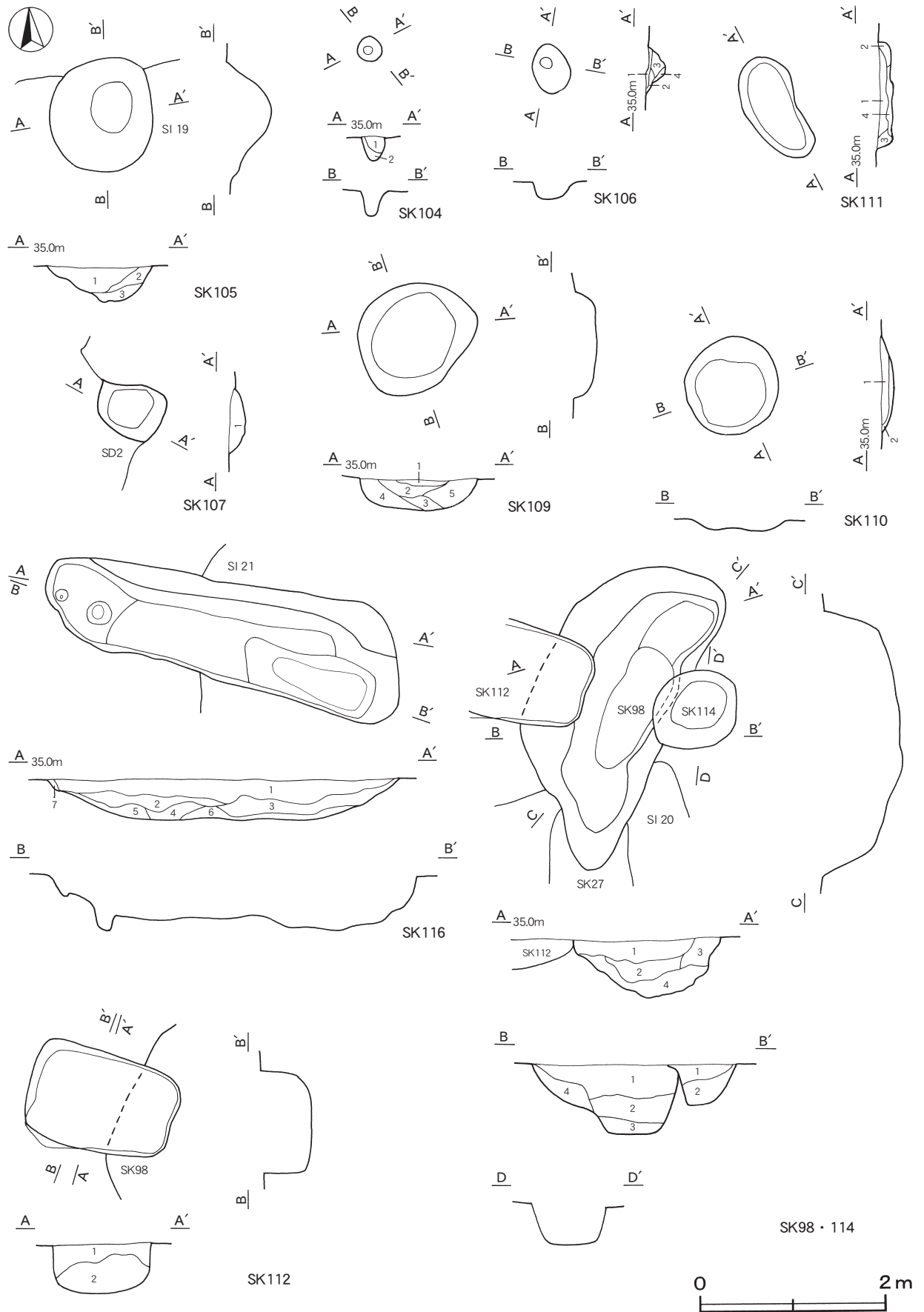
第189図 その他の土坑実測図 (5)



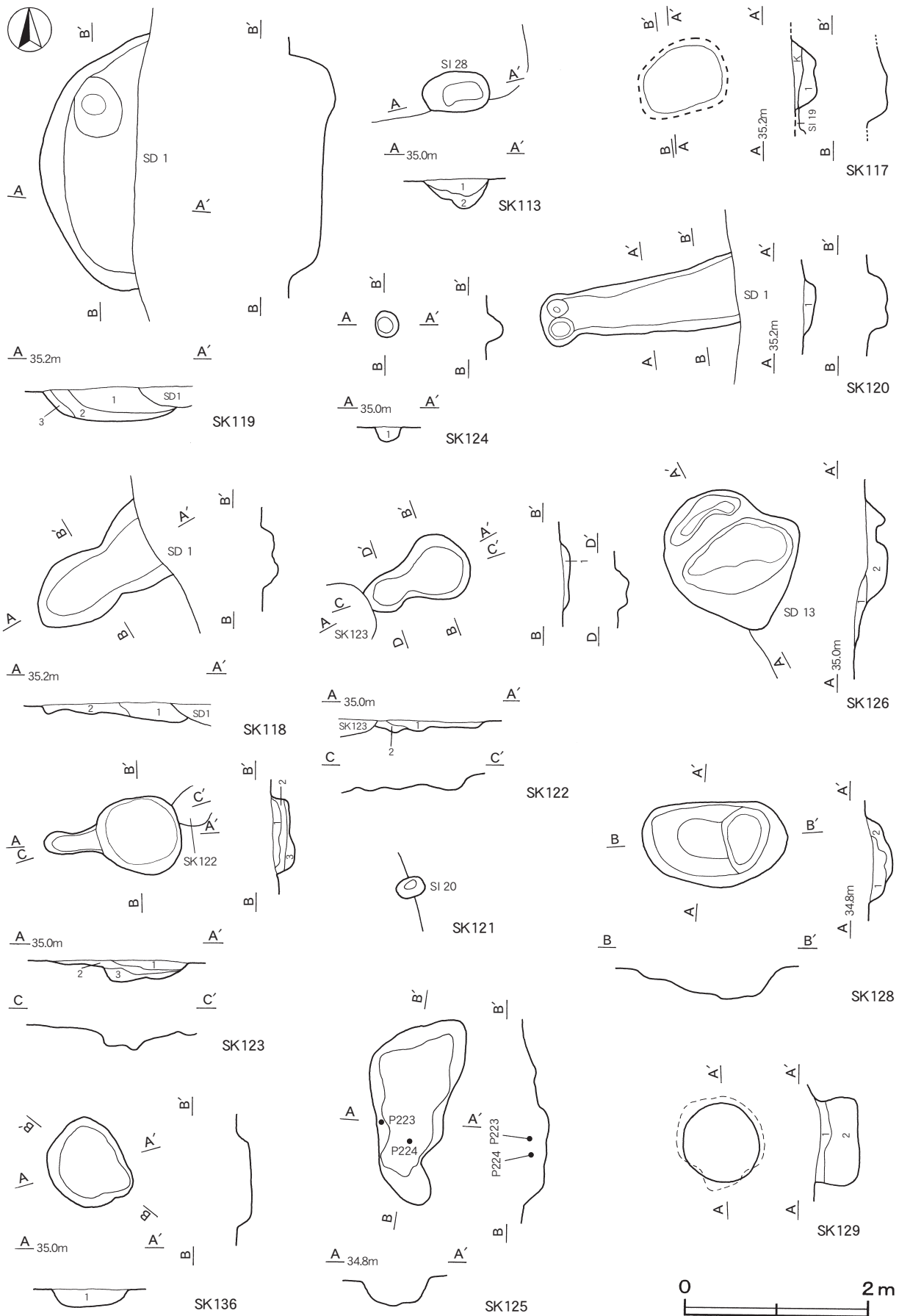
第190図 その他の土坑実測図 (6)



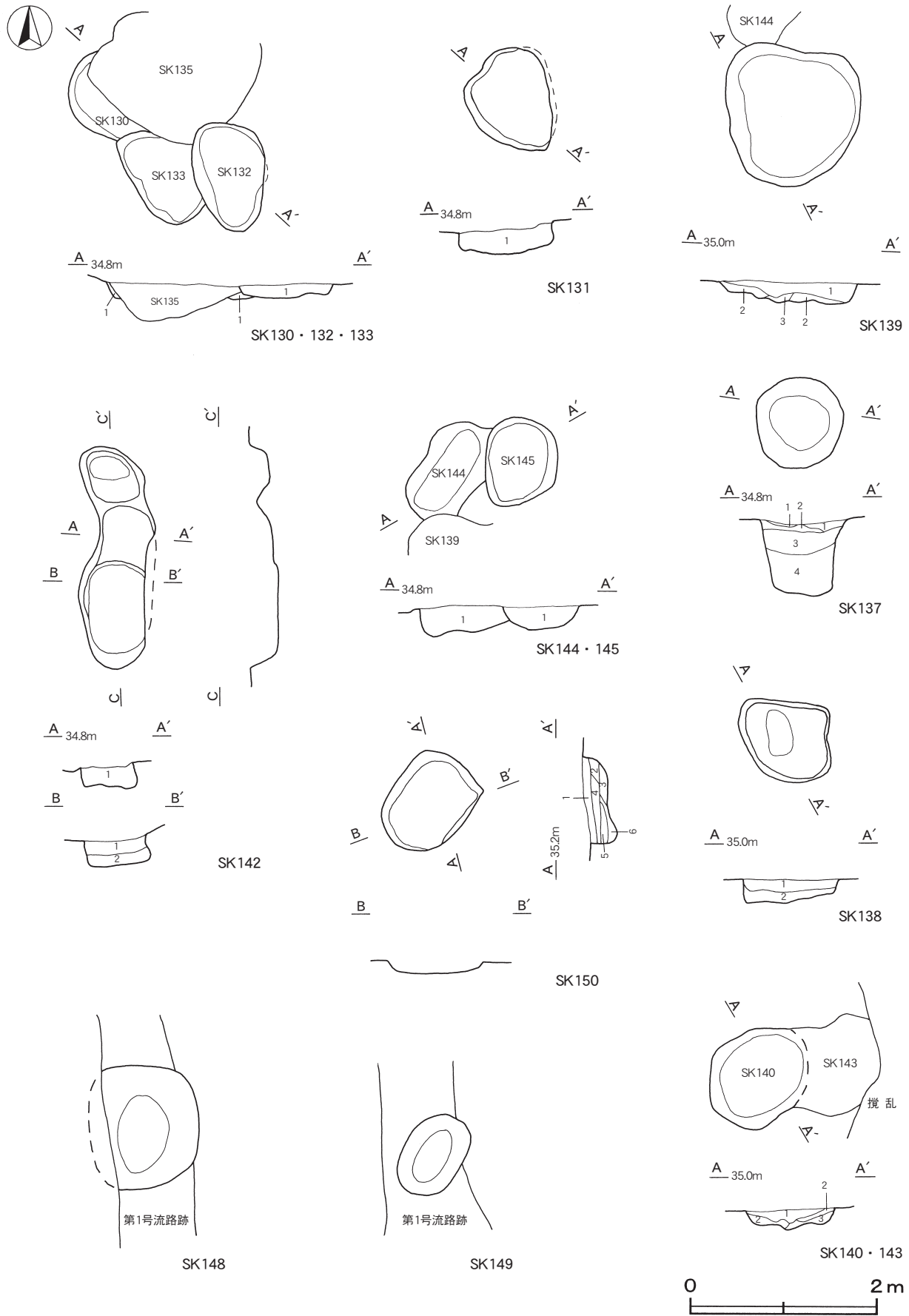
第191図 その他の土坑実測図 (7)



第192図 その他の土坑実測図 (8)



第193図 その他の土坑実測図 (9)



第194図 その他の土坑実測図 (10)

第1号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック中量, 炭化粒子微量
- 2 黄褐色 粘土ブロック中量, 砂粒少量

第2号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック中量, 炭化粒子微量
- 2 灰黄褐色 粘土ブロック少量
- 3 黄褐色 粘土粒子多量

第3号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック中量
- 2 黒褐色 粘土ブロック少量

第5号土坑土層解説

- 1 黒色 粘土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック少量

第6号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック中量, 炭化粒子少量
- 2 黒色 粘土ブロック少量

第7号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック中量
- 2 黒褐色 粘土ブロック少量
- 3 暗オリーブ褐色 粘土ブロック中量

第8号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒色 粘土ブロック中量
- 3 黒褐色 粘土ブロック中量
- 4 黒褐色 粘土ブロック多量

第9号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒色 粘土ブロック少量
- 3 黒褐色 粘土ブロック中量
- 4 暗灰黄色 粘土粒子多量
- 5 黒褐色 粘土粒子中量

第10号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック・炭化粒子微量
- 2 黒色 粘土ブロック・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 炭化粒子微量
- 4 黒色 粘土粒子微量
- 5 黒褐色 粘土粒子少量

第11号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック中量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック少量
- 3 黒褐色 粘土ブロック少量, 炭化粒子微量

第12号土坑土層解説

- 1 黒色 植物遺体少量, 粘土粒子微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック少量
- 3 褐色 粘土ブロック多量, 炭化粒子微量
- 4 黒褐色 炭化粒子・粘土粒子少量

第13号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土粒子多量
- 2 灰黄褐色 粘土粒子多量

第14号土坑土層解説

- 1 黒色 粘土ブロック中量, 焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 焼土ブロック・粘土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 灰黄褐色 粘土粒子中量
- 4 黄橙色 砂粒多量

第15号土坑土層解説

- 1 黒色 粘土ブロック中量
- 2 黒褐色 粘土ブロック少量

第16号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック少量, 焼土粒子・白色粒子・鉄分微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック・鉄分少量

第17号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック・鉄分微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック・鉄分少量

第18号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック・鉄分少量
- 2 黒褐色 粘土粒子・鉄分微量
- 3 黒褐色 炭化物・粘土粒子・鉄分微量
- 4 黒褐色 粘土ブロック少量・鉄分微量

第19号土坑土層解説

- 1 黒褐色 白色粒子・鉄分少量, 粘土ブロック微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック少量, 鉄分微量

第20号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック少量, 炭化粒子・鉄分微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック微量
- 3 黒褐色 粘土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 4 黒褐色 粘土ブロック少量

第21号土坑土層解説

- 1 黒色 粘土ブロック少量
- 2 灰黄色 橙色粒子少量

第22号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック多量, 炭化物・白色粒子微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック中量, 炭化粒子・白色粒子少量
- 3 灰黄褐色 粘土ブロック多量, 炭化粒子微量
- 4 黒色 粘土ブロック微量

第23号土坑土層解説

- 1 黒褐色 炭化物・粘土ブロック少量, 白色粒子微量
- 2 黒褐色 炭化物・白色粒子中量

第24号土坑土層解説

- 1 黒色 炭化物・粘土ブロック・白色粒子中量, 焼土粒子微量
- 2 黒色 粘土ブロック多量, 炭化物・白色粒子少量
- 3 黒色 粘土ブロック少量

第25号土坑土層解説

- 1 黒色 粘土ブロック・白色粒子中量, 炭化物少量
- 2 黒色 粘土粒子中量, 炭化物・白色粒子少量
- 3 黒褐色 粘土粒子多量
- 4 黒褐色 粘土粒子多量, 炭化粒子少量
- 5 灰黄褐色 粘土ブロック多量, 砂粒中量, 炭化粒子少量
- 6 オリーブ褐色 粘土粒子多量, 炭化粒子・砂粒少量

第26号土坑土層解説

- 1 黒色 粘土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 粘土ブロック少量

第27号土坑土層解説

- 1 黒色 粘土ブロック・白色粒子・鉄分少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック・鉄分少量, 炭化粒子微量
- 3 黒褐色 粘土粒子中量, 鉄分微量
- 4 暗灰褐色 砂粒多量

第29号土坑土層解説

- 1 黒色 焼土ブロック・粘土ブロック中量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック少量

第30号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック少量, 炭化粒子・白色粒子微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック中量

第31号土坑土層解説

- 1 黒色 炭化粒子・粘土粒子・白色粒子・鉄分少量
- 2 黒色 粘土ブロック中量, 炭化粒子・白色粒子少量, 鉄分中量
- 3 黒色 粘土ブロック・鉄分中量, 白色粒子微量
- 4 黒褐色 粘土粒子多量, 炭化粒子・鉄分少量
- 5 黒色 粘土粒子中量, 砂粒少量, 鉄分微量

第32号土坑土層解説

- 1 黒色 粘土ブロック少量, 炭化粒子・白色粒子微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック中量

第33号土坑土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子・粘土粒子・鉄分少量
- 2 黒褐色 粘土粒子少量
- 3 灰黄褐色 粘土粒子少量, 鉄分微量

第34号土坑土層解説

- 1 黒色 炭化粒子・粘土粒子・白色粒子中量, 焼土粒子微量
- 2 黒色 粘土ブロック中量, 炭化物・白色粒子微量

第35号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック・鉄分少量, 白色粒子微量
- 2 黒褐色 粘土粒子少量, 鉄分微量

第36号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土粒子中量, 炭化粒子・白色粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 黒色 粘土ブロック・焼土粒子少量, 白色粒子微量
- 3 黒褐色 粘土ブロック中量

第37号土坑土層解説

- 1 黒褐色 鉄分少量, 粘土粒子・白色粒子微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック少量, 鉄分微量

第38号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土粒子少量, 炭化粒子・白色粒子・鉄分微量
- 2 にぶい黄褐色 砂粒中量, 粘土粒子少量, 鉄分微量

第39号土坑土層解説

- 1 黒色 粘土ブロック・炭化粒子・白色粒子微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック少量

第40号土坑土層解説

- 1 黒褐色 鉄分少量, 粘土粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 粘土ブロック少量, 鉄分微量

第41号土坑土層解説

- 1 黒褐色 鉄分少量, 粘土粒子・白色粒子微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック少量, 鉄分微量
- 3 にぶい黄褐色 粘土粒子少量, 鉄分微量
- 4 黒褐色 粘土粒子・鉄分微量

第42号土坑土層解説

- 1 黒色 粘土ブロック・白色粒子少量, 鉄分微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック・白色粒子・鉄分微量
- 3 黒褐色 粘土ブロック少量, 鉄分微量

第43号土坑土層解説

- 1 黒色 粘土粒子中量

第44号土坑土層解説

- 1 黒色 粘土ブロック中量
- 2 黒褐色 粘土ブロック少量
- 3 黒褐色 粘土粒子中量

第45号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック少量
- 2 黒色 粘土ブロック中量

第46号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック・炭化粒子中量
- 2 黒色 粘土ブロック中量
- 3 灰黄褐色 粘土粒子多量
- 4 黒褐色 粘土粒子中量

第47号土坑土層解説

- 1 黒色 焼土粒子・粘土粒子中量
- 2 黒褐色 粘土ブロック少量
- 3 褐色 粘土ブロック中量, 炭化粒子少量

第48号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック・鉄分少量, 炭化粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 粘土粒子中量, 砂粒少量, 鉄分微量

第49号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック少量, 鉄分微量
- 2 にぶい黄色 粘土粒子中量, 砂粒少量, 鉄分微量

第51号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土粒子・鉄分微量

第53号土坑土層解説

- 1 黒褐色 白色粒子少量, 粘土ブロック・鉄分微量
- 2 にぶい黄褐色 粘土ブロック・鉄分微量
- 3 にぶい黄褐色 粘土粒子少量, 鉄分微量

第54号土坑土層解説

- 1 黒褐色 鉄分少量, 粘土粒子微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック・鉄分少量
- 3 黒褐色 粘土ブロック・鉄分微量
- 4 暗褐色 粘土粒子少量, 鉄分微量

第56号土坑土層解説

- 1 黒色 炭化粒子・白色粒子中量, 焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 2 にぶい黄褐色 粘土ブロック多量, 白色粒子少量
- 3 灰黄褐色 粘土ブロック多量, 炭化粒子微量
- 4 黒色 粘土ブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子・白色粒子少量

第58号土坑土層解説

- 1 黒褐色 白色粒子少量, 炭化物・粘土粒子・鉄分微量
- 2 黒褐色 炭化粒子少量

第59号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土粒子少量
- 2 黒褐色 粘土ブロック少量
- 3 黒褐色 粘土ブロック中量, 砂粒少量

第60号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック少量, 焼土粒子微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック中量
- 3 黒色 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
- 4 黒色 粘土ブロック少量
- 5 黒褐色 粘土粒子多量

第61号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック・鉄分微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック・鉄分少量
- 3 黒褐色 粘土粒子少量

第62号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック・炭化粒子中量, 焼土粒子・白色粒子少量
- 2 黒色 粘土ブロック・炭化粒子中量, 焼土ブロック少量
- 3 黒褐色 粘土ブロック多量, 炭化粒子・砂粒少量

第63号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土粒子・炭化粒子・鉄分微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック少量, 炭化粒子・鉄分微量
- 3 黒褐色 粘土粒子少量, 鉄分微量

第64号土坑土層解説

- 1 黒色 粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量, 白色粒子微量
- 2 黒褐色 粘土粒子多量, 炭化粒子少量

第65号土坑土層解説

- 1 黒色 粘土ブロック中量, 焼土粒子・白色粒子・鉄分少量
- 2 黒色 粘土ブロック中量, 鉄分少量

第66号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック・炭化粒子中量
- 2 黒褐色 粘土ブロック多量, 焼土粒子微量

第67号土坑土層解説

- 1 黒褐色 鉄分少量, 炭化粒子・粘土粒子微量
- 2 暗褐色 砂粒少量, 炭化粒子微量

第68号土坑土層解説

- 1 黒褐色 炭化物・粘土ブロック・鉄分少量
- 2 黒褐色 粘土粒子中量, 炭化粒子・鉄分少量
- 3 にぶい黄褐色 粘土ブロック中量, 炭化物・鉄分微量

第69号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック・鉄分少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 黒褐色 粘土ブロック少量
- 4 暗褐色 粘土ブロック少量

第70号土坑土層解説

- 1 黒色 白色粒子中量, 粘土ブロック・鉄分少量, 炭化粒子微量
- 2 灰黄褐色 粘土粒子多量, 炭化粒子微量
- 3 黒褐色 粘土粒子・鉄分少量, 白色粒子微量
- 4 黒褐色 粘土ブロック中量・鉄分少量

第71号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土粒子中量, 炭化粒子・鉄分少量
- 2 黒 褐 色 炭化粒子・粘土粒子・鉄分少量
- 3 褐 灰 色 粘土ブロック多量, 炭化粒子・鉄分微量

第72号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 黒 褐 色 粘土粒子少量, 鉄分微量

第73号土坑土層解説

- 1 暗褐色 炭化物・粘土ブロック少量, 鉄分微量
- 2 暗褐色 粘土ブロック・炭化粒子少量

第74号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 2 黒 褐 色 粘土ブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 黒 褐 色 炭化粒子・粘土粒子少量
- 4 黒 褐 色 炭化物・粘土ブロック・焼土粒子微量

第75号土坑土層解説

- 1 黒 色 粘土ブロック・白色粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 黒 褐 色 粘土ブロック中量

第76号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土ブロック中量
- 2 黒 褐 色 粘土ブロック少量, 鉄分微量

第77号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土ブロック・炭化粒子微量
- 2 黒 褐 色 粘土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 灰 黄 褐色 粘土粒子・鉄分微量

第79号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土粒子中量, 鉄分微量
- 2 にぶい黄褐色 粘土粒子・鉄分少量
- 3 黒 褐 色 粘土粒子中量, 鉄分少量
- 4 黒 褐 色 鉄分中量, 粘土粒子少量

第80号土坑土層解説

- 1 黒 色 炭化物・粘土ブロック少量, 鉄分微量
- 2 褐 灰 色 粘土ブロック少量, 炭化粒子・鉄分微量

第81号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土ブロック・白色粒子少量
- 2 黒 褐 色 粘土粒子少量
- 3 黒 褐 色 粘土ブロック微量
- 4 黒 褐 色 粘土ブロック少量

第82号土坑土層解説

- 1 にぶい黄褐色 粘土粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 粘土ブロック少量
- 3 にぶい黄褐色 粘土粒子少量
- 4 にぶい黄褐色 粘土ブロック微量

第85号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 白色粒子少量, 粘土ブロック・炭化粒子微量
- 2 黒 褐 色 粘土ブロック・白色粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 黒 褐 色 粘土粒子少量
- 4 黒 褐 色 粘土粒子微量
- 5 暗 褐 色 粘土粒子少量

第86号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土ブロック少量
- 2 暗 褐 色 粘土ブロック微量
- 3 黒 褐 色 粘土粒子少量
- 4 暗 褐 色 粘土粒子中量

第87号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 炭化物・粘土ブロック・鉄分少量
- 2 黒 褐 色 粘土粒子中量, 炭化粒子・鉄分少量
- 3 にぶい黄褐色 粘土ブロック中量, 炭化物・鉄分微量
- 4 黒 色 炭化物粒子中量, 粘土粒子微量

第88号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土ブロック・鉄分少量, 炭化粒子微量
- 2 黒 褐 色 粘土ブロック少量・炭化粒子微量
- 3 黒 褐 色 粘土ブロック少量
- 4 暗 褐 色 粘土ブロック少量

第89号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土粒子・炭化粒子少量, 鉄分微量
- 2 灰 黄 褐色 粘土ブロック中量, 炭化粒子少量

第90号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土粒子中量, 炭化粒子・鉄分少量
- 2 灰黄褐色 炭化粒子・粘土粒子・鉄分少量

第91号土坑土層解説

- 1 灰 黄 褐色 炭化粒子・粘土粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 灰 黄 褐色 焼土ブロック中量

第92号土坑土層解説

- 1 黒 色 粘土ブロック・炭化粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 粘土粒子少量
- 3 黒 色 粘土ブロック少量

第93号土坑土層解説

- 1 黒 色 炭化粒子・粘土粒子少量, 白色粒子微量
- 2 黒 褐 色 粘土ブロック中量, 炭化粒子・白色粒子少量
- 3 黒 褐 色 炭化粒子・白色粒子少量, 粘土ブロック・焼土粒子微量
- 4 黒 褐 色 粘土ブロック中量, 炭化粒子少量, 焼土粒子微量
- 5 黒 色 炭化物・粘土ブロック・焼土粒子少量
- 6 黒 褐 色 粘土ブロック・炭化粒子少量, 焼土粒子微量

第94号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 炭化物・粘土ブロック少量
- 2 黒 褐 色 粘土粒子中量, 炭化粒子・白色粒子少量
- 3 褐 灰 色 粘土粒子中量, 炭化粒子微量
- 4 黒 褐 色 粘土粒子中量, 炭化粒子微量

第95号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土ブロック中量
- 2 黒 褐 色 粘土ブロック多量
- 3 灰 黄 褐色 粘土ブロック多量

第96号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土ブロック微量
- 2 黒 褐 色 粘土粒子少量
- 3 黒 褐 色 粘土粒子微量
- 4 黒 色 粘土粒子微量

第97号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土ブロック少量, 白色粒子微量
- 2 黒 褐 色 粘土ブロック・白色粒子微量
- 3 褐 灰 色 粘土ブロック中量, 白色粒子微量
- 4 黒 褐 色 粘土粒子中量, 炭化粒子・白色粒子微量
- 5 黒 褐 色 粘土粒子中量, 白色粒子微量
- 6 暗 褐 色 粘土粒子多量
- 7 黒 褐 色 粘土粒子中量
- 8 黒 褐 色 粘土粒子多量

第98号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土粒子・鉄分微量
- 2 黒 褐 色 粘土ブロック・鉄分微量
- 3 黒 褐 色 粘土粒子少量, 鉄分微量
- 4 黒 褐 色 粘土ブロック少量, 鉄分微量

第100号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 焼土ブロック少量, 白色粒子微量
- 2 黒 褐 色 粘土ブロック微量
- 3 黒 褐 色 粘土ブロック少量

第101号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 粘土ブロック・焼土粒子・白色粒子微量
- 2 暗 褐 色 粘土ブロック少量

第102号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土ブロック少量, 白色粒子微量
- 2 黒 褐 色 粘土粒子少量

第103号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土ブロック少量, 炭化粒子・白色粒子微量
- 2 黒 褐 色 粘土ブロック少量
- 3 暗 褐 色 粘土ブロック微量

第104号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒 褐 色 粘土ブロック少量, 炭化粒子微量

第105号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 鉄分少量, 炭化物・粘土粒子微量
- 2 黒 褐 色 粘土粒子・鉄分少量
- 3 暗褐色 粘土ブロック少量, 炭化物・鉄分微量

第106号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土ブロック少量, 焼土粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 粘土粒子中量, 炭化粒子微量
- 3 黒 褐 色 粘土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 4 にぶい黄褐色 粘土粒子少量

第107号土坑土層解説

- 1 黒 色 粘土ブロック少量, 炭化粒子・白色粒子微量

第109号土坑土層解説

- 1 黒 色 粘土ブロック・白色粒子微量
- 2 黒 褐 色 粘土ブロック少量
- 3 暗 褐 色 粘土ブロック・炭化粒子少量
- 4 暗 褐 色 粘土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 5 黒 褐 色 粘土ブロック微量

第110号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土ブロック少量, 白色粒子・鉄分微量
- 2 灰黄褐色 粘土粒子中量

第111号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土粒子・鉄分少量
- 2 黒 褐 色 粘土ブロック・鉄分少量
- 3 暗 褐 色 粘土ブロック微量
- 4 黒 褐 色 粘土ブロック中量, 鉄分微量

第112号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 粘土ブロック・砂粒少量
- 2 黒 褐 色 粘土ブロック・砂粒少量

第113号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 粘土ブロック少量
- 2 黄 橙 色 粘土粒子多量

第114号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土ブロック少量
- 2 暗 褐 色 粘土ブロック中量

第116号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土粒子微量
- 2 黒 褐 色 粘土ブロック微量
- 3 黒 褐 色 粘土ブロック少量
- 4 暗 褐 色 粘土ブロック少量
- 5 灰 黄 色 粘土ブロック少量
- 6 にぶい黄褐色 粘土ブロック中量, 砂粒少量
- 7 黒 褐 色 粘土粒子少量

第117号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 焼土ブロック少量

第118号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土ブロック少量, 炭化粒子・白色粒子微量
- 2 黒 褐 色 粘土ブロック・白色粒子微量

第119号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 黒 褐 色 粘土粒子微量
- 3 黒 褐 色 粘土ブロック少量

第120号土坑土層解説

- 1 黒 色 粘土ブロック少量

第122号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 焼土粒子少量, 粘土粒子微量
- 2 黒 褐 色 焼土ブロック微量

第123号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 焼土ブロック・粘土粒子少量
- 2 黒 褐 色 焼土ブロック少量, 粘土粒子微量
- 3 暗 褐 色 焼土粒子・粘土粒子中量

第124号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土ブロック少量

第126号土坑土層解説

- 1 黒 色 粘土ブロック少量, 炭化物・白色粒子微量
- 2 黒 褐 色 粘土ブロック多量

第128号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土ブロック・鉄分・砂粒・植物遺体微量
- 2 黒 褐 色 粘土ブロック・砂粒少量, 植物遺体微量

第129号土坑土層解説

- 1 褐 灰 色 粘土ブロック中量, 砂粒・鉄分少量
- 2 灰 褐 色 鉄分多量, 粘土ブロック・砂粒少量

第130号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土ブロック・鉄分少量, 砂粒微量

第131号土坑土層解説

- 1 黒 色 鉄分少量, 粘土ブロック・少礫・砂粒微量

第132号土坑土層解説

- 1 褐 灰 色 鉄分少量, 粘土ブロック微量

第133号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 鉄分少量, 粘土ブロック微量

第136号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土ブロック少量, 鉄分微量

第137号土坑土層解説

- 1 黒 色 粘土粒子微量
- 2 黄 褐 色 鉄分微量
- 3 黄 灰 色 砂粒少量, 鉄分微量
- 4 褐 灰 色 砂粒少量

第138号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 鉄分微量
- 2 黒 色 粘土粒子微量

第139号土坑土層解説

- 1 黒 色 粘土ブロック・砂粒微量
- 2 オリーブ褐色 粘土ブロック・砂粒・鉄分微量
- 3 オリーブ褐色 粘土ブロック・砂粒・鉄分少量

第140号土坑土層解説

- 1 黒 色 粘土ブロック・砂粒微量
- 2 オリーブ褐色 粘土ブロック・砂粒・鉄分微量
- 3 暗 灰 黄 色 粘土ブロック・砂粒・鉄分微量

第142号土坑土層解説

- 1 黒 色 粘土ブロック・鉄分少量
- 2 褐 灰 色 粘土ブロック中量, 砂粒・鉄分微量

第144号土坑土層解説

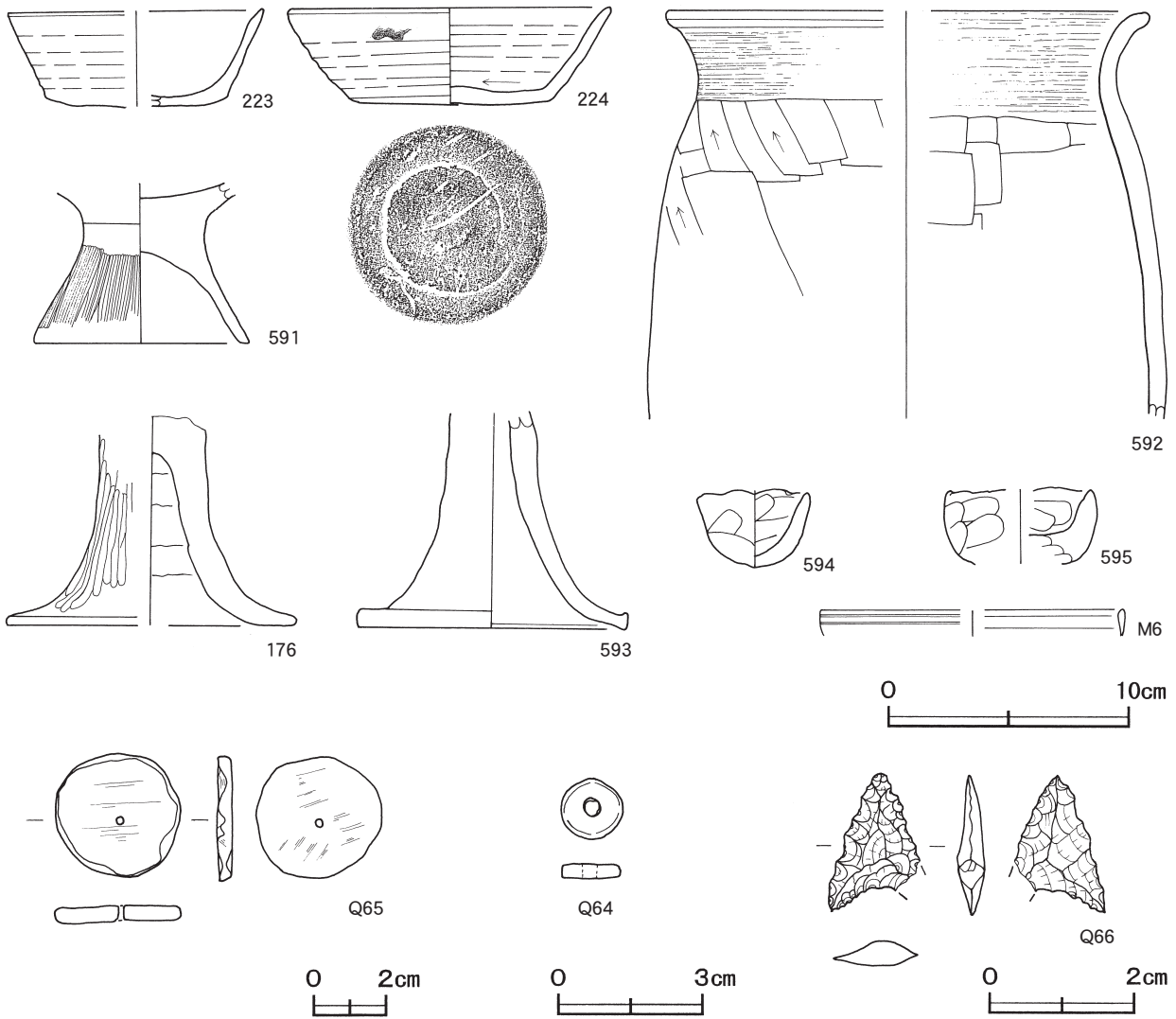
- 1 黒 色 鉄分少量, 粘土ブロック微量

第145号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土ブロック・鉄分微量

第150号土坑土層解説

- 1 黒 色 白色粒子少量, 粘土粒子微量
- 2 黒 褐 色 粘土粒子少量, 白色粒子微量
- 3 黒 褐 色 粘土粒子中量
- 4 黒 色 粘土粒子中量
- 5 褐 灰 色 粘土ブロック微量
- 6 灰 黄 褐色 粘土粒子多量



第195図 その他の土坑・出土遺物実測図

第14号土坑出土遺物観察表（第195図）

番号	器種	径	最大厚	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q64	白玉	1.30	0.30	0.30	0.42	滑石	断面円筒状	覆土中	

第31号土坑出土遺物観察表（第195図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
176	土師器	高坏	-	(8.7)	[12.0]	赤色粒子	こぶい 橙	普通	脚部外面へラ磨き 内面ナデ	覆土下層	40%

第39号土坑出土遺物観察表（第195図）

番号	器種	径	最大厚	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q65	有孔円板	3.50	0.46	0.9	9.60	頁岩	両面丁寧な磨き 中央部に小孔穿孔	覆土中	

第42号土坑出土遺物観察表（第195図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
591	土師器	台付甕	-	(6.2)	6.0	長石・石英	にぶい 赤褐	普通	脚部外面ハケ目調整	底面	20%

第56号土坑出土遺物観察表（第195図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
592	土師器	甕	[19.8]	(17.0)	-	長石・白色粒子	にぶい 黄橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土中	20%

第63号土坑出土遺物観察表（第195図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
593	須恵器	高盤	-	(8.9)	11.0	長石・石英	灰	普通	脚部ロクロナデ	覆土中層	40%

第66号土坑出土遺物観察表（第195図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q66	石鏃	1.90	1.30	0.33	(0.51)	玉髓	両面剥離調整 一部欠損	覆土中	

第70号土坑出土遺物観察表（第195図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M6	銅製品	鉢	[12.5]	(1.1)	-	(9.55)	青銅	口縁部内彎 内面肥厚 外面二本一對の細線が二段周回する	覆土中	5% PL38

第79号土坑出土遺物観察表（第195図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
594	手捏土器	-	4.5	3.2	-	白色粒子	にぶい 黄橙	普通	ナデ	覆土上層	100%
595	手捏土器	-	[6.0]	(3.1)	-	白色粒子	にぶい 黄橙	普通	ナデ	覆土中	30%

第125号土坑出土遺物観察表（第195図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
223	須恵器	坏	[10.6]	4.0	[7.4]	長石	灰	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	覆土上層	20% 自然釉付着
224	須恵器	坏	13.2	4.2	8.2	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	覆土上層	85% 墨書「口」

表10 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係 (旧→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ					
1	C 3 b1	N-54-E	楕円形	1.11×0.86	20	緩斜	平坦	自然		
2	B 2 j9	N-55-W	不整楕円形	0.66×0.54	14	緩斜	凹凸	自然		
3	B 2 i9	N-72-W	楕円形	0.76×0.56	28	外傾	皿状	自然	土師器	
5	B 2 j6	N-39-E	円形	1.31×1.20	25	外傾	平坦	自然		
6	B 2 i4	N-84-W	楕円形	0.90×0.71	16	外傾	皿状	自然	土師器	
7	B 2 i7	N-90-W	円形	1.10×1.04	38	外傾	平坦	自然		SB1と重複, 新旧は不明
8	B 2 j0	N-18-E	円形	0.72×0.72	50	垂直	平坦	自然		
9	B 2 j5	N-0°	楕円形	1.20×0.56	25	外傾	皿状	自然	土師器	

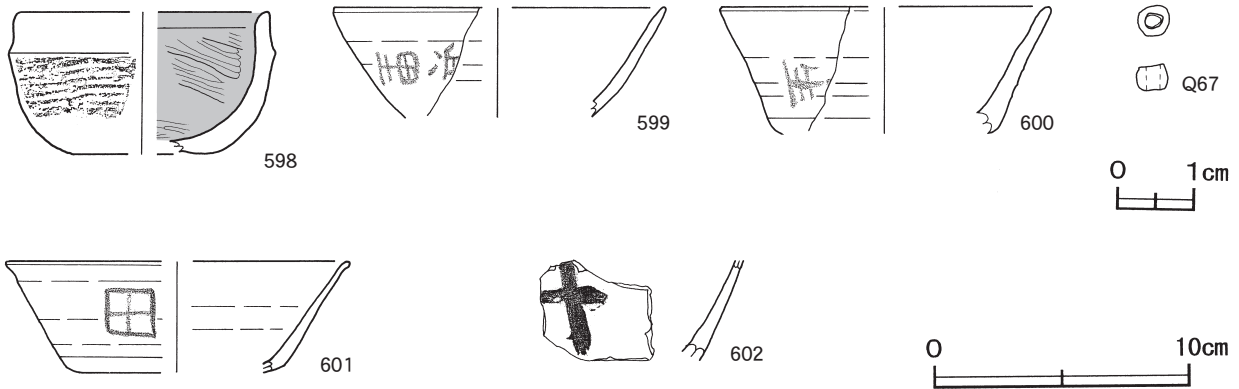
番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係 (旧→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ (cm)					
10	B 2 i5	N-5°-E	楕円形	0.80×0.61	35	外傾	皿状	自然	土師器	
11	E 2 b7	N-90°-W	不整楕円形	2.62×1.96	43	外傾	皿状	人為	土師器	SI 5→本跡
12	C 2 j0	N-31°-W	楕円形	1.82×1.56	14	外傾	平坦	自然		
13	C 2 i9	N-80°-W	楕円形	0.59×0.45	26	外傾	皿状	自然		
14	C 2 b9	N-38°-W	楕円形	0.44×0.40	55	外傾	平坦	自然	石製品(白玉)	SI 13→本跡
15	C 2 b0	N-32°-W	楕円形	1.41×1.04	25	外傾	平坦	自然	土師器	SI 13→本跡
16	B 2 e0	N-47°-W	楕円形	1.08×0.88	26	外傾	平坦	自然		SI 20→本跡
17	C 2 d7	N-50°-W	楕円形	1.47×0.76	19	緩斜	皿状	自然	土師器	SI 10→本跡
18	C 2 d8	N-65°-E	円形	1.17×1.10	20	外傾	皿状	人為	土師器	SI 10→本跡
19	C 2 c7	N-81°-W	楕円形	2.36×1.20	35	外傾	平坦	自然	土師器	SI 10→本跡
20	C 2 c6	N-88°-W	不整楕円形	1.20×0.67	16	緩斜	皿状	人為	土師器	SI 10→本跡
21	E 2 c5	N-56°-W	楕円形	0.98×0.50	30	外傾	皿状	自然	土師器	
22	B 2 h6	N-80°-E	楕円形	2.23×1.10	54	外傾	平坦	人為	縄文土器, 土師器	SI 17→本跡
23	B 2 g6	N-25°-E	楕円形	0.64×0.47	25	外傾	皿状	自然		SI 17→本跡
24	B 2 g6	N-57°-W	不整楕円形	1.33×1.07	39	外傾	平坦	自然	土師器	SI 17→本跡
25	B 2 f6	N-12°-E	不定形	2.30×1.55	27	緩斜	凹凸	人為	土師器	SI 17→本跡
26	B 3 g1	N-48°-W	隅丸長方形	1.44×0.56	14	緩斜	平坦	人為	土師器	SI 15→本跡
27	B 2 e0	N-2°-W	長楕円形	(1.60)×0.92	29	外傾	平坦	自然		SI 20→本跡→SK 98
29	C 2 b4	N-40°-W	円形	0.50×0.49	12	緩斜	皿状	自然		
30	C 2 a3	N-64°-W	楕円形	0.89×0.77	15	外傾	平坦	自然		
31	E 2 c5	N-0°	(楕円形)	(3.08)×(2.20)	48	緩斜	凹凸	自然	縄文土器, 土師器	本跡→SD 3
32	C 2 b5	N-88°-E	楕円形	1.09×0.72	31	緩斜	平坦	自然	土師器	SI 29→本跡
33	E 2 c6	N-12°-E	円形	0.60×0.58	36	外傾	凹凸	人為	土師器	
34	B 2 j8	N-30°-W	楕円形	1.10×0.91	19	緩斜	凹凸	自然	縄文土器, 土師器	SB 1と重複, 新旧は不明
35	B 2 j2	N-18°-E	楕円形	0.47×0.39	37	外傾	皿状	自然	土師器	
36	B 2 j9	N-27°-E	不整楕円形	0.86×0.64	21	緩斜	凹凸	自然	土師器	
37	B 2 j4	N-13°-E	楕円形	2.19×1.50	27	外傾	平坦	自然	縄文土器, 土師器	
38	B 2 h5	N-90°-W	円形	1.31×1.28	12	外傾	平坦	自然	縄文土器, 土師器, 須恵器	
39	B 2 g6	N-32°-W	円形	0.70×0.66	21	外傾	凹凸	自然	縄文土器, 土師器, 石器(剥片) 石製品(有孔円板)	SI 17→本跡
40	C 2 e6	N-15°-E	円形	1.08×1.05	22	緩斜	皿状	自然		
41	C 2 c0	N-85°-E	円形	1.22×1.18	22	緩斜	平坦	自然		
42	B 2 f6	N-87°-W	楕円形	1.22×0.96	29	外傾	平坦	人為	土師器, 須恵器	SI 17→本跡
43	C 3 a1	N-25°-W	楕円形	1.19×1.04	7	緩斜	平坦	自然		
44	B 3 h2	N-9°-W	円形	0.68×0.59	19	緩斜	平坦	自然		
45	B 3 g1	N-85°-W	不定形	0.74×0.53	14	緩斜	凹凸	自然	土師器, 須恵器	SI 15→本跡
46	B 3 g2	N-65°-W	楕円形	0.46×0.37	18	外傾	凹凸	自然		
47	C 3 b2	N-73°-E	不定形	1.60×1.40	42	緩斜	平坦	自然		
48	B 2 f3	N-8°-E	楕円形	1.26×0.85	16	外傾	凹凸	自然	土師器	
49	B 2 f3	N-24°-E	楕円形	1.43×1.10	32	外傾	凹凸	自然	縄文土器, 土師器, 須恵器	
51	B 2 g3	N-23°-E	楕円形	1.50×1.24	7	外傾	平坦	自然	縄文土器, 土師器	
53	B 2 h5	N-12°-W	円形	1.13×1.11	20	外傾	平坦	自然	土師器, 須恵器	
54	B 2 e4	N-77°-W	楕円形	2.20×1.10	68	外傾	平坦	自然		
56	C 2 b5	N-11°-E	不整長楕円形	2.13×1.03	27	緩斜	凹凸	人為	土師器	SI 29→本跡
58	B 2 d4	N-0°	円形	0.56×0.56	16	外傾	平坦	自然	土師器	
59	B 3 e2	N-20°-W	楕円形	0.93×0.45	40	外傾	平坦	自然		
60	B 3 d2	N-41°-W	不定形	1.16×0.68	16	緩斜	平坦	自然	土師器	
61	E 2 c6	N-64°-E	楕円形	0.80×0.61	13	外傾	皿状	自然		
62	B 3 d2	N-77°-W	不定形	1.62×1.10	10	外傾	凹凸	自然	縄文土器, 土師器, 須恵器	
63	B 3 c1	N-0°	円形	0.94×0.94	67	外傾	平坦	自然		
64	B 2 b5	N-82°-W	楕円形	1.58×1.03	23	緩斜	皿状	自然		
65	B 2 c7	N-4°-E	円形	0.76×0.66	42	外傾	皿状	自然	土師器	
66	B 2 a8	N-24°-W	楕円形	0.84×0.70	18	外傾	平坦	自然	土師器, 石器(剥片)	
67	E 2 a6	N-85°-W	不整楕円形	0.97×0.50	14	外傾	皿状	自然		
68	A 2 j8	N-89°-W	不整楕円形	1.35×1.06	30	緩斜	皿状	自然		
69	E 2 d7	N-30°-E	不定形	1.50×0.62	32	外傾	凹凸	自然		
70	A 2 j5	N-75°-W	不定形	0.94×0.86	12	緩斜	平坦	人為	縄文土器, 土師器, 銅鏡	
71	A 2 j6	N-85°-W	円形	1.16×1.06	32	外傾	平坦	自然		

番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係 (旧→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ					
72	A 2 i4	N-85°-W	楕円形	0.73×0.42	14	緩斜	皿状	自然	縄文土器, 土師器	
73	B 2 f0	N-50°-W	不定形	(2.02)×(1.66)	14	外傾	凹凸	自然	土師器,	SI 20→SK 115→本跡
74	B 2 f0	N-0°	円形	1.82×1.70	18	緩斜	凹凸	自然	縄文土器, 土師器	SI 20→本跡
75	E 2 d6	N-7°-W	楕円形	0.64×0.58	12	外傾	平坦	自然	土師器,	
76	A 2 i5	N-20°-W	楕円形	0.80×0.48	16	外傾	皿状	自然		SK 77→本跡
77	A 2 i5	N-27°-W	隅丸長方形	1.40×0.94	16	外傾	凹凸	自然	縄文土器, 土師器, 須恵器	本跡→SK 76
79	E 2 c4	N-27°-W	不定形	4.64×3.50	24	緩斜	段状	自然	土師器, 須恵器, 手捏土器, 陶器, 土製品 (管状土錘)	
80	E 2 d6	N-86°-W	楕円形	0.46×0.35	25	外傾	平坦	自然	土師器	SI 25→本跡
81	B 2 j7	N-16°-E	円形	1.09×0.90	31	外傾	皿状	人為		SB 1と重複, 新旧は不明
82	B 2 e3	N-80°-W	楕円形	0.84×0.62	29	外傾	平坦	人為	土師器	
85	A 2 i4	-	[不定形]	(2.70)×(0.86)	22	外傾	平坦	自然	土師器, 須恵器, 炭化材	
86	B 2 h8	N-13°-E	楕円形	1.26×0.60	41	外傾	凹凸	自然	土師器	
87	B 2 e6	N-89°-W	隅丸方形	0.98×0.82	35	外傾	皿状	自然	土師器	SI 19→本跡
88	B 2 j7	N-81°-W	不整円形	1.10×1.02	38	外傾	平坦	自然	縄文土器	SB 1と重複, 新旧は不明
89	A 2 j8	N-45°-W	楕円形	2.46×1.64	10	緩斜	平坦	自然	縄文土器, 土師器,	
90	A 2 i0	N-10°-E	円形	0.50×0.48	9	外傾	平坦	自然	土師器	
91	A 2 i9	N-45°-W	楕円形	0.82×0.63	16	外傾	皿状	自然	土師器	
92	B 2 c3	N-20°-E	楕円形	1.02×0.88	32	外傾	皿状	自然	縄文土器, 土師器, 須恵器	SD 14→本跡
93	A 2 i9	N-40°-W	楕円形	1.20×0.84	24	外傾	凹凸	人為	土師器	
94	A 2 h8	N-72°-E	不定形	2.46×1.66	28	外傾	平坦	自然	縄文土器, 土師器	
95	A 2 j0	N-57°-E	楕円形	0.77×0.38	14	外傾	平坦	自然	縄文土器, 土師器, 須恵器	
96	B 2 c9	N-88°-W	隅丸方形	0.88×0.74	84	外傾	皿状	自然	縄文土器, 土師器, 須恵器	
97	A 2 h9	N-63°-W	不定形	1.87×1.20	34	緩斜	凹凸	人為	土師器	
98	B 2 d0	N-21°-E	不整長楕円形	3.36×1.48	42	外傾	皿状	自然	縄文土器, 土師器, 須恵器	SI 20・SK 27→本跡→SK 112・114
100	A 2 i7	N-20°-E	不定形	0.88×0.62	44	外傾	皿状	自然	土師器, 須恵器	SD 2→本跡
101	B 2 d9	N-86°-E	円形	0.50×0.49	26	外傾	皿状	自然	土師器	SI 18→本跡
102	B 2 d8	N-48°-E	円形	0.43×0.42	16	外傾	皿状	自然	土師器	SI 18→本跡
103	B 2 d8	N-49°-W	円形	0.43×0.40	23	外傾	皿状	自然		SI 18→本跡
104	B 2 d8	N-0°	円形	0.25×0.25	25	外傾	皿状	自然		SI 18→本跡
105	B 2 c6	N-23°-E	楕円形	1.26×1.14	46	外傾	皿状	自然	縄文土器, 土師器	SI 19→本跡
106	B 2 i7	N-32°-W	楕円形	0.50×0.37	20	外傾	皿状	自然	土師器	SB 1と重複, 新旧は不明
107	A 2 e6	N-80°-E	不定形	0.72×0.62	17	外傾	皿状	自然		SD 2→本跡
109	B 2 d5	N-67°-E	楕円形	1.30×1.12	28	外傾	平坦	自然	土師器	SI 19→本跡
110	B 2 g8	N-5°-E	円形	1.06×1.02	10	緩斜	平坦	自然		
111	B 2 d6	N-67°-E	不整楕円形	1.30×1.12	28	外傾	平坦	人為		SI 19→本跡
112	B 2 d0	N-78°-W	長方形	1.58×1.09	24	垂直	平坦	自然	縄文土器, 土師器, 須恵器	SK 98→本跡
113	B 2 a9	N-78°-E	楕円形	0.72×0.44	30	外傾	皿状	自然	土師器, 陶器	SI 28→本跡
114	B 2 e0	N-5°-E	円形	0.82×0.88	20	外傾	平坦	自然		SK 98→本跡
116	C 2 e4	N-75°-W	隅丸長方形	3.92×1.21	58	外傾	平坦	人為		SI 21→本跡
117	B 2 e6	N-67°-E	隅丸長方形	1.00×0.78	19	外傾	凹凸	人為		SI 19→本跡
118	B 2 j2	N-50°-E	不整楕円形	(1.10)×(0.72)	18	外傾	凹凸	自然	縄文土器, 土師器	本跡→SD 1
119	B 2 j2	N-4°-E	[楕円形]	(1.34)×(0.53)	36~50	外傾	平坦	自然	土師器	本跡→SD 1
120	B 2 i2	N-80°-E	(長楕円形)	(1.07)×(0.36)	18	外傾	凹凸	自然		本跡→SD 1
121	B 2 f9	N-12°-E	楕円形	0.31×0.20	-	-	-	-		SI 20→本跡
122	B 3 b2	N-67°-E	不定形	(1.16)×0.75	14	外傾	凹凸	自然	土師器, 須恵器	本跡→SK 123
123	B 3 b1	N-84°-E	不定形	1.50×0.85	28	緩斜	平坦	自然	縄文土器, 土師器, 須恵器	SK 122→本跡
124	C 2 e5	N-0°	円形	0.28×0.26	17	外傾	皿状	自然		SI 21→本跡
125	E 2 a3	N-1°-W	不定形	1.90×1.02	29	外傾 緩斜	凹凸	-	須恵器	第1号流路跡→本跡
126	D 2 g3	N-30°-W	不定形	1.63×1.46	42	外傾	凹凸	-	土師器, 須恵器	SD 13→本跡
128	D 2 g1	N-89°-E	楕円形	1.57×0.93	33	緩斜	凹凸	自然	土師器, 須恵器	
129	D 2 g1	N-54°-W	円形	0.88×0.82	48	袋状	平坦	自然	土師器	
130	D 2 g2	N-46°-W	[楕円形]	(1.11)×(0.38)	18	外傾	平坦	自然	土師器, 須恵器	本跡→SK 133→SK 135-6 K 132
131	D 2 h2	N-28°-W	不定形	1.17×0.93	29	垂直	皿状	自然	土師器, 須恵器	

番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係 (旧→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ (cm)					
132	D 2 g2	N-17-W	不整楕円形	1.21×0.79	13	外傾	平坦	自然		SK 130→6 K 133→ SK 135→本跡
133	D 2 g2	N-41-W	[楕円形]	1.13×(0.76)	13	外傾	平坦	自然	土師器	SK 130→本跡→ SK 135→6 K 132
136	D 2 i2	N-0°	不整円形	0.99×0.89	15	外傾	平坦	自然	土師器	第1号流路跡→本跡
137	D 2 j2	N-5°-E	円形	0.99×0.93	84	外傾	皿状	自然	土師器	第1号流路跡→本跡
138	D 2 e1	N-49-W	不定形	1.13×0.95	24	外傾	平坦	自然	土師器	第1号流路跡→本跡
139	D 2 e1	N-39-E	不定形	1.61×1.57	23	外傾 緩斜	凹凸	自然	土師器	SK 144→本跡
140	D 2 f1	N-50-E	[楕円形]	1.19×0.97	22	緩斜	凹凸	人為	土師器	SK 143→本跡
142	E 2 a2	N-2°-W	不定形	2.39×0.69	31	外傾	平坦	自然		第1号流路跡→本跡
143	D 2 f1	N-62-W	[不定形]	-	-	-	-	-		本跡→SK 140
144	D 2 e1	N-38-E	[楕円形]	1.20×0.71	31	外傾	皿状	自然		本跡→SK 139・145
145	D 2 e1	N-23-E	[楕円形]	0.99×[0.82]	26	緩斜	凹凸	自然		SK 144→本跡
148	C 1 j0	N-2°-E	[円形]	1.24×(1.00)	34	-	-	-		第1号流路跡→本跡
149	D 1 a0	N-30-E	楕円形	0.94×0.62	34	-	-	-		第1号流路跡→本跡
150	C 2 d8	N-43-E	楕円形	1.09×0.85	14	外傾	平坦	自然		SI 10→本跡

(7) 遺構外出土遺物

当遺跡から出土した遺構に伴わない遺物について、実測図及び出土遺物観察表で記載する。



第196図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表 (第196図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
598	弥生土器	鉢	[9.6]	(6.0)	-	長石・石英・雲母・細礫	浅黄橙	普通	口縁部内外面横ナデ 体部内・外面 糸痕文施文	表土	20%
599	須恵器	坏	[13.0]	(4.2)	-	石英・雲母・細礫	黄灰	普通	体部内・外面口クロナデ	表土	10% 墨書「真ッ里」
600	須恵器	坏	[13.0]	(5.0)	-	長石・石英	灰	普通	体部内・外面口クロナデ	表土	10% 墨書「口生」
601	須恵器	坏	[13.4]	(4.4)	[7.6]	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部内・外面口クロナデ	表土	5% 墨書「田」
602	須恵器	坏	-	(4.0)	-	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ割り	表土	5% 墨書「十」

番号	器種	径	最大厚	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q67	ガラス小玉	0.4	0.4	0.25	0.09	ガラス	コバルトブルー 側面円筒状	表土	

第4節 ま と め

栗島遺跡は、広大な水田地帯の微高地に立地しており、今回の調査により縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが確認された。遺構は、縄文時代の竪穴住居跡1軒、弥生時代の土坑2基、古墳時代の竪穴住居跡25軒、土坑10基、溝跡6条、奈良・平安時代の流路跡1条、水場遺構1か所、曲物埋設遺構1基、土坑2基、溝跡5条、不明遺構1基、近世以降の流路跡1条、杭列1条などである。特に、奈良・平安時代の第1号流路跡からは、県内でこれまで出土例の少ない木器・木製品が多量に出土した。また、木簡や墨書・漆書・刻書・ヘラ書き土器などの文字資料も多く出土している。さらに、第1号流路の東岸から水場遺構が確認されるなど、古代の当該地域を考える上で今までにない貴重な資料になると考えられる。

以下においては、当遺跡の主要な時期となる古墳時代と奈良・平安時代の遺構と遺物について考察し、当遺跡の性格を示していきたいと考える。

1 古墳時代

古墳時代は、当地に集落が営まれた時期で、大きく3期に分けることができる。Ⅰ期は前期前葉、Ⅱ期は後期前葉（5世紀後葉から6世紀前葉）、Ⅲ期は後期後葉（7世紀前葉）である。

(1) Ⅰ期 古墳時代前期前葉

当該期の竪穴住居跡は14軒が確認されている。土器の様相から、在地の土器ばかりでなく、他の地方の影響を受けた外来系の土器が多く認められる。当遺跡周辺では低地を中心に外来系の土器が出土する遺跡が多く、4km南方にはS字状口縁台付甕が出土した鎌田遺跡がある。さらに、茨城県から栃木県にかけての鬼怒川、小貝川、五行川沿いには、同様の傾向を示す遺跡が多い¹⁾。このことから、当該期には、各河川に沿った低地に入植してきた集団の存在が想定される。

土器は、器種別では甕が多く出土している。甕は各地方の影響を受けやすい土器であるため、基礎資料として甕の口縁部と底部の形態を分類することで、当遺跡の土器の特徴と多様性を示していきたい。表11～表14に示したように、口縁部は、6つの形態に分類することができた。数量的にはA類の口縁が「く」の字状を呈し、端部が丸く仕上げられたものが43%と多いが、C類の口縁端部に面取り面をもつものの合計は45%を占めており、当該期の甕の特徴としてあげられる。C類は、当該地方においては、余り見られない口縁端部の処理法であり、北陸地方東部の影響がうかがえる。さらに、それらも4形態に分けられることから、違う地方にも系譜が求められると思われる。それぞれの系譜についてさらに検討していく必要がある。

底部は、5つの形態に分類できるが、台付が少なく平底が多いことが特徴としてあげられる。小山市周辺の前期の早い段階においては、台付よりも平底の甕が多く出土する傾向があることが指摘されており、当遺跡と隣接していることから、関連がうかがえる²⁾。さらに、平底の甕には、底部の処理の手法に4つの形態が認められた。

また、第7号住居跡からは東海地方の影響を受けた加飾壺が出土している。体部文様や赤彩など東海地方の本来の手法を踏襲していると考えられるが、口縁部は棒状浮文貼り付けではなく、指頭押圧によって棒状浮文を似せて作っており、在地化した様相がうかがえる。オリジナルの土器の手法をまねながら作った段階といえる。さらに、第25号住居跡や第1号流路跡などから出土している体部に条痕文が施された弥生土器も東海地方にその系譜が求められる³⁾ことから、当該地方への他地方からの人や物の動きを周辺の他遺跡も含めて、検討していく必要がある。

表11







口縁部	A類 (口縁端部が丸く仕上げられている)	B類 (口縁端部が細くなる)	C類 (口縁端部が面取り面をもつ)			
	A1	B1	C1	C2	C3	C4
	口縁部が「く」の字を呈し、端部が丸く仕上げられている	口縁部が「く」の字を呈しながら外反し、端部が細くなる	口縁部が「く」の字状を呈し、端部に水平の面取り面をもつ	口縁部が「く」の字状を呈しながら外反し、端部に水平の面取り面をもつ	口縁部が「く」の字状を呈し端部の上端が小さく立ち上がる	口縁部が「く」の字状を呈し端部が上下に拡張された面取り面をもつ
						

表12

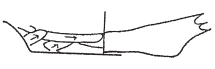

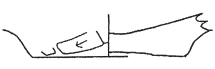
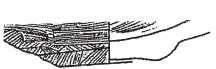
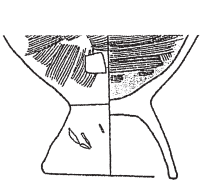

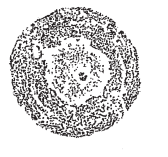


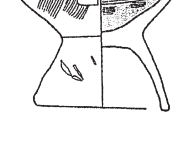
底部	A類(平底)				B類(台付)
	A1	A2	A3	A4	B1
	ナデ調整	輪高台状	木葉痕	ハケ目調整	台付
					
					

表13

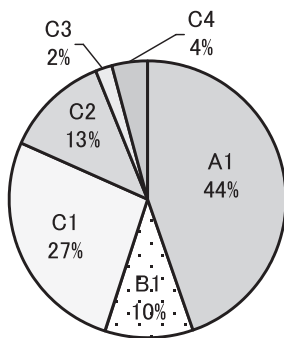
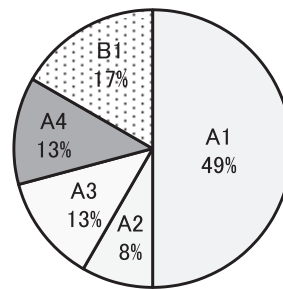


表14



(2) II期

当該期の竪穴住居跡は10軒確認されている。その内の8軒は、初期竈を有している。特筆すべきなのは、5世紀後葉に比定される第10号住居跡である。II期の住居跡群の中では、古い時期に比定されるが、炉・竈を有しておらず、長軸8.18m、短軸7.56mの住居跡である。この住居からは、口縁部に抉りのある赤彩された異形高坏が出土している。残念ながら、全体像は分からないが、破片から別の場所にも抉り部が存在していたことが推測され、船形高坏になる可能性もある。船形高坏は、6世紀の兵庫県八幡山六号

墳出土のものがある⁴⁾。ただし、この船形高坏は、脚部に透かしをもち、須恵器の技法を用いたもので、当遺跡のものとは、系譜が異なると考えられる。さらに、同住居跡からは、石製模造品の剣形品が2点出土しており、何らかの儀礼にかかわる建物であった可能性も考えられる。この異形高坏については、今後類例の増加を待ち、検討していかなくてはならない。

(3) Ⅲ期

この時期の住居跡は第13号住居跡1軒のみである。しかしながら、第1号流路跡などからは、当該期の遺物が多量に出土しており、調査区域の外側に集落が形成されていた可能性は極めて高いと考えられる。

2 奈良・平安時代

当該期の遺構は、流路跡や水場遺構などで、住居跡など集落にかかわる遺構は確認されなかった。

第1号流路跡は、遺跡の南部を北西から南東にかけて緩やかに湾曲しながら流れていたことが確認された。当遺跡周辺には、断続的に旧河道及びそれに伴う微高地が形成されており、小貝川の支流である大谷川の旧河道であった可能性が高い⁵⁾。テフラ分析の結果や出土遺物から、4世紀初頭以前には流路として機能しており、9世紀中葉ごろに濁水または流路の変更などにより、埋没していったと考えられる。その後、緩やかに埋没していきながら、12世紀には完全に埋没したと推測される。この流路跡の夥しい数の遺物は、流路の上流または周辺の集落から流れ込んだものと考えられるが、その遺物の様相には他の遺跡には見られない特色が見受けられる。その特色について、遺物や出土状況から述べていきたい。

(1) 木器・木製品について

当遺跡からは、1,000点を超える木器・木製品・加工木が第1号流路跡を中心に出土している。共伴する土器は古墳時代前期から9世紀後葉まで幅広く混在して出土していることから、木器・木製品の時期の特定は困難である。しかしながら、古墳時代の土器には、流水の影響と思われる磨滅が多く確認され、8世紀前葉から9世紀中葉までの土器が大量に出土している状況から、当流路から出土した木器・木製品は、この時期の範疇に収まるものと考えている。形状から、一部古墳時代のものと判断できたものもあるが、大半は奈良・平安期の遺物に比定される。

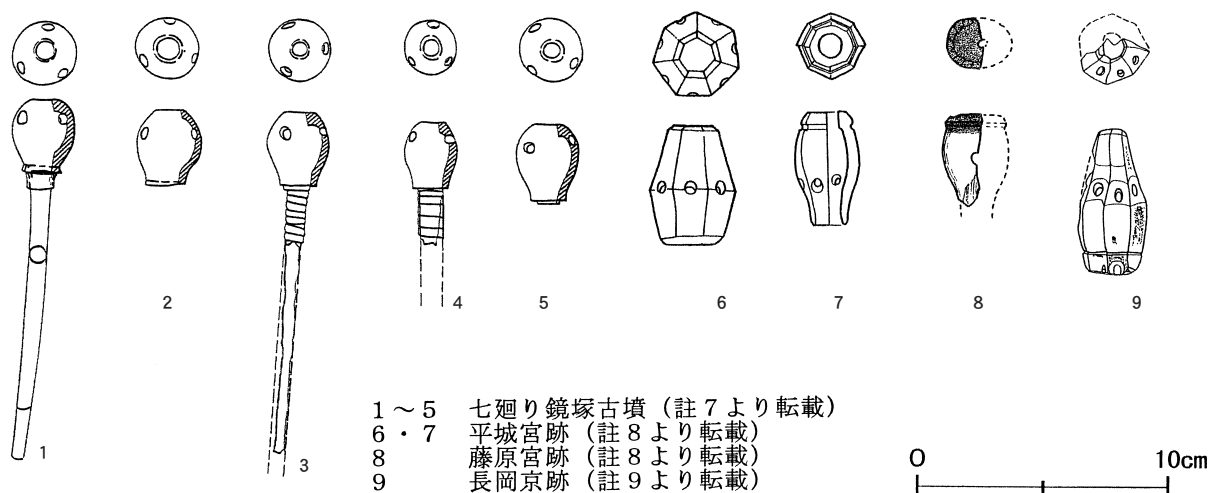
以下においては、当遺跡から出土した木器・木製品について、当遺跡の性格を語る上で重要と考える遺物について取り上げ、考察を試みていくこととする。

① 鳴鏑

鳴鏑は長さが7.8cm、経10.5cmほどで、外面全体に黒漆が塗られている。内面は丁寧にくり抜かれており、側面に円孔が1か所確認されたが、これ以外にも、同様の円孔が数カ所穿たれていたと想定される。

一般に鳴鏑は、鹿角製の製品が多く、矢の先端につけ、発射時に快音を発するものである。当遺跡出土の鳴鏑は底面に穿たれた孔の経が4.3cmほどであることから、矢として機能していたとは考えがたく⁶⁾、儀杖の先につけられたものと推定される。また、木製の鳴鏑の出土例は少なく、古墳時代のものでは、栃木県大平町の七廻鏡塚古墳で副葬品としての出土例がある⁷⁾。また、藤原宮跡で1点、平城宮跡で2点、長岡京跡で1点出土している(第197図参照)。当遺跡の鳴鏑を他遺跡出土のものと比較すると、形状については栃木県出土のものに類似しているが、法量に大きな違いがある。また、藤原宮跡出土のものは、無花果形を呈する二目鏑、平城宮跡出土のものは八面体の無花果形を呈する八目鏑と七面体の算盤状を呈する七目鏑⁸⁾、長岡京出土のものは八面体の無花果形を呈する八目鏑⁹⁾である。平城宮跡出土の七目鏑は、儀仗用の鳴鏑とされている。それぞれ、当遺跡出土の鳴鏑とは形状が異なる。当遺跡出土の

鳴鏑は、法量が大きく儀具と考えられ、当遺跡の性格を考える上で重要な遺物であるとともに、このような遺物がなぜ当該地方から出土したのか検討していく必要がある。



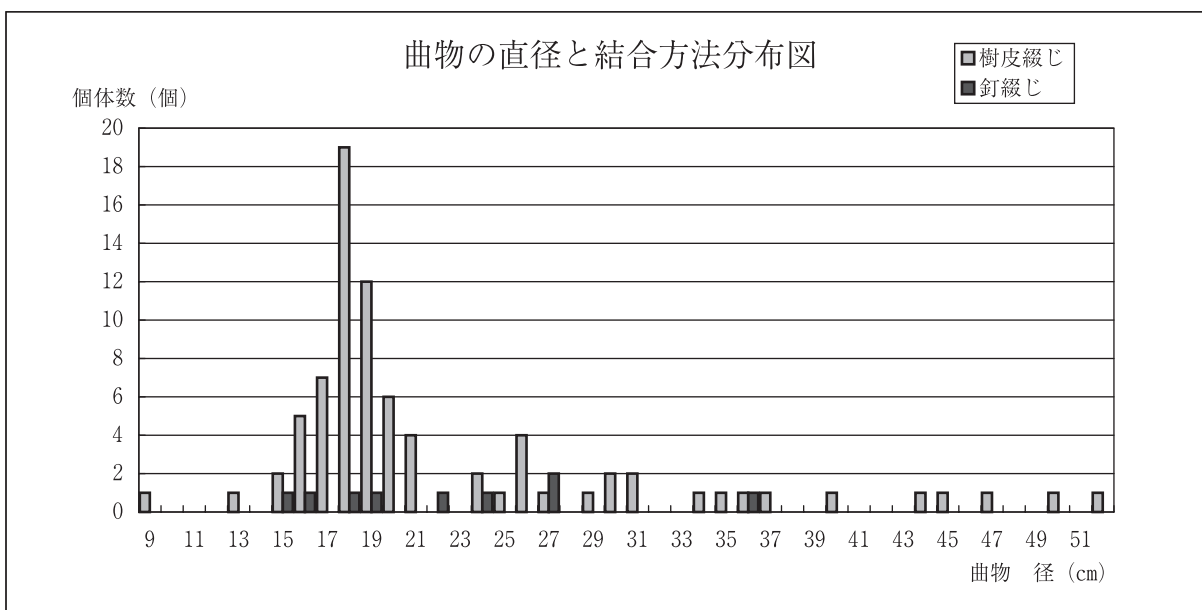
第197図 木製鳴鏑出土例

② 曲物

曲物類は208点出土しており、当遺跡出土の木器・木製品の器種で最も多量である。破片が多く、実測が可能であった118点について、以下において考察を試みる。

当遺跡における曲物の出土傾向は、底板・蓋板類の出土が多く、側板が結合した状態で出土しているものは少数である。側板との結合方法は、樹皮綴じが推定のもも含めて80点、木釘綴じが9点で、その他は不明である。樹皮綴じが大半を占めていることから、結合方法から樹皮綴じが蓋板、木釘綴じが底板といった作り分けがなされていたとは考えがたく、樹皮綴じ結合の蓋板・底板が主体をなしていた

表15



と考えられる。表15の通り、当遺跡の曲物は、径16～21cmのものが63%を占めており、規格性が高かったと考えられる。また、材質はヒノキが72%を占めている。他の部材などにもヒノキの製品が見られることから、当遺跡周辺で製作された可能性も否定できないが、当時の植生から考えると、関東山地もしくは関東地方以西からの搬入品である可能性が高い（付章「栗島遺跡出土木材の樹種」能城、佐々木参照）。

出土点数から、当遺跡周辺において曲物が生活の中で多量に使用されていたことは、確実である。径20cm未満の曲物容器に食膳具の互換品としての用途が指摘されており¹⁰⁾、当該地方の奈良・平安時代の食膳具の器種構成を考えていく上で、曲物が使用されていた可能性も視野に入れていく必要がある。しかしながら、大量の曲物が出土しているという点は、それ以外の用途も想定される。軽量である点から、中に何か物資を入れて、遺跡周辺に運び込まれた可能性も否定できない。また、紡織具の出土から考えると、中世の『春日権現験記絵』などからもうかがい知ることができるように、中に麻糸を入れて、紡錘車で紡いだり、杵に巻き付ける際に苧桶として使用されていた可能性も考えられる。いずれにせよ、大量の曲物を消費するだけの生産活動が営まれていたと言える。

③ 甑

当遺跡からは、甑の底板が13点出土している。径13cm前後と18cm前後の2法量に分類される。中央部に1か所円孔が穿たれ、その径は1.0cmから2.5cmほどである。側板との結合方法は、推定も含めて樹皮綴じが8点、木釘綴じが2点、不明3点である。

特徴的なものでは、W212が中央部の円孔に加え、中心から放射状に刃物による切り込みがなされている。また、その切り込みに沿って、長さ3cm、幅5mmほどの長方形孔が2か所現存している。これは、甑としての機能を高めるために、細工されたのではないかと考えられる。

当該期には、口径がおよそ15cm前後、20cm前後の甕が多く見られる¹¹⁾。このことから、当遺跡出土の甑の径の大きさは、当時使用していた甕とともに使用されていたと考えて差し支えはないだろう。

しかし、木製甑と土製甑の間で、米を蒸すには機能上大きな差異がみられないという実験結果がある。¹²⁾ 今回の木製甑の出土量も多量とは言えず、土製甑とともに併用されていたと考えられる。どのような使い分けがなされていたのかについては、今後の出土量を待ち、課題解決への手がかりとしたい。

④ 紡織具

紡織具は、糸巻、杵類、織機腰板が出土している。さらに、当該期に属すると考えられる紡錘車も5点（石製2、土製2、鉄製1）が出土している。特に第2号溝跡から出土している紡錘車（Q53）は、外面に漆が塗布されており、特筆される。

紡織の生産過程は製糸と製織に分けられる¹³⁾。当遺跡出土の紡織具は、杵、紡錘車が製糸具、糸巻、織機腰板が製織具に分類される。これらの遺物の出土から、当遺跡周辺において、製糸から製織までの一連の紡織の工程が行われていたと推定される。

当地での生産物は、紡錘車、杵が出土していることから、麻糸から布が織られていた可能性が高い。さらに、糸巻は絹織物の生産にも使用されることから、絹糸の生産が行われていた可能性も推測することができる。常陸国は、絹に関しても和銅6年（713）に布と併せて緇の貢納国となっており、『常陸国風土記』に「もしも人々が農作業に励み、その余力を養蚕に尽くすものがあるとしたならば、たちどころに裕福になり、自然に貧しさから逃れることができる」とあるように広く、野産ではなく養蚕技術がともなった絹織物生産が行われていたと考えられる¹⁴⁾。当該地域を流れる小貝川は「蚕飼川」「子飼川」と

記された時期もあり、周辺地域においても蚕の生産が行われていたことを物語っている。

次に、生産の体制であるが、調庸物のような規格にあったものを織るのには、自給用の織機では不可能であり、国衙・郡衙に下属する工房において、特定の技術を保有する者が生産していたとされている¹⁹⁾。また、長野県更埴市屋代遺跡出土の木簡の「布手」という文字と「一」の符号から管理者が存在したことが指摘されており¹⁹⁾、当遺跡においても、紡織具の出土量自体は多くはないが、一連の工程が管理下で行われていた可能性も考えられる。

また、糸巻には「□□奉」の墨書が確認され、注目される。民俗例の糸巻を観察すると、名前や「匁」など糸の容量が、外面に墨書もしくは焼き印されたものがある。今回確認された墨書は、「奉」という文字の別の字形と考えられ、民俗例のような実用性があるものではなく、また違った意味が想定される。「奉」という文字は、様々な字形が確認されており、平川南氏は「墨書土器の本来の記名目的として神仏に“タテマツル”行為を示す「奉」の文字は、最も列島内各地に浸透した記号といえる。それゆえに「奉」は記号化され、さまざまな字形を生み出したと考えられる。」としている¹⁷⁾。文字から祭祀行為との関わりも考えられるが、詳細は不明である。ただし、墨書が施された貴重な資料と言えるであろう。また、糸巻としての機能を終えた後、火鑽臼に転用されている点も古代の木の利用法として興味深い点である。

⑤ 挽物

椀が1点、皿が7点出土している。皿は高台の形状から環状高台、台状高台、無台の3種類に分類される。切り取ってしまったためか、ロクロのツメ痕は確認できなかった。また、規格性はあったものと考えられるが、遺存状態が不良のため明確にはできなかった。

一般に挽物に使用される木材の樹種は、ヒノキ、ケヤキ、トチノキが適しているとされている¹⁸⁾。しかし、今回、当遺跡で出土した挽物製品の樹種は、ムクロジ、サクラ属各2点、ナナカマド、キハダ、サカキ、カツラ各1点と通常は使用されないことが多い樹種が含まれている。

また、挽物の出土する遺跡は、官衙の様相を示す遺跡、有力集団の居宅を示す遺跡、祭祀にかかわる遺跡、木工生産に関わる遺跡が多い。一般的な集落での出土例が少なく、公共施設で土器類とともに食膳具として用いられていたとされている。当遺跡で挽物が出土している点は、遺跡の性格を考える上で重要である。

さらに、東日本における挽物生産は、8世紀第2四半期以降、「官」における在地生産が開始されたとされている¹⁹⁾。そして、国衙工房や郡衙工房は、それぞれ国衙、郡衙から10km圏内の丘陵地や河川流域に存在することが指摘されている²⁰⁾。当遺跡出土の挽物が、一般的な樹種と違いがあることから周辺で確保された樹木を使って挽物生産を行っていた可能性も考えられる。郡衙からの距離・立地は他の生産遺跡の条件に該当しており、河川を利用した物資の集積を考えれば、周辺に工房が存在した可能性もうかがえる。しかし、挽物の未製品や挽物生産の際に削り出される栓状木製品などは確認されておらず、あくまで可能性の範囲に留めておきたい。

⑥ 鋏

鋏は身が6点と柄の未製品が1点出土している。形態変化の少ない木製品のなかで、鋏類は、時期による形態変化及び地域差が顕著な遺物である。当遺跡出土の鋏の身は、大きく2種類に分類される。共に曲柄タイプのもので、軸部と柄部の接合部の形状が、ナスビ型を呈しているもの(W37・W38)、軸部に段状の削込があるもの(W39・W40)に分けられる。W41・42については、欠損が激しく分類不能で

ある。これまでに、茨城県域における鋤類の出土例がほとんどなく、当該地方の形態変化の特徴を捉えることは困難であるが、他県の編年から W37が6～7世紀代、W38が7～8世紀代で古墳時代後期から終末期にかけて、W39・W40は8～9世紀代と時期を比定することができる²⁹⁾。今後、県域において、木製農耕具の出土が増加することで、時期がさらに明確になっていくであろう。

⑦ 大足

大足は、杵木3点、足台1点、横木4点、小口板4点が出土している。奈良・平安期の当遺跡周辺には、水田が広がっていたと考えられ、当該地方の水田耕作において大足が使われていたことが分かった。プラントオパール分析からも、周辺で水田耕作が行われていた可能性が高い。しかしながら、遺跡内において、遺構として水田を確認することはできなかった（付章「栗島遺跡におけるプラント・オパール分析」古環境研究所参照）。大足は牛馬の入らない湿田での代掻き、肥料踏み込み時に使用していたとされ²⁹⁾、周辺の水田が湿田であった可能性が高いと思われる。

⑧ 竪杵・横槌

竪杵・横槌類は、竪杵が4点、横槌が4点出土している。用途不明品である W340も形状は、竪杵状を呈しており、同様の使用方法であった可能性もあるが、詳細は不明である。当遺跡出土の第1号木簡には「春米」の文字が確認され、当遺跡周辺において、これらの竪杵・横槌類を用いて脱穀や脱桴などの作業が行われていたと考えられる。

⑨ 鎌

鎌の柄は4点出土している。鉄刃は出土していない。古代においては、鎌を使用していないときには、鉄刃ははずして、集落の中心的な家で保存されていたとされている。神奈川県秦野市草山遺跡や東京都多摩ニュータウン no. 769遺跡の竪穴住居跡から、複数の鉄刃が柄から離され、向きを合わせて重ねた状態から出土している²⁹⁾。当遺跡においても、鉄刃は管理されており、鎌の柄のみが廃棄された可能性が考えられる。

⑩ 木錘・目盛り板・編み台

木錘が5点、目盛り板1点、編み台2点が出土している。木錘は、ア 側面中央に両側から切り込みを入れたものが2点 (W68・W69)、イ 丸太で両端に加工が施されたものが2点 (W70・W72)、ウ 丸太で両端が加工されているが樹皮がついているものが1点 (W71) 出土している。奈良文化財研究所『木器集成図録 近畿原始篇』によれば、木錘は大きく5つに類型化されており、当遺跡のアのタイプのものは、第2類に分類される²⁹⁾。イ、ウについては含まれていない。イ、ウのタイプのものは、渡辺誠氏が民具資料を含めた類型化の中で取り上げているが、遺跡から出土した遺物にはみられないとしている²⁹⁾。当遺跡から出土したイ、ウのタイプのものは、未製品である可能性があるが、民俗例として、丸太のまま無加工の形態の物が存在する以上、実際に使用されていた可能性も十分に考えられる。今後の類例を待ちたい。

目盛り板は上面に切り込みが4か所残存しており、外側から1.7cm、12.3cm、6.3cmと不規則な幅である。渡辺氏は、目盛り板の切り込みの幅から、その使用用途を類型化し、1cm前後が編布、2cmから数cmが紙漉き用の簀の子、10～20cmが米俵や炭俵など、15～30cmが雪囲い用の簀としている²⁹⁾。その類型化からいくと、当遺跡の目盛り板は、不規則ではあるが、細かい間隔でも切り込みを選択して使えば間隔の調節ができるとすれば、米俵類を製作していたとすることが妥当ではないかと考えられる。また、当遺跡から出土した農耕具とのかかわりからもそのように考えることができるであろう。

⑪ 祭祀具

祭祀具は、斎串2点、刀形形代4点、剣形形代1点、武器形形代5点が出土している。斎串は、宮都で出土する板状で切り込みの入るものとは違い、ヒノキの角材の先端を斜断状に加工したものである。同じ筑西市内の館野遺跡で井戸跡から出土した板状木製品が斎串と報告されているが、それとは形状が異なる²⁹⁾。また、形代類は調査区の制限があるためか、刀形、剣形、武器形に偏った傾向が見られる。これらの使用法については、「斎串が結界を示すのに対し、刀、剣などの武器形は、外部からの悪気を防ぎ、祭場を神聖に保つために使われたのだろう」とされているように、それぞれが単独で使用されるのではなく、組み合わせて使われていたと想定される³⁰⁾。

⑫ 火鑽臼・火鑽杵

発火具として、火鑽臼、火鑽杵が出土している。用途が限定されているものは、W244の火鑽杵、W245の火鑽臼である。しかしながら、曲物を中心に火鑽臼として転用されている木製品が数点出土している。このことから、壊れた木製品をそのまま捨てるのではなく、火鑽臼として転用することが、当時の人々の生活の中で、日常的に行われていたと考えられる。

⑬ 彫刻入板材

彫刻入板材は、6区の覆土中層から出土している。片面には魚を上面から、もう片面には側面から描いたと見て取れる彫刻画が施されている。両面とも魚の腹部に線状の表現が見られ、鱗を表現したもののように見える。祭祀にかかわる遺物の可能性もあるが、用途は不明である。板材そのものは、両端が切断された破材で、もともと何かの製品として使用されていた可能性もある。

木への彫刻、線刻による絵画表現は、弥生時代に多くの類例が見られ、動物や人物、家、船などの具体的なモチーフを描くものと記号や幾何学模様など象徴的なものを描くものと分けられることができる³⁰⁾。魚をモチーフとして線刻、彫刻された絵画は、弥生時代で、青谷上寺地遺跡の絵画板や琴の側板、兵庫県袴狭遺跡のサケ、シュモクザメが彫刻された箱板などがある。また、奈良時代では平城宮の隼人の盾に魚の絵が刻まれている³⁰⁾。

あくまで推測の域を超えないが、管状土錘の多量の出土からも当遺跡の流路においても漁労活動が営まれていた可能性は高い。人々の自然への畏敬の念や豊漁への願いなどの心象が表現されたものと考えられるであろう。

(2) 栗島遺跡出土の文字資料について

① 墨書・漆書・刻書・ヘラ書き土器

当遺跡からは、第1号流路跡を中心に墨書・漆書・刻書・ヘラ書き土器が224点出土している。内訳は、墨書200点、漆書17点、刻書3点、ヘラ書き4点である。

まず、墨書土器について考察する。県内の1遺跡での出土点数では、鹿嶋市鹿野向遺跡の519点、つくば市東岡中原遺跡の214点に次ぐ出土点数である。大半が流路からの出土であるため破片が多く、文字の内容が判読できないものが多いが、判読可能なものは100点、36種で、同じ文字が多数を占めていることが分かる。時期は、8世紀前葉から9世紀後葉までの時期に比定されるが、特に8世紀中葉から9世紀前葉のものが多く確認されている。須恵器と土師器では、須恵器188点、土師器12点で、大部分が須恵器である。器種ごとの点数では、須恵器が坏181点、高台付坏10点、盤5点、蓋4点、土師器が坏12点と坏への墨書が多いことがわかる。ただし、破片が多いため、坏としたものに高台付坏が含まれている可能性もある。表16に示したように、須恵器の坏は体部外面への墨書が多い傾向があり、76%が

体部外面である。坏の体部外面の墨書方向は、確認できたもので、横位が48点、正位が10点、逆位が1点である。そして、底部外面は24%と余り多くはない。また、底部内面に墨書されたものが3点あり、これらは、供膳具として使用することを前提としなかったのではないと思われる。高台付坏は10点であるが、内8点が底部外面で、底部外面の割合が高い。土師器の坏は内面に黒色処理がされた9世紀代の坏で、点数は12点と少ないが、10点が体部外面で、文字方向は、確認された3点とも横位である。盤・蓋は底部及び天井部の外面が大半であり、盤の底部内面に書かれたものは習書と考えられ、日常的に文字を書く仕事に従事していた人々の存在が想定される。

以上のような当遺跡の墨書土器の出土傾向を、県内の他遺跡の墨書土器の出土傾向と比較していくと、時期は、県内では8世紀前葉に出現し、9世紀中葉から10世紀にかけて飛躍的に増加することが指摘されている。しかし、当遺跡の墨書土器は、8世紀中葉から9世紀前葉にかけてのものが多いことから、早い時期に墨書土器が数多く出現したといえる。また、他遺跡では、須恵器の場合、底部に墨書されることが多いが、当遺跡では、体部が多く一般的な傾向とは違う様相が見られる³⁰⁾。

次に墨書の内容について見ていくことにする。まず、当遺跡で注目すべき墨書土器は、第1号水場遺構の南東1mほどの地点から出土した「意生坊長」と墨書された須恵器の高台付坏である。また、これに関連した文字は、「十意生」「十意」「意生十」「億生西」「意生」「意」「生」などが確認されている。さらに、「意布片山」「意布」「布」などの文字もあり、共に「オウ」と発音すると考えられる。「意」「生」「布」など単独で確認されたものも、破片であるため、それぞれ「意生」「意布」であった可能性は高い。後述するが、第5号木簡にも「意生□長カ」という文字が確認されている。あくまで、推測の域を超えないが、「意生坊長」＝「意生郷長」の可能性もあり、当遺跡において「意生」「意布」という氏族または郷が存在した可能性が考えられないだろうか。当遺跡からは、「伊佐郷」の記名のある木簡も出土しており、『倭名類聚抄』においても伊讚（佐）郷に比定されている。しかしながら、『倭名類聚抄』に記載されていない郷が多く確認されているという事実を踏まえると、伊佐郷以前もしくは同時期に意生郷又は意布郷が当遺跡及びその周辺に存在した可能性も否定はできないであろう³⁰⁾。

また「真里」という墨書土器も4点見られる。単独で確認された「真」「里」という墨書もおそらく「真里」であったのだろう。当該期の常陸国では、「真野里」「真野郷」などの名称が確認されていることから、里の名称であった可能性があると思われる³⁰⁾。

さらに、漆書は、17点確認されている。確認された文字は、「十」「①」「卩」である。これまでに、茨城県内においては、漆書土器は3点確認されており、石岡市の鹿の子C遺跡で1点「七」、東岡中原遺跡で2点「十」「□」である。当遺跡の漆書の数は、県内では最多であり、他の漆付着や漆塗りの遺物、漆材を使用した木製品の出土と併せて、遺跡周辺での漆にかかわる手工業の存在が想定される³⁰⁾。また、

表16

種別	器種	墨書か所数	墨書部位	点数	計
須恵器	坏	1か所	体部外面	126	169
			底部外面	2	
			底部外面	37	
		2か所	体部外面	3	
			底部外面		
			体部外面 底部内面		
	高台付坏	1か所	体部外面	2	10
			底部外面	8	
	盤	1か所	底部外面	1	5
			底部内面	1	
2か所		体部外面	2		
		体部外面 底部内面			
蓋	1か所	天井部外面	4	4	
土師器	坏	1か所	体部外面	1	12
			体部内面	1	
			底部外面	10	
合計					200

鹿の子C遺跡、中原遺跡ともに、国衙、郡衙にかかわる遺跡であることも、当遺跡の性格を考える上で興味深い。

② 木簡

当遺跡からは、合計5点の木簡が出土している。それぞれ第1号流路跡からの出土であり、時期は8世紀前葉から9世紀中葉と考えられる。それぞれの木簡について、以下において出土状況及び性格について述べることにする³⁰⁾。

第1号木簡は、8区の東部下層の砂層上から、表面を上面にして出土した。表面に「伊佐郷春米卅一斛白六石」裏面に「□□米料八百廿束□□□」と墨書されている。下部は欠損している。当遺跡の周辺は、『倭名類聚抄』によれば、新治郡の伊讚郷に比定されており、伊佐（讚）郷が記名された木簡の出土は、当遺跡周辺が伊佐郷であったことを裏付ける資料になると思われる。

木簡の内容は、国衙または郡衙に納められた春米の料が記された帳簿類と考えられる。この木簡から、当遺跡周辺において、春米活動が行われていたことは明らかであり、流路からの竪杵や横槌の出土もそれを裏付けるものといえる。春米活動を行う時期については、日常的に行っていたとする考えと農閑期に行ったという考えがあるが、いずれにせよ収穫した穎稲などを保存しておくための建物が周囲にあったことが想定される。また、租や出挙は、穎稲または穀で納められていた³⁰⁾ことから、なんらかの理由で国または郡から春米が徴収されたものと考えられるだろう。

第2号木簡は、9区の水場遺構の南東4 mほどの地点から表面を上面に出土している。両端に2か所ずつ一対の切り込みが入れられている。「大」「天」の文字が連続して書かれた習書と考えられる。本来は、別の用途の木簡であったと推定されるが、使用を終えた後、習書に再利用されたと考えられる。また、このように「大」「天」が続いて習書された木簡は、平城宮や伊場遺跡からも同様の習書が出土している。

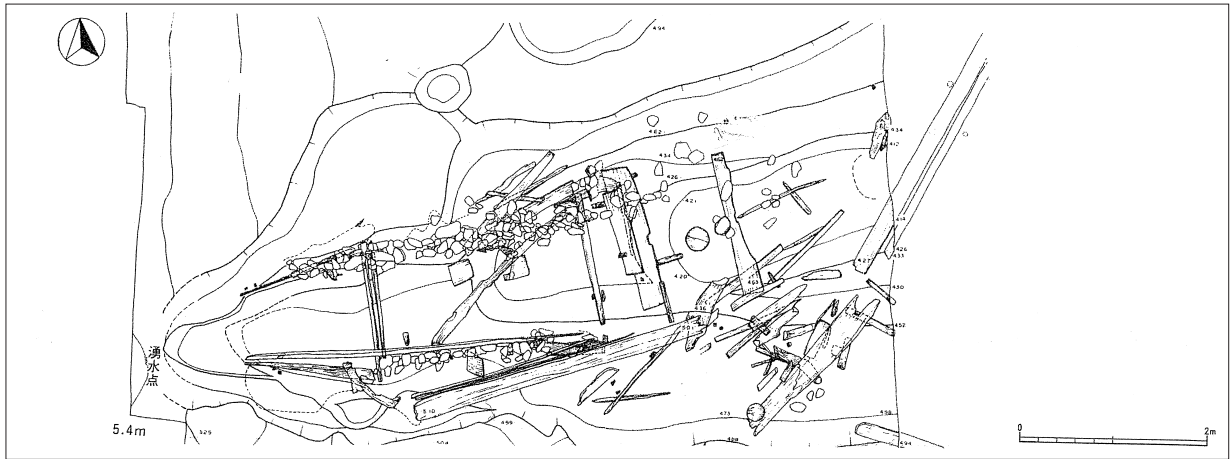
第3号木簡は9区の覆土中から出土している。注目される点は「乙巳（年九カ）」と年紀が記されている点である。9区の土器の出土状況から考えると、「乙巳年」は天平神護元年（765）もしくは天長2年（825）が推定される。『茨城県史年表』によれば、天平神護元年（765）は、日照りの為、調庸の内10分の7・8が免除され、さらに飢饉のため、賑給されるなど、天変地異による農作業の被害があった年である。当木簡は上部、下部が欠損しており、一部しか文字が判読できないため、全容は明確ではない。「五十」「束」などの文字から、出挙にかかわる木簡の可能性も考えられるが、詳細については今後の課題である。

第4号木簡は、全面が削られており、片面に「卅」「卅」の文字が確認された。また、その下部と裏面に墨痕が確認された。性格は不明である。

第5号木簡は文書の整理のためと考えられる小孔が上部に穿孔されている。裏面には、途中まで穿孔しやめたと考えられる未完通の小孔が確認された。表面に二列にわたって文字が書かれていたと推測され、「意生□長カ」の文字が確認された。同じ流路跡から出土している墨書土器のとの関係が想定される。当木簡は、文書木簡と考えられる。

(3) 第1号水場遺構について

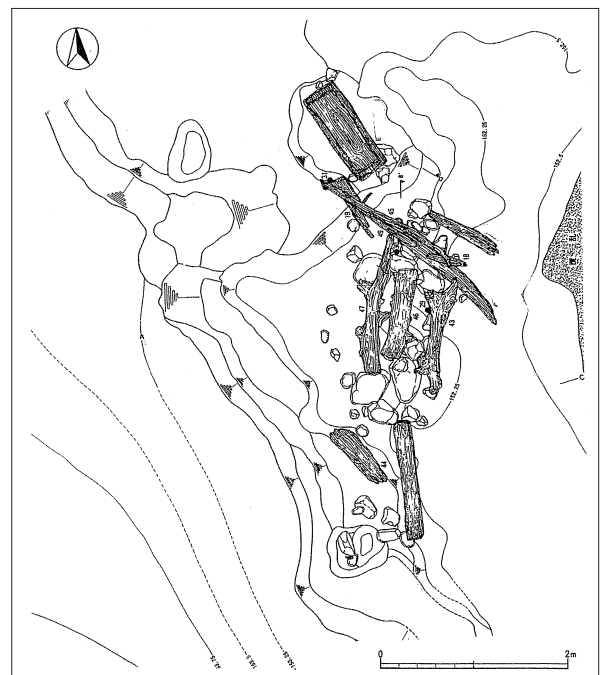
水場遺構は、縄文時代から様々な機能及び形態のものが全国で確認されている。その多くは、河川の流水を利用したものと湧水を利用したものに大別される。当遺跡の水場遺構は流路に面してはいるが、湧水を利用した水場遺構である。湧水点を掘り込み、把手付槽（田舟）や板材、丸木材で、木枠を井桁状に構



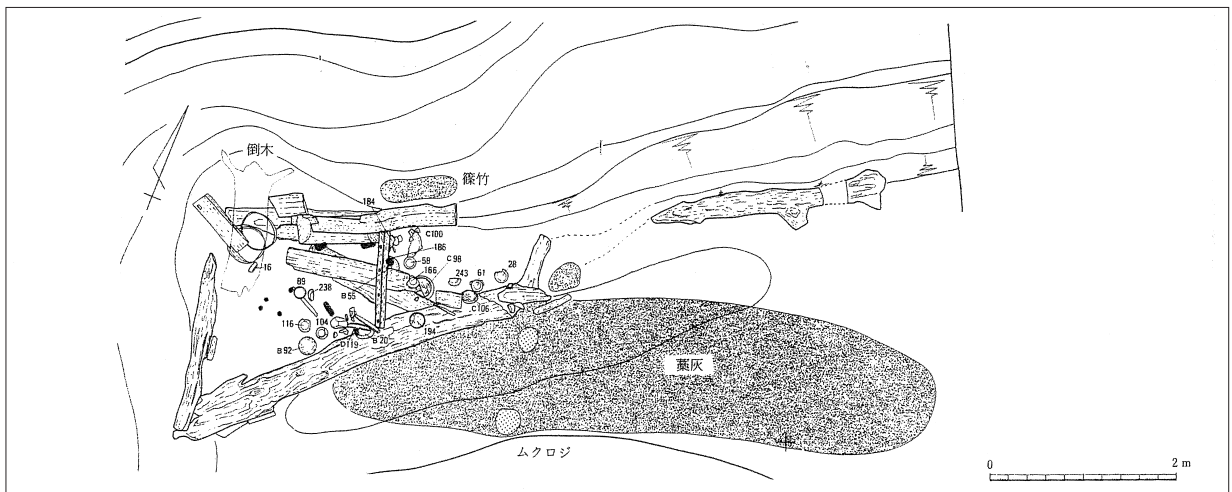
荒木田遺跡 水場遺構 (註37より転載)



青木遺跡 石敷き井泉遺構 (註38より転載)



多摩ニュータウン遺跡 No. 960遺跡水場遺構 (註40より転載)



多摩ニュータウン遺跡 No. 107遺跡水場遺構 (註41より転載)

第198図 水場遺構出土例

築し、貯水部を構成している。抉りのある板材から、貯水部に溜まった水が流れ出す構造になっており、常に清らかな水が確保されたと考えられる。木枠の内・外部には大礫・中礫を敷き詰めて、周囲にも敷かれているのは、木枠の固定に加え、常に水場を清潔に保とうとしたものと考えられる。同様の構造は同時期では、石川県小松市荒木田遺跡の水場遺構が挙げられる³⁹⁾。荒木田遺跡の水場遺構は、湧水点から流れ落ちた水を木枠の中に貯水し、当遺跡と同様にV字状の抉り部が削り出された堰板から、溜まった水が流れ落ちていく構造になっている。木枠の内・外部に礫を敷いている点など共通している。島根県出雲市の青木遺跡の石敷き井泉遺構も同様の構造で、木枠の一つに切り込みを施し、溜まった水が流れ出す構造で周囲に石敷きがされている³⁹⁾。このような構造は、水場遺構の形態的特徴の1類型と見なす事ができるであろう(第198図参照)。

また、当遺跡の水場遺構の木枠を構成しているそれぞれの部材は、すべてモミ材が使用されている。特に、把手付槽(田舟)を解体して使用している点が特筆される。当該期において、大型の部材の確保は困難であり、木材の再利用が試みられていたことがわかる。このような類例は、東京都伊興遺跡で古墳時代の井戸跡の枠材に構造船が利用された例³⁹⁾や、多摩ニュータウン No. 960遺跡(第198図参照)で水場遺構に破損した槽を利用している例⁴⁰⁾などに求めることができ、そこに大型木材の再利用の様相が見て取れる。

さらに、当遺跡の水場遺構において、注目されるのは、その周辺からの夥しい数の土器、木簡、木器・木製品の出土であろう。特に、土器は須恵器が投棄された状態で出土しており、その中には多量の墨書土器も含まれている。このような水場遺構周辺での遺物の大量投棄の例は、前述した荒木田遺跡や多摩ニュータウン no. 107遺跡の水場遺構に見られる⁴¹⁾(第198図参照)。どちらも、多量の墨書土器が出土しており、多摩ニュータウン no. 107遺跡では「官」などの文字が焼き印された挽物の皿が出土している。このような遺物の大量廃棄は、祭祀と結びつけて考えられ、春日祭日の日の郷飲酒礼にかかわると言われる。『常陸国風土記』、新治郡の条に「新しい井を治り、時々祭りをしている」という記述は、当該地方において、井や泉に対する祭祀行為の存在を示す内容である⁴²⁾。祭祀の目的や祭祀の主催者については明確にはできないが、以上のような類例、遺物の出土状況に加え、前述した斎串や形代などの祭祀具の出土から、祭祀行為が行なわれていたと考えられる。

当遺跡の水場遺構は、構造上、新鮮な水の確保を目的に構築されたものと考えられる。周囲の人々が生活や手工業を行なう中で共有され、時には、祭祀行為を含む様々な行事が行われていた特別な「場」であったのではないだろうか。このように当遺跡の水場遺構は、地域社会において重層的な意味をもつものとして存在していたと考える。そして、この水場の放棄が集落の解体や移動を意味しているものと考えられる。その背景には周辺環境・社会的状況の変化が考えられるであろう。

3 小結

栗島遺跡は、縄文時代、弥生時代を通して、生活の痕跡がうかがえ、古墳時代前期に本格的に集落が形成される。その集落は他の地域から入植してきた人々であった。そして、一旦集落が途絶えた後、5世紀末葉～6世紀初頭に再び集落が形成される。その後、7世紀代にも集落が形成されるが、当遺跡の調査区外に広がっていた。奈良・平安時代には、住居跡などの集落は確認されなかったが、第1号流路跡から出土した夥しい数の遺物から、周辺に集落が形成されていたことが明らかになった。

第1号流路跡の遺物から、当遺跡周辺の集落の様相を考えると、水田耕作、紡織、漆工、鍛冶等の手工業が営まれていたことが分かった。前述したように、国衙、郡衙などの公共施設で管理されていたと考えられている手工業に関連した遺物が出土している点は、当遺跡の大きな特徴である。

また、木簡の出土から、当遺跡周辺において、文書による行政が行われていたと考えられ、墨書土器や木簡に見られた習書からも日常的に文字を書く仕事に従事していた人々の存在が考えられる。当遺跡出土の墨書土器の点数、また文字を書き慣れた人物によって書かれたと推測される墨書土器の字体も、それを裏付けるものになるであろう。また、第1号木簡の内容から、当遺跡周辺においては、春米活動が行われていたことがわかった。春米活動には、多くの労働力が必要とされ、やはりそれを管理し、春米を国または郡に貢納していたと思われる。

以上のような、出土遺物から考えていくと、当遺跡周辺において、郡衙の出先機関もしくは別院の存在が考えられる。そして、第1号水場遺構は、そのような施設や周囲の人々によって、日常の生活の中で飲料水や生活用水、手工業のための用水として活用されると共に、この場において、祭祀を含む様々な行事が執り行われていたと考えられる。この水場は地域社会を繋ぐ存在だったのではないだろうか。この水場遺構が放棄されたと考えられる9世紀中葉以降は、常陸国では自然災害が頻発したり、再び蝦夷の反乱による緊迫した社会情勢があるなど不安定な時期であったと言われている。この様な時代背景の中でこの水場が放棄され、違う場所に周辺の施設や集落が移っていったと考えられる。

以上、栗島遺跡の性格を少しでも明確にできるよう、推測を重ねながら遺構・遺物の考察を試みてきた。今まで県内において、出土例の少ない遺物が多く、明確にならなかった点も多い。新たな類例の増加をまち、今後明らかにしていきたいと考える。また、当遺跡の遺構や遺物については、まだ多くの議論の余地が残っており、今後、様々な見地から多面的に考察されていくことが望まれる。

註

- 1) 千代川村教育委員会『下栗野方台遺跡』千代川村教育委員会1993年3月
石丸敦史「野方台遺跡の再検討(1) -古墳時代前期その1-」『専修考古学』第9号 専修大学考古学会 2002年11月
石丸敦史「野方台遺跡の再検討(3) -古墳時代前期その2 土器製作体制の基礎的考察-」『専修考古学』第10号 専修大学考古学会 2004年12月
鈴木芳英「小貝川・五行川流域における古墳出現期の土器様相」『唐澤考古』23 唐沢考古会 2004年5月
今平利幸「下野における古墳時代前期外来系土器の波及と定着」『栃木県考古学会誌』栃木県考古学会 2000年5月
- 2) 片根義幸・藤田直也「古墳時代前期の甕形土器について -栃木県における甕形土器の形態と消長」『研究紀要』第9号 財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2001年3月
- 3) 永井宏幸「内傾口縁土器と厚口鉢」『まいぶん愛知』no.72 愛知県埋蔵文化財センター 2003年3月
- 4) 菱田哲郎『須恵器の系譜』講談社 1996年9月
- 5) 大西智文「外塚遺跡の地理的環境の復元」『外塚遺跡』下館市教育委員会 1985年3月
- 6) 茨城県弓道連盟会長柴田猛氏からご教示をいただいた。
- 7) 大和久震平編『七廻り鏡塚古墳』大平町教育委員会 1974年3月
同報告書では、実測図と観察表で、大きさに差異が認められた。大平町歴史民俗資料館で遺物を実見すると共に、郷土史料館名誉館長白石義昌氏にご教示を頂き、観察表に掲載されているものを基本とした。
- 8) 奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所 1984年3月
- 9) 渡辺博・清水みき「長岡京跡左京第162次(7 ANEKD 地区) ~左京二条二坊十五町、二条条間大路・東二坊大路交差点~発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書 第27集』財団法人向日市埋蔵文化財センター 1989年3月
- 10) 川畑誠「曲物容器の推移 -北陸地方を中心として-」『考古学ジャーナル No.404』ニューサイエンス社 1996年6月
- 11) 当遺跡においては、当該期の甕の出土は少なく、平均値を割り出すことはできなかった。同じ新治郡内の辰海道遺跡で出土した律令期の土師器の甕の口径は、平均18~22cmが67%、13~16cmが18%で、両者が85パーセントを占める。当該期の甕が口縁部をつまみ上げる受け口状のものが多いことから、多少口径が大きくても、甕のをせることは可能であったと考える。
- 12) かみつけの里博物館『古代の「蒸し器」を使ったら 土製・木製甕の使用実験』かみつけの里博物館 2004年7月
- 13) 東村純子「織物と紡織」『列島の古代史 ひと・もの・こと 5 専門技能と技術』岩波書店 2006年2月
東村氏は、律令期の地方の紡織体制を集落での製糸、郡衙工房での製織を分担した伊場遺跡型と製糸から製織まで一連の生産体制が導入された屋代遺跡型に分類している。屋代遺跡型は在地豪族の独自の生産体制を引き継いだと考えられている。一連の生産過程が想定できることから、当遺跡は屋代遺跡型と言える。
- 14) 河野辰男『口訳 常陸国風土記』筑波書林 1994年3月

- 15) 永原慶二『苧麻・絹・木綿の社会史』吉川弘文館 2004年12月
- 16) 平川南他『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 23 -更埴市内 その二- 長野県屋代遺跡出土木簡』(財)長野県埋蔵文化財センター 1996年3月
- 17) 平川南『墨書土器の研究』吉川弘文館 2000年11月
- 18) 島地謙・伊藤隆夫『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣 1988年5月
- 19) 飯塚武司「古代手工業生産における木工」『考古学研究』第47巻 第3号 考古学研究会 2002年12月
- 20) 大越道正他『常磐自動車道遺跡調査報告11 大猿田遺跡』財団法人福島県文化センター 1998年3月
大猿田遺跡は、いわき市の北部に位置し、古代磐城郡衙の根岸遺跡から9kmほど離れた場所に立地している。古代磐城群の出先機関もしくは末端官衙施設として、木器や鍛冶などの郡衙工房跡と考えられている遺跡である。出土した木簡の内容から、工房が組織的に管理・運営され、郷単位での労働力の提供及びその糧米を負担していたとされている。
- 21) 当遺跡の木器・木製品については、首都大学東京准教授山田昌久氏からご教示を頂いた。また、次の文献を参考とした。
東日本埋蔵文化財研究会他『古代における農具の変遷-稲作技術史から農具を見る-』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994年11月
樋上昇「木製農具の地域色とその変遷-勝川遺跡出土資料を中心として-」『年報』財団法人埋蔵文化財センター 1989年3月
大谷弘幸「木製農具の変遷と若干の問題」『研究紀要 23』財団法人千葉県埋蔵文化財センター 2003年3月
- 22) 東日本埋蔵文化財研究会他 前掲書
- 23) 註22に同じ
- 24) 奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿原始篇』奈良国立文化財研究所 1993年3月
- 25) 渡辺誠「もじり編み用木製錘の考古資料について」『考古学雑誌』第66巻 第4号 日本考古学会 1981年3月
- 26) 註25に同じ
- 27) 茂木悦男「館野遺跡 主要地方道下館つくば線緊急地方道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書 2」『茨城県教育財団文化財調査報告』第189集 茨城県教育財団 2002年3月
- 28) 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所『古代の官衙遺跡Ⅱ 遺物・遺跡編』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 2004年3月
- 29) 滋賀県立安土城考古博物館『王権と木製威信具-華麗なる古代木匠の世界-』滋賀県立安土城考古博物館 2005年4月
- 30) 佐原真・春成秀爾『歴史発掘⑤ 原始絵画』講談社 1997年11月
- 31) 川井正一「常陸国の出土文字資料」『古代常陸国シンポジウム-常陸風土記・国府・郡家-』古代常陸国シンポジウム実行委員会 2006年11月
- 32) 福島県いわき市根岸遺跡の「判祀郷」の木簡やつくば市柴崎遺跡「大垣郷」の墨書土器など、『倭名類聚抄』にはない郷名は多く確認されている。
- 33) 川井正一他「鹿の子C遺跡漆紙文書-本文編- 常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 5」『茨城県教育財団文化財調査報告』第20集 茨城県教育財団 1983年3月
- 34) FT-IR 分析の結果、漆と同定、またはその可能性が高いという結果が出た。漆付着の遺物については、観察表中で報告した。分析にあたっては、パレオ・ラボ藤根氏、佐々木氏に御協力を頂いた。
- 35) 当遺跡出土の木簡の判読及び釈文については大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館館長の平川南氏にご教示頂いた。
- 36) 早川庄八『日本古代の財政制度』名著刊行会 2000年7月
- 37) 北野博司他『荒木田遺跡』石川県埋蔵文化財センター 1995年3月
- 38) 今岡一三・平石充・松尾充晶『青木遺跡Ⅱ 弥生~平安時代編』島根県埋蔵文化財センター 2006年3月
- 39) 足立区伊興遺跡調査会『伊興遺跡Ⅱ』足立区伊興遺跡調査会 1999年3月
- 40) 金持健司『多摩ニュータウン遺跡-No.960遺跡』東京都埋蔵文化財センター 2002年3月
- 41) 竹花広之・福田敏一『多摩ニュータウン遺跡-no.107遺跡-』東京都埋蔵文化財センター 1999年3月
- 42) 註14に同じ

1. 試料

試料は茨城県栗島遺跡から出土した木簡4点, 工具1点, 農具27点, 紡織具2点, 武器1点, 容器24点, 祭祀具3点, 儀具1点, 雑具4点, 部材2点, 用途不明品3点の合計72点である。

2. 観察方法

剃刀で木口(横断面), 柾目(放射断面), 板目(接線断面)の各切片を採取し, 永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果の表と顕微鏡写真を示し, 以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) イチイ科カヤ属カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.)

(遺物 No. 5, 6, 40, 41a, b, 43, 65) (写真 No. 1)

木口では仮道管を持ち, 早材から晩材への移行は緩やかであった。晩材部は狭く年輪界は比較的不明瞭である。軸方向柔細胞を欠く。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1~4個ある。仮道管の壁には対になった螺旋肥厚が存在する。板目では放射組織はすべて単列であった。カヤは本州(中・南部), 四国, 九州に分布する。

2) イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ (*Cephalotaxus Harringtonia* K. Koch f. *drupacea* Kitamura)

(遺物 No. 52) (写真 No. 2)

木口では仮道管を持ち, 早材から晩材への移行は漸進的で, 晩材の幅は非常に狭く, 年輪界がやや不明瞭で均質な材である。樹脂細胞はほぼ平等に散在し数も多い。柾目では放射組織の分野壁孔はトウヒ型で1分野に1~2個ある。仮道管内部には螺旋肥厚が見られる。短冊形をした樹脂細胞が早材部, 晩材部の別なく軸方向に連続(ストランド)して存在する。板目では放射組織はほぼ単列であった。イヌガヤは本州(岩手以南), 四国, 九州に分布する。

3) マツ科モミ属 (*Abies* sp.)

(遺物 No. 11, 16, 26b, 42, 47b, 51, 63, 70, 71) (写真 No. 3)

木口では仮道管を持ち, 早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで晩材部の幅は狭い。柾目では放射組織の上下縁辺部に不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射柔細胞の壁は厚く, 数珠状末端壁になっている。放射組織の分野壁孔はスギ型で1分野に1~4個ある。板目では放射組織は単列であった。モミ属はトドマツ, モミ, シラベがあり, 北海道, 本州, 四国, 九州に分布する。

4) ヒノキ科アスナロ属 (*Thujopsis* sp.)

(遺物 No. 3, 4, 12, 18, 19, 23~25, 27, 29, 30, 32, 34, 35, 38, 39, 46, 47a, 56, 57, 59~62,

64, 68, 69, 72) 62, 64, 68, 69, 72) (写真 No. 4)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2~4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ(ヒバ, アテ)とヒノキアスナロ(ヒバ)があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州, 四国, 九州に分布する。

5) ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* Endlicher sect. *Cerris*)

(遺物 No. 7, 9, 20, 22, 28, 36, 44, 48) (写真 No. 5)

環孔材である。木口では大道管 (~430 μm) が年輪界にそって1~数列並んで孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、厚壁で円形の小道管が単独に放射方向に配列している。放射組織は単列放射組織と非常に幅の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。クヌギ節はクヌギ, アベマキがあり, 本州(岩手, 山形以南), 四国, 九州, 琉球に分布する。

6) ブナ科コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*)

(遺物 No. 15, 33, 54) (写真 No. 6)

放射孔材である。木口では年輪に関係なくまちまちな大きさの道管 (~200 μm) が放射方向に配列する。軸方向柔細胞は接線方向に1~3細胞幅の独立帯状柔細胞をつくっている。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織はおおむね平伏細胞からなり, 時々上下縁辺に方形細胞が見られる。道管放射組織間壁孔は大型で柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と放射柔細胞の塊の間に道管以外の軸方向要素が挟まれている集合型と複合型の間となる型の広放射組織が見られる。アカガシ亜属はイチイガシ, アカガシ, シラカシ等があり, 本州(宮城, 新潟以南), 四国, 九州, 琉球に分布する。

7) ブナ科クリ属クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

(遺物 No. 1, 26a, 31, 37) (写真 No. 7)

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管 (~500 μm) が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは2~3個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ, 軸方向要素として道管, それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり(ストランド), 軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道(西南部), 本州, 四国, 九州に分布する。

8) クワ科クワ属 (*Morus* sp.)

(遺物 No. 10, 41c, 50, 53, 55) (写真 No. 8)

環孔材である。木口では大道管 (~280 μm) が年輪界にそって1~5列並んで孔圏部を形成している。

孔圏外では小道管が2～6個，斜線状ないし接線状，集合状に不規則に複合して散在している。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。小道管には螺旋肥厚もある。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管内には充填物(チロース)が見られる。板目では放射組織は1～6細胞列，高さ～1.1mmからなる。単列放射組織はあまり見られない。クワ属はヤマグワ，ケグワ，マグワなどがあり，北海道，本州，四国，九州に分布する。

9) バラ科サクラ属 (*Prunus* sp.)

(遺物 No. 13, 14, 49) (写真 No. 9)

散孔材である。木口ではやや小さい道管(～100 μ m)がほぼ一定の大きさで，単独あるいは放射方向ないし斜方向に連なり分布している。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔及び螺旋肥厚を有する。道管内には着色物質が見られる。放射組織は同性ないし異性で中央部の平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなる。板目では放射組織は1～4細胞列，高さ～1mmからなる。サクラ属はサクラ，ヤマナシなどがあり，本州，四国，九州，琉球に分布する。

10) バラ科ナナカマド属ナナカマド節ナナカマド (*Sorbus americana* Marsh. subsp. *japonica* Kitamura)

(遺物 No. 45) (写真 No. 10)

散孔材である。木口は道管(～50 μ m)は単独ないし2～8個不規則に複合して平等に分布する。柾目では道管は単穿孔ないし階段穿孔，ときに網状穿孔を有する。1平方ミリメートルにおける道管の数は200以上。道管内壁にはほぼ水平に巻くらせん肥厚が見られる。軸方向柔細胞は短接線状ないしは散在状。道管放射組織間壁孔は小さく多い。放射組織は同性である。板目では放射組織は1～2細胞列，高さ～0.5mm以下。ピスフレックスが存在する。ナナカマドは北海道，本州，四国，九州に分布する。

11) ミカン科キハダ属キハダ (*Phellodendron amurense* Ruprecht)

(遺物 No. 8) (写真 No. 11)

環孔材である。木口では大道管(～300 μ m)が多列で孔圏部を形成している。孔圏外では小道管が散在，集団，波状に存在する。柾目では道管は単穿孔を持ち，着色物質，チロースが顕著である。小道管はさらに螺旋肥厚も有する。道管放射組織間壁孔は小型ないし中型である。放射組織は全て平伏細胞からなり同性である。板目では放射組織は1～5細胞列，高さ～500 μ mからなる。キハダは北海道，本州，四国，九州に分布する。

12) ニガキ科ニガキ属ニガキ (*Picrasma quassioides* Benn.)

(遺物 No. 21) (写真 No. 12)

環孔材である。木口では大道管(～250 μ m)が単独ないし多列で孔圏部を形成している。孔圏外では厚壁の小道管が単独ないし数個複合して散在する。軸方向柔細胞は顕著で，周囲状，翼状，連合翼状，帯状を呈する。柾目では大道管は単穿孔を有する。道管放射組織間壁孔は小型である。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。軸方向柔組織は細胞内に結晶を含み，階層状に配列している。板目では放射組織は1～5細胞列，高さ～500 μ mからなる。ニガキは北海道，本州，四国，九州，琉球に分布する。

13) ウルシ科ウルシ属 (*Rhus* sp.)

(遺物 No. 2) (写真 No. 13)

環孔材である。木口ではやや大きい道管 (~270 μm) が、単独または2ないし数個が集団で複合して孔圏部を形成している。孔圏外は単独ないし数個複合して散在している。軸方向柔細胞は周囲状が顕著である。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。放射組織は平伏、方形、直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は1~3細胞列、高さ~700 μm からなる。ウルシ属はヌルデ、ヤマウルシがあり、北海道、本州、四国、九州、琉球に分布する。

14) ツバキ科サカキ属サカキ (*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.)

(遺物 No. 17) (写真 No. 14)

散孔材である。木口では極めて小さい道管 (~50 μm) が単独ないし2~4個複合して平等に分布する。柾目では道管は階段穿孔と側壁に対列ないし階段壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏、方形、直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、高さ~1.5mm からなる。木繊維の壁には有縁壁孔が一行に多数並んでいるのが見られる。サカキは本州 (茨城、石川以南西南)、四国、九州に分布する。

15) ムクロジ科ムクロジ属ムクロジ (*Sapindus Mukorossi* Gaertn.)

(遺物 No. 58) (写真 No. 15)

環孔材である。木口ではやや大きい道管 (~300 μm) が数列で孔圏部を形成している。孔圏外では小道管が団塊状に集合している。軸方向柔細胞は幅の広い帯状をなして接線方向に連続している (帯状柔組織)。柾目では大道管は単穿孔と多数の壁孔を有する。道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。板目では放射組織は1~3細胞列、高さ~400 μm からなる。ムクロジは本州 (中南部)、四国、九州、琉球に分布する。

16) ヤマザクラ or カバの樹皮

(遺物 No. 66, 67)

木口と柾目ではコルク組織とコルク皮層が交互に並んで密に詰まっている。板目では細胞が放射方向に規則正しく配列している。しかし桜、樺の皮は顕微鏡観察での判別は難しい。

参考文献

島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版 (1988)

島地 謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社 (1982)

伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I~V」京都大学木質科学研究所 (1999)

北村二郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編 I・II」保育社 (1979)

深澤和三「樹体の解剖」海青社 (1997)

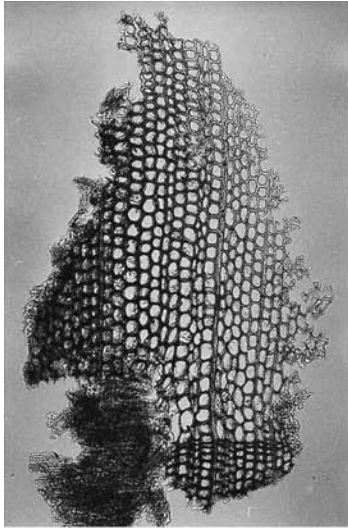
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」(1985)

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」(1993)

使用顕微鏡 Nikon MICROFLEX UFX-DX Type 115

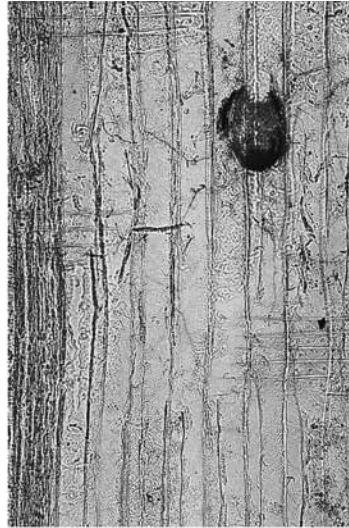
表1 栗島遺跡樹種同定一覧表

No.	遺物番号	品名	樹種	No.	遺物番号	品名	樹種
1	W19	編み台カ	ブナ科クリ属クリ	38	W50	大足小口板	ヒノキ科アスナロ属
2	W21	馬鋏	ウルシ科ウルシ属	39	W31	木筒	ヒノキ科アスナロ属
3	W27	甌	ヒノキ科アスナロ属	40	W84	弓	イチイ科カヤ属カヤ
4	W238	武器形形代	ヒノキ科アスナロ属	41	W45	a 田下駄(本体)	イチイ科カヤ属カヤ
5	W233	刀形形代	イチイ科カヤ属カヤ			b ヌ (破片)	イチイ科カヤ属カヤ
6	W51	大足小口板	イチイ科カヤ属カヤ			c ヌ (破片)	クワ科クワ属
7	W43	鋏	ブナ科コナラ属コナラ亜属クスギ節	42	W336	棒状木製品	マツ科モミ属
8	W87	挽物(皿)	ミカン科キハダ属キハダ	43	W79	糸巻	イチイ科カヤ属カヤ
9	W39	鋏	ブナ科コナラ属コナラ亜属クスギ節	44	W61	竪杵	ブナ科コナラ属コナラ亜属クスギ節
10	W339	円柱型木製品	クワ科クワ属	45	W86	挽物(椀)	バラ科ナナカマド属ナナカマド節ナナカマド
11	W57	鎌柄	マツ科モミ属	46	W234	刀形形代	ヒノキ科アスナロ属
12	W229	曲物杵木把手	ヒノキ科アスナロ属	47	W140	a 曲物底板・蓋板類	ヒノキ科アスナロ属
13	W92	挽物(皿)	バラ科サクラ属			b ヌ (側板)	マツ科モミ属
14	W340	竪杵状木製品	バラ科サクラ属	48	W36	篋	ブナ科コナラ属コナラ亜属クスギ節
15	W38	鋏	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	49	W88	挽物(皿)	バラ科サクラ属
16	W49	大足小口板	マツ科モミ属	50	W68	木錘	クワ科クワ属
17	W89	挽物(皿)	ツバキ科サカキ属サカキ	51	W82	織機腰板	マツ科モミ属
18	W335	彫刻入板材	ヒノキ科アスナロ属	52	W242	鳴鏝	イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ
19	W257	結合部材	ヒノキ科アスナロ属	53	W69	木錘	クワ科クワ属
20	W74	編み台支柱	ブナ科コナラ属コナラ亜属クスギ節	54	W59	鎌柄	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
21	W46	大足杵木	ニガキ科ニガキ属ニガキ	55	W70	木錘	クワ科クワ属
22	W303	部材	ブナ科コナラ属コナラ亜属クスギ節	56	W211	甌	ヒノキ科アスナロ属
23	W98	曲物底板・蓋板類	ヒノキ科アスナロ属	57	W133	曲物底板・蓋板類	ヒノキ科アスナロ属
24	W244	火鑽杵	ヒノキ科アスナロ属	58	W93	挽物(皿)	ムクロジ科ムクロジ属ムクロジ
25	W30	木筒	ヒノキ科アスナロ属	59	W245	火鑽白	ヒノキ科アスナロ属
26	W47	a 大足本体	ブナ科クリ属クリ	60	W184	曲物底板・蓋板類	ヒノキ科アスナロ属
		b ヌ 楔	マツ科モミ属	61	W185	曲物底板・蓋板類	ヒノキ科アスナロ属
27	W77	把手	ヒノキ科アスナロ属	62	W65	横槌	ヒノキ科アスナロ属
28	W40	鋏	ブナ科コナラ属コナラ亜属クスギ節	63	W97	釣瓶	マツ科モミ属
29	W221	曲物側板	ヒノキ科アスナロ属	64	W212	甌	ヒノキ科アスナロ属
30	W182	曲物底板・蓋板類	ヒノキ科アスナロ属	65	W48	大足小口板	イチイ科カヤ属カヤ
31	W95	剝物	ブナ科クリ属クリ	66	W250	帯状樹皮	ヤマザクラ or カバの樹皮
32	W187	楕円形曲物底板	ヒノキ科アスナロ属	67	W251	帯状樹皮	ヤマザクラ or カバの樹皮
33	W62	竪杵	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	68	W22	甌中板	ヒノキ科アスナロ属
34	W32	木筒	ヒノキ科アスナロ属	69	W100	曲物底板・蓋板類	ヒノキ科アスナロ属
35	W64	横槌	ヒノキ科アスナロ属	70	W96	把手付槽	マツ科モミ属
36	W44	鋏柄未製品	ブナ科コナラ属コナラ亜属クスギ節	71	W73	目盛り板	マツ科モミ属
37	W52	大足足台	ブナ科クリ属クリ	72	W34	木筒	ヒノキ科アスナロ属

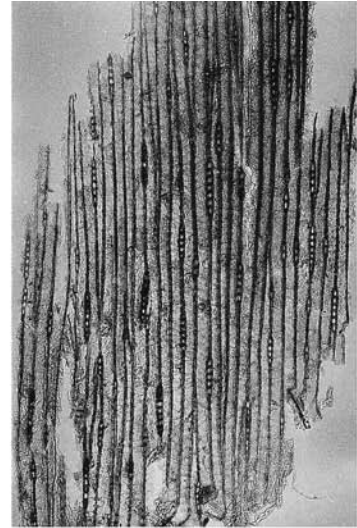


木口×40

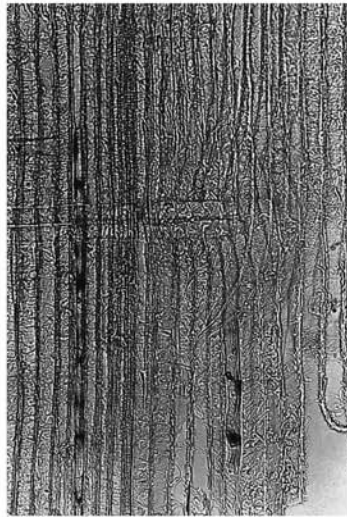
1) イチイ科カヤ属カヤ



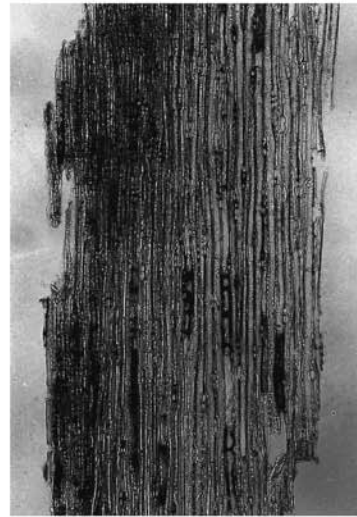
柁目×100



板目×40

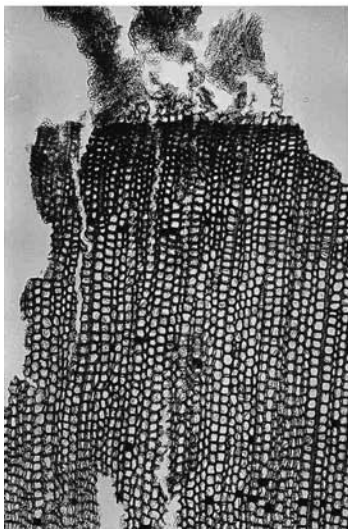


柁目×100



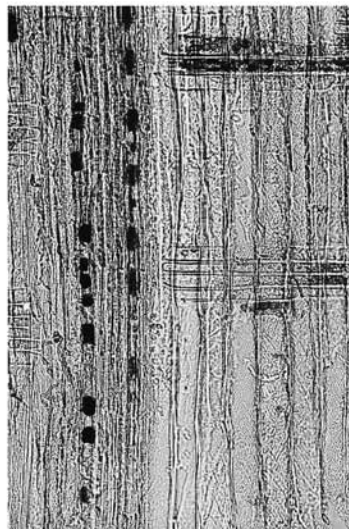
板目×40

2) イヌガヤ

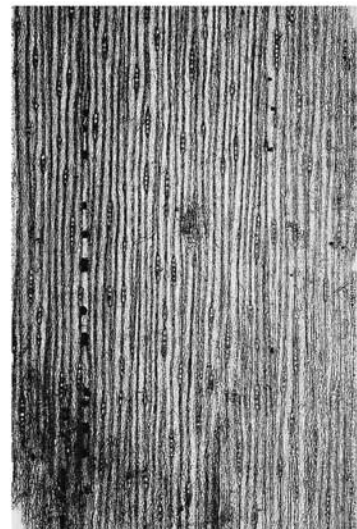


木口×40

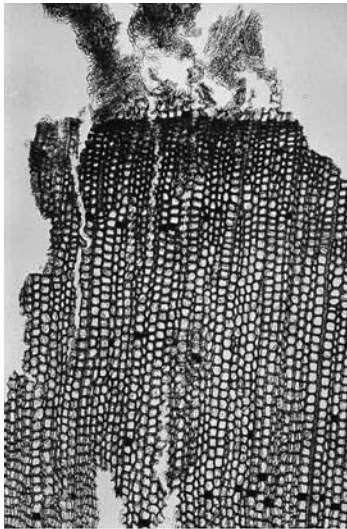
3) マツ科モミ属



柁目×100

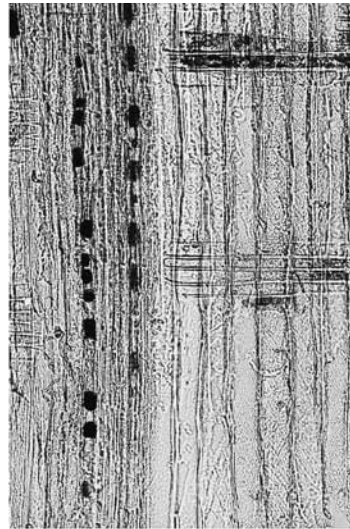


板目×40

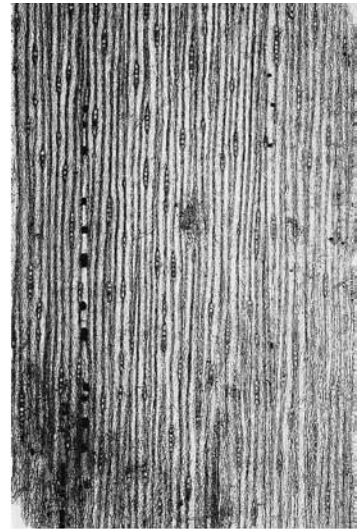


木口×40

4) ヒノキ科アスナロ属



柁目×100



板目×40



木口×40

5) ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節



柁目×100



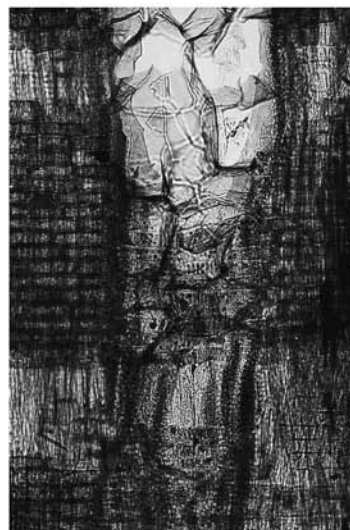
板目×40

2-9 鋏



木口×40

6) ブナ科コナラ属アカガシ亜属



柁目×100



板目×40

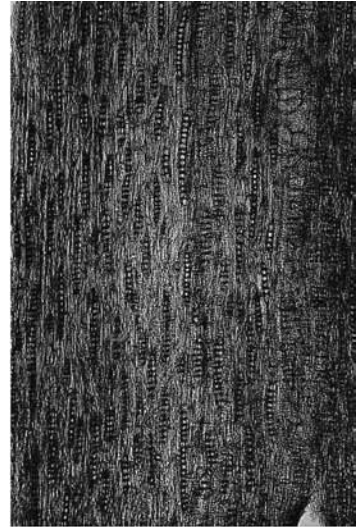


木口×40

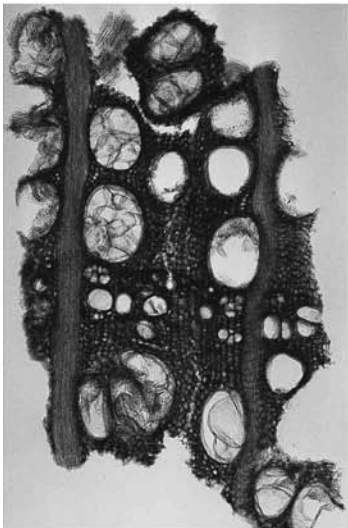
7) ブナ科クワ属クワ



柁目×100



板目×40



木口×40

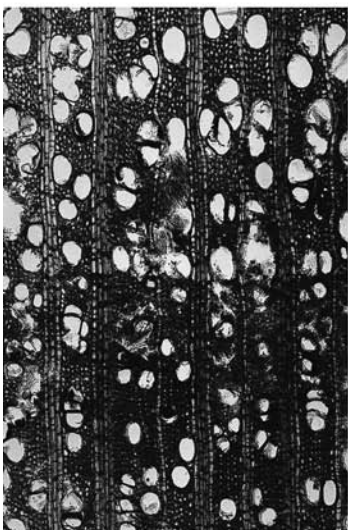
8) クワ科クワ属



柁目×100

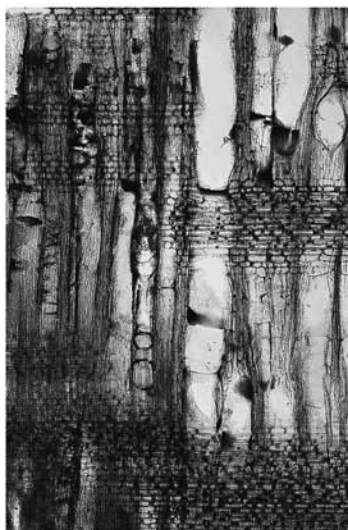


板目×40



木口×40

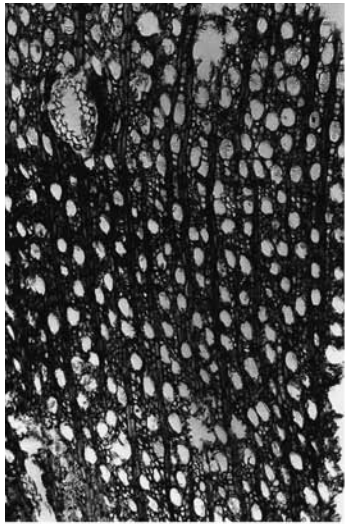
9) バラ科サクラ属



柁目×100



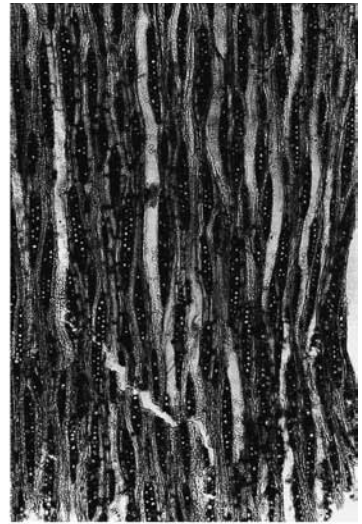
板目×40



木口×40

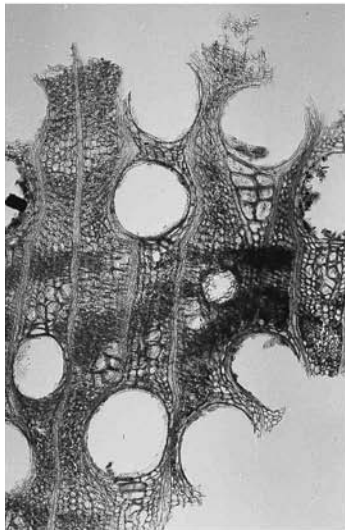


柁目×100

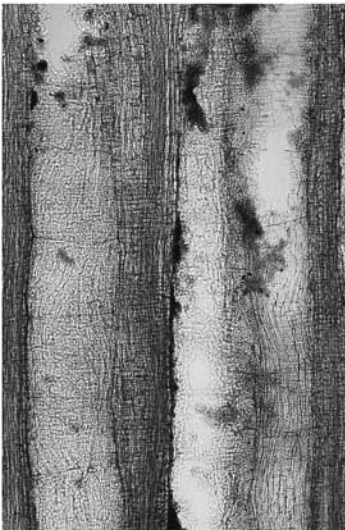


板目×40

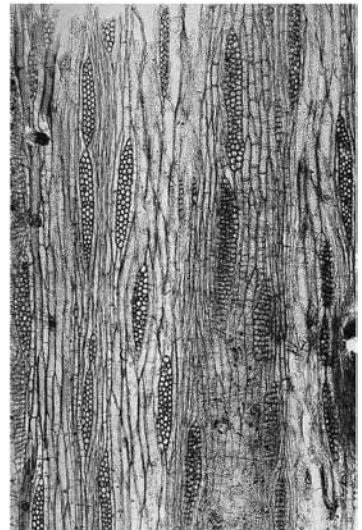
10) バラ科ナナカマド属ナナカマド節ナナカマド



木口×40

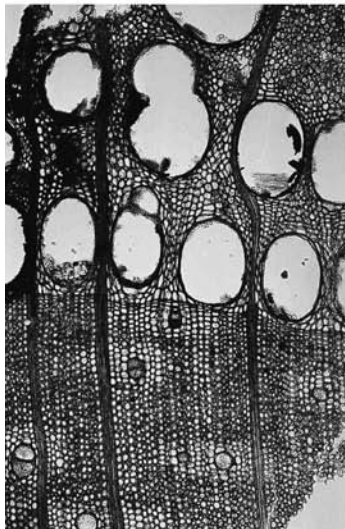


柁目×100



板目×40

11) ミカン科キハダ属キハダ



木口×40



柁目×100



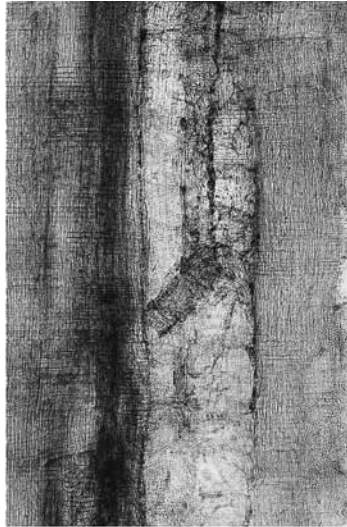
板目×40

12) ニガキ科ニガキ属ニガキ



木口×40

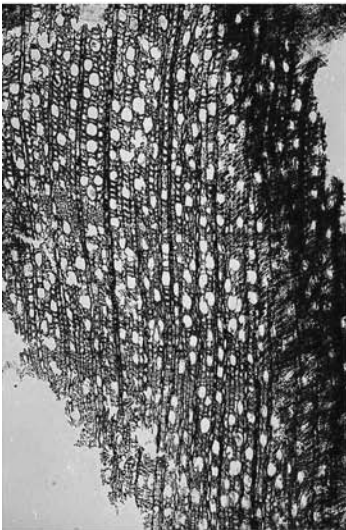
13)ウルシ科ウルシ属



柁目×100

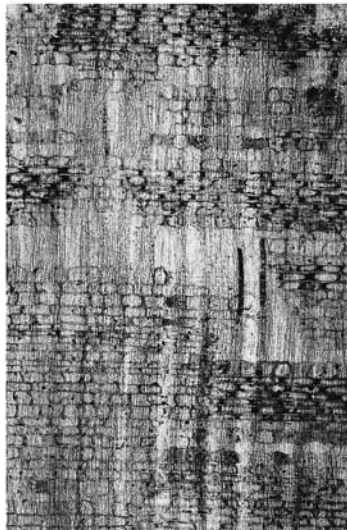


板目×40



木口×40

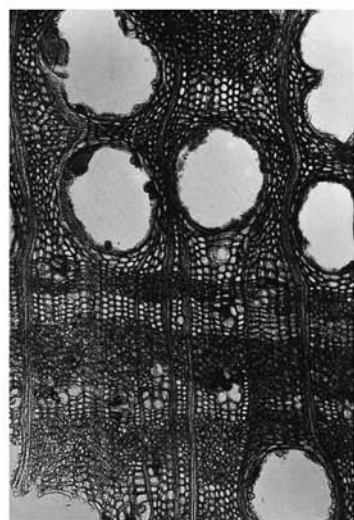
14)ツバキ科サカキ属サカキ



柁目×100



板目×40



木口×40

15)ムクロジ科ムクロジ属ムクロジ



柁目×100



板目×40

栗島遺跡出土木製品の樹種

伊東 隆夫（京都大学名誉教授）

筑西市（旧下館市）栗島字栗島494番地の2ほかに所在する栗島遺跡は、同市北西部に流れる大谷川から400mほど西に離れたところに位置する。調査の結果、縄文時代と古墳時代から奈良・平安時代にかけての遺構、すなわち、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、流路跡、水場遺構、杭列などが検出されており、遺物として、縄文土器、石器、土師器、須恵器、のほかに1000点を超える夥しい量の木製品が出土している。今回、そのうちの61点について樹種の同定をおこなった。

方法は定法にしたがい、木製品の一部の小片から木口面、柀目面、板目面の三断面の切片を安全カミソリで切り出し、スライドガラスに載せ、ガムクロラールを2、3滴滴下し、カバーガラスを被せて、顕微鏡用プレパラートを作製した。その後、以下の樹種の識別拠点により樹種を同定した。

カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.)：樹脂道および樹脂細胞を欠く。柀目面で対になったらせん肥厚が認められる。

モミ (*Abies firma* Sieb. et Zucc.)：通常樹脂道はみられない。樹脂細胞もみられない。放射柔細胞壁は厚く、末端壁は数珠状となる。

スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don)：樹脂道を欠く。樹脂細胞がやや晩材に点在する傾向。分野壁孔はスギ型。

ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* Endl.)：樹脂道を欠く。樹脂細胞は晩材部にまばらに分布する。分野壁孔はヒノキ型となる。

クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)：環孔材。年輪のはじめにきわめて大きい道管がならぶ。晩材部では小道管が火炎状に配列する。道管に単穿孔。放射組織は単列同性。遺物番号 THW69026-23が該当するが、光学顕微鏡では孔圏部が観察できず、シイ属の可能性もあったが、実体顕微鏡で遺物を観察し、連続した孔圏を形成していることが判明したので、クリと同定した。

アカガシ亜属 (*Quercus* sp., *Cyclobalanopsis*)：放射孔材。やや大きい道管が放射方向に並ぶ。広放射組織と単列放射組織がみられる。

クヌギ節 (*Quercus* sp., *sect. cerris*)：環孔材。孔圏道管は大型で、孔圏外道管は厚壁で小さく、単独で分布する。単穿孔。単列放射組織と広放射組織からなる。

ヤマグワ (*Morus australis* Poir.)：本来環孔材であるが、遺物番号 THW69026-36の試料は孔圏が観察できず、直径100ミクロンほどの道管が均一に分布した。単穿孔。道管内部にチロース。放射組織はおおむね異性Ⅲ型ときにⅡ型で、1-7列。

ムクロジ (*Sapindus mukorossi* Gaertn.)：環孔材。孔圏外道管は小集団をなす。単穿孔。小道管にらせん肥厚。軸方向柔細胞は周囲状、翼状、連合翼状、帯状となる。木繊維に隔壁。放射組織は同性で、1-3列。

カツラ (*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.)：散孔材。道管はやや小さく、多数分布する。階段穿孔。バーはやや太い。放射組織は異性で、1-2列。

イスノキ (*Distylium racemosam* Sieb. et Zucc.)：散孔材。階段穿孔。多室結晶細胞顕著、放射組織は異性で、1-2列。

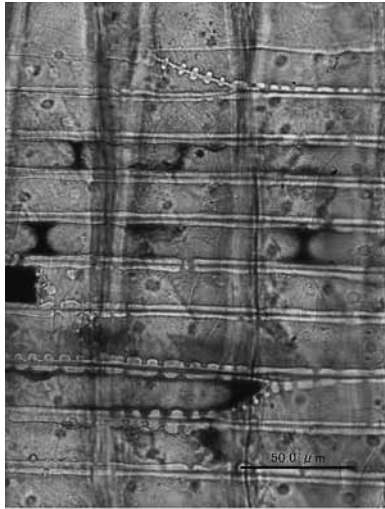
バラ科 (*Rosaceae*)：散孔材。極めて小さい道管が均一に分布する。道管内腔や軸方向柔組織に着色物質。道管に単穿孔およびらせん肥厚がみられる。軸方向柔組織は散在状ないし網状。放射組織は同性で1-2列。

樹種同定の結果は表1のとおりである。同表から木製品ごとの樹種をみると、板材(1点)、曲物側板(3点)はともにヒノキ、角材(3点)は2点(齋串)がヒノキ、1点(大足横木)がモミ、刀形形代(3点)は2点がヒノキ、1点がモミ、鎌柄、木錘(各1点)はともにクヌギ節、横槌(2点)は1点がヤマグワ、1点がヒノキ、櫛(1点)はイスノキ、鋏(1点)はアカガシ亜属、下駄(1点)はヒノキ、剣形形代(1点)はモミ、楕円形曲物底板(2点)はヒノキ、堅杵(1点)はアカガシ亜属、荷札状木製品(1点)はヒノキ、部材(4点)は2点がヒノキ、2点がモミ、1点がクリ、武器形形代(3点)はすべてヒノキ、棒状木製品(1点)はヒノキ、皿(1点)はカツラ、曲物底板・蓋板類(15点)は14点がヒノキ、1点がスギ、ただし、この1点は曲物底板かどうかははっきりしない。丸棒状木製品(3点)は2点がモミ、1点がクヌギ節、水場構成材(4点)はすべてモミ、甌(1点)はヒノキ、木簡(2点)はヒノキ、弓(1点)はカヤ、把手(1点)はヒノキ、椀(3点)は2点がムクロジ、1点はバラ科であった。

一方、木製品の種類を無視して、利用頻度の高い樹種を見ると、ヒノキが38点、モミが11点、クヌギ節が3点、アカガシ亜属とムクロジが各2点、その他はイスノキ、カツラ、カヤ、スギ、バラ科、ヤマグワ?がそれぞれ1点であった。したがって、木製品全体にヒノキとモミが多用されている傾向がみられた。

表1 栗島遺跡樹種同定一覧表

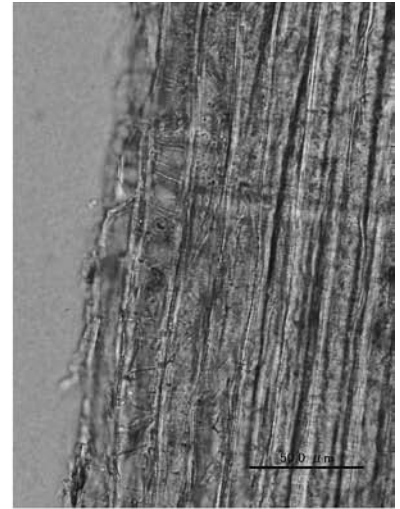
通し番号	遺構名	遺物番号	遺物名	樹種	通し番号	遺構名	遺物番号	遺物名	樹種
1	SD1	W20	横槌	ヒノキ	31	SD 5 7区	W58	鎌柄	クヌギ節
2	SD4	W28	曲物側板	ヒノキ	32	SD 5 7区	W108	曲物底板・蓋板類	ヒノキ
3	SD5 3区	W236	剣形形代	モミ	33	SD 5 7区	W227	曲物側板	ヒノキ
4	SD5 5区	W131	曲物底板	ヒノキ	34	SD5 7区	W181	曲物底板・蓋板類	ヒノキ
5	SD5 5区	W33	木簡	ヒノキ	35	SD5 7区	W231	齋串(角材)	ヒノキ
6	SD5 5区	W105	曲物底板	ヒノキ	36	SD5 7区	W66	横槌	ヤマグワ
7	SD5 5区	W101	曲物底板	ヒノキ	37	SD5 8区	W223	曲物側板	ヒノキ
8	SD5 5区	W232	刀形形代	ヒノキ	38	SD5 8区	W239	武器形形代	ヒノキ
9	SD5 5区	W104	曲物底板・蓋板類	ヒノキ	39	SD5 8区	W110	曲物底板・蓋板類	ヒノキ
10	SD5 5区	W241	武器形形代	ヒノキ	40	SD5 8区	W103	曲物底板・蓋板類	ヒノキ
11	SD5 5区	W139	曲物底板・蓋板類	ヒノキ	41	SD5 8区	W255	部材	ヒノキ
12	SD5 5区	W83	弓	カヤ	42	SD5 8区	W279	部材(丸棒状)	モミ
13	SD5 5区	W235	刀形形代	モミ	43	SD5 8区	W106	曲物底板・蓋板類	ヒノキ
14	SD5 5区	W63	堅杵	アカガシ亜属	44	SD5 8区	W240	武器形形代	ヒノキ
15	SD5 5区	W293	板材	ヒノキ	45	SD5 8区	W263	部材(板材)	ヒノキ
16	SD5 6区	W99	曲物底板・蓋板類	ヒノキ	46	SD5 8区	W254	部材	ヒノキ
17	SD5 6区	W90	挽物 皿	カツラ	47	SD5 8区	W94	剝物	バラ科
18	SD5 6区	W237	刀形形代	ヒノキ	48	SD5 8区	W349	把手付槽	モミ
19	SD5 6区	W107	曲物底板・蓋板類	ヒノキ	49	SD5 8区	W37	鋏	アカガシ亜属
20	SD5 6区	W186	楕円形曲物底板	ヒノキ	50	SD5 9区	W109	曲物底板・蓋板類	スギ
21	SD5 6区	W217	甌	ヒノキ	51	SD5 9区	W338	棒状木製品	ヒノキ
22	SD5 6区	W183	曲物底板	ヒノキ	52	SK141	W13	椀	ムクロジ
23	SD5 6区	W72	木錘未製品	クヌギ節	54	SK141	W14	両端加工材(丸棒状)	クヌギ節
24	SD5 6区	W278	部材	クリ	55	SD5 8区	W345	水場構成材	モミ
25	SD5 6区	W259	部材	モミ	56	SD5 8区	W346	水場構成材	モミ
26	SD5 6区	W102	曲物底板・蓋板類	ヒノキ	57	SD5 8区	W347	水場構成材	モミ
27	SD5 6区	W54	大足横木(角材)	モミ	58	SD5 8区	W348	水場構成材	モミ
28	SD5 6区	W78	把手	ヒノキ	59	SD1	W23	櫛	イスノキ
29	SD5 7区	W55	大足横木(丸棒状)	モミ	60	SD5	W337	荷札状木製品	ヒノキ
30	SD5 7区	W230	齋串(角材)	ヒノキ	61	SD6	W368	下駄	ヒノキ



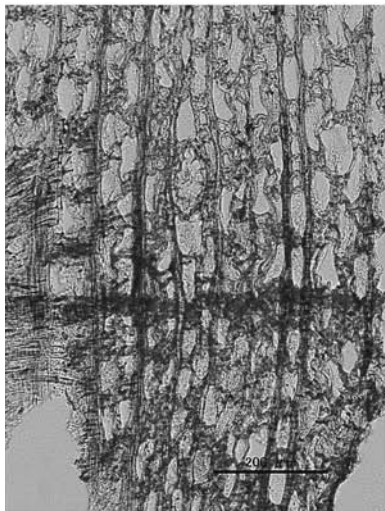
1. SD5-3-W236 剣形形代 モミ



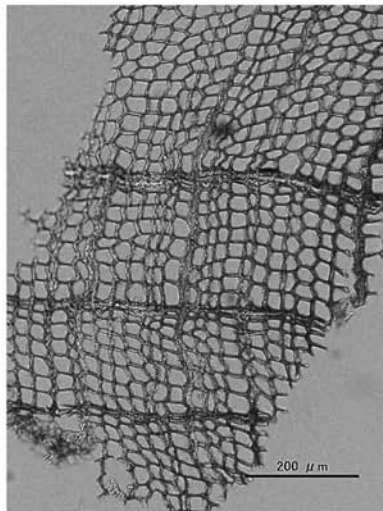
2. SD5-5-W33 木筒 ヒノキ



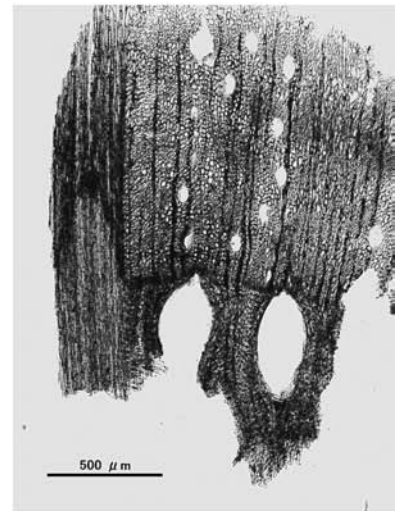
3. SD5-5-W83 弓 カヤ



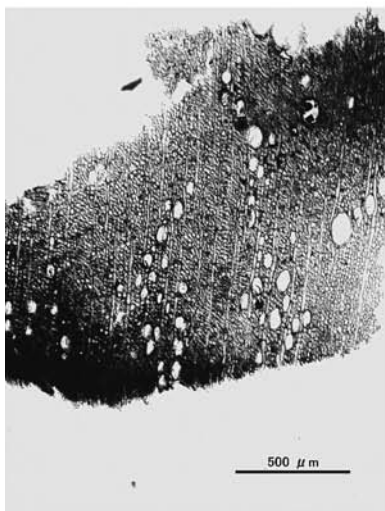
4. SD5-6-W90 皿 カツラ



5. SD5-6-W186 楕円形曲物底板ヒノキ



6. SD5-6-W72 木錘未製品クスギ節



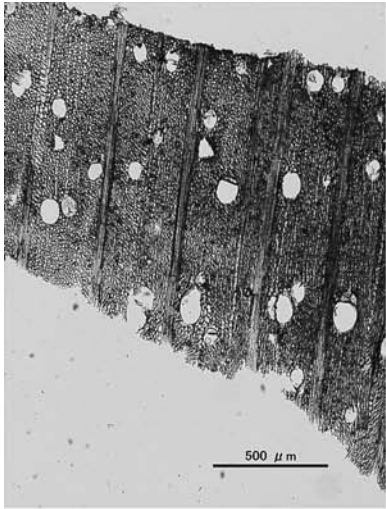
7. SD5-6-W257 部材 クリ



8. SD5-6-W54 大足横木(角材)モミ



9. SD5-7-W58 鎌柄 クスギ節



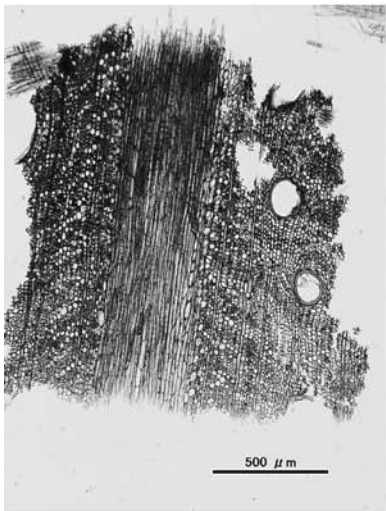
10. SD5-7-W66 横槌 ヤマグワ?



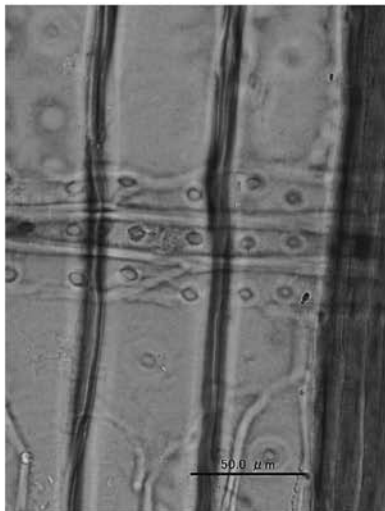
11. SD5-8-W34 武器形代ヒノキ



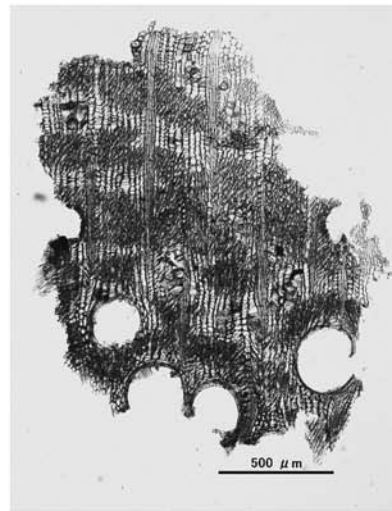
12. SD5-8-W94 椀 パラ科



13. SD5-8-W40 鋏 アカガン亜属



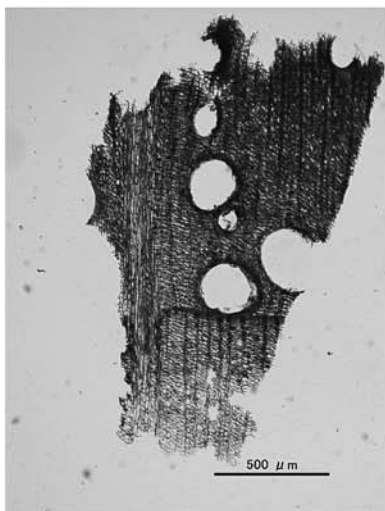
14. SD5-9-W109 曲物底板 スギ



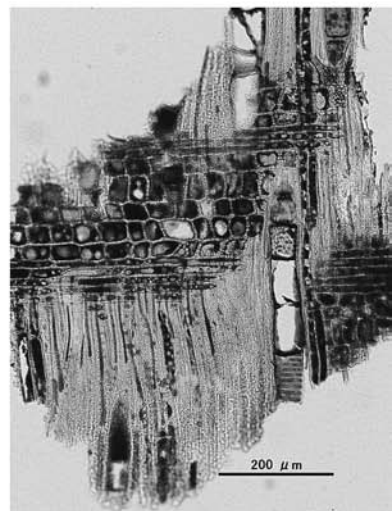
15. SK141-W12 椀 ムクロジ



16. SK141-W12 椀 ムクロジ



17. SK141-W13 両端加工材 (丸棒状)
クスギ節



18. SD1-W23 櫛 イスノキ

栗島遺跡出土木材の樹種

能城 修一（森林総合研究所木材特性研究領域）

佐々木由香（株式会社パレオ・ラボ）

1. はじめに

茨城県筑西市栗島に位置する栗島遺跡から出土した木材の樹種約260点を報告する。栗島遺跡は大谷側右岸の微高地上にあり、木材は古墳時代の住居跡等や、6～9世紀の流路跡、9世紀中葉の水場遺構等、近世の杭列、時期不明の住居跡と流路から出土した建築・土木材と曲物を始めとする道具類からなる。

2. 試料と方法

樹種同定用のプレパラートは、木取りを観察後、木材の横断面と接線断面、放射断面の切片を片刃カミソリで切り取り、ガムクロラール（抱水クロラール50g, アラビアゴム粉末40g, グリセリン20ml, 蒸留水50mlの混合物）で封入して作成した。各プレパラートにはIB-312～IB-568, IB-575の番号を付して標本番号とした。標本は森林総合研究所に保管されている。

3. 結果

全254点中には針葉樹8分類群、広葉樹15分類群、竹笹類1分類群の合計24分類群が認められた（表1）。いずれも枝・幹材で、根材は認められなかった。以下には同定された分類群の簡単な記載と顕微鏡写真を提示し同定の根拠を示す。

1) カヤ *Torreya nucifera* (L.) Siebold et Zucc. イチイ科 図1：1a-1c（枝・幹材, IB-359：W208）

水平・垂直のいずれの樹脂道も樹脂細胞も欠く、厚壁の仮道管からなる針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材は量少ない。仮道管の内壁には2～3本ずつまとまって走るらせん肥厚がある。分野壁孔はごく小型のトウヒ型で1分野に2～4個。

2) イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K. Koch イヌガヤ科 図1：2a-2c（枝・幹材, IB-468：W85）

水平・垂直のいずれの樹脂道も欠く、厚壁の仮道管からなる針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材は量少ない。樹脂細胞が年輪内に散在する。仮道管の内壁には水平に近く走るらせん肥厚がある。分野壁孔はごく小型のトウヒ型で1分野に2～4個。

3) モミ属 *Abies* マツ科 図1：3a-3c（枝・幹材, IB-390：W126）

時に傷害樹脂道をもつ針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材は量多い。樹脂細胞は時に年輪界に見られる。放射組織は柔細胞のみからなり、垂直壁は結節状。分野壁孔はごく小型のスギ型で1分野に2～4個。

4) マツ属複雑管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 図1：4a-4c（枝・幹材, IB-499：W308）

垂直・水平の樹脂道をもつ針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材は著しく量が多い。樹脂

道の分泌細胞は薄壁のためほとんど保存されない。放射組織は柔細胞と仮道管とからなる。分野壁孔は大型の窓状で1分野に普通1個。放射仮道管の水平壁には鋸歯状の突起が著しい。

5) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科 図1 : 5a-5c (枝・幹材, c-443 : W216)

水平・垂直のいずれの樹脂道も樹脂細胞も欠く針葉樹材。早材の仮道管は薄壁で径が大きく, 早材から晩材への移行は緩やかで, 晩材は量多い。早材の終わりから晩材には樹脂細胞が年輪界にほぼ並行に散在する。分野壁孔はごく大型のスギ型で1分野に2個。

6) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図1, 2 : 6a-6c (枝・幹材, c-328 : W24)

水平・垂直のいずれの樹脂道も樹脂細胞も欠く針葉樹材。仮道管はやや厚壁で, 早材から晩材への移行は緩やかで, 晩材は量少ない。早材の終わりから晩材には樹脂細胞が年輪界にほぼ並行に散在する。分野壁孔はごく中型のトウヒ型で1分野に普通2個。

7) サワラ *Chaecyparis pisifera* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図2 : 7a-7c (枝・幹材, c-410 : W201)

水平・垂直のいずれの樹脂道も樹脂細胞も欠く針葉樹材。仮道管はやや厚壁で, 早材から晩材への移行は緩やかで, 晩材は量少ない。早材の終わりから晩材には樹脂細胞が年輪界にほぼ並行に散在する。分野壁孔はやや大型のヒノキ型～スギ型で1分野に普通2個。

8) アスナロ *Thujopsis dolabrata* Siebold et Zucc. ヒノキ科 図2 : 8a-8c (枝・幹材, IB-552 : W371)

水平・垂直のいずれの樹脂道も樹脂細胞も欠く針葉樹材。仮道管はやや厚壁で, 早材から晩材への移行は緩やかで, 晩材は量少ない。早材の終わりから晩材には樹脂細胞が年輪界にほぼ並行に散在する。分野壁孔はごく小型のヒノキ型～トウヒ型で1分野に2～4個。

9) ハンノキ属ハンノキ節 *Alnus* sect. *Gymnothyrsus* カバノキ科 図2 : 9a-9c (枝・幹材, IB-563 : W382)

小型で角張った道管が密に散在し, それを大型の集合放射組織が縦断する放射孔材。道管の穿孔は階段状。放射組織は単列か集合状。

10) クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 図2 : 10a-10c (枝・幹材, IB-471 : W272)

年輪の初めには大型で丸い単道管が1～数列配列し, 晩材では徐々に小型化した小型で薄壁の道管が炎症状に配列する環孔材。木部柔組織は晩材でいびつな接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性。

11) コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図2 : 11a-11c (枝・幹材, IB-319 : W8)

年輪の初めには大型で丸い単道管が1～2列配列し, 晩材ではやや急に小型化した小型で厚壁の単道管が放射状に配列する環孔材。木部柔組織は晩材でいびつな接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で, 小型で単列のものと大型で複合状のものからなる。道管と放射柔細胞との壁孔は柵状。

12) コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 図 2, 3 : 12a-12c (枝・幹材, IB-342 : W75)

年輪の初めには大型で丸い単独道管が1~2列配列し、晩材ではやや急に小型化した小型で薄壁の単独道管が火炎状~放射状に配列する環孔材。木部柔組織は晩材でいびつな接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で、小型で単列のものと大型で複合状のものからなる。

13) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科 図 3 : 13a-13c (枝・幹材, IB-502 : W311)

中型で厚壁の丸い単独道管が放射方向の列をなして配列する放射孔材。木部柔組織は晩材でいびつな接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で、小型で単列のものと大型で複合状のものからなる。道管と放射柔細胞との壁孔は柵状。

14) エノキ属 *Celtis* ニレ科 図 3 : 14a-14c (枝・幹材, IB-541 : W359)

大型で丸い管孔が年輪のはじめに数列配列し、晩材では徐々に小型化した薄壁の道管が数個ずつ集合して、斜め方向に連なって配列する環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で6細胞幅くらいとなり、不明瞭な鞘細胞をもつ。

15) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図 3 : 15a-15c (枝・幹材, IB-566 : W385)

大型で丸い管孔が年輪のはじめに1 (~2) 列配列し、晩材では急に小型化した薄壁の道管が数個ずつ集合して、接線方向~斜め方向に連なって配列する環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は上下端の1細胞が直立する異性で5細胞幅くらいとなり、しばしば直立部に大型の結晶をもつ。

16) ヤマグワ *Morus australis* Poir. クワ科 図 3 : 16a-16c (枝・幹材, IB-548 : W366)

大型で丸い管孔が年輪のはじめに2~3列配列し、晩材では徐々に小型化した薄壁の道管が2~数個ずつ塊をなして、斜に連なる傾向をみせる環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は上下端の1~2細胞が直立する異性で6細胞幅くらいとなる。

17) シキミ *Illicium anisatum* L. シキミ科 図 3, 4 : 17a-17c (枝・幹材, IB-546 : W364)

小型で薄壁の角張った道管が密に散在する散孔材。年輪のはじめには道管がほぼ連続して1列に配列する。道管の穿孔は40~50本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は1~数個の直立細胞をもつ異性で2細胞幅、多列部と直立部の幅はほぼ同じ。

18) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 図 4 : 18a-18c (枝・幹材, IB-539 : W357)

ごく小型の単独道管がほぼ均一に密に散在する散孔材。木部柔組織は散在状。道管の穿孔は30~50本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は単列異性。

19) モモ *Amygdalus persica* L. バラ科 図 4 : 19a-19c (枝・幹材, IB-517 : W326)

小型で丸い管孔が年輪のはじめに数列配列し、晩材ではやや急に小型化した丸い道管がしばしば放射方

向に2個複合して、放射方向に連なる傾向をみせて散在する半環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で2細胞幅。

20) サクラ属 *Prunus* s.l.バラ科 図4：20a-20c (枝・幹材, IB-312：W1)

小型で丸い管孔が単独あるいは2～3個複合して、斜めに連なる傾向をみせて散在する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で2～3細胞幅。

21) キハダ *Phellodendron amurense* Rupr. ミカン科 図4：21a-21c (枝・幹材, IB-333：W277)

大型で丸い道管が単独あるいは2個複合して年輪のはじめに3列ほど集合し、晩材では急に小型化した薄壁の管孔が接線方向にのびる帯をなして集合する環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は同性で4細胞幅くらい。

22) ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. ムクロジ科 図4：22a-22c (枝・幹材, IB-519：W328)

やや大型で丸い道管が単独あるいは2個複合して年輪のはじめに3列ほど集合し、晩材では徐々に小型化した薄壁の管孔が数個ずつ放射接線方向に塊をなして集合する環孔材。木部柔細胞は早材で周囲状、晩材で翼状から連合翼状。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は同性で3～4細胞幅くらい。

23) キリ *Paulownia tomentosa* (Thunb.) Steud. ゴマノハグサ科 図5：23a-23c (枝・幹材, IB-568：W387)

最初の年輪しか認められない。大型で丸い道管が単独あるいは2個複合して徐々に小型化しながら散在する。木繊維は薄壁で内腔が大きい。木部柔細胞は早材で周囲状、晩材で翼状から連合翼状。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で3細胞幅くらい、外形はいびつ。

24) 竹笹類 Subfam. Bambusoideae イネ科 図5：24a (IB-564：W383)

中心にある一対の道管と、それと直交する原生木部間隙と篩部を囲んで厚膜組織が維管束鞘を形成し、それが散在する。外形では、桿の節に1本の環があり、モウソウチクの可能性が高いと考えられる。

4. 考察

全254点中には24分類群が認められた(表1)。いずれも枝・幹材である。このうち195点は6～9世紀中葉の第1号流路跡から出土したものである。

古墳時代の建築材ではコナラ属クヌギ節とアカガシ亜属が多い。針葉樹は1点の垂木にヒノキが使用されているのみである。6～9世紀中葉の第1号流路跡では、101点が曲物で、その内77点がヒノキ、10点がサワラ、7点がモミ属、5点がスギであった。それ以外の道具ではクヌギ節の鋤鍬や、アカガシ亜属の堅杵、ムクロジの削物容器、イヌガヤの弓、モミ属の儀具や枷、ヒノキ・カヤ・サワラの大足・田下駄などが目立つ。部材ではモミ属とヒノキが同じくらい使われている。杭ではクリとクヌギ節、ヤマグワといった広葉樹が多く、ヒノキとサワラを欠く点で道具類とは樹種選択が異なっている。また中国原産のモモが杭に使われており、居住域周辺での用材調達が想定される。9世紀中葉の第1号水場遺構の杭や部材の樹種選択も、クヌギ節が少なく、ヒノキとサワラを欠くことを除くと、第1号流路跡の杭や部材の樹種選択に似通ってい

る。耐朽性があり水湿に強いクリがやや目立つのは縄文時代以降の水場遺構の用材選択と一致している（能城・佐々木，投稿中）。一方，同時期の溝からはヒノキの曲物が出土しており，曲物の樹種は共通していたことが伺える。近世の杭列ではアカガシ亜属とケヤキ，近世以降に日本に渡来したと考えられるモウソウチクの可能性が高い竹笹類，キリが使われており，古墳・古代とは樹種選択が異なっている。

このように6～9世紀中葉の曲物では約80%がヒノキ製で，それ以外にサワラとモミ属，スギ，カヤ，アスナロといった針葉樹が使われていた。一方，建築材と杭は遺跡周辺で調達されたと考えられ，コナラ属クスギ節とアカガシ亜属の柱材，コナラ属クスギ節とクリ，ヤマグワの杭が目立つ。

ヒノキは中部山岳から中国四国地方に分布の中心があり（倉田，1968），曲物は製品として流通しやすいことから考えると，関東地方以西で作られてからもたらされた可能性が高い。しかしヒノキは関東の日光周辺などにも生育しており，建築材も少量ながら出土していることから考えると，遺跡周辺か関東山地に曲物の生産地があって，そこからもたらされた可能性も否定はできない。サワラはヒノキよりも標高が高い中部山岳から東部南部に分布しており（倉田，1968），ヒノキと同様の出土傾向を示すことから，ヒノキと同じ産地からもたらされたと考えられる。モミ属はヒノキに比べると部材としての比率が高く，1号水場遺構の大型の槽にもモミ属が使用されている。これらは遺跡の周辺に生育するモミに由来すると考えられる。しかし曲物に使われてモミ属は，ヒノキの産地の周辺に生育していたモミ属に由来することも考えられる。スギは日本海側に分布の中心があり，関東平野には本来自生していないと考えられている。近くで天然分布があるのは伊豆半島から静岡県にかけてであり，これもヒノキの曲物の産地付近に由来すると思われる。

ただし古代に植林がどの程度行われていたかはまったく不明で，上記の議論はあくまでも天然林から用材を調達したとした場合である。官衙の周辺などで植林が行われていた可能性も考えられ，スギやヒノキは遺跡の近くで調達されたのかもしれない。今後花粉分析などと同時に解析することによって，古墳から古代の遺跡森林の様相を明らかにしていく必要がある。

引用文献

倉田 悟. 1968. 「原色日本林業樹木図鑑」. 地球社.

表1 栗島遺跡出土木材の樹種

樹種名	古墳前期		5c後-6c初		6-9世紀中葉										9世紀中葉		近世		時期不明			総計			
	6.7号住		住. 土坑*		第1号流路跡										第1号水場遺構		1.4号溝		1号杭列 29号住		2号流路				
	建築材	建築材	部材	曲物	容器	農具	工具	申材	儀具	弓	部材	杭	加工木	自然木	茅材	杭	部材	曲物	部材	杭	建築材		曲物	部材	容器
カヤ				1		1					2	1													5
イヌガヤ										1															1
モミ属				7				1	1		12	1	3	1		4		1					1		32
マツ属複雑管束亜属												2													2
スギ				5											1										7
ヒノキ		1		77		1	4				15							3		1			3		105
サワラ				10		1					3											2			16
アスナロ				1																				1	2
ハンノキ属ハンノキ節																									1
クリ						1					3	5				2	3			1					15
コナラ属クスギ節	2		1			2					12	1				1					3				23
コナラ属コナラ節			1			1																			2
コナラ属アカガシ亜属		5	1			1														2					11
エノキ属											2					2									4
ケヤキ							1													2					3
ヤマグワ							1										3								8
シキミ																	1								1
サカキ																	1								1
モモ												2					1								3
サクラ属			1																						1
キハダ											1														1
ムクロジ	1					1					1	2				1									6
キリ																				1					1
竹笹類																				3					3
総計	3	7	3	101	1	10	4	1	1	1	37	32	4	1	1	11	8	3	1	11	3	2	5	1	254

住：住居跡：*3. 8号住. 141号土坑

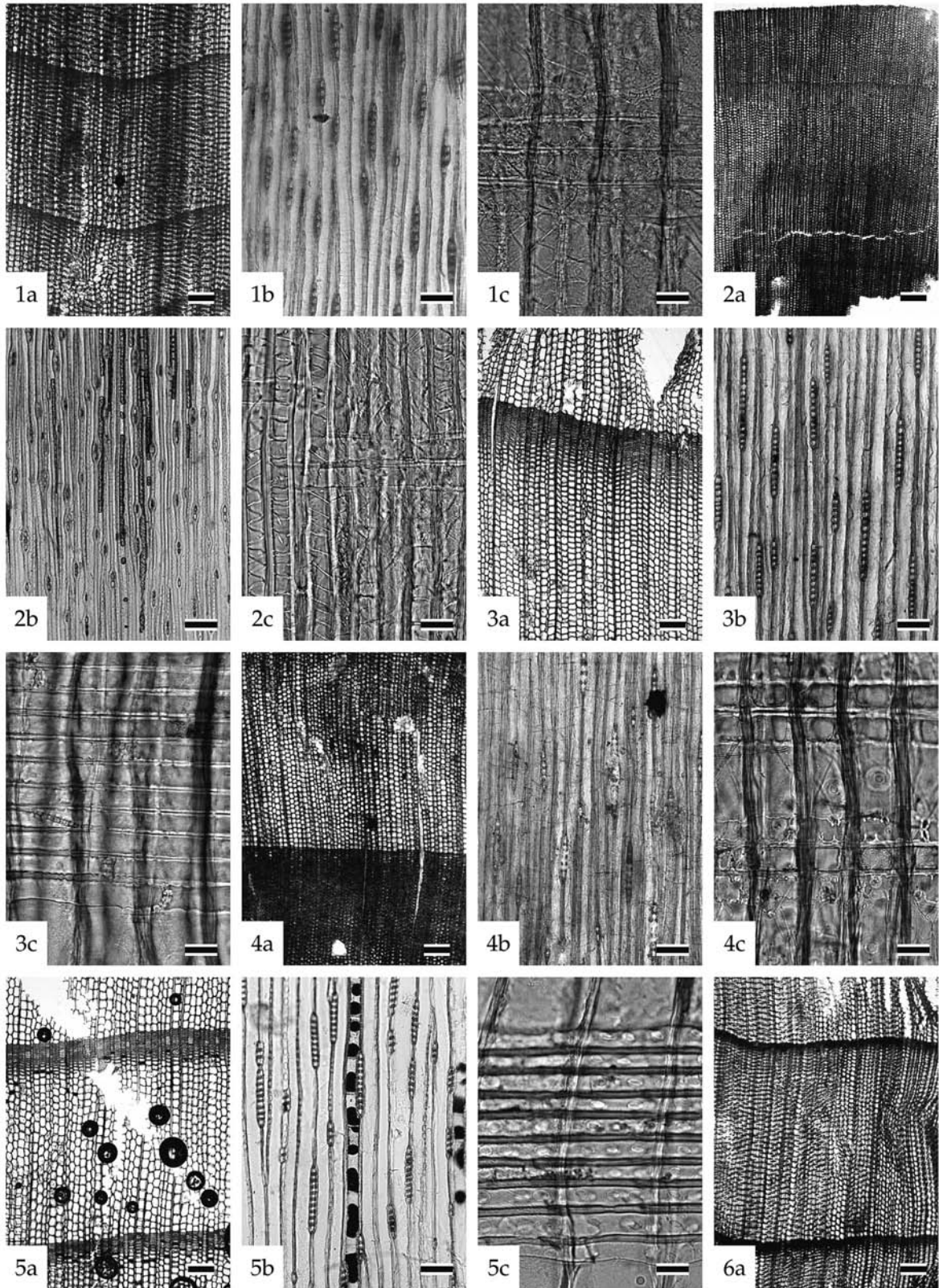


図1. 栗島遺跡出土木材の顕微鏡写真(1)

1a-1c: カヤ (枝・幹材, IB-359), 2a-2c: イヌガヤ (枝・幹材, IB-468), 3a-3c: モミ属 (枝・幹材, IB-390), 4a-4c: マツ属複雑管束亜属 (枝・幹材, IB-499), 5a-5c: スギ (枝・幹材, IB-443), 6a: ヒノキ (枝・幹材, IB-328). a: 横断面 (スケール=200 μ m), b: 接線断面 (スケール=100 μ m), c: 放射断面 (スケール=25 μ m).

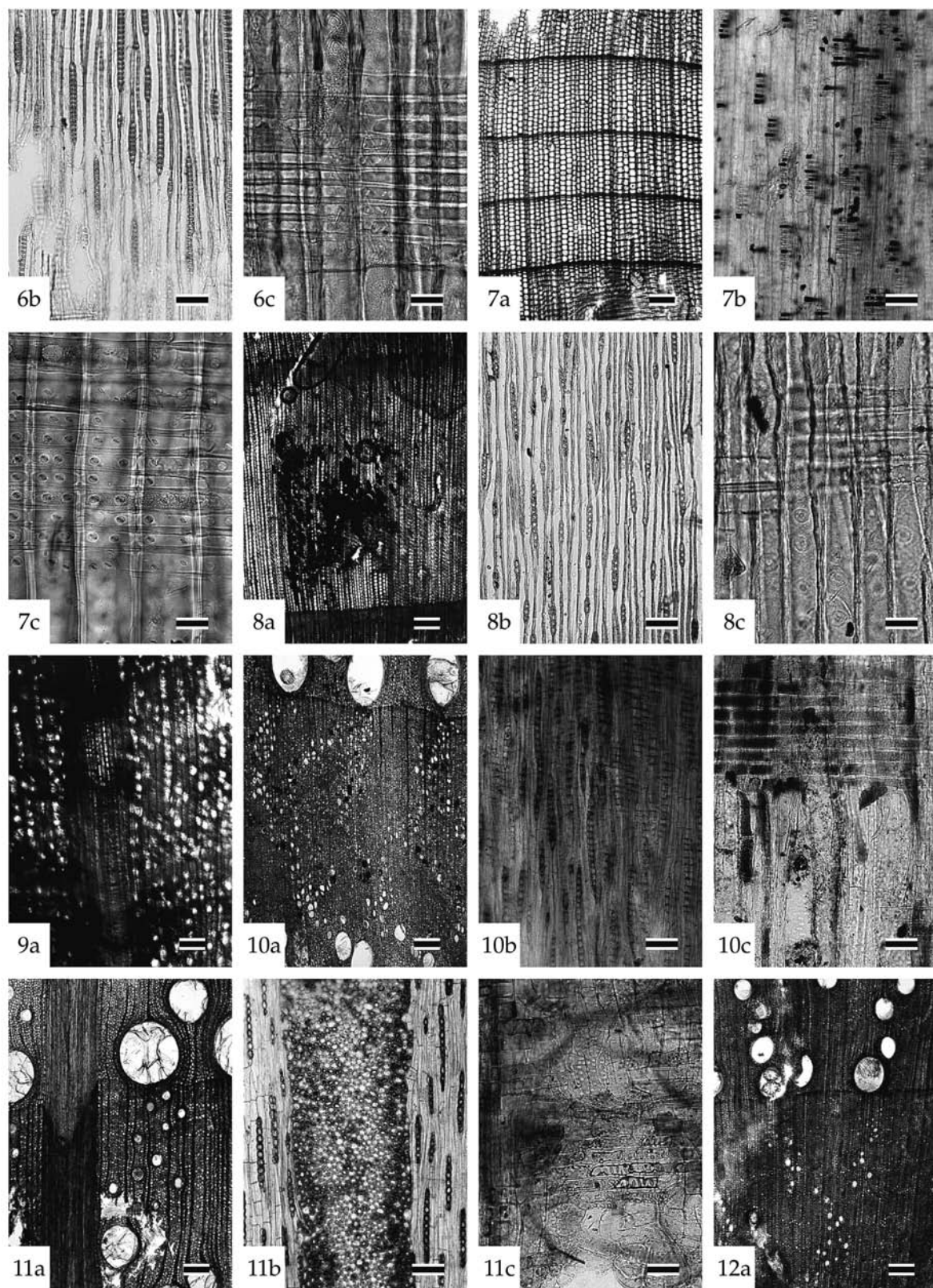


図2. 栗島遺跡出土木材の顕微鏡写真(2)

6b-6c: ヒノキ(枝・幹材, IB-328), 7a-7c: サワラ(枝・幹材, IB-410), 8a-8c: アスナロ(枝・幹材, IB-552), 9a: ハンノキ属ハンノキ節(枝・幹材, IB-563), 10a-10c: クリ(枝・幹材, IB-471), 11a-11c: コナラ属クスギ節(枝・幹材, IB-319), 12a: コナラ属コナラ節(枝・幹材, IB-342). a: 横断面(スケール=200 μ m), b: 接線断面(スケール=100 μ m), c: 放射断面(スケール=25 μ m(6c, 7c, 8c), 50 μ m(10c, 11c)).

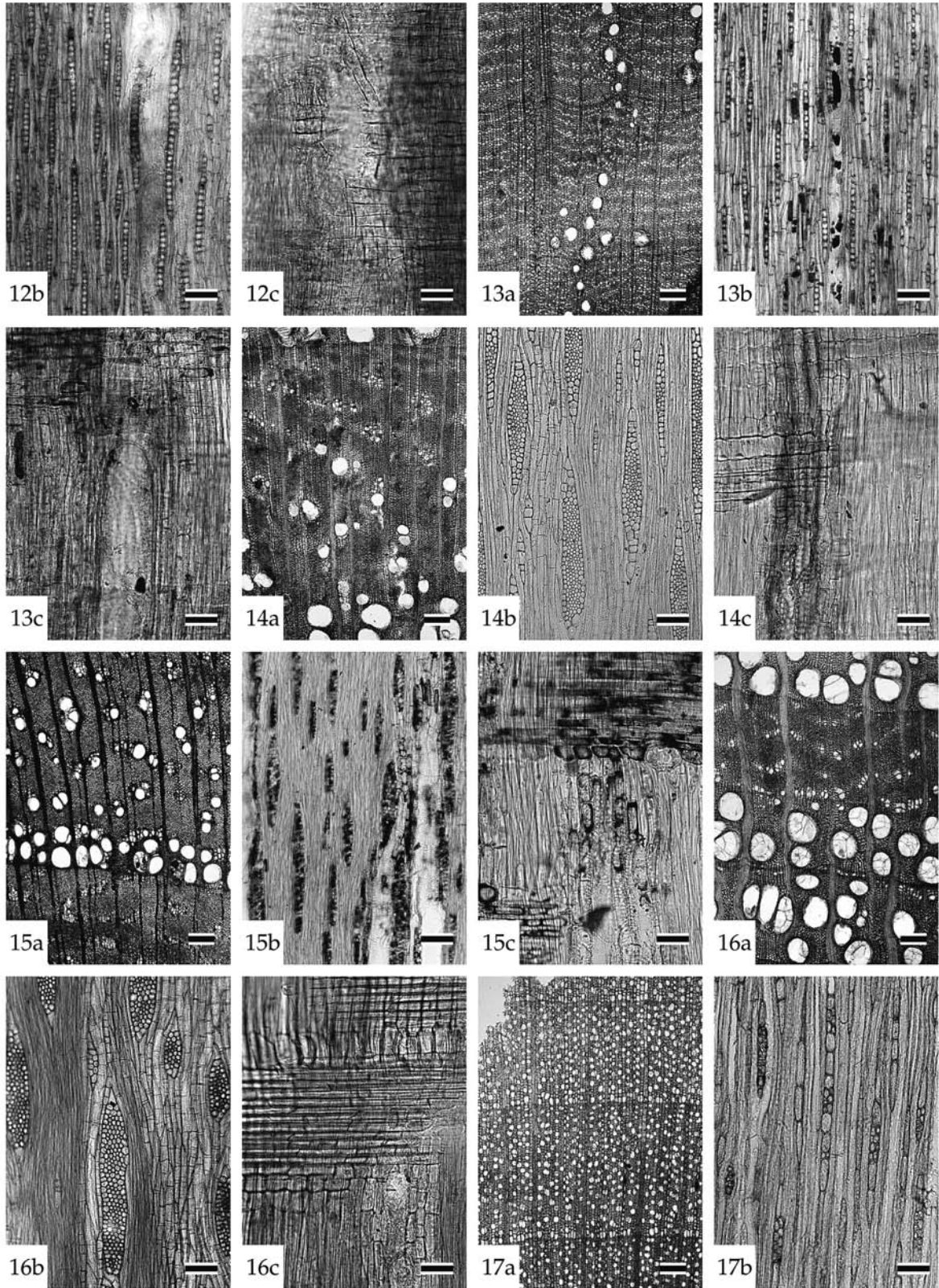


図3. 栗島遺跡出土木材の顕微鏡写真(3)

12b-12c: コナラ属コナラ節(枝・幹材, IB-342), 13a-13c: コナラ属アカガシ亜属(枝・幹材, IB-502), 14a-14c: エノキ属(枝・幹材, IB-541), 15a-15c: ケヤキ(枝・幹材, IB-566), 16a-16c: ヤマグワ(枝・幹材, IB-548), 17a-17b: シキミ(枝・幹材, IB-546). a: 横断面(スケール=200 μ m), b: 接線断面(スケール=100 μ m), c: 放射断面(スケール=50 μ m).

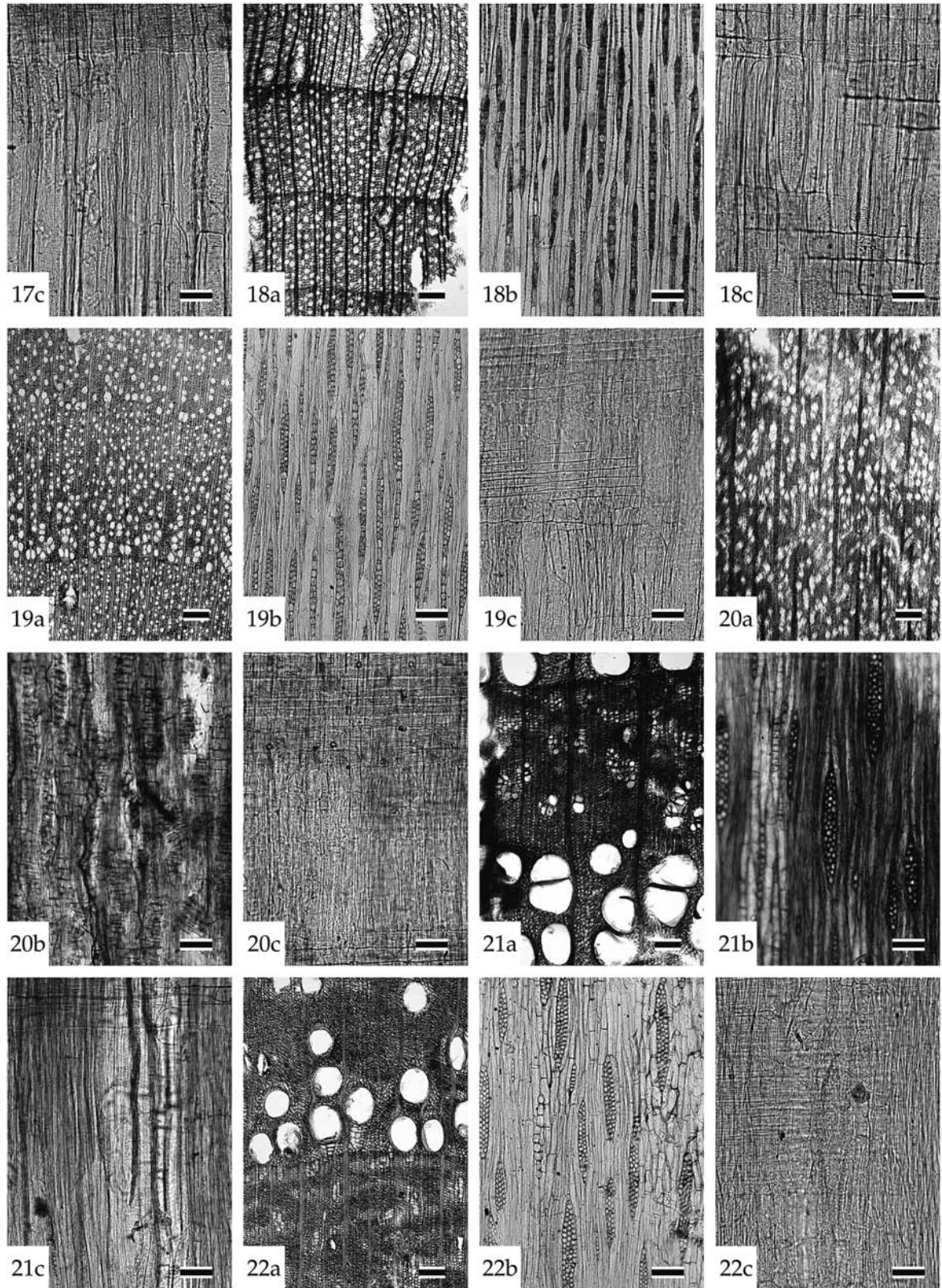


図4. 栗島遺跡出土木材の顕微鏡写真(4)
 17c: シキミ (枝・幹材, IB-546), 18a-18c: サカキ (枝・幹材, IB-539), 19a-19c: モモ (枝・幹材, IB-517), 20a-20c: サクラ属 (枝・幹材, IB-312), 21a-21c: キハダ (枝・幹材, IB-333), 22a-22c: ムクロジ (枝・幹材, IB-519). a: 横断面 (スケール=200 μ m), b: 接線断面 (スケール=100 μ m), c: 放射断面 (スケール=50 μ m).

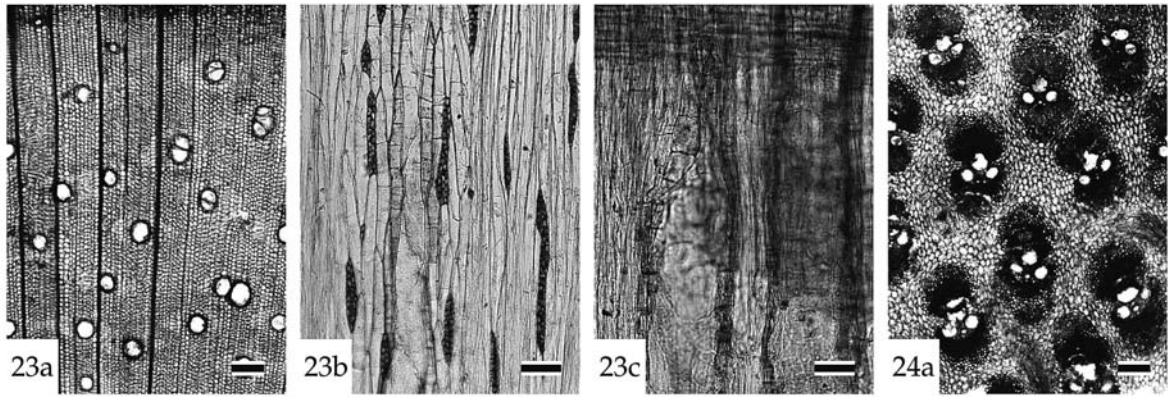


図5. 栗島遺跡出土木材の顕微鏡写真(5)
23a-23c: キリ(枝・幹材, IB-568), 24a: 竹笹類(IB-564). a: 横断面(スケール=200 μm), b: 接線断面(スケール=100 μm), c: 放射断面(スケール=50 μm).

I. 栗島遺跡の土層とテフラ

1. はじめに

関東地方茨城領域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には，富士，箱根，赤城，榛名，浅間，男体山など関東地方とその周辺の火山，中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には，噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり，これらとの層位関係を遺跡で求めることで，遺構や遺物包含層の層位や年代を知ることができるようになっている（町田・新井，2003など）。

そこで，層位や年代が不明な遺構や土層が検出された下館市栗島遺跡においても，地質調査を行い土層層序を記載するとともに，テフラ検出分析と屈折率測定を行って指標テフラの層位を把握し，土層や遺構の層位や年代に関する資料を収集することになった。

調査分析の対象となった地点は，SD5・C トレンチ南壁，SD5・D トレンチ北壁，SD7，SI7（SPB'），SI10（SPA・B 交点）の5地点である。

2. 土層層序

1) SD5・C トレンチ南壁

SD5・C トレンチ南壁では，自然流路（SD5）を埋めた堆積物の断面を良く観察できた。堆積物は，下位より木本類植物遺体混じり暗灰色砂質泥層（層厚8 cm），泥混じり灰色砂層（層厚4 cm，以上17層），灰色砂層（層厚4 cm，12層），木本類植物遺体混じり暗灰色砂質泥層（層厚6 cm，9層），砂混じり暗灰色粘質土（層厚7 cm），暗灰色泥層（層厚10cm），砂混じり暗灰色粘質土（層厚17cm，以上8層），黄灰色砂層（層厚0.6cm），暗灰色粘質土（層厚3 cm，以上6層），黒泥層（層厚1 cm，5層），灰褐色粗粒火山灰層（層厚3 cm，4層），砂混じり暗灰褐色土（層厚7 cm），砂混じり暗灰褐色土（層厚7 cm，以上3層），黄灰色土（層厚1 cm），灰色土（層厚4 cm，以上2層），灰褐色作土（層厚20cm，1層）からなる（図1）。

2) SD5・D トレンチ北壁

SD5・D トレンチ北壁でも，自然流路（SD5）を埋めた堆積物の断面を良く観察できた。本地点の堆積物は，下位より黄灰色砂層（層厚9 cm），褐色泥層（層厚17cm），暗灰褐色泥層（層厚25cm），白色粗粒火山灰混じり暗灰褐色泥層（層厚15cm，仮3層），白色粗粒火山灰混じり暗灰褐色粘質土（層厚9 cm），砂を多く含む暗灰褐色粘質土（層厚3 cm），暗灰褐色粘質土（層厚2 cm，以上仮2層），黒色土（層厚2 cm，仮1層），黄灰色粗粒火山灰層（層厚1 cm 以上）からなる（図2）。

3) SD7

SD7の覆土は，下位より黒灰色土（層厚7 cm），砂混じり黒灰色土（層厚4 cm，以上7-3層），黒灰色砂質土（層厚10cm，7-2層），暗灰褐色泥層（層厚11cm，7-1層）が認められる（図3）。

4) SI 7 (SPB')

SI7 (SPB') の覆土は、下位より黄灰色土ブロック混じり暗灰褐色土 (層厚 5 cm), 暗灰褐色土 (層厚 9 cm), 砂混じり灰褐色土 (層厚 7 cm), 暗灰褐色土 (層厚 5 cm), 灰色土 (層厚 11cm 以上) からなる (図 4)。

5) SI10 (SPA・B 交点)

SI10 (SPA・B 交点) の覆土は、下位より黄灰色土ブロック混じり暗灰褐色土 (層厚 2 cm), 黒灰色土 (層厚 8 cm), 白色粗粒火山灰を多く含む黒灰色土 (層厚 8 cm) からなる (図 5)。

3. テフラ検出分析

1) 分析試料と分析方法

上述 5 地点において採取された試料のうち 27 点を対象に、テフラ粒子の量や特徴を見るためにテフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 〈1〉 試料 8 g を秤量。
- 〈2〉 超音波洗浄により泥分を除去。
- 〈3〉 80℃ で恒温乾燥。
- 〈4〉 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を把握。

2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表 1 に示す。SD5・C トレンチ南壁では、試料 19 をのぞく試料 23～11 に軽石 *1 を認めることができた。軽石は白色で、さほど発泡が良くなく、その最大径は 3.2mm である。軽石の斑晶には、角閃石や斜方輝石が認められる。軽石は、試料 19 をのぞいて試料 23～12 に比較的多く、また試料 11 に少量含まれている。一方、火山ガラスはいずれの試料でも認められる。試料 10 および試料 9 をのぞいていずれの試料にも、白色の軽石の細粒物である、スポンジ状に発泡した白色の軽石型ガラスが含まれている。この軽石は、試料 23, 試料 17, 試料 15 に多く含まれている。

試料 23～12 には、スポンジ状に良く発泡した灰白色の軽石型ガラスが少量ずつ含まれている。試料 10 より上位では、スポンジ状に発泡した淡褐色の軽石型ガラスが含まれている。この火山ガラスは、火山灰層から採取された試料 9 にとくに多く含まれている。この試料には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が含まれている。この火山ガラスは、やはり火山灰層から採取された SD5・D トレンチ北壁の試料 1 にもとくに多く含まれている。

SD7 では、試料 5 や試料 4 に、さほど発泡が良くない白色軽石 (最大径 2.1mm) が比較的多く含まれている。軽石の斑晶には、角閃石や斜方輝石が認められる。これらの試料やさらに上位の試料 2 には、この軽石の細粒物である、スポンジ状に発泡した白色の軽石型ガラスが含まれている。一方、下位の試料 6 には、スポンジ状に良く発泡した灰白色の軽石型ガラスが少量含まれている。

SI7 (SPB') では、軽石は検出されなかったものの、いずれからも火山ガラスが検出された。いずれの試料もスポンジ状に良く発泡した灰白色軽石型ガラスが含まれている。この火山ガラスは、試料 5 に比較的多く認められる。また試料 4 には、ごく少量ながら無色透明の軽石型ガラスも含まれている。

SI10 (SPA・B 交点) では、試料 2 にさほど発泡が良くない白色軽石 (最大径 2.1mm) が含まれている。軽石の斑晶には、角閃石や斜方輝石が認められる。この試料には、ほかに軽石の細粒物である、スポンジ

状に発泡した白色の軽石型ガラスが比較的多く含まれている。試料2より下位の試料5や試料4には、スポンジ状に良く発泡した灰白色軽石型ガラスが少量ずつ含まれている。

4. 屈折率測定

1) 測定試料と測定方法

SD5・C トレンチ南壁の試料9, SI10 (SPA・B 交点) の試料4および試料2の3試料に含まれる火山ガラスを対象として、温度変化型屈折率測定装置(京都フィッション・トラック社製, RIMS86)により屈折率測定を行って、指標テフラとの同定精度向上のための資料を得ることになった。

2) 測定結果

SD5・C トレンチ南壁の試料9に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、 >1.524 である。またSI10 (SPA・B 交点) の試料4に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、 $1.517\pm$ である。さらにSI10 (SPA・B 交点) の試料2に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、 $1.500-1.505$ である。

5. 考察

テフラ検出分析の結果、多く検出されたテフラ粒子には3種類がある。最下位のものは、SI10 (SPA・B 交点) の試料4などに含まれる、スポンジ状に良く発泡した灰白色軽石型ガラスである。色調や発泡のしかた、さらにその屈折率を考慮すると、この火山ガラスは4世紀初頭*2に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 友廣, 1988, 若狭, 2000)に由来すると考えられる。

またその上位で、SI10 (SPA・B 交点) の試料2などに含まれる白色の軽石や軽石型ガラスは、色調や発泡のしかた、重鉍物の組み合わせ、さらに火山ガラスの屈折率などから、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992), または6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)に由来すると考えられる。前者が関東地方ほぼ一帯から東北地方南部にかけて広い範囲に分布するのに対し、後者は給源である榛名火山から北東方向を中心に仙台周辺にまで分布している(新井, 1979, 早田, 1989)。したがって、本遺跡の位置や周辺遺跡での層相(たとえば小山市寺野東遺跡; 早田, 1997など)を加味すると、前者の可能性がより高いと考えられる。

さらに、SD5・C トレンチ南壁の4層や、SD5・D トレンチ北壁の仮1層の上位など、火山灰層として認められたテフラ層については、含まれる火山ガラスの色調や発泡のしかた、重鉍物の組み合わせ、さらに火山ガラスの屈折率などから、1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 荒牧, 1968, 新井, 1979)に同定される。

以上のことから、C トレンチで認められたSD5を埋めた堆積物に関しては、Hr-FA 降灰後に堆積した可能性が高いと考えられる。SD7の層位に関しては、テフラ粒子の産出状況から、少なくともAs-Cより上位にある可能性が考えられる*3。また最下位の試料6にHr-FAに由来すると思われる軽石が検出されなかったことからHr-FAより下位にある可能性も考えられる。しかしながら、試料1点のみの結果からの判断では難しい点もあり、近接したSD5・D トレンチ北壁の比較的下位の土層の分析などを行って、総合的に判断した方が良いのかも知れない。SD5がAs-C 降灰以前から自然流路として存在していて、As-C 降灰後、Hr-FA 降灰前にSD7が構築され、その後流水などの作用によりSD5・C トレンチ南壁付近に堆積していた土層が流

失し、Hr-FA後に埋積された可能性もある。

SI7については覆土最下部の試料7にAs-C起源の火山ガラスが認められ、As-Cの上位にある可能性が考えられる。しかしながら、試料7より上位の試料5により多くのAs-C起源の火山ガラスが含まれていることから、この層準からの何らかの攪乱により、試料7付近にAs-C起源の火山ガラスが混入した可能性も否定できず、SI7とAs-Cの明確な層位関係を示すことは難しい。ただ、Hr-FA起源のテフラ粒子が検出されなかったことから、少なくともHr-FAより下位と考えられる。

SI10 (SPA・B交点)は、試料2付近にHr-FAの降灰層準を示すテフラ粒子の濃集が認められることから、少なくともHr-FAより下位にあると考えられる。また、覆土最下部の試料7にAs-C起源の火山ガラスが認められ、試料5や試料4に含まれる火山ガラスの量にさほど違いがないことから、As-Cの上位にあると考えられる。またSI7と比較すると、床面により近い層位にHr-FAの降灰層準があり、本遺構の層位や年代はSI7よりかなりHr-FAに近いと推定される。

なお、茨城県域における考古学研究では、歴史時代に限っても、ほかに1128(大治3)年に浅間火山から噴出したと考えられている浅間粕川テフラ(As-Kk, 1128年, 早田, 1991, 1995, 1996, 2004), 1783(天明3)年に浅間火山から噴出したと考えられている浅間A軽石(As-A, 荒牧, 1968, 新井, 1979)が指標として利用できると考えられる。さらに平安時代や江戸時代に富士火山から噴出したテフラなども、発掘調査の際に検出できる可能性がある。今後、これらのテフラを利用することでより詳細な編年研究が可能と期待される。

6. 小結

栗島遺跡において、地質調査とテフラ検出分析さらに屈折率測定を行った。その結果、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)のテフラ層のほか、浅間C軽石(4世紀初頭)や榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)などに由来するテフラ粒子を検出することができた。

- *1: テフラ粒子のうち、径が2 mmより大きく、多孔質で色調が明るいもの。
- *2: 若狭(1998)は、1998年段階での土器の年代観により3世紀まで遡る可能性も指摘している。
- *3: 溝状遺構の層位の推定については、流水などによる自然作用に伴う堆積物の流失、また人為による堆積物の除去などが行われていないことが前提となる。実際には難しいことが多いが、住居址なども含め遺構の基盤にあたる土層(旧表土)と、覆土(埋積土)の両方の分析が行われることが理想的である。

文献

- 新井房夫(1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p. 1-79.
- 新井房夫(1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no. 157, p. 41-52.
- 荒牧重雄(1968) 浅間火山の地質. 地団研専報, no. 45, 65p.
- 町田 洋・新井房夫(1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫(2003) 新編火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.
- 坂口 一(1986) 榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p. 103-119.
- 早田 勉(1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p. 297-312.
- 早田 勉(1991) 浅間火山の生い立ち. 佐久考古通信, no. 53, p. 2-7.

- 早田 勉 (1995) テフラからさぐる浅間山の活動史. 御代田町誌自然編, p. 22-43.
- 早田 勉 (1996) 関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴－とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて－. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p. 256-267.
- 早田 勉 (1997) 竪穴住居跡および土坑の構築年代に関するテフラ検出分析. 栃木県教育委員会・小山市教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団編「寺野東遺跡Ⅵ」, p. 241-247.
- 早田 勉 (2004) 火山灰編年学からみた浅間火山の活動史－とくに平安時代の噴火について－かみつけの里博物館編「1108－浅間山噴火－中世への胎動」, p. 45-56.
- 友廣哲也 (1988) 古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」, p. 325-336.
- 若狭 徹 (1998) 群馬の弥生土器が終わるとき. かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く－古墳が成立する頃の土器の交流」, p. 41-43.

表1 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
SD5・Cトレンチ南壁	3	-	-	-	+	pm	淡褐, 白
	5	-	-	-	+	pm	淡褐, 白
	6	-	-	-	+	pm	淡褐, 白
	7	-	-	-	++	pm	淡褐, 白
	8	-	-	-	++	pm	淡褐>白
	9	-	-	-	++++	pm	淡褐
	10	-	-	-	+	pm	淡褐
	11	+	白	2.1	+	pm	白
	12	++	白	2.1	++	pm	白>灰白
	15	++	白	2.3	+++	pm	白>灰白
	17	++	白	2.1	+++	pm	白>灰白
	18	++	白		++	pm	白>灰白
	19	-	-		+++	pm	白>灰白
21	++	白	2.3	++	pm	白>灰白	
23	++	白	3.2	+++	pm	白>灰白	
SD5・Dトレンチ北壁	1	-	-	-	++++	pm	淡褐
SD-7	2	-	-	-	++	pm	白>灰白
	4	++	白		++	pm	白>灰白
	5	++	白	2.1	+++	pm	白>灰白
	6	-	-	-	+	pm	灰白
SI7 (SPB')	3	-	-	-	+	pm	灰白
	4	-	-	-	+	pm	灰白, 透明
	5	-	-	-	++	pm	灰白
	7	-	-	-	+	pm	灰白
SI10 (SPA・B 交点)	2	+++	白	2.1	++	pm	白
	4	-	-	-	+	pm	灰白
	5	-	-	-	+	pm	灰白

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない. 最大径の単位は, mm. bw: バブル型, pm: 軽石型.

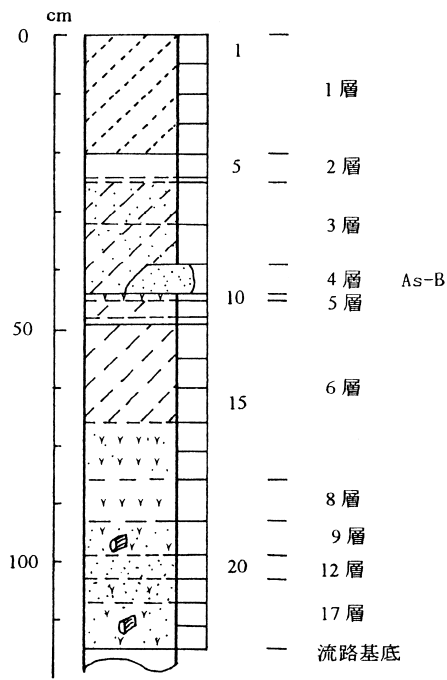


図1 SD5C トレンチ南壁の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号.

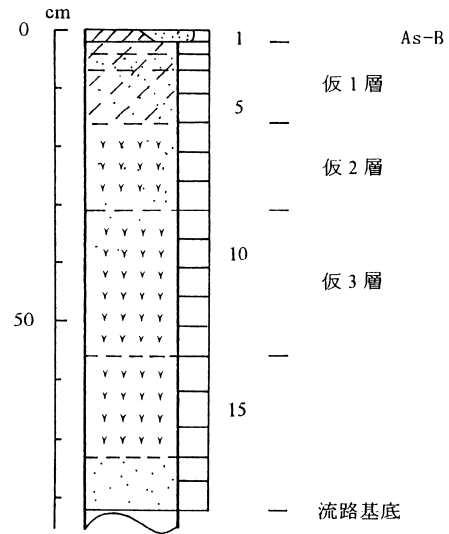


図2 SD5D トレンチ北壁の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号.

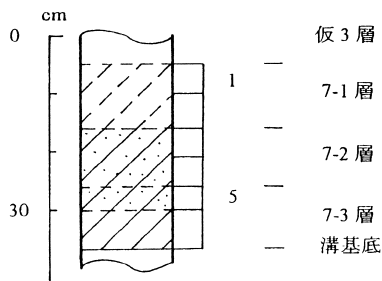


図3 SD7 覆土の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号.

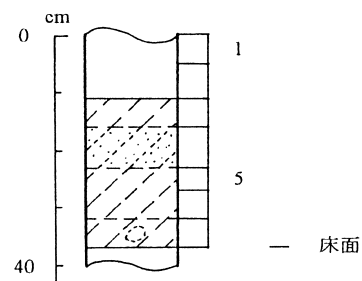


図4 SI7SPB'の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号.

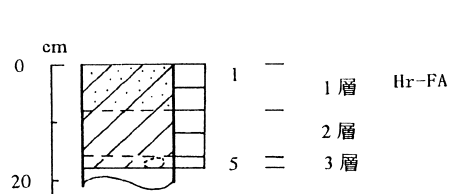
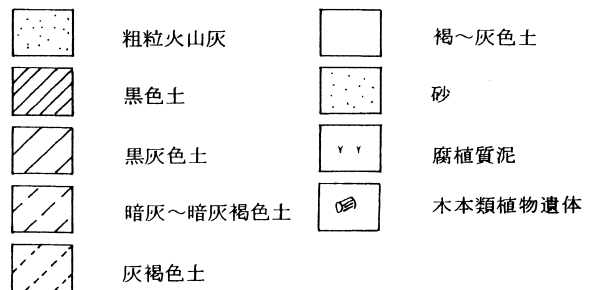


図5 SI10SPA-B 交点
数字はテフラ分析の試料番号.



Ⅱ. 栗島遺跡におけるプラント・オパール分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（ SiO_2 ）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である（杉山, 2000）。

2. 試料

試料は、SD5・C トレンチ南壁から採取された12点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

プラント・オパール分析は、ガラスビーズ法（藤原, 1976）を用いて、次の手順で行った。

- 〈1〉 試料を105℃ で24時間乾燥（絶乾）
- 〈2〉 試料約1 g に対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g 添加（電子分析天秤により0.1mg の精度で秤量）
- 〈3〉 電気炉灰化法（550℃ ・ 6時間）による脱有機物処理
- 〈4〉 超音波水中照射（300W ・ 42KHz ・ 10分間）による分散
- 〈5〉 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 〈6〉 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 〈7〉 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1 gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1 g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10-5g）をかけて、単位面積で層厚1 cmあたりの植物体生産量を算出した。イネの換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヒエ属（ヒエ）は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、タケ亜科（ネザサ節）は0.48である。

4. 分析結果

水田跡（稲作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

5. 考察

1) 水田跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1 gあたり5,000個

以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山，2000）。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

SD5・C トレンチ南壁では、1層（試料1）から17層（試料12）までの層準について分析を行った。その結果、17層上部（試料11）を除く各層準からイネが検出された。このうち、1層（試料1）～3層（試料4）では密度が5,300～10,100個/gと高い値であり、6層（試料6～8）でも3,000～4,500個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

As-B直下の5層（試料5）では、密度が2,300個/gと比較的低い値である。ただし、同層は直上を火山灰層で覆われていることから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

8層（試料9）、9層（試料10）、17層（試料12）では、密度が700～800個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

2) ムギ類について

1層（試料1）と3層（試料4）では、ムギ類（穎の表皮細胞）が検出された。密度は700個と低い値であるが、穎（粃殻）は栽培地に残されることがまれであることから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって、これらの層準の時期に調査地点周辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

3) 堆積環境の推定

ヨシ属は湿地的なところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。イネ以外の分類群では、全体的にタケ亜科が多く検出され、部分的にススキ属型も比較的多く検出された。また、ヨシ属もほとんどの試料から検出された。おもな分類群の推定生産量によると、全体的におおむねタケ亜科が優勢であり、部分的にヨシ属やススキ属型も多くなっている。

以上のことから、自然流路（SD5）の埋土の堆積当時は、おおむねヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、その周囲にはタケ亜科（ネザサ節など）を主としてススキ属なども生育する日当たりの良い比較的乾燥した草原的なところが分布していたと推定される。

6. まとめ

プラント・オパール分析の結果、自然流路（SD5）を埋めた堆積物のうち、1層から3層までの各層ではイネが多量に、浅間Bテフラ（As-B, 1108年）より下位の5層と6層でもイネが比較的多量に検出され、それぞれ稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、埋土底部の17層などでもイネが少量検出され、周辺で稲作が行われていた可能性が認められた。さらに、1層と3層ではムギ類が栽培されていた可能性も認められた。

自然流路（SD5）の埋土の堆積当時は、おおむねヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、

その周囲にはタケ亜科（ネザサ節など）を主としてススキ属なども生育する日当たりの良い比較的乾燥した草原的なところが分布していたと推定される。

文献

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）. 考古学と植物学. 同成社, p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－. 考古学と自然科学, 17, p.73-85.

表1 茨城県栗島遺跡におけるプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個/g）		SD5・Cトレンチ南壁												
分類群	学名	1	2	3	4	4'	5	6	7	8	9	10	11	12
イネ	<i>Oryza sativa</i>	101	93	70	44	53	23	45	30	30	8	8		7
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	7	14	7	15	23	38	23	8	7	15	15	15	
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	65	21	35	44	23	30	30	23	82	83	30	52	30
タケ亜科	Bambusoideae	316	165	120	220	60	68	196	195	262	287	279	172	418
ムギ類(穎の表皮細胞)	<i>Hordeum-Triticum</i>	7			7									

推定生産量（単位：kg/m ² ・cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出														
分類群	学名	1	2	3	4	4'	5	6	7	8	9	10	11	12
イネ	<i>Oryza sativa</i>	2.96	2.74	2.07	1.29	1.55	0.66	1.33	0.88	0.88	0.22	0.22		0.22
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.45	0.90	0.44	0.92	1.42	2.37	1.42	0.47	0.47	0.95	0.95	0.95	
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.80	0.27	0.44	0.54	0.28	0.37	0.37	0.28	1.02	1.03	0.37	0.65	0.37
タケ亜科	Bambusoideae	1.52	0.79	0.57	1.05	0.29	0.32	0.94	0.94	1.26	1.38	1.34	0.83	2.01

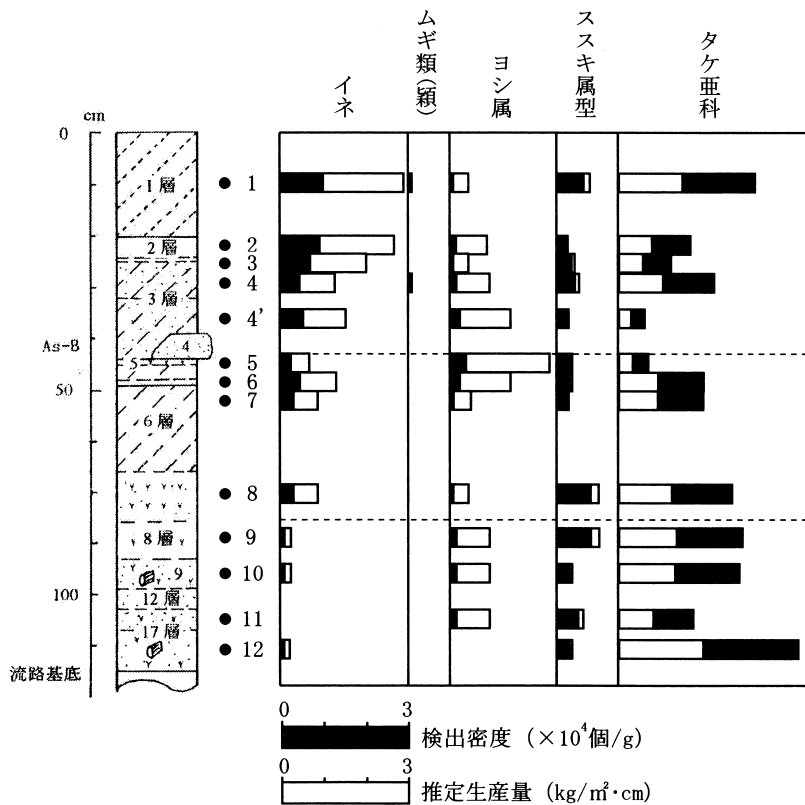
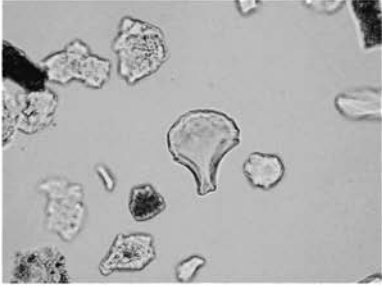
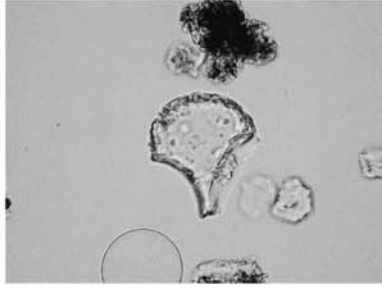


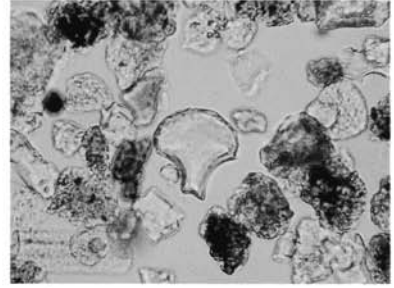
図1 栗島遺跡, SD5・Cトレンチ南壁におけるプラント・オパール分析結果



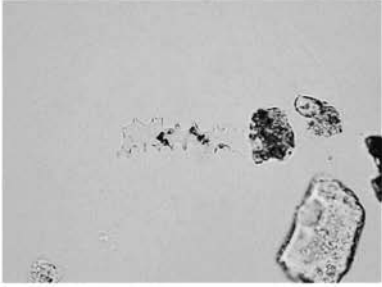
イネ
SD5・Cトレンチ南壁 1



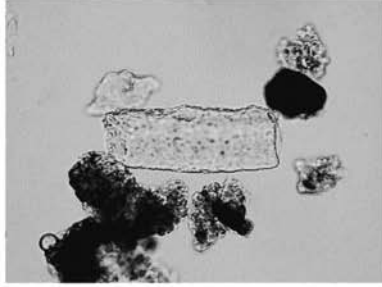
イネ
SD5・Cトレンチ南壁 3



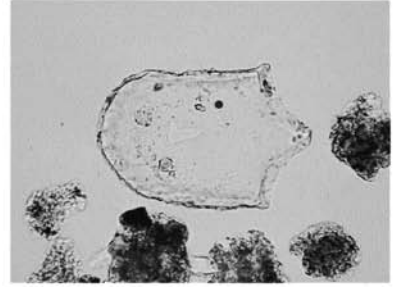
イネ
SD5・Cトレンチ南壁 12



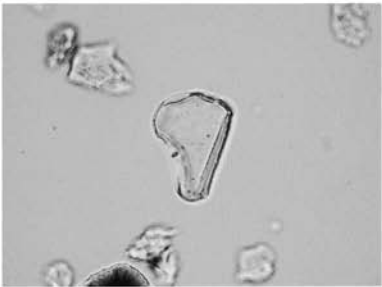
ムギ類(穎の表皮細胞)
SD5・Cトレンチ南壁 4



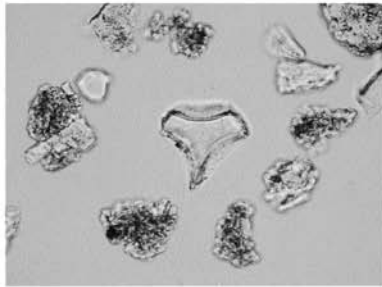
キビ族型
SD5・Cトレンチ南壁 4



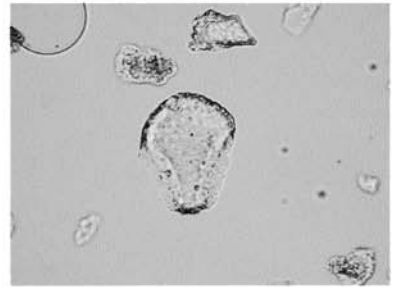
ヨシ属
SD5・Cトレンチ南壁 4'



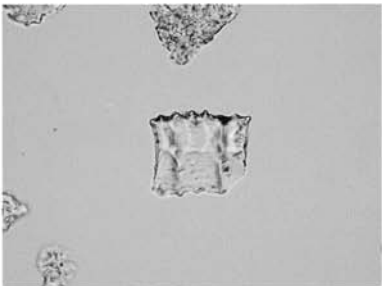
ススキ属型
SD5・Cトレンチ南壁 9



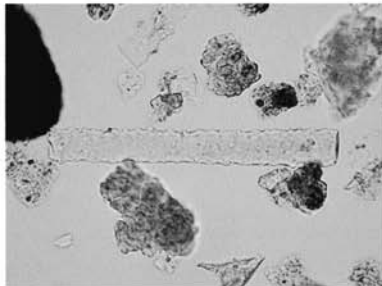
シバ属
SD5・Cトレンチ南壁 2



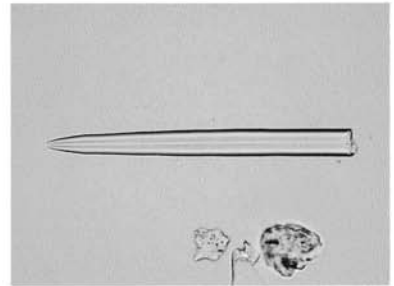
メダケ節型
SD5・Cトレンチ南壁 10



ネザサ節型
SD5・Cトレンチ南壁 5



棒状珪酸体
SD5・Cトレンチ南壁 7



海綿骨針
SD5・Cトレンチ南壁 1

植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真

50 μm

写 真 图 版



第 1 号流路跡出土木製品



第 1 号流路跡遺物出土状況（豎杆）



第 1 号流路跡遺物出土状況（第 1 号木簡）



第 1 号流路跡遺物出土状況（鉞）



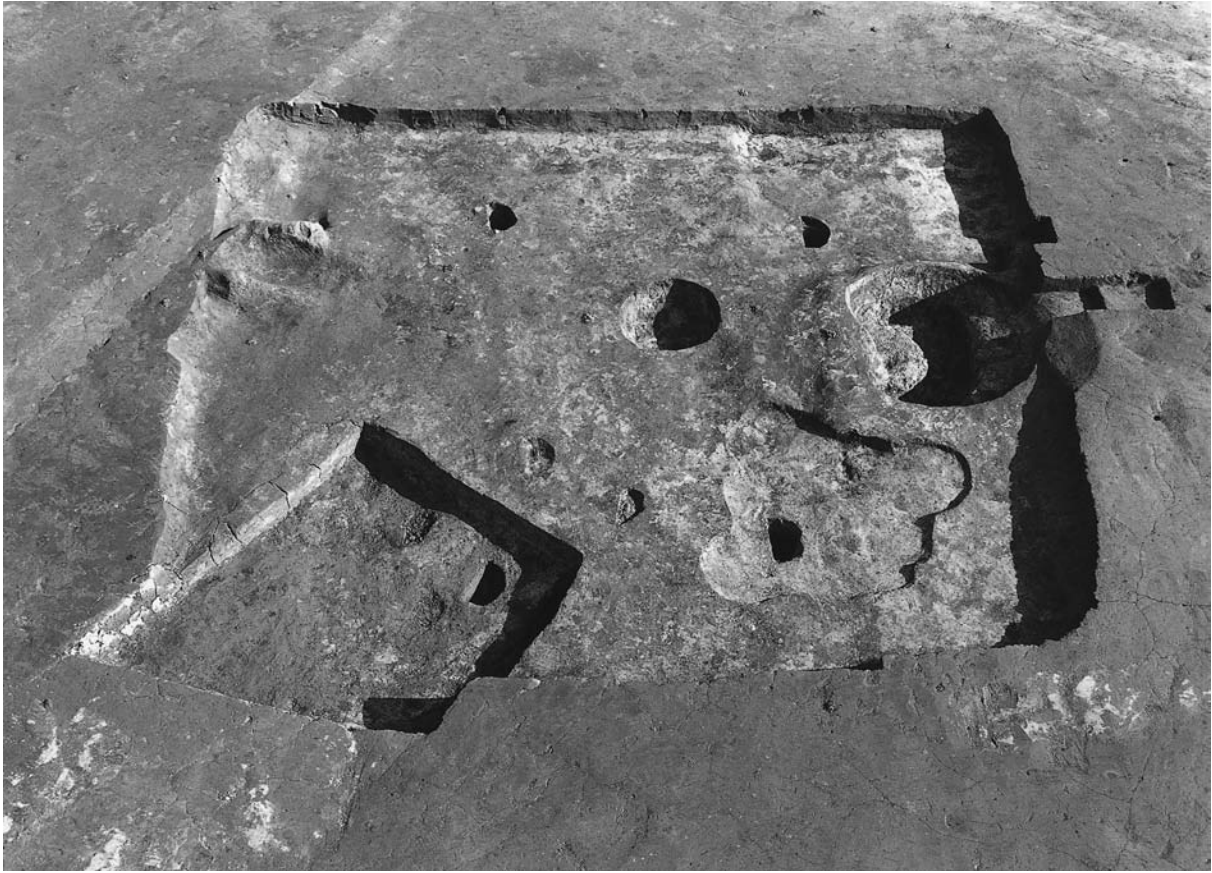
第 1 号流路跡遺物出土状況（豎杵状木製品）



栗島遺跡全景（北から）



栗島遺跡南部全景（北西から）



第 3 号住居跡完掘狀況



第 3 号住居跡遺物出土狀況



第 3 号住居跡竈遺物出土狀況



第 3 号住居跡 P 1 土層断面



第 3 号住居跡 P 2 土層断面



第 5 号住居跡完掘狀況



第 5 号住居跡遺物出土狀況



第 8 号住居跡完掘狀況



第 9 号住居跡完掘狀況



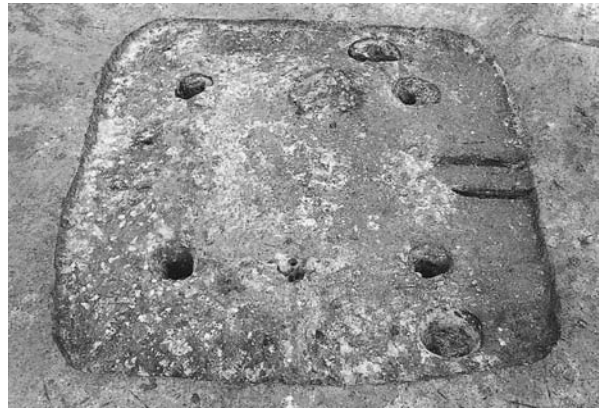
第 12 号住居跡竈遺物出土狀況



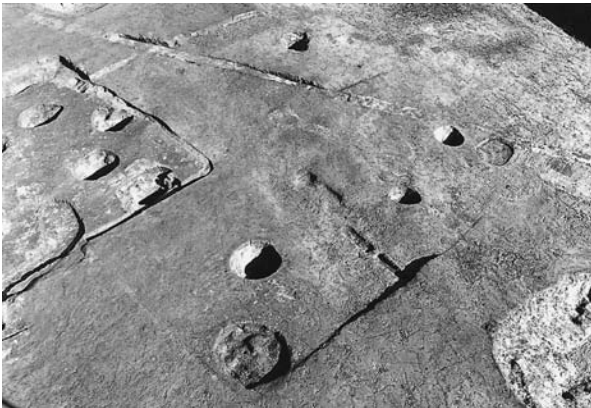
第 6 号住居跡完掘狀況



第 6 号住居跡貯蔵穴遺物出土狀況



第 2 号住居跡完掘狀況



第 4 号住居跡完掘狀況



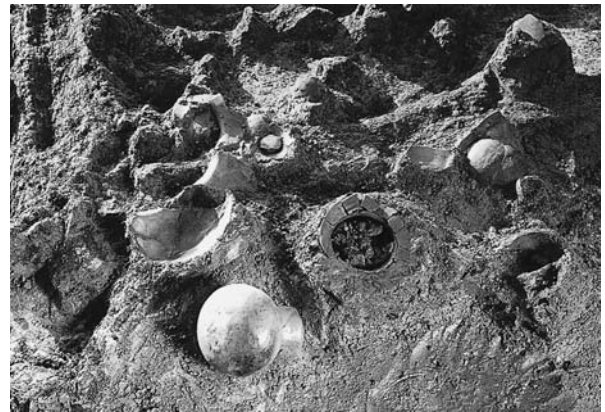
第 4 号住居跡 P 3 完掘狀況



第 7 号住居跡完掘狀況



第 7 号住居跡遺物出土狀況



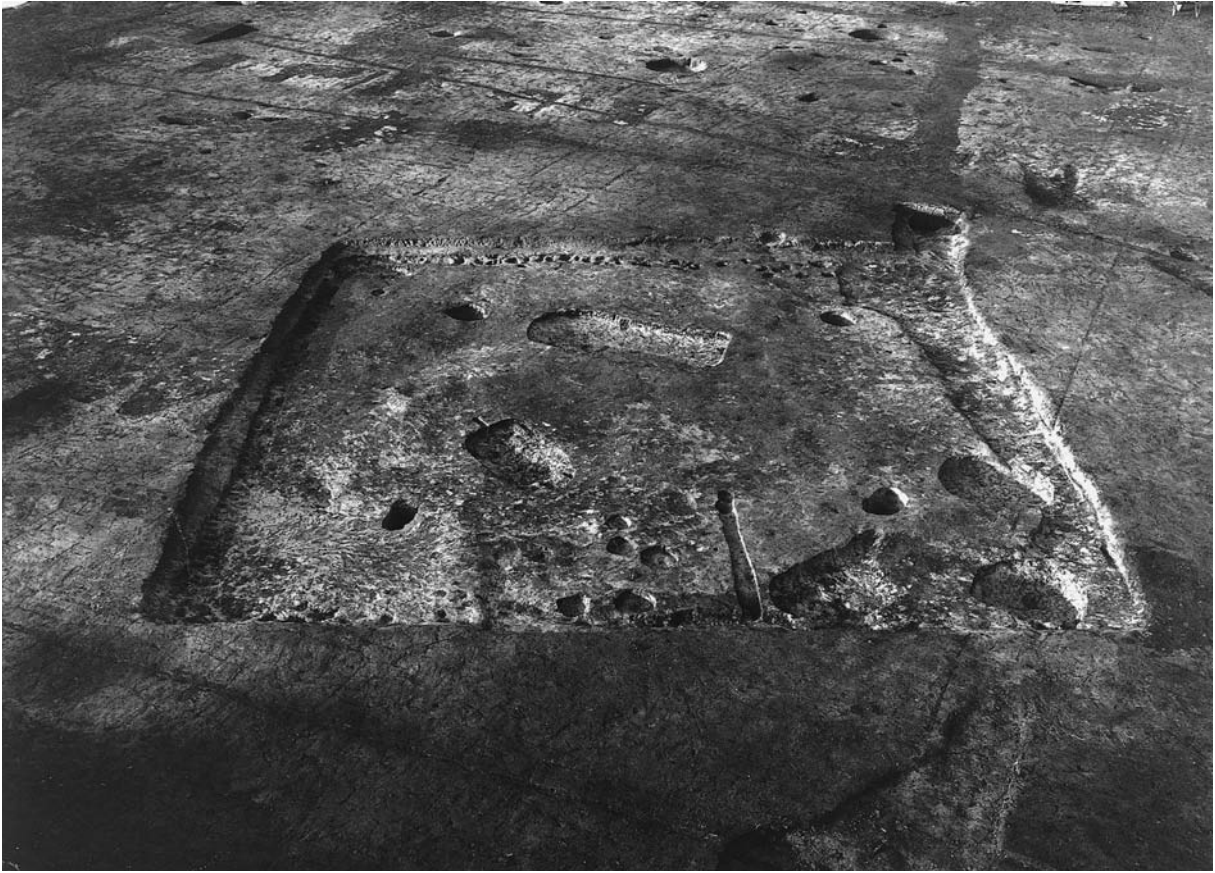
第 7 号住居跡遺物出土狀況



第 7 号住居跡 P 1 土層断面



第 7 号住居跡 P 3 土層断面



第10号住居跡完掘状況



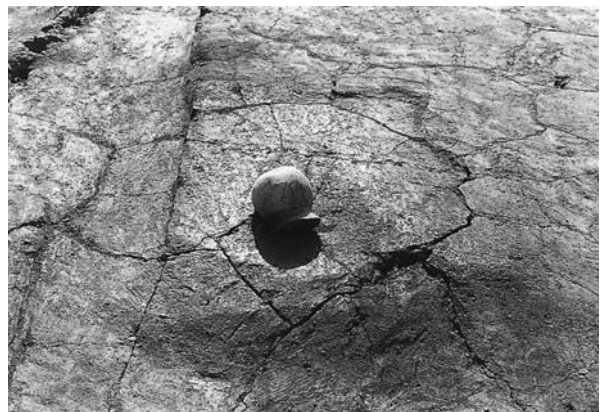
第11号住居跡完掘状況



第13号住居跡遺物出土状況



第19号住居跡遺物出土状況



第17号住居跡遺物出土状況



第20号住居跡完掘状況



第20号住居跡遺物出土状況



第19号住居跡完掘状況



第22号住居跡完掘状況



第25号住居跡完掘状況



第27号住居跡完掘状況



第23号住居跡完掘状況



第23号住居跡遺物出土状況



第25号住居跡遺物出土状況



第29号住居跡完掘状況



第1号流路跡遺物出土状況（大足）



第1号流路跡遺物出土状況（籠）



第1号流路跡遺物出土状況（大足）



第1号流路跡遺物出土状況（甑）



第1号流路跡遺物出土状況



第 1 号流路跡遺物出土狀況 (大足)



第 1 号流路跡遺物出土狀況 (曲物)



第 1 号流路跡遺物出土狀況 (第 2 号木簡)



第 1 号流路跡遺物出土狀況



第 1 号流路跡遺物出土狀況



第1号流路跡遺物出土狀況（豎杵）



第1号流路跡遺物出土狀況（鍬）



第1号流路跡遺物出土狀況



第1号流路跡遺物出土狀況



第1号流路跡遺物出土狀況（甑）



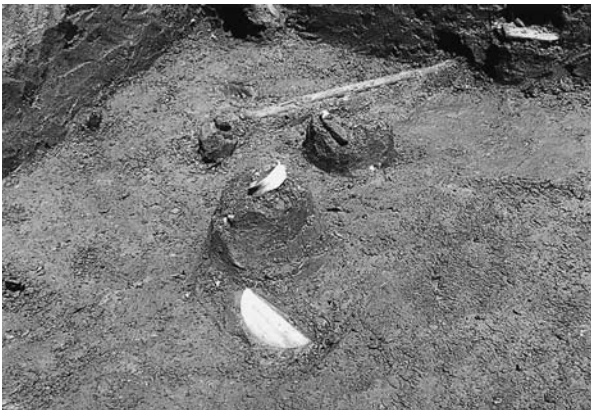
第 1 号流路跡遺物出土狀況



第 1 号流路跡遺物出土狀況



第 1 号流路跡遺物出土狀況



第 1 号流路跡遺物出土狀況



第 1 号流路跡遺物出土狀況



第 1 号流路跡遺物出土狀況（彫刻入板材）



第 1 号流路跡遺物出土狀況（大足）



第 1 号流路跡遺物出土狀況



第 1 号流路跡遺物出土狀況



第 1 号流路跡遺物出土狀況



第 1 号流路跡遺物出土狀況



第 1 号流路跡遺物出土狀況



第 1 号流路跡遺物出土狀況



第 1 号流路跡遺物出土狀況



第 1 号流路跡遺物出土狀況 (曲物)



第 1 号流路跡遺物出土狀況



第 1 号流路跡遺物出土狀況



第 1 号流路跡遺物出土狀況



第 1 号流路跡遺物出土狀況



第 1 号流路跡遺物出土狀況



第 1 号流路跡遺物出土状況 (墨書土器「意生坊長」)



第 1 号流路跡遺物出土状況



第 1 号流路跡遺物出土状況



第 1 号流路跡遺物出土状況



第 1 号流路跡遺物出土状況



第1号水場遺構（北から）



第1号水場遺構（東から）



第1号水場遺構（南西から）



第1号水場遺構（西から）



第1号曲物理設遺構



第141号土坑遺物出土狀況



第108号土坑遺物出土狀況



第1号杭列出土狀況



第1号杭列出土狀況



第 1 号溝跡完掘狀況



第 1 号溝跡遺物出土狀況



第 1 号溝跡遺物出土狀況



第 2 号溝跡遺物出土狀況



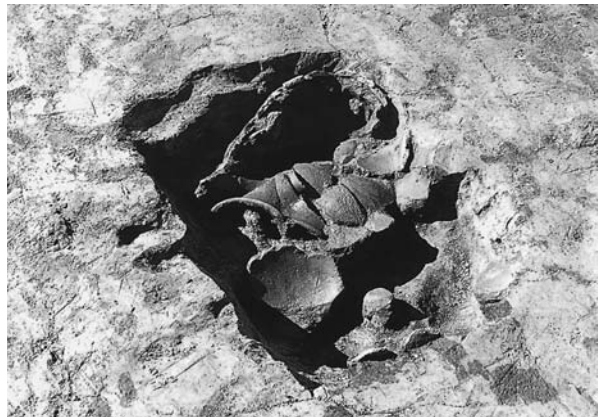
第55号土坑遺物出土狀況



第57号土坑遺物出土狀況



第78号土坑遺物出土狀況



第99号土坑遺物出土狀況



第5・6号住居跡，第50号土坑出土遺物













第 1・11・13号溝跡, 第 2 号流路跡・墨書土器

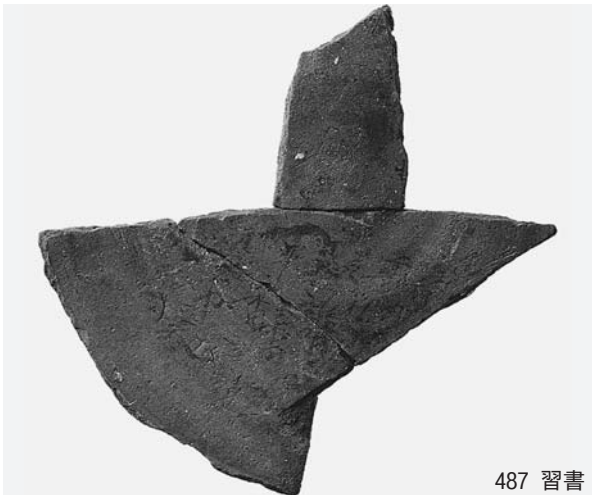




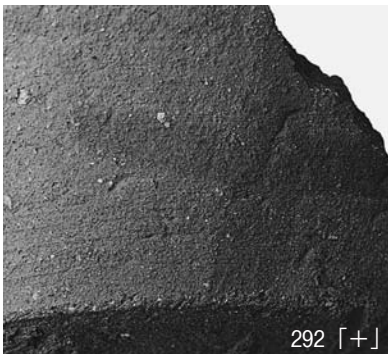
第1号流路跡出土遺物



468 「意生坊長」



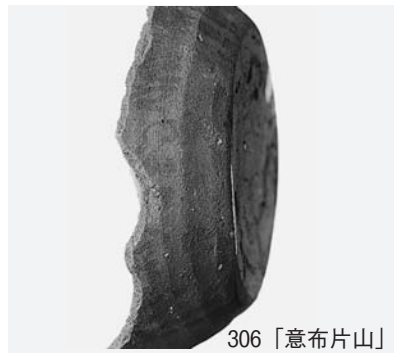
487 習書



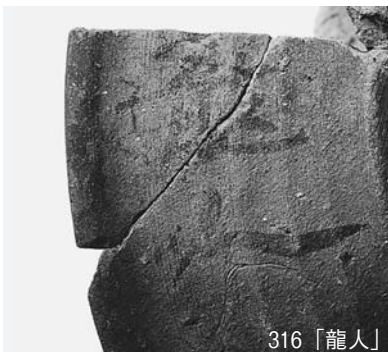
292 「+」



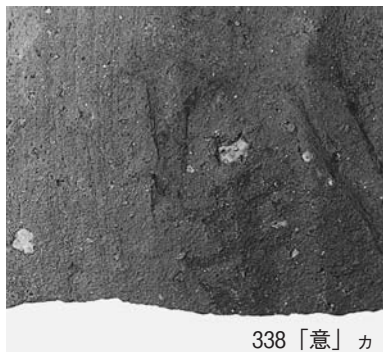
299 「+」



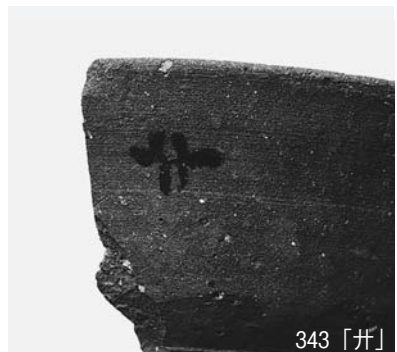
306 「意布片山」



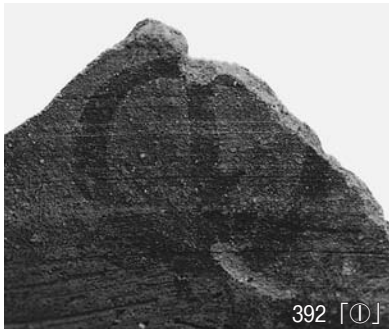
316 「龍人」



338 「意」カ



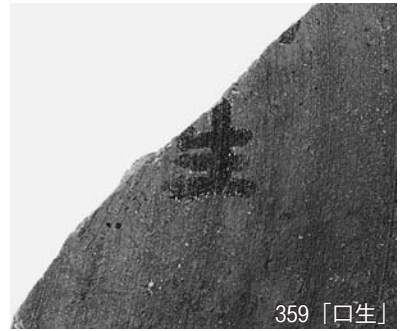
343 「开」



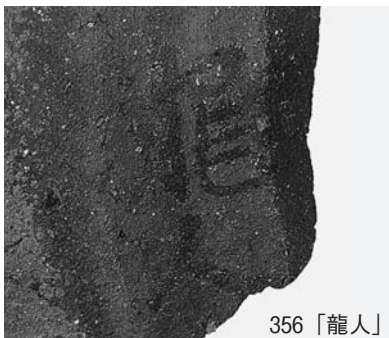
392 「人」



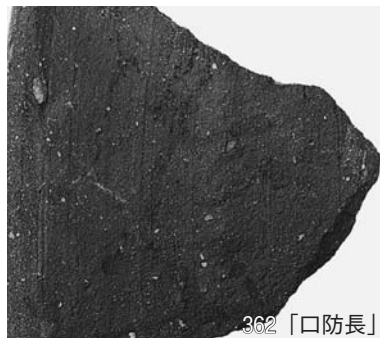
365 「人」



359 「生」



356 「龍人」



362 「長口」



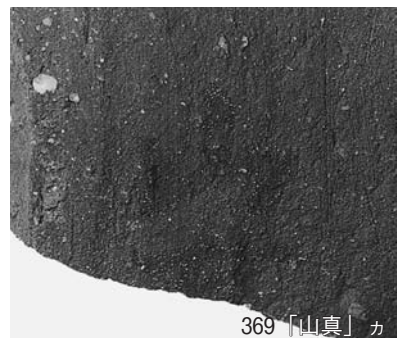
372 「十萬」



367 「意」カ



371 「意」カ



369 「山真」カ



363 「十」



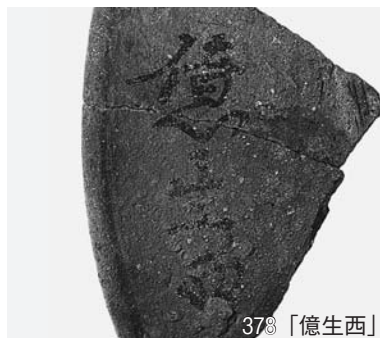
373 「十」



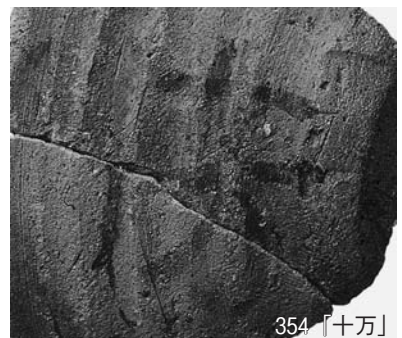
374 「口口」



377 「十意」

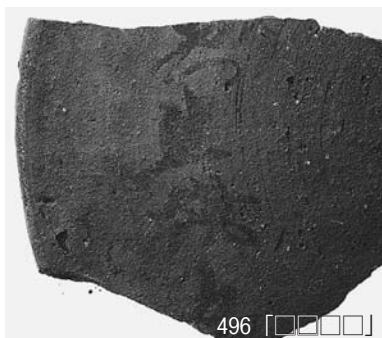
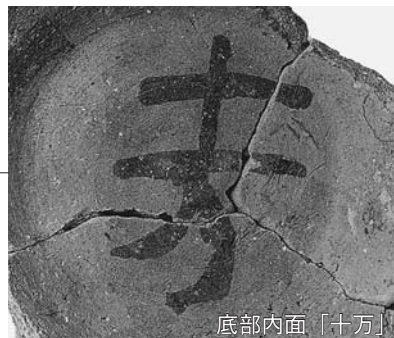
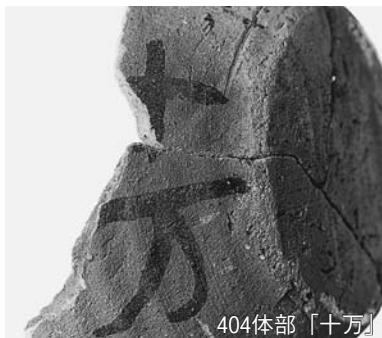
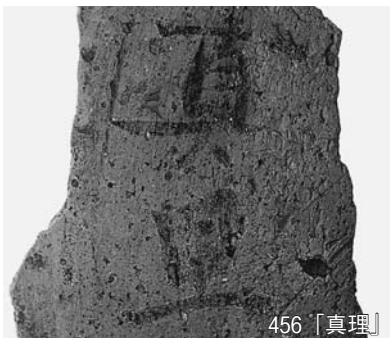
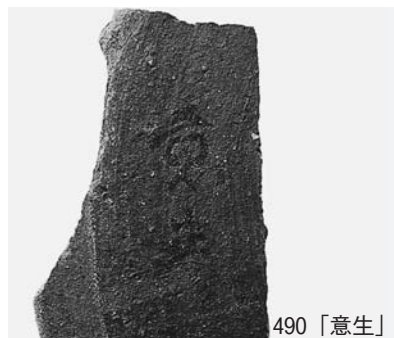
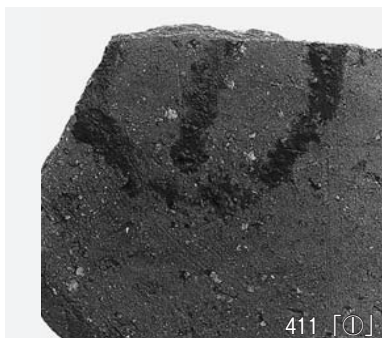
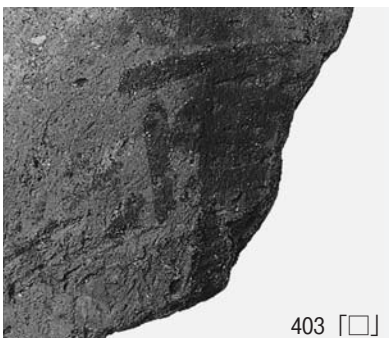
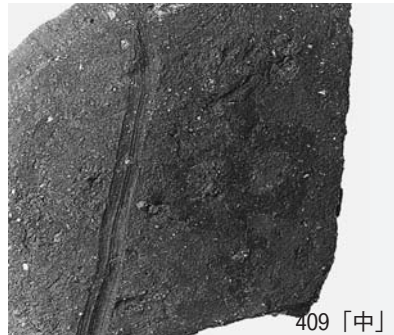
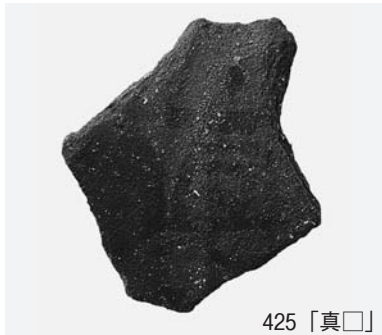
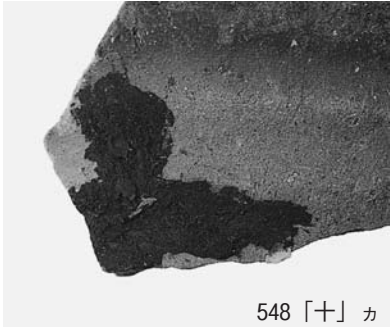


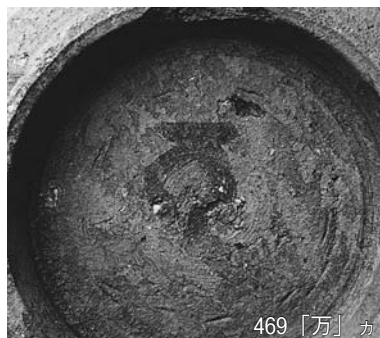
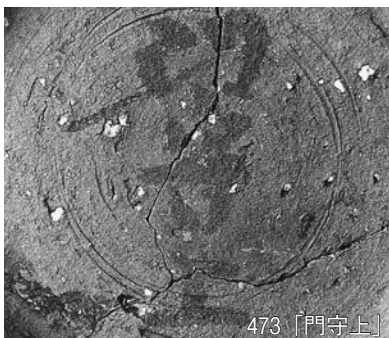
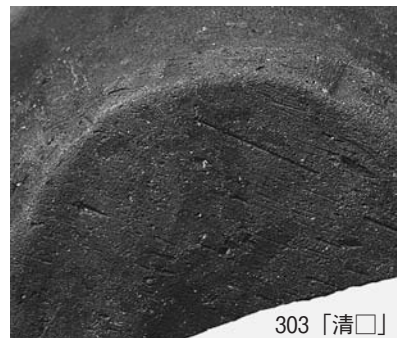
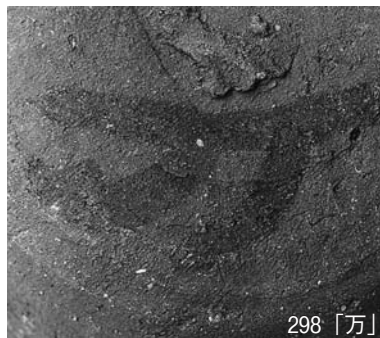
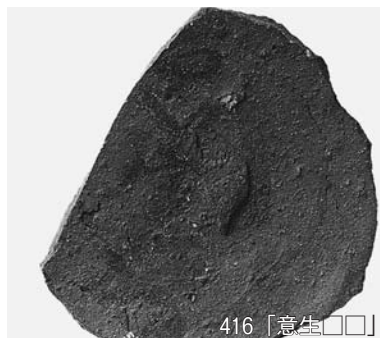
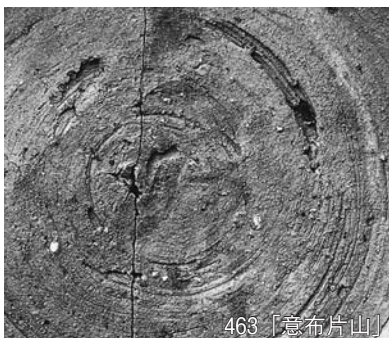
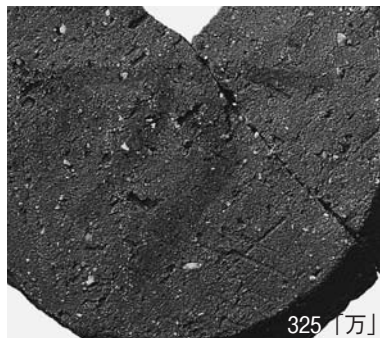
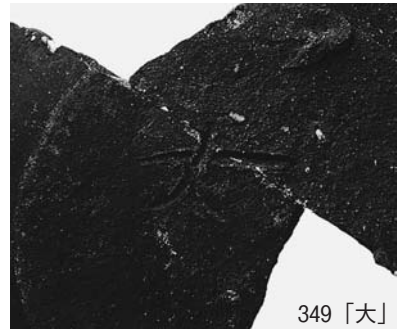
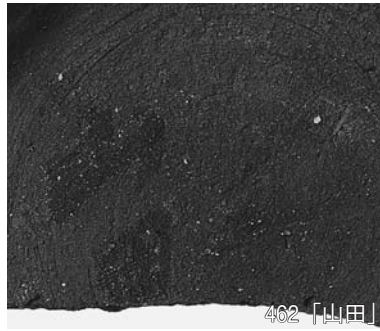
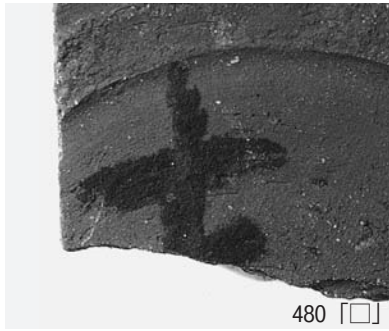
378 「億生西」



354 「十萬」

第1号流路跡，墨書土器





第1号流路跡出土遺物，墨書土器・ヘラ書き





SI6-68



SK83-188



SK83-185



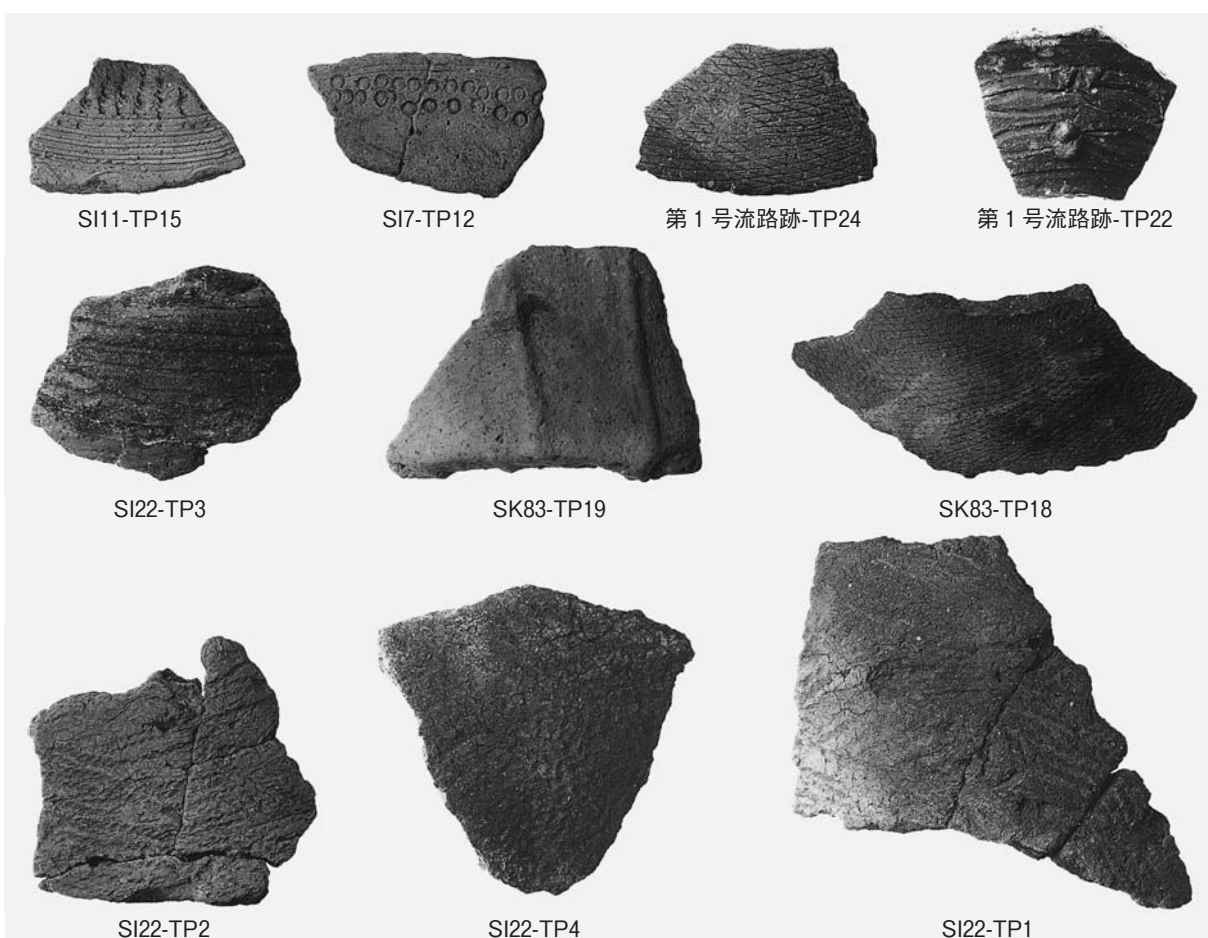
第1号流路跡-531



第1号流路跡-TP27



第1号流路跡-TP28



SI11-TP15

SI7-TP12

第1号流路跡-TP24

第1号流路跡-TP22

SI22-TP3

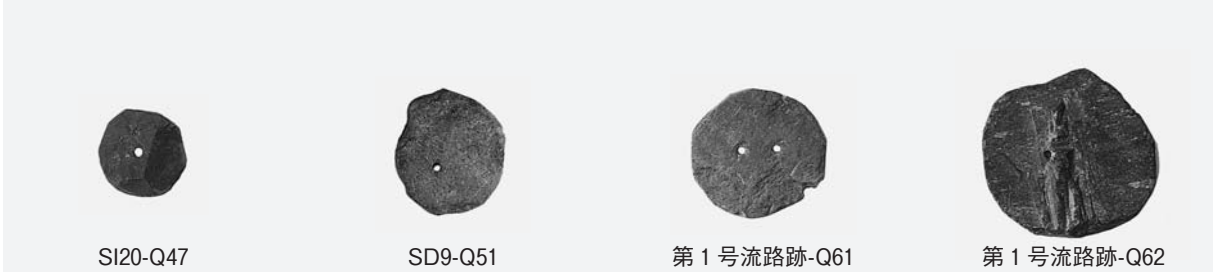
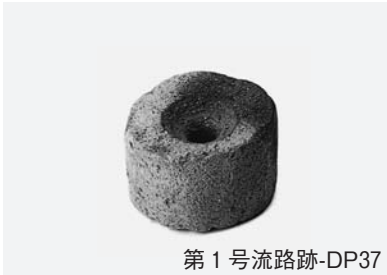
SK83-TP19

SK83-TP18

SI22-TP2

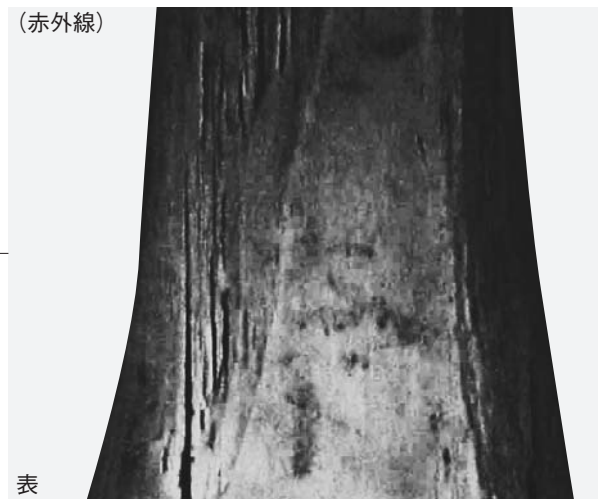
SI22-TP4

SI22-TP1





第1号流路跡出土遺物，赤外線写真



第1号流路跡出土遺物，赤外線写真



第1号流路跡出土遺物



大足集合



W49



W50



W51



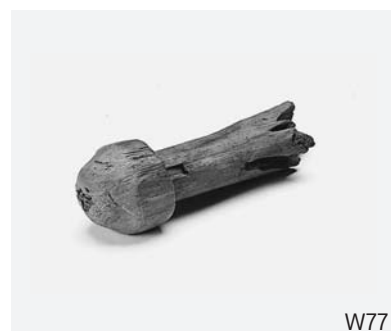
W52

第1号流路跡出土遺物



第1号流路跡出土遺物





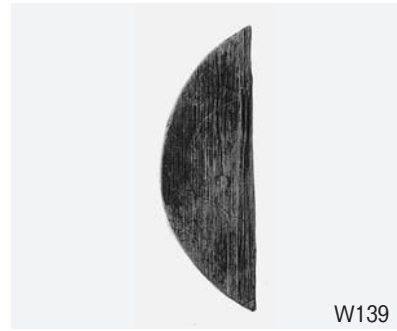
第 1 号流路跡出土遺物



W131



W133



W139



W140



W109



W108



W101



W107



W102



W212



W217



SD4-W27



W100



W99



W98

第4号溝跡, 第1号流路跡出土遺物



第 1 号流路跡出土遺物





第 1 号流路跡出土遺物



第 1 号水場遺構-W346



第 1 号水場遺構出土遺物



第 1 号流路跡-W336



第 1 号流路跡-W339



第 1 号水場遺構-W348



第 1 号水場遺構-W347



第 1 号水場遺構-W345



第 1 号水場遺構-W349

第 1 号流路跡, 第 1 号水場遺構出土遺物



茨城県教育財団文化財調査報告第268集

栗島遺跡

一般国道50号下館バイパス改築事業地内
埋蔵文化財調査報告書

平成19(2007)年3月19日 印刷

平成19(2007)年3月23日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 株式会社 イセブ
〒305-0005 茨城県つくば市天久保2丁目11-20
TEL 029-851-2515